伽藍の魔術師

番場蛮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伽藍の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ２１８４Ｕ

【作者名】
番場蛮

【あらすじ】
剣と魔法に支配される異世界。人外が跋扈し、人が魔術という超常の力を振う世界で、アトラス帝国の公爵家の少女、ユーリアに迫る刺客の魔の手。四面楚歌の絶体絶命の状況で、ユーリアに手を差し伸べる一人の男。名をオキツグ・クシナ。彼こそ、異世界に飛ばされた元日本人にして、《氷王》の異名をとる超戦士だった。

途中から読んでもお楽しみ頂けると思います。

第1話　明晰夢

「オキツグ！」
名前を呼ばれた気がした。
「・・・来たか」
瞑目していた青年、オキツグは坐していた廃墟の屋上の貯水タンクの上にすくりと立つ。
地上五階の屋上、それなりに高く遠くまで見渡せるその場所から見える光景は廃墟一色だった。生活の後が無残にかき回された残骸の集合。それは天災か、人災か、果たして別のものか。しかしいずれにしても既に死んだ街の姿だった。
「予定通り数は二体、番いか」
視線の先、五百メートル程離れた場所にそれらはいた。

ギイイイイイイイイイイイイイイイイッ

まるで金属が拉げる様な音で咆哮し向かってくるそれは断じて人にあらず。そう、それは・・・・
「龍・・・か・・・」
龍、ドラゴンだった。全長三十メートル超の鱗の化物。それが二頭合わせてこちらに向かってくる。離れていてもよく分かる。まるで小山の様な太い胴体に手足を持った、鉄錆色の鱗の光を反射する茶色い影。その長い首の先には強靭な顎に支えられた牙、そして何よりその眼、もし心臓が弱い者が睨まれたらそのまま天に召されてしまいそうなほどの強烈な圧力を発する獣の眼が。
「あと二十秒で予定地点への誘導が完了する」
先程の声、リュロンと言う女はオキツグの同僚、相棒の様なものだ。艶やかではあるものの硬質さと傲然さを併せ持ち、それでいて全てを拒絶する様な声、それが耳にかけられた通信機のイヤーパッ

ドから漏れ聞こえた。
遠くの廃墟の森、龍共が奔る先に小さな影を発見する。巨体に眼を取られて目立たなかったが、それは確かに人だった。オキツグが眼を凝らして見ると、その人物は肩に大剣を担ぎながら時折龍が繰り出すついばむ様な牙の攻撃をいなしながらやってくる。そう、龍はその人間を餌とみなし捕食するべく襲いかかろうとしているのだ。
（まあ、百年かかっても追いつけないだろうな）
龍が遅い訳ではない。むしろ速い。その強靭な四肢が地を蹴り織りなす速度は軽く時速百キロを超えるだろう。もし仮にあそこにいるのがオキツグだったら即座に追いつかれていただろう。その自信がオキツグにはあった。
それが生体強化に専念した魔導剣士、前衛系の剣導士の力だ。
「どうでもいいことか」
「さっさと攻撃準備を始めろ。何をぼさぼさしている」
再び声、どうやら今の呟きが聞こえていたらしい。耳朶を打つその声に促される様に左手を腰に回すと硬質な手ごたえ、鞘に納められた剣だ。
オキツグは右手で柄を握ると勢いで抜き放つ。
それは刀だった。反りのない直刀。透き通るような銀の刃、切先の大丸造りの刃は刀身に至るまで綺麗に直刃を見せいる。陽光に照らされながらも光を吸い込む様な銀の刃に透明感はなく、まるで妖刀の様な不気味な存在感を主張する。
柄には本来まかれる筈だったであろう絹糸の姿はなく、代わりに黒く染め上げられた革が巻かれ、芸術品然としたその刀に急に実用性という現実が揺り起こされた様だった。そして
「イグニッション」
その呟きと共に光が灯ったのは刀の鍔の部分。しかし、そこには鍔が存在しなかった。まるで桜の花びらの様に流麗な起伏を描く十五センチ程の黒金の機関部があり、その中心に埋め込まれた蒼色の核石から光が漏れる様に刀全体に伝播する。

龍はすぐそこにまで迫っていた。
給水塔から飛び降りる。そのままそれが鎮座していたビルの高さから落下することを意味していたが焦りはない。地上五階程の高さだったが対して音も立てずに着地すると刀を振りかぶる。
「《氷閻刀・剣山》」
その声と共に一際機関部の蒼い核石の光が強くなったような気がした。そして周囲の気温が急激に下がり始め、オキツグの前方に幾つもの氷柱の槍を形成し始める。
氷凍系術式、絶対零度の魔法剣。オキツグの切り札であり、全てだった。
眼をつぶり、耳を澄ませば機関部から涼やかな駆動音が聞こえてくる。この音が好きだった。
「目標地点到着」
女の声は無線からだけでなく真横から聞こえた。既に龍は氷柱のすぐ先に迫っている。
「《氷閻刀・波濤》」
電磁制御、フレミング左手の法則を利用して氷柱はかき消える様に龍に放たれた。その全ては超高速が発生する空気摩擦により蒸発したが、その急激な状態変化と高温が水蒸気爆発を引き起こす。

ゴオオオオオオオオオンッ

総計数十トンに及ぶであろう龍の巨体が爆発に巻き込まれて進行方向とは逆に吹き飛ばされる。廃墟もそれに巻き込まれて辺り一帯がさら地になった。
「おおおおおおおおおおおおっ」
女が雄叫びを上げて手に持った大剣を振りかぶり跳躍する。起き上がろうとしていた一体の龍の首を綺麗に一太刀で落とす。

ギイイイイイイイイイィ

伴侶を殺された怒りの様な鳴き声を上げる龍。
「何言ってやがる」
自然にオキツグは言葉を紡いでいた。
「お前らだって人間の縄張りで好き勝手やってんじゃないか」
辺りの瓦礫と廃墟はまだそれほど歳月を感じさせない。これらの破壊が龍によって行われた事を現していた。
完全に体勢を立て直した龍が息を大きく吸い込み始める。腹腔が膨らむと共に喉元から洩れる劫火の光。
「任せる。どうにかしろ」
そう言ってオキツグの後ろに隠れるリュロン。
「簡単に言ってくれる」

ゴバッ

そんな何かを吐き出す様な音と共に龍の口元から二人に迫るのは巨大な火球。即座に精神を集中させ、刀を振りあげる。切先で布でも引っ掛けていたかのように唐突に氷の壁がそびえ立った。そして迫る火球が衝突する。派手な音をたてながらも氷の壁は龍の攻撃を防ぎきった。

ギッ

何かが途切れる音。見ると既にリュロンが龍に迫り、その首目がけて剣を埋めているところだった。
「ふむ、古代種には程遠かったが良き戦いだった」
首を失った巨体が倒れ伏す音をバックにその内一体の首、恐らくそれだけでも百キロは超えているであろう肉塊を片腕で容易く担ぐと戻ってくるリュロン。
「・・・それ、どうすんの？」

「知らんのか？龍の脳は塩に漬けこむといい保存食になる。西方の国々では有名な料理の一つだ」

何となく気味の悪い光景を思い浮かべて気持ちが悪くなるオキツグ。

（ま、いいか）

龍の頭を手に入れて上機嫌なリュロンは放っておこう。災害指定を受けた龍を二体も葬ったのだ。手に入る賞金も相当なものになるだろう。

酷く血臭が漂う中、それでも空は青く、人の営みがあった頃と変わらず辺りを照らす。

「ま、いいさ」

そう、気分がよかったのだ。

第2話　捨て犬

ピピピピピピッ

部屋に電子音が鳴り響く。

「う・・・・・ん」

部屋の主は布団にくるまれながら僅かに呻き声を上げると耳を塞ぐように頭ごと布団を被りなおす。

「・・・・・夢？」

しかし、それもやがて耐えきれなくなり手を枕元に鎮座する目覚まし時計に向ける。

二度、三度、手は空をきり、四度目でその登頂部を捉える。

寝なおそうか？確かに魅力的な選択肢だ。しかし、再び布団にくるまろうにも既に眼は冴えてしまっている。

「おき・・・・るか」

よたよたしながらベッドから降り立ち寝ぼけ眼で周囲を眺める。

カーテンの隙間からは燦然と輝く太陽の光が入り、蒸すようなその暑さは、既に晩夏であるにもかからわず、未だ秋と呼べる季節に至るには遠いことを示していた。

「・・・・・・」

部屋にかけられた姿見に自分が映る。

覇気のない少年だった。名を櫛名意次。長身痩躯だが猫背のためそれをあまり感じさせない。寝起きであることを差し引いても気力の欠片も窺えないその眼はよく周りから死んだ魚の様な眼だ言われる。変わっている事と言えば櫛名という名字くらい。

現在時間を確認しようとして、目覚まし時計が鳴っていることに気がついた。時刻を確認すると既に八時を大きく回っている。どうあがいても一時限目には間に合わない時間だ。

スヌーズ機能の脆弱さを恨みつつ、ベッドから立ち上がる。

二階の自室から降りてくると、リビングには誰もいなかった。

父は仕事、母は習い事、兄と妹は学校で現在この家には自分一人。
「相変わらず規則正しく優秀だねぇ。我が家族は・・・・・」
あるいはその言葉は、その輪から外れた自分を卑下しているのかもしれない。しかし、その事についてあまりよく考えずに、冷蔵庫から食材を取り出し朝食の用意を始める。お湯を沸かし、インスタントの味噌汁を準備する。母が今朝作ったらしき汁物は既にもうなかった。
「いただきます」
誰に言うともなく呟き、食卓になる。出来合の佃煮と一緒に御飯を頬張る。
手じかにあったテレビのリモコンを手に取ると電源を入れる。一から十二まで一通りチェックするが、あまり興味を引かなかったため再びテレビの電源をオフにする。
静寂に満ちた室内を見渡す。リビングは自分の目の前にある、たたみ一畳分程も大きさを持つガラス製のテーブルを中心に展開している。座っているソファもかなりの上物で、部屋の隅には大型液晶テレビが鎮座している。今自分がいる空間にしても、小さな家なら一軒が立ってしまうほどスペースがある。
恵まれているのだろう。経済的には。そんな感想を何の感慨も抱かずに持っていた。
「・・・・・・ごちそうさま」
食事を終える。台所で食器を水につけると自室に戻り学校に行く支度を始める。
夏休み中であり学校はないが今日は残念ながら登校日だ。
そこで自分がもう既に出鼻をくじかれていることを思い出した。
極限まで低下しようとするやる気をどうにか維持し、気を取り直して教材を学校指定の鞄に詰めていく。
ついさっきまでビニールを被っていたのりがきいた半袖のワイシャツを身にまとう。新品の感触にやや気分を良くするが、胸元に入った校章が目にはい入り、微妙な気分になる。

顔を洗い、歯を磨き、髪を整えると、玄関に鍵をかけて外に出た。
「あっつ」
うだるような暑さと共に空は気持ちが良いほど晴天だった。
意次が通う学校は私立照葉学園の中等部。三年生だった。都内の西部に位置する私立中学で、中等部の外に高等部を持ち、高等部からは、特別進学科、普通科、体育科の三つに分かれている。いくつかの室内競技において優秀な成績を示す運動部を持つ平凡そのものの学校。校内に文科系クラブのために設けられた専用展示施設やコンサートホールが存在するが、学校側はそれに関する建造、及び維持を施設費に含めていない。これは主に学園出身者の篤志によるものとされている。また地理的には駅に近いこともあって、人気も高い。
しかし、そう言った点を含めても普通の域を出ない中堅校。中高一貫、と言っても受験においては第一志望の滑り止めに使われる程度で、第一志望にするのはスポーツ進学者くらいなものだろう。意次自身もその例にもれない。
そう、ただ単に自宅から近いのだ。徒歩二分、駅であるなら便利だが、通学路となると短すぎて退屈すぎる。
「まったく、近すぎてやんなっちゃうって贅沢な悩みなのかね」
そうこうしているうちに校門の前まで来ていた。
時計を見ると九時三十分、まだ二時限目には十分ほどあるが、少し時間をかけて歩けば丁度いい時間だ。
玄関で上履きに履き替え、階段を二階分上がり、右に曲がってつきあたり。３‐Ｂと書かれた札のある教室の戸を開ける。
教室は喧噪に満ちていた。黒板には一時限目の講義内容がチョークの白い粉と共に残っていおり、クラスメイトは皆、席を自由に行き来し思い思いの世間話に耽っていた。
窓際の後ろから三番目、自分の席に着く。
「よう、重役出勤だな」
後の席から声をかけられた。

「ん、おはよ」
意次に話しかけたクラスメイト、田丸智樹は短髪の少年だった。サッカー部に所属している彼の健康的に日焼けした肌が白いワイシャツとコントラストを飾っている。
「ま、いつも通りっていえばそうなんだろうけどさ」
「はは、そんないつも通りなんて嬉しくもなんともないな」
「それはそうと、数学の宿題、やったか？」
キョトンとした意次。しかし慌てることなく悟った様に窓の外に眼をやる。
「ふ、俺を宿題なんて矮小なもので躓かせることなんてできないぜ」
「え、まじ？やってないのかよ・・・数学の叶の奴、きっと五月蝿いぞ」
「授業中に都合の悪いことが起きた時の対処法は心得ているさ。『すいません、さっぱりです』と『申し訳ありません』この二つで事足りる」
うお、勇者だなぁという智樹の言葉を聞きながら視界の端で次の授業の教師が入ってくるのを見た。起立、礼、お願いしまーす。
「お、櫛名いるな」
開口一番に教師の口から自分の名前が聞こえるのはあまり嬉しいことではない。
「お前、今日の朝のホームルームいなかっただろう。担任の細村先生が愚痴ってたぞ」
「はあ、すいません」
「それよりもとりあえずこっちに来なさい」
くいくいと手で櫛名を呼ぶ。静かな教室、クラスメイトの視線が集まる中で教卓に歩く。
「細村先生から預かってきた。おめでとう、都知事賞だそうだ」
一枚の紙、賞状だった。
「あ、どうも」
「おい、お前のが選ばれたんだぞ。もうちょっと嬉しそうにしろ」

そういって呵々と笑う数学教師は賞を受け取った本人よりも嬉しそうに笑った。

自然とクラスに拍手が巻き起こる。むずかゆさを感じつつも愛想笑いを浮かべて席に戻ると後の智樹から肩を叩かれる。

「おい、どうしたんだよ」

「この前の絵画コンクールの、ほら俺って美術部だから」

絵を描く事。それが意次の唯一の趣味、特技だった。百発百中ではないが絵を描いて送れば大抵はなんかの賞がつく。確かに才能があるのだ。初めて賞をもらった時は感動して涙が出るほど嬉しかったが、それも年に数回貰っている内に有難味がなくなってくる。

「へえ、すげえな」

と年に数回は聞いている友人の感嘆の声が一番嬉しかったかもしれない。

授業はつつがなく終わった。途中で宿題をやっていなかったり、指された問題を解けなかったりしたが、今日ばっかりは数学教師も多めに見てくれた。

『お前には失望した』

これは父の言葉だ。

美術を嗜む者とし、事物とそれを関係する印象が大事だと意次は考えている。そして父に関してまず初めに思い浮かべる言葉と言えばこれだ。

おおよそ実の親が息子に対して言うべき言葉とは思えない。一番最初に言われた時、中学受験に失敗した時は言われた後に人知れず泣いた。学校の成績が下がったりなどといった度に言われる様になり、次第に何も感じなくなった。

（慣れるものさ。嬉しいことも悔しいことも）

感動は摩耗する。

しかし、仕方のないことかもしれない。父は国家一種という難関を突破して中央省庁でエリート街道を突き進んでいる本物のエリートだ。兄は高校三年だが、毎年東大を五十人近く出してる高校で成績上位。妹も有名大学の付属校に合格し、学歴的な将来は保障されている。母は父の追従物。

中学に入り、絵画を本格的に書くようになって初めて取った賞を父が褒めてくれなかった時も悲しくはなかった。むしろ外の世界にこそ自分を認めてくれる存在があったのだと狂喜した。

もっとも、最初は厳しい家庭に対する反発でとった絵筆だったのだが。

『お前には失望した』

なんて言葉を言われたとして

『ん？ああ、そう』

などと答える自分が眼に浮かぶ。

「まあ、どうでもいいことさ」

死んだ魚の眼は疲れた老人の眼に似ていると思った。

「あの、おめでとう」

講習を終えて帰宅の準備をする。といっても昼前だ。智樹と帰りに駅前で遊んで行こうと約束している。財布の中身と浮かれる気分を感じながら鞄を持つと意次は声をかけられた。

「絵の賞、あの、おめでとう」

「ああ、ありがとう永山さん」

永山と呼ばれたのは艶やかな長い髪が印象的な小柄な女の子だった。顔立ちは整っているが垢ぬけない印象で心ないクラスの男子から地味娘と呼ばれているのを聞いたことがある。

もじもじと恥ずかしそうにしている少女を見て智樹が意次の脇腹を肘でつつく。

「おう、やるじゃないかよ」
「ん、何が？」
「女っけ無さそうな面して・・・」
その言葉で合点がいった意次は苦笑しながら返す。
「違うよ、永山さんは同じ美術部だから」
毎日並んで絵を描いてる仲間だ。それなりに会話はする。むしろ彼女が恥ずかしがっているのは自分と言うより智樹を含めたクラスメイトに対してだろう。
「めえええええええぐみっちいいいいいっ」
永山さんの下の名前である恵美を異様な程間延びさせながら元気よく教室に乱入する人物が一人。
「み、瑞樹ちゃん」
自称陸上部のエース、相場瑞樹は校則違反のミニスカートからカモシカの様な健康的な脚線美を惜しげもなく晒しながら永山さんに抱きつく。
「ぬははっ、ちっこくて可愛いのですよ～」
「ちょ、あ、変なところ触らないでっ」
少女二人が嬌態を晒すさまを二人で茫然と眺める。
「ねえ、智樹」
「んん？」
永山さんを撫でまわす様に触りまくる様子をやや涎を垂らしながら食い入るように見つめる智樹だった。
「あ、ああ、永山さんの幼馴染らしいな、相場は」
活動的な今時の女の子の相場瑞樹と永山さんは対照的だったが、長い付き合いが気安くさせているのだろう。さんざん撫でまわした瑞樹に「もうっ」とプンスカ怒る永山さんは微笑ましく見えた。
「ふむ？ええと・・・・」
そしてようやく立ちつくす意次に気がついた瑞樹。幼馴染の少女と交互に見返して
「えと・・・邪魔だったかな」

と変な気を利かせようとするのに永山さんは顔を真っ赤にして首を勢い良く振る。そんな友人を見て瑞樹は思案する様な顔で宙を見上げるといい事思いついた言わんばかりに満面の笑みで言った。
「そうだ、君達暇なんでしょ！？」
「え、まあ」と智樹
「じゃあ、この後一緒に遊びに行きましょう！」
はい決定っと元気よく宣言する少女に異を唱えることは誰も出来なかった。

「櫛名君って絵上手なんだぁ」
駅の近くにあるファミリーレストランで注文を待ちながらドリンクバーのジュースを啜っていると相場瑞樹はそう切り出された。
「いきなりどうしたの？」
「だって今朝」
隣に座る永山さんと眼を合わせると「ねえ？」と意味ありげな仕草。
「どゆこと？」
「今朝全校朝会で呼ばれたんだよ、お前」
学年主任がマイクで名前を呼んでも一向に当の生徒は現れなかった。かなり気まずい時間が流れたという。
「・・・ははは」
乾いた笑いを洩らすしかない意次。
「でも、美術室の前に掛ってるのも見た事あるけどかなり綺麗だったよ？」
「んん、ありがと」
「み、瑞樹ちゃん絵を描くの苦手だもんね？」と永山さん
「っというよりもじっとしてるのが苦手なんだよね」
快活な笑い方だった。何となくその事を羨ましく思いながらも空

になったコップのお代わりのために周りに断って席を立つ。
（性分なんだろうな）
何となく四人話していても自分は何を話せばいいのか分からなくなる。そもそもがあまり社交的な性格ではないのだ。
背中で三人が楽しく談笑しているのを聞きながら窓の外に眼をやると、コンクリートの上の空気が暑さで揺らいでいた。
（うわ）
帰る気力が一気に減退する光景である。
ドリンクバーでコーラを注ぎなおして席に戻ると
「ねえねえねえ、櫛名君て彼女いんの？」
なんて無邪気に聞いてくる元気印陸上少女だった。
「・・・藪から棒だな」
「で、いんの？いないの？」
瑞樹と智樹が興味津津に、永山さんが怖々と自分の顔を見つめるのを感じた。
この状況は一体何なんだろう。
（どういう話の流れだ？）
「ほら、きりきり答えるがいいよ！」
「・・・いないよ」
友達すらも少ないのだ。そんないい存在いるわけがない。
「ほう、ほう、ほう」
何を考えているか分からない答えを返す瑞樹に、仲間だと言わんばかりに握手を求めてくる智樹に、何故かホッとしている永山さん。
「ほう、ほう、寂しいことだねっ青春は限られてんだぜ！」
「なんだよ、相場にはいるのか？」
「うふ、知りたい？」
「え、瑞樹ちゃん、彼氏いるの！？」
「くそ、どいつもこいつも売約済みかよ！」
「どうしてもって言うなら教えてあげない事もないけどなぁ～」
そして静まり返り瑞樹の言葉を促す。

「それはね」
隣にいる永山さんに抱きつく。突然の事に「きゃ」と悲鳴を洩らした。
「彼氏はいらないの、こんな可愛い彼女がいるからね！」

夕日が赤いのは何故だろう。
（いや、不思議なのはこの赤い空にここまで感動するのは何故かってことか）
遊び疲れて帰宅の途に就く中に見上げた夕暮れは綺麗に茜色に染まり、同じように道を歩く者たちに哀愁の影を漂わせている。
絵描きとして夕暮れの赤には何度も挑戦したが、それでも納得のいく出来栄えになることはなかった。
（夕暮れめ）
「どうしたの？」
と同じ道すがら、共に歩いていた永山さんの声。
「空なんか睨んで、まるで親の仇を見ているみたい」
目つきの悪い意次が空を睨みあげる姿はとても見れたものじゃなかったのだろう。その事を自覚して落ち込む。
「ふふ、変なの」
永山さんの言葉はいつもよりも滑らかだ。思えばいつも美術室で一緒に絵を描いてる時もこんな感じだったかもしれない。
「さ、さっきの話、嘘だからね？」
「え、さっきって？」
「瑞樹ちゃんの・・・付き合ってるって話・・・」
そう言って横から眺める永山さんの横顔は夕日に照らされている事を差し引いても赤く染まっていた。
「お、女の子同士なんて、そんな」
さらに赤くなる。相場という少女が永山さんをかまいたがる理由

がわかった気がした。永山さんの仕草はまるで小動物の様で可愛らしい。それがブリっこではないから尚更だ。
「み、瑞樹ちゃんもどっか行っちゃうし」
あはは、行くとこがあるんだ。また夏休み明けにね～と智樹を引っ張ってどこかに消えてしまった。何となく察した様な表情の級友の後ろ姿が気になる。
「まあ、いいんじゃないか？」
「え？」
「夕日は綺麗だしさ」
そう言って二人で空を見上げる。今日は特別に澄んで見えた。
「櫛名君、芸術家だね」
「なんでさ」
「いつだって何か考えてる。それも絵に描けるのばっかり」
その声には笑いを含んでいる。
「でもそれが他の人との差なのかもね」
「何が？」
「才能、かな。私なんてどんなに書いたって『上手い』止まりだもん。『綺麗』や『凄い』には程遠くてさ・・・」
永山さんの言葉の意味はわかる。
意次にとって絵を描く事とは何かを伝える事だった。嬉しさだったり、悲しみだったり、怒りだったり、何かを伝えたくて、知ってほしくてその思いを筆に乗せてきた。
（でも）
伝える事があるというのは、伝えたい事があるのはいいことだけではない。辛かったり、悲しくて、それを表現しているときだってあるのだ。
音楽でクラシックをよくする者に、理解できるものだけが嗜めばいいのがクラシックだと言っているのを聞くが、意次から言わせればそれは違う。
「誰だって伝えたい言葉はあるんだ」

「え、何？」
「いや、ごめん」
そう、指揮者やピアニストやあるいはコーラス、楽器奏者にとって、自分を表現する術がクラシックと言う分野で音楽を奏でる事なのだ。誰も伝わって欲しくない。聞きたい、理解したい奴だけ聞けばいいなんて思っている奏者はいないだろうと思うし、そう言う奴は大抵下手くそだ。
「絵を描くときに大事なのは・・・・」
言いよどむ。いい言葉が見つからなかった。
「・・・・大事なのは、きっと伝えたいって思う気持ちなんだ。嬉しかったり、悲しかったり、その気持ちの純度をどれだけ高く保てるかだと思う」
しかしそれは難しいだろう。純粋な気持ちを持ち続けるということは気持ちを忘れないということだ。嬉しい事だけでなく、悲しいことやつらい事すらも。それでは普通は心は持たない。仮に意次がそれを出来ているとすれば、それは帰るべき家を忘れたくてキャンパスの前で没頭しているからだろう。
「・・・やっぱり芸術家だね」
静かに聞いていた永山さんだ。
「きっといい絵描きになるよ」
「なれるかな？」
「なれるよ、きっと・・・目指せ東京芸大かな？」
「そうなのか？」
「そだね、でもあの学校ってお勉強も厳しいらしいよ？」
「え、マジで？」
「マジだよ。国語も数学も英語もあるよ」
それは厳しい戦いになりそうだ。正直勉強はあまり好きではない。
困った様な顔をした意次に永山さんは笑いだす。それにつられて意次も笑い出す。
（ああ、悪くないな）

一しきり笑い終えると遠くに自宅の屋根が見えた。
（雨？）
視界を縦に遮る線が数本。いまだに空は赤かったが、天気雨だろうか。
「・・・そろそろ暗くなってきたし、家まで送るよ」
「え？」
「送る。暗くなったら危ないし」
その言葉に一瞬驚いた様な表情を浮かべた永山さんはすぐに困った様な、それでも嬉しい様な顔で「ありがと」と短く返した。
「雨も降ってきたし」
見たところ永山さんは傘を持っていない。自宅も近いし取ってこようか。
「雨って？」
「いや、だから空が・・・」
上から糸を落とし続ける空を見上げて。しかし、永山さんは先程と違う本物の困惑した表情を浮かべた。
「・・・雨なんて降ってないよ？」
「え、でも音だって」
気がつけば意次の耳には雨が地面を打つ音すらも聞こえてきた。
しかし
（地面が濡れてない！）
背筋を怖気が奔る。
「なっ」
視界が歪む。苦しい、苦しかった。急に息が詰まる程の苦しさを覚えてその場にへたりこむ。「櫛名君っ！？」と永山さんが慌てる声が聞こえるが彼女に揺すられる肩の感触も次第に曖昧になっていく。
おいでなさい

頭に声が響いた。
(だ、誰だ！)
既に現実の耳からは何も聞こえない。

恐れることはありません

今度はさらに強く響いた。
「ッ・・・・」
声にならない声で声の主を誰何するが答える者は誰もいなかった。

来るのです

「ぐっ」
頭が割れる様に痛い。

さぁ

「ああっ」
世界が暗転した。

第3話　先生と生徒と

水が滴り落ちる音がする。

「雨」

そう、雨だ。それは絶え間なく地を叩く。合間に聞こえるのは唸るような車のエンジン音。

暗い。しかしそれも当然だろう。空を見上げれば曇天、日も既に落ちている。夜の闇は空に浮かぶ雲すらも隠し、闇の帳の間から雨は落ちてくるのだ。

「邪魔だ、どけ！」

クラクションと共に響く男の怒声。車の運転席から顔を出しているらしい。照らされたライトの眩しさで意次ははたと我に返り、慌てて道の端による。

苛立ち紛れか、大きくエンジンをふかせて走り去る車を見送りながら茫然と辺りを見渡す。

「・・・ここは」

見慣れない街並みだった。それは先程まで永山さんと歩いていた道ではない。

（あ、そうだっ）

「永山さん！」

辺りには人っ子一人いなかった。

誰もいない。その状況でかえって冷静になった意次は周囲を観察する。

車も通っている。二車線の道路を挟むように設けられた歩道に沿うように建てられた建物は民家の様だ。しかし、その様式は現代日本のそれと大きく異なっていた。

（日本じゃない）

道路はコンクリート、街灯は電気のそれで、建てられ標識も工業的な雰囲気を感じさせるそれ。しかし、家々の外壁、歩道の石畳、

道の向いに見える教会の様な建物。それらはまるで中世のヨーロッパの様だった。文明をそのままに、文化を数百年後退させてしまったようだった。

雨は降り続け制服を濡らす。あてもなく彷徨い歩いていると大きな通りに出た。

「これ・・は・・・」

歓楽街の様だった。

ネオンに照らされたコンクリートで舗装された道を甲冑を着た騎士が、ドレスを着た女が、スーツを着た酔っ払いのサラリーマンが歩いている。

文明と文化が奇妙に入り乱れている。

通りの建物を見れば煉瓦の造りの建物もあれば鋭角的なフォルムのコンクリートで立てられた超高層ビルも見ることができた。

「君、大丈夫かい？」

突然声をかけられて飛び跳ねる様に振り向くと、そんな意次に驚いた様な茶髪に青い目をした中年のおじさんの姿。

「学生かな、ここら辺は君の様な若者がいていい場所じゃないよ」

その装いも意次の知るものと違い、時代がかっているように見えた。

「傘がないなら貸してあげるから」

と差し出された傘を受け取る。「じゃ、僕は仕事に戻らせてもらうね」と足元に立てかけてた看板を担ぎあげると声を張り上げ始める。客引きだった。

促されるままに傘をさしてきた道を反対側に進む。元来た静かな道だ。

「・・・・・」

人と話、傘を得て歩き、今になって意次の頭が本格的に回り始めた。

「ここはどこだ」

分からない。分からない事を考えても仕方がない。

「そもそも俺はどうやってここに来た」
それも分からない。一見して冷静に見える意次だったが、それは突然の状況に理解が追いついていないだけだ。
歩いていたら突然景色が見知らぬものになっていたのだ。
「いや、考えるなっ」
自分に言い聞かせる。今、深く考えすぎて冷静さを失うのはまずい。きっと自分は錯乱するかもしれない。その事に対する恐怖が意次の精神の均衡を保たせていた。
「イグニッション」
そして静寂は唐突に破られる。
「見つけた、漂流者だ」
ぞろぞろとそれらは現れた。総じて若者、男が多いが服装はまちまちだ。スーツのものもいれば物々しい甲冑の様な姿、若者らしいカジュアル。
しかし、それ以上に眼をひく物、それは彼らの手に収まっていた。
「大人しく共に来てもらおう。騒げば魔法剣の錆になる」
それは剣。それも尋常な類の剣ではなかった。剣と柄の間には色のついた宝石を中心とした機関が付いており、そこから放たれる思い思いの光が剣身に伝播し夜闇を照らしていく。

シュッ

何かが擦れるような音がした。音のした方向を見れば遠く離れて赤く光る剣を振りあげる集団の一人。
「な」
（なんのつも・・・・・）

ボアッ

何の火種もなしに意次の目の前の空気が燃え上がる。

「今のは警告だ」
「うっ」
後じさり距離を取る。
火が燃えた。髪を焦がさんほどのまじかで。
「う、うわあああああああああああああっ」
突然知らない場所に放りだされた。その上危ない集団によくわからない方法で攻撃を受けたのだ。意次の精神は限界に来ていた。恐怖、疲労に押されて再び歓楽街の方向に走り出す。
「よくわかった。死ね」
背中から掛けられた声に怖気を感じて横に体ごと飛ぶとその後を正体すら分からぬ衝撃が駆け抜けていく。
「ぐ、う」
慌てて入り込んだ路地は袋小路だった。テナントビルの配管のメンテナンス用に設けられた梯子を発見すると飛びついて駆け上がる。
「はあ、はあ」
なんとか全て登り切る。
（ここまでくれば・・・・）
そう言って地上を見下ろすと梯子の近くに先程の集団が集まっているところだった。
その内の数人が剣を掲げて光を放つと次の瞬間姿がかき消えた。
「なっ」
消えたのではない。それらは縦横無尽にビルとビルの間を駆け回り、飛び跳ねてその高度を上げてくる。
「無駄だと言ったはずだ」
そして数秒後には意次が必死で稼いだ距離をゼロにされた。
尋常な事ではなかった。どう考えてもおかしい。人間業ではない。
位置にして地上五階、それを猿の様に飛びながら駆けあがってきたのだ。
「抵抗するな、漂流者よ」
そもそもが理解不明だ。何故襲われるのか。漂流者とは何か。

ビルの屋上の人影が数人、また数人と増していき意次を包囲していく。
「ひっ」
後ずさるがそこは既にビルの端、再び遠い地上が顔を覗かせる。
（こ、こんなところでっ）
惨めだった。悔しかった。怖かった。わけの分からぬ状況に追いやられ、こうして命の危機に瀕している。訳のわからぬ敵に訳の分らぬ方法で殺されようとしている。
「うっ」
自分でも判断がつかない何かが心の奥で弾ける。
「うわあああああああああああああああっ」
剣を構える敵の一人に駆け出し、突っ込んだ。行き成りの行動にその敵は反応しきれず意次のタックルを食らう。
（剣を奪えば！）
押し倒して剣を奪おうと手が触れた瞬間、拒絶するように一際大きく剣が光り意次は吹き飛ばされる。
「あっ」
数メートル吹き飛ばされた先はビルの屋上ではなかった。遠く硬い地面が先に見える。
そして重力の重みを受けて加速する。
「ぐ、あ」
胃が持ち上がり、死が迫る恐怖に襲われる。
（死・・・・・・・・）

「男の子が情けない声を洩らすものではないよ」

涼やかな声が響いた。その正体について考える間もなく落下する意次の背中に柔らかい感触。
「舌を噛むんじゃないよ」
地面が迫った瞬間、その柔らかさはクッションになってその衝撃

を和らげてくれた。やさしく地面に下ろされ、声の主を見上げる。
「まったく、こんな夜更けにいい大人が若い子いたぶって、感心しないねえ」
その人物は若い女だった。雪の様に白い肌に同じく雪の様に白い髪。そして蒼い双眸を飾るのは神々しさすら感じる透徹された微笑みを浮かべる美貌。そしてその白さの全てを否定するかの様に纏われた黒い和物の着物。
「女、そこをどけ」
既に二人を中心に包囲網が造られていた。
「どくもんかい。漂流者の末路なんて大抵ろくなもんじゃない。物珍しい異世界の知識を吸いつくされた後には口封じされるのが落ちさね」
答えは炎の攻撃で返ってきた。
「やれやれ、風情がないねえ・・・・・・・・イグニッション」
そう言うと小脇に抱えていた細い棒、鞘に収まった刀の柄に手をかけて引き抜く。
「《氷閻刀・玉壁》」
その呟きと同時に白い女を中心として意次も囲う様に冷たい風の竜巻が吹き荒れる。その風に巻き込まれて炎は消え去り、風の圧力で周りを囲んでいた男たちがじりじりと顔を押えながら後ずさる。
「怯むな、ただの風だ！」
「ふふ、それはどうだろうねえ」
仲間を鼓舞する様な男の言葉にそっと女は微笑む。眼の奥でギラリと何かが光るのを感じて意次はその光から目が離せない。
（この人・・・・）
光、それは見間違いではなかった。確かに女の双眸は光っていた。瞳の蒼色に染められた光が月明かりの闇に煌々と輝く。
「ひ、《氷王》だ！」
その瞳の光を見た瞬間に男達の反応は劇的だった。そして
「う、うわあああああああああっ」

風に吹かれ続けた男の一人が悲鳴を上げながら風に流されて後ろ向きに倒れ、転がされていく。
「ど、どうしたというのだ！」
倒れた男を目にして周りの剣士達はその光景に呻いた。
「痛い、痛い、痛い！」
凍傷だった。低温の風に吹かれて露出していた。肌の部分が軒並み霜に覆われていた。
「確かに玉壁は高威力の技ではないがね」
女は嫣然と微笑む。
「じりじりとくびり殺すにはいいものだよ。ここで引くというのならば見逃して上げてもいいのだけれど？」
場が硬直する。
異様だった。多勢に無勢、しかし多勢が無勢に押されている。
（いや、怯えている？）
確かに襲撃者達は怯えていた。超常の力をふるい意次を追い詰めた男たちが、この白く美しい女性を前にして怯えていた。
「・・・撤退だ」
逡巡する様な空気が襲撃者達に流れると、すぐに撤退の準備を始めた。来た時と同様、嵐の様な幕引きだった。
「やれやれだねえ」
女が刀を鞘に納めると強風の壁も消えてなくなり、その瞳から爛々とした光も失せる。
何もかもが突然だった。唐突かつ連続した状況の変化に意次の脳は即座に思考停止状態に陥る。
「大丈夫かい？」
そう言って意次に声をかけても反応がないのは当然だった。女は夜でも映えるほど白い腕を着物の裾から出して意次の前で振ってみるが反応はない。
「・・・ふう」
なさけないねえ、と小さな声で呟く。

しかし次の瞬間、首筋、否、耳元に走る悪寒に体中に電流が奔るのを感じる。
「うひゃあっ」
女が意次の耳に息を吹きかけたのだ。
「な、何を・・・・」
そんな意次に女は深々と溜息をつく。
「・・・君、漂流者なのかい？」
「漂流者？」
その言葉は先程から出ていたが聞き覚えがなかった。
「ああ、そんなことも知らないのかい。まったく、骨が折れるねえ」
そして女は語り始めた。漂流者、それはごくまれに起こる時空を捻じ曲げる乱気流に巻き込まれて異世界に引き込まれた人間なのだと。無限平行する有限世界の旅人、それが漂流者だと言うのだ。
「そんなこんなで、異世界の世界の知識の獲得はこの世界じゃ国の威信をかけた競争になっているからねえ」
それで実際に未知の技術が持ち込まれてこの世界が発展したという実績もあるらしい。確かに周りの奇妙なまでに文明が先を行った印象の光景を見れば頷ける。
ふと、自分が手に持っていた学校鞄が眼に入る。
（そうだ、俺、家に帰る途中で・・・・）
「か、帰る方法、元の世界に戻る方法はっ」
「ないよ、残念だがね」
そう言うと女は白い柳眉を悲しげに下げる。
「自然災害みたいなもんなのさ。会ってしまったらそれまで。いや、一ついい点がある」
「・・・・・」
「雪崩や津波に巻き込まれたらまず助からないけど死にはしないってことさ」
上品に微笑みながら言う女の笑えない冗談を、もちろん笑うことなく聞いた。

しかし、意次はその話が頭には入ってこなかった。
(帰れない、このままずっと?)
迫っていた命の危険は去った。そして冷静になる機会があったからこそ断絶と孤独の恐怖が苛み始める。
「お、俺は・・・・・」
頭がぐるぐるして訳が分からない。自分の精神状態が悪い方向に向かい始めている事を自覚しながらもそれを修正するだけの気力がない。
「あ・・・う・・・ああ・・・」
体が震える。歯の根が鳴りそうだ。
「まったく」
白い女はその様子に嘆息しながら腰に手を当てる。
「ほら少年、お立ちよ」
「?」
何となく言われたままに立ちあがってしまう。
「ほいじゃ失礼」
グバッという肉を打つ派手な音と共に女の白い拳が意次の腹にめり込む。
「ごっ・・・・」
その細身からは想像ができない程の破壊力を伴うボディブローだった。
「騒がれても面倒だからね、ちょっとお眠り」
意次の視界は急激に暗転していき、そして気を失った。
「まあ、運が良かったってことさね。あたしもお前さんもさ」
女は気絶した意次に語りかける。それは話すというよりも独白の様だった。
「ちっとはまともな仙骨があるようだから拾ってやろうかねえ」
意次を肩に担ぐ。地面に落ちた鞄も忘れずに拾う。
「まあ、同情はするけれど」
女はそっと微笑んだ。可笑しい様に、慰める様に、呆れる様に、

ありとあらゆる感情が混沌として孕まれた笑顔。
「あたしは・・・そうだねえ、『先生』とでも呼ばせようかねえ。礼儀とか、以外に大事なものなのさ」
一転、表情を暗くする。
「・・・とうとう次が見つかっちまったってことかい。それがこの子なんて・・・・・・」
？

第４話　煙と土

『まもなくアトラス帝国首都アクロポリス、お降りのお客様は荷物のお忘れなきようお願いいたします』

高速鉄道の車内、スピーカーから車掌の声が乗客に注意を促す。とある親子の母親は息子に携帯ゲームを止めさせ、サラリーマンが端末を待機状態にして鞄にしまう。

車両の一画、割と混雑している車内にも関わらず、着席している客が極端に少ない座席があった。

「・・・・・んが」

などと新聞を顔に乗せて思いっきりリクライニングしながら鼾をかいている男が一人。

「・・・・・すう」

車掌のアナウンスに起きる様子は全くない。

「おい、起きろ」

そんな男にも救いの神が現れた。その神、隣の座席の女神は二十代半ばの密色の肌に白髪、女性にしては大柄で身長も二メートル近い。しかし、無骨な印象を受けることはなかった。むしろ女性としてはこの上なく美しい曲線を描き、その肢体を包む髪の毛と同じ色のストライプのスーツは男物ながらもそれが男装の麗人というに値する艶美さをかもちだしている。

「起きろと言っている」

切れ長の瞳が怜悧な印象を与える美貌であるが、彼女を見て美しいという印象を持つ者はあまり少ないだろう。

「・・・・・・・・・」

返事をしない男に女は眼を細めた。そこから見せる苛立ちは静かながらもまるで龍の如く凄みに満ちたものだった。そう、迫力がありすぎるのだ。大抵の人間は男女問わず女の美しさに気がつく前にその怖さに眼をそらす。

女は静かに踵を上げる。まるで体操選手の様にブレのない姿勢で片足の踵を天に向ける。座りながら器用かつ柔軟なことこの上ない姿勢でピタリと止め、そして眠る男の鳩尾目がけて勢いよく振り下ろした。

「ぐぼっ！」

飛び出た吐息で新聞が飛ぶ程に男は悶絶する。恐らく睡魔など彼方にいったであろう男だったが、今度は女の仕打ちで物言わぬ躯に鳴りかける。

「な、なにしやがる！」

「時間だ。一度目で起きないお前が悪い。オキツグ」

しれっと言う女、リュロンはオキツグが落とした新聞を叩いて拾い上げると気にすることなく読み始める。

「・・・お前ね」

疲れた調子で何かを言おうとするが何度か言いかけ、諦めた。こんなこと今まで何度もあったのだ。そしてこれからも続くだろう。

「ふう」

まるで哀愁漂うサラリーマンの様な溜息を洩らして座席に深々と座った。

隣のリュロンを見上げる。オキツグもそれなりに長身だったが、女はさらに一回り大きい。

「何だ、魚が死んだような眼をして」

「・・・いや、何でもない」

オキツグの格好はカーキ色の軍用防刃防弾コートに下は普通のジーンズ。中に薄手のシャツを着ているだけだ。顔にも覇気がなく、一見、目つきの悪いチンピラにしか見えない。隣の戦女神の如くのリュロンと比べると大分見劣りするだろう。

「何でもないんだ」

あれ、視界が涙で霞んで見えるや

何となく自分自身の存在意義について考え出してしう。鬱陶しいと再びリュロンから神の雷（踵落とし）をくらう羽目になってしま

った。

「受け取れ」

リュロンが放ったのはひと振りの棒、刀だった。

「お、おい、ちょっと、丁寧に扱ってくれよ」

高速鉄道を降りた後、危険物として鉄道側に預けていた武器、魔法剣を回収したのだ。

「まったく」

さっさと自分の魔導剣の回収に向かってしまう。

オキツグの魔導刀、《白燐丸》を腰元に専用のベルトで吊るす。刀のくせに反りがなく、鞘も鉄製で柄も革製、実用一点張りの見た目がオキツグにとって気に入っている点だった。

「ふむ、問題はない様だ」

大剣片手に戻ってきたリュロンは銃刀法違反避けのために普段被せておく革のカバーを取り外して愛剣のチェックに入っていた。

「お、おい、こんな処で」

「すぐに終わる」

場所はいまだに電車のホームだ。辺りには人もいて眼があった若い女性が逃げるように走っていく。

リュロンの魔導大剣（ムズ・ラハート）は長身のリュロンの身の丈に迫る程の長大な剣だ。鋼の刃がに血管の様に魔導回路が走る。心臓の如く核石は鍔の位置に取りつけられていた。

「ふむ」

問題はなかったようだ。再び刃を革袋に包んで留め金を嵌めていく。

「さて、行くか」

「ああ」

そして幕は開けた。

五年の月日がたった。
意次が異世界に飛ばされ、異世界の住人となりオキツグになってからもう既に五年が経とうとしていた。
（もう五年か）
五年前のあの日に『先生』に拾われ、魔法を使って戦う事を生業にする剣導士としての全てを叩きこまれた。指導は厳しかったが、もともと才能があったのかそれなりの腕を持つに至っている。『先生』の元から一人立ちして相棒のリュロンと共に指名手配された魔導犯罪者の賞金を稼いだり災害指定を受けた魔族という化物を狩って謝礼を稼ぐフリーランスの傭兵のような事をして各地を回っていた。
（ここは何もかもが違う）
一番驚いたのはこの世界で最も強力な軍事力は人個人だということだ。魔導に関して人の才能は極端だ。工業魔導士として製造ラインを弄ったり、学術的な考察をする魔導学者となるならばともかく、戦いを生業にする剣導士と呼ばれる者たちは強者一人が一軍にも匹敵する力を持っている。この世界における軍事力の増強は優秀な剣導士を雇い入れることで、そのことに余念がない。魔導の能力が高ければそれだけで一生遊んで暮らしていける程である。そもそも文明自体が魔導の力によって成り立っているのだ。この世界では義務教育に魔導学が含まれているという。
「仕事の内容は護衛だ」
リュロンは駅前のロータリー近くのベンチに座りながら切り出した。
「で、護衛対象は？」
ぴらぴらと写真の入った封筒を見せる。リュロンの手から受け取ろうとすると、封筒に指が触れる直前に宙をかく。

「ちょっと」
ひょい、ひょいとオキツグの手を避けていく封筒、というかリュロンの手。
「ちょ、ふざけ」
ひょい
「んなってっ」
ひょい
「いいかげんにっ」
ひょい
「しろっての！」
ひょいっと手は翻り封筒はリュロンの内ポケットにしまわれた。
「・・・・あのさ、お前ってもしかして俺のこと馬鹿にしてる」
すると驚いた顔でリュロン。
「ぬ、まさかオキツグに人の感情の好悪を理解する知能があったとは！」
「いや、イルカの知能実験じゃないんだから・・・・まあ、いいや」
不毛さを感じて話題を切り替える。
「でも護衛って、俺達向いてるとは言えないし、そもそも俺達は魔族相手が専門だろ？」
「ああ、先方にも言ったがとにかく来てほしいとのことだった。それに『先生』の縁者だそうだ。断るわけにはいかない」
そう、『先生』はリュロンにとって古くからの師、つまり彼女はオキツグにとって姉弟子にあたるのだ。だが・・・・
「・・・・・」
『先生』の名が出た途端に二人の間に気まずい空気が流れた。
「ともかく依頼人に連絡を・・・・・」
その瞬間地面が揺れた。爆発音、火災音に続くように人々の悲鳴。
「なんだ！」
「静かにしろ、今調べてる」
リュロンは五感を強化して音の発生源に注意をむけていた。

場所は遠くはない。駅前から見える雑多な建物から煙が上がっているのが見えた。

ユーリアは退屈していた。

歳は六、七歳。金髪を両結びにしたツインテールで仕立ての良さそうな丈の短い外套を纏って道行く道を散策している。

「爺やも家の者は皆つまらない事ばかりいいよる」

幼い声には不釣り合いな口調だったが自然と様になっている。よく手入れされた髪といい、上等な衣服といい、この少女の身分がそれなりに高い事をそれとなく示しいた。

そして過保護というゲージを破った小動物、ユーリアは家の者たちには内緒で街を散策している最中だったのだ。恐らく家では大捜索が行われているだろうが知った事ではない。この年頃の子どもにとって退屈させられる事こそが悪なのだ。そして

「お前たちは何をやっているのだ？」

「ああん？」

路地裏、ガラの悪そうな男たちが吹きだまる一画で一人の男に近寄るそう問うた。普通の婦女子であれば断じて近寄らない場所、近寄らない集団であるがユーリアにとってはお構いなしである。

「何をやっているのかのう」

「何って、ただ駄弁ってるだけだけど」

可憐な少女が遠慮なく放つ問いに、なく子も黙る不良どももたじたじだった。

「おい、嬢ちゃん。ここいらは嬢ちゃんみたいな育ちの良いのが来ていい場所じゃねえよ」

「ってお前、普段とキャラちがくね？」

「いや、歳の離れた妹がこんくらいでさ」

などなど、ギャング共の間でなんとも和やかなほくほくした雰囲

気が流れる。
　お菓子やろうかと差し出した安いスナック菓子をユーリアは物珍しげにつまんでは喜ぶ。気がつけばわらわらと不良共が集まって来ていたが、普段彼らが出す険呑な雰囲気は皆無だった。
「おう、ちょっと待ってろ。この辺に飲み物が・・・」
「おい、酒はだめだぞ？」
「分かってるよ。炭酸の味を知らねえっていうからよ」
　その時、路地裏にカッとヒールの踵が鳴る音が響いた。
「あんたらっ、そんな小さい子囲って何やってんだい！」
　背の高い女だった。スッと通った鼻梁が印象的な細面の美人。しかし目つきの鋭さといい、腰に帯びた魔導剣といい、女がただの女でないこと示している。不良たちも「あ、姉御っ」などといい女に道をあける。
「まったく、女に相手にされないからって今度は子供が相手かい。呆れたもんだね」
「まってくだせえ、ヨハンの姉御、俺たちは！」
　ヨハンと呼ばれた女はその言葉に耳を貸さない。
「お黙りっ言い訳は聞かないよ！」
　すっかり平伏してしまった男達に不思議そうな視線を向けるユーリア。
「お嬢ちゃんも悪かったね。こいつらに何か変な事されなかったかい？」
「んん？この者たちは妾によくしてくれたぞ。ポテトチップスとやらをくれたのだ！」
「・・・そうかい、でも知らない人から食べ物貰っちゃいけないよ？」
「うむ、心得た。しかし、お前がこの者たちの長なのか？」
「ああ、この愚図どものことかい？まあ、そうだねあたしがこいつらの、ヴォルフスのリーダーだよ」
「ふむ、女だてら大したものだな」

ギャングの女ボスの額に一筋の汗が垂れる。あれ、予想してたのと大分違うなどと考えていた。周りの馬鹿な男どもは気が付いていない様だったが少女の装いは地味ではあるものの上等なものばかりだ。平民ではありえない。恐らく貴族。しかも「妾」などという言葉からして相当高位の血筋で間違いないだろう。

（あ、あたしゃ、大変な存在を今相手にしてるんじゃ・・・・）

少女、ユーリアの視線がヨハンの全身を舐めまわす様に動く。

「ど、どうかしたのかい」

そしてユーリアの視点がヨハンの背丈に比例して豊かな胸元に止まる。

「な、なんだい」

「うむ、やはりそれが決め手なのだな」

得心言ったと言わんばかりのユーリア。

「女性の魅力とはどれだけおっ○いが大きいかで決まると言われている」

「ッ・・・確かに大きい事は悪い事じゃないと思うがね」

誰だろう。そんな変な事吹き込んだ奴は。キッと辺りの男どもを見渡すと慌てて男たちは首を横に振り否定する。必死の形相だった。

「ぬう、しかしそれ以外に考えられん。その統率力、士気の高さ、やはりあの禁断の技・・・」

ズゴゴゴゴゴゴッ

「パイ○リじゃ！」

「・・・・は？」

「パイ○リじゃ。どんな屈強な男共も一度この技にかかれば完膚なきまでにひれ伏させることができると言う。おっ○いの大きな女子にしか出来ぬという究極奥義、そなたも会得しているのじゃな！」

「え、あ、いや・・・・」

「その技をしてこの者達を従えているに違いないっ、そうなのじゃな！」

辺りの男どもは何故か半腰で居心地悪そうにしている。そこでハッと我に返った。

「だ、駄目じゃないっ、女の子がそんなはしたない！」

「む、そうなのか？だが屋敷の女中は男はおっ○いの言いなりと言っておったぞ？」

「そ、そりゃ否定しないけど・・・・」

「むふう、やはりそうなのだな。おっ○い、おっ○いこそ全てじゃ。むううううううっ」

自らの何の胸元の平面を見る。

「ぐう、ギャルのおっ○いをおくれえええええええっ！」

神の龍が出てきそうだった。

（まったく、小さな娘になんて事教えてんだい！）

心の中で顔すら見知らぬ女中を口汚く罵りながらユーリアの口を塞ごうとする。これ以上少女の口を野放しにしたらどんな下ネタが出てくるのか分かったものじゃない。

「ちょっと・・・・」

ゴガッ

何かが崩れる衝撃と共に路地裏の壁が弾ける。

「な、なんだい！？」

そして瓦礫の向こうから現れたのは数十人にものぼる人影。全て魔導剣で武装している。こちらの倍近い人数だ。

「スパイダーズか！」

この辺りを縄張りにしている自分達ヴォルフスと敵対している組織だった。

「ふん、相変わらず腑抜た奴らだ」

襲撃者の先頭に立つ大男が手に持った魔導戦斧を片手に前に立つ。

「ドン＝アルバンか！」
仲間の内の一人が叫ぶ。スパイダーズの首領アルバン。自分達ヴォルフスと違って賭博、薬の売買といった悪事に手を染めるスパイダーズは資金も潤沢で組織の規模としては圧倒的に上だ。組織の毛色を体現する様な存在である。アルバンもかなり人でなしな性格でヴォルフスと度々対立している。
「ヨハンか、貴様を潰せばヴォルフスなど烏合の衆、お前達も今日限りだな」
「はん、出入りって訳かい。でもちょっと待ちな。この娘は関係ないからね」
アルバンの視線がユーリアを舐めまわすよう撫でる。さっとヨハンの影に隠れたユーリアを安心させる様にその頭を撫でた。
「その娘をこちらに渡せ」
「はあ！？あんた、人の話を聞いて・・・」
「そいつは貴族の娘だ」
ああ、やっぱりなと思いながら、断定する様なアルバンの言い方に違和感を覚える。
「・・・根拠があるってのかい」
「貴族の娘が家出をして上区じゃ大騒ぎになってる。下区の俺達じゃ入れない本物の貴族の御姫様だ」
「はっ、送り届けてあげて謝礼でもむしろうって腹か」
その言葉にアルバンは獰猛な笑いを発すると「まさか」と続ける。
「その娘を人質に身代金を戴くのよ」
半ば予想できた答えだ。
「じゃあ引き渡すわけにはいかない」
だが、と心の中で続ける。スパイダーズは帝都の下区のヤングギャングの大半を支配するチームだ。本物の犯罪組織の下部組織となっているという話も聞く。対して自分達ヴォルフスは地域密着型の自警団がいいところ。ゴロツキだが女子供に優しいヴォルフスでは抗争になったら勝ち目がない。ヨハン一人が剣導士として秀でてい

るおかげでぎりぎり競り合っていたようなものだ。しかし、ユーリアを守りながらとなると・・・・

（このままじゃ守りきれないね）

「ちょっとお嬢ちゃん」

ユーリアに耳元を寄せる。

「ちょっとこのままじゃきつい。多分、あたしらじゃお嬢ちゃんを守りきれない」

「ッ・・・・・」

「なんとか時間は稼いで見せるから合図したら反対側に逃げるんだよ」

すると少女は気丈にもコクリと頷いだ。

（いい子だ。それに強い心を持っている）

将来自分が子供を産む事があったらこんな子供にしたいと思った。

「皆殺しにしてやる」

アルバンの言葉を合図に戦いは始まった。ヨハンを中心に周りをヴォルフスに固めさせる陣形、ヨハンが戦いの要である事を理解した理想的な構えだった。

剣と剣が撃ち合う音が鳴り響く。

「今だよ！」

少女の背中を押すと一瞬ためらった後、ユーリアは走りだした。

「これで・・・」

数分もすれば警察が少女を保護出来るだろう。スパイダーズも官憲と正面切って戦おうとは思わないはずだ。

ボバッ

「！」

白い煙が辺りに充満する。煙幕だ。

「しまった！」

煙が消えた時にはアルバンの姿はない。逃げた訳ではない。ユー

リアの身柄を確保することを優先したのだ。
「くそっ」
しかし辺りにはまだスパイダーズの組員達が固めて動けない。まんまと嵌められた。
「くそったれがあああっ！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおっ」
轟く雄叫びに眼を走らせると走る少女の姿、可愛らしく幼い可愛い雄叫びを放ちながら必死の形相で走る。艶やかな長い金髪にフリルのあしらわれたドレスが映えるお嬢様だ。歳は六、七歳だろうか。しかしあどけない表情も今は鳴りを潜めて額に汗を浮かべて何かから逃げていた。
「待ちやがれ！」
続いて現れたのは剣導士らしき数人の男。その身なり、言葉といいどれもチンピラに違いなかったが、先頭のリーダーらしき男は様子が違った。
（あの男は・・・・）
「パトリック＝アルバンだ」と端末の情報を閲覧しながらリュロン。
「何？」
「パトリック＝アルバン、等級は五千七十七位、指名手配も受けているギャングだ」
「五千七十七位、捕り物としてはまあまあだな」
等級制度。これがこの世界における強さの基準。剣導士は必要に駆られて街中で剣を振い、魔法を行使せねばならないときもある。暴力を生業にしている以上、人を殺してしまうこともある。これら剣導士を法的に管理し、保護する法律が魔導士登録制度と言い、登録者は序列化される。等級制度はその続称だった。上は一桁の人間戦略兵器レベルから下の五桁台のボン百まで幅広く存在する。パト

リックの等級も低くはない。恐らく剣導士として立身を目指して挫折した口だろう。落ちぶれて犯罪者の仲間入りだ。

「苛烈な戦いには程遠そうだが」

不満そうに魔導大剣を抱えるリュロン。無理もない。彼女の等級は四十五位、大陸全土で見ても屈指の腕を持つ剣士だ。それ故に

「楽な仕事だからさっさと終わらせよう」

それにと付け加える。小さな女の子を追いかけまわす男達が腹立たしい。憎らしい。

「イグニッション！」

魔導刀の起動鍵語を唱えて《白燐丸》を抜き放つ。

オキツグはリュロンの様に精製した魔力を自らの内に循環させて肉体を強化しない。外側に放ち、超自然的攻撃を行うためにそれは出来ないのだ。もっとも、それでは目まぐるしく変わる戦闘状況についていけないので魔法的な思考制御を行い反射神経を格段に高めている。その上・・・・・

「氷閻刀・瀑布」

津波が起こった。空気中の分子を再構成し、地中空中問わずにかき集めた水分が山をなす光景は圧巻の一言。高さも十メートル近い。そう、後衛系剣導士たるオキツグはさながら魔法使いの様に局所的な超自然的魔法を使う事が出来るのだ。

「氷閻刀・剣山」

まさに飲み込まれようとしていたテロリストを前にして急激に津波は凍結し、氷壁となった津波から無数の氷の槍が現出する。少女を巻き込まない様とするためだが、肝心の少女は突然の事態に逃げることを忘れて氷の山をぽかんと見上げている。

「ぎゃあああああああ」

氷の槍に手足を貫かれた痛みに呻くテロリストたち。殺してしまったら報酬が引かれてしまうからだ。慈悲心で手加減した訳ではない。

「リュロン」

「ああ」
しぶしぶといった様子で魔導大剣を鞘から抜く事もなく駆け出すと混乱に陥っていた敵を一人一人丁寧に気絶させていき、最後にはパトリックも気を失って地に伏した。
「やれやれ」
一件落着である。氷の山の分子結合を解くと水に戻った。それこそ周りの人間が巻き込まれないように少し少し地下に戻していく。
リュロンが気だるげに大剣を肩に担ぐと未だに棒立ちの少女に歩み寄る。
「おい」
「っ・・・むう？」
「助けてやったのだ。礼くらい言ったらどうだ」
その言葉に少女は跳ねるように姿勢を正すと言った。
「う、うむ、誠にこの度の計らい、大義であったぞ！」
時代がかった言葉でそう述べた。
リュロンは少女の長い髪の一房を取るとオキツグを手招きする。
「持っていろ、リードの代わりだ」
「ぬおっ、妾、犬扱い！？」
ガビーンという擬音が聞こえてきそうなほどの見事なリアクションだった。
「で、この子をどうしようって言うの。ってか誰、知ってるの？」
「む！妾の事かっ、妾は高貴なのだぞ！」
髪（りーど）を受けとり試しに引っ張ってみる。
「ぎゃんっ・・・ぎゃ、虐待じゃ、虐待を受けておる！」
可愛い割に反応が面白い少女だった。
辺りを見渡せばぞろぞろと野次馬共がわらわらと集まって来ているところだった。少女で遊ぶ二人を通報するべきか否か迷い始めている視線が集まる。
「・・・で、こいつなんなんだよ」
「この少女はな」

胸元から先程の写真を取り出す。
「依頼の護衛対象だ。詳しい事はそれ以上は分からん」
受け取った写真にはこちらに向かってピースをする能天気な少女の姿が映っていた。

第5話　刃の意思

歓声が沸き起こる。怒号に喧噪、人の感情のうねりが湯気となって見えるかのよう。

そこは闘技場だった。

『さあっ今日のメインイベントだ。若くしてエメニウス闘技祭の王者に輝いたこの男が挑戦者を迎え撃つ！』

司会が軽妙なトークで場を盛り上げるのを聞きながらオキツグは闘技場の中心で空を見上げた。

野球場程度の広さはあるのだろうか。その中心で一人、オキツグは瞑目する。

等級制度。これが魔導士としての格を現す以上、力を磨いて上の位階を目指す者が出てくるのは必定。そしてそれらが戦うところに金儲けの匂いを嗅ぎつける者が出るのもまた自明のことだった。主催者側が剣導士に戦う場を与え、剣導士は戦う姿を見せ、主催者は観客から観戦料も徴収し、剣導士に還元する。オキツグの以前の世界に格闘技興業の世界がそこにはあった。

（だけど・・・・）

オキツグは思考が冷えて行くのを感じる。闘技場のそこかしこに紅い斑点があるのを見て捉えた。そう、死ぬことだってあるのだ。一応、殺害は推奨されてないし闘技者同士の戦いで一方が死に至った場合は事故として罪にされることはない。が、それでも多額の報酬と等級の向上の代わりに死の恐怖、相手を殺してしまうかもしれない圧迫感が付きまとう。もっとも、この世界の医療技術は魔法のおかげでかなり発達しているので死ぬ前に病院に駆け込めば最悪、死ぬことはないのだが。

オキツグがこの闘技祭に出るようになったのは『先生』の言いつけだからだ。少しでも実戦の空気に慣れる様にとのことだったが、どうにもこの雰囲気は好きになれない。退廃的に思えてしまうから

だ。人の生き死にを肴に盛り上がるなどローマの剣闘士奴隷もいいところである。

（いつも通りやるだけさ）

オキツグは二年前に闘技者としてデビューして以来、勝ちを拾い続けている。現在の等級は百七十五位。『先生』から伝授された氷凍系術式の華麗な戦いは観衆を魅了し、何より今まで一度も事故を起こした事がない、つまり対戦者を殺害していないとい事実がクリーンなイメージとして人気を博している。

『ここで挑戦者の登場だっ』

闘技場の一画、戦うために整えられた砂地に面する壁、その扉が開いた。

事前に知らされた挑戦者の情報を思い浮かべる。

『・・・なんと直前になって挑戦者が変更になったらしい。挑戦者ヒューリックはドクターストップだそうだ。代わって現れたのは！』

そして扉が完全に開き、挑戦者が闘技場に入ってきた姿を見てオキツグは絶句した。

「な、なんであんたが！」

『なんと同門対決っ、王者オキツグ＝クシナの師にして第九位、≪氷王≫が挑戦者として飛び入り参加だ！』

若い女だった。雪の様に白い肌に同じく雪の様に白い髪。そして蒼い双眸を飾るのは神々しさすら感じる透徹された微笑みを浮かべる美貌。そしてその白さの全てを否定するかの様に纏われた黒い和物の着物。その手に提げる魔導刀、≪白燐丸≫は刀のくせに反りがなく、鞘も鉄製で柄も革製、実用一点張りの見た目。間違いない。何度も眼にした師と師の刀だ。

「おう、驚いているねえ」

「な、なんで・・・・・」

「見ての通り飛び入り参加よ」

しかしその呑気な言葉と裏腹に『先生』が放つ空気には確かな戦

いの意思が乗っていた。
「お前が、オキツグがあたしの弟子になってもうじき四年かい・・・」
感慨深そうにそう呟いた。
「あたしゃ見た目の割に長生きでね、あんた以外にも魔法を教えた人間はいたが、あたしの技を、氷閻刀を会得した人間はお前初めてさね。氷凍系術式を扱えるってだけならそれなりにいるかもしれないがね。あれは、氷閻刀は振う人間を選ぶ。普通の人間がどんなに頑張ったってアイスシャーベットを作るのが関の山だろうさ」
そして
「お前にはあたしを継ぐ力がある」
その一言は静かに、しかし断固とした意思を宿して響いた。
「だ、だからって、なんで・・・・」
戦う理由が見当たらない。オキツグは震えた声でそう返すのがやっとだった。そんな弟子の様子に怒るでもなく優しく諭す。
「お前はこの世界で戦う以外に生きるすべを持たない」
「！」
「理由は語らずとも分かるだろう。そしてあたしに拾われたこともその理由の一つだ。まあ、それは勘弁しておくれよ」
平和な世界、日本からやってきた意次少年にとってこの世界は厳しすぎた。漂流者、異世界からの移民である事を理由にその身を狙われ、なんとか戸籍を入手して漂流者であることを誤魔化しても、社会の一員として生きるスキルは何一つ持っていない。そう、生きるために戦う必要があるのだ。
「そして、お前にはその刃を押し通す意思の力がない。事故者ゼロなんてその理由以外の何物でもないのさ」
殺す気がない。そうしなくても勝てたからだ。だがそうしなければいけなくなった時、
「出来なくば死ぬことになる。そして死ぬのならば我が手で引導を渡してやるのも師の務めだろう」

単なる戦いではない。稽古ではありえない。師は殺し合いをしようと言っている事にオキツグは気が付いていた。
「だからってあんたと斬り合うなんて！あんたを慕ってる奴は沢山いるんだ。リュロンだって！」
「言っただろう、意外と長生きだって」
ふと『先生』の表情が緩んだ気がした。
「もうこの体が思い通りに動く時間はそれほど長くはないんだよ」
「っ・・・・・」
「言葉の応酬はこれまでだよ、さあ刀を抜きな。あたしに勝てたら、あたしを殺せたら《白燐丸》をくれてやるよ。やるときゃやれる男の子だと証明してこの老体を安心させておくれ」
それが一年前、オキツグが最後に出た闘技場の試合だった。

第6話　王の領域

「理不尽だ」
そう、この世の大抵は唐突にこちらの都合なども考えないでやってくる。
「こんなの聞いてない」
そう頭を抱える様に呻くオキツグはとある邸宅の応接間の椅子に座っていた。
「あああああああああ、うううううううう」
「五月蝿い、大人しくしていろ」
隣に座るリュロンに叱られる。
あれから、後からやってきた少女の家の者にその屋敷に案内されていた。
「大変お待たせいたしました。ヴェルーナ公爵家がご息女、ユーリア・ド・レサリウス・ヴェルーナ様です」
いかにもベテラン、仕事が出来そうな老執事に連れられて現れたあの少女は貴族の御姫様だったのだ。それも公爵家。皇族筋ということだからその地位たるや絶大なものがある。そもそも屋敷に連れられた途端にいやな予感がしたのだ。無駄に立派な庭園に邸宅。こ、これは金持ちと権力者の匂いがぷんぷんしますぜ的なアラートが鳴りっぱなしだった。小市民のオキツグとしてはなるべく関わり合いたくない相手だ。
「うむ、待たせたな。苦しゅうないぞ！」
姫様本人が元気印な上、やたらと気安いのがせめてもの救いか。
「先程は助かった。礼を言うぞ」
「いや、それが私達の仕事の様だからな」
そうだ、と執事に振り返る。
「街の者でヨハンと言う者達に世話になった。ドルスター、あの者達に我が家から礼をしたいのだが」

「承知しました。そのように」
ドルスターと呼ばれた老執事はそう返事をすると三人に淹れたての紅茶を差し出してきた。
「あ、どうも」
「いえ」
「一つ気になる事がある」
リュロンは部屋を見渡す様に言った。四人が入っても全く狭さを感じない応接間には立派であるものの不審な点は何一つなかった。が
「何故この場に小娘が座っているという事だ。当主がこの娘の父か祖父か知らんがせめて挨拶に来るべきだろう?」
不遜に言い放つリュロンを責めることなくユーリアとドルスターは押し黙る。
「おい、ちょっと・・・」
「黙っていろオキツグ。これは場合によっては依頼の破棄も考えなければならない」
しばしの沈黙ののちにユーリアは語り始めた。
「・・・父上は、父上は去年の暮れに病に倒れて亡くなった。母上もじゃ。祖父に至ってはとうの昔の話」
「お嬢様はこのお歳にしてヴェルーナ家の当主であらせられるのです。もっとも、爵位は帝国貴族法で定められた十二歳の成人を迎えるまで継ぐ事がかないませんが、好奇心旺盛なお嬢様が万一無理をされたら大変です。護衛も兼ねてお守りをというのが依頼内容です」
「むう、ドルスター、お守りとな?」

その晩、リュロンとオキツグはヴェルーナ家に世話になる事になった。護衛の件の云々は予定通り受ける事になったので来客者用の部屋を二つ用意されたのだ。本物の貴族の豪勢さは客間にまで及んでいる。かつてない程に柔らかいベッドの感触を楽しんでいるとド

ルスター執事から先程通された応接間に来るように言われた。
「お呼び立てして申し訳ございません」
「いや、で、何の用？」
既にリュロンは椅子に座り出されたコーヒーを傾けている。
「あれ、お嬢様は？」
「既にお休みになられました」
確かに既に空も暗い。
「それで、あの娘に聞かれたくない話はなんなのだ」
「お察しがよくて助かります」
既にリュロンは呼ばれた意味について分かっている様だった。「え、どゆこと？」と聞くと思いっきり馬鹿にした視線を向けられた。
「公爵家が、貴族が早急に護衛を探している。血縁である皇族を頼る事すらせずにだ。これには二つの意味がある」
命を狙われているということだ。
「しかも黒幕は皇族に近しい者である可能性が高い。場合によっては皇族そのもの黒幕である可能性も考えられる」
お家騒動ということだ。しかもアトラス帝国の国家元首の一族。巻き込まれたらただじゃ抜け出せない。リュロンが懸念していたのはこのことだった。
「お嬢様は次期皇帝陛下と目されるクヌート殿下の最有力正室候補にございます。恐らくその事をよく思わない方々も多い。そう言った方々が無茶をされないためにも護衛が必要なのです」
「・・・・『先生』の縁ともなれば断るわけにはいかない。どのみち受けていた」
しかし、と続ける。
「私達はたった二人だ。それに魔族相手が専門だ」
「存じております」
「災害指定を受けた巨龍ならともかく人間、しかも暗殺者から少女の身を守ると言うのは」
「確かに厳しいでしょう。が」

ドルスターがオキツグを捉える。
「そちらの御仁はあのお方の後継者だというお話。であるならば・・・・」
「すまないが」
リュロンが強引に話を遮った。
「その話題については触れないで貰いたい。デリケートなんだ。私にとっても、こいつにとってもな」
(・・・どうにもならんね)
沈黙が降りた。居心地悪そうにオキツグは携えた《白燐丸》を弄る。
「ふん」
そう鼻を鳴らしてリュロンは席を立つ。
「おい、どこに行くんだ?」
「お前の知るところではない」
「護衛の最中だぜ」
すると相変わらず、冷たい美貌は言葉吐き捨てる様に言った。
「どうせ数日は何も起こらない。私達は、特にお前は公爵家の跡取り以上に爆弾だからな。今頃はその対応が練られているはずだ。ドルスター、貴様もそれを見越して護衛に私達を選んだのだろう?」
「・・・・・・・」
「受け合おうとも」
後には空のカップだけが残った。

帝都アクロポリスは主に二つの地域から成り立っている。
一つは下区。一般市民の住居と主だった商業施設、それらに伴う官庁が収まる区域だ。外に広く開かれており、人々と物資の行き来が盛んな帝国きっての貿易都市としての側面。
そしてもう一つが上区。上級市民、特に帝国に古くから連なる貴

族の屋敷が収まり、下区の雑多ながらも活気のある雰囲気と一線を画した美しく整えられた家々、庭園が連なる様は帝国の格式美と伝統を守り続ける悠久の園。皇族の宮廷もその中心に位置している。

空を青々と照り輝かせた太陽も今は闇の向こうに身を潜ませ、静寂を頂いた夜の上区の一つの屋敷に一台の車が止まる。

そこは数ある優美な屋敷の中でも一際大きく、そして華麗な邸宅だった。華美ながらも下品にまで至らないのは単に所有者の美的センスによるものか。

「おかえりなさいませ、旦那様」

「ああ」

「応接間にお客様をお通ししております」

「分かった」

その屋敷、アガート侯爵家、ペサロ・ラ・ドミニウス・アガート侯爵は迎えに出た使用人に上着を預けると即座に客が来ていると言う応接間に向かう。

「もてなしは必要ない。誰も部屋に来ない様に言っておけ」

ペサロ侯爵は四十代前半、豊かな金髪を後に撫でつける堂々たる偉丈夫だった。高位の貴族、そして本人の容貌も相まってまず安いスーツは似合わない。今着ている黒のダブルもそれだけで一般庶民の年収程度の値段はするだろう。

応接間の扉に手をかける。

「待たせたな」

部屋の、応接間というには広く立派すぎる室内の中心、流麗な模様を描く絨毯、豪華な調度品に囲まれた応接テーブルに二人の人影を見てとる。

一人は中年の小太りの男。くたびれた白衣といういでたちはこの場にそぐわない印象を受けたが、慌てて立ち上がり汗を浮かべながら平伏するその姿がさらに男の格を下げた。

もう一人は若い男。歳の頃は二十歳前後だろうか。燃え盛る様な赤い髪にペサロ侯爵に勝る程の隆々とした体躯。帝国軍の青色の略

式平服を身に纏った姿だった。しかしどこか茫洋としており視線が定まらず、もう一人の男の様にペサロ侯爵に挨拶する様子もない。
「ギュネイ博士か、久しいな」
「お、お名前を覚えていただけて光栄です」
「ふん、そいつか、例の被験者は」
「は、はい《プロメテウス計画》がとうとう完遂の域にまで達した証にございます」
会話は完全な無関心を貫く赤い男を無視して行われた。
「コードＰ１、初の成功体である事を祝しまして個体名をプロメテウスとすることを考えております」
「好きにしろ。して、完成の度合いは？」
「は、はい」
すると白衣の男、ギュネイは足元に置かれていた細長い一メートル程の布に包まれた棒を取り出す。
「わ、我々としましても《焔の玉璽》を手に入れることが出来たのは僥倖でした」
そこから出てきたのは優美なサーベルだった。赤い柄糸が巻かれたナックルガードは施された彫刻と共に金色に光っており、同じように光る機関部の中心には赤い宝玉、核石が飾られている。そして引き抜いた刀身は予想されていた銀の鉄色ではなく見事なまでの真紅一色だった。
「《玉璽》か。持つ者に王たる資格を与えると言うが、持つべき資格のない者には裁きの刃が下るとされるあれか」
「おっしゃる通りで、《焔獄剣》、《玉壁》を持つ者の振う魔法は一般の剣導士とは一線を画します。合成魔法としてその真似事をして見せる者いるようですが、カオス領域で術式を組成するプロメテウスの焔は威力もキレも段違いで、プロメテウス、持ちなさい」
「了解した」
そこで初めて赤い男、プロメテウスは言葉を発した。プロメテウスはその真紅の柄を握ると短く起動鍵語を発する。

「イグニッション」
赤い核石に光が灯るとまるで血流の様にそれがサーベル全体に伝播する。そして光に満ち足りた剣身からちりちりと焔すら生まれ始める。
「もういい、返しなさい」
大人しくサーベルをギュネイに返すとその光も収まっていった。
サーベルを鞘に戻すとギュネイは安どする様に一息ついた。
「この様に今までは全く成功する事のなかった《焔の玉璽》の起動にも成功しています」
おどおどして自身なさげなそれまでと違いどことなく誇らしげだった。「
「確かに、ここまで漕ぎ着けたのは博士の功績が大きいだろうな」
「あ、ありがとうございますっ」
「だが知能の方はどうなのだ。ただ魔法を放ち続ける破壊兵器では意味がないのだぞ?」
「は、そこのところはご心配なく。現在は閣下の前にお連れするという事で万が一のことがあってはいけないと思い情動レベルを下げておりますので」
それに、と続ける。
「イプシロン、姿を閣下にお見せしなさい」
「はい」
それは突然現れた。後ろから突然声がした事に若干驚きながらペサロ侯爵は振り向くと、またそこに立っていたの存在はそれ以上に異質な装いで侯爵を驚かせた。
道化の様な仮面にフード付きのコートを深く被り、手の先、首筋と言った場所もプロテクターのせいで窺い知れない。執拗なまでに肌を晒さないその在り様は寒気と共に狂気すら感じた。
(若い女の声・・・・・)
気配を感じることは出来なかった。
「例の《イプシロン計画》の被験者を回収することに成功いたしま

して」
　その言葉の内容は今まで以上にペサロ侯爵を驚かせた。
「ほう、あの・・・・しかし、随分な時間が経っているではないか。計画主任のコルトゥス博士が被験者の暴走で死亡して五十年以上だぞ。大丈夫なのか？」
「は、はい、この被験者は抗加齢措置を施されておりますので当時から比べてそれほど劣化はありません。命令コードも相変わらず生きておりまして」
　なるほど、しかしそれならば先程までイプシロンの存在に気がつかなかったことは彼女が身を隠していたからだろう。この広い応接間にはそれほど隠れる場所がないのだが、むしろ五十年間を外で過ごした事が圧倒的な経験として帰って来ているということか。
「知能の方もプロメテウスよりも格段に上ですし、これを補佐とすれば実験の成功も間違いなしかと。《玉璽》と共に回収できなかったのは残念の極みですが、例え《玉璽》がなくともかなりの戦果を上げて御覧にいれることかと」
「ああ、それだが発見したよ」
「は？」
「《玉璽》だ。発見した。例の後継者共々な」
　懐から写真を数枚取り出す。そこに映し出されていた人物と腰に帯びた魔導刀を見て唸るギュネイ博士。
「報告に上がって来てな、どうだ？」
「お、おそらく本物で間違いないかと思われます。これらは今何処に？」
「あの憎き公爵殿の邸宅だ。護衛として雇われたらしい」
「は、はあ、それは・・・・」
「計画を実行に移す前に勘のいいものが気がついたらしい。場合によってはお前の玩具共を借りることになる」
　その言葉にギュネイは紅潮していた顔を蒼白して空気を求める様に口をパクパクさせると「分かりました」と短く返した。

（・・・・この女）
「どうした、興味があるのか？」
言葉をかけられたイプシロンは肩をビクリと震わせると「いえ」と返して居ずまいを正す。
「お、おそらくは・・・・」
「ああ、うん、知っている」
「命令コードが生きていますし問題はない事と思うのですが・・・・」
「そうだな、だが、この場合は返って有効かもしれぬ」
そこで会談はお開きになった。
「それでは我々はこれで」
「ああ」
ギュネイ博士に引きつられてプロメテウスとイプシロンが後につく。
「ちょっと待て、そこの彼と少し話をさせてくれないか」
ペサロ侯爵が指をさしていたのはプロメテウスだった。
「は、はあ」
困惑気味のギュネイに「時間はとらせない、すぐに済む」と言うとギュネイは心配そうに言った。
「お、お気をつけください。それはまだ不安定ですので」
そして応接間にプロメテウスとペサロ侯爵の二人が残った。
「・・・・・」
プロメテウスは何も語らない。立ち上がり、部屋を出ようとしたままの直立不動の状態で固まり続けている。
（不安定だから気をつけろ・・・・か）
ペサロ侯爵は自嘲的な笑顔を浮かべる。
「おい」
「・・・・・」
しかしプロメテウスは動かない。
「レルクス」

その言葉を発した時のプロメテウスの変化は劇的だった。それまでどこか機械じみていたその挙動が滑らかになり、ペサロ侯爵の方に振り向くと柔らかい微笑みを浮かべて言った。

「父上」

ペサロ侯爵はその言葉を深く噛みしめた。吟味する様に、反芻するように聞いた。

「・・・・レルクス、変わりはないか」

「はい、父上」

その声は先程の無機質な響きではなく、年頃の青年としての若さと張りをもった声だった。

「時に父上？」

「何だ」

「アーマドゥス兄さんとゲイル兄さんはどうしておりますか、ああ、そう言えばこの度私に弟が出来たということですが」

「・・・・・・」

レルクス、プロメテウスの二人の兄が相次ぐ病死でこの世を去ったのは随分前の話だ。その後にアガート家の末弟は母親共々事故に巻き込まれて死んだ。

「いや、今は屋敷を留守にしている。リコリスはもう寝てしまったしな」

（やはり、か）

「リコリス・・・・・・」

「お前の妹だ、覚えておらぬか？」

家族の中で一番レルクスにに懐いていた末の娘、レルクス自身もかなり可愛がっていたはずだが、困った顔で「申し訳ありません。失念しておりました」と頭をかく。

「時に父上？」

「何だ」

「アーマドゥス兄さんとゲイル兄さんはどうしておりますか、ああ、そう言えばこの度私に弟が出来たということですが」

ペサロ侯爵は絶句した。
「あれ、おかしいな。これは前にも聞いたっけ」
記憶障害、いや、脳機能に障害が出ている。
「・・・・レルクス」
「はい、父上。ところでアーマドゥス兄さんとゲイル兄さんはどうしておりますか・・・・・・・・・・あ、は・・・・あはは・・・・あっはっはっはっはっはっはっははははっはははっははああっはっはっはっはっは母ははあはあはあはははははあはははははははははははははははあああははああはははっ！」
「もういい、黙れ」
「了解」
プロメテウスは止まった。まるで突然機能を停止した機械の様だった。
「もう行け」
粛々と、機械の様に滑らかに扉の向こうに姿を消す。
アガート侯爵家、最初からこんな風に歪んではいなかったはずだ。四人の息子と娘という子宝に恵まれて一族の行く末は安泰だとペサロ侯爵は考えていた。
（そして《プロメテウス計画》）
この計画のパトロンとして莫大な力を持つとされる《玉璽》を扱えるもの、適合した者を生み出し、近年にアガート家が事業によって得てきた経済力と武力が合わされば帝国内において絶大な権勢を誇る事ができるだろう。自分の息子、病気がちだった三男がこの適性があるという事が分かった時、迷うことなくその身を実験に捧げた。例え自分が人でなしだとしても、それが一族の繁栄に繋がり、自己の権勢の拡大に益を齎すならば問題ないと考えていた。しかし
（早まったか）

こうして《玉璽》を扱えるものを得ることは出来たものの、妻は末子と共に逝き、上の二人も後を追う様だった。家を継ぐ事が出来るものはいない。これでは血が絶えてしまう。

そのためにも必要なのだ。現皇帝の孫、次期皇位継承者、皇太子と目されるクヌート王子との婚姻を我が娘となされなければならない。仮に二人の間に子宝が恵まれれば孫の内一人はアガート家の存続のために降りてくることになるだろう。そして皇族と姻戚関係を結んだアガートはさらなる繁栄を約束される。

「そのためにも死んでもらうぞ、ユーリア・ド・レサリウス・ヴェルーナ」

第7話　悪魔の天秤

絵筆を持たなくなってどのくらいたつだろう。
ヴェルーナ家に設けられた部屋でオキツグはベッドの上に寝転がりながら天井を見上げ、ふとそんな事を思った。
（三年、いやもっとか）
こちらに来た当初はそれなりに描いていたと思う。しかしここのところはほとんど描いていない。たまに手慰みに落書きをする程度だ。
「随分錆ついたことだろうな」
技術的なものが。
だが、と考える。そもそもオキツグは自分の絵をそれ程上手とは思っていなかった。もちろん技術的にはそこらの絵描きには負けない自信がある。しかし、才能が、その成果が残る芸術の世界においてより潤沢な才能と奥深い技術を持った先人の作品に触れることが出来る機会は多かった。彼らに比べれば、と思ってしまう。
それでもオキツグの絵はそれなりに評価された。
「だけど、描きたいって思えないんだよな」
あの何かを白いキャンパスにぶつけたいという感覚はやってこないのだ。
（それもこれもお前のせいだ）
ベッドに立てかけてあった《白燐丸》だ。
この世界に突然召喚された。訳が分からないが自分と同じ境遇の人は少ないながらもいるらしい。一番不思議に思ったのは言葉が通じることだ。なんで日本語が通じるのかと疑問に思ったものだが、以前に出会った事があるイギリス出身という同じ漂流者の言葉を聞いて納得した。
『君は彼らが日本語を理解して話していると思っている事だろうが実は違う。私たちこそが彼らの言葉を理解して無意識化で自らの母

国語に翻訳しているにすぎないのだよ。君は英語が不得手と聞いたが私の言葉が理解できるだろう？』

頭の中に自動翻訳機がダウンロードされた状態らしい。もっとも、この世界は全て単一の言語で統一されている状態らしく、この能力が役立つ事は皆無だ。漂流者同士の間でしか共有できない疑問とその回答である。

《白燐丸》を手に取り掲げる。機関部と通常の日本刀よりも幅広で肉厚の刀身はかなりの重量を持っている。だいたい三キログラムといったところか。普通の刀が平均して八百グラム程度であることを考えるとこれはそれなりに重い。

よくわからない内に『先生』に拾われて鍛えられ、戦う事を強いられた時もそれ程違和感を感じなかった。怖いとは思ったがそれだけだ。それはただ単に自分自身について興味がない。その命すら斟酌しないという自棄に近い心情だったのだが、この《白燐丸》を受け継ぎ、自らの道を自らで定める時が来た時、それはあまりにも不誠実な事に思えた。

（でも、だからって何をしたらいいのか分からない）

だからこそ、それが分かる時まで何が何でも生きていようと、それを阻む障害があるならば全力で立ち向かおうと心に誓ったのだ。

その時コートのポケットにしまっていた携帯端末が震えるのを感じた。

「おっと・・・・はいもしもし、オキツグ・クシナですけど」

その電話からもたらされた情報にオキツグは驚愕した。

「ん」

女の香りが鼻腔を擽る。

朝、その気配を光として瞼の裏から感じたリュロンは眼を覚ました。

「・・・・朝だな」
頭が痛い。酒を飲みすぎたか。肉体強化を良くする前衛系剣導士であるリュロンは体内の毒素を無効化する生体操作術式も扱える。しかし、昨日はそれをせずにいた様だ。もっとも、酔う事が目的の酒を解毒してしまっては意味がないので当然と言えば当然だが。
そんな無意味な思索にふけりながら昨日流れ着いた安宿を見渡す。
「ん、起きたの？」
声は横からした。見るとシーツで体を隠しただけの女が眼を眠そうに擦って横になっている。何も着ていない。自分の体を見てもやはり何もつけていない全裸だった。
「昨日・・・良かったわ」
そう赤らめた頬で女は呟くように言った。
それを無視する様にベッドから降り立った。密色の肌に絹の糸の様な髪、長身ながらも引き締まった筋肉に女としての優美な曲線、そして美しいが峻厳な顔立ちの女戦士の顔。リュロンの立ち姿を見て女はまるで神話の化身の様だと感じた。
「行っちゃうの？」
「ああ」
そう言ってテキパキと下着をつけ、シャツをはおり、髪の毛と同じ色のスーツを身につけていく。靴を履き魔導大剣をを肩に担いだところで女に振り返る。
「お前もなかなかいい女だったぞ」
それっきり全く振り向かず、引かれる後ろ髪などないと言うかのようにリュロンは去っていく。その後ろ姿を見て女は諦めたようにベッドに身を投げ出した。

リュロンは同性愛者だった。こんな風に街で女を引っ掛けて宿に連れ込むなんてそう珍しい事ではない。昨日の、さっきの女は入っ

た酒場でシェイカーを振っていたバーテンダーだった。最初は客として話し、彼女の仕事終わりにに付き合って外に出た瞬間を狙って有無も言わせず唇を奪った。後は言わずもがなだ。

普段の自分の漁色を相棒は倫理が原子崩壊していると言っていたが、そんなことはないとリュロンは胸を張って言う。酒と煙草と同じで女は人生を潤す甘露だ。お前も適当な女は見繕ってみればいい、そういう風に言ったら何故か相棒は涙を流していた。いい気味だ。

「しかし、だ」

最近の相棒の自分を見る目がやんちゃな子供を見る呆れ果てた眼差しになってきた事は多いな問題だ。物凄く腹が立つ。もっともそれを表面に出してはその色を濃くするだけに留まってしまうだろうからして態度には断じて出さないが。

既に朝早い勤め人がスーツをまとい仕事場に向かっている。通りかかった駅前でサンドイッチの屋台を見つけたリュロンはそこで朝食を調達することにした。

「ＢＬＴ、コーヒーも頼む」

「あいよ、十スピルだよ」

ちょうど渡して熱いコーヒーを片手にサンドイッチに齧り付く。

そう、オキツグ、オキツグ・クシナ。リュロンは相棒の名前を反芻した。

リュロンはもともと軍属だった。祖国の、出身である部族を含む西方の民が超大国に盾つくために造った国、軍隊。その戦士だった。

軍隊、軍隊はいい。忠誠と誇り、この二つを忘れなければどんな戦場でも笑って戦い喜んで死んでいける。かつてのリュロンもそうであったが、ある時自分が所属していた部隊が全滅してしまい全てが変わる。ほうほうのていで自軍に逃げ帰って来たリュロンは待っていたのは軍法会議と厳しい尋問だった。

（私の忠誠は祖国には認められなかった）

全滅していた理由を指揮していた将官が全て自分に覆いかぶせようとしたためだ。

冗談ではない。情報漏洩による待ち伏せ。どう避けろと言うのだ。
声高に叫んだが認められず、敵軍の内通者の嫌疑をかけられ軍事法廷による死刑、銃殺を待つ身となった。そして今度こそ同胞を手にかけて軍事刑務所を脱走した。
祖国に対する忠誠を奪われ、誇りを失ったリュロンは流れに流れ、そして出会った。自らが剣を捧げるべき祖国に代わる主と見定めた相手に。
雪の様に白い肌に同じく雪の様に白い髪、そして蒼い双眸を飾るのは神々しさすら感じる透徹された微笑みを浮かべる美貌、そしてその白さの全てを否定するかの様に纏われた黒い和物の着物、全てが印象的な女だった。
軍隊という世界、そしてそれに見捨てられてから全てに壁を造り過ごしてきたリュロンにとってその女との出会いは強烈だった。恋だの愛だのが無縁の生活を送ってきたリュロンの初めての一目惚れだったのかもしれない。
（もっとも、あの人に剣など必要なかった訳だが）
結局、師として仰ぐ事になってしまったがそれでも良かった。
だが、師がある日突然オキツグを連れて帰って来るとそうもいかなくなってしまった。弟子としてオキツグを指導し始めた師の眼には確かに子を見守る母親の様な慈愛があった。もっともそれはリュロンにも向けられていたものだが得てして出来る長女はほったらかし、手のかかる末の弟に母親の眼が行ってしまうのは世の常である。敬愛する師であると同時に愛すべき女の寵愛を奪ったオキツグは敵だった。
『あの、リュロンさん、綺麗っすね。これ、俺って絵が得意なんで、リュロンさんモデルにして描いてみたんすけど・・・・』
そう言って差し出してきた絵を剣で細切れにしてやった次の日からオキツグは自分に敬語を使わなくなった。
全てが気に入らなかったオキツグだが、オキツグは恵まれていた。
それに一番最初に気がついた時は、とうとう自分は会得できなか

った氷凍系術式を容易くものにした姿を見た時だ。その光景に不条理を感じたが師はこう言った。

『才能ってのは天から与えられる。誰がどれを引くか分からないから面白いんだ』

ＢＬＴとコーヒーを全てを食べ、飲み干した頃にヴェルーナ家の邸宅についた。

「よう、お楽しみだったようだな」

門に背をもたれていた相棒、オキツグが気だるげに言葉を発した。

「ああ、いい女だった」

ぬけぬけとそう言うリュロンに深々と溜息をつくオキツグ。はたから見ればただの冴えない青年にしか見えないがそんなはずはない。

オキツグは《白燐丸》を師から受け継いだ。斬ったのだ。師を。事の次第を知って後から確認した記録映像を見ても未だに信じられない。

（大陸第九位、《氷王》を降した）

四年間を師のもとで強くなるために費やした。といってもたった四年だ。たった四年で自身を鍛えた最強クラスの剣導士を降すなど正気の沙汰ではない。

『天才ってのはね、単に努力して強くなれればなれるものじゃないのさ。そいつらは正しく天から与えられた力を振う悪魔みたいな連中。オキツグは《氷王》を継ぐために降り立った最高の器だよ』

師の言葉が今なら理解できる。この男は悪魔だ。理屈も過程もいらない。そう生まれついたのだ。悪魔に子供も大人も熟達も未熟もない。悪魔は悪魔だ。

「状況は？」

「見てわかんだろ、変わらずだよ。楽な事この上ないな。あと話が・・・」

疲れた様な、呆れた様な眼でリュロンに返す。何となく腹が立って拳を振うと生意気にもオキツグは後方回避でその拳を避ける。

「は、その手は食うかっ・・・・・お前、人の話を」

しかし技はそれで終わりではなかった。振った拳の勢いをそのままに後ろ回し蹴りがオキツグの腹部に炸裂する。

「ぶごげっ！？」

まるでボールの様に跳ねながら止まり、よろよろと立ちあがる。

「ぐ、げ、て、てめえ、何を・・・・」

「ふむ」

気が付いたら手が出ていた。不思議そうに開いた右拳を眺めると傲然と言い放った。

「その眼をやめろ。そう、それが言いたかった」

第8話　プロメテウス

「おお、おおおおっこれが、これがそうなのか！？」
休日の昼下がり、親子連れも多いショッピングモールの一画、ランジェリーショップでその声は響いた。
「み、見ろみるのだオキツグッ」
「ったく、どうしたってんだよお姫様」
ユーリアの呼ぶ声に女性下着店というアウェーを感じながらも姫の元に急行する。リュロンは完璧に知らん顔を決め込んで店の外で待っている。女の癖に憎々しい。自分と代わって欲しい。
「こ、これだ！」
差し出したのは極端に布地面積が薄く、かつ毒々しいピンク色の女性物の下着（下）だった。丁寧に両脇をひもで結ぶタイプのそれはどこか扇情的で生々しかった。
「こら、子供がこんなもんにさわっちゃいけません」
周りの女性客の眼が痛い。
なぜ自分はこんな処でこんな事をしているのだろう。それもこれもこのお嬢様がお買い物に行きたいなどと言い出したからだ。駄目だと言ったらこっそり抜け出そうとしたところ現行犯。きりがないので連れて行ってしまって満足させようと言う事だった。
「ぬうう、これは凄い。凄いのお！」
「何、お前、勝負すんの？」
「ぬ、勝負とな？」
「それつければ無敵だよ。夜の八回戦ボーイだよ」
投げやりに受け答えするオキツグに「そうか！」と満面の笑みを浮かべるユーリア。するとちょいちょいとかがむ様に指示される。
「なんだって・・・・」
「よし、これでお前も無敵だな！」
屈んだ途端に頭の上から被せられた布切れ、勝負パンツを摘む。

「お前ね・・・・」
「おお、、勇壮な事この上ないな！」
本当にきらきらした目で見上げるユーリアを見て思わずめまいを覚えた。
（誰だ、この子にこんな教育施したのは・・・・・）
「これは被るもんじゃないよ」
「ぬ、脱いでしまうのか？」
「当り前でしょってか、あ、まって店員さんっ通報しないで！」
ドン引きの店員さんと女性客をなんとか説得して店の外を出るとドッと疲れが押し寄せて来た。
しかし厄介事は絶えない。明らかに血縁がないと思われるユーリアを連れたオキツグに巡回していた警察官が職務質問。腰に帯びた魔導刀のこともあり危うく交番まで連行されそうになった。
「ああ、引き籠りになりたい」
「ぬう、それは何だ？」
「何者にも指図されず、何事にも動じない王族の如き高貴な職だ」
休憩用に設けられた椅子に座りながら自動販売機で買ったジュースを啜る。この程度は奢ってやろうと思っていたら、ユーリアはあっという間に財布を出して買った二本のジュースの片方を差し出してきた。六歳児に奢ってもらう大人、大分情けなくなった。
「ところでリュロンと言う者の方はおらんな」
「だいたいクラスに一人くらいいるだろ。ああいう集団行動できない奴」
「クラス、学校のことか・・・・」
妙な言葉に怪訝を覚えるオキツグ。
「学校、もしかして行った事ないのか？」
考えられる事だった。何より刺客の存在も考えられる状態では。
「うむ、妾は貴族じゃ。基礎教育課程の終え方にもある程度の自由がきく。ここのところは家庭教師ではなく執事のドルスターに教わっておる」

あの硬質ながら有能そうな老執事の顔が思い浮かぶ。確かに彼ならば何事も如才なくこなせそうだ。

（学校か・・・・）

家に居場所がなかったオキツグにとって唯一の居心地はよかった。絵を描く楽しみを覚え、友人と語らい、いいことばかりではなかったが自分にかけがえのない物を与えてくれる空間と場所だった。

（早く解決するといいな）

そうすればこの娘も学校に通う機会を与えられるだろうか。

「あの執事、ドルスターとは長いのか？」

「まあそこそこじゃな、あ奴は父の代からヴェルーナ家の事業を手伝っておる。もとは執事ではなくてな、父の部下だった男じゃ。経済特区に設けておった社の経営を任されておったのじゃが昨年とうとう父上が亡くなられて妾のために戻って来てくれたのじゃ」

年に数回ある知り合いのお爺さん程度の感覚だったらしい。会社の経営を他の者に任せて実質的主不在状態のヴェルーナ家を切り盛りしているのは彼だそうだ。

「おじい様はとうの昔に亡くなられておるから、そうだのう・・・」

良き教師にして、良き育て親。決して甘やかさないがその中にも伝わる誠実さがある。

「そんな執事じゃ」

ドルスターを語るユーリアはどこか自慢げに語っていた。

（父親代わりか・・・・）

自分は家族と共に暮らしていながら、その心の距離は遠かった。父の叱責の声に怒りと失望と呆れ以外の感情を見いだせた事はとうとうない。あるいはそれなりに気にかけていたのかもしれないが今更確かめようがなかった。

「それよりも聞きたいのう」

「何がだ？」

「妾の身の上話はここまで、次は主が話すがよい」

偉そうな態度の割には眼がキラキラしてるし、根もかなり素直な

娘なのだろう。外の世界を旅してきた話に興味津津と言ったところか。

「しょうがねえなあ」

この間倒した龍の話、いや地味すぎる。そうだあれがいい。あの洞窟で倒した蜘蛛の魔族の話が。

『それで俺達は親玉の大蜘蛛を倒したってわけよ！』

『おおっ凄いのう、カッコいいのう！』

『でもそれじゃあ戦いは終わらなかった。なんと巣には千にも及ぶ蜘蛛の卵が犇めいていたんだ』

『ふむふむっ』

『爆薬を仕掛けて一気に始末しようって話になったがそれじゃあ間に合わなかった。なんと卵が一斉に孵り始めてしまったんだ！』

『なんど！』

『蠢き犇く子蜘蛛達、突然襲い来る無機質な複眼！』

『気持ちが悪いのう、おぞましいのう！』

仕掛けた盗聴器から会話を盗み聞きながら、遠く離れた位置で壁にもたれるリュロンは思わず舌打ちをした。

（あいつ、べらべらと・・・）

仮に刺客が潜んでいるとしたらこの会話を自分以外の人間が盗み聞いている可能性も高い。どうという事はないが、その者達に自分達の過去を聞かせるのは抵抗があった。

くだらない会話を聞き流しながら往来に眼を向ける。

リュロンは目立つ女だ。容姿が優れているという事もそうだが並みの男をゆうに超える長身に芸術的にまで整った肢体。そして男物の白いスーツ。しかし、目の前を横切る人々がリュロンに眼を向ける事はなかった。リュロンが気配を絶っているということもそうだが、本当の理由は今まさに握られている魔導大剣の柄にあった。

「フェロモンによる意識操作、偽装は完璧か」
生体系術式《擬態化香》フェロモンを介した意識操作による偽装のための魔法だ。といっても隠れること以外にはほとんど使えない上に魔導抵抗の強い剣導士には通用しないという代物だが。目立つリュロンが日々の生活を送る上ではこの上なく役に立つ術式だった。
リュロンの眼の前を人々が通り過ぎていく。家族と、恋人と、友人と語らい歩いて行く。その光景にふと違和感を覚えた。
（何だ・・・これは）
人々の進む方向が全て一緒だった。向かいの通りを見てみるとこちらと同じように全ての人が流れに逆らうことなく進んでいく。まるで見えない流れがあるかのようだ。
そして遠めに見えるオキツグ達のいる場所には人が減り、空白地帯が出来ていく。
（これは・・・《人払い》か！）
警察などが被疑者確保に使う術式が頭に浮かぶ。間違いない。敵が仕掛けようとしている。しかもこれほどの人数を動かしているとなると襲撃者の規模も四、五人ということではなさそうだ。

パアアアアアアンッ

飾られた天窓のステンドグラスが派手に割れる。その下にはオキツグとユーリア。
「しまった！」

「しまった！」
そんな声が聞こえた気がした。
天井のガラスが割れた瞬間、咄嗟に抜いた刀を天に掲げて極寒の風を発現させる。

「《氷閻刀・雪風》」
突風に煽られた襲撃者数人は地面から押し戻される様に吹き飛んだものの難なく一階フロアに着地した。
「まったく、こんなところでこんなことしやがって」
しかし口ほどに余裕はない。オキツグの腰にしがみつく様にしているユーリアがいる状態で氷凍系術式を全力で使えばオキツグはとにかくユーリアは命にかかわる程の凍傷を負うだろう。
そうしている間にもそこらじゅうからわらわらと襲撃者と同じ黒い野戦服にガスマスク、魔導剣という格好の者達が出てくる。ガラスのレンズの向こうに非友好的な敵意を感じながらも周囲の包囲網を狭めようとする黒い影に対して壁を造った。
「《氷閻刀・玉壁》」
先程発動した雪風の発動の変化、発現した風を自分の周囲に旋回させることで風圧と低温の壁を造る。
「・・・・・寒い」
震える様にユーリアは言った。魔導耐性がある剣導士と違い一般人であるうえ少女となれば体温の低下は免れようがない。
「ちょっと我慢しろ」
オキツグは自らのカーキの軍用コートを脱いでユーリアに着せる。
「もう少しで応援が来る」
「ぎゃあああああああああああっ」
その答えは敵の断末魔の声として響いた。
見れば風の壁の向こうで頭から、胴から真っ二つにされた人体と吹きあがる血。
「ここまで接敵されて気がつかんとは無能な軍隊だ」
傲岸に言い放つリュロンは血に濡れた大剣を握りしめて戦場に降り立った。
「この娘を頼む」
オキツグは雪風を解くとユーリアを引き渡す。
「こいつらは俺がどうにかする」

自分の足では襲撃者達を振り切って安全域までユーリアを連れていく事が出来ない。妥当な判断だった。

「・・・私としては久しい戦場の機会だったのだがな」

「お前の戦闘狂も今は我慢しろって、その内機会はいくらでもあるさ」

渋々とリュロンは頷いた。跳躍して一気に吹き抜けの二回へ、そして襲撃者が破ってきた天窓を通って外に逃げる。一瞬襲撃者も追跡しようとしたがリュロンの身体能力を見て諦めたらしい。すぐにオキツグに向き直った。

前衛系剣導士と後衛系剣導士は歩兵と戦車の関係に似ている。この言葉から分かるように、移動砲台たる後衛系を前衛系が頑健な防御力と再生能力で守り、盾になりながら戦うのだ。普通は後衛系一人に複数人の前衛系がつくがオキツグにはリュロンが一人。それをこなせるだけの圧倒的な実力がリュロンにはあったのだ。

（せいぜい人間の限界が限界ってとこか）

敵の能力的な上限を見極める。そして・・・

「足手まといはいなくなった。いつでもいいぜ」

魔法で加速された知覚は戦闘準備態勢だ。既に襲撃者達の息、肩の揺れすら一部の隙もなく認識範囲内だ。

「こっちから行かせてもらう、《氷閻刀・朝星》」

オキツグの頭上に氷の球体が現れる。それに生えた棘がまるで爆発する様に成長して放射線を描いた。

そして襲撃者達も術式を完成させまいと間合いを一斉に詰めてくる。

（全部前衛系か・・・）

砲台の後衛系はいないと見た。当然かもしれない。戦場でもない限り破壊力のある攻撃など必要とされないし、剣導士全体で見ても前衛系の方が圧倒的に多い。軍隊も兵士に施す魔法教育は前衛のそれを採用しているらしい。先天的適性による影響が少ないからだそうだ。

周りのガスマスク達が魔法で強化された速度で一斉に距離を詰めた。
「爆破」
オキツグの呟きに応じる様に朝星は爆散、棘を周囲に放った。狙いなど付けていなかったので殆どが外れたが数名が巻き込まれて悶絶していた。
「《氷閻刀・剣山波濤》」
続いて周囲に警戒するかのように氷の剣が発生、展開する。
慌ててオキツグに距離を詰めようとするがもう遅い。
「発射」
フレミング左手の法則で放たれた超速の氷槍はすぐに空気摩擦で燃え尽きてしまうものの、その衝撃波が絶対的な壁となって辺りに放たれる。
残った数人も警戒しながらも距離を取り始めた。
(潮時か)
しかし妙な感触が残る。練度は高いものの温い攻撃、そもそも勝つ気がないとしか思えない。
その瞬間、強烈な圧迫感に襲われてその場を飛び退く。
「ッ・・・・・」

グボッ

そしてオキツグが立っていた場所が赤色に加熱されるとマグマの様に溶け落ちた。爆発
して床に大穴が開く。
「いい、お前らは下がれ、《氷王》は私が相手にする」
その穴から人が飛び出てくる。
「私にしか相手に出来ない」
絶対的な自信と共に言い放つその男は燃え盛る様な赤い髪に堂々とした体躯、片手に地金が赤いサーベルを握り、襲撃者と同じよう

な野戦服を着ながらも露わにした顔から覗けるのは自らに対する絶対的な優越。
「この私、《焔王》プロメテウスが相手になろう！」
プロメテウスと名乗った男を中心に陣形が再構成されていく。この男が真打か、そんなことより
「《焔王》、ってことはそいつはもしかして・・・・」
「そう、《焔の玉壁》だ」
掲げたサーベルから焔が噴き出す。それらは天井に向けて吹きあがると変形、一匹の焔の龍となりオキツグに襲いかかった。
「くそ！」
並みの炎熱系の使い手ではない。この技のキレ、威力を見るに間違いなくプロメテウスは《焔王》と名乗るに値する使い手だった。
（まずい・・・・）
自分の氷の技と相克する焔。他の者達に対抗して張っていた寒風の壁も弱められてしまう。
咄嗟に氷の壁をはって防いだが、一撃で殆どが水となった。こんなことは初めてだ。
（相性が悪いか・・・・）
「はっはっは、口ほどにもないな《氷王》！」
プロメテウスは焔の風をなびかせる。それはまるで天上人の羽衣の様だった。
（これは凌ぎきれない！）
「氷閻刀・雪風」
絶対零度の突風がプロメテウスに向って吹き荒れる。余裕綽々で焔の壁で受けるプロメテウスだがオキツグはその風を緩める事はなかった。
「何を無駄な事を！」
しかし変化は次の瞬間訪れた。
ゴフッ

水蒸気爆発だ。寒風に混ざった雪が蒸発、急激な熱膨張で大爆発が起こった。辺りのブティック、雑貨やの商品やガラスを吹き飛ばす。もうもうとあがった煙に紛れてオキツグは包囲網の一部を切り崩してその場を後にする。

ふと振り向くと遅れて追跡しようとした追っての姿。魔法で再び吹き飛ばして逃走に掛る。

頭上を見上げれば先程リュロンが逃げて行った穴。しかしあまりにも遠い。自分に身体能力では難しい。

「・・・・・」

その向こうに人影が一つ。ガスマスクにフードを目深にかぶり、全身をコートで隠すと言う変質的な服装。新手かと一瞬だけ身を固くするオキツグだったがその人影が仕掛けてくる様子はない。

再び逃げる。今度は振り向かなかった。

ガスマスクの人影、イプシロンはオキツグの姿が見えなくなるのを確認すると穴から飛び降りた。地上三階以上の高さだったが危なげなく着地する。

「逃げられましたね」

その言葉は水蒸気爆発による霧が晴れて視界が自由になったプロメテウスにかけられていた。逃げられた事に気がついたプロメテウスはそのことに若干不満そうな様子を見せていたがその結果を招いた自分の実力に満足を覚えたらしい。機嫌が良さそうだった。

「何だ、お前か」

「どうします、追いますか?」

「いや、予定通り帰投する。敵への示威行為も済ませたしな」

プロメテウス。その在り様は以前のペサロ侯爵家でのそれとはまったく違っていた。虚ろな瞳に意思の焔が宿り、その身に宿すは絶

対的な自信と実力。
（哀れな）
イプシロンは知っている。プロメテウスの高揚は薬によって調整されたものだ。しかも剣導士として実力を高めるために炎熱系術式に対する適正を高めている。それも薬剤的な手段によってだ。どう考えても長くはもたない。
「撤収だ」
号令によって撤退準備を始める。兵士たちを余所眼にイプシロンは先程のオキツグを思い出す。無理して戦わず、逃げることも辞さないフットワークの軽さ。やたらとプライドが高い者が多い高位剣導士には少ないタイプだ。
既に撤退の殆どを終えたいた。隊員の内の一人が自分を待っている。
「すまない、今いく」
まるで大震災にあったかのようなショッピングモールを残して今宵の幕は閉じた。

第9話　玉璽

現場は騒然としていた。
「何だこりゃ」
帝都警察の対組織課、時にはテロリストも相手にする刑事であるデカルト・マッケンローは今しがた連絡のあったテロ行為のあったと思しき事件現場のショッピングモールに来ていた。
衝撃にガラスを破られ、高熱に溶かされ、様々な破壊の痕跡が見られるそこは建物として存在していられるのが不思議な程だった。
「詳しくは解析に回さないと分かりませんが」
若い後輩が報告に来た。
「恐らく剣導士同士の戦闘ではないかと」
「は、それでここまで壊れるか？」
デカルトは後輩の言葉が信じられなかった。このような破壊、この眼の前の破壊されて溶岩の様に煮つくされた光景が人の手によるものだと信じたくなかった。
天変地異
「まるでラグナロクじゃねえか。いつから神は奇跡を安売りする様になりやがったんだ」

突如として襲われたショッピングモールを抜け出して軍と警察の車両が現場を囲む中、そこを後にしたオキツグはヴェルーナ公爵家に戻ってきた。
ドルスターに案内されていつかの応接間に入るとそこにはリュロンと横に座ったユーリアの姿があった。
「お主、本当におっ○いが大きいのう」
一体何の話をしているのだと脱力しかけた。きわめて女性的だと

評価されたリュロンもやや困り顔で相手にしている。
「この前勉強したのじゃ、おっ○いの大きさは女としての価値の大きさだと」
「そうか、しかし、大きいのもそれなりに不便があるのだがな」
と言って自らの重みのあるそれを掌で抱えるリュロン。
くわっ
「ん、どうしたオキツグ？」
「い、いや、何でもない」
その魅惑的な光景に一瞬ではあったものの視線を絡みとられたオキツグは内心の焦りを隠す様に否定した。
「胸が大きいのも困りものだぞ」
「ぬう、何故だ？」
「あう下着は少ないし、それに・・・・」
掌で己のおっ○いを鷲掴み、持ち上げる。
くわっ
「・・・こんな風に男の視線も五月蝿いしな」
二人の視線が突き刺さる。一人は好奇、もう一人は呆れと嘲笑だ。
「しかしオキツグのおっ○いに対する食いつきは凄いの。街中でもあそこまで露骨にエッチなのは見かけんかったぞ？」
「それは奴が童貞だからだ」
「ど・・・うてい？」
な、何を教えているんだ！
「童貞とはなんだ、オキツグ？」
少女の無垢な視線が痛い。喘ぐように息をしてなんとか返答の言葉を紡ぐ。
「え・・と・・・続ければ、魔法が使えるようになる仕事・・・・・だよ」
見ればリュロンはサディスティックな笑みを浮かべてこちらを見ている。あの女は人が困っているのを見るのが大好きなんだ！
（あの性格破綻漁色女王めっ）

「ま、魔法使いっ」
ユーリアが眼を輝かせている。
「わ、妾も」
「ちなみに男しかなれないからな」
リュロンの一言で傍から見て気の毒な程ユーリアは落ち込んだ。
「しかし一つだけ方法がある」
「な、なに、それはなんじゃ！」
オキツグは話題がよからぬ方向に向かっている様な気がした。もっとも、注意が自分からそれた今、ここで再び注目を集めるのはよくない。保身に走る。
「それはバベルの塔建設！」
気合い一閃の一撃の如きだった。ドドンと胸を張って・・・・
「いや、もう見ないからね」
「「？」」
「皆様方、お茶のお時間です」
「ぬう」
「そうか、戴こう」
二人の前にカップが置かれて紅茶が注がれる。
「おいお前も早く座れ」
リュロンだ。
「でなければドルスターが世話を出来ないではないか、魔法使い殿」
ぐぐと言いたい事の全てを飲み込んで着席した。

ここに来るまでの全ての経緯を話した。突如として《焔王》を名乗る者が現れた者、その者が王にふさわしい実力を持っていた事。
「厄介だな」
嘆息するリュロンの膝を枕にユーリアは寝てしまっていた。既に辺りが暗いにしても命を狙われたその日に熟睡できるという神経は

大物と言わざる得ない。
「しかしよくぞ御無事で、お嬢様をお守りいただいた事に関しても感謝の極みです」
「だけどどうするか、ドルスター、ただの敵以上に厄介なのが出て来ちまったからな。そろそろ本格的に国外逃亡も視野に入れんと」
権勢を維持できなくなった貴族の逃げ道などただ一つだ。
「はい、既にいくつかの用意は済ませておりますが、後日に行われる現皇帝陛下の生誕祭には出席しませんと叛意ありの疑いをかけられてしまう可能性もあります。上手くすればその場で陛下に窮状を訴えることも公爵という地位をもってすれば不可能ではありません」
来週だったか、帝都アクロポリス総出で祝う国家元首の生誕はそのまま国民にとっての祭りでもある。一年を通してこれほどの大きな祭りは国内外にもそうはないのだ。
（まあ、こんだけ派手にやればすぐに仕掛けてくる事はないだろうけど）
ひとまずの目処が立って安堵する。幾らなんでもずっとこのままは御免だった。
（それよりも・・・）
リュロンが膝の上で寝ている少女の髪を梳いていた。その優しげな手つきをやや意外な印象を覚えた。
「ん、何だ？」
「いや、お前、子供とか嫌いじゃないんだなって」
「好きではないよ、寝ているときを除けばな」
ユーリアはリュロンを気に入っている様だった。強い女、自らの理想の形として憧憬をもって見ているのだろう。
（こんな女になられたら周りが苦労するだけなんだけどな）
断じて口には出さない。それは肉体的、精神的苦痛として帰ってくるからだ。
「《焔王》だったが・・・・オキツグ」
「何だよ」

「お前なら倒せるのではないか？」
その言葉は疑問の形でありながら断定の響きを持っていた。
「お前はたった四年で我らが《氷王》を超え、その名と位階を引き継いだ。話を聞く限りだが、そのプロメテウスという男がお前より、ましてや我が師よりも腕が立つとは思えないのだが」
「・・・相性が悪かった。それに、俺はあんな奇跡、二度と起こせない」
沈黙は長きにわたって続いた。
「お前の位階は第九位《氷王》、二桁以内の者にしか与えられない二つ名を持ち、さらに《王座》と呼ばれる一桁台の位階を持つ。お前よりも上の位階を持つ者はマリア聖教の大僧正第五位《聖王》と東方の武侠王、第三位《豪王》くらいなものだろう。そんな者達と同等の力を持ち無名とは・・・やはり何かあるか」
リュロンの膝の上でユーリアが身じろぎする。
「う・・・うん・・・なんじゃあ？」
寝ぼけ眼を擦りながら辺りを見やる。
「そろそろお休みになられた方が良いかと」
「う・・・む、そうじゃな。思わず寝てしもうた」
体を起して椅子から立つ。ややふらつきながらドルスターが恭しく開けたドアを潜りざまにこちらに振り向いた。
「今日は助かった。感謝するぞ。それから、また連れに行っとくれ。妾はまだソフトクリームなるものに挑戦しておらんでの」
一礼するドルスターと共に扉の奥に消えた。
「・・・なんて太い神経した餓鬼だ」
「うむ、いい戦士に育つだろう。将来が楽しみだな」
こんな女が二人もいたら敵わない。言葉に出して言えない思いが頭を過った。

「がああああああああああああああっ！！」
苦悶の叫びが室内に響き渡る。
（日に日に苦痛が強くなっているようだ。そろそろ限界か）
プロメテウスを擁する研究室の一室で台座に乗せられ手足を革のバンドで固定された《焔王》相手に悪戦苦闘するギュネイ博士を見ながらイプシロンは心の中で呟いた。
プロメテウスの強さの要因の一つは遺伝子レベルの選抜もあるものの、薬剤、外科的処置を含めた後天的かつ強引なレベルアップだ。強さというものを短時間で得られる代わりに襲いかかる苦痛も想像を絶する。加えて脳にも大きなダメージを負うらしい。考えてみればここのところのプロメテウスは鎮痛剤を飲んでいないと常時戦闘状態の興奮をもったまま何をしでかすか分からなかった。今も恐らく薬が切れた反動だろう。
「くそ、こいつは割と持った方だったんだがもう限界か！」
怒鳴り声を上げながらギュネイがこちらにやって来る。
「ご苦労様です」
「ふん、次は貴様を実験台にあげてやろうか」
ギュネイはペサロ侯爵の前の平身低頭をどこかにやってしまった様な偉ぶり様だった。イプシロンは対して驚かない。自分よりも偉い者の前では額を擦りつけんばかりにひれ伏し、そうでない者には侮蔑の感情しか持たない小人であることを知っていたからだ。
「私の役割は彼、《氷王》とプロメテウスの戦闘を補助する事です。それ以外は契約範囲外です」
ガスマスクの裏から放つ声に醜い顔をより一層しかめる。
「それとも命令コードが生きていたなんて嘘っぱちだった事をペサロ侯爵に教えて差し上げましょうか？」
「くそ、どいつもこいつも馬鹿にしやがって！」
忌々しげに吐き捨てる。
ギュネイ博士がペサロ侯爵に主張した命令コードなど存在しない。イプシロン計画の話も事実無根、荒唐無稽な嘘話。ギュネイ博士が

あまり順調とは言い難い実験を繰り返して窮した状況にあるという事を知り手を差し伸べた、のでは勿論なく、彼らが彼の《氷王》と接触する可能性を見込んで利用するために接近したのだ。

「そんなに《氷の玉璽》が欲しいのか！」

彼の者と会いまみえた時、仮に勝利した時の王の剣の所持権を対価に力を貸しているのだ。イプシロン、便宜上そう名乗っている女は氷凍系術式の使い手だった。

「彼は先代の《氷王》が振った、氷凍系術式を戦闘用に編みなおした魔法戦闘術の継承者、相棒の《剛剣》リュロンのことも考えれば私だけでは心もとない。それはあなたも同じの筈です。あの未完成の《焔王》もどきではペサロ侯爵が納得するとは思えない」

「・・・くそ！」

忌々しげにその場を去って行った。

見ればプロメテウスも穏やかな眠りについている。

「哀れな」

自由はおろか、自意識すらも薬で濁らされ、目覚めれば戦闘の快楽か苦痛のみが襲い来る。彼は人間として扱われていなかった。

《玉璽》を持つ者には王たる資格が与えられると言う。これはつまり等級制度における上位一桁台の王座と呼ばれる位階を手にするほどまでの絶対的な力を与えられる事を意味している。しかしそれは資格のない者が手にした時、その者を不幸のどん底までおいやる魔剣でもあった。

（それに、あれらはそんな簡単なものではない。魔力を増すとか、魔法の構成が劇的にち密になると言った様な安易なものでは断じてない）

イプシロンは知っていた。ギュネイ博士の実験が中途半端に終わる訳を、解決方法などありえない事を。しかし言わない。ここで辞めてもらっては困るのだ。それでは《氷王》と戦う機会がなくなってしまう。

女、イプシロンは仮面の奥で静かに笑う。それはまるで愚かにも

天上から落とされた糸を引きちぎる咎人をあざ笑うかのようだった。

第１０話　宴

皇帝陛下生誕祭。民草には皇誕祭とい名前で親しまれている祭りは王が代替わりするごとに日にちを改められ続けてきたものの、その規模、賑やかさから国内外問わずに参加客がやって来るほどの熱烈な祭典だった。

「おう、絶景かな！」

オキツグの肩車でご満悦のユーリアは人ごみに紛れながらも前方に見える御簾に隠れた皇帝陛下が引かれる馬車を眺めながら能天気にのたまった。

御簾越しに見える皇帝が手を振る姿に喜んで返しながら熱狂する市民に揉みくちゃにされる。

「皇帝はアイドルかっての」

噂を聞くに紛れもない賢王。数十年前の戦争時は自ら陣頭指揮をとり、民に善政をしく老王の生誕を祝うべく国中から人々が集まるらしい。

そう、英雄なのだ。

飾り立てられた騎馬隊が通るメインストリートを人々が囲み、さらにそのわきでは出店が稼ぎ時と言わんばかりに商売に励んでいる。

（それにしてもあいつは何処に行ったんだ？）

姿が見えないリュロンは相変わらず単独行動だ。

「お前、今日は夜もあるんだから勢い出しすぎんなよ」

「うむ、分かっておる！」

この日中のパレードの後に夜、宮廷にて有力貴族を招いたパーティがあるのだ。公爵家の跡取りであるユーリアはこれに出席せねばならない。加えて狙われている身で祭りに参加するなど言語道断と思ったオキツグだったが、逆にドルスターやリュロンの弁によると皇帝の行進パレードの最中にしかける程命知らずではないだろうとのこと。実際その気配はなかった。

『仕掛けて来たら来たでいいのだ。皇族を中心として近衛も本気になるだろう』
餌にされるオキツグに身にもなって欲しい。

通りから少し離れた路地裏の酒場。普段は夜からのこの店も祭りの今日は太陽が高い昼間から客に酒を振舞っていた。
そのカウンター席で一人酒を舐めるリュロンは、迫力のある長身の美貌で辺りに存在感を発していたせいか、酔漢に何度も声をかけられた。立てかけてあった魔導大剣ラハートをちらつかせると青い顔して逃げていく。確かにリュロンは美しかったが、それ以上に殺意を感じる程目つきが鋭い。普段であれば近寄ってくる事すらないのだが、祭りの浮ついた空気に乗せられて軟派が後を絶えない。そもそもリュロンは男に興味がない。
「となりいいでしょうか」
声がした。涼やかな響きを持つ声のぬしを見れば黒いパンツスーツに、黒い手袋に頭にはフードを被り、顔の上半分を覆い隠す様なサングラスをかけた姿の女。
「御免なさい、この格好、私日差しに弱くて」
フードの間から垣間見える白い肌が網膜の裏に焼きついた。
すっと自然な動作でリュロンの隣に腰をかけた。バーテンダーに同じものをと注文すると出てきた酒をあおりながら女は口を開いた。
「女一人じゃ心もとなくって、お相手して下さいますか？」
しかしリュロンは言葉を返せなかった。
「あ、あなたは・・・・・・」
狼狽した、喘ぐような声で紡いだ言葉だったが、形にはならない。
「あなたは・・・・・死んだはずだ」
「あら、もうばれてしまいましたか？」
諦めた様にフードとサングラスを外す。そこに現れたのは白く透

き通るような肌に生糸の様な髪の美貌の女だった。
「案外早かったですね」
その人物かつて師と仰ぎ、リュロンにとっては想い人だった女。
「『先生』・・・・・」
しかしあまりにも印象が違った。口調と言い、表情と言い、かつての洒脱ながらも世捨て人の様に枯れ果てた目とは違う。人目を引く美貌を覗けば表情と言い、仕草と言い、声と言い普通の女だった。
「そうか《擬態》・・・・」
「偽物っていいたいのですか？」
まるで氷の妖精の様な美貌が周囲の視線を集める。リュロンが睨みつける様にするとばつが悪そうに眼をそらした。
「正真正銘の本物なんですけどね」
手櫛で髪をかき上げる仕草と言い、リュロンの知るものとは大分違っていた。
「あの子も、オキツグも元気にしている様で何よりです。この間見かけましたよ？もっともあちらは気がついてなかったでしょうけど」
リュロンは言葉を発する事が出来ない。
「さて、血が繋がっていないとは言え妹分の顔をせっかく見に来たのだから明るい顔を見せてほしいものです」
わずかに白い美貌が微笑んだ気がした。
「・・・なんでこんな所に」
自分でも驚く程硬い声が漏れた。まるで悲しむように眉を下げる白い女。
「悲しいですね。あのユーリアという少女にはあれ程慈愛に満ちていたというのに」
「・・・・・」
「しかし当然ですか、あの少女は今回の仕事の要、戦う理由とも言うべきものです」
この女はなんだ。明らかに自分を詳しく知っている。しかしかつての師と言うには何もかもが違いすぎる。

「あなたはいつも戦う理由を自分以外の何かに預けてきた。一番初めは祖国、二番目は私、そして三番目は・・・・今はあの少女と言えるかもしれないけれど。そもそもの剣を握る理由は、誰を守りたいのでしょうね？」

「黙れ」

「考えずとも分かろうものです。そしてあなたは誰かにもたれかかっていないと生きていけない。それを傍で支えて・・・・」

「黙れと言っているっ」

押し殺したような声のリュロンの恫喝を女は涼しい顔で無視した。しばしの沈黙。女は笑みでリュロンは怒りと焦りと苛立ちと、様々な感情が混ざった表情で。

「あの子、オキツグにもこまったものです。オキツグは自分の事を平和主義者と思っているようですし、事実彼が暮らしていた祖国は平和だったのでしょうが、その本質は限りなく暴力的なそれに近い」

慈愛に満ちた表情で息子の通信簿を見る様な目つきで女は語る。

「でなければ突然切った張ったの世界で生きていく生存意欲など起こるはずがありません。平和な人間が武器を持つ事は出来ないんです。使う事なんて論外、あの子は自分を勘違いしている様だったから・・・・・」

数枚の紙幣をカウンターに置いて席をたつ。去り際の振り向きざまに女は硬質な顔をふっと緩めると笑顔でこう言った。

「オキツグには私の事は内緒ですよ？」

「何故だ・・・・」

絶望に満ちた声で虚ろに呟くギュネイは眼の前の処置台の上で横たわる躯を前に茫然と立ち呆けた。

「何が、何が行けなかった」

研究室にはギュネイ一人だ。いや、一人になった。

躯、物言わぬ亡者となり果てたプロメテウス。この兆候は随分前からあった。薬と外科的手術による強引な魔力の引き上げと《玉璽》への適合。つい数分前に異常をきたし処置も空しくプロメテウスは死んだ。

「くそ、まずい、まずいぞ」

実験体が死んだ程度で悲嘆にくれるギュネイではない。しかし、パトロンであるペサロ侯爵からじきじきに調達した人材を完成間際に死なせたとしたら、あの非道な侯爵はギュネイを決して許さないだろう。

でなければ自分の息子を実験に捧げるなんて狂気に満ちた真似出来る筈がない。

ガタっ

焦りと動悸で俯いていたギュネイの眼の前でプロメテウスは突然起き上がった。

ここで神の奇跡を信じる程ギュネイは楽観的ではなかった。心電図が再び鼓動を刻み始めるが激しく不規則だ。そして

ゴフッ

手術台からプロメテウスを舐める様に焔が噴き出す。立ちあがったプロメテウスは傍らにあった《焔の玉璽》を手に取った。

「な、何をするつもりだ」

「殺す殺す殺す殺す」

ぶつぶつ呟く様に、胡乱な瞳で辺りを睨みつける。

「いったいどうしたと言うのだ！」

背筋を貫く悪寒に襲われてギュネイはさっと身を引いた。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す・・・・・

あは、あっははははははあははっははははははあっははは

ははははっ！」

可笑しそうに笑った。異常、実に異常だった。確かにプロメテウスは生き返った。脳波も心電図も反応はある。しかし、これはまともな人の笑い方ではない。瞳孔を開いて涎を垂れ流して狂人の如く咆哮する。

「あひゃあっ！」

プロメテウスは駆け出して壁のコンクリートを炎熱で突き破る。後には熱でどろどろに溶かされた機材と茫然としたギュネイ博士が残された。

「まずい、とんでもない事になってしまったっ」

プロメテウスはその性質上、攻撃性を持てる相手を極端に絞り込んでいる。言わば安全装置をつけた状態だが、今の様子を見る限りでは外れてしまっている。しかし、その頭の中に任務上で得た戦闘経験、その敵に対しては攻撃させるためにプロテクトを限定的に外しておいたのだ。そして今、その人物を追いかけるべく外に出たのだとしたら・・・・

「わ、私はなんて事をしてしまったんだ。これでは大罪人だ！」

「寒い寒い寒い寒い」

空の闇も深く、人のいない通りの街灯が光を灯した光景の中でオキツグは身を抱えて震えていた。

「なんで俺がこんな所でお留守番？」

それは有力貴族ばかり集められた晩さん会だった。場所は王城ではない。有力貴族であるアガート侯爵家の邸宅、その広々したダンスホールで行われていた。相応しい格好でないオキツグは乗ってきた馬車のわきで一人膝を抱える。車が流通している昨今だが、この王の誕生の日を祝う舞踏会には馬車で来るのが習わしらしい。そこらで馬の嘶きが聞こえてくる。

「くそ～リュロンの奴～」
馬車の番が必要である以上、白いスーツで身を固めているリュロンが身辺警護に回るのは当然の流れなのかもしれないが。ドルスターは公爵家の資産運用の話で人と会わねばならないと言う。
こんなときに自分の持つ力が凍えさせる事というのは皮肉以外の何物でもない。

ヒヒンッ

馬の鳴き声が近くで、というよりも隣で響いた。見れば一際豪華な馬車だった。どこかの力ある貴族のものだろうか。
「そこの君、ちょいといいかね」
その声は馬車の籠、垂らされた薄布の向こうで聞こえた。
（って、俺か？）
「そう、そこの君だ」
男の声、深く渋みがあり、確かな人生経験と年輪を感じさせる、そんな声だった。
「君は今一人なのかね？」
「え、ああ、まあ、そうですけど」
「その馬車、ヴェルーナ家の者か」
馬車の紋章を見てとったらしい。
「臨時の護衛係ですけど・・・・失礼ながらどちらさまで？」
すると馬車の向こうで「ふふ、私かい？」と落ち着きに似合わない稚気に満ちた声が返ったきた。
「そう、私こそアトラス帝国第九十七代皇帝、レムルス三世なのだよ」
「！」
「驚いてるね」
確かにその馬車は辺りを見渡してもこれ以上のものがない程立派だった。慣習的にこれほど立派な装いの物を造る事が出来る貴族は

限られているのだが、まさか皇族だったとは。
「君の噂も聞いているよ。なかなか優秀なようだね」
寒々しい空ながらも呑気だった空気に冷やりと隙間風が入った。
「・・・監視されてたって事っすか」
「はは、悪く思わないでくれよ。何かと話題の第九位《氷王》が我が帝国の貴族に雇われたという話だったのでね。その若さで王座と呼ばれる一桁台の等級を手にする者はまずいない。どの国も強い剣導士は喉から手が出る程欲しいからね。自然とその手の情報には敏感になる」
するりとかわす様な会話にオキツグは暖簾に腕押しという言葉を思い出した。考えてみれば相手は帝国皇帝、長年政治と言う世界で物を言わせてきた海千山千だ。言葉のやりとりで勝てるはずがない。
「加えて言うならばヴェルーナ家というのは私にとって帝国貴族以上の意味合いを持つ。二代前、あの娘、ユーリアの祖父に嫁いだ娘は私の姉だったのだよ」
極めて牧歌的に話すレムルス三世に毒気を抜かれながらもオキツグは言った。
「だったら知ってるってことっすか、最近の不穏な動きに関しても・・・」
わざとぼかして言った言葉に大きく頷いた。
「ああ、だからこそヴェルーナ家は君達を雇った事となる」
「親戚の娘が命狙われてるんすよ？」
依然として穏やかな皇帝の口調にオキツグは苛立ちを覚えた。本来であれば不敬罪で逮捕されても可笑しくない状況だったが、先程のレムルス三世の言葉通り、オキツグはこの世界で核ミサイル扱いを受けている。国同士の勧誘合戦、完全売り手市場がそれを許してしまう。そのことを即座に頭の中で計算したオキツグは若干自己嫌悪を覚えながらも言葉を続けた。
「何かしてやろうとは思わないんすか」
「思ったよ。だから君達の事をドルスターに伝えた。先代《氷王》

とは懇意にしていたのでね」
その言葉にオキツグは自分の眼がつりあがるのを感じた。普段の緩んだそれではない。戦いと同種の緊張感がオキツグに一本通った筋を与える。
（ほう・・・）
レムルス三世は眼の前の青年のほんの些細な変化を眼を細めて観察する。
報告によれば持つ力に反して実に平和的かつ常識的な判断を持つ人物とのことだった。高位の剣導士にはおおよそ傲慢で自己中心的な破壊者が多いと言う事を軍を率いてきた経験がある自分は知っている。しかし、その報告は半分以上誤りを含んでいるだろう。何故ならば
「君は酷く怖い笑い方をするのだな」
獰猛に笑っていたのだ。自覚があるだろうか。あれは平和な人間に出来る笑い方ではない。
「君は戦う事が好きなのかね？」
「・・・まさか、経済的余裕があれば部屋の外に一歩も出ない一生を送りたいですよ」
答えるまでの僅かな差こそ答えだとレムルス三世は考えた。しかしそれ以上の追及はせずに満足する。
「随分楽しいひと時だった。礼を言うよ・・・・・」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオッ

まるで天変地異、地割れの様な音に驚いて辺りを見渡すと文明と言う名の光に灯されたアガート邸の明かりが徐々に強くなり、そしてその聖母を飾り立てた十字架を戴く豪邸の天上から勢いよく火を噴きだした。
「なっ！」
驚きの声を上げるオキツグ横目にレムルスは「おや、まあ」と呑

気にしていた。
「くそっ」
何が起きているかは分かっている。奴だ。《焔王》を名乗る男。第九位《氷王》とは名ばかりの自分がどこまで対抗できるものか。しかしやらねばならない。あそこにはまだリュロンとユーリアが残っている。
「オキツグ君」
陛下から声をかけられた。
「ユーリア公爵令嬢の事は私自身孫の様に思っているし、そう接してきた。よろしく頼むよ」
その言葉に込められた意外なまでの誠実さに虚をつかれたが、言われるまでもないと強く頷き燃え盛る屋敷にかけた。
「イグニッション！」

第１１話　勇士不撓

『それでは本日の目玉、サングリウット社製、最高級の木材と純金による細工があしらわれたレリーフです。それでは十万スピルから！』

まるで屋内競技場の様な広さのダンスホールで行われた皇帝陛下の生誕祭。帝国の貴族の殆どが参加をする行事らしく、広大な空間の会場であったが、立食形式のテーブルを囲む貴族の影は多く、その広さを寂しく感じる事はなかった。

豪奢な屋敷を持つ貴族のダンスホールで開催されていた豪奢なパーティも佳境に入り、占めのイベントのオークションが始まった。最近の貴族のパーティではよく見かけられる流行りの光景だが、割と儀礼的な部分に拘る事の多い王族、皇族がここまで時流を読んだ、悪くいえばミーハーな事を許す事は珍しい光景だった。

（とはいっても、出てくる品のグレードはそこらのボンクラ貴族とは比べ物にならんか）

芸術品に理解の欠片も示さない主義のリュロンだが、皇族とはいえ個人が主催するオークションとしては最低落札価格が桁違いの物が多い。いくら貴族だとしても安くはない額の筈であるが、オークションの上に銘打たれた「チャリティー」が彼らの名誉欲を刺激するのだろう。

シャンデリアの燦然とした明かりを疎ましく感じたリュロンは、ホールの端で壁にもたれかかりながら、白いワインの入ったグラスを揺らしていた。

貴族同士の媚び諂い、おべんちゃらがまるで戦いの様に繰り広げられている。

「下らん」

小さく、喉を鳴らす様に呟くと、手に持っていたグラス一気に傾けて喉に通すと前に通りかかった給仕のトレーにさりげなく載せる。

どうせ自分には煩わしい貴族のお付き合いなどないのだからと新たにアルコールと料理を物色し始めた。

ドン

腰に衝撃を感じるがリュロンは慌てない。敵意がないのは分かっていた。それ以前に誰の仕業かすら分かっている。

「・・・お前か」

「わはははははっ」

綺麗な白いドレスに身を包んだユーリアだ。上機嫌な様子でリュロンの腰に抱きついていた。

「ははは、退屈極まりないぞっ」

「お前、皇帝陛下の生誕祭を退屈とは・・・不敬罪で捕まっても知らんぞ」

呆れた調子で言うが、反面、無理もないかもしれないと考えた。

(こいつに貴族の会話が出来るとは思えんしな)

いくら公爵家令嬢にして次期公爵だとしても、だ。むしろ、今のヴェルーナ家がきな臭い事になっていると感じ取っている者は近寄ってこないだろう。

(それとも)

「連れに甲斐性がないせいか」

「はは・・・甲斐性なしとはなかなか手厳しい」

ユーリアの後から付いてくるように現れた青年が苦笑いをしながら言った。

「私と彼女ほど年が離れていると楽しませるのも一苦労です。まあ、その分笑って頂けた時の嬉しさも大きいのですが」

歳は十代後半だろうか。自分やオキツグより一回り年下に見える。しかし、その豊かな金髪は整えられて後ろで房をつくり、貴族用の白い儀礼服がまるで天の使いの羽衣の様に見える整った顔立ちをしていた。

「こんばんは、ミス」
さっと手を出して微笑みながら握手を求める姿に、自分の美貌を活かす術を知っている聡さを感じる。人当たりがいいながらも計算を感じる、油断ならない男だった。
「まるで王子様だな」
リュロンは握手に答えながら印象をそのまま口にしたら、男はやや驚く様な顔をした。
「よくお分かりで」
「ん？」
「現皇帝、レムルス三世の孫、クヌートといいます。殆どメディアへの露出がないので顔まで知っている人はあまりいないのですが、いやはや、驚きました」
自ら王子であると名乗る男に対し、あまり驚かないリュロンも流石に驚かざる得なかった。
皇族とは思えない程の丁寧さもそうであるが、確か調べによると・・・
「お察しの通り、ユーリア嬢の許嫁は私です」
「クヌートは優しいぞ、いつもお菓子をくれるのだ」
にこにこ顔で許嫁でもある王子を呼び捨てにする少女を見下ろしながらリュロンはやや汗をかいた。
（この男の素性を知っていてこの態度なのか）
ある意味大物かもしれない。
「確か、ユーリア嬢の護衛をされている方ですよね」
「・・・ええ」
流石に皇族にため口を聞く気にはなれなかった。
「あの年頃の少女が自分の命の心配をしなければいけない・・・なんとも嘆かわしい事ですが、それは貴族として生まれたものの宿命、ではあるのですが・・・」
美しい貌が憂慮に染まる。
リュロンは表情に出さずにハッとした。相手の肩書に驚かされて

はいたが、王子を名乗るこの男がユーリアの命を狙っている可能性も考えられる。とかく、貴人の頭の中身は複雑怪奇だ。何を考えついても可笑しくないと言うのがリュロンの持論だった。

クヌートは口を開いた。

「十七回です」

「は？」

「回数、脅迫、暗殺、その他もろもろ、明らかな害意に触れた回数です。私が」

男は遠い目をして語り始めた。

「皇族の、それも皇位継承者ともなるとその手の類の厄介が絶える事はありません。近衛は殆ど祖父や父にベッタリなので私まで手が回らない。教育係だった侍従は暗殺者の魔法から私を守るために楯になって死にましたし、毒味のメイドは私の代わりに毒に侵されて光を失いました。毎年、誕生日には誰かから送られてきたプレゼントで部屋が火薬庫になります」

超然とした様子で語り続けるクヌートは、やがて恥いる様にはにかんで頭を下げた。

「いや、失礼、苦労話なんて人に聞かせるものではありませんでした」

「・・・・・いえ」

やや警戒のレベルを下げる。優しげにユーリアを見つめるクヌートの瞳は婚約者と言うよりも、年の離れた妹や娘に向けるそれだった。

「王侯貴族の務めとは命を狙われる事と、命を以って責任をとる事です。誠に割に合わない役目だとは思いますが、人に押し付けることなく自分がその役目を背負っているのだと思えば、あるいは・・・・・」

カシャンッ

何かが割れる音と共に視界が暗転する。豪奢なシャンデリアの光も、見上げてみれば見る事は出来ない。

「あれ、停電でしょうか？」

リュロンは警戒のレベルを一気に跳ねあげた。

（偶然・・・ではない）

仮にも皇帝の生誕パーティの会場だ。そう言った施設の不備がない様に事前に厳重なチェックが成されている。テロ対策も含めた入念な施設整備だ。ここにきて偶然に停電が起こるとは考えにくい。

こわばった雰囲気を察したユーリアが抱きしめる力を強くした。暗くてもその不安に満ちた表情が読みとれる。

「だ・・・・」

大丈夫だ、そう続けようとして出来なかった。ちりつく空気に違和感を覚えて辺りを見渡すと空気が歪んで見える。環境の変化に強いリュロンはあまり気にならなかったが、室内は異様に熱くなっていた。

「あ、暑いですね」

クヌートも苦しげに息をしている。もはや尋常ではありえない。暗い中でも目が利くリュロンには、ホールの空気が熱で歪んでいるのが見えた。

そして光・・・・・

「ッ・・・・・」

しかし、その光は上からのものではなかった。下から、ホールの中心部分、床が赤く光る。その部分が以上に熱を持ち、赤色化しているのだ。貴族達はそれに危険を感じて距離をあける。

パーティと言う事で魔導大剣（ムズ・ラハート）の持ち込みは許されなかった。防犯上の問題から料理にナイフの類は付いていない。それでもないよりましと考えてフォークを数本拝借した。

ゴパァッ！

とうとう赤く染まったダンスホールの床が活火山の噴火の様に弾けた。
悲鳴、噴火の火の粉に焙られた者達の絶叫が聞こえる。
まるで地獄に通じているかのように穴から焔が噴き出し、さらには天井を焼き破る。リュロンは焔の柱と共に穴から飛び出す人影を見つけた。
「あれは！」
危険を感じてユーリアを引き剥がす。
「ユーリア」
「・・・・なんじゃ」
「敵だ・・・だが、魔導剣を持たない私ではお前を守りきれない」
「っ」
しかし、ユーリアは泣き出す事も癇癪を起こす事もしなかった。
その健気な我慢強さに僅かに微笑むと、直に顔を引き締める。
クヌートを見れば、やや青い顔をしながらも落ち着いた様子だった。
どうやら命を何度も狙われていたのは本当らしい。
「あなたも、この娘の婚約者ならそれ相応の甲斐性を見せてあげてくれ」
「分かった」
すぐさまユーリアの手を引いて会場の外に向かった。
「後は・・・私がどれだけ時間を稼げるか、だ」
かつて《焔王》を名乗ったその男、プロメテウスは赤い髪を焔の風に巻き上げられながらその場に降り立った。
「ぐ、ぎ・・・」
（？）
様子がおかしかった。話によると高慢で流暢に長々とした口上ぶる、貴族的な男だという話だったが、その眼には人間的な生気に乏しい、まるで昆虫の様な目つきだった。口元からよだれが垂れるのも構わずに血走った眼を辺りに向けている。

「おいっ、貴様、何をしている！」

警備兵がようやくプロメテウスに到達して拘束しようとする。それが引き金になった。

「ぎょあああっ！！」

その轟きと共に焔が吹きあがり、爆発する。その手には焔の玉璽の真紅の刃が握られている。

警備兵がその手に持った魔導剣ごと吹き飛ばされる。

プロメテウスの爆発はおさまるところを知らず、さらなる焔の暴風を呼び込もうと焔の玉璽に魔力を込めるのが見て取れた。

（まずい！）

リュロンは駆け出した。逃げるのではない。逆にプロメテウスに迫るリュロンは競技場の様な広さの会場の距離を数瞬で零にした。

焔に焙られて焼け死んだ警備兵の手から魔導剣を奪うと生体系術式の《肉体強化》を発動、リュロンの体に剛力が宿る。

「おおおおおおおおおおおおおっ！」

雄叫びを上げて剣を大上段に振りあげるとプロメテウスに袈裟がけに斬りかかる。

「ひゃあああああっ！」

奇声を上げげながらプロメテウスは焔の玉璽を無造作に掲げる。

ガギンッ

（！）

まるで巌の様な手ごたえが刃先を通じて伝わった。自分に調整されていない、量産品の剣で調子が出ないとはいえ、この感触は・・・・・

剣を掲げたプロメテウスから焔が噴き出す。

「ぐっ」
焔に肌を焙られる感触に苦痛を洩らしながらも更に合わせる刃に力をこめる。
「貴様、一体何をするつもりだ！」
「・・・・・」
言葉を返すどころか、反応さえ示さなかった。
「くそ、だんまりかっ」
生体系術式の《肉体再生》も限界がある。人並み外れて肉体的丈夫さを持つリュロンだからこそ持ちこたえたが、これ以上は持ちそうになかった。
(まだ、まだ五分も立ってないぞっ)
足止めにはやや時間が足りない。一度距離を置いて仕切りなおそうと考えた矢先、プロメテウスから焔の噴出が止まった。
(？)
見れば、プロメテウスの非人間的な茫洋とした瞳が一点、文明的な光が灯る。
「う・・・あ・・・・」
隙を感じて腹に蹴りを放つリュロンだったが、プロメテウスは僅かに下がりながらも姿勢を正しく保ったままだった。
蹴りの衝撃を活かして後方に飛ぶ。
「ぐ・・・・ああ」
胸を押さえて苦しげに呻くと、再びその眼からは知性の光が失せた。
「ああっ！」
轟きの声を上げながら天上に空いた大穴に飛び立っていく。
「何だ」
一体どうしたと言うのか。

（っ・・・ユーリアか！）

しかし、プロメテウスはまったく関係のない方向に飛び去って行った。

「っ・・・さすがにきついな」

体中からもうもうと煙を上げながらリュロンは膝をつく。余熱と新陳代謝の再生により生じる熱で周囲の空気が揺らいで見える。

（一応は対抗して見せたが・・・）

状況はかなり厳しかったと言えるだろう。本来なら後衛系戦士であるプロメテウスに力で押され、さらに焔の攻撃による面の攻撃は逃げ場すらなかった。

まるで熱砂の蜃気楼の様に周囲の光景が揺らいで見える中で、僅かに冷たい空気を感じた。

辺りを見渡し、更に頭上を見上げた瞬間、周囲の厚さを忘れてリュロンは凍りついた。

「っ・・・・」

天井に空いた穴から様子を伺う人影が一人。

全身をマスクやプロテクターで覆い尽くしていたが、リュロンはその人物が誰か分かった。

「せっ・・・・」

その人物はガスマスクを上にずらして口元を露わにすると、その異常なまで透き通った白い肌、艶やかな唇で頬笑みを造った。

直にマスクを元に戻すと背を向けて立ち去ってしまう。

「待て！」

しかし、その言葉に応じることなく、人影は夜の闇に消えた。体の回復が追いつかないリュロンは黙って見ているしかなかった。

帝都アクロポリスの上区、貴族の多くが居を構える閑静な地区の一画に、一際大きく、他の屋敷に比べて歴史と荘厳さを感じさせる

屋敷があった。
確かな歴史と品格を誇る屋敷は庭によく手入れされた芝生、小さな噴水、そして屋敷自体は、白い漆喰で綺麗に塗り固められた小さな城を思わせる。皇帝陛下の居城に遠慮した大きさになっていたが、品格と言う意味では負けるものではなかった。
ユーリアの家、オキツグとリュロンの仮住まい、ヴェルーナ公爵家だった。
（やっと寝てくれたか）
溜息をつきながら小さな城の主の寝室、そのベッドの傍らに立つ男、クヌート王子は静かに部屋の外に出た。
あれから、外に抜け出し、なるべく人の眼に触れない様に馬車を走らせてユーリアを屋敷にまで連れ帰ったのだ。緊急と言う事で王城から呼び寄せた近衛も二個小隊で二人を警護している。普段と違って物々しい屋敷の様子に興奮しっぱなしのユーリアの相手をしていたら、既に夜更けすぎだった。
近衛に飲み物を取って来るように頼む。本来は警護が任務の彼らを召使扱いするのは気が引けたが、流石に疲れがたまってしまっていたのだ。

コン、コン

客間のドアが叩かれる。入室を許可すると、執事がグラスと瓶をトレーに乗せてやってきた。
「・・・それは？」
「殿下はお疲れの様子でしたので、グーナ地方のアトワーゼ、三十五年ものです」
グラスに赤紫の液体が注がれていく。葡萄とアルコールのいい香りが鼻腔を満たした。
「・・・いえ、その事ではなく」
クヌートは顔をしかめる様に呟くと執事をとがめる様に見た。し

かし、執事は動じることなくボトラーとしてクヌートの傍らに立つ。
「・・・・」
口をつけようか迷い、飲んだら飲んだで次が注がれるだろう。クヌートは決して下戸ではないが、この人物に酌をさせる事には抵抗があった。
「それから、殿下」
「・・・なんでしょう」
「この様なものが郵便受けに」
懐から白い便箋を取り出して差し出した。
「手紙か・・・」
何故自分に差しだすのだろう。この屋敷の主人は自分ではないのに。そういぶかしげな視線を執事、ドルスターに向けるが彼は相手にしなかった。
渋々、便箋に眼を戻すと、そこには宛名はおろか、宛先もなにもない、真っ白な包み紙だった。糊も付けられていない無作法な手紙にさらに顔をしかめると、人の家の手紙に目を通す無作法を承知で中身を取り出す。
「・・・・・・」
それほど長い手紙ではない。簡素、簡便、まるで記号の様な短い手紙だった。書いてある内容の意味はまったく分からなかったが、その手紙が何故、自分が開く必要があったかは即座に理解した。
「これ・・・」
更にとがめる様な視線をドルスターに向けるが、彼は涼しげにその視線を受けていた。
「どうなされますか？」
「・・・それを貴方がききますか」
この執事とは顔を合わせるのは初めてだが、話を聞く限りでは家の一切を取り仕切っていると聞く。確かに彼ならその時間もあるだろうが、その彼が自分に聞く意味が分からない程子供ではないつもりだった。

「どうするか、か」
何かを諦める様に呟いたクヌートは手にしたグラスを一気に傾けて飲み干すと言った。
「決まってる。貴方が本当に受け取るべき方にお渡しして欲しい」
「では、その様に」
一礼して部屋を立ち去る執事の背中に眼をやりながら、置かれていったワインの瓶に眼をやる。
「ふう、酔狂な」
疲れた様な声と様子でそう呟くと、おもむろに瓶を手に取り手酌でワインをグラスに注ぐ。
今日だけはそんな不作法を見とがめる侍従達はいないのだから。

「確かにお渡ししました」
「ああ、ありがとな」
用意された部屋で、ドルスターから受け取った手紙の中味を確認しながらオキツグは苦慮するように呟いた。
「何だこりゃ、住所か？」
何らかの位置情報が端的に記されただけの、手紙とも呼べない手紙。
（いや、この場合は・・・）
現在、自分達が最も知りたい情報の一つにある特定の人物の居場所があげられる。
（とすると、これがそうなのか・・・）
何故これが自分の元に送られてきたか、簡単な事だ。造ってみたはいいが扱いに困った間抜けな管理者、もしくは関係者の仕業か。
確かに適任ではある。
やや釈然としないものを感じながらも部屋を出てリュロンの元に向かう。といってすぐ隣なのだが。

「おい、入るぞ」
キッチリ、二度ノックをするが返事はない。溜息をつきながら扉をあけるとリュロンはベッドの上でシーツに包まりながら横になっていた。
「寝てるのか？」
「いや、起きてる」
しかし、身を起そうとはしなかった。
声にも張りが欠けている様に思える。本来であれば入室の許しを出す前に入ってくれば、マナー違反だとか言って拳か剣が飛んでくるのだが、そのどちらもなかった。
「おい、こんな手紙が・・・」
寝返りをうってシーツから露わになるリュロンの姿に愕然とする。
「・・・手紙がどうしたと言うのだ」
「その前に、お前、その格好・・・」
リュロンは何もきていなかった。完全なる全裸。まるで古代の戦女神の様な、美しさと機能性に満ちた裸体は神々しさすらあり、シーツが絡まるその姿は淫靡ですらあった。
「ああ、今着る」
顔を真っ赤にするオキツグに対して、あくまでも淡々と下着を付け、シャツを羽織っていくリュロン。まるでオキツグの事など道に転がる石の如く扱いだ。その眼中にない態度がオキツグの男としての自尊心をやや傷つける。
「それで、何なのだ」
「・・・これだよ」
振り返ってみれば、ジャケットまで羽織ったリュロンの姿だ。先程の気だるげな雰囲気が弱まって、いつもの調子に戻っているように思える。
リュロンは位置情報の書かれた紙片をに眼を通すと直に断じた。
「敵の、プロメテウスとやらを含めたアジトの在りかだな」
「やっぱそうか」

「それ以外に考えられない。それに」
言葉をよどませたリュロン。
「どうした？」
「・・・分からないならいい。とにかく、これを書いた者は少なくともこちらに害意は持っていない」
不自然なまでに断定するリュロンをいぶかしみながらも更に問うた。
「で、どうする」
「勿論いく。完膚無きまで叩き潰す。草の根すら残さず刈り取る。それで依頼は完了だ」
行動の指針を得てリュロンは声と雰囲気に力を取り戻していく。
（何があったか知らないけれど）
パーティ会場に遅れて突入したオキツグが見たのは、まるで地獄の様な様相を呈した灼熱、そしてその中心で茫然としたように空を見上げるリュロンの姿だった。
この鉄の如き強靭な体と、それに恥じない精神を持つ女戦士が戦場で武器を手にしたまま無防備でいる事は今までありえなかった。それ故に不安が残る。
「お前、一体何があったんだよ」
何度も発している問いだ。無視して答えてもらえなかったが、今回はオキツグを振り返り、やや間をおいて口を開いた。
「かつて『先生』に言われた事がある。私は剣を振る理由を他者に預けすぎていると」
一体何を話し始めたのかと思ったが、『先生』という言葉が出てきたので横やりを入れるのを避けた。自分にしても、リュロンにしても、その言葉が出てくる時は何かを真剣に話している時だからだ。
「かつては兵士として祖国に、次は家族として、師として『先生』に、その両方が失われた今は一体何のために剣なのか」
滔々と、しかし、噛みしめる様に語る。
「私は次は何を守ろうとして剣を振っているのだろうかと、敵と出

会い、それを思った。それだけだ」
言葉をきると、リュロンの金色の瞳から放たれる視線がオキツグのそれを貫く。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
ややたじろぎながらもその視線を受け止めるオキツグ。何故か、その瞳からは眼をそらしてはいけない様な気がした。
やがて、フッとリュロンは鼻で笑うと背を向けて、壁に立てかけてあった魔導大剣（ムズ・ラハート）を肩に背負う。
「行くぞ」
「お、おおう」
颯爽と歩み出すリュロンを追いかける様に部屋の外に出ていく。
胸に手を当てれば鼓動が速くなっていた。

第11話　勇士不撓（後書き）

なんか、こう、はらわた煮えくり返る様なむかつくキャラを書きたい。

第１２話　罪と罰と報復

貴族の邸宅が多く軒を連ねる帝都アクロポリスの上級市民区。その中でも下区の商業区域に近い所にその屋敷はあった。そこは数ある優美な屋敷の中でも一際大きく、そして華麗な邸宅だった。華美ながらも下品にまで至らないのは単に所有者の美的センスによるものか。

アガート侯爵邸の広い廊下を憤然とした様子で歩くペサロ侯爵の顔は、普段の余裕に満ちた静かなそれとはかけ離れ、鬼の様な形相を呈していた。通りかかる召使いや女中は一瞬ギョッとした表情を浮かべるが、それを注意する余裕はペサロ侯爵にはなかった。

（何と言う事だ！）

来客のために設けられた応接間の前まで来ると間髪開けずに開けはなった。

「一体どういう事かっ！」

部屋の、応接間というには広く立派すぎる室内の中心、流麗な模様を描く絨毯、豪華な調度品に囲まれた応接テーブルに中年の小太りの男、くたびれた白衣でやや怯えた様子のギュネイが所在なさげに座っていた。

短身矮躯をビクリ、と震わせて慌てて立ち上がると姿勢を正す。

「こ、この度は真にっ」

「御託はどうでもいい」

傲然と言い放ち、怒りを滲ませたまま、冷静に威圧する。

「貴様は私を破滅させたいのか？」

「あ、や、そ、そんなことは！」

「御託はいいといっている」

皇帝の生誕パーティ、大きな会場を借りきって行われた盛大な催しには勿論ペサロ侯爵も参加していた。

貴族の中でも、家の資金力を活かして企業の多角経営に成功した

ペサロ侯爵は、実際の爵位以上の権勢を誇っている。多くの貴族の紳士、淑女に賞賛を集めながら優美な時を過ごす中で、突然それは起こった。

雅で緩やかな空気を赤い焔の地獄色に変えた悪魔、プロメテウスというなの調整剣導士。かつての息子のなれの果てだった。

「は、はあ、魔力を増強、玉璽を扱えるように魔力の質そのものが変質するように、調整を施していたのですが・・・そ、その分、肉体も精神も不安定になります。薬理的処置で持たせてはいたのですが」

ギュネイは額に汗をかきながら、懸命に、必死に言葉を紡いだ。

「ご、ご存知の通り、薬というものは服用を続けると体に抗体が出来てし、しまうので、そのために薬の効果が期待通りに得られなかっ」

「もういい、黙れ、そもそも、私はお前に実験施設を貸し出した医療機器メーカーの会長だぞ。馬鹿にするような説明はよせ」

「そっ、わ、私は侯爵閣下を馬鹿になど！」

「馬鹿に話す内容と言う事だ」

ペサロ侯爵は詰め寄っていたギュネイから背を向けて部屋の窓際にまで歩く。以前と変わりがないようで、その顔には怒りと焦りが見て取れた。そして狂気も・・・・

「あれが官憲の手に渡ったらおしまいだ。この国の警察は王室直轄だから私でも鼻薬は嗅がせる事は出来ない」

狂おしいまでに頭を抱える。

「も、申し訳ございません」

ギュネイはまるで銃を突きつけられたかのような青ざめた顔で謝る。

「謝ってももう遅い」

事が露見すれば自分は今の名声と権勢、財産を失い、実行犯としてギュネイは死刑になるだろう。そもそも、共犯者としてペサロ侯爵はギュネイを早急に始末する必要があった。余計な事をさえずる

前に。
冷徹に頭の中で計算しながら、『もう遅い』に更に青ざめるギュネイ。卑賤ではあるが知恵は回るこの男は自分の行く末を正確に把握していた。もっとも、この男にそれに抗うだけの勇気はないだろう。戦場に放りだされれば怖い怖いと繰り返して小さくなって、敵に撃たれるのをただ待つような男だからだ。
「ほ、ッ本当に申し訳ございませんでした！」
跪いて額を床に擦りつけるギュネイ。
「じ、実験に失敗したばかりか、侯爵閣下に多大なるご迷惑を・・・その上御子息まで！」
謝罪の言葉に嘆願の副音声を乗せて必死に言葉を続けるギュネイを、ペサロ侯爵は感情の浮かばない瞳で見下げた。
数秒たっただろうか、もしかしたら数分かもしれないし、一時間以上たったかもしれない。そんな沈黙の果てにペサロ侯爵はギュネイの傍らに膝をついて伏せ続ける彼の顔を上げさせた。
「心配するな、ギュネイ」
「か、閣下っ」
「警察は頼れないが、軍には融通が利く。皇帝陛下の暗殺を企てたテロリストという名目で剣導士で構成された特殊部隊が派遣される。即時射殺命令が下っているので、あれから秘密が漏れる事はないし、お前は国外逃亡すればいい。私はお前の件、プロメテウス計画には関知していない。単なる新薬の実験だと騙されていた事にするのだ」
ギュネイの悲哀と絶望に満ちた啜り泣く顔に一筋の光が差す。
「勿論、国外逃亡とその援助は私がする。心配するな。そうだ、行き先は・・・」
（行き先は地獄だがな）
下手に脅して逃げられたら困る。安心して死んでもらおう。薬か、銃なら即座に頭を吹き飛ばしてやろう。ギュネイの醜い命乞いは想像するだけでも虫酸が走る。
「それに息子の事は気にしなくてもいい」

（病気がちで爵位を継ぐ未来などありえない息子などどうでもいい）
「だから気を取り直せ」

「ひでぇなぁ」

ポツリ、そう漏れ聞こえた声はそれほど大きくはなかったが、意外な程部屋に響いた。
ギュネイも啜り泣くのをやめて茫然と辺りを見渡す。ペサロ侯爵はギョッとした様に部屋中を見渡して、そして気がついた。
「副音声ダダ漏れだろ、絶対生かして帰す気ないだろ、あんた」
窓の反対側、白鳥の絵画が架けられた壁の上から、もたれかかる様にして腕を組んでる青年がいた。
黒髪黒眼、カーキ色の軍用コートに身を包んだ長身痩躯だが猫背のためそれをあまり感じさせない。歳の頃は二十歳前後か、しかし年相応の覇気を感じさせない、まるでくたびれた老人の様な眼をした青年だったが、それ以上は分からなかった。首から鼻先まで黒い布で覆っていたからだ。
「何だ気様！」
誰何の声を上げるペサロ侯爵の怒声に動じた様子もなく肩をすくめると、壁から背を話して部屋を壁に沿って歩き始めた。
ここでやっと青年の腰の魔導刀があるのを見て取った。
「誰だと言われてもね」
布越しのくぐもった声で、飄々とした調子で返す青年に苛立ちながらも、ペサロ侯爵はポケットの携帯端末を操作する。
「警備兵っ、警備兵は何している！」
常駐させている護衛の詰め所に連絡をかけるが応答はない。
「ああ、無駄だと思うが」
「何！・・・・まさか」
屋敷丸ごと無力化されたのか危惧した矢先、受話器を取る音が携帯から聞こえた。

「は、はは、こけおどしかっ、何が無駄なものかっ！貴様の様な若造に何が！」

『貴様の様な愚図な貴族よりは遥かにましだろう』

耳元から知らない女の声が響いた。

「誰だ！」

『その言葉は聞き飽きた。眠らせた警備も全く同じ事を言っていたぞ』

電話越しで受話器を床にたたきつける音が聞こえて、それっきり何も聞こえなくなった。電波が途切れた事を示す電子音が聞こえるのみだ。

「何だ、一体何だと言うのだ！」

ギュネイは何かに怯える様にわなわなと震えている。

「な・・・に・・・・・・・・」

ガッキンッ！

固いものが砕け、また斬られる様な音が聞こえた瞬間、ペサロ侯爵の足場が崩れた。

「ぐ、わっ！」

突然の足場の崩落に成す術もなく地に落下し、叩きつけられる。二階からの落下だったが、受け身も取れずに背中を強打した侯爵は衝撃と痛みに呼吸することを忘れた。悶えながらも頭上を見渡せば、今まで自分が居た二階の応接間の床に空いた三角形の穴。

「所詮は成り上がりか、数だけ揃えた警備、中身が伴わない主人を表しているかのようだ」

ただ宣告するように呟く人影が落下した一階にも一人。肩に担ぎあげた巨大な剣が一振り。白髪に密色の肌と長身を髪と同じ色のスーツで包む、冷たい美貌の女だった。

半ば本能的にこの女が床を切り崩したのだたペサロ侯爵は悟った。

ここまで騒がしくしても、誰一人として様子を見に来ない。

「助けなら期待するだけ無駄だ。警備共々ワイヤーで縛らせてもらった」
「ぐぅ、ひいっ！」
頭上からギュネイの悲鳴が聞こえた。
見上げた瞬間、ギュネイが降り注ぎ、ペサロ侯爵はその重みに押しつぶされる。
「ぐがぁぁっ！」
「あ、もしかして当たっちゃった？」
「もしかしてもも何も、クリーンヒットだ」
呑気な会話に殺意がわいた。どれもこれも、全て自分を覗いてこの場にいる者が引き起こした事ではないか。
「も、申し訳、こ、閣下・・・」
ギュネイは立ち上がろうとして失敗した。右足が膝から反対に折れ曲がっていたからだ。
「ぎゅ、ぐひいいいいっ、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！」
みっともなく泣きわめくギュネイに襲撃者二人は顔をしかめた。恐らくあばらが折れているであろうペサロ侯爵ですら、一瞬痛みを忘れた苦々しい顔をつくる。
「黙れ」
女が傲然と言い放つ。
しかし、みっともなく泣きわめくギュネイは収まらなかった。
女は静かに踵を上げる。まるで体操選手の様にブレのない姿勢で片足の踵を天に向ける。座りながら器用かつ柔軟なことこの上ない姿勢でピタリと止め、そしてギュネイの鳩尾目がけて勢いよく振り下ろした。
「ぐふっ！」
「ああ、少し外してしまったな」
あばらが砕ける音が聞こえた。ギュネイの顔に涙とは鼻水以外に吐血が混じる。恐らく内臓を傷付けたのだろう。

「ともかく、この愚物は声を発するどころではなくなり、静かにはなったのだ」
「そうかい、よっと」
頭上の男が一階に降り立つ。一瞬ビクリと身構えたペサロ侯爵だったが、男は真横で綺麗な着地を披露していた。
見渡せば、瓦礫に交じって警備に貸し出していた携帯端末の粉々に砕けた姿が見て取れた。
「お前達、用件は分かっているな」
「・・・何の事だか」
全身の痛みに苛まれながらも、感触で腰の後ろの重みを探る。
「分からぬな！」
一気に腰の後ろの拳銃を引き抜いて照準、女目がけて引き金を引いた。

パァァァァンッ

その銃声は何故か、遥か頭上で聞こえた。
「へ？」
不覚にも間抜けな声を洩らして、ふと、顔に水滴の感触。雨でも降ってきたのだろうかとっさに考えるが否定する。くり抜かれたのは二階の床で、未だに室内だ。

ゴトリッ

水滴と共に頭上から何かが落ちてくる。
（腕？）
這って確かめようと思って、その眼に見たのは銃を固く握りしめた自分の腕だった。
「・・・・まったく、油断も隙もあったものではない」
嘆息しながら刃を切り上げる形で残心していたリュロンは言った。

「ああ、思わず斬ってしまったな。すまない」
ペサロ侯爵の右腕は綺麗に切り落とされ、忘れていた時間を取り戻すかのように血が盛大に噴き出した。
「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ」
痛みに声を上げる。
その様子に女は慌てる様子もなく、むしろ呆れた様な瞳と声で覆面の青年に言った。
「次から次へと、男と言うのはどうしてこうも五月蝿いんだ」
「自分でやっといてそんなこと言うなよ。でも、このまま放っておいたら死んじまうな」
青年は魔導刀を抜き放つと刃に魔力を灯し、ペサロ侯爵の切断された右腕に寄せる。
「じっとしてろよ」
凄まじい冷気を感じた。
冷気と共に痛みが若干治まるのを感じた。見れば傷口は氷で覆われ、応急的な止血の役割をしめしていた。
「ぐ・・・・ひ・・・・ひょ、《氷王》！」
「・・・・・・・ッ！」
マスクで口元を隠す青年が、剣導士が使う術式は現代の軍隊が主として扱う近接戦用の生体系術式ではなく、後衛系魔術。本当の意味での魔法使いが使う魔法の一つ、氷凍系術式だった。
「あーあ、ばれちまったよ」
「自業自得だ」
諦めた様にマスクを外して懐にしまう青年の名は、調べによればオキツグ・クシナ、そして傍らに立つ女はその相棒のリュロンだ。
「私達の事は貴様もよく知っていると思う。ついでに言うと、貴様が経営するコングロマリットがヴェルーナ公爵家が後ろ盾となっている会社が原因で利権を独占できていないらしいな」
冷徹な光を放つリュロンの視線に耐えきれずに口を開く。
「な、あ、あいつら、ヴェルーナ公爵の様に古いタイプの貴族に、

我々がどれだけ搾取されてきたか知りもしないでよく言える！」
お前が言うか、とオキツグは小さく洩らす。
「そ、そう、これは正当な怒りなのだ」
みっともなく弁解を続けるペサロの剥がれたメッキが見て取れた。
「だから殺すのか」
リュロンは凄みながら微笑むと言う器用なまねをしながら、更に続けた。
「ここのところ依頼人の命を狙う輩のアジトがわれたのでな、調べてみればお前の会社の持ち物だと言う事ではないか」
「わ、私は知らない。そこのギュネイが！」
血にむせながら必死で顔を横に振るギュネイを横目に、警察にしようと思っていた言い訳を放った。
だが、不幸な事に女、リュロンは警察官ではなかった。
不快そうに眉をひそめたリュロンはペサロ侯爵の顎を蹴りあげた。
「私達に嘘誤魔化しの類は一切効かない。あの《焔王》を名乗る男が何者か理解しているはずだ」
静寂は一瞬。しかし、それで自分が肯定をしめしてしまった事をペサロ侯爵は悟った。
「なに、殺しはしない。貴様達の手の届かない所で、今回の事をこっそり告発するだけだ。それで貴様達は社会的に死ぬ」
「あんたらだって死にたくないでしょ、俺達も徒に人殺しはやりたくないんだ。勿論、あの《焔王》ともな」
その甘いセリフを咎める様にリュロンはオキツグを睨むが、ペサロ侯爵の喉元から洩れたのは命乞いでも、取引を持ちかける言葉でもなく、不気味な、唸るような笑い声だった。
「ふふふ、くっふっふっふ、ふっはっはっはっはっ、もう遅い！」
その発言に緊張感と共に眉をひそめる剣導士の二人。
「もう、何もかも、全て終わるんだ。あの、あのプロメテウスは軍の特殊部隊に始末される予定となっている。あれを捉えて警察に供述させるつもりだったらあてが外れたなぁぁっ、間抜けども！」

死の定義

哲学者や人権保護団体が好んで語りたがるお題目を、彼らより遥かに論理的かつ数値的判断によってイプシロンは考察していた。

場所は某製薬会社の研究開発施設。本体がM&Aで巨大化し、新たに施設を建築、本社の研究開発機能を移設して以来、ここはギュネイ博士による人造《王位》製造計画、通称プロメテウス計画の研究室となった。誰がどんな悲鳴や断末魔の声を上げても誰も助けに来ない。まるで建物自体が棺桶の様だった。

老化による病や痴呆は人の魂の在り方を変質させる。それこそある意味死と言えるのではないかと思考の遊びを着地してイプシロンは黒いプロテクターに包まれた手で顔のガスマスクを外して、雪の様に白くて透き通った肌を晒した。

「やはり、しょうしょう暑苦しいですね」

イプシロンは珍しい後衛系術式の使い手、氷凍系の剣導士なので暑さは魔術で紛らわせる事が出来るが、精神的な圧迫感は避けられなかった。

ゴッフッ！

何かが爆ぜる音が響いた。

帝都のはずれ、下区の外縁部に設けられたその施設は、倉庫や工場も含めて十棟近い建物が立ち並ぶ大きな工場であったが、夜空で、しかも遮蔽物が大いにも関わらず、敷地内の遠くで、ごうごうと燃え盛る炎が見えた。

プロメテウスの焔の玉璽によるものだ。

「工業地区とはいっても帝都、人の注目は避けられない・・・もはや、まともな判断力すら失いましたか」

哀れな。言葉にして言わず、しかし、プロメテウス計画の被験体にして、初の成功作の青年の精神は既に歪み、魂は砕けてしまったのだろう。もはや、あれは死とはいえないであろうか。

（戦っている装備からして、軍の剣導士による特殊部隊、ＭＳＷＡＴあたりか）

おおかた、扱いに困ったペサロ侯爵が送り込んできた刺客なのであろうが、事は成らないだろうとイプシロンは予測した。

仮にも玉璽を携えた《焔王》である。等級制の位階は第八位、プロメテウスは単に《王位》たる資格の玉璽に適合するだけの人間であり、正確には《王位》ではない。が、それでも無尽蔵の如き魔力と、全てを焼き尽くす威力の焔、そして玉璽を持つ。例え、軍の精鋭であろうと、ただの人では話にならないだろう。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ

轟きの声が聞こえる。気がつけば焔の一方的な蹂躙による戦場音楽は聞こえなくなっていた。

「終わりましたか」

結末は分かっていた。軍の特殊部隊が潜入してきた時も、すぐさま気がついたが彼らを止めるつもりはなかった。もはや彼らがどういう運命をたどるかは分かっていたし、それに自分はここで果たすべき使命がある。そのためにも、彼を追って来るであろう彼らを待つ必要があった。

「さて、プロメテウスが外に出ると・・・・おや」

イプシロンは何かに気がついた様に窓から外を眺める。遥か遠く、敷地の外、内縁部の方向に眼を向ける。まるで何があるかはわからず、夜の静寂を守る町の一部の様にも見えたが、そこから放たれる確かなプレシャーを感じていた。

第１２話　罪と罰と報復（後書き）

菅　直人は復活の呪文を唱えた。
「ぶぶちまこ　すぼとるてすた
　てめこそつ　すろた」
復活に失敗した。
目の前が真っ暗になった。

第１３話　闘争、果てに別離

製薬企業の研究所跡地。普段であれば物言わぬ墓標の様に不気味さを周りに振りまいているはずのそれらは、しかし、今夜はその様相に反していた。

「だから言わんこっちゃない」

焔に焙られてマグマと化した地面、溶け落ちた建造物、まるで地獄の様な凄惨な光景の中で、見える人影の全てが焼死体として物言わぬ躯となっていた。

死屍累々、その言葉がこれほど似合う光景は少ないだろう。

「・・・生存者を捜せ」

あまり期待していない声でリュロンが言う。

倒れている男達は皆、黒い野戦服にガスマスクで顔を隠した兵士、あるいはその残骸だった。二人で一つ一つマスクを外して確かめていく。

そして五人程確かめた時、微かではあるが息がある男を発見した。

「おいっ、こいつ生きてるぞ！」

遠くにいたリュロンに向けて声を張り上げると、すぐさま兵士の傍らに立った。

「・・・酷いな、虫の息ではないか」

（こいつ・・・・）

兵士は体の右半分が炭化している。

明らかに致命傷だった。直に病院に連れて行って処置しないと手遅れになるだろう。

「お・・・まえ・・・達」

「黙れ、お前はこちらの質問だけに答えろ。そうしたら病院に連れてってやる」

リュロンは兵士の顎を蹴りあげる。

「お、おい！」

「黙っていろ、死に際の人間は放っておけば延々と意味のない言葉を垂れ流すぞ」
「・・・怪我人だぞ。それに、敵と言う訳じゃない」
「味方と言う訳でもないが・・・・あの外道の話によると、こいつらも影響下にあったらしいから、どちらかと言うと敵か」
誰かに言い聞かせる様に呟きながら、リュロンは魔導大剣（ムズ・ラハート）の長大な剣先を突き付ける。
「プロメテウスは、あの焔の化物は何処だ。お前達は何人できた。装備は。交戦時間は。部隊の損耗度を時系列的に説明しろ」
「う・・・あ・・・」
「おいっ、しっかりしろ！」
苦しげに呻いて言葉にならない兵士にリュロンは舌打ちをする。
「・・・限界か、仕方がない。治療してやる」
オキツグがリュロンを見ると、立ち上がり、剣を振りかぶっている姿があった。
一閃
ズシャッ
魔導大剣（ムズ・ラハート）は、瀕死の兵士の頭を唐竹割りにして、腰のあたりまで刃を埋もれさせた。間違いなく即死だった。
「戦場においては死こそが特効薬、敵の刃を受けることは死そのものであり、それを忘れたものから死んでゆく」
「・・・・・・・・」
「分かっているだろう？　どの道助かりはしない。ここから一番近い病院まで十分はかかる。そしてこいつはそれまで持たない」
「・・・・・・ああ」
ただ、と付ける。オキツグの顔は沈痛の色に染まっていた。
「ただ、たまんねえよな。こいつらだって、それなりに目的持って軍隊入って、家族もいて、街の平和を守るつもりでテロリストと戦

いに行ってこんな死に方するんじゃ、な」
加えて、自分達は騒動の中心人物である。しかも敵は、ユーリアに加えてオキツグ自身にも固執している節があるので、間接的にこお兵士を殺したのはオキツグとも言えた。
「例え、例え待ち受けるのが死だとしても、せめてそれまで手を握って励まして、安らかなものとする事も出来かもしれないのに」
「・・・ここは戦場だ。それはあまりにも難しい」
分かっている。そう答えて立ち上がり、中断していたプロメテウスの捜索に戻ろうとした直後だ。
視界の端でチカッと何かが光ったような気がした。
「ッ・・・・」
怖気を感じて無意識に魔導刀《白燐丸》を抜き放つ。
「《氷閻刀・剣山》ッ！」
氷の剣山の壁を形成した瞬間に轟音。
「ぐうっ」
まるで強力な爆弾が至近距離で爆発したかのような衝撃だった。
リュロンは既にオキツグの後ろで壁の範囲内に退避している。
そして熱風、前を見れば氷の壁が吹きつけられる焔で溶かされていく様があった。
明らかに普通の炎ではない。オキツグの氷は魔力の通ってない焔、攻撃の類には驚く程の耐性誇っている。それは他の剣導士の魔術も同じだが、その術が崩されている時点でそれは同じ魔術を使うものである事が確定するのだ。
そして、オキツグの氷を溶かす程の魔術、炎熱系術式の使い手は一人しか心当たりがない。
「リュロン！」
「ああ！」
応えるリュロンはオキツグの腰を抱えると、生体系術式《生体強化》により飛躍的にました筋力で離脱、近くにあった三階建てのビルの屋上まで一気に駆け上った。

オオオオオオオオオオオオオオッ

まるで狼の様に遠吠えする焔の怪人、プロメテウスの姿が遠目に見えた。

「さあ、そろそろ決着をつけようではないか」

戦の始まり。リュロンが獰猛に笑う姿を横目で見ながら、今宵の闘争の幕が開けた。

魔導剣を駆使して戦う剣導士には二種類の人間がいる。

前衛系と後衛系と便宜上分けられるそれらは、実はさ程の差はない。術の発動には同じく魔力を必要とするし、強力ではあるが不死身ではない。

しかし、あえて挙げるとするならば、後衛系剣導士になるには、何より素養が必要だと言う事だ。前衛系剣導士の様に体内に向けて魔術を行使するのではなく、外界に向けて、あるいは敵に直接作用させる。そのための魔導制御力、支配力が必要となる。後衛系剣導士も、本来であれば肉体の強化等に回していた分の魔力と制御力を外界の左様に向けているだけの話で、その分を肉体強化にまわせば理論上は前衛系として戦うこともできる。生体操作系や炎熱系、氷凍系、他にも様々あるが、それはあくまでも外側から見た分類で、どの様に現実を捻じ曲げるかの具体的なイメージの違いに過ぎない。特に肉体は自分自身に帰属するので、先天的に制御適性が殆どのものにある。前衛系が多いのもそれが理由なのであるが・・・・

「ぜえええええええええやぁっ！」

リュロンが雄叫びと共に魔導大剣を大上段に振り下ろす。

ガギッ

しかし、事もなげにイプシロンは狂気に満ちた瞳でそれを見つめ、無造作に掲げた焔の玉璽で受け止める。

次の瞬間、

ゴオオオオッ！

プロメテウスの背後から勢いよく噴き出す炎がリュロンに襲いかかる。超人的なバックステップで逃げるが、焔が迫る速度のほうが早い。

「オキツグ！」

「《氷閻刀・剣山》！」

氷の壁が出現して迫りくる焔を防ぐ。精製した氷の半分以上が崩れ去ったが、今回はなんとか凌ぎきった。

「《氷閻刀・波濤》」

オキツグの得意技。精製した氷をフレミング左手の法則の電磁制御で撃ち放つ圧倒的砲撃。電磁系術式は専門外だが、氷凍系術式の分子制御の観点から再現する事が出来た物理現象だ。

ゴオオオオオオオオオオンッ

氷の柱の全ては超高速が発生する空気摩擦により蒸発したが、その急激な状態変化と高温が水蒸気爆発を引き起こす。

辺りの熱風ごとプロメテウスを吹き飛ばす。

（やったか？・・・・て思っている時は大抵やれてない時ってな）

心の中で軽口を吐くと、水蒸気の向こうで、今の衝撃で瓦解した工場の瓦礫の中から這い出るプロメテウスが見えた。

「・・・超人かよ、あいつ」

軽口をたたかないながらも、リュロンも同じ感想なのだろう。

前衛系のリュロンを圧倒しながら、後衛系であるオキツグの魔術

とも渡り合う。どう考えても規格外の化物だった。
「しかも、この前戦った時より出力が上がってる」
この暴走状態が安全マージンをとって然るべきの魔術や魔力の出力のストッパーを外しているのだ。
「だけど今度は二人揃ってる」
唸る様に言いながら、オキツグは意識を《白燐丸》に集中して、剣山の精製に入る。持ち弾を増やして一気にたたみかけようとした時、どんどん、氷の精製速度が下がっていく。
「なっ！」
「どうしたと言うのだ！」
緩やかながらも成長していく氷山だったが、期待した速度には程遠い。見ればプロメテウスが先程のダメージから抜け出た所だった。
「なんだ、玉璽が故障したとでもいうのかよ」
「ッ・・・・・いや、違う」
リュロンの瞳は彼方に向けられていた。
「奴の仕業だ」
倒壊した工場とは別の棟の屋上に、覗きこむ様に立っていた人影、見たこともない長剣型の魔導剣を持つイプシロンだった。
「・・・奴も氷凍系の使い手、お前の魔術に干渉して阻害しているようだな」
これで二対二、厄介な事になった。オキツグとリュロンのチームワークを突き崩す様に、オキツグの強みのみピンポイントで削ってきた。
「・・・俺の氷凍系は使えない。まずはあいつを黙らせる事が急務か」
リュロンは戦いの最中、本能的に悟った。
（奴とオキツグを戦わせてはいけない）
あれがかつてオキツグが斃した師であるならば、戦わせてはいけない。珍しい後衛系魔術を能くする者の中で、更に氷凍系術式という共通点。ありえない程の類似性からもしかしたら悟っているかも

しれないが、ガスマスクに包まれている顔を、イプシロンがさらけ出したら確実にオキツグは戦う事を躊躇するだろう。あるいは一瞬かもしれないその隙は命取りになる。

「・・・・奴は私がやる。お前はその間の時間を稼いでいろ」

「・・・了解、流石に一人で長時間はきついんで早めに頼む」

地面のコンクリートを蹴り砕く様にイプシロンへと駆けるリュロンを横目で見ながら、プロメテウスに向き直る。

「さて・・・」

ゆらり、ゆらりと距離を詰める怪人に剣を向けながら、氷凍系術式を利用するために割いていた魔力と魔導制御力を停止、全てを肉体強化にまわしはじめる。生体系術式とは、すなわち己の体を魔力によって制御する事である。専門外ではあるが、魔力だけなら第九位《氷王》に相応しい力を持っているので、多少の非効率は気にならない程の強化になる。

「俺が女のけつに隠れてこそこそするだけだと思うなよ」

《白燐丸》を握りしめて正眼に構える。息を止めて呼吸を隠し、全くの静の状態を造り出す。周囲の流れに心臓の鼓動を乗せ、気息の充実をはかる。

（・・・・・・今！）

その昂ぶりが最高潮になった瞬間、オキツグの足は地面をけり砕き、プロメテウスに突進する。

この世界に来て四年、戦う術を学ぶ事に全てを費やしてきた事の集大成の一部がそこにあった。

振りかぶって斬りおろすか、袈裟がけに斬り倒すか、横薙ぎに斬り飛ばすか、悩みかけてやめた。そして、剣の間合いにプロメテウスをおさめた瞬間、答えは決まった。

（よし、突く）

正眼の構えをそのまま、水月を抉るように瞬発力をつけて放つ一撃。

ギンッ

やはりその一撃は玉璽によって完全には決まらなかった。が

「ぎひ？」

避けた筈だったが、急所は避けたものの、その切先は肩を抉っていた。

対人選において、最も有効な剣の技と言われると、大抵の場合は大上段に振りかぶる一撃を思い浮かべるが、それは違う。確かに切断武器としての強みを考えるのであれば間違いないが、一番に有効なのは突きであるとオキツグは考えていた。身体能力の差、技量の差は動作の少なさによって隠され。木剣であればいなす事も出来るかもしれないが、真剣に魔術をからめて放つ、体ごとの突きは、急所からは外せても体のどこかに当たる。そしてそれは実戦においては致命傷になりうる。

「ぎ、ぎひいいいいいいいいいいいいいいいいいっ」

痛みにと怒りに感情を暴発させたプロメテウスが焔の嵐を巻き起こす。飛び退く様に距離をあけるが間に合わず、咄嗟に氷凍系術式を発動しようとするが、やはり不発。顔を覆いながらその衝撃を身に受け、流す。

「ぐっ・・・・がはっ」

コンクリートの地面を勢いよく転がり、壁に激突するがなんとか持ちこたえた。気力体力共に十分、みなぎる力が精神を高揚させる。

「いてぇじゃねえか」

いつしかオキツグは笑いを顔に浮かべていた。まるで鬼の様に獰猛で、悪魔の様に残酷な、戦う戦士の顔に。

リュロンは魔導大剣（ムズ・ラハート）を構える。大剣という武器の都合上、あまり精緻な技は期待できない。読まれていても構わないと計算を捨て、

愚直なまでの正中線を上段に絶つ一撃を放つ。
（魔導剣ごと叩き折ってやる！）
その圧力に押され、イプシロンは即座に間合いを切った。
「意外でした。貴方が来るとは思わなくて」
リュロンは言葉を返さない。会話をしない。余計な事を言わせるつもりはなかった。
（この女は偽物だ！）
本物であるならば自分達の敵にまわり、あまつさえテロリズムに同調するはずがない。
「くたばれ、偽物」
さらに間合いを詰めて切り上げの一撃。

カッ

くぐもった音と共にスウェーバックで剣を避けきれなかったイプシロンのガスマスクが飛んでいく。
しかし、イプシロン自体は曲芸の様に後ろ向きに宙返りをしながら何事もなく距離をあけて姿勢を整えた。
「偽物な訳ないでしょう。姿も、得意とする魔術の系統も、そして強さも同じなのですよ？」
「だが、だが、私はお前を『先生』とは認めないっ、認めるわけにはいかない！」
硬直状態に陥る。下手に相手の手の内を知るだけにお互いが手を出せない。イプシロン、彼女が氷凍系術式を使用しないのはオキツグを抑え込んでいるためか、肉体強化以外は使えないと見た。
「ほら、見て下さい」
オキツグとプロメテウスが戦っている方向を魔導剣を持っていない左手で示す。
その手には乗るかと身構えたリュロンだったが、イプシロンは完全に向き直ってしまった。その無防備な状態に斬りかかる事も出来

ず、切先は向けたまま、オキツグが戦う姿を見る。
「既にプロメテウスに傷を負わせています。押されてはいますが、力を全て肉体強化に回して良く立ちまわっています」
自分ではついに傷を負わせる事すら出来なかったプロメテウスを相手に一撃を見舞った。その事実にリュロンは安堵を覚える前にショックを覚えた。
「自分なんていらないではないか、なんて考えました？」
「何を」
「あの子だって、何だって一人で出来るわけではありませんよ。現に今だって、剣に集中しているから氷凍系は展開できないでしょう。私が邪魔していなかったとしても」
遠くでプロメテウスの焔がヒュドラとなってオキツグに襲いかかる。思わず体が駆け付けそうになったが、その必要はなかった。危ういところでギリギリ避けながら、体をところどころ焦がしながら、確実に致命傷は避けている。隙をついて一撃、あえなく防がれるも間合いを切って一息。
リュロンはその戦い様を見て茫然とした。
「才能とは天から与えられるものです」
イプシロンはかつての師と同じ事を言った。
「力は努力によって得ることは出来ますが、才能ばかりはそうもいかない。誰かから与えられなければならない」
その言葉には今までにない、何か情念の様なものが込められていた。声に感じる張りつめた緊張感で思わずイプシロンの顔を見直すリュロン。
「大抵の天才は、その才能を天から与えられる。ですが、彼のその才能は悪魔からもたらされた」
詩的で、どこか歌う様な調子であったが、その言葉の意味について考えていくうちに一つの可能性にいきついた。
「・・・・ま、まさか」
「どうやら正解に辿りついたようですね」

どこか満足げなイプシロンの顔は、やはり『先生』が褒める時によく浮かべていたそれだった。

「魔導剣の機関部に用いられている核石、今でこそ人造の大量生産品が出回ってはおりますが、遥か昔は一つにつき一体の魔獣が封じ込まれた封印の石だったのですよ」

リュロンは既に敵意どころか、剣を向ける事すら忘れていた。汗が頬を伝う。この先は聞いてはいけない。何か決定的な事がある様な気がした。

「数多く封じられた魔獣の中でも、神の如き力を持っていた古代種、天魔級の化物を総称して十三使徒といいます。その中の封印に成功した九体の核石から力を引き出す事が出来るものは、まるで戦神であったとされています」

「では、もしや等級制度の正体とは・・・」

「そう、その九人の中で決められた序列です。それ以降は全て蛇足、意味などなかった」

リュロンの喉はからからに乾いていた。心臓が気持ち悪い程高なっている。魔術で収めようと思っても上手くいかない。

「魔術とは意思によって世界を捻じ曲げる行為、それを万人に扱いやすい様に体系化したのが魔導剣とその戦闘術。しかし、魔獣を封じた核石から力を取り出す事は、すなわち魔獣の意思も外に出すと言う事です」

もはやリュロンに言葉を紡ぐ余裕はなかった。ただ聞くしかない。

「《王位》の担い手たちは、玉璽と呼ばれるものから力を引き出す代わりに、段階的ではありますが、魔獣の、使徒の意思の力に毒されていきます。そしてやがては自我を失い、完全に体を乗っ取られる。死期が迫ると他の体に、新たな適合者を探して乗り換えて、古い宿主を殺す。《王位》の、王にちなむ二つ名は全て、核石に封じられた意思につけられた名前なのです」

リュロンは剣を取り落とした。体から力が抜けて膝をつく。今まで信じていたものが全て瓦解した瞬間だった。

（ならば・・・『先生』の正体も・・・）

祖国を冤罪で追われ、いきついた先で得た心の支え。しかし、その愛情や、尊崇が虚構のものだとしたら・・・

「私も半ばを《氷王》に蝕まれていました。随分前から人格に歪みが出て、知らないうちに口調や服の趣味も変わって・・・気がついたら、体の主導権のかなりの部分を握られていて、あなたの面倒をみる様になってからは進行は遅くはなったのですが。あの子、オキツグに反応し始めてからは急速に進んでしまって、限界が訪れたのが一年ほど前、私が闘技場であの子に戦いを挑んだ」

言葉を切って、そして続けた。

「オキツグを《氷王》の器にされないためにも、私が死ぬ必要があったんです」

茫然と、意味を租借したリュロンの情動が動き始める。

「・・・だからって、あいつが貴方を斬る必要は何処にもなかったはずだ」

「・・・・・」

「あの後、あいつがそれだけ、貴方との戦いを悔いていたかっ！」

「・・・申し訳なかったと思っています。勿論、貴方にお願いするという手段もありました」

ビクリと肩を震わせるリュロン。

「ですが、とれる選択肢はあまりありませんでした。既に《氷王》はオキツグに氷凍系術式を使うための力を注ぎ込め始めていましたし、器としての地均しが済んでからでは遅い。しかし、体の主導権は向こうに握られていましたし、私が出来るのは、私の意識が辛うじて残っている内にその時期を早める事だけ。私が死んで、新たな宿主が見つからずに現実界とのリンクを切られれば、しばらくは核石の中で大人しくさせられる筈でした」

しかし、彼女は生き残ってしまった。意識はなかったものの、ある日突然眼を覚まして状況を確認してみれば、オキツグの手に《白燐丸》が収まっていたのだ。

だから

「壊しに来たのです。あれを」

《王位》である本人には無意識にそれを避けようとする意識が働く。破壊を画策するには、事情を把握した周囲の人間がやるしかない。

「現状、《氷王》の宿主であった私は、僅かながら玉璽に対して影響を及ぼせる状態にあります。あの子が氷凍系術式を使えない理由は、私が直接核石に干渉しているからです。《白燐丸》でそれを扱えば確実に進んでしまうので」

だから、彼と戦うのを邪魔しないで下さいね。

そう付けくわえたイプシロン、『先生』はリュロンに背を向けてプロメテウスとオキツグの戦禍に飛び込むべく歩を進める。

「あなたはっ」

リュロンの声は揺れていた。『先生』は立ち止り、振り返る。

「あ・・なたは、『先生』なのですか!?」

すると彼女はじっとリュロンを見つめ、微笑んだ。

「ずっと諦めていました。妹分の貴方とも会えない覚悟で、死ぬつもりだったのだけれど、それでもこの幸運を得られた事については生きながらえた事を感謝してもいいと思っています」

その笑顔と裏に隠された温かさは、口調や表情は違うものの、かつての『先生』のそれだった。

今度こそ、完全にリュロンは戦意を喪失した。

「では、行ってきます」

ゴゴゴオンッ!

まるで地響きの様な音が鳴り響く。慌てて様子を見ると、プロメテウスが大規模な炎熱系魔法の爆発を放ったらしい。宙に飛ばされたオキツグは、《白燐丸》を固く握りながらも、衝撃で気絶しているのか受け身を取る様子もなかった。

そしてプロメテウスは追撃の一撃を加えようと、赤いサーベルを振りあげて間合いを詰める。
（まずい！）
体が勝手に駆け出した。

ピピピピピピッ
部屋に電子音が鳴り響く。
「う・・・・・・ん」
部屋の主は布団にくるまれながら僅かに呻き声を上げると耳を塞ぐように頭ごと布団を被りなおす。
「・・・・・・夢？」
しかし、それもやがて耐えきれなくなり手を枕元に鎮座する目覚まし時計に向ける。
二度、三度、手は空をきり、四度目でその登頂部を捉える。
寝なおそうか？確かに魅力的な選択肢だ。しかし、再び布団にくるまろうにも既に眼は冴えてしまっている。
「おき・・・・るか」
よたよたしながらベッドから降り立ち寝ぼけ眼をこすりながら部屋を出て、自室のある二階から階下のリビングに降りる。
「おはよう」
食卓には既に父が居て、兄と妹は既に制服に着替えていた。
「おはよう」
と父と兄が帰す。父は新聞を、兄はニュースを見ながら。
「兄貴、起きるの遅いよ」
生意気な妹の声だ。
「ほらほら、朝ごはんになるから顔を洗って来なさい」
食卓に器を並べていく。ちゃんと五人分、自分の分も用意されていた。無性に泣きたくなった。

「あ、ああ」
何故だろう。大事な事が他にもあった気がするのだけれど、今はこの光景を守る事が一番大事である事に思えてきた。
「何だ、どこか痛いのか」
父がそんな言葉をかけてくる。
「腕じゃないだろうな。美大にいきたいのだろう？」
商売道具だ。大事にしろ、と。
信じられなかった。あれ程絵描きを馬鹿にしていた父が自分の将来を認めている。
「この前も都知事賞とったんだってな」
と兄。
「ははは、それだけが取り柄だもんね」
と妹。
「はいはい、とりあえず皆席について、進路についてちゃんと『先生』と相談して決めましょうね」
「・・・・・」
兄も妹も、既に席についていた父も、そして母が食卓を囲む。
「どうした、席に着きなさい」
父がいぶかしんで促す。
「・・・・はは、何処に座れってんだよ」
その食卓には、先程まであった五つ目の椅子と朝食が消えていた。
「・・・・・」
視点が一段高くなった気がした。見れば、着ているのは寝巻に使っていたジャージでも、学校の制服でもなく、ところどころ傷ついたカーキ色の軍用防刃コート。ラフなジーンズに丈夫な、戦闘用の安全靴。
左手を腰に当てると頼もしい感触。
「・・・ああ、そうだったな」
なおも壊れたおもちゃの様に席に着く事を促す父。
「・・・分かっている。分かっていたさ」

腰から《白燐丸》を抜き放ち、切先を向けても家族は反応することはなかった。
俺の居場所はここじゃない。
「《氷閻刀・雪風》」
極寒の雪風に巻き込まれる様に家族も、食卓も、周りの風景全てが崩れていく。
辺りが白一色になり、遠くに更に光る何かが見えた。
「出口か」
徐々に近寄って来るそれは距離を詰めるごとに巨大化し、そしてオキツグさえも飲み込む。
その瞬間、オキツグは現実に意識を戻した。

（ぐ・・・明るい？）
朝になったのかと思ったが、よく見れば空自体は暗い。しかし、横から燦然とした光りがさす。夜明けだった。
「お・・・もい」
重い。体が思うように動かないと思ったら、自分に覆いかぶさるようにリュロンが倒れ込んでいた。
「・・・重いとはあんまりだな」
「い、いや、すまない。だけど一体」
ここまで密着した気恥ずかしさを感じながらも体を起こすと愕然とする。
「いや、分かっている。私の様な女ではな・・・」
あたり一面が血の海だった。オキツグにこれほどの血を流す傷はない。見れば、リュロンの背中は袈裟がけに切り裂かれ、かなり深い傷から血が噴き出していた。
オオオオオオオオオオオオオオッ

遠くで焔を撒き散らして雄叫びを上げる怪人の影。手に持ったサーベルからは、滴る赤い滴。プロメテウスを相手に、何故かイプシロンが戦っていた。

「お、おいっ、しっかりしろ」

「・・・・・無事か」

「あ、ああ、だけどそんな事より！」

「・・・無事かと聞いている」

弱弱しいながらも有無を言わせぬ迫力があった。

「・・・・ああ、問題ない」

「そうか」

リュロンは一度眼を閉じる。既に血の噴出は止まっていた。傷が治っているのではない。既に流す程の血が体内に残っていないのだ。

もう二度と眼を覚まさない様な気がして、おもわず語りかけようとしたが、次の瞬間に眼を見開いた。先程のぼやけた眼と違い、幾分はっきりしたものだった。

「私はお前の事が嫌いだ」

突然の嫌悪宣言、しかし、どんな言葉を返せばいいか分からなかった。

「・・・いきなり何だよ」

「お前は私の欲しかったものを全て持っていた。魔術の才能も、師からの愛情も」

リュロンは心の中で前半をやや否定しておく。

「羨ましかったんだ」

こんなこと言う女ではなかった。

常に厳しく前を見据え、冷徹で戦を好む女戦士。その強きあり様に心打たれ、出会って間もないころに思わず絵の題材にしてしまった程の。

そんな女が自分にもたれかかってこんなこと言っている。

意味は分かっていた。遺言だ。この女は遺言のつもりで最後の命

を燃やしている。
「お前の事が嫌いだったわけではなく・・・お前の立場にいるお前が嫌いだった」
「・・・その分苦労はしてるんだけどな」
一拍。
「・・・なあ、キスしてくれないか？」
「・・・はぁ？」
流石に意味が分からず遠慮のない反応を返してしまった。
「いや・・な・・・」
穏やかな様子でリュロンは言った。
「私は戦士だ。死ぬことくらい覚悟できてる。でも最後くらい、最後くらいロマンチックに飾りたいだろう？」
「・・・何で俺なんだよ」
「はは、お前しかいないからな。それに私は男は初めてだぞ？」
意地の悪い笑みを浮かべる。
「役得じゃないか？」
「し、知るか！」
再び瞳から力が抜ける。
「朝日は綺麗か？」
「あ？・・・ああ」
眼が見えないのだ。
「なあ」
リュロンは催促するように言った。
オキツグは戸惑い、一瞬躊躇い、リュロンを腕の中で抱きかかえる様に唇を重ねた。
初めてのキスはむせ返る様な血の味と、女のいい匂いがした。
「・・・おい、これでいいのか」
しかし、答えは返ってこなかった。
眼を閉じ、微笑みながら眠っていた。
オキツグは上を向く。

嫌い合っていると思っていた。自分達を繋ぐのはかつての師の呪縛、彼女に対する遠慮が一緒に居させているのだと思っていた。

（だが、違った）

思えば、誰かを題材に書いてみようと思ったのはこの女が初めてだったのかもしれない。それまでオキツグは、風景画と印象画が殆どだった。自分の全てを費やしてきた絵を描く技術を使って、描いてみたい。そう感じた事を、今の今まで忘れていた。

「すまない」

謝った瞬間、涙が止まらなかった。前の世界ではついに得られなかった温かい家族。それを単なる勘違いで、既に得ていた事を気がつけなかった。

「本当にすまない」

オオオオオオオオオッ

見ればプロメテウス相手にたちまわるイプシロンだったが、既に押され始めていた。当然だ。五行相克、水克火。不利な様にできている。

リュロンを丁寧に下ろすと寝かせた。

「行って来る」

立ち上がると未だに続いている戦場に向き直る。

全身が痛かった。

火傷、打撲、切り傷は勿論、骨折もしているだろう。

心が痛かった。

心の傷が何度も自分を責めてくる。

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い・・・・・・）

頭が割れる様に痛かった。

それも、これも、

何もかも

オオオオオオオオオッ
「全部てめぇのせいかっ！！」
《白燐丸》が鳴動する。機関部から燦然とした青の輝きが漏れる。
「ああっ！」
体中から津波の様に魔力が流れ出てくる。
そしてどうしようもない程の痛みが体を襲った。
瞳が蒼く染まり、光った。かつての師の様に。
毛髪から急激に色が抜け、白く染まった。かつての師の様に。
「ああっ！」
その急激な圧力と変化にイプシロンは攻撃をやめ、プロメテウスは感情の浮かばない瞳でこちらを見てる。
「あなた・・・」
何かを諦める様な悲しげな瞳に揺れるイプシロンは、『先生』と同じ顔をしていたが、そんなことは気にならなかった。
「・・・・・・」
体中の痛みが収まった時、再びオキツグは真っすぐ前を見据えていた。白い髪をなびかせ、蒼い目を幽鬼の如く光らせて戦いに臨む。
ちらりと後を振り返り、リュロンの姿を目に納めた。
「見ていろ」
(今度はお前が後だ)
そして戦いが始まった。

第１４話　ＤＡＷＮ

夜明け。
急角度の陽光が差し込み、辺りは赤紫の奇妙な空が広がっている。
（まるで魔界だ）
焔を噴き出す怪人に相対するのは、凍てつく氷の魔人。
オキツグは自分の変化を如実に感じていた。
（魔力の収束率が上がっている。制御力は段違いだ）
空いた左手を握ったり開いたりして感触を確かめる。高い潜在能力を持っていたオキツグだったが、振り回されがちだった己の才能を今は完全に掌握していた。
「・・・とうとう、至ってしまったのですか」
「・・・もう、楽には死ねませんよ」
イプシロンは悲しげな眼でその場をどいた。戦場をオキツグに譲る。
「ぎいいいいいひゃあああああああっ！」
奇声を上げながら焔の軍勢を従え、魔術で超人的に強化されたプロメテウスが仕掛けてきた。
「氷閻刀・・・いや、いい」
いつしか癖になっていた。『先生』が技に名前をつけて呟く癖。
「おおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
雄叫びを上げて心を、体を高ぶらせる。気息ともに充実した瞬間を狙って《白燐丸》を逆手に握って地面に突き刺した。
（風穴開けて死ね！）
まるで津波の様に氷柱の剣山がプロメテウスに向って精製され、押し寄せる。その速度、威力、キレ、どれにも無駄がなく、以前のオキツグを明らかに上回っていた。
「ぐ、ひ」
急制動、プロメテウスはなんとか致命的な一撃を狙う氷の剣を避

けたが、一部避けられずに腕や足に傷を造っていた。
「止まったな」
今度はオキツグが踏み出す。
地面を割り砕き、一瞬で距離を詰めるその体には、確かに魔術による生体強化の恩恵があった。オキツグは、というよりも普通は後衛系魔術を発動しながら前衛系魔術は発動できない。出来なかった。魔術の維持をダブルスタンダードで行わなければならない煩雑さ。そして魔力というリソースを二つに分けなければならない事による低威力化が問題だからだ。しかし
「っらぁっ！」
振りかぶり、振り下ろす。剣術におけるもっとも基本的な正中の一撃を、プロメテウスは辛うじて防いだものの、体ごと吹き飛ばされる。
「・・・・・」
オキツグは今、通常の埒外にあった。

オオオオオオオオオッ

プロメテウスが轟き、焔が蠢き、粘性を帯びた液体の様になってオキツグに押し寄せる。
オキツグは即座に、四方に氷の壁を形成。透き通った壁の向こうで焔の津波が押し寄せるのを見た。
焔の津波が到達。凄まじい音と衝撃を感じたが、氷壁に守られたオキツグに攻撃は通らなかった。そして焔をやり過ごすと《白燐丸》で氷の壁を切り倒して外にでる。
「ぐ・・・・・・ぎ」
今の攻撃を防がれると思っていなかったらしいプロメテウスの顔に、狂気に交じって驚きが混ざる。
オキツグはそれに構うことなく刀を前に掲げる。全身の神経を集中させて、その刀身に氷を纏わせていく。

やがて氷塊となったそれは、オキツグの力で整えられ、圧縮される。そして現れたのは氷の刃を纏った《白燐丸》だった。

「そうか、これが水闇刀」

漠然と理解した。氷でできた刀は正に透き通り、そして魔術で固められた絶対零度の力は何もかも凍てつかせ、何もかも切り裂くだろう。唐突に、今まで使っていた『先生』の技、《氷闇刀》とは全てこれの派生技で、その全ての源流がこれなのだ。

何よりも、《白燐丸》がそうだと語りかけてくる。

オキツグは地面を蹴った。

横を見れば三階建ての社屋の屋上が見える。

下方のプロメテウスは上空のオキツグに向かって焔を放つ。

押し寄せるそれらを、慌てるでもなく、ただ見つめると、無造作に《白燐丸》に纏って《氷闇刀》を横薙ぎに振る。

次の瞬間、振われた《氷闇刀》に拒絶されたかのように焔の進行が急激に遅滞し、そして消えた。

「が！？」

驚くプロメテウスの眼前に着地すると、慌てたように後退。しかし、オキツグは既に追撃の後ろ回し蹴りを放っていた。

なんとか腕でブロックするプロメテウスだったが、盛大に跳ね飛ばされて転がる。

（姿勢が崩れた。これで！）

「う・・・あ・・・・・わ、私は」

地面を踏み締めた力を抜く。様子がおかしかった。

プロメテウスの狂気に満ちた顔から、急速に正気が戻って来る。

「・・・ああ、私はとうとうやってしまったのか」

お互いに敵意と剣先は向けたまま、しかし、斬りかかろうにも躊躇わせる何かがあった。

（時間稼ぎ、命乞い、いや違う）

そんな雰囲気ではない。

イプシロンを見れば、悲しげに顔を横に振った。

「そうか、この前会った時とは随分様子が違うが・・・・貴様が《氷王》か」
「だとしたら何だ」
「・・・いや、互いに人の道を踏み外したものだな、と」
自虐的に笑いを浮かべるプロメテウス。
「・・・一体どういう事だ」
「何、お前も知っての通り、私は人造的に《王位》を造り出すために造られた強化人間だ。だが、焔の玉璽に対応しきれなかったのさ。体を狂気に引きずられてこの様だ」
「・・・・・・」
「っは、所詮は私は偽物という事か」
ぐっと眼をつぶり、そして開いた。
「私があとどの位正気を保っていられるか分からない。さっさと決着を・・・・・・」

『そこの三人、即座に武器を置き、手を頭の後ろにして腹ばいになれ！』

正に横やりを放つ一声だった。スピーカーで割れてしまった音と共に、かなりの数の足音。

『貴様たちは完全に包囲されている。抵抗は無駄である！』

ザザザ、と素早い動きで二人の周りに何処からともなく現れた特殊部隊風の剣導士が五十人近く。バイザーで黒い野戦服と防弾チョッキ、そして統一規格の魔導剣。見れば、少し離れた場所にいたイプシロンにも数人ついて剣を向けている。

『貴様ら三人には公務執行妨害、および殺人罪がかけられている！』

取り囲んでいる者たちを見て、軍隊かと考えたが、これは違う。軍の特殊部隊であれば警告せずに攻撃するだろう。もっとも効くかどうかは分からないが。

「それでいい、そのままだ。動くなよ」

恐らく魔導機動隊と思われる人垣、槍衾の間から出て来た人物の姿を見て、オキツグは自分の推理が当たっていた事を悟った。

「何か出来ると思わない事だ。こちらは殺害許可も出ている」

濃紺のスーツとベージュのコートに身を包んだ四十半ばの男。茶色い髪は短く刈り上げられ、服の上からでもわかる鍛え上げられた肉体に、鋭い双眸。

「帝都警察のブラート警部だ。貴様らを逮捕する」

逮捕だ。そう短く命令したブラートは懐から取り出した煙草に火をつける。

・・・・・・

しかし、機動隊員は一人として動こうとはしなかった。

「ん？どうしたんだ、お前達、早く逮捕を・・・」

「あんた」

オキツグは遮るように言った。

「あんた、剣導士じゃないだろ」

「・・・それが何だ」

話しかけられたブラート警部は不快そうに顔を顰めて忌々しそうに答えた。

「私をお前たちの様な邪法使いと一緒にするな」

その蔑視した言葉と視線でオキツグは理解した。

（マリア教、それも魔術とそれを使う剣導士を排斥する主張をしているウルツ派の教徒か）

機動隊員も剣導士であろうに、傲然と言い放つブラート警部であったが、機動隊員はそんな言葉に気分を害した様子もなかった。

それどころではなかった。

「俺とこいつの戦いをみていなかったのか」

「だからどうした。眼が穢れるだけだ」
機動隊員は剣先をこちらに向けてはいたものの、装備の下で、あるいは顔にビッシリと汗をかいていた。まるで何かに怯える様に。
「貴様らの様な邪法使いの、さらに犯罪人であれば絞首刑が相応しい。さあ、奴らを逮捕・・」

オオオオオオオオオオオオオオオッ

再びプロメテウスは吠える。
(ちっ、また狂っちまったか)
「・・・いや、まだ大丈夫だ」
焔をごうごうと滾らせ、まるで魔王の如き異様の怪人は僅かに残した人間の心で語った。
「頼む、私は実験動物で死にたくない」
実験動物。するべき事に反して、オキツグは自分の戦意がどんどん低下していくのを感じた。
(こいつも結局被害者ってことかよ)
ペサロ侯爵とギュネイ博士を殺しておけばよかったと心の底から後悔した。このおとしまえはいつかつけさせねばならない。
「頼む」
切実な願いにオキツグは剣で答える事にした。
「なっ、お前ら大人しく・・・」
「「貴様は、黙っていろ!!」」
その瞬間、爆発するかのように拡散した冷気と熱風、それに乗せられた魔力が警察官たちを撫でる。
「ぐ、う、うわあああああああああああああああああ!?」
一人が悲鳴を上げて脱兎の如く逃げ出した。
「お、おいっ」
そして恐慌は伝播する。一人、また一人と剣を取り落として逃げ

てゆく。
「ま、まて、またんか！」
逃げようとしたうちの一人を捕まえて怒鳴る。
「貴様、それでも警察官か！？」
「うるさい！」
機動隊員の鍛え上げられた拳がブラート警部の顔面に炸裂する。
「ぐは・・・なっ」
「あんたは魔術も使えない癖に偉そうな事ばっかだっ。さっきだって『目が穢れる』って戦況に眼も通そうとしなかったじゃないか！」
まともな剣導士なら、いや、そもそもまともな人間が見たら、この二人が異常な事くらい直に分かる。近寄りたくない。怪物と魔人の闘争の場に、人の子が混ざれる道理はないのだ。
「陛下から今夜の出動を戒められていたのに、功績欲しさで無理やり駆りだしたのはあんたじゃないかっ、付き合ってられるか！」
「まっ」
あっという間にブラート警部は一人になった。
「「・・・・・・」」
「・・・・・・」
プロメテウスは無言で剣、玉璽を振りあげると、ブラート目がけて小さな火の玉を発現、振り下ろすと同時に発射された火の玉は、避ける間もなくブラート警部の胸に着弾、吹き飛ばされて気を失う。
「私の最後が穢れる」
オキツグは小さく笑った。リュロンの敵だと言うのに、もはや現況がこの男ではないと分かってせいかもしれない。
「では」
「ああ」
二人とも自然と腰を落として、抜き打ちの姿勢に入る。
今日は人がたくさん死んだ。
相棒が死んだ。殺された。
それまでも色々なものを失い、そして今、ここでもまた戦ってい

る。
（我ながら、救いようがねえな）
だが、今は
「おおおおおおおおおおおおおおっ！」
「あああああああああああああっ！」
同時に仕掛ける。
「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」」
刹那、交錯した時間は眼に見えぬ程の一瞬。駆け出し、そして次の瞬間はお互いが背を向けて残心を残していた。
静寂
・・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
「ぐふ・・・・・」
口から血を吐いてプロメテウスは膝をついた。
「・・・・っ・・・・・」
オキツグもまた左腕のひじから先を失っていた。
血が吹き出るのも構わず、血振りをして《白燐丸》を鞘にしまう。
「・・・それが、本当に玉璽に認められた者の力か」
「・・・あんたも、ラリッてたときより段違いに強かった」
オキツグは左手を切り飛ばされたが、しかし、それ以上の傷はなかった。対して、地に伏したプロメテウスの背中には袈裟がけに切り裂かれた跡があった。血を噴き出して、既に血の海が出来ていた。
「・・・意趣返しのつもりか」
まるでリュロンと同じ死にざまだった。
「俺なりの決着の付け方だ」
「そうか」
そして最後に、感謝する。とそう言ってプロメテウスは息を引き取った。
本当の静寂が訪れた。夜明けの赤い光が破壊されつくした研究所

を照らす。
「オキツグ」
イプシロンだった。
『先生』と同じ顔をしている事とか、敵だったはずだとか、細かい事もあったが、しかし、一番大事なところの真相は、今の状態になって何となく分かっていた。
辺りを見渡せば、未だに気絶しているブラート警部があおむけになっている。片腕でおかしくなったバランスに苦労しながら、彼の傍らにしゃがみこむと、胸元から煙草とライターを拝借した。
一本咥えて火をつける。
盛大にむせた。
涙が出た。
懐から携帯を取り出して、コール。
「急患だ。重傷者多数、一人は気を失っているだけの軽傷者だ。場所は・・・・・・」
全てを告げ終えて、全てを投げ捨てる様にあおむけに倒れる。慌てて支えに駆けつけるイプシロンの姿が面白かった。

「それで、腕は大丈夫なのですか?」
昼の喧騒、平日の喫茶店は、仕事の昼休みに訪れる客で込んでいたが、その店の一番奥の方、窓から都市の外縁部を走る鉄道が眺められる席で、ぼんやりとしながらオキツグは相手の話を聞いていた。
「オキツグ?」
「・・・はい、何でしたっけ」
イプシロンの白皙の美貌がそこにあった。大人し眼なカジュアルスーツを着こなす彼女に見とれる他の客も多かったが、オキツグが睨むと蜘蛛の子散らす様に離れて行った。腰に帯びた魔導刀のせいかもしれない。

胸元のバイブレーションが鳴る。
「すいません、電話が・・・・・・はい、オキツグ・クシナ」
『君か』
声の主には覚えがあった。
『少し良いかな』
「何のご用でしょうか」
『そう邪険にしないでくれ、一週間のプロメテウス事件をおさめてくれた事は私としても大変感謝している』
あれから一週間が経過した。
研究所における派手な戦闘は、警官隊の突入のせいもあり、帝都中に知れ渡っている。いわく、帝都に潜伏していたプロメテウスという強力な剣導士が数々のテロ行為を実行、皇帝の生誕祭襲撃もテロリズムの一環として処理された。
『表向きは戒厳令を敷いているが、逃げ出した警官隊の事もある。君が事態を収めた事は公然に秘密だ』
だから、国としても内々に感謝のしるしを表したいと考えている。
「・・・・・・」
オキツグの顔と瞳は相変わらず冷え切ったままだ。
あの戦いで白く染まった髪は元に戻らなかった。今は黒い染め粉で誤魔化しているが、蒼い瞳はどうにもならない。しかし、その程度であれば生活を送る上で支障はない。蒼く染まり、余計に温度を低下させた瞳のまま、オキツグは言った。
「リュロンは・・・」
『・・・ああ、彼女の事か』
リュロンは死ななかった。完全に心停止し、致命傷を負ったが、オキツグとプロメテウスの戦いの最中、治療と蘇生を試みていたらしい。礼をいったら、私にとっても娘の様なものだからと返された。
しかし、死ななかっただけだ。未だに意識は戻らない。とりあえず生きてはいるが、意識が戻る可能性は今のところなく、自然と奇跡に頼るしかないのが現状だ。傷も治りきっておらず、いつ急変し

てしまうか分からない。
「俺が求めたのはただ一つ、俺の相棒を死なせない事」
ただそれだけだった。
「そう言った筈だぞ、ドルスター」
電話の向こうでビクリと震えたのを感じた。
『・・・気がついていたのかい』
全ては血縁があったユーリアへの愛情から始まった。他の貴族との兼ね合いから、表だってユーリアを助ける事が出来なかった皇帝が、自分自身をヴェルーナ家の執事として送り込んだのだ。
既に政務の多くを大臣と、後継者である皇子にまかせてしまっているからこそ出来たのだろう。傍らから、王として国の内情を知りつくしたレムルス三世は一計を案じる。
(俺を呼び込む事だ)
暗殺の脅威にさらされたユーリアを助けるために、更に危険なカードをきったのだ。第九位《氷王》に興味を示した貴族であり、またユーリアの暗殺を企てている急進派の頭、ペサロ侯爵はレムルス三世の策に乗り、プロメテウス計画の事もあってか、興味の対象をユーリアからオキツグに乗り換えた。
自分達はスケープゴートに使われたのだ。
「あんたのせいで、相棒は一生消えない傷を負った。もう目覚めないかもしれない。目が覚めたとしても、戦うことはおろか、歩く事すら難しいだろう」
『・・・・・・』
「覚えておけ、相棒の命が、そのままあんたと帝国の寿命だ。リュロンが死んだらあんたを殺す。あんただけじゃすまさない。帝国も滅ぼす。俺の持てる全てを使って」
だから、せいぜい相棒の心電図には気をつけておく事だ。
そう締めくくって電話を一方的に切った。
「すいません・・・失礼しました」
「いまのは?」

「野暮用です。まあ、保険みたいなもので」
冷えたコーヒーを啜る。まずい
「さて、俺はいきます」
財布から数枚の硬貨を取りだしてテーブルに置く。
「・・・一人で大丈夫ですか？」
「勿論です」
レムルス三世と約束した事がもう一つある。それが彼女の、イプシロンの身の保証だ。どうやら、『先生』としての彼女と親交があったらしい皇帝は快く請け負ったので、彼女は既に帝都で市民権を得ている。現状、爆弾は第九位であるオキツグだけだった。
彼女の近くにいるわけにはいかなかった。
「ありがとうございました」
まだ何か言いたげにしているイプシロンをそのままにして喫茶店の外に出る。
太陽は憎々しい程高く、燦然と輝いていた。
「ああ」
遥か上空、この辺りでは珍しい猛禽類のシャイロ鳥が西に向かっていくのを見た。
「西、か」
どの道、自分は帝都に居られない。全てをもみ消し、なかった事にし、そしてオキツグが望むものに庇護を与えることを条件に、皇帝から提示された帝都からの退避を受け入れた。厄介払いだ。
（西・・・・・）
とりあえず言ってみよう。列車に乗って、今度は一人で。
そして長い旅は続く。

第１４話　ＤＡＷＮ（後書き）

ネタ人物紹介
オキツグ・クシナ：本編の主人公、驚異の人間冷蔵庫。
リュロン：怪力女剣士。最近はすっかり眠り姫で王子様を待つ身。
ユーリア：ロリ
ドルスター：まあ、読めば分かるよ。
プロメテウス：ヒャッホーな放火魔。
イプシロン：直射日光は避けて下さい。
クヌート：苦労人、あと皇太子。
レムルス：半ボケ爺ちゃん。都合のいい事は忘れる。
って紹介になってないか・・・・

第1話　COYOTE

「冗談じゃねぇッ！」
その叫び声で男、オキツグは現実に呼び戻された。
「・・・・・」
胡乱な濃緑の瞳で周囲を見渡す。立ち並ぶ木製のテーブルにカウンター、その上に置かれた料理にグラス、そして匂い。それほど混んでいるわけでもなく、さりとて空いているわけでもない。
店の中央にはお立ち台があって、綺麗なブルネットの女が踊りながら服を脱いでいる。
怒号と歓声、そして淫靡にショーを繰り広げる光景は、この上なく退廃的だった。
「・・・何だ？」
掠れた声で呟くオキツグ。白髪をかき乱しながら今の状態を確認する。なんとも鈍く、倦怠感に満ちた仕草だったが、それは酒に酔っているせいだからではない。その生を倦んだ様な目つきは元々だ。顔の造作と言うよりも、本人の全てに向けて怠惰であるといった姿勢がにじみ出た様な視線。事実、その通りでなければこの様な場所で酔いつぶれてはいないのだろうが。
（ああ、寝ちまったのか）
そもそも途中から記憶がなかった。そこまで飲んではいなかったはずだが、やはり疲れていたのだろうか。
ふらふらとしながら席を立って、思い出したように愛用の軍用コートのポケットから小銭を出すとテーブルの上においていく。
ありがとうございました、なんて愛想のいい店員は期待できない店だ。喧騒を背中に店を後にする。
「ふぅ」
懐から煙草を取り出すと、ライターで着火。しかし、湿気ていたのか、火が良くつかない。なんとか先の方を灰に変えると思いっき

り吸い込んだ。
あれから、プロメテウス事件から二年の月日が立った。
帝都を出たオキツグは、西に進路を取ってクロプフェット市民国家、通称市国の自由貿易地区、マラキア市という場所に身を寄せていた。各国の企業、優秀な人材を集めようと関税、入国審査を極端に甘くした国策の結果、企業の誘致には成功し、経済的に目覚ましい発展を遂げてはいたが、闇社会の優秀な人材も入りこむ事となった。
（ああ、俺もその一人か・・・・・）
目覚ましい経済と、その陰にある闇。荒々しい暴力と、強かな経済という活気に満ちた都市、それがマラキア市だ。
雨が降ってきた。コートのフードを被ると、自分の白くなった髪が嫌でも目に入る。
「・・・・・」
最初は黒く染めていたが、そのあまりの面倒さに諦めた。放っておくと直に逆プリン状態になってしまうのだ。
気を取り直して歩く。酒で頭がくらくらするが、それがまた心地よかった。
ふと、視界の端に銀髪に密色の肌を持つ女が通りかかる。
かつての相棒と同じ地域の出身なのだろう。この辺りではその国も近いのでよく見かける。綺麗にナイトドレスを纏いながら傘をさすその女は出勤途中の水商売の女の様だった。
「・・・・ッ・・・・」
猛烈な吐き気が沸き起こり、背を丸めて膝をつく。胃と食道の蠕動で呼吸困難に陥るが、耐えていくうちに何とか収まって来る。
「・・・・・」
吐いてもどうにもならない。これは酒のせいではないからだ。
ポケットから軽金属のケースを取りだすと、そこから錠剤を数粒取り出した。
口の中に煽ると水も飲まずに噛み砕いて無理やり嚥下する。しば

らくすると薬が効いてきた。
「・・・・・」
オキツグは歩みをとめた。
前方には歓楽街の道を塞ぐように横一列に並んだ三人の男たちが立っていた。全員、腰には魔導剣をさしている。娼婦とその客がおそろしげ、そして迷惑そうに横を通り抜けていく。
「オキツグ・クシナだな」
「・・・・・・・・・」
「恍けても無駄だ。お前にはクロプフェットの闇組織からデッドオアアライブで十億近い賞金が出ている。護衛についた息子を殺した罪を贖って貰うと、頭領が言っていた」
あれから二年の間に様々な組織を転々とした。その殆どが闇組織だったが、犯罪で飯を食っている癖に人に約束の履行を求めたり仁義を求める理不尽さは性に合わず、また人として唾棄すべきものが多かったので、大抵殺し合い（オキツグによる一方的な虐殺）により泣き別れとなる事が多かった。
金融の闇組織からは構成員の命と共に金を奪い、薬物の組織からは同じように薬を奪った。
そして中心に立つ男がにやりと笑い、言った。
「悪いが死んでもらうぞ」
三人の男が突然霞んで消えた。
オキツグは慌てることもなく後方に飛ぶと一人目が地面に魔導剣を叩きつけているところだ。
（なかなか早い）
続いて右側面から首を狙った一撃、しゃがむ様にして避け、更に後方に飛ぶと上空から剣を振りおろしてくる三人目が接敵、オキツグは腰から魔導刀を抜き放つと即座に迎撃、鍔競り合いとなった。
「ほう、それがかの有名な《白燐丸》か」
「・・・・いや」
現在、オキツグは腰に二振りの魔導刀を差していた。一振りは師

から受け継いだ《白燐丸》である。もう一振りは師の勧めで持った代用品だ。最近では《白燐丸》をあまり抜いていない。

この三人、確かに凄まじい腕前だ。全員が近接格闘系に特化し、何よりも絶妙なコンビネーションを持っている。

「俺達は全員が等級制度で千位以内に入っている。貴様がどの程度かしらんが、俺達から逃げられる道理はない」

確かに、千位以内の剣導士が三人も徒党を組んでいる組織はあまりないだろう。この男達は十分に超一流だと言える。しかし

「何だ、その程度か」

心底呆れたように言うオキツグに、男はさっと間合いを切って距離をあけた。

「その程度とはどういう・・・」

男が話す暇を与えず、話していた男、ではなく最初に攻撃を仕掛けてきて距離の空いていた男に刀を向ける。

「へ？」

オキツグの剣先から人一人収まる程の氷塊が出現。

「穿て、氷弾」

バシュッ

そんな音と共に発射された氷は標的に着弾、標的の男を一瞬でただの肉の塊に変えた。

「な！？」

次の標的。四肢に力を込めて足元のコンクリートを蹴り砕く様に接敵、先頭のおしゃべりな男を素通りして後方の男の胸元に深く刀を突き刺して言う。

「弾けろ」

「ぐぶっ」

男は内側から爆発的に形成された氷の塊に膨らまされて、弾けて死んだ。

「な、な！」
驚いて言葉のていを成していない男に横薙ぎの一撃、あえて男を狙わずに、魔導剣を持っていた腕を斬り飛ばす。
「ぐあっ！」
切断された腕は宙を舞って遥か彼方に着地、近くにいた休憩中のショーダンサーが悲鳴を上げて逃げて行った。
「ぐおおおおおおおおおおお」
苦しむ男をどこか冷めた目で見ていた。
「たかが千位、お前の上にはまだ強い奴がたくさんいるだろうに」
そのための三人編成なのかもしれないが。
「な、何故だ！」
男は叫ぶ。
「薬で、麻薬で廃人になっていると聞いていたのに！？」
ポケットのアルミケースを思い浮かべる。
「・・・あれは鎮静剤だ」
人聞きの悪い事を言うな。
そう言おうとしたら男はバタッと倒れた。腕を切り落としたショック、そして鉄壁（と本人達は思っていた）の布陣を破られる事によって得た興奮が心臓まひを引き起こしたのだ。たかだかその程度でと以外に思うかもしれないが、外傷によるショック症状、それによる死亡は驚くほど多い。
「ああ・・・」
雨が強くなっていた。刀を血振りして鞘に納めると、周りの固まっていた時間がようやく動き出した。
悲鳴、怒号、殺人現場に騒然とした空気が辺りに充満する。その様子をどこか人ごとに感じながら、オキツグは路地裏からその場を後にした。

第2話　紅の記憶

『以上、クロプフェット市民国家、議員会館前からお伝えしました』
カメラが暗転し、周囲が安堵の雰囲気に包まれる。
レポーターをしていたジャーナリストの女、ライエルは、凹凸に満ちた肢体と密色の肌を僅かに汗で湿らせて、銀色の長い髪を後ろに払う。
「お疲れ様、ライエルさん」
冷たい紅茶の入った紙コップを差し出してきた男、エルマン・カーツは二十代後半の剣導士だった。金髪碧眼、白い肌に甘いマスクに反して、体は剣導士らしく、藍色の防刃衣の上からでも鍛えられているのが分かる。
女、ライエルはありがと、といいながらそのコップを受け取ると、一気に中身の飲み干した。
既に初夏である。レポーターとしてテレビに立つ事になったので、女物のグレーのスーツで固めているが、カメラがまわっていないの見えなんて張ってられない。直に上着を脱いだ。
「あたしって、本来政治は専門外よ?まさか、議員会館からカメラに喋る事になるとは思わなかったわ」
ライエルの本来の担当は外交、それも海外の軍事、戦争関係である。しかもレポーターではなくジャーナリスト、記者の領分だった。
「仕方ないですよ、クロプフェットに帝国の元皇帝、今は枢機卿でしたか・・・が表敬訪問なんて・・・あの国は同盟のアリア共和国と敵対状態にあったから」
憤然とした様子のライエルにエルマンが慰める。
ライエルは肩を怒らせながらも、一方で打算をしていた。
(これで顔が売れていけば取材もしやすくなってくるかもね・・・てか、こんなのこれっきりだろうけど)
ライエルがクロプフェット市民国家の国営放送、ＣＮＮの記者と

して雇われたのは、大学でジャーナリズムを専攻、卒業してすぐの事だった。以来、五年間、世界中のきなくさい外交と、戦争の臭いのする地域を行ったり来たりしている。普通はそういった危険な取材地域には女性記者は派遣されないのだが、ライエルの出身は西方の戦争ばかりしている氏族国家である。十歳になる前にクロプフェットに移民してきたが、そういった状況に耐性があると見なされたのだろう。

（まあ、事実ではあるんだけどさ）

一番驚いたのは、危険な地域での取材である事を理由に、護衛の剣導士まで付けられたのだ。それもエルマンは警察官、警察剣導士なのだ。ただの民間人に警察官が付きっきりで護衛とは。国営放送の力と、重役達の黒い繋がりの臭いを感じる一端だった。

胸元でバイブレーションが鳴ってライエルの豊かな胸を揺らす。

「はい、ライエル」

『ライエル君か、今何処かね』

「まだ議員会館前です」

『そうか、なら早急にクロプット通りに向かいたまえ』

随分急な話であるが、記者にはよくある話だ。しかし、ライエルはその言葉から他に含むものを感じた。

「・・・どうかしたのですか」

『殺人事件だ。君が一番近い』

「警務関係は私の担当ではありませんが・・・」

担当記者と険悪になりませんんか。そう言外に主張すると、電話の相手である上司は更に応えた。声には緊張があった。

『殺されたのは傭兵、剣導士だ。しかも三人同時に』

ライエルの顔がさっと引き締まる。物騒な話題に慣れている。仕事に臨む女の顔だった。

『しかも殺されたのはダールトン三兄弟だ』

「え？」

ここで出て来た意外な大物の名前にライエルは思わず声を上げる。

「殺したのが彼らではなく？」
『そうだ。彼らが被害者として、魔導剣を手に持ったまま遺体で発見された』
ライエルはそこで初めて事の重大さを悟った。
ダールトン三兄弟は、傭兵として名の知れた剣導士だった。悪名高いと言ってもいい。また、剣導士としても三人ともが千位以内の実力者と言う事もあり、その筋では有名だった。
（その彼らが殺された、しかも三人同時に？）
加えて、手に魔導剣を持っていたと言う事は戦いに臨んで敗れたと言う事だ。しかも、場所は歓楽街だ。巡回中の警察剣導士が駆け付ける間もなく彼らを瞬殺という事になる。ますます信難い。
「分かりました。とりあえず向かってみます」
通信を切るとエルマンが話しかけて来た。
「どうかしたんですか？」
「ダールトン三兄弟が殺されたそうよ。現場に取材に行くから」
その言葉の重さに、剣導士であるエルマンはライエル以上に驚いた。
「あ、あの三兄弟が？」
「ええ、しかも一瞬、三人同時だそうよ」
「・・・そんな、馬鹿な」
呻く様なエルマンの声には動揺が満ちていた。
実際に剣導士ではないが、戦争に関わるものとしてライエルはその動揺が分かった。
戦争において、最も確実に勝つ方法は、敵の三倍の兵力を集める事であると言われている。その原則を遵守、さらにはチームワークによって極限まで数の利点と、個の力を磨いたのが彼らダールトン三兄弟だ。実際には兄弟ではないが、血の繋がりを思わせる程のコンビネーションは戦場でも有名だった。最近は北方の部族間紛争に傭兵として出ていると聞いていたのだけれど。

（それを物ともしないほどの存在が現れた。かなりの大物、スクープのチャンスだわ）

記者としての魂に火がついたのを感じながら、未だに動揺するエルマンを??咤する。

「ほら、護衛さん。しっかりしてよ、怖い人が襲ってきたら貴方が守ってくれるんでしょ？」

「はは、僕じゃダールトン兄弟の誰にも勝つことは出来ないだろうけどね」

しかし、その表情には再び明るさが灯った。

（よし・・・・）

男の心は繊細だ。そう心の中で呟きながら、取材現場に向かった。

現場は騒然としていた。

歓楽街、居酒屋や風俗、ホストクラブが立ち並ぶ繁華街は、昼までである事もあり、今は夜の華やかさと騒々しさもなりを潜めている。

が、普段であれば静かな、閑散とした昼の風景を映し出すクロプット通りであったが、その通りのアーケードの前には老若男女の人だかりが出来ていた。

「はいはい、ちょっと通して下さいよっと」

人垣を押し開いて、抗議の声を上げる彼らを押しのけて、事件現場の最前列に向かう。

「さて、どうなっているのかな」

手に持ったデジタルカメラをビデオをモードにしている。局からは報道様のスタッフも来ているらしいので、自分は専ら取材に専念できる。大きなカメラを持ってくるとかさばるので、画質が落ちる事を承知で携帯性を重視したのだ。

「おっ、ライエル・ゾーリンバッハじゃないか」

警察の封鎖用の黄色いテープの向こうから声が聞こえた。

見れば大きく筋肉質な体をダークスーツで包み込み、茶色の短髪の下には厳の様な顔が乗りながらも、どこか愛嬌を感じさせる、そんな四十がらみの男が人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「あっゴルゴダ警部」

そこにいたのは、かつて新人研修時代にお世話になった警察官の姿だった。

「お前、警務担当だったのか？」

「いえ、殺された側が私の担当だったもので」

ゴルゴダ警部は顔を顰める。

「・・・未だに一般には発表されていない情報のはずなんだが・・・まあいい」

「それで・・・酷いのですか？」

すると、ゴルゴダ警部はやや迷う様な表情を見せてから「かなりな」と答えた。

警察官は皆が謹厳実直で真面目だ。本来、記者など無視して仕事に移るだろう。操作の内容を話すと言う事も決してしない。

ゴルゴダ警部が不真面目な警官かと問われれば、そう言う訳でもない。研修時代につかんだ警察の不祥事と、ゴルゴダ警部自身の浮気の現場をライエルが押さえているからだ。以来、奇妙な協力関係が成り立っていた。配属が変わって最近は顔を合わせる機会がなかったが、上司が専門外の自分を担当に充てた理由が分かった。

「おおっと、今回は流石にこれ以上は洩らせないぞ」

「左様ですか」

ゴルゴダ警部の真面目さに、記者としては不満、市民としては好感を持ちながらも、「最後に一つだけ」と切り出した。

「腕利きですか？」

この味噌は、下手に「犯人は」などと付けない事だ。少しでも捜査に関わる単語は避けて質問するのがセオリー。

「・・・・・ああ」

ゴルゴダ警部の瞳が人のいい中年から、刑事のそれに代わる。

「お前さん、この事件の？」
「はい、担当です」
「だったら・・・」
あまり関わらない方がいい。
真剣に、誠実にゴルゴダは言葉を紡いだ。直におどけて、「俺、俳優みたい？」などと返す。
挨拶をして現場を後にした。帰りは人も減っていてそれ程苦労はしなかった。
「ふぅ」
現場の緊迫した雰囲気は慣れるものではない。空気の張りつめ方は戦場の兵士の方が上ではあるが、その時はこちらも気を張っているのであまり気にならなかった。
（ああ、疲れた・・・・て、あれ？）
クロプット通りから少し歩いたところで落とし物を発見。麻布に包まれた小さな棒状のそれは、狭い路地に隠される様に置いてあった。
中身を確認する。
（魔導短剣？）
優美な外観の魔導剣だった。黒塗りの鞘に、金の装飾をあしらった装飾剣。
（・・・・・）
素直に警察に届けようか。可能性として、事件に対する関係性はどれ程のものか。
さっと素早く、その魔導剣を手に持っていた鞄にしまう。
これはきっと何かに繋がる。
「だから預かるだけよ」
記者としての勘がライエルに予感を告げる。

「もう、あまり一人でどんどんいかないで下さいね？」
「悪かったわよ。でも、こんなのでねをあげられても困るわよ？」
車を運転しながら恨み言を吐くエルマンをいなしながら、助手席で窓に肘をつきながら外を眺める。
先程のゴルゴダ警部の最後の言葉が気になっていた。
（あれは冗談・・・・・ではないわね）
女の勘だ。下手な嘘発見器よりも鋭い。
「で、この後はどうするんです？」
そう言えば空を見上げれば陽射しも弱まって来ている。あと数時間すれば日が傾き、そして夜になるだろう。道行く人々の顔にも、昼過ぎの食後の時間の倦怠感がにじみ出ている。
（そう言えばお昼がまだか・・・）
「ねえ、エルマン君。お昼は？」
「え？昼ですか・・・そう言えばまだですね」
そもそも、彼の仕事は自分の護衛なのだから当然に同じだろう。
「奢ってあげるわよ？」
「ほ、本当ですか？・・・・・・お願いします」
エルマンはライエルと同年代か、やや下と見るべきだろう。詳しい年齢はあまり聞いた事がない。自分の年齢も明かさなければならない様な気がするからだ。この歳になると実年齢を明かす事に抵抗が出てくる。
（ああ、歳とったってことかな）
今のところ仕事命のライエルだが、本音を言えば結婚だってしたい。今のところ恋人がいないのがやや不安ではあるが。
その点を踏まえてエルマンを考察する。
「な、何ですか？」
運転しているため、正面から目を離さずに気配で感じるライエルの視線にたじろぐ。
歳は問題ない。年収は警察官であるため、大手マスコミで記者として働き、既に年収一千万エーンを超えている自分よりは低いだろ

う。しかし、あまりそこのところは気にしない。彼は普通の警察官であるが、なかなか優秀らしい。機動隊を経て、この度警備部の転属が決まったと言っていた。この護衛の任務も、その研修の一環だと言う。

恐らくエルマンは自分に好意を持っている。

（まあ、そんな事今考えてもしかたない、か）

答えを出すのを後回しにして再び窓の外に目をやった。

「お昼ごはん食べたら編集部までお願い。そうしたら今日はおしまいにしましょう」

了解、そう返すエルマンの声を聞きながら移り行く窓の景色を眺めた。

クロプフェット市民国放送、通称ＣＮＮと略される局名は、そのまま報道番組の名前にもなっており、その国に暮らす者であるのならば一日一回は必ず見るといっても過言ではない。

あれからエルマンと食事をし、編集部まで送ってもらったライエルは、規定時間となって警察署に戻るエルマンを見送ると上司に取材結果を報告、正式に今回の殺人事件の担当になった。殺人事件はこの辺りではあまり珍しくはないのだが、腕利きの剣導士が被害者であるために、かなり水面下での注目度が高い。

『政治的背景、テロリストか、大国の特殊部隊の可能性もありうる』

編集長の言葉だった。

赤みがかった。空を見て、既にする事もないので帰宅する事に決める。

「あーあ、アフターファイブが寂しいなっと」

これ見よがしに呟いてみるが周りは誰もいないので言葉を返してくれない。

社屋を出ながら、一人身の美人に誰も声をかけてこない現実の理不

尽さをなじる。
（けっこう、いけてるつもりなんだけどな・・・）
スタイルもいい、背も女性にしては高く、可愛い系というよりも綺麗系の美貌で大学時代も大分もてた。しかし、仕事を始めてからはどんどん縁がなくなり、最近では随分御無沙汰というのもまた事実。
帰りに食料品を購入しにスーパーによる。明日の朝食にサンドイッチと、晩酌にビール、お摘みを籠に入れながら、何かが間違っている様な気がする。
レジを通して袋に詰めてもらい、ぷらぷらと袋をさせながら帰路に就く。
公園通りかかった。中には、何かイベントがあるのか、老若男女区別ない人だかりが出来ていた。
導かれる様に公園の中に足を踏み入れる。岩色の煉瓦が敷き詰められ、路を挟むように瀟洒な街灯が立ち並ぶ。路から外へ一歩踏み出せばそこは人の手で植えられた木々が生い茂る小さな林だった。
「だ・・・・・・・・・・・！」
「し・・・・・よ、お・・・・・・・」
「ち・・・・・・ぉ・・・・・・・・？」
声が近くになったので咄嗟に路をそれて茂みの中に隠れる。
噴水が中央に鎮座する広場では、囲むように立ち並ぶ街灯の光は弱く全てを照らすには至らなかったが、ぼんやりながら映るその影の数は思ったよりも多く、大きかった。
（結構な人数がいるな・・・）
こんな夜中に公園で大人数の集会。その奇妙さに好奇心を刺激されて思わず記者魂が刺激された。
「・・・・・・・・・お」
「こ・・・・・・・・ら」
やはり距離が離れているせいかよく聞こえない。

ガサッ

その音がした瞬間、ライエルは心臓が止まるかと思った。しかし、その音源は自分からではない。数瞬してその事に気がつくと心を落ち着け再び前方に視線を移す。しかし、その瞬間、ライエルは奇妙なことに気がついた。

（目が赤い？）

赤く光っている。一人残さず全員だった。全員・・・・・・・しかし、何故眼が光っているのが見えるのだろう。しかも、何を持って全員の目が赤いと判断したか

（！）

全員がこちらを向いていた。一人残さず。談笑していた者も、口論していた者も、静かに佇んでいた者も、皆一様にしてこちらを向いていた。

（やばっ、逃げなきゃ！）

入ってきた道をそのまま、公園の出入り口を目指す。公園を抜けるとそこは散歩中の老人、ジャージでランニングをしている若者、帰宅途中のサラリーマンの姿もあった。

（一体何だったのかしら）

ふと、辺りに眼を向けると散歩中の老人もジャージでランニングをしている若者も帰宅途中のサラリーマンも道を塞ぐように皆立ち止まり、ライエルのことを見ていた。赤い目を光らせて。

「うっ」

恐怖で心が引きつる。引き返そうと公園の方に目を向ける。

「見られた」

群衆の内の一人が呟くように言った。

「見られた」

同じようにもう一人が呟く。

「見られた」

「聞かれた」

「覗かれた」
「どうする？」
「殺そうか？」
「殺すか」
「殺そう」
「死体はどうする」
「埋めよう」
「切り刻もう」
「捨てよう」
「燃やしたらどうだろう？」
「それはいい」
「燃やそう」
「燃やそう、跡形もなく・・・・」
戦場で集団催眠により洗脳された兵士を見た時の光景に似ていた。
光った赤い目の内、一対、男が前に出てくると手を差し出した。
「寄こせ」
周囲の赤目達が追う様に合唱する。
「寄こせ」
「寄こせ」
「寄こせ」
「それを」
「寄こせ」
「こちらに」
手をこちらに向けながら、ゆっくりと歩いてくる。
（な、何なのよこれ！）
横道にそれて逃げる。道なき道、公園の樹林の間を抜けながら、
後ろに熱と光を感じて咄嗟に横に跳んだ。
ゴバッ

派手な音の爆発が聞こえた後、衝撃と熱に身を苛まれながらも後を振り向いた時、そこにあったのは大きな木が丸ごと燃える光景だった。

見れば赤目達は手を差し出した状態で魔力の光を灯していた。

「なっ」

暴力にさらされる女性から、戦場を渡り歩く記者の顔に変わる。

(魔導剣もなしに魔術を使ったっていうの!?)

すると再び歩み、追い始める。今度は魔術による肉体強化も使っているらしく、おぞましい程不自然な動作でライエルに追いすがる。あまり知性は高くないらしく、木々にぶつかりながらだったので距離は空いたままだったが、それでもおぞましい気持ちは禁じえなかった。

公園の塀を乗り越えると、そこはバス停だった。丁度良くバスが止まっている。

「あの、助けて、変な人たちに追われているの!」

一瞬、彼らも赤い目をした奴らなのではないかと、怯えたが、運転手と乗客たちは普通の人間だった。

運転手はさっさと乗る様に促すと車内放送をかける。

『ご利用のお客様には大変申し訳ございませんが、悪漢にお困りのご婦人を確保するべく緊急発進いたします。どうかご了承ください』

そしてバスは発進する。

安堵の息を吐きながら運転手に礼を言う。

「本当に有難うございます」

「良いってことよ、綺麗なお嬢さんに優しいのは万国共通さね」

車内の乗客達も朗らかな表情を浮かべている。

「で、とりあえず何処までいけばいいかね」

運転手の問いに少し悩みながら、ライエルは言った。

「・・・では、中央警察署までお願いできますか?」

「良いってことよ」

運転手がアクセルを更に踏み込もうとした瞬間、バス後方に光を

感じた。
「え？」
ゴバッ
衝撃、一瞬気を失い、何かの衝撃でバスが横転した後に、割れたガラスの破片の上で気を取り戻した。
「一体・・・」
何なのだろうと口に出しながら、答えは分かっていた。さっきの焔だ。今度はバスに直撃し、横転させた。車内を見渡せば、数人脱出した者もいるが、気絶しているまま、車内に倒れている者も多くいた。
運転手もだらりと運転席で気絶している。
「・・・・ッ」
一瞬、彼らの救助に自分も参加するべきかと考えたが、恐らくさっきの赤目達はまだ追ってくる。何故かは分からないが自分が目的の様であるので、むしろ自分がこの場に留まる事は危険だろう。
割れたフロントガラスから車外にです。幸いにもオイルの漏れはない様だった。
バスの後方を見渡せばやはりさっきの赤目達が不自然な挙動で素早くこちらに迫って来る。
「上等じゃないの、ジャングルで現地ゲリラも足で撒いた実力、見せてやるわ」
心の中で巻き込んでしまった人々に謝りながら現場を離れる。離れようとする。が
「痛・・・・・」
左足の足首を挫いていた。
焦る。流石に足を怪我しては走るこはおろか、歩く事すらままならない。
「それを」

「寄こせ」
「寄こせ」
「寄こせ」
既にそれほど距離のない位置までそれらは接近していた。
（殺される！）
目をつぶって身を強張らせるが、予想していたものは何も訪れなかった。
頬に冷気を感じて眼を開ける。
「え？」
目の前には見知らぬ男の背中があった。
長身痩躯を軍用の防刃コートで身を包み、その襟からは白髪が流れている。
男が立ちふさがり、赤目達はそれ以上近寄る事が出来ずにいた。
「感謝しろ」
男は呟いた。ライエルに、というよりも、独り言の様な言葉だった。
（それに・・・若い？）
後姿だけでは分からないが、声はまだ若い様な気がした。
「氷閻刀」
男が呟く様に言うと。腰に差した魔導刀を抜き放つ。
刃の周りに氷を精製すると、それあっと言うまに芸術品の様な透明で巨大な刀になった。
「おい」
男は振り向いた。以外に整っている男の容姿にやや驚いた。
「あれはあんたの敵か？」
「へ？」
「敵か、と聞いている」
男の言葉をよく吟味しながら、言葉を紡ぐ。
「・・・少なくとも味方じゃないわ」
そして助けようとしてくれたバスの運転手、受け入れてくれた乗

客の人々の事が思い浮かぶ。
「いいえ、敵よ」
「そうか」
男は獰猛に笑うと、その手に持った長大な刀の切っ先を赤目達に向けて告げる。
「女に寄ってたかって、死ぬ覚悟は出来てんだろうな」

第3話　共犯者

クロプフェット市民国の中枢、首都ダリオンライトは一千万人に及ぶ人が入り乱れる一大商業都市である。

軍事、でもなく、資源、でもなく、経済で国威を示すこの国は、その性質上、様々な人種が入り乱れ、国としても様々な国と友好を結んでいる。

無論、軋轢も多い。

（ああ、胃が痛い）

市民国外務省に所属する外交官、アラン・ボードは、最近白髪が目立ち始めた茶髪を撫でつけながら、ダリオンライト有数のホテルの最上階、ロイヤルスイートで接待に臨んでいた。

「ああ、ちょっといいかね？」

かけられた声にビクリと肩と心臓を振わせると、声が裏返らない様に落ちつけてから返事をする。

「はい、ご用でしょうか」

「うん、忙しいところすまないね」

相手は七十過ぎの老人だった。長い白髪を後に撫でつけて、ダークスーツに身を包む姿は老紳士そのもの。しかし、アランは彼がただの老人ではない事を知っていた。

「いえ、滅相もございません。陛下」

アトラス帝国皇帝レムルス三世の姿がそこにはあった。

アランは仕事で各国の貴賓と接する機会も多い。そのアランは常以上に緊張していた。仮に帝国臣民だったとしてもこれ程緊張しないであろう。

（むしろ、帝国の民であった方が楽だったかもしれない）

アトラス帝国とクロプフェット市民国の関係は良好とは言えなかったからだ。古き時代からの外交摩擦。争っている当人達はその理由も忘れてしまっていたが、ここにきて二国間で和平交渉が持ち上

がり始めている。
　つまり、アランが何か粗相をすれば、そのまま和平交渉が決裂する可能性もあるのだ。アランは一外交官として皇帝について、不自由な事がない様に調整する仕事を任されている。
「ああ、それでだね」
「はい」
　一瞬思考に気を取られていた事を自分で戒めた。
「私にも孫娘の様に可愛がっている娘が居てね」
「はい、存じております」
　確かユーリアとか言う公爵家令嬢だ。
「あの子もそろそろレディの仲間入りをするわけだし、そう言う事だから身につける物の一つでも贈ってあげたいと思うのだけれど。勝手が分からなくてね」
「そう言う事でしたら」
　アランはあらかじめ用意していた書類を差し出し、説明する。
「ふむ、これは？」
「はい、私が個人的にまとめさせていただいたものになります。若い女性が好むものとなりますと・・・この辺りのメーカーの化粧品はすぐにでも手に入ります」
　外交官として、その手の情報は事前に調べるのは作法、常識だった。
「・・・しかし、まだ彼女は一〇歳過ぎなのだが」
「むしろよろしいかと。その年頃の女の子は背伸びして化粧品に興味を持ち始めるものですので、しっかりと正しいメイクを教えてあげられる事が出来れば・・・」
「そうだね、そこのところは新しく雇ったメイドが上手くやってくれるだろう」
　どうやらお気にめしたらしい。
　そっと安堵すると、時計を確認した。
「陛下、調印式の準備にそろそろ出発します。ご準備よろしいです

か」
「ああ、構わんよ」
王冠が乗っていなければただの老人と変わらないレムルスの顔が、王者のそれに切り替わる。
「さて、向かおうか」
アランの胃痛は収まりそうになかった。

テレビがアトラス帝国との友好条約の調印式の様子を報道している。どこかこうした様子で伝えるレポーターは、他社の局員であるが、見た事あった。
「ふう」
溜息をつきながらライエルは窓の外に眼を向ける。既に夜も明けかけていた。
今日も仕事がある。寝ていたら遅刻するだろうから、徹夜決定だ。
それは大した問題ではないのだ。
「それよりも・・・」
ベッドの上で眠る男の存在。
体力自慢のライエルだったが、これを自宅まで働くのは骨が折れた。
コートと靴だけは脱がせたが、そのまま深い眠りについた男が起きる兆候はなかった。
「まったく、こっちの気も知らないで」
ライエルは先程この男と出会った過去に意識を向ける。

夕焼けを背中に白髪の男が氷の剣を抜いた。
（一体何・・・・）

グオォ

取り囲んできた群衆の内、一人が凄まじい突進で突っ込んできた。
しかし、男は慌てることなく鼻で笑う。
「凍れ」
突進した一人は白髪の男に迫るが、その動きが徐々に鈍くなり、そして完全に制止した。
「あ・・・・凍っているの？」
こちらに襲いかかる姿勢のまま、それは完全に凍っていた。氷の彫像と化したそれを茫然とライエルが見つめていると、男は後を振り返って笑った。
「なに、直に皆殺しにしてやる。そこで大人しくしていろ」
赤い軍勢が男に襲いかかる。
「あ、ちょ、前！」
「ん？」
振り返って人の津波を見ても眉ひとつ揺らさない。
「剣山」
呟いた男の声と同時に、氷の剣山が急激に精製。向かってきた者達を全て串刺しに貫いた。
「波濤」
そして氷の山はフレミング左手の法則によりレールガンの弾となって射出されて残りの赤目達を相当する。
まるで戦車の砲撃の様な衝撃と轟音が収まった時、そこに立っている者はいなかった。
圧倒的だった。
（何なの、この男・・・・）
仕事柄、剣導士と接する機会は多い。戦場で、それ以外の場所で見て来たが、そのライエルの眼から見て、格が違う。
「ぐ・・・う・・・・」

男は突然胸を掴んで苦しみ出した。
「ちょ、どうしたの!?」
しかし、男は応えず、ポケットからアルミケースを取りだす。が、指が震えて上手く開けられず、そのまま倒れて気絶した。
「ちょっと、しっかりして!」

そして今に至る。
直に救急車を呼ぼうとして、躊躇った。アルミケースの中身だ。詳しくは分からなかったが、明らかに何らかの薬剤。麻薬の類かもしれない。ともかく、何らかの薬物を常用しているのは間違いなかった。
いくら薬物中毒者だとしても、命の恩人である。恩をあだで返すのは気が引けた。
「う・・・・」
「あら、気がついたの」
ライエルが声をかけると、男は体を跳ね上げる様にベッドから跳躍し、ライエルは襲いかかってきた男に首を締めあげられた。
「ぐう」
「・・・ここは」
男の眼に知性の光が灯ると、周囲を見回し、そして直にライエルを放した。
「・・・すまない」
「そうよ、まあ、助けてもらったのはこっちも同じだけど」
「それでも、すまない。俺はどうやら恥知らずな真似をしていたようだ」
薬物中毒者、戦闘中に獰猛に笑っていたイメージから、もっと荒々しく乱暴なイメージを抱いていたが、意外な程理知的で肩すかしをくらった。

男の蒼い眼がライエルを見つめる。
「な、何よ」
「・・・・いや」
奇妙な沈黙があった。男の眼がテレビに向かう。丁度画面はアトラス帝国の皇帝、レムルス三世を大写しにしているところだった。
「・・・・・」
男の顔に嫌悪の表情が浮かぶ。
「帝国は嫌い？」
「いや」
男はすらすらと、意外な程素直に応えた。
「帝国は良い国だ。人も、経済も豊かだ。が、皇帝は嫌いだ」
「そ・・・・」
為政者を嫌う理由なんてそれこそ腐る程ある。
「さて」
と男は切り出した。
「俺の様な者がお宅にお邪魔していては具合が良くないだろう。お暇したいのだが、俺の魔導刀を返してもらえないか」
コートはハンガーにかけて部屋のフックにかけてあったが、男の見渡す範囲で魔導刀はなかった。
「・・・・・」
「・・・駄目よ」
男の眼に警戒の色が浮かぶ。
「・・・理由を窺ってもいいかな？」
ライエルは深呼吸をした。
「一つにこれ」
アルミケースをベッドに放る。
「・・・・・」
「これ、麻薬でしょ」
強張る男であったが、あえてライエルは明るい声を出して否定する。

「ああ、いいのよ、いいのよ、私、これをどうこう言うつもりもないし、警察に言うつもりもない。でも、一応武装解除はしておくべきでしょう？」

「・・・ああ、賢明な判断だ」

男はようやく苦笑を浮かべた。

半分に寂寥、もう半分に自嘲の色が見て取れる。

「もう一つは」

ライエルは仕事用の鞄からファイルを取りだして、一枚の写真を突きつける。

「これ、貴方でしょ」

そこには昼間の繁華街が移された捜査現場が写っていた。

「被害者はあのダールトン三兄弟で犯人がかなりの腕である事は分かっていた」

（まあ、あのダールトン兄弟がただ死んだだけだったら警察も動かなかったでしょうね）

一説には公安や諜報機関が動いていると言う話もある。

男は強張った顔のまま、口を開けたり開いたり、やがて迷いながらも口を開いた。

「・・・俺を、警察に突き出すのか」

「だから言ったでしょ。あたしは貴方を警察にちくるつもりはないって」

そして本題を切り出す。

「あなた第九位《氷王》なのでしょう？」

男は何も答えなかった。

「あたしは貴方に取材を申し込むわ」

これがライエルの狙いだった。等級制度における一桁台の位階を持っている剣導士は《王位》とはヒエラルキーの頂点だ。現在確認されている者達だけでも、軍の英雄だったり、宗教国家の国家元首だったりと、一介の記者風情では手も届かない存在だ。それが眼の前にある。

「勿論、映像つきでの取材を要求するわ。そうしたら魔導刀も返すし・・・・」

男の姿が消える。否、消えたのではない。人の虚を突く動きでライエルの胸元をつかむと床に引き倒して覆いかぶさる。

「あんたを殺してからゆっくり探すっていう手もあるんだ」

「か、簡単に見つかる様な場所にはないわ」

「だったらもっと簡単だ」

男が不気味に微笑む。

「拷問すればいい。ワイヤーで椅子に縛り付け、舌を引き抜き、一つ一つ指を切り落とそう。犯して孕ませて、腹を引き裂いて胎児を取りだす。ムニエルにして食わせてやる頃にはすっかり正気なくなって話してくれることだろう。あんた程の美人を犯すのはなかなか楽しい作業になる」

獣じみた男の視線にライエルはぐっと耐える。耐えて睨み返して言葉も返す。

「何も今すぐとは言ってないわ」

「・・・・」

「あなた、自分が警察からマークされている事に気がついてる？」

男の眼に動揺が浮かぶ。勝機を見出したライエルは言葉を続けた。

「あなたが何をしたくてこの街に来たのか知らない。でも、この街の警察は貴方を追っている。力でどうにか出来ても、安眠できる場所がないのは辛いでしょ？」

男は値踏みするようにライエルの言葉を聞いていた。

「私はその住みかを提供できる。って言っても私のこの部屋だけど」

この街を出ていく算段が出来たら、その時にあたしの取材を受けてくれればいい。

沈黙がしばらく続いた。

男は静かにライエルの上からどいた。

「・・・契約成立でいいのかな？」

「・・・ああ」

「あたしはライエル、ライエル・ゾーリンバッハ。あなたは？」
「俺が《氷王》である事は知っているのに、名前は知らんのか」
立ち上がり、ベッドに座ると言った。
「オキツグ・クシナ、お前の提案を受け入れよう。共犯者よ」

第4話　寂寥

アトラス帝国、帝都アクロポリス。
人口はクロプフェット市民国のダリオンライトと同程度の一千万人であるが、その性質は大きく異なる。
国内における商業の中枢であると言う事は首都であるから同じなのだが、それ以上に、アクロポリスは貴族の居住区域を持ち、さらには皇帝の居城も存在する。
貴族だけでは都市運営が立ち行かないので一般臣民の居住を認めたが、貴族側のプライドにより、居住区域は貴族が住む上区と、臣民が住み、その他商業施設が多い下区で大きく分かれる事になった。
実質的に、商業都市としてのアクロポリスはダリオンライトの二分の一なのである。
「まだ、目覚めないのですか」
白磁の肌に生糸の様な髪、恐ろしい程整った美貌に憂慮を浮かべる女はイプシロンだった。
上区と下区にも、それぞれを相手にした医療機関は存在するが、そこは公的資金の注入が必要不可欠な事もあって、上区の方がかなり先進的な医療が備わっている。
イプシロンの前に、ガラス越しで横たわる女の身に取りつけられた機器の数々を、ここにいない彼女の相棒が見たら、かつて育った世界のそれと大差ない事に驚くだろう。
「リュロン」
横たわる女は、オキツグの相棒、リュロンだった。
二年前の戦いで重傷を負ったリュロンは、一命を取り留めたものの、それ以来眼を覚まさない。
「・・・・」
じっとリュロンの顔を見つめる。
痩せただろうか？

そのはずだ。それに、二年前までは、美しいながらも女戦士の力強さを感じさせる面立ちだったが、やや肉が落ち、静かに眠るその姿には、儚さの様なものがあった。

「儚いあなたなんて、あの子は、オキツグは想像もつかなかったでしょうね」

イプシロンの眉が歪んだ。

それっきり語りかける事もなく、佇んで見守る。

心電図の音だけが響いた。

「あの子も大分やんちゃをしてるようですし・・・ん?」

静かな病院に似つかわしくない、ドタドタと病室に近くなっていく足音に耳を澄まし、やがて現れたのは金髪の少女だった。

「たのもう!」

「ユーリア、あまり大声をだしてはいけませんよ」

そこには、二年の時が美しく育てた、ユーリア公爵令嬢の姿があった。

「うぬ、分かっておる」

背も大分伸びた。それでいて、女性らしい丸みを帯びてきた事もあり、将来の美人を感じさせる。

お忍びという事で、今日は年頃の少女らしい、カットソーにスカートといういでたちだ。

ユーリアはリュロンに眼を向ける。

「・・・・目覚めぬか」

「ええ」

色々なものがないまぜになった瞳をガラスの向こうに投げかける。

「・・・・・」

ユーリアは最近膨らんできた自分の胸元に眼をやる。

わしっ・・・・すか

「ぬう」

「・・・何をやっているのです」
「いや、リュロンがこれをやってオキツグの眼が『くわっ』となってのう」
要成長じゃな、と締めくくる。
くす、とイプシロンは小さく笑った。
可愛い子だった。天真爛漫なところもあるが、それ以上に人も思いやれる。
今だって、あまり明るいとは言えない自分のためにやったのだろう。
「そろそろ戻りますか、屋敷へ」
「よいのか？」
「ええ、車を裏門に寄せますので、そこでお待ちください」
そう言って病室から立ち去るイプシロンは簡素なメイド服に身を包んでいた。

国際指名手配というものがある。
ある国で重大な犯罪を犯した、あるいは犯すか、極めて政治的な理由で拘束、殺害する以外にない者に与えられる立て札。
ゴルゴダ警部は、警察署近くの屋台街で遅めの昼食を取っているとふとそんな事を考えた。
そして、国際指名手配は賞金稼ぎが賞金目当てで追う事もあるが、実はそれは少数だ。多くはそれに関する情報を警察に伝え、逮捕時に出る謝礼を目当てとする者の方が多い。
その情報が警察にもたらされた時、多くの場合は殺人、強盗などの重犯罪なので、刑事課に報告される事が多い。
だが、まれに公安の窓口であったり、それ以外の部署に情報伝達を指定される事がある。
その多くは政治犯であるのだが、今日確認した手配犯の情報伝達

先は、なんと警察官のトップ、警察省大臣の秘書室に指定されていた。

（いったいどういう事だ？）

恐らく、深入りすると碌な事にならないだろう。しかし、警察官であるからこそ分かるこの異様さが、嫌でもゴルゴダの眼を引いてしまう。

（若い、男だった。政治家の馬鹿ボンが何かやらかしたのなら、後から金積めばいい訳だし・・・・）

思考が堂々巡りをしている。考えるのをやめてさっさと仕事に戻ろうと、眼の前のヌードルをかっこんだ矢先、ゴルゴダの瞳がそれを捉える。

「黒がちらつくんだ」

「しょうがないでしょ、我慢しなさいよ？」

そして道行く女を連れた男の蒼い瞳と、一瞬視線が交錯する。

何事もなく去って行った男達を尻目に、ゴルゴダは反射的に携帯電話を取りだした。

「だって、あなたの白髪、そうとう目立つのよ？」

「分かっているさ」

エミュルはオキツグを連れて朝のマーケットに来ていた。

オキツグは、朝、エミュルが買ってきた白髪染めでいきなり黒髪に戻された。視界の端にちらつく自分の髪の毛は、ここ数年で白に慣れてしまって、いきなり黒くなると気になって仕方がない。

（それに、目立ってもらっちゃ困るのよ）

エミュルは先日襲われた赤い眼の亡者を思い出す。いつ何時また襲われるか分からないのだ。彼の様に腕の立つ人間が自分には必要

だった。
本来の警護役であるエルマンには今朝連絡を入れておいた。秘密の取材に行くのでしばらく護衛は必要なし。
留守番電話で、相当焦ったエルマンの声が聞こえたが、今は勘弁してもらおう。
「で、何食べようか」
「ん？」
「朝ごはん、食べてないんだから」
周りは屋台で、いい匂いが二人の鼻腔と食欲を擽る。
「・・・でも、俺、金なんてないぞ」
「ああ、ったくもう、分かってるわよ。そんくらい。はぁ、そりゃ薬買ってりゃなくなるでしょう」
ばつ悪そうに頭をかくオキツグ。
「大手マスコミなめんな。給料はそれなりに貰っているし、あなたの取材が成功すれば経費も降りるし、何より出世のチャンスだからプラマイゼロ、プラスアルファ」
朝のピーク時を過ぎて、それほど混んでいない。これならどの屋台でも直に入れるだろう。
「奢ってあげるから、好きなところ選びなさい」
「・・・いいのか？」
「いいの、あなたの好みを調べるのも取材の一環なの」
ひらひらと手をふってさっさと選べと催促する。
すると、オキツグは御上りさん丸出しで、色々な屋台を覗いては「こっち、いやこっちか」などと悩み始めた。まるで女の子の買い物だ。
（一つ、この男は食い物には五月蝿い・・・・・・優柔不断の可能性高しっと）
取り出したメモに書き添えると、丁度オキツグは一つの屋台を興味深げに見ていた。
「これにする？」

「・・・ああ」
それは東の果ての大国に伝わる郷土料理の屋台だった。
暖簾をくぐって席に座ると、店主に注文する。
「醤油二つ、あ、やっぱ麺大盛りで」
ライエルに続いて席に座ると、そわそわと屋台の中を眺め始めた。
「どうしたのよ」
「ああ・・・・」
返事をしながらしばらく考える様に言葉を探して、そして言った。
「少し、懐かしい気がして」
そこでどんぶりが二つ、二人の前に差しだされる。
勢い良く啜るライエルの隣で、恐る恐る箸を持つと、一口すすった。
「ッ・・・・・」
何かに驚く様に眼を見開くと、更に勢い良く手と口を動かし始める。
ライエルが食べ終わって隣を見れば、何故か涙ぐんだオキツグの姿。
「何、泣いてンのよ」
「いや、こんな所で故郷の味に出合えるとは思わなくて」
その屋台の暖簾にはこの世界の大陸共通語で『ラーメン』と描かれていた。

『ラーメン』に大いに満足したらしいオキツグは、さらにその後見かけた屋台で『肉まん』を要求。普段の不景気な顔を打って変わって、かなりの上機嫌だった。
軽食屋で買った紙コップにジュースを啜りながら、店の横に設けられたベンチでくつろぐ。
「あなた、東の方の出身なの？」

「東、ああ、まあ、そうだな」
歯切れの悪いオキツグであったが、ライエルは思い出す。
(箸は使いなれた様子だったわよね)
クロプフェットは多国籍で、様々な民族と文化が入り乱れている。幼いころから暮らしているライエルは問題なく箸を使えるし、そこで暮らす多くの者がそうであるため、食文化もそれに合わせたものも多い。が、外国人にとっては慣れないため、はじめは苦労すると聞いた。
「ずっと帝国圏内で活動してたからな」
その言葉で合点が行った。あの国は大国ではあるが、あまり他国との交流を好まない。故に文化も統一的な風潮がある。
「実に七、いや八年ぶりのラーメンだった」
日も昇り始めて暑い。汗ばみ始めた肌を感じながらライエルは考察する。
(八年、故郷を出て八年って事?)
「さて、今日の予定だけど・・・」
「・・・いや、先に俺達、と言うよりも俺に用がある奴がいるようだ」
それまで、やや緩んでいたオキツグの表情が、急速に引き締まり、戦士のそれに変わっていく。そのあまりの変わり身の早さに内心驚きながら、どういう事か聞こうと思って、周りを取り囲む人垣に気がついた。
「この人たち・・・・」
警察剣導士の機動隊だった。

『じゃ、そう言う訳だから。よろしく!』
「ちょ、ちょっと待って下さいよっライエルさん!」
相手は、エルマンの嘆願も虚しく、既に通話を切っていた。その

後何度かかけるが『おかけになった電話番号は・・・・以下略』が流れるのみである。
「まったく、あの人は」
そこで相手に怒るのではなく、心配して焦るのはエルマンの人の良さだろう。
仕方なく警察本部に顔を出す事に決めた。
（ああ、報告するのが憂鬱だ）
こちらは民間人に研修の協力をお願いしている立場である。向こうが拒否している以上、仕方のない話であるが。
ダリオンライトの警察省本部は、都市警察、国全体の警察活動の要である事もあり、かなり大きく、立派である。
帝国の王宮とはまた違った、現代建築技術の粋を集めて建設されたそれは、まだ落成から数年しかたっていない事もあり、きらびやかな外観を有していた。
正門に立つ当番に挨拶しながら署内に入ると、防護服に身を包んだ警察官、機動隊員であふれ返っており、エルマンは驚くよりも呆然とする。
（え、何？）
「おおっエルマンか！？」
その内の一人、ゴルゴダ警部が駆け寄って来るのを見、思わず敬礼をする。
豪放な外見と口調に似合わず、気さくで知られる彼は、手で「いいんだ」と返しながら、やや焦った様子で話を切り出した。
「丁度いいところに来た」
「どうかしたんですか？」
「大捕り物だ」
興奮した様子で手配書を差し出す。
「大統領府からの命令だ。こいつを捉える。かなり強力な剣導士らしいからな」
万全を期したい。

そう締めくくったゴルゴダ警部の顔には、警察官としての使命感に満ちていた。

周囲の警官達も緊張した面持ちである。

（この男・・・）

白い髪に蒼い瞳という特徴的な容姿。意外と若い。自分よりも若いのではないだろうかと思いながら、ふと思った疑問を口から出す。

「ところで、こいつ、何やったんでしょう。罪状欄が空白ですよ？」

「お前」

ゴルゴダは呆れた調子で質問に答えた。

「そう言うのは大抵は政治犯かテロリストだ。防諜の関係で、反政府組織に何処まで把握しているか知らせないための慣例だっって警察学校でやったはずだぞ」

「あ、そっか、すみません」

既に腰に警察で支給されている魔導剣も装備してある。ライエルについていくために普通のスーツ姿だったが、着替えている暇はなさそうだ。

再び疑問

（こんな若くて、国が必死になる程の剣導士って一体・・・）

「何っどういう事だ！！」

ゴルゴダの大音声が正面玄関に響いた。

皆がその場に立ち止まり、ゴルゴダに注目する。

その後も、何度か怒鳴る様に会話をすると、苛立たしげに携帯を切った。

「どうしたんですか？」

「どうもこうもあるか」

吐き捨てる様に言った。

「どこかの馬鹿が先走りやがった。我々も現場に急行する」

「現実は甘くなかったという事か」
自分達を取り囲みつつある警官隊に驚くでもなく、ふてぶてしく座りながらジュースを啜るオキツグは言った。
「え、どういう・・・・」
事?、と問おうと思ったライエルであったが、発言を無言で止められて黙る。
「そう、いい判断だ。動くなよ」
警官隊の中から男が一人出てくる。
「殺害許可も下りているんだ。抵抗は無駄と知れ」
その男は三十代後半、金糸の様な髪を後ろに撫でつけ、細身の体を仕立てのいい二つボタンのスーツで身を包んでいる。ライエルはそのスーツを見て、それがとあるブランドの最新作である事を看破したが、一介の公務員である筈の警察官が、そんなブランド物のスーツを着こなしている理由も直に把握した。
「警察官僚か」
淡々と言ったオキツグの言葉には何の感情も含まれてはいなかったが、それが余計に含みを感じさせる声だった。警察官僚である事を看破された男は、驚く事もなく、むしろ誇らし気に胸を反らせるように言う。
「そうだ。私から逃れられると思うなよ」
「・・・俺は」
オキツグは訥々と語り始めた。
「俺は、警察官が嫌いだ。剣導士として各地を渡り歩いてからは更に嫌いになった。点数稼ぎのネズミ捕り、上司に媚び諂い、市民に当たり散らす糞共」
嫌悪感を隠すことなく堂々と言った。
「お前達は魔導剣を持っている奴らを犯罪者予備軍に仕立て上げたいみたいだが、あえてそれに乗ってやろう」
立ち上がると、オキツグは魔導刀の柄に手を添える。

プシュッ

そこで投げ込まれた空き缶の様なものを見る。

「あっ」

暴徒鎮圧用の催涙グレネード。

思わず目をつぶるライエルだったが、オキツグは冷静に一歩踏み出すと、グレネードを器用に足ですくい、投げて来た方向に「返す」と言って蹴り返した。

パシュ

爆発したグレネードのガスに巻き込まれてもがき苦しむ警官達。

「くはは、馬鹿みたいな糞共だ」

邪悪な、本当に心の底から憎いものの不幸を喜ぶオキツグの顔がそこにはあった。

「さて、行くぞ」

ライエルの手を強く握って引いてくる。

「・・・・・」

心臓が一瞬高鳴った。

「ま、待て！」

苦しげに息をしながら警察官僚の男が叫ぶ。

「貴様みたいなテロリストの好きに出来ると思うなよ！」

そう言われると、オキツグはふと考える様に眼を閉じ、そして開けた。

「・・・もう少し期待に応えてやってもいいと思う」

もがき苦しみながら警官達がビクリと震える。

オキツグはライエルの後ろにまわり、左手で抱き寄せる。

「ちょ、ちょっと」

「動くな」

抜いた魔導刀の刃をライエルの首筋に充てた。

「この女の命が惜しくば、現金で一億エーンと逃走用の車を用意しろ」

魔導刀の機関部に燐光が灯る。

「俺は逃げる。ここまで大人数で押し掛け、取り囲んでおいて、自滅した。お前達に警察上層部はどんな判断を降すか楽しみ極まりないな。特にそこの警察官僚気取りの男」

「きさっ」

オキツグはライエルを抱き寄せたまま跳躍。途中で壁を蹴り、反対側の四階のビルの屋上に降り立つと疾走する。

まさに、それは風の様な疾走だった。

更に加速したオキツグは隣の六階建てのビルに跳躍して、ビルとビルを渡って走る。

「こう言った事は相棒の専売特許だったのだけど」

「え、何？」

ジェットコースターよりも遠慮のない機動に耐えるの精一杯のライエルが聞き返すと、何でもないと短く応えた。

途中で下を見下ろすと、生身ではありえない程恐ろしい高さに居るのが分かる。不思議と怖くはない。

その中で、恐らく先程の警官達の応援であろう、赤いランプを光らせた車両が道を行く姿の中に、一瞬、エルマンの姿が見えた。

「どうした？」

「ううん、何でもない」

一分か二分程して、場所が何処だか分からない雑居ビルの屋上に着地する。

オキツグは乱暴にライエルを落とした。

「ちょっと、痛いっ・・・」

抗議の声を上げて振り向くと、オキツグは真っ青な顔をして苦しんでいた。手が震えながら胸元に向かう。

（いけない！）

「駄目っ、薬にたよっちゃいけない！」

しがみついたオキツグの手には、あのアルミケースが握られていた。

「駄目、逃げちゃ駄目！」

ライエルは自分でも不思議に思っていた。何故自分がこんな事言っているのだろう。こんな必死になっているのだろう。そして、ライエルには何となく、オキツグの薬の摂取時期が分かってきた。

恐らく、心理的外傷が、心の傷を思い出してしまった時に、その痛みから逃れるために薬を使っているのだ。無理やり押さえた心の痛みが、薬効の終りと共に更に強力な波となってオキツグを襲う。それを避けるために薬を使う悪循環。

悲しい連鎖だった。

ライエルが生まれた国は貧しかった。ライエルの家はそれ程ではなかったが、幼い娼婦に、失業者の強盗、戦争で住みかを失った難民であふれ返っていた。食物よりも薬の方が安いくらいで、空腹と絶望を忘れるために薬を服用する悲しい市民達の姿とオキツグが重なって見えた。

オキツグはライエルの腕を振りほどかない。力で無理やり引きはがす事もできただろうに、腕の内側の筋肉と外側の筋肉が何かに堪える様に力を蓄え、パンパンに膨れているのが服の上からでも分かった。

「・・・・」

一本一本、指を開いていくと、やがてアルミケースを床に落とす。

そのままオキツグは膝をついて倒れた。

「あ、ちょっと！？」

ぜいぜいと荒い息を吐きながら、血走った目で何かを話す。

意識が朦朧としているようで、言葉もはっきりとしなかったが、何を言っているかははっきり分かった。

すまない、すまない、許してくれ

ライエルは何も言えなかった。
こんな苦しい思いしながら、その口から出てくるのが懺悔の言葉なんて、それ程この世界は優しくないのだろうか。
オキツグのを抱き寄せる。頭を撫で、背中をさすると、安心したのか、オキツグの意識が眠りに入りかける。
「ふう」
まるで大きな息子が出来たみたいだ。
その瞬間、鞄が赤く光った。
「え？」
慌てて鞄の中身を確認する。今は派手な事をして見つかるわけにはいかないのだ。
赤く光るのは布が巻かれた棒きれ、いや、あの魔導短剣だった。
「一体何が・・・・」
布を開いて確認すると、直に光は消えてしまった。
「う・・・あ・・・・・」
悪夢でも見ているのかと思って見ると、オキツグは驚きに眼を見開き、声にならないうめき声を出して、ぽつりと言った。
「焔の玉璽・・・・・・」

第5話　不明記号

王としての責務が何たるかを問われた時に何を上げるか。
レムルス三世の場合、間違いなく、間断なく応えるだろう。
『死ぬ事である』
それは古き時代は戦場で。政務に命をすり減らしながら、政変があれば真っ先に吊るし上げられ、処刑され、例え、自分が関わっていない政策についても、国益を損なう様な事をすれば、やはり処刑される。
近頃の民主主義における政権運営の様に、退陣してお茶を濁す事は難しい（企業で言うと家族経営だからだ。経営陣の刷新は王政の廃止、すなわち王の打倒に繋がる）故に、生まれた頃より王としての哲学と、重責を担うだけの知性、品性、実力。また、数多のライバルを生き残るために蹴落として王になる競争力が鍛えられる。
恐らく、優れた国とは、学力水準でも資源の有無でもなく、優れた王を排出する事が出来るか、そのシステムを持っているか、否かである。
レムルス三世は、訪れた国の大統領との会談を終えた帰りの車で、ふとそんな事を思った。
「お疲れ様です」
隣でアランが労いの声をかけてきた。思考遊びの間を、老王の疲れと見たのだろう。
（いや、実際疲れているか）
レムルス三世は苦笑した。昔の自分だったら考えられない事だ。同盟を築くためにきたとはいえ、他国の、それも外交官に疲れた様子を見せてしまうとは。
「アラン君」
「はい、何でしょう」
「この国は、良い国だな」

突然の賛辞に、ややアランは困惑しながら礼を言った。
大統領との会話は実に有意義なものだった。レムルスよりも二まわりは年下だが、為政者として決して劣らないものを持っていた。
「そうだ、昔話をしよう」
「昔・・・話ですか？」
「ああ、そうさ。私はね、今でこそ隠居の身だが、昔は軍を率いて戦争してね。魔導剣を振って前線に立つ事もあった」
年寄りの自慢話だろうか、と言う感情が顔から隠し切れていないアランを見てほくそ笑む。
（ああ、そうじゃないんだな）
「そんなこんなで、ある日、遠征を終えて久しぶりに帝都に帰って来た時、丁度、一部の腐敗貴族、文官達の不正が見つかってね。父もそれなりに武名を馳せた時代があったみたいで、まあ、怒ってその貴族の首を剣で落としてしまったのだよ」
いきなり物騒な話をされて固くなるアラン。
「私が宮廷に戻った時も、父がその貴族達を横一列に並べて首を刎ねている真っ最中でね」
あれは驚いたなぁと朗らかに笑うレムルス。
それはつまり、失礼な真似した・・・・分かっているな？と言った具合にも解釈する事が出来、更にアランの心臓が鼓動を早める。
「戦場の心得なんて出来てない貴族ばかりだったから、悲鳴を上げて逃げ出しちゃって、それが私の方に向かってきたものだから、つい抜き打ちに首を飛ばしてしまったんだよ」
『つい』で首を飛ばされた貴族もたまったものではなかったろう。
しかし、その『つい』でも人を殺してしまえると言う事実にアランは驚き、慄いた。
「お見事、だって」
「はい？」
「いや、首を落としたらね。周りの騎士たちも、普段はめったに笑わない父まで満面の笑顔で拍手していたよ。仮に不正をはたらいた

者がいたとして、その者の首を落としたいと思うかい？」
「へ・・・私、がですか？・・・・・いえ、考えられません」
レムルスは満足そうに頷いた。
「それこそが民主主義なんだよ」
そして、いいかい？と続ける。
「どんな形にしろ、王と名乗る輩というのはとにかくそういう存在だと思いなさい。理不尽で、道理なんてあったものじゃない。正に不条理を体現した様な存在なのだよ」

何かが視界の端で光った気がした。
「グレネードッ、来るぞ！」
考える暇もなく、反射的に地に伏せると、爆発、振動、凄まじい音が地面から伝わってくる。
「おい、ぼさっとするな。ここは戦場だぞ！」
そう、ここは戦場だった。
思う様に声が出ない。考える事すら億劫で、手元を見れば巨大な魔導大剣が握られている。それで、自分の立場とすべき事がすぐ分かった。
地を駆ける。まるで砲弾の如く、本物の砲弾と榴弾が抉った大地を駆け巡る。
「おおおおおおおおおっ」
気がつけば口から声が、雄叫びが出ていた。
豆粒の様な大きさにしか見えなかった敵が、すぐさま目の前に現れてくる。引きつった恐怖の顔をしている敵に一閃、一撃で肩から腰まで両断した。
周囲には腐る程の敵がいた。
接敵、両断。
接敵、両断。

接敵、両断。
繰り返していくうちに、敵はそこにいなくなっていた。
「大戦果だな、准尉」
声を架けられて振り返ると、返り血を浴びながらも満面の笑みを浮かべる男、襟元には少佐を示す階級章。
辺りを見渡せば、死体と、魔法と、勝利の凱歌を上げる仲間達で満ちていた。
「戦争なんて、嫌いだ」

ダリオンライト警察省本部。
普段であれば高級官僚の本拠地として、まるで城の如く整然とした雰囲気に包まれているが、今のそこは、さながら戦場だった。
エルマンは、人の行き来の激しい対策本部と銘打たれた大会議室のドアを室外の椅子に座りながら茫然と見つめている。
ふと野戦病院の様だと思ったが、別に怪我人はいない。彼らがしているのは人探し、その情報整理だ。
「何故こうなったんだ」
現場に急行する途中、何者かに抱きかかえられて空を飛ぶライエルを見た。一瞬見間違いかと考えたが、その後の、先行したメンバーの話を聞いて疑念は確定に変わった。
「エルマン巡査長」
声をかけられて緩慢に振り向く。正直、何もかも億劫だった。
「エルマン巡査長っ」
再び強く声をかけてきたのはゴルゴダ警部だった。
立って敬礼する。
「申し訳ありません。少し呆けてました」
「いや、いい。お前もそんな気分じゃない事くらい。分かっている」
顔の厳つさの割に気さくで、とても下から好かれているゴルゴダ

警部は、普段からあまりそう言った事に五月蝿くない。
「自分が警護を外れていたばっかりに・・・・すいません」
「向こうが拒否したんだ。仕方ないさ」
それに、と続ける。
「緊急配備も着々と進んでいる。お前もそこでへたれている暇がなくなるから、そのつもりでな」
「・・・・はい」
よし、といいながらエルマンの背中に紅葉をくれてやるとその場を去って行った。
「・・・・・・」
エルマンはライエルが好きだった。
警護のために色々な場所についていくうちに段々と出会ったが、向こうも憎からず思ってくれていると思っていた。
吊り橋効果である事も自覚している。しかし、それは切っ掛けにすぎないはずだ。任務と言う事を除いても、自分はこの女性を守って死のうと考えたくらいだ。
それなのに
あの時、誘拐犯の腕に抱かれて空を飛んでいる時にライエルが浮かべていた顔は、恐怖でも憎悪でもなく、安堵と慈しみだった。
納得がいかない。自分に守られている時ですら、その表情の一片も浮かべてくれた事はなかった。
（これは嫉妬だ）
エルマンが落ち込んでいるのは、ライエルを守る事が出来なかったこともそうだが、それ以上に、ライエルを腕に抱いていた男に対する嫉妬心が原因だった。
「俺は最低の警察官だ」
顔を押えて呻く様に呟く。
しかし、エルマンの情念の焔の勢いは留まる事をしらない。もはや、自分ではどうにもできないほどにそれは育っていた。

クロプフェット市民国、首都ダリオンライト、三番地区オルレアン通り。

老人アーガスは欠伸をしながら、作業場の机の椅子で新聞を読んでいた。

作業着に包まれた、でっぷりと太った体を揺らし、眠気に満ちた眼で、半ば義務感で新聞を読む。新聞を読んでいる限りは仕事を続けていられそうな気がする。これは信仰に近い気持ちだった。

アーガスは警察の剣導士だった。といっても現役だったのは遥か昔の話である。使うよりも弄る方が性に合っていたのか、その適性を買われ、警察では魔導剣の技術スタッフをしていたくらいだ。

定年退職後、退職金を使って自分の工房を開いた。長年の夢だった工房はなかなか盛況で、古巣の警察剣導士もよく利用してくれる。自分でも、長年培った技術と知識はなかなかのものであると自負している。

現在は日の出前、外の通りには流石に誰もいない。

「テシアの奴、追い出さなくたっていいだろうに」

妻と口論になったのだ。いつまでも仕事してないで、さっさと隠居したらどう？

良くある話だ。

しかし、職人が引退すると言う事は、死に等しい。第一、辞めたら辞めたで、家に居て鬱陶しいと文句を言うに決まっているのだ。それなりに長い人生経験で、妻は、女とはそういうものだと悟っている。妻の好きな紅茶、少し良い茶葉を買って帰れば機嫌を直すであろうことも想定済みだ。

作業場の隅に置かれたテレビをつける。

朝一番の報道番組で、最近結婚した女性キャスターが原稿を読み上げる。

バスが爆発で横転、死傷者多数。極左系テロの疑いあり。

しかし、アーガスはそれが嘘である事を知っていた。一応は元警察官である。独自の情報網もあり、なおかつ、得意先の剣導士からもよく話を聞く。

作業台の下の引き出しを開いて紙を取り出す。

手配書だった。罪状があやふやでないも書いていないに等しい。これは政治的背景を持つ者と言う意味だ。

クロプフェット市民国の手配書をしまうと、一般には出回っていない、闇社会の手配書を取りだす。粗雑な作りで写真も荒かったが、情報量はこちらの方が勝っていた。メンテナンスを受け持っている剣導士が置いていったものだ。

（《氷王》・・・か）

等級制度の頂点、《王位》としてあがめられる最強の理不尽達。一般には知られていない事だが、元警官として、技術者として、彼らの持つ魔導剣が特殊なものである事は分かっていた。

（一度でいいからメンテナンスや修理を担当してみたいものだ）

そもそも必要かすら分からないが。

「いや、駄目だな」

腕の立つ、それも戦略級の剣導士は人格破綻者が多い。老い先短いにしても、痛い最後は嫌だった。

カランッコロンッ

来客を示す鐘が鳴った。

「まだ営業時間前なのだが、急ぎかい？」

「ええ、凄く」

そう返す人影は銀色の髪に密色の肌が印象的な、コケティッシュな美人だった。

「ああ、ああ、ライエル君か！」

「ええ、アーガスのお爺さん。お久しぶり」

まだ新人だった頃のライエルが、取材対象の知識を深めるために、

よくアーガスに取材に来ていたのだ。一銭にもならない仕事だが、若い女性に自分の趣味が理解される事はなかなかないので、かなり夢中になって話し込んでしまったのをよく覚えている。

「少しお願いしたい事があって」

「・・・・」

さらに後ろから入ってきた長身の男の姿を確認した時、アーガスは凍り着いた。

オキツグ・クシナ、かつて、先代《氷王》である師を斃してその名を継いだ本物の王者。

長らく剣導士に関わる仕事をしているが、これ程の怪物はアーガスも見た事がなかった。

「・・・お前さん、分かっているのか？」

「え、何が？」

更に一枚の紙を取り出してライエルに差しだす。

「え、ちょっと、これ何よ！」

まるで手配書の様に大きく描かれたライエルの顔があった。手配書ではなく、捜索願の通知であったが。

「お前さんはそこの男に誘拐された事になっている」

「そんなっ・・・・・・」

何かに思いついた様にオキツグに向き直った。

「・・・貴方、だからさっきあんなことしたのね」

「・・・・・」

「こんな事で気を使われても全然嬉しくない！」

静まり返った。初夏であるのに、冷え込んだ気がしたのは気のせいか。

「・・・・俺は警察が嫌いだ」

「・・・・・」

「・・・・だが、あんたには世話になっているんだ。感謝もしている。借りもある・・のはお互い様か」

確かに、あそこで分かりやすいくらい挑発しなければ、オキツグ

と一緒に、ライエルも手配されていたかもしれない。オキツグの行動で、脅迫されて仕方なくついてきている女性という体裁は保てた。

「・・・だからって」

それっきり、言葉は続かなかった。

アーガスは、そのやり取りを驚きと共に見つめていた。

（まるで、別れ話が持ち上がった恋人ではないか）

場違いな感想が出てくる。

改めてオキツグを見てみると、何故か不思議な程普通の青年に見えた。普通に悩み傷つき、笑う。考えてみれば、《王位》とは言っても人の子だ。人生においても、それなりに心穏やかだった時期はあったのかもしれない。

「お取り込み中、すまないがね」

意を決して会話に割り込む。

「ライエル、君はそこの男が今まで何をしてきたか分かっているのかね？」

「・・・・・」

「帝国におけるプロメテウス事件では、帝都の工業地区を半壊させ、ここに辿り着くまでに確認できるだけでも一七件の殺人、二三件の傷害、果ては闇社会では金融王と名高いクロイテェフ一家からの強盗・・・・・」

呆気にとられた様にその話を聞き、再びオキツグに向く。

「あなた、そんなに悪さしてたの？」

「・・・・・・面目ない」

悪戯をして怒られた子供と母親の様だった。

「・・・まあ、いい」

諦念と共に話を進めた。

「私に何の様なんだい。ああ、流石に匿えと言うのは断らせて頂くよ」

「・・・そんなことじゃありません」

すると、ライエルはショルダーバッグから布切れに包まれた棒状

のものを出し、アーガスに差しだす。
「これの解析をお願いしたいんです」
丁寧に包まれた布から取り出すと、それは魔導短剣だった。
「ほう、これは・・・・珍しい。今時の魔導剣の核石は人工精製なのだが、これは古式の魔獣を封印したタイプか」
「それは焔の玉璽だ」
一瞬、アーガスは何を言われたのか理解できなかった。
「へ、今なんと・・・・」
「玉璽だ。焔の、な」
言ったオキツグと隣に立つライエルはすぐさま意識の外にシャットアウトした。
そして茫然としながらその短剣を見下ろす。
これが、技術者として憧れ続けた玉璽の一振りだと言う。
一度でいいから触れてみたかった。そんなチャンスないと諦めていた。
それが目の前にある。
(・・・・・・生きててよかった)
涙をはらりと流すアーガスに怪訝な瞳を向ける若い二人。
「いいいいいいいいいい生きててえええええええええええええええええ、良かったあああああああああああああああっ!!」
突然叫んだアーガスの、あまりの豹変ぶりに驚く二人。
「そ、それで、解析は頼まれてくれるのかしら?」
「ん、ああ、こんな機会は滅多にない、というより一生ない。死ぬつもりで解析させてもらう」
そのあまりの熱意に気圧されるライエル。
「ああ、そうだ。君・・・・・」
「・・・何か?」
先程まで怯えていた凶悪犯を君呼ばわりである。
「差し出がましい様だが、その腰に差してあるのも玉璽ではないかね?」

そちらも見せてほしい。何、触れてみたいだけだ。悪い様には、むしろメンテナンスをして返そう。

あまりの熱意に押し切られる様に《白燐丸》を鞘ごと抜いた。

第6話　曇天

「アーガスさんの話によると、元は違う剣に嵌っていたらしいわね、この核石」
ライエルが手に持った焔の玉璽を指しながら言った。
オキツグとライエルは、元の家に、ライエルの家に戻って来ていた。
「しかし、大丈夫なのか？」
「え、何が？」
「ここはあんたの家だろう？」
マーケットも近い、大きな通り沿いのアパートメントだ。少し外を除けば車が走る様子が見えるが、そこにはパトカーの一台も混ざっていない。
「大丈夫よ」
はっきりと言い切った。
「もともと、ここってあたしの家じゃないから」
「は？」
「旅行中の友達から鍵預かってて、近かったから」
しばらく見つかる事はない。とライエルは言った。
「でも、永遠に続く訳じゃないから、考えないといけないんだけど」
「・・・・いや、もういい」
しばらく口を噤む。考える用意眼を閉じ、しばらく静寂が訪れる。
「・・・明日、ダリオンライトを出る」
「はぁ？
出てどうすんのよ」
「だが、そろそろここも限界だ。一端街を出てしまえば、逃げるくらいはどうにでもなる」
頭をガシガシと掻いて苛立ちながらライエル。
「・・・でも、問題は何も解決してないのよ？

それに、あなたがそういうこと言いだす時って、大抵は自棄を起こしているわ」

オキツグは微かに驚いた。そこまで長い時間を一緒に過ごしていた訳ではないのに、そんな細かなところまで見られていた。

「だから、一緒に考えましょう、他に何か言い手が・・・」

「いや、問題なら解決しているんだ」

オキツグは、ライエルが手に持った焔の玉璽に眼をやって、恐らく核心である推測を口にした。

「そいつは、焔の玉璽の核石は、もとは違う剣の機関部に嵌っていた」

「分かってるわ」

「ついでに、玉璽について説明しなければならないか」

玉璽とは等級制度における《王位》が持つとされる特殊な魔導剣であるが、その中には、強力な魔獣が封印されたもので、意思を持つ魔導剣、玉璽は、己の力を振える、己の意思を顕在化する事の出来る器となるべき人間を探している。

そこまで説明すると、ライエルは恐る恐るオキツグの腰の《白燐丸》を指した。

「そ、それも？」

「ああ」

だからこそ、少しでも浸食を抑えるために代用品を使っているのだ。

もう片方の魔導刀お柄に手を置く。

「どこかの馬鹿が、帝国から持ち出すために核石だけ別のにつけて偽装したんだろう。だけど、杜撰な処理で封印が緩んでいるんだ」

恐らく、その馬鹿は赤い目の軍勢の一人としてオキツグに殺された。

「封印が解ける前に、どこかの山奥に籠って、出て来た魔獣を倒しておしまいだ。どの道、ダリオンライトは出ていく必要があるんだ」

ライエルはオキツグの瞳を正面から見た。

オキツグの眼はどこか寂しそうで、何かを思い出しているようで、論理として正しいのだが、女としての勘がライエルの首を縦に振らせなかった。

「・・・別に、貴方だけが戦う必要なんてないんじゃない？」

「いや、あるんだ」

強い、断固とした答えだった。

「・・・相棒の、仇なんだ」

「え？」

「俺の姉弟子だ。焔の玉璽の、前の保持者に斬られて、死んではいないけど、でも、目が覚めなくて、もう医者も諦めた方がいいって。まだ体がもっているけど、これから本格的に衰弱が始まって、そうしたら・・・・」

ぐっと堪える様に眼を閉じ、見開いた。

「だから、あいつが生きてる間に決着をつけて、報告してやりたい」

強い眼でそう言ったオキツグに、何か言葉を返そうとして・・・・・

え？

玉璽が光っていた。

今度はオキツグの玉璽も蒼く光る。

「な、何だっ」

その二つの光は留まるところを知らず、やがて赤いほうにひびが入る。

「なっ」

オキツグは焦った様な声を出して、玉璽ではない方の魔導刀を抜く。

「そいつを放せ！」

慌てて焔の玉璽を手から放すと、オキツグの後ろに隠れる。

「凍れ！」

床に落ちて、転がる玉璽に氷凍系術式で氷の膜を造り、更に凍りを重ねていく。
光が弱まった。
「いけるか？」
しかし、次の瞬間、氷の中で完全に核石は砕け散り、その瞬間、爆発する様な赤い光が天を貫いた。

その赤い光の柱は全ての人が見ていた。
アーガスも、
エルマンも、
ゴルゴダも、
レムルスも、
遠い地ではユーリアも、
イプシロンが、屋敷の窓からその光をユーリアの肩を抱きながら見ていた。

「とうとう、始まってしまった」

それは破滅の始まりを告げる光りだった。

第6話　曇天（後書き）

第二のプロローグ、次から急展開です。

第7話　巨人の咆哮

「もう、いいかげんにして下さい」
何もかも面倒だった。
「もう話す事なんて何もないんです」
突き放したように全てを拒絶する。
眼の前のゴルゴダとか言う刑事が困った顔をするのを、ライエルは心の中で笑った。
この刑事はまだ丁寧な方だろう。少し前に来た、いけすかない高級スーツの警察官僚は、怒鳴るだけ怒鳴って出ていった。女だと思って舐めているのが丸見えだ。記者として戦場を渡り歩いたライエルには、その程度のプレッシャーは慣れたものだった。
「調書なんて、好きにつくればいいじゃないですか」
だから
「会わせて下さい。オキツグに」

あの日の赤い柱は、数分で消えた。その後はこれと言って何も起こらなかったが、その発生場所を警察に踏み込まれて、ライエルは保護、オキツグは逮捕された。
オキツグは抵抗しなかった。
ライエルは、被害者と言う事もあり、病院で手当てされた後、直に解放された。事件直後という事もあり、事情聴取はなし。会社からも、しばらく休養を取る様に言い渡された。ただそれだけだ。
二週間がたった。
先日、会社の上司がきて、来月からの仕事復帰を打診された。一応頷いておいたが、それでも上司は心配していた。
ライエルは本当の自宅のベッドから起き上がり、洗面台に向かう。

「・・・ああ、こりゃ酷い」
眼の下はクマが出来、ライエルの溌剌とした美貌はそこにはなく、疲れ切った女の姿がそこにはあった。
「ああ、ああ、あああああ」
意味もなく声を出して、買いだめしていたビールを冷蔵庫から出す。
今日は、逮捕されて以来、初めてオキツグと面会した。

『よう』
スピーカーとガラス越しに現れたオキツグの姿にライエルは愕然とした。
「な、なんなんですかっこれ！」
オキツグは、まるで聖人の様に器具で壁に貼り付けられていた。ところどころに魔導剣の機関部に使う核石の様なものがみられる金属の十字架は、恐らく、オキツグの力を奪うためのものなのだろう。
そこは監獄だった。
「・・・しかたないんです。《氷王》を封じるにはこれ以外なくて、裁判をすれば死刑は確定でしょうが、それでも元は外国人です。少なくとも一ヶ月はかかりますから」
付き添いで来ていたエルマンが見当違いな弁解する。
（何だ、そりゃ）
膝から力が抜けた。
ガラス越しでよく分からなかったが、オキツグはにやりと不敵に笑った。
『流石に、こうなったらどうにも出来ないさ。《白燐丸》も取り上げられちまったしな』
白い拘束具付きの囚人服を着せられたオキツグには大人しくしている以外の取り得る手段がなかった。

『いや、あんたには感謝しているよ。知ってたか？
ここに来てからはもちろんだが、俺、最近は薬は全然やってなかったんだぜ？』
発作を耐えられたのはライエルが居たからだと告げると、ライエルは涙を流した。
嬉しくない。
せめて、もっと救いのある終りだと信じていたのに。

ビールの缶が空になった。
放り投げると、床に転がり、他のビール缶と玉つきをおこす。
ずっとこんな調子だ。
警察からは、誘拐事件後に良くある、犯人に対する同調真理、ＰＴＳＤの一種と診断された。違うと叫びたかった。が、直に警察官の顔を見て、聞いている彼も自分で言っている事を信じていない事が分かった。恐らく、ライエルの会社に言い含められているのだろう。金が積まれた調書は、供述する本人でも動かせない。

『君には是非とも、再び第一線の記者として活躍して欲しいと思っている』

常に危険を顧みず、生の情報を局に届けて、ＣＮＮはその地位を確固としたものに築いていたが、ここ数年、民族紛争が起こっている西南地方には大国の横やりで泥沼化している。誰もが注目している現地の様相を探る急先鋒の一人がライエルだったのだ。
だが、今のライエルにそんな気力はとてもなかった。
「・・・・・」
部屋の隅に、アルミのケースを発見する。
オキツグが薬を入れていたケースだ。中身はなかった。

壁に投げつけようとして、やめた。
アルミのケースを抱きしめる様に横になる。
睡魔はすぐにやってきた。

ごめんなさい、わたし、ごめんなさい・・・・・

「ああ、私だよ」
ホテルの最上階、その一室で電話を耳に当てながら、レムルス三世は口を開いた。
部屋にはレムルス以外に居ない。恐らく電話は盗聴されているし、監視カメラも付いているのだが、それすらも気にせず、泰然とした老王の胆力たるや。
「君も既に知っている事と思うが、ああ、そうだ。今手元にある」
レムルスは、部屋に備え付けたテーブルの上に置いてある一振りの刀を見る。
《白燐丸》だった。
「あの光の事なのだが、うん、君もそう思うか」
レムルスは予期していた言葉に、言葉を重くした。
《白燐丸》は、元々が帝国から流れ出たものと言う事でレムルスが外交ルートで回収したのだ。
「やはり、来るだろうか」
電話の相手が何事かを喋る。
「そうか」
レムルスは卓上に置かれた刀を見て、言った。
「では、やはり、あれこそが鍵となるのだろうな」

「ねえ」
愛用の大剣と磨いていたら、話しかけられた。返事をすると、そこには白皙の美貌が机に頬杖をついて楽しげにこちらを見ていた。
「そんなにこの子が嫌い？」
そう言って眼で示すのは、ソファの上で死んだように眠る弟子の姿だ。擦り傷、切り傷に、それを治療した跡でいっぱいだった。
否定する言葉を放ちながら、それがやや憮然とした調子になってしまう。何を隠そう、それらは殆ど自分がつけた稽古によるものなのだから。
白皙の女は笑みを濃くした。
「知ってる」
その微笑みに悪戯の色がこもる。
「気になっちゃうから、意地悪・・・・・」
女の声を遮るように抗議の声を上げるが、女は声を上げて笑うだけだった。
自分は、眼の前の女性を母の様に慕っていた。
弟が現れて、最近は彼女は奴ばかりに注意がいっている。
気に食わない。
だが、とも思う。
自分は恐らく家族の愛に飢えているのだろう。愛するものが欲しかった。今、この三人は、まるで一つの家族だ。
だが、父親が足りない。母子家庭ではあんまりだ。だが、そこに伸びている男にその役割を求めたくはない。プライドが許さない。
彼女が母で、奴が父で、自分は娘？
冗談じゃない。
ならば自分が母の役割を負うか？
彼女は姑だ。怒るだろうか？
以外に忌避感はない。女性と夜を共にするが、別に同性愛者という訳ではない。一人が寂しい夜もあるが、男には抱かれたくなかっただけだ。

この男は私の夫・・・・・の役
そう思うと、母の愛情を分割される苛立ちも自然と静まってきた。
・・・・・・・
「あ、赤くなってる」
彼女から背を向けた。
自分は、幸せなのかもしれないと思った。

朝、既に日が高く昇り始めたダリオンライトの中心部、各国大使館や高級ホテルが軒を連ねる通りをライエルは足早に歩いていた。
仕事である。本当はもう少し休んでいたかったが、今朝が上司から連絡があった。

『どうしても、君にお願いしたい仕事があるんだ』

どうせ自分に出来る事は何もないのだ。
外に出よう、そうしたらこの鬱々とした気分も収まるかもしれない。
ダリオンライトでも最高のホテルの中に入り、フロントで会社と自分の名前を告げると、一般の客が利用するものとは別のエレベーターに案内される。
最上階の一室、ドアの前に立つと深呼吸。
ノック

コン、コン

中から、入りなさい、と声がした。
「失礼します」
こんなやり取りをしていると、就職活動を思い出す。

（倍率高かったからなぁ）
部屋の中に椅子二つ、テーブル一つの応接セットで、片方の椅子に座って佇んでいる老人が、厳かに口を開いた。
「お待ちしていたよ、ライエル・ゾーリンバッハ」
ライエルは、緊張で気を引き締めて、その人物の前に立った。
「陛下」
アトラス帝国皇帝、レムルス三世の姿がそこにあった。
座る様に促されると、ますます面接を受けている気分になる。
「どうかしたのかい？」
懐かしい気持ちでいると、ライエルは顔が自然と微笑んでいる事に気がついた。
「いえ」
素直に思った事を口にすると、レムルス三世はおかしそうに笑った。
「いや、すまんね、この歳で、しかも皇帝なんてやっていると、君みたいに率直な人間に会う事は中々出来ない」
それとも
「君が率直なのはアルコールの助けを借りているからなのかな？相当飲んでいるね？」
匂っていたらしい。いや、密色の肌のライエルが、肌を火照らせていれば確かに推測は成り立つかもしれない。
「あー、あー」
思わず言葉を返せないが、貴賓を相手に失礼をした焦りなど、欠片もなかった。
「・・・陛下、休日のＯＬのする事なんて大抵決まっています。男といちゃつくか、いちゃつく男が居ない寂しさを酒で誤魔化すかです」
さらにレムルスは笑う。
「はっはっはっは、君は本当におかしいな。確かに、無理して君を呼んだのは私だ。それにいちゃつくつもりだった男は牢屋の中なの

だろう？」
「・・・・別に」
レムルスはおもむろに席を立つと、備え付けの衣装入れの中から一振りの刀を出して、テーブルの上に置いた。
「・・・・これは」
一目で正体が分かった。
これは、オキツグが腰に差していた魔導刀だ。
「玉璽・・・・・」
「おお、良く知っているね。流石に優秀な記者は違う」
賛辞を述べて席に着くと、ライエルに刀を差し出した。
「君に預かって欲しい」
「え？」
意味が分からずに無作法な聞き返し方をしてしまう。老王は、気分を害した様子もなく話を続けた。
「君のものになると言う事だ。部屋に飾るもよし、質に入れるもよし、人に上げるもよし」
ライエルは、脳が急に活発に動き始めるのが分かった。レムルスはその様子を面白そうに見守った。
「おっしゃる意味が・・・・」
「ああ、そうだね」
レムルスには応える気がない様だ。
「・・・・・・」
ライエルは考える。もし、これを受けった時、自分に出来る事はあるのか。だめだ、考えられない。レムルスがこれを自分に渡す意味と、これを自分が活かす術を考えられない。
そう言えば、とレムルスは切り出した。
「我がアトラスのアクロポリスには、彼の師匠、先代《氷王》が未だに存命でね」
その者に相談すれば・・・・・
（どうなる？）

オキツグの師匠、先代を名乗る程の腕ならば・・・・
「アクロポリスまでならば、同盟記念に設立された鉄道公社の直通が通っている。午後の三時だったかな？」
ライエルは《白燐丸》をひったくるように受けとった。
「ああ、待った」
レムルスは紙片を一枚握らせてくる。
確認すると、直に部屋の外に歩み出した。
「失礼します」
最低限の社会人としての常識が、部屋を辞する挨拶をさせた。すると、一言
「私も彼にはあった事がある。世話になった事もある。だから、よろしく頼むよ」
既に老王の視線は窓の外に向いていた。
「ありがとうございました」
部屋を出て、エレベーターに乗って気がついた。
（ああ、これ取材だったのに）
上司からもそう言われていた。まあ、いいや
（適当にでっち上げてやる）
あの皇帝ならば文句は言わないはずだ。こちらにお使いをさせる駄賃を払わせてやろう。
ライエルの瞳に闘志が灯った。

クロプフェット市民国の中枢、首都ダリオンライトから南西に一〇〇キロほど離れた場所に、峻厳な事で知られる活火山、バルムレイト山がある。
登山家、芸術家に挑む相手として良く知られるそれは、山頂は雲に掛る程高く、荘厳な山として知られていた。
それが噴火した。

自然保護地区として、終焉には全く人のいない人外魔境の地であったが、それでも霊峰の噴火は人々にとっては一大事だった。
噴火口、まるで地獄に繋がるかの様なそこは、熱気で空気が揺らいでいる。その淵に、手がかかる。
手だ。縮尺が滅茶苦茶で、軽く井戸から這い出た様な印象を受けるが、実際はその比ではない。巨大な手だ。それが淵に掛り、そして、それは這い出て来た。

オオオオオオッ

頭部、肩、腰、そして足の順にそれは現れた。巨大な人影が、体表をマグマに濡らされ這い出て来た。

オオオオオオオッ

高さは一〇〇メートル程だろうか。
もうもうと湯気を上げるそれは、熱で赤く染まっているが、本来の体色は黒らしい。まるで鉄が熱を持ったかのように光り輝いている。
肩も、手も、腰も、足ものっぺりとしていて、不気味にも人にそっくりだった。
だが、その頭部には人ではありえない。
生々しく、蠢く目玉が無軌道に八つ並んでいた。それ以外はなく、顔を構成する要素は欠乏のほうが目立ったが、それでも眼だけで現れてくる感情があった。

オオオオオオオッ

怒りと、狂気の雄叫びが空気を振わせる。

第8話　覚醒

「ヨハンッ、ヨハンはおるか！」
竹を割る様に勢い良く放たれた主の声を遠くに感じ、ヨハンと呼ばれた女は「まったく、しょうがないねぇ」と言いながら、渋々向かう。
「どうしたんだい、お嬢様・・・」
ヨハンは、年頃の女らしく瑞々しさと、生まれ持った姉御的包容力に満ちた顔を凍らせて、その光景を見た。
「はっはっは、すまん！」
主、ユーリアに拾われたのは二年前、街の女ギャングだったヨハンは、警護役兼女中としてこの屋敷に招かれた。ヴェルーナ公爵家、本来であれば、敷居を跨ぐ事すら許されなかったであろうその屋敷で勤める事が出来たのは、単にこの少女を悪漢から助けたのが始まりだ。
自警団として守っていた住民たちは、ヨハンが公爵家の後ろ盾を得た事によって、対立していた暴力団がなりをひそめたので平和に暮らす事が出来ている。仲間にも仕事を斡旋してもらえた。感謝してもしきれない、言葉には出さないが、心の底から拾ってもらえて良かったと思っている、敬愛する主は、眼の前でクリームの泡を被りながら笑っていた。
「・・・・・はぁ」
お菓子の創り方を教えていたのだ。元々家庭的な事もあり、この屋敷に来てからも研鑽を積んだ結果、今では立派にメイドと、というよりもヴェルーナ家の主婦として、台所に立つようになったヨハンである。
テレビで見たドラマに触発されて、お菓子の創り方を教えろとごねたユーリアに、生クリームをかき混ぜる様に命じたのが数分前の事であった。

ヨハンはメイド服のポケットから布巾を取りだしてユーリアの顔を拭う。
「はぁ、何でこのお嬢様は壊滅的に不器用なのだろうね」
「ぬぅ、聞こえておるぞヨハン、インスタントなら妾にもいける」
最近になって成長してきた胸をそらしてみおえばりする。
「あらあら、お洋服にもつけちゃって、こりゃどうしたもんかね」
さっさと脱がせて洗うのが一番だろう。簡素な服を好むユーリアだが、それでも平民の普段着が、ユーリアのそれで軽く百着は買えるだろう。最初に選択する時は、緊張で思わず手が震えたものだ。
最近やっと十歳になったばかりの少女だが、歳の割には大人びているだろう。平民の十歳児とは比べ物にならない程に知性と品性を持つ少女だが、家庭的器用さは三歳児並みだった。
「あ、洗うのか？」
「まあね、お洗濯だよ」
「妾もするぞっ、手伝う！」
母親の家事を手伝いたがる子供の様な一面も持ち合わせている。
「はいはい、お手伝いしてくださいね」
部屋に戻って変わりの服をっと思ったが、どうせ直にびしょ濡れになるのだろう。
素早くユーリアを脱がせると、自分のエプロンを外してユーリアに着せる。
「そいつで我慢しな」
「おおっ、裸エプロンという奴か！」
「・・・この子は、まったく、どこでそんな言葉を覚えてくるのだろうね」
キッチンの横にある勝手口を出て、備え付けの蛇口を捻る。素早く立てかけてあった大きな桶を置くと、水が溜まっていく。
「おー」
何が嬉しいのか、溜まっていく水に掌をつけて遊んでいる。
水が桶に十分溜まったのを見計らって、桶に汚れた服を入れて洗

剤を垂らす。
（水洗いが出来るのが幸い・・・か）
もみ洗いをしていると泡が大量に出てくる。日常的に選択をする主婦としては嬉しくない現象だが、ユーリアは楽しそうに桶に手を突っ込んで一緒に服をもみ洗いしている。
ユーリアが鼻歌を歌っている。
「・・・それ、『アポロンの丘』の主演だったギムリが出てるドラマのかい？」
「おうっ、そうだ。よく知っておるな！」
最近、人気の俳優の名前を出す。ヨハンの部屋にもテレビがあった。毎週楽しみにしているドラマを、ビールを片手に眺めるのが何とも言えないのだ。
「あのいけすかない俳優はともかく、ヒロインのアフェリーンは演技が見事でのぅ！」
実は好みの俳優だったギムリを酷評されて軽くショックを受けるヨハン。もっとも、人を見る目は並外れている少女なので、本当に性格は良くない人物なのかもしれない。確かに、そうかもしれないとは思っていた。信じたくなかったけど・・・
（・・・・・はぁ）
自分の半分以下しか生きていない少女の方が男を見る目があると言う事に落ち込む。へこむ。好きな男が出来たら、ユーリアに見せればいいのではと馬鹿な考えが浮かぶ。
今度は鼻歌ではなくて歌を歌い始めた。
歌は知っていたのでヨハンも歌ってみる。ユーリアは凄く楽しそうな顔をしていた。
思わずさびの部分に魂を込めて歌ってしまったヨハンは、一緒に歌っていたユーリアに拍手を送られた。
「あ・・・・・」
「うむ、ヨハンは歌が上手い、今度おじい様の前で自慢しようぞ」
天真爛漫にはしゃぐ少女の顔に邪気はないが、彼女の言うおじい

様とは、先代ヴェルーナ家執事にして、皇帝レムルス三世である。
ユーリアは子供なので、二人が同一人物だとは気がついていないが、ヨハンは眼玉がこぼれおちる程驚いた。何せ、面接であった執事が、雇われた後にユーリアのお付きで王城の王座に座っていたのだから。彼の意地の悪げな笑顔を忘れ難い。
「ちょ、ちょっとお嬢様？」
「何じゃ？」
「そいつはちょっと洒落になっていないので勘弁してほしいのですが？」
「んー、そうかの」
あの悪戯好きな皇帝の事だ。今は外遊中で国内に居ないが、ユーリアが用を述べれば、即座に時間を造るだろう。彼女のメイドの歌を聞くために。
（悪夢だ・・・）
恐らく、皇族、高級官僚、侍従、騎士の前での盛大なリサイタルにされる可能性が大きい。憤死する。確実に、恥ずかしくて憤死する。人は恥で死ねるのだ。
「むぅ、そうか・・・」
実に残念そうな声に変わる。安堵と、本当にやるつもりだったのか、という戦慄が後から湧いてくる。
「うむ、ならもう一度じゃ」
「はい？」
「うたうが良い、妾はヨハンの歌が好きじゃ」
ユーリア一人に聞かせるのならば仕方がない。ちょっぴり気恥かしいが、リサイタルを避けるためだ仕方がない。
「はよう、聞きたいのじゃ」
「私も聞きたいですね、ヨハンの歌」
ヨハンは肌をなでる冷気に悪寒を感じると、勝手口の奥、キッチンの出入り口からこちらを見ている女の姿を確認する。
「メ、メイド長・・・」

「イ、　イプシロン・・・」
二人して、悪戯を見つかった子供の様に引きつった顔をした。メイド長と呼ばれた女、イプシロンは、エプロンドレスの裾をはためかせて二人に歩み寄り・・・・

ゴチンッ

ゴチンッ

二人の脳天に拳をおろした。
「「ッ・・・・」」
抗議の声を上げる暇もなく頭を押さえる二人に、冷徹な声が放たれる。
「ヨハン、主にこの様な装いをさせるとは何事です」
「あ、いえ、お洗濯をしようと、お嬢様もお手伝いをして下さるとのことでしたのでっ」

ゴチンッ

「主に自分の仕事を手伝わせてどうするのです・・・・ユーリア」
お嬢様とは呼ばなかった。ユーリアの肩がビクリと震える。
「あなたはまたヨハンの仕事の邪魔をしていたのですね？」
「い、いや、妾は手伝おうと・・・・」

ゴチンッ

「問答無用です」
だったら最初から聞くなよ、と二人して考えている事が一致する。
「ヨハン、歌いなさい」

「へ？」
「歌が上手なのでしょう？
歌いなさい」
「え、え、でも・・・・・」

ゴッチンッ！

拳ではなく、メイド長の額が降ってきた。凄まじい音を立てて鼈れるヨハンを、あわあわと怯えるユーリア。
「歌いなさい」
パッチギを決められたヨハンは、朦朧とする意識の中で立ちあがり、何も考えられずに歌った。
頭の痛さを堪えるところ以外はそこそこ上手く歌えたと自画自賛して歌い終わると、イプシロンも満足そうに頷いた。
「ふむ、なかなか上手な様です。まあ、歌詞は異様に気恥かしいですが・・・・」
「うぐっ・・・・・」
「これが気恥かしい恋愛ドラマの主題歌を人に聞かせた罰です」
あれ、この曲知っているって、メイド長も見てるんじゃ・・・
「何ですか、殺しますよ？」
「い、いえ、何でもありません」
「ユーリアにやらせても、この子はそう言った感覚が欠如しているので・・・・」
「むう、妾、遠まわしに人間失格扱いされた？」
ともかく、とメイド長は強引にしめた。
「公爵家の者として、主も、メイドも、品にある行動を心がけなさい」
それと、とエプロンの鍵を取りだしてヨハンに渡す。
「車の鍵です。いつもの店から茶葉を取りに行って下さい」
のろのろと受取ると、ゾンビの様に仕事に移る。

「わ、妾も、妾も行くぞ！」
伺う様にイプシロンの顔を見上げるユーリア。つられる様にヨハンも上司の指示を待った。
「よろしい、ヨハン、お嬢様のお守りをお願いします」
本人を目の前にしてお守りと言い切るこの女も相当だな、と考えていたらイプシロンに睨まれるヨハン。
「お前も私の訓練のお陰で大分腕が立つ様になってきました。お嬢様をしっかり、お守りするのですよ？」
この二年間、剣導士としても腕の立つメイド長のもとで研鑽を積んできた。今の実力ならば、皇帝を守る近衛騎士にも引けを取らないだろう。
「わかってます」
消沈した顔が一転、真面目な顔になる。
早く早くとヨハンのエプロンを掴んでせかすユーリアの頭を撫でながら決意を新たにする。
「しかし、いかに成長したと言っても、お前などまだまだヘッポコ、姉弟子、兄弟子に比べればまだまだです」
暗に、そんな凄腕達を鍛えたのは自分だと胸を張るイプシロン。
「お前が無事、お嬢様の警護を完遂する事が出来た時は、皇帝陛下にお前の自慢の歌を聞いて頂けるように具申しましょう。誇りに思いなさい」
踵を返してキッチンから消えるイプシロンを、膝をつき、頭を垂れながら見送るヨハン。勿論、敬意を払った訳ではなかった。

「まあ、元気を出すが良い、きっと御爺様もヨハンの歌を気に入ってくれる事と思うぞ」
後部座席で見当違いな励ましの言葉を述べるユーリアに脱力しながら、アクセルペダルを踏んで車を発進させる。

後ろから聞こえてくるトレンディなドラマの主題歌をバックミュージックに車を発進させようとした矢先、正門近くで不審な人影を見かけた。

（・・・・剣導士・・・・いや、違う）

魔導剣らしきものを布にくるんで抱える不審者は女だった。密色の肌に銀髪、スッキリ通った目鼻立ちが印象的な美人。歳はヨハンより少し年上といったところか。

（・・・・新聞記者に似ているわね）

運転席の窓を開けて、話しかける。賊の可能性は低そうだた。

「そこの方、どうかなさいましたか？」

ちゃんと意識すればヨハンも綺麗な敬語を使えるのだ。

その女は驚いてこちらに振り向く。しばし呆然としていたが、やがて気を取り直したように駆けよって来た。

「あの、こちらはヴェルーナ公爵邸でよろしいでしょうか」

「ええ、何かご用が御有りですか？」

「はい、こちらに、イプシロンという方がいらっしゃると聞いて」

（メイド長に客ってか？）

「はい、当家の婦長にご用が御有りでしたか、ご案内いたしますので少々お待ちを」

ユーリアに眼を向けると、「よい」と合図を送ってきた。良い子だ。

「ところで御客様、御名前を伺っても？」

すると女は迷った様に、一瞬間を置くと、思い切った様に口を開いた。

「私の名前はライエル・ゾーリンバッハ、この刀を、玉璽を託されてやってきました」

バルムレイト山から北東、麓から首都ダリオンライトにかけて、

広大な砂漠が広がっている。砂の大地がと、峻厳な岩山が織りなす赤い不毛の大地で原住民、砂漠の民達を除いて人はいない。

「ねぇ、兄ちゃんあれ見て」

はしゃいだ様子で兄の手を引く妹、二人とも十歳は超えてないだろうが、肌は小麦色で、大自然で暮らす逞しさは、先進国の少年たちにはないものだった。

「どうしたんだよ」

手を引かれて少年が、岩山の影から見た光景は一生忘れる事が出来ないだろう。

「でっかい人、黒くて、眼がいっぱいあって、とにかくすんごいの！」

兄は凍りついた。砂漠で、灼熱の大地であるにも関わらず、生まれて初めて、凍える寒さを体感した。

それは巨大な人影だった。

生々しく、蠢く目玉が無軌道に八つ並んだ頭部を持つそれは、一〇〇メートルはあった。体全体がのっぺりとしていて、金属的な光沢に満ちている。人の形をしながら、あまりにも非人間的、兄は、死んだ祖母が昔話をしてくれた時に出て来た巨神兵を思い出した。

「その者、

黒き体は鉄の如く固く、

八つの眼から放たれる絶望は大地を斬り裂く

神を裏切りし背信者

その名はプロメテウス・・・」

「お兄ちゃん？」

それは神だった。砂漠の民であっても、現代の文明は入って来ている。今まで理解できなかった、大人たちの信心深さの理由、根底を兄は理解した。

「神様」

膝をつき、頭を垂れて、額の前で手で手を握って祈る。

神の行進は続く。

上区の病院、その重篤患者用のガラス張りの病室に、その女は横たわっていた。
イプシロン、ユーリア、そしてライエルという女。一歩引いた立ち位置で見守るヨハン。
（綺麗・・・）
ヨハンは素直にそう思った。ベッドに眠る女は、かなりの長身だったが、それでも女性らしい曲線に満ちた、戦乙女の様な荘厳さと厳粛さが感じられた。
まるで神の御前であるかの様なこの場所に来るまでの経緯を思い出す。

ヴェルーナ公爵家の応接室は沈黙に包まれていた。
ライエルと名乗った女が差し出した刀はテーブルの上に置かれ、その向かいには屋敷の主であるユーリアではなくて、イプシロンが座っている。途中までは一緒に居たのだが、飽きて船を漕いでいたので寝室で寝かせている。
「そうですか、陛下がその様に・・・・」
全ての話を聞いたイプシロンは呟く様に言った。
「それで、私にどうしろと？」
「・・・ただ、あたしはオキツグを助ける事が出来ないかと」
そのやり取りをイプシロンの後ろで立って聞いていたヨハンは、内心で驚愕していた。
（まさか、メイド長が《王位》だったなんてねぇ）
確かに、恐ろしく腕が立つし、只者ではないと思っていたが、そこまで規格外の存在だとは思っていなかった。

そして、その弟子にして当代《氷王》は窮地にあるらしい。
（そりゃ、あたしにまだまだって言う訳だ）
まさか兄弟子にそこまで力を持つ存在が居るとは思えなかった。
「私はオキツグを助けるわけにはいきません」
「そんな！」
「私は公爵家の使用人です。その累は主家にまで及ぶのです」
ライエルがぐっと詰まる。
「それに離れる事が出来ない理由も他にあります」
すると、後ろを振り返ってヨハンに告げる。
「車を回しなさい。病院に向かいます」
「あの、何処へ」
「見せます。理由を」
見る気があるのならば、とその瞳が語っていた。

（この人がリュロンさん、オキツグの相棒だった人・・・）
「リュロンは命を狙われています」
イプシロンは口を開いた。理由は様々、ですが、直接敵に命を奪おうとした賊を、この二年で十件以上排除してきました。
イプシロンとユーリア以外の顔が驚きに染まる。
「私がリュロンを置いて帝都を離れればどうなるか、考えなくても分かるでしょう」
「で、でも、オキツグはあなたの弟子なのでしょう？」
「そうです。息子同然でした」
「だったら・・・・・・・・」
「だからです！」
イプシロンの出した大きな声に皆が驚く。常日頃から、あまり感情を表に出さない彼女からは信じられない程に感情のこもった、狂おしい程に激情を感じる声だった。

「この子は、この子はオキツグを守って傷を負いました。今、ここでオキツグを守るために、ここを離れて、帰って来たら死んでいたリュロンを見てあの子がどう思うか、分からないはずないでしょう？それに、この子も私にとっては娘なのですよ？」

イプシロンの声は苦渋に満ちていた。

再び沈黙が降りる。

そして、突然、ライエルが抱えていた《白燐丸》の機関部が光り出した。蒼い光は一瞬だけ強く光ると、すぐに消えた。

誰も何も言えない。何が起こったのか、誰も分かっていなかった。

ピー

その場には似合わない軽薄な電子音が鳴り響く、しかし、皆の、特にイプシロンの反応は劇的だった。ガラスにへばりつくように中を除く。

「ヨハン」

思わず自分が呼ばれた事に気がつけたなかったヨハン。イプシロンはガラスの奥に横たわる女から目を放さずに、唇だけで再び呼ぶ。

「ヨハン！」

「は、はい、なんでしょう？」

「直に御医者様に連絡を、この子が、リュロンが、活性状態に入っていると」

ヨハンが迷った様にユーリアを見る。ユーリアは事態が読めなくても泰然とした雰囲気だった。

「・・・お嬢様も連れておいきなさい」

「はい、分かりました」

ユーリを抱きかかえると急ぐヨハン。誰も病院での無作法を注意する者はいなかった。

「あ、あの」

「・・・何ですか」

「これはつまり、どういう事でしょうか？」
しばらくして、ようやく引きちぎるように前から視線を外した。
「リュロンの魔力が、今までは枯渇していた生命力が、たった今、反応を示しました」
つまり
「リュロンが目覚めます」

（一体、何が何だって・・・・）
内心で愚痴を言いながら駆けていると、途中で看護婦さんに注意された。腕の中でユーリアがきゃっきゃと笑う。
「ああ、そうだ看護婦さん」
「はい、何でしょう」
「リュロンという患者が活性状態になったと御医者様にお伝えしろと言われて、どの御医者様に」
お伝えすればいいのでしょう、と続けようとしたが、出来なかった。
「え、それって、あの重篤患者様の無菌病室の、ですか！？」
はい、そうだと思います。としか答えられなかった。
「わかりました、先生に至急お伝えします」
周囲のナース達にも情報が渡り、すぐさまその場が騒然となった。
「そんなに有名な患者だったのか」
「御爺様のコネで入ったからな」
皇帝陛下の客人とあれば、病院も必至だろう。
そんな事を漠然と考えながら、自分も先生を探したほうがいいのだろうかと考えていると、いきなり電気が消えた。
（停電？）
医療機関の停電はかなり深刻な事態だ。先程とは別の意味で騒然とする。

「だれか、ライトをっ」
そう叫んだ声を聞いた瞬間、電源が復活した。再び病院に明かりが灯る。
「直に病室の方に先生を向かわせますので」
そう言って看護婦が足早に去っていった。
「どうするかのう」とユーリア。
「ほんと、どうしましょう」
する事がなくて、上に向かっても邪魔になりそうである。少し、時間を潰そうと、近くの長椅子にユーリアを降ろそうとした瞬間、ヨハンの勘が最大限の警報を鳴らした。
「ッ・・・・・・」
二人の周りには誰もいなかった。
（こ、これは、生体系術式で、人避けのフェロモンを造り出したんだ！）
足音が聞こえた。近くなっている。
「どうし・・・」
「御静かに」
ユーリアの口を押さえると、ナースステーションのカウンターの影に隠れた。
どたどたと駆ける足音が止まる。ヨハンの心臓は止まりそうだった。ユーリアも、耐える様に静かにしている。
「どうだ？」
「はっ、制圧完了であります」
部下と上官らしき男たちの会話が聞こえる。
（軍隊・・・やっかいな！）
数は足音から察するに十前後。ユーリアを守りながら戦う事が出来るだろうか。
エプロンドレスに隠してあった魔導短剣の柄を探る。

光が消えた瞬間、イプシロンは暗闇で眉を顰めた。
一斉に、医療機器のアラームが鳴る。
「あ、どうしよう！」
「大丈夫です、生体系術式を能くする剣導士のリュロンの体ならば、もう回復が始まっています」
だが
「これを引き起こした者がその暇を与えてくれるかどうか、ですね」
「誰が、一体・・・」
「敵なら腐るほどいます。個人としても、しがらみとしても」
遠くで足音が聞こえる。かなりの大人数の様だ。
イプシロンはメイド服のスカートをたくしあげると、そこから二振りの魔導短剣を取りだす。
すると、病室と自分たちを隔てるガラスに柄を叩きこんだ。

ガシャンッ

窓枠に付いた破片も綺麗にこそぎ落とすとライエルに言った。
「入りなさい」
「え」
「賊です、リュロンだけならともかく、貴方まで同時に守る余力はありません。しかも、今回は大規模な攻撃を仕掛けるつもりの様です。リュロンもそうですが、医療機材が壊れたら命に関わる人もいるのです」
アラームを鳴らしながらも、一応は機能し続ける機材を見て、頷く。直に窓を跨いで病室に入った。
「離れていなさい」
言われたとおりにすると、突然、冷気が噴き出した。窓が凍りを纏っていく。そして、病室全体が氷で覆われた、守られた箱となる。
既に聞こえないが、氷の壁の向こうで、さむいけど我慢しなさい

とイプシロンが言った様な気がした。
（やっぱり、あの人ってオキツグの師匠だったんだ）
今更ながら実感するライエル。
しばらくして鋼を打ち合う音と爆発音が外から響いてきた。戦闘が始まったのだ。
《白燐丸》を抱えながらリュロンの横に立つ。
「ねぇ、貴方を待っている人がいるのよ？」
戦いの終りを待つ時間が永遠に感じられた。

「・・・なあ、キスしてくれないか？」
自分で言って、自分で信じられなかった。
急速に流れ出ていく血と共に、自分の残りの時間が削られていくのを感じ、怖くなった。
霞む視界に見える相棒の顔は、普段の捻くれた、老人の様な枯れた顔とは違っていた。いつもと違うその様子に違和感を覚える。
（そう言えば、『先生』を斬った次の日はこんな感じだったか・・・）
だが、と思う。『先生』は生きていたのだ。戦い、倒してしまった辛さはあったかもしれないが、それでもこれ以上悲しむ事がないのだと伝えてやろうと思う。
「違う、違うんだ」
伝えても、相棒は悲しげに首を横に振るばかり。
苛立たしい。自分はもう時間がないのに、そんな悲しい顔されたら、こっちだって悲しくなってしまう。
（そうか・・・）
この男は自分の死を悲しんでいるのか。
ならば、少し意地悪をしてつまらない顔に変化を与えてやりたくなる。

（だから、か）

「キスしてくれよ・・・・・」

相棒の顔が驚きに変わる。そうだ、それが見たかった。

言葉で、仕草で、全力で男をからかった。とても楽しかった。

「朝日は綺麗か？」

もう眼が見えていなかったのだ。

男は意を決して唇を重ねた。

少し、死を前にした恐怖がやわらいだ。

（下手くそめ・・・）

女性とは頻繁にベッドを共にしていたリュロンには物足りなかったが。

「オキツグ・・・」

喉が動かない。焦る、せめて最後を看取った男に自分の声を聞かせておきたい。

必死に、必死に力を振り絞って言葉を紡ぐ。かすれ、舌がスポンジの様になったみたいだった。全く思う様に体が動かない。

オキツグ・・・・・・

最後なんだ。

聞いてくれ、私の声を

頼む、もう一度

そして・・・・・

「オキツグ・・・」

かすれる様に、呻くように出た自分の言葉は今までの何よりも生々しく感じた。

視界が明るかった。

第8話　覚醒（後書き）

ヒロインが復活しました。

第9話　虜囚

「騒がしいな」

十字架にはりつけにされながら、オキツグは呟いた。

地下の監獄に窓などない。不審な事をしても見逃さない様に照明は最大限付けられ、ガラスの向こうに絶えず見張りがいる。

だが、何となく伝わってくる雰囲気が、物々しい、戦を前にしたそれに変わっているのを感じるのだ。

思えば、この世界に流れ着いて八年、色々な人と会い、また別れを経験した。

最初の、別れの苦痛、師匠であったイプシロンと戦い、勝利した時、彼女は斃れて意識不明の重体となった。本気で殺し合って、傷つけあって、そして勝った。

ようやく心の整理が付き始めた時、眠っている筈のイプシロンが姿を消したと言う知らせを病院の医師から聞いた。まさか、今になってと驚いたものだった。

（生きていると思った人間が死んでいて、死んだと思った人間が生きているなんて良くある事だ）

プロメテウス事件が終息してからしばらく、自分の相棒は生きているが、いつ死ぬか分からないと言う事を一人旅を通して実感した。もしかしたら隣に彼女が戻って来るかもしれないが、そうでなかったらどうしよう。もはや、この世界に来てからの既知は全て失われてしまうかもしれないのだ。恐怖が最高潮に達した時、オキツグは堕落した。アルコールを絶やさず、麻薬を常用し、無意味に殺人を犯す。

何もかもが自分ではどうにもできないところまで来ていた。だからこそ

（ライエルには礼を言わなきゃな）

恐れず、真っすぐに眼を見つめて、お互いの利益のために手を組

んだ。久しぶりの文明的やり取り。そして、彼女との生活は、自分に以前のあり方を取り戻させてくれた。

心のバランスが正常に戻ったのだ。

『《氷王》オキツグ・・・・・』

スピーカーから声が聞こえた。

「・・・・？」

そこに立っていたのは、整った容姿の男、確か、ライエルが面会に来た時に一緒に居た男、エルマンといったか。

「よう、色男、何か用かい？」

エルマンがガラス越しで渋面を造るのを面白そうに見つめる。反応が分かりやすくてからかい甲斐がある。

「それとも、自分の女を寝とった男の顔でも眺めに来たのか？」

エルマンの端正な顔が怒気に染まるのが見て取れた。

オキツグはその反応で、自分の推測が正しい事を確信する。

『貴様には関係のない事だ』

「いい女だったぜ？」

エルマンが言葉で遮ろうとするのを無視して続けた。まるで挑発するように。自分でも不思議だった。何でこんな意味のない事をしてるのだろう。

あるいは長きにわたる監禁生活で精神もささくれだっているのか。

「体も、顔も、なれてないみたいだったけど、そんなの最初だけさ。あっという間にあっちから求めてきやがった」

エルマンが壁を蹴った。大きい音がしたが、エルマンの他に警官が入って来る事はなかった。本当に何かあったのかもしれない。

ケケケ、と野卑に笑って見る。何となく凶悪犯に見えるだろうか。

『・・・貴様は死刑になるのだぞ』

「ライエルはどうした」

再び言葉を無視して言った。

『・・・・貴様には関係のない事だ』

「ち、何だ、知らないのかよ」

エルマンの顔が更に怒気が濃くなる。
『彼女はダリオンライトにいない』
「なんだ、どうしたんだ？」
『どうにもならない。お前が死刑になる事には変わりがない』
何か違和感があった。死刑、そんなこと分かっている。覚悟は出来ている。だが、今更なんでそんな事を強調するのかという事だ。
（ライエルがとっている行動に何かある？）
だが、何が出来ると言うのだ。上手くパズルのピースが嵌らず、いらいらするが、眼の前のエルマンの様に顔には出さない。
（・・・・そうか）
ライエルはダリオンライトを出て、帝国に向かったのだ。行き先は恐らくアクロポリス。あそこにはイプシロンやユーリアがいる。この前のライエルがここに来た時、何か行動を起こす気力みたいなものは感じられなかったから、その後に何者かが発破をかけたのか。
その人物を特定しようとすると、不愉快な事しかなさそうなのでやめた。
それにしても、この眼の前の男、警察官だと言うが、顔が分かりやすい。
思考に没入している内にエルマンが何らか喋っていたらしいが、無視されたと勘違いして怒って出ていってしまった。
「ああ、しまった」
もう少し慎重にからかえばよかった。少なくとも退屈しのぎになったのに。
（だが、『先生』はこないだろうな）
リュロンが眠っている限り、帝都を離れる事はありえない。そして、リュロンが眼を覚ます可能性は零に近い。
「まあ、いいさ」
再び一人の静寂が訪れた。

「オキツグ・・・・」
かすれる声で唇から紡がれた言葉に、ライエルは僅かに心の痛みを感じた。
氷の壁で固められたあの病室で、目の前に横たわった女性を前に、ライエルは見守る事しかできない。
僅かにリュロンのまつ毛が揺れた。
(目が覚め・・・・)
両目が一気に見開かれる。
リュロンは腹筋だけで体を跳ねる様におこすと、シーツを巻きあげて跳躍。即座にライエルの背後に立ち、頸動脈のある首筋に手を当てた。
「ここは何処で、君は誰だ」
(・・・・・・)
驚くよりも、怒るよりも、まず呆れてしまった。
「・・・こんなところまでオキツグと似ているのね」
「オキツグ?
お前、オキツグを知っているのか」
声に圧力がこもる。彼自身は、相棒の事を何考えているか分からないと評していたが、ここまで分かりやすい人も中々少ないだろう。決して鈍い方ではなかったのだが、そこは長く暮らしていると補正がかかってしまうのかもしれない。
「まず、あたしは貴方の敵じゃない。彼から、オキツグからこれを預かって来たの」
《白燐丸》を片手で上げて見せると、背後で息をのむ気配。
「だから、少なくとも害意をもって貴方に近寄った訳ではないわ」
しばらくして、距離を置いた事を気配で感じる。
「さて」
振り向くと、そこには患者服を着せられた長身の女が立っていた。大きい事は分かっていたが、割と背が高い方のライエルよりも更に

大きい。肌の色や、神の質、顔立ちが二人とも良く似ている。もしかしたら、リュロンもライエルと同じ地域の出身なのかもしれないと思った。

（・・・・・・）

「外が大分騒がしいと思うんだけど・・・・」

「そんな事はどうでもいい」

強い声だった。ライエルの瞳を見据え、問う。

「・・・・・・あいつはどうしている」

「え？」

「オキツグはどうしているのかと聞いている！」

その異様なまでの圧力が、狂おしいまでの思いである事に、ようやくライエルが気がついた。

「あいつは、生きているのか、死んでいるのか、教えろ！」

視線が熱を放っていた。

ライエルは、眼の前の女が勘違いしている事に気がついた。

「・・・オキツグは生きているわよ？

別に遺品として預かった訳じゃないけど」

この女は、リュロンは、相棒の行く末が、安否が気になって仕方がなかったのだ。安堵するように全身の力を抜き、凍った壁にもたれかかるのを見れば瞭然だった。

「でも、このまま放っといたら危ないかも」

「何？」

再び顔に鋭さが戻る。

「オキツグは、私の故郷で、クロプフェット市民国で死刑囚として捉えられている。執行まで、あと十日しかない」

リュロンは即座にアクロポリスとクロプフェット市民国までの距離を計算して、どう考えても間に合わない事に気がつき、愕然とする。

「ッ・・・・」

即座に駆け出し、思う様に力が入らなくてよろけるリュロン。慌

ててその体を支えるが、あまりの重さに押しつぶされそうだった。
（い、一体、何キロあるのよ・・・・・）
しかし、大柄ではあるものの、武骨な印象はリュロンからは感じられない。むしろ、スタイルはライエルよりも良いくらいだった。入院生活で大分衰えている筈なのに、それでもこの重さである。一体、以前はどれ程のものだったか、聞くのも怖くなりそうだった。
「時間がないんだ」
再び四肢に力を込めて立ち上がる。
「・・・どう考えても、普通に行ったんじゃ間に合わないよ」
「だとしてもだ！」
まるで戦女神の様な美しさを誇るリュロン。だが、その眼にはあまりにも人間的な光に満ちている。
「・・・家族なんだ」
先程の圧力が信じられない程に小さな声でポツリと呟く。
「・・・もう、一人は嫌だ・・・」
膝を付き、手で顔を覆う。間から涙が見えた。
（・・・どこまで似てるんだか、この二人）
呆れと、言うべき事を言っていない罪悪感で嫉妬心が吹いて飛ぶ。
「・・・普通に行けばって言ったでしょ？」
「？」
見上げるリュロン、涙に濡れた無垢な視線がライエルに応えを求める。
「・・・貴方は知らないかもしれないけど、アトラス帝国とクロプフェット市民国は同盟する予定なの・・・・その記念に、アクロポリスとダリオンライトの間で直通の鉄道が通っているから、急げば間に合う」
だから、そのためにここに来たのだ。
「・・・・・そうか」
言葉を理解し、その顔が、悲嘆にくる女のそれから、戦を前にした女戦士のものへと変わる。

ガギッ

凄まじい音が響く。見れば、氷の壁が破られてはいなかったものの、かなり削られていたのを見る。

「だが、奴を迎えに行く前に、無粋な輩を始末しなければならない様だ」

何を以って無粋というのかは聞かないでおいた。

ふっふっふ、と肩を揺らして凶悪に笑うリュロンから、ライエルは情念の恐ろしさを知った。

刃が交錯する。

（くそ・・・）

ヨハンの前には敵が六人、皆が軍隊で厳しい訓練を積んできた事が垣間見える精強な兵隊だった。しかもチームワークでお互いをカバーして一向に攻め手が見つからない。

向こうに敵を六人まわして、それでも凌いでいるヨハンも卓越したものだったが、しかし、それではいけないのだ。カウンターに隠れているユーリアを守るためにも、隠すためにも、この戦いは避けられなかった。勝たなければいけなかった。

疲労と焦りがヨハンの足元を狂わせる。

「うぐ」

敵の刃を避けるために後方に足を運ぶと、バランスを崩してそのまま転倒した。追いうちの刃を何とか転がって避ける。

「あっ」

焦った様な声は自分の口から洩れたものではない。その正体を思い浮かべて心が凍りついた。

カウンターから思わず顔を出して、声を上げるユーリア。隊長格

の男は即座に始末するように部下に合図する。
（くそっ）
迫る兵隊の背中に魔導短剣を投げる。死角から放たれた攻撃を避けられる筈もなく、背中に刃が吸い込まれると倒れ伏した。
「貴様！」
一番近い兵士が色めき立つ。ヨハンは構う事もなく跳び付くと、敵の刃が脇腹を貫くのも構わず、迷わず喉元に食いついて、思いっきり引き千切る。兵士が持っていた魔導剣を奪うと、再び敵に向き直って構える。
しかし、そこで限界だった。傷から血が止まらない。剣を握っているのもやっとの状態で、敵もそれを冷静に看破している。
せめて、イプシロンが間に合うまでは時間を稼ごうと覚悟を新たにした時、リーダー格の男の首が突然宙を舞った。
「へ？」
隣の兵士の間抜けの声も、頭上から聞こえる。肉がぶつかる音と共に生首が落ちて来た。
首を飛ばした犯人は直に見つかった。ユーリアと男達の間を遮るように、剣を杖にあえぎながら膝を付いていた。
（・・・あの女）
患者服を着た長身の女には、魔導短剣が握られている。ヨハンにはそれが、自分の上司が愛用している内の一振りである事に気がついた。
「病人が！」
残りの兵士たちが同時に襲いかかる。しかし、剣が当たりそうになった瞬間、女の姿は消え、男達の剣は虚空をなぐ。たたらを踏んで姿勢が乱れた次の瞬間には兵士たちの首が飛んでいた。
「・・・大した腕ではないな」
それはヨハンに対してだろうか、男たちに対してだろうか。どちらにしろ、ヨハンが苦労していた敵を一瞬で刈り取ってしまったのは事実だった。

「リュロン！」
ユーリアの声だ。
「頼む、あの者を、ヨハンを助けてくれ！」
「ユーリアか、大きくなったな。二年も立っていると言うあの女の言葉は本当だったか」
独り言をぶつぶつ呟くリュロンを引っ張ってヨハンの元に連れてくる。
ユーリアはぽろぽろ泣いていた。
（あーあ、こんなに泣いちゃって）
エプロンからハンカチを出そうするが、体の自由が聞かない。それ以前に、既にヨハンは床に倒れていた。
（・・・こりゃ、本格的にまずいね）
「じっとしていろ」
女の声が降りてくる。リュロンは剣先に生体系術式《肉体再生》の光を灯すと、ヨハンの血を流す脇腹に翳す。
効果は直に現れた。
まず初めに、緊張で忘れていた痛みが戻ってきた。血の流れはある程度収まったが、傷が完全に治った訳ではないらしい。どうしようもない程の痛みで思わず呻き声を上げる。
「ヨハン！」
抱きついてきたユーリアの温かさを感じながら、痛みで明瞭なものとなった意識でリュロンを見る。
「・・・あまり動かない方がいい。傷が完全に治った訳ではないんだ」
しかし、そんなこと構わずに抱きついてくるユーリアがたまらない。痛いが、とても痛いが、それでも幸せだった。
ユーリアの啜り泣く声以外に聞こえる音はない。戦いが終わった事をヨハンは悟った。

「どうなっているのだ！」
男の怒声が響いた。
クロプフェット市民国大統領府、その大統領執務室で、部屋の主であるグレイム・アラモンドが報告に来た部下を叱咤する。
「化物なのは分かっている、だが、何故倒せない！？
何故なんだ。ここには自国の民だけではない。世界中から人と金が集まった経済の拠点何だぞ！」
大統領の叫びは悲痛だった。
バルムレイト山から巨人が歩いて来ていた。
身長は一〇〇メートルはある。国境警備隊は、不審に思いつつも、警告し、応えが返ってこなかったために攻撃した。
だが
「国境警備隊が、二個大隊が全滅だと！？」
それが全てだった。
八つの眼からばらばらに放たれた熱線は、一瞬で当たった兵士たちを蒸発させた。どんなに強力な攻撃を加えても、一向に聞いた気配はない。
巨人、暫定的に、バルムレイト山現地人の伝承を元に、プロメテウスと呼称されたそれは、真っすぐダリオンライトに向かってやって来る。
「・・・このままでは、猶予はあと三日程しかありません」
重苦しい沈黙が降りた。
「失礼するよ」
気軽な、気安い声が執務室に響く。ノックの後に開けられるドア、姿を現した人物に、大統領だけではなく、彼の部下も息をのんだ。
「・・・・陛下」
アトラス帝国皇帝レムルス三世の姿がそこにあった。
「・・・ダリオンライトは危険です。早急に非難するようにお伝えした筈ですが」

「同盟国の危機に尻尾を巻いて逃げだしたとなれば国際的非難は免れないよ。皇室の権威は失墜する」
どうどうと打算を口にしても嫌味にならない不思議な魅力がこの老人にはあった。
「・・・しかし、どうするおつもりなのですか」
いくばくか冷静さを取り戻した声で問うと、レムルス三世は「ふむ」と考え込んだ。
「いや、一蓮托生ならば、私も力になりたいと考えてね。ともかく、君は力みすぎだ。もうちょっと気楽にやったらどうかな?」
「多くの国民の命がかかっている事を、どうやったら気楽に考えられると言うのですか!」
激昂する大統領に、レムルスは動じた様子もなく、しかし、何の言葉も返さなかった。
(緊張したからって、プレッシャーを感じたって、何かが変わるわけではないのだけどな)
やはり、一般人から国家主席を選ぶ弊害だろうか?
何人死のうがするべき事はする。責任は果たすが、心は痛まない。そんな、傲慢とも言える非人間的な為政者の方が、結果的に良い政治をするものだ。
「大統領、貴方には、いや、我々には、残された手段があるはずだ」
「・・・おっしゃる意味が分かりません」
「恍けるのはよそう、貴方は、先日捉えた国際指名手配犯の正体をご存じの筈です」
第九位《氷王》オキツグ・クシナ。戦略兵器に匹敵するそれを、文字通り兵器として利用するには危険が大きすぎた。何分、咎人とはいっても、こちらは捉えた側である。解放した瞬間に復習として暴れて、戦うことなく逃げた所で、こちらは対処のしようがない。
大統領が非難に満ちた目で老王を見るが、彼は微笑むだけだ。しかし、その微笑みには何かが含まれている様な気がした。
「もしや、あると言うのですか、あの悪魔を使いこなす、魔法の様

な手段が」

魔術社会が基本の現代で、魔法という表現を使った大統領に苦笑しながらも、レムルスは告げた。

周囲の顔が驚きに満ちていくのを楽しそうに眺めながら。

第１０話　勝関をあげよ

景色が流れて視界が揺れる。
ライエルは列車の窓枠に肘を付きながら、外の光景を眺めていた。
「後、三時間ってとこかしら」
アクロポリスから発車した列車に乗って揺られる事三日、ただひたすら列車の座席で、あるいは簡易ベッドの上で耐える時間が終りを告げようとしていた。
斜向かいに座り、眼をじっと閉じて動かないリュロン。少し前までベッドの上で寝ていたが、今は到着も近いので、準備運動も兼ねて起きている。
二年の寝たきり生活で大分痩せたらしく、イプシロンが用意していたスーツの上下も、幅が余り気味だった。
イプシロンとヨハンはアクロポリスから離れる事は出来なかったので、今は二人だけだ。
気になる事があって話しかけてみる。
「ねぇ」
「・・・何だ」
返事は遅れてやってきた。
「あなた、オキツグを助けるつもり？」
「ああ」
今度は直に答えが返ってきた。
「あの人、死刑囚なのよ？」
「・・・だからどうした」
「確かに、政治的な意味もあるけれど、彼がこの二年でそれだけの罪を犯しているのは事実なの・・・聞いたでしょ、麻薬の話も。薬欲しさに犯罪組織を一つ皆殺しにした事もあったのよ？」
少ない時間ながらもオキツグと行動を共にして、この二年間で、以前とは大きく変わる程荒れきった生活を送っていた事をなんとな

くではあるが把握していた。リュロンにとってのオキツグが、二年前のそれであるならば、堕落した彼を受け入れる事が出来るか。

「勘違いをするな」

強い意思を感じさせる声だった。

「お前、親はいるか？」

「ええ、二人とも元気だけど？」

「母が罪を犯したとして、お前はどうする」

言われたままに考える。考え、そして応えた。

「・・・多分、悲しいと思うけど、それでも更生出来る様に支えていくんじゃないかしら」

「そうだ、加えて言うならば、私達剣導士に犯罪云々に関して、まともな倫理観を求める方が間違っている。有象無象が何人死のうと知った事か」

迷いのない、確固たる意思を感じた。

「だから、本当の問題は、私の衰えと奴の堕落が、私達からかつての戦う力を損なわせているか、否かという事なのだが、こればっかりは実地で試していくしかあるまいな」

再び沈黙が降りる。

今度はリュロンから語りかけて来た。

「お前は、あいつの何なのだ？」

「え？」

「いや、良い言葉がみつからない。この事態にお前がどう関わっているのかが分からない。犯罪者の手伝いだぞ、そこに旨味はあるのか？」

「ああ、そう言う事」

ライエルはテレビ記者である。取材の意図をもってオキツグに接していた。

「でも、ちょっと感情移入しちゃってさ・・・仕事は分かんないけれど、あたしに《白燐丸》を預けたのって、あのレムルス三世な訳で、彼の意図が分からない以上は官憲も手を出してはこれないのよ」

恐らく、監視は付いていたはずであるが、ここに来るまで邪魔をされた事は一度もなかった。
「最悪、仕事が首になっちゃったら、フリーのジャーナリストに転向するわ。あたしの記事なら高く買ってくれるって雑誌も結構多いの、国外にもね」
ついでに《氷王》の取材記事を得られればなお良い。
そう締めくくってから、思い出したようにライエルは付け足した。
「だから、貴方が心配している様な関係ではないわ」
「何がだ？」
本気で疑問に感じている様子はない。むしろ、憮然とした表情でこちらを睨む。
空を見上げれば、日も傾き始めている。赤い夕陽に見とれながら、到着を待つ。
暗くなる前に付くだろうか？

『もう一度言ってみろっ』
ガラスの地下牢にスピーカーを通した声が響く。
『貴様、何さまのつもりだ！』
「何さまも糞もあるか」
憮然とした調子でオキツグは応えた。
「確かに俺は犯罪者だが、捉えて、都合の悪い敵が現れたから戦って倒して下さいっていうのは虫が良すぎないか？」
大統領を名乗る男がこの部屋に訪れたのはかれこれ一時間も前になる。
（やはり、戦いが起こるのか）
何となく感じていたピリピリした雰囲気、その正体が分かった。
『急がなければ、早くしなければあの悪魔の巨人、プロメテウスがダリオンライトに着いてしまう！』

プロメテウス、ここまで来るといっそ笑えてしまう。焔の玉璽の封印の崩壊、未知なる存在の現出に身構えたが、しかし、実際に封印されていたの別の土地らしい。そして、二年前からの因縁、それが決着をつけにやってくると言う。

自分を追いかけてここまで来る訳ではないだろうと考える。恐らく、自分を封印していた玉璽の気配を感じて、その復讐のためにやって来ているのだ。

『人も沢山死ぬんだ、貴様に人としての慈悲の心はないのか！？』

「ははは、あったらこんな所で牢屋に繋がれている訳ないだろ」

これだから民主主義の国の人間は嫌なのだ。日本でも良く見かけたタイプ、自分にとって最善の結果を、もたらして当然と他者に求めるタイプ。人に、あるいは社会に向かうそれは、あまりにもヒステリックで、正直うんざりしている。

「そもそも、俺の得物はダリオンライトにないらしいじゃないか」

『うぐっ』

「剣導士に剣なしで戦えなんて無茶な事言うなよ、まさに自分でまいた種じゃないか」

正直、何もかもがどうでもよかった。疲れたのだ。死にたいのであればプロメテウスに戦いを挑めばいいし、死にたくないのであればダリオンライトを捨てるしかない。焔の玉璽を移動してももはや無駄だろう。赤い柱を造り上げた直後に、核石は粉々に砕け散って塵に消えたからだ。プロメテウスは玉璽の残滓を追ってきているのだ。

「原初の化物、使徒に狙われたら終わりだ。奴はここで暴虐の限りを尽くさない限り止まらない。さっさと逃げる事をお勧めするよ」

『・・・こちらには、特例恩赦をだす準備が出来ている』

「あ？」

『これは我が国だけに留まらない。帝国も連名だ。貴様がプロメテウスの撃退に成功したら、それまでの全ての罪がなかった事になる』

確かにこれは旨味だろう。普通の犯罪者だったら食いついたであ

ろうが、オキツグの反応は冷ややかだった。
「プロメテウス撃退前、の罪だろ？」
『ッ・・・・』
「それ以降に犯す予定の罪に関してはそうでもない訳だ」
オキツグほどの犯罪者を釈放してしまったら、民主主義の国における政権運営は致命的である。例え秘密裏だったとしてもだ。むしろ、不味い事になるかもしれない。
「斃した後、適当に罪をでっちあげてまた牢屋に放り込めば済む話だしな」
大統領はヒステリックに叫びながら壁を蹴って牢屋を出ていった。
（この国の人間は品性に欠けるな）
壁を蹴るのが怒りの表現の一種なのだろうか。だとしたら、大工が大分儲かる事になるだろう。

『やあ』

入れ替わりに入ってきた人物を目にして、久しぶりに驚くオキツグ。
「あんた」
『久しぶり、というべきかな』
レムルス三世の姿がそこにあった。
「・・・・・」
オキツグは、ここに来るまでの全て、軋轢も感情も全て忘れて、努めてニュートラルな精神状態に持っていくと、ニヒルに笑って見せた。
『特例恩赦を断ったようだね』
「・・・あれは、あんたの差し金か」
一介の政治家にそこまで大胆な手段を考えつく事は無理だろう。
「狙いが見え見えじゃねえか」
『ああ、だが、倒したら直に逃げてしまえばいいだろう？

罪をつくりあげる暇を与えなければいいのさ、それに・・・』

レムルスは饒舌だった。恐らく、オキツグにダリオンライトを防衛させたいのだろう。オキツグは、その様子を極めてフラットな心持で見ていたが、それでも心惹かれる事もあったので、あえて乗ってみる。

「だが、時間はあまりないな」

『そうさ、全てがぎりぎりだ』

手をひらひらと振って牢屋を後にするレムルスは、窮地にもかかわらず楽しげだった。

ダリオンライトは元々は城塞都市だった。

古代においては、街の全てを大きな城壁で覆い、更に幾重にも防壁を築いた、難攻不落の街。

その殆どは開発の都合上、取り払われたが、一部、特に街から大きく離れている、城塞壁は未だに現役として使える程のものとして残っている。

遥か後方に自らの街を背負い、その巨大な壁に身を寄せる大勢の兵士たちがいた。

「来た」

兵士の内一人が呟いた。周りの兵士たちに緊張が走る。

報告した兵士が更に眼を凝らすと、地平線のかなたで、黒い人影が歩いてきているのが見えた。

巨人、プロメテウスだった。既に防衛線は最終ラインまで後退している。ここに来るまで、何度も挑み、敗れた兵士たちは、既に最初の半分程になっていたが、それでもダリオンライトが見える位置まで後退して、もう引く場所がない事を実感した。

「・・・・・」

全ての兵士が息を潜めて敵を待つ。不用意に遠くから攻撃を仕掛

けて、一緒に戦っていた部隊は壊滅していしまったからだ。彼らが生き残っていたのは、半部以上が運のお陰であった。

恐怖に身がすくむ。

「え？」

兵士のうちの一人が声を上げる。仲間がそれを嗜めようとした次の瞬間、全てが吹きとんだ。

カッ

光と熱の奔流に巻き込まれる。生き残った兵士の眼には、プロメテウスの八つ目の内の一つから、一筋の光が伸びているのを見て取れた。

「うわっ」

ダリオンライトを目にしても変わらず、プロメテウスは一歩一歩確実に接近してくる。まるで死神の様に、振り払う事もかなわず、その恐怖に、兵士たちの戦意は消失しかけていた。

「・・・・・」

オキツグはつぶっていた眼を開けた。

どうやら寝ていたようだ。まだ日中のはずだが、仕方がない、ずっと地下暮らしだったのだ。体内時計も狂ってくる。

（・・・・・暑いな）

日中である事を考えても、この気温は暑い。確か、エアコンをつける程の気温が来るのは先の話だったはずだ。

「ん？」

ガラスの向こうの扉が開かれる。

「・・・おう、またあんたか、色男」

『・・・・・・・・・・・・』

エルマンは呼びかけには答えず、しかし、いつもとは違う行動を取った。
ガラス窓の横にある扉の鍵を開けると、牢屋の中に入って来たのだ。
「お前は死刑囚だ」
エルマンは言った。
（こいつ・・・・）
オキツグは焦りを感じた。明らかに目付きが尋常ではなかった。
「だが、今のダリオンライトは脅威にさらされている。お前の死刑は五日後を予定していたが、その五日後まで、ダリオンライトが持たない事が明確になった」
だから
エルマンは腰の魔導剣を抜き、切先をオキツグに向ける。
「貴様には少し早めに裁きを受けてもらう」
「・・・おいおい」
抵抗は一切できない。そのための拘束具だ。
「ちゃんとお上の許しは得たんだろうな？」
「そんなものない」
エルマンは言い切った。その言葉にオキツグは絶句する。
政府側が何らかの措置を施す事は分かっていた。もしかしたら、プロメテウスの前まで連れて行って、巨人の眼を無理やり引くなどもありえるだろうと考えた。愚かにも、切り札たるオキツグを殺してさっさとダリオンライトから退避すると言う事もありえただろう。しかし、眼の前の男は完全に自己判断でそれを行おうとしていた。
（まじかよ・・・・）
この街には碌な人間がいないと心の底から思った。ライエルも移民であると聞く。オキツグは心の底からクロプフェット市民国が嫌いになった。
「・・・それって死刑というよりも私刑って言うんじゃなかったっけ」

「お前は悪だ」
だから殺していいんだ。
自分の言葉で自分の行動を許可する辺りにエルマンの意思を感じさせる。
（まずいな、追い詰めすぎたか）
外の状況を知るためとは言っても、やはりやりすぎだったのだろうか。
論理になってない、破綻した理屈で自らの正義を肯定すると、エルマンは魔導剣に力を込め始める。
「おまえは、おまえはライエルさんを堕落させた、私が守るはずだったあの人を、私の評価も、大事なものも全てが地に落ちてしまった。お前は、その償いをしなければならないんだ」
ぼそぼそと病的な様子で言葉を紡ぐエルマン。
「だから、だからっ死んでしまえ！」
剣を振りあげる。恐らく命を奪いに来るであろうその刃を、オキツグは真正面から見据えた。
だが、振りあげられた剣が降りてくる事はなかった。エルマンが慈悲に目覚めた訳ではない。むしろ、剣は降りてくるどころか、振りあげられたまま宙に投げ出される。
エルマンの腕と共に。
「へ？」
切り取られている自らの腕を見、そして噴き出す血を自ら浴びて、ようやく自分に腕がない事に気がつく。
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
見っともなく喚き、泣き叫ぶエルマンであったが、オキツグの眼にはそんなもの映っていなかった。
その後ろで、剣を振り抜いた形で残心している犯人の姿。
（・・・・・・冗談だろ）
その剣士は、長い脚でエルマンを蹴り転がして黙らせると、血振

りしてオキツグを真っすぐ見据える。
剣士の後ろからライエルがひょっこりと姿を現せる。
「久しぶりだな」
剣士は、女の声で傲然と告げた。
「・・・・お、お前」
「大分面白い状況になっているようだな、だから・・・・」
地獄の底から舞い戻って来たぞ
告げた女はオキツグに《白燐丸》を差し出した。
「戦だ、支度をしろ」
何か答えようとして、唇が震えた。
(ああ、分かっているよ)
「分かっているよ、リュロン・・・・」
涙が流れたが、手足を縛られて拭う事は出来なかった。

第１０話　勝関をあげよ（後書き）

１１／８　誤字修正

第11話　RE

「リュロン・・・」

喉から絞り出す様な声はかすれていて、言葉を発したオキツグ自身にも聞き取り難いものだった。

どうして、いつ、一体、色々な疑問が心の中にないまぜになって、思いを言葉にさせない。

ただ、相棒が帰って来たという事実にオキツグは圧倒されていた。

「オキツグ・・・」

自分の声と違って、ハッキリと明瞭に放たれた声だった。リュロンは少し痩せた様だった。二年前、女性として美しいながらも、女戦士としての逞しさを兼ね備えていたその体。

今はまるで違う。ほっそりとして、儚げですらある。戦士の荒々しさに隠されていたものが表に現れているかのようだった。

しかし、それ以外は何も変わらない、かつての相棒、リュロンだった。

加えて、自分はどうだ。

まず、見た目が変わった。一度黒くは染めたものの、染め粉が落ちたオキツグの髪は雪の様に白い。瞳も蒼かった。

見た目以外も変わった。心は荒み、生活は堕落した。罪も犯した。その結果が今のこの状態だ。

「リュロン・・・」

幾分か先程より通った声で呼びかけると、返事をする代わりにライエルから受け取った《白燐丸》を差し出す。

視線が交錯する。

（受け取れって事か？）

だが、生憎オキツグの手足は自由が利かない。困惑して、瞳で問い返すと、さらに刀を差し出す。

「・・・・・が」

リュロンが呟くが、声が小さくて聞こえない。
「え？」
「さっさと受け取れと言っておろうが！」
刀を握った拳ごと、オキツグの顔面にめり込む。

ドゴッ

「へぶしっ！」
オキツグを十字に拘束していた拘束具は、基盤の根元から折れ、地面に倒れる。
一瞬、オキツグの意識は黄泉を彷徨った。
「な、な、何すんだよ！」
痛みと、感動と、怒りと、訳も分からず、声が叫びとなって漏れた。
「私は受け取れと言ったはずだ」
久しぶりに見る相棒の魔導大剣（ムズ・ラハート）が、綺麗にオキツグの拘束具を細切れにしていくのを見ながら、相棒の言葉の続きを聞いた。
「私は受け取れと言ったんだ」
「だけど、こんな状態でどうやって」
「それがお前の罪だ。こんな所に捕まらなければ、問題なく受け取る事が出来た筈だ」
（・・・・・）
オキツグは、ブランクはあいたものの、それなりに長きにわたる付き合いの経験から、リュロンが珍しく自分に気を遣って慰めているのを感じた。
罪を犯さなければ拳を受け取る事はなかった。つまり、罪の対価は拳である。拳を受けたオキツグに、もはや罪はない。
とても分かり難い、不器用で、武骨で、厳しい優しさだった。
そして、オキツグは今のやり取りで、自分がかなり精神的に復調しているのを感じた。

久しぶりになった手足をさすりながら、再び差し出された《白燐丸》を受け取り、腰に差す。
「あの、とにかく外に出ないと・・・・・」
おずおずと告げるライエル。とりあえずその通りなので、さっさと御暇する事にした。
「ぐ・・・・お・・・・」
エルマンがうめき声を上げる。
「お前・・・達・・・後悔するぞ」
怨嗟の声には血が混じっている。
「・・・・後悔させてやる、私を虚仮にした報いを受けさせやる。破滅させてやる。お前達、全員だ・・・・絶対に、絶対に許さない」
血走った目がライエルを貫く。そのあまりにも濃い負の感情に押される。
「・・・許さない・・・・許すものかぁ・・・・・・・」
延々と恨みつらみを吐くエルマンに、オキツグは歩み寄る。
「貴様も・・・・貴様も・・・《氷王》」
オキツグは抜き打ちの初太刀で這いつくばるエルマンに刀を振り下ろすと、綺麗に首筋に当てる。
「がひゅ・・・・・」
転がった首からは血が一滴も流れない。凍っていた。
「本当に許せないのならば殺すしかない。俺にとっても、お前にとってもだ」
淡々と命を奪ったオキツグだったが、その眼は悲しそうだった。
「・・・私のいない二年間に堕落したと聞いていたが、以前の戦いへの優柔不断さはまるでないな」
「失望したか？」
「いや、むしろ好ましい。前はお前のそういう所に殺意を抱くほどイラついていた」
先に牢を出ていくリュロンに、続き、オキツグは茫然としているライエルに向き直って告げた。

「俺は結局こういう人間だ」
「・・・・」
「でも、あんたには感謝しているんだ。ありがとう」
まるで別れの言葉を告げる様だった。事実、別れのつもりだったのかもしれない。が、そこで言うとおりにするのは癪だった。
「・・・あたしもよ」
ライエルは二人の後を追った。

警察省の庁舎内部は誰もいなかった。
たった三人のための大伽藍。
外に出ても誰もいない。
まるで街全体が死んでいるかのようだ。
「街に住んでいる人は殆ど避難してしまったの」
監禁されていたオキツグは、久しぶりに見る街の風景に、言いようの知れない寂しさを覚えた。
「プロメテウスが到達するまで、後半日だそうだ」
感情の見えない声で告げるリュロン。
軍と警察は、街の住民が少しでも逃げる時間を増やすために戦いを挑んでいると聞く。
邪魔するものは誰もいない。まるで、そういう芸術かのような街を眺め、ただ歩く。
ライエルと見て回った街の景色、それ以前に、ただ辛いだけの日々だったダリオンライトでの生活。売人から薬を強奪した裏路地。全てが遠い過去の様に感じられた。
この光景に、取り返しのつかない破滅が訪れるまであと数時間。だが、オキツグに何かをするつもりはなかった。滅ぶのであれば滅べばいいと思う。まるで良い思い出はないのだ。
いつか、ライエルと訪れたマーケットに通りかかる。

「おや？」
リュロンが不思議そうな声を上げる。
殆どがたちのいたか、おいてけぼりをくらっている屋台の中で、湯気が立ち上るものを発見した。
「・・・・」
あのラーメンの屋台だった。
「いらっしゃい」
あの時と変わりのない店主の声に導かれて、三人で屋台の椅子に座る。
「あんた、逃げないのか？」
「注文は？」
オキツグの声を無視して店主は言った。ライエルが三つ、以前と同じもの頼むと、手早く麺を茹ではじめる。
「・・・私はね、この商売を初めて五十年になります」
訥々と語り始めた。
「父が始めた商売でね、故郷の料理を再現したとか、私は生まれも育ちもダリオンライトでしてね」
意外だった。てっきり移住組かと思ったが、確かに、店主は長い年月をこの街で過ごしたのだろう。何となく、雰囲気がものがたっていた。
ふと、オキツグの頭に一つの考えが浮かぶ。
「父のね、夢だったらしいんですよ。故郷では仕事に追われて、夢を追いかける暇なんてなかった。遠いこの地に来たからこそ、心を自由にはばたかせるんだって」
「失礼ですが、あなたの御父上の名を伺っても？」
しばしの沈黙の後に店主は応えた。
「・・・タケノリ・ササキと言います」
オキツグの予感は的中した。彼の父も自分と同じようにこの世界に流れ着いた一人だったのだ。
「御兄さん、随分前に食べに来てくれましたね」

「え、ああ、俺、あなたの御父上と同じ故郷なんだ」
店主は驚いた顔をした後に、直に腑に落ちた表情をした。
「思えば、この料理を美味しいと言ってくれる人はいますが、涙ぐんで感動する人は御兄さんだけでしたね」
そんなところまで見られていたらしい。
「・・・本当に逃げないのか？」
「ええ、私はここでこのラーメンと商売を覚えました。だから終わるのはここでいいと考えているんです」
達観した瞳だった。
「ご心配せずとも、ここに来るまで、弟子を取っていた事も良くありましたから、私が死んでも、探せば弟子の店でこの味を楽しむ事が出来ます。これは宣伝ですが、最後に取った弟子が、帝国のアクロポリスで店を開きました。機会があったら寄ってって上げて下さい」
ラーメンを汁までたいらげ、礼と代金を置いてその場を去った。
「お前の、故郷の味なのか・・・」
そう言えば、リュロンには言ってなかったかもしれない。
「漂流者って知っているか？」
「ああ、時空の流れを跳びこえてやってくる異世界の遭難者、まさか、お前が？」
「ああ」
ライエルも驚いた顔をしている。
「先代の店主の出身が俺と同じ世界の、しかも同じ国だったんだ」
忘れていた故郷の事が頭に浮かぶ。
それなりに幸せな事もあった。家族の愛には恵まれていなかったが、友人には恵まれていたと思う。それで充分だと感じる。
「俺、自分の世界の家族とは仲が良くなくてさ・・・」
家族は、自分を除いて縁を閉じていた。
「だから、こっちに来ても、帰れないと知っても、たいしてショックじゃなかった」

文明的生活もあり、生活環境は以前とたいして変わらない。
頼るべき仲間、家族と思える同胞と巡り合えた。
「でも、最近じゃ少し後悔もしている」
「・・・帰りたいのか？」
「いや、うーん、そうなのかな」
自分でも分からない。
沈黙はしばらく続いた。
やがて、意を決したようにオキツグは方向転換した。
「戦うのか？」
「正直、この街がどうなったって構わない」
正直な、本当に心の底からこの街は嫌いだった。だが、
「あの店主と、味を伝えた先代には感謝してもいいと思っている」
店主の言葉通り、いつか、その弟子たちの店を周る旅をしてみたいと思った。
いつしか、都市の外縁部にまで来ていた。遠くには黒い巨人の姿があり、剣導士達が必死で戦っているが、大して効果を上げる事には至っていない様だ。
「戦う」
短く、呟くように小さい声だったが、強い意思と芯を感じさせる声だった。
リュロンは微笑んでいた。その眼は付き合うと言っていた。
「行くか」
「ああ」
足を踏み出した。戦場に続く第一歩を。

血と煙と何かが焦げる臭い。
この世界における戦争、戦闘行為の主体はあくまで魔法であり、銃器による硝煙が戦場に立ち上る事は少ない。が、ダリオンライト外縁部に構成された防衛部隊からは、地獄の様に、焦げるにおいと

人の苦しみ、呻く声に満ちていた。
「もうお終いだ」
その一画に膝を抱えて丸くなる男がぼそりと言った。
「馬鹿野郎！」
倒れて寝ていた男が上半身を起こして這って近寄り、胸倉を掴む。
「俺達が、俺達が諦めてどうする！」
そこは防衛部隊の怪我人ばかりが集められている。健康な兵と同じ行動は取れないので、待ち伏せ部隊として待機していた。
「ここは最後の砦なんだぞ！」
後ろには故郷を背負っている。確かに、家族の避難は済んでいたとしても、ダリオンライトは心の支えであり、誇りだった。
しかし、死の象徴とも言えるプロメテウスは未だに健在、一歩一歩、確実に接近している。
「攻撃、来るぞ！」
見ればプロメテウスの眼が輝いている。何度も、味方と自分の命で教えられた攻撃のタイミングだった。
「防衛部隊はどうした！」
まだ前方には戦っている部隊があったはずだ。
「だめだ、通信が届かない」
恐らく全滅したか。
しかし、巨人の放つ攻撃に耐えうる術は持たない。逃げるだけの脚もない。
「ここまでだと言うのか・・・・」
必死で戦ったが、故郷を守る事はおろか、一矢報いる事すら出来ないだなんて。
兵士たちの間に空虚な挫折感がはびこった。
「くそっ」
「そこをどけ」
後ろからした声に振り向くが、気がつけばその体は宙を舞っていた。

「へ？」
砂地に着地すると同時に、高速移動する何かに跳ね飛ばされたのだと分かる。が、体に痛い場所はない。非常に上手な跳ね飛ばし方だった。

カッ

プロメテウスの眼から熱線が放たれる。
「ぐ・・・・」
兵士たちは、思わず目をつむるが、一向に衝撃はやってこなかった。
眼を見開き、周囲を見渡すと、先程までなかった、異様な影を見つける。
巨大な氷山だった。
軽くビル一棟はありそうな大きさの氷山がプロメテウスの攻撃を防いだのだ。攻撃を受けた壁面は、溶け、蒸気を放っていたが、しかし、こちらには届いていない。
「・・・やつめ、鈍ってなどいないではないか」
呻くように呟いた声の主は女だった。長身で、まるで戦女神の様な冷徹な美貌に一瞬目を奪われる。

オオオオオオオオオオオオオオッ

プロメテウスの雄叫びが響く。その声には、熱線により戦果を得られなかった苛立ちが見て取れたが、その感情は兵士たちに向いていなかった。
それは氷山の頂上にあった。
小さく、逆光で良く見えないそれは人影の様にも見える。
白い髪にカーキの軍用コートが印象的だった。
「氷凍系術式・・・」

兵士の内の一人が呻くように言った。
「この規模で術を発動したと言うのか、水のない、ダリオンライトの砂漠で・・・・」
白髪の男は氷山を蹴り砕いて跳躍する。
まるで飛んでいるかのように滑空しながらプロメテウスに向かう。
着地、駆け出す衝撃で、足元の砂が爆発した様に巻き起こった。
「速い！」
兵士のうちの誰かが言った。
男は瞬く間にプロメテウスに接近する。
巨人が腕を振り上げて撃ちおろすが、外れて砂煙が起きるだけだった。腕に飛び乗った男は、巨人が再び腕を振りあげる間に肩まで駆け昇ると跳躍、刀でプロメテウスの顔面を薙ぎ払う。
「強い！」
「当り前だ」
男の戦いに手を出さずに見守る女が言った。
「あれこそが第九位《氷王》オキツグ・クシナだ」
《氷王》
兵士たちの間にざわめきが起こる。
「《王位》だって」
「何でこんなところに」
「だが強い」
「勝てるかもしれないぞ」
兵士たちの会話に参加する事もせず、しかし、女は言った。
「さて、そろそろ私も行く。相棒に全て持っていかれるのは癪だしな」
そして、ついでに付け加える。
「奴の弱点は、あの顔の目玉だ。目玉が核石の役割を負っている。そこを狙えば倒せるかもな」
女は駆けだした。先程の男に負けない、凄まじい速さだった。
「どうする、弱点だって・・・」

「でも、本当かどうか」
「現に効いているではないか、それに」
このまま闖入者に全てを任せていいのか。
自分たちこそダリオンライトの守護者ではないのか。
仮に撃退したとして、自分達は胸を張って凱旋する事が出来るのだろうか。
「行くぞ」
兵士の一人が言った。
「よそ者に全てかっさわれてはたまらない」
他の誰かが立ちあがった。頭には血のにじむ包帯、それ以外も擦り傷だらけだった。
また一人、また一人と立ち上がって、そして戦場にかけていく。
オキツグとリュロンを追って。

「オキツグ！」
プロメテウスの攻撃をかいくぐりながら凍りの刃を振うオキツグに声をかける。
「来たかっ」
空中で、回避不能なタイミングでプロメテウスの拳が炸裂する。
氷閻刀で攻撃を防ぐが、衝撃を殺す事は出来ず、地面に急滑降するオキツグを、リュロンがクッションになって受け止める。
「悪い」
オキツグが小さくジャンプする。意図を察したリュロンは、素早く大剣の腹でオキツグを掬うと、思いっきり振りあげてプロメテウスの顔面に飛ばす。
オキツグの刀がプロメテウスの眼に突き刺さった。そのまま取り着き、真一文字に切り裂いて同時に二つ潰す。

オオオオッ

その叫びに悲哀と苦痛が混ざっている様な気がした。
（恐らく、玉璽である《白燐丸》の効果か）
普通に攻撃したのでは傷一つ付けられないだろう。
リュロンは駆けだした。プロメテウスの体を駆け昇り、振り払われて宙に舞うオキツグを回収すると着地した。
残りの四つの眼が光る。赤い熱線に防御が間に合わずにいると、巨人の顔側面に衝撃。
「あれは・・・」
先程の兵士たちだった。不自由な体をおして、魔術で、銃器で攻撃する。
「弱まっているな」
眼を半分潰されたプロメテウスの攻撃は、未だに凄まじいものではあったが、それでも減衰が見られた。
「く・・・・」
リュロンが膝を付く。
「お、おい！」
慌てた様子のオキツグを手で制する。
「・・・大丈夫だ。寝たきり生活から一転、激しい戦闘で体力が底をついているだけだ」
「・・・それって大丈夫じゃな・・・けど、俺も同じだ。監禁生活と日頃の不摂生で限界」
二人は眼を合わせ、そして笑った。
盛大に笑った。
「洒落にならんではないか、よりにも寄って運動不足が祟るとは・・・」
「加えて俺は薬中だ。正直、禁断症状がきつい」
オキツグの手が震え始めている。
プロメテウスは苦痛に身もだえていたが、次第に体勢を整えはじ

めている。
リュロンはオキツグの手を強く握った。
「次で決めるぞ」
「ああ」
オキツグは《白燐丸》を両手で構えて、切先をプロメテウスに向ける。
リュロンはオキツグを後ろから支え、オキツグの腕を自分の手で固定する。
「氷閻刀・大縛鎖」
冷気が砂漠を覆った。
攻撃を加えていた兵士たちも、その寒さに身を抱える。
オキツグとリュロンだけがただ変わらずに刀を巨人に向けている。
「くたばれ」
オキツグの呟きと共にそれは放たれた。

ゴッ

刀があわく光、そしてそれが鮮烈なものとなる時に放たれた、否、流れ出たのは凍りの奔流だった。プロメテウスにぶつかり、巻き込み、全てを凍らせていく。抵抗するプロメテウスだったが、体ごと凍らされて何も出来ずに巨大な氷柱に閉じ込められていく。
プロメテウスは沈黙した。
しばらくの沈黙、そして、兵士たちがいる方向で大きな歓声が起こる。
しかし、オキツグとリュロンが未だに体勢を変えないのを不審そうな眼で見ていた。
「行くぞ」
オキツグは言った。
「いつでも」
リュロンはオキツグを支える力を強くした。まるで大事なものを

失くさない様に。
　プロメテウスは凍りで閉じ込めたままだ。やがて凍りが解ければ、プロメテウスも復活してしまう。
「氷闇刀・波濤」
　電磁制御で氷をレールガンの様に打ち出す。これはもともと失敗作の技だった。水分に含まれる不純物質、それを利用した攻撃だったが、弾として打ち出される凍りは、摩擦で、あるいは電気左様で蒸発してしまう。
　《氷王》が造り出した凍りすらも一瞬で吹き飛ばす、この技が今は必要だった。
「覚悟しろ」
　プロメテウスを見据えて精神を集中させる。
　思えば、眼の前の巨人とは長い付き合いだ。直接的なものではないが、それでも感じ入るものはある。
（だから、終りにしよう）
　プロメテウスを含む巨大な氷山が鳴動する。
　氷が割れ、溶けていくが、これはプロメテウスによるものではない。
　プロメテウスが凍りの中で悶え、苦しんでいる。
「お前なんか、電子レンジでチンだ」
　さらに刀に込める圧力を高める。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっ！」
　雄叫びを上げ、その揺れが強くなり、電光、光を放ち始める。
「ふきとべえええええええええええええええええええええええええええええっ！」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ
　光と、音とが消え、視界が白一色に染まる。

何も見えない。感じるのは、オキツグとリュロンの、お互いの温かさだけだった。

オキツグはリュロンに身をまかせながら、背後に当たる柔らかい感触に思わず顔を赤くする。

(何考えてんだ、俺)

そして、視界が戻ってきた。

凍りの山は綺麗に吹き飛び、その中のプロメテウスも粉々に砕けている。

「・・・・・」

顔のあった部分、未だにしぶとく光る眼玉が一つ。

だが、点滅し、今にも消えそうだった。

オキツグは全てを振り絞った一撃を放ち、先程の疾風の様な速さとは程遠い速度で歩む。リュロンはそれに続いた。

やがて、近寄り、その巨大な眼球の前にまで立つ。

「これでしまいだ」

渾身の力で刀を振りあげる。よろけて、リュロンがすぐに支える。

「「・・・・・・」」

そのまま二人で刀を握った。

「「おおおおおおおおおおおおっ!」」

振り下ろす。綺麗に袈裟がけに両断し、眼球の光は消えた。

戦いが本当に終わった瞬間だった。

「ふぅ・・・・」

立っているのが限界に達して、思わず地面に座り込む。リュロンは大剣を地面に突き刺して体の支えにしていた。

相棒に眼を向けると、視線が交錯した。

「・・・・・・」

「・・・・・」

リュロンが自分の胸に手をやり、

「スケベ」

と言った。

オキツグは無言で眼をそらす以外に出来る事はなかった。

第11話　RE（後書き）

11／5　誤字修正

第12話　PS

駅の喧騒。
ダリオンライトが巨人プロメテウスの侵攻を受けて、否、受けかけて二週間の月日がたった。
街から退避していた人も戻り、機能を復旧させ、人口が以前に戻りつつあるため、鉄道もようやく復旧する事になったのだ。
蒸気機関車の蒸気の音、別れを惜しみあう人々の会話、忙しく荷物を運ぶポーター。
かつての活気あるダリオンライトが戻って来ていた。
そして発車する。
ゆっくりと速度を上げて駅を離れ、加速し、ダリオンライトから抜けていく。
その乗客の一組を見送るものは誰もいなかった。

目にも移らぬ速さで街並みが横に流れ、街を出てからはひたすら赤土の大地が続いている。
「はぁ」
オキツグは開けられた窓に寄りかかりながら顔面に風を受ける。
暑いのだ。車内には冷房がついていない。元からそう言ったものはない車体だった。
風が汗を乾かして心地いい。ずっとこうしていた。
斜向かいに足と手を組みながら俯くリュロンは、スーツの上着まできている。暑くないのだろうか？
純粋に相棒の体に人体の不思議を感じて見つめる。
「・・・なんだ？」
視線を感じたらしいリュロンが、薄く眼を開いたまま問う。

「いや、暑くないのかなと思って」
その言葉に何かを考える様に宙に視線を泳がせると、おもむろに立ち上がってオキツグの隣に座った。
「ああ、これなら暑いな」
「・・・・・・」
確かに暑い。人一人、これ程の熱を発生するのかと驚かされる。
相棒が隣に座っただけで、オキツグの体感温度は二度上がった。
「・・・・・・」
オキツグも立ち上がると、反対側の席に移った。
リュロンが追いかけてもといた席に座りなおす。
もう一度席を移るが、それも無駄だった。
「おい、何のつもりだよ！」
車内である事を考慮して（他に人は数えるほどしかいないが）抗議の声を上げる。リュロンはにやりと笑って応えない。
（こ、こいつ・・・また俺の事からかって）
しかし、文句を実際に言う事は出来なかった。

すっ

さらりと何かが揺れる音がしたと思ったら、顔のすぐ横にリュロンの銀髪があった。
オキツグの肩にリュロンが頭を乗せる。オキツグよりリュロンの方が背が高いため、もたれかかる様な格好になった。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
心臓が高鳴るのを感じながら、オキツグは動けずにいると、耳元でリュロンのくすりと笑う声。
（こいつ、やっぱからかって・・・）
腹立たしかったが、直に反応を返さない。
反撃の糸口を探す。今日こそやり返してやる。

名案が浮かんだ。
オキツグは立ち上がる。体を預けきっていたリュロンは体勢を崩して、座席に手を当てながら抗議の視線を送って来た。
何も言わずにオキツグはリュロンのおとがいを指先で持ち上げた。
しかし、リュロンは何の反応も、抵抗も示さなかった。今度こそいつもと違う反応を得られると思ったのに悔しい。
そして、静かにリュロンは眼を瞑って何かを待つ。
オキツグは天を仰いだ。
（まいったな・・・）
これでは完敗だ。
鼻でもつまんでやろうか？
流石に怒るだろう。
リュロンの唇は緊張に震えていた。
オキツグがくすりと笑う。
リュロンが眼を開けてキッと睨むが、オキツグは何も言わせない様に唇で唇を塞ぐと、やがて再び目を閉じる。
今度は血の味はしなかった。

ダリオンライトを出ていく列車を見送りながら、ライエルは出店でかったジュースを啜る。
もっとも、ここは駅のホームではない。都市の外縁部にある観光地化された物見台だ。先日はプロメテウス撃退作戦にも利用された古の城壁は、文化的価値も高いので国内外問わず人で賑わっている・・・筈なのだが、今のところは数えるほどしか人はいない。
そこから丁度、走る列車が見えるのをライエルは知っていた。
別に二人をホームで見送っても良かったのだが、それはそれで癪だ。
（何か、二人を祝福しているみたいだものね）

列車を忌々しげに見つめる。悔しげに、だが、どこか苦笑する様な、そんな顔で。

「ああ、良い男いないかなぁ」

『こんばんわ、ＣＮＮ、朝のニュースです』

『速報です。先日おきたプロメテウス事件ですが、本番組の記者が、事件に関わった重要人物の単独取材に成功しました。それではＶＴＲをご覧ください』

二人のキャスターの姿が画面から消えるとしばらく暗転、そして明るくなった画面の中は、どこかのアパートの一室の様だった。

『おい、まだか』

『ちょっとまって、もうすぐ』

男女の声が聞こえる。

やがて、画面の中央に置かれた椅子に一人の男が座る。

白い髪に蒼い瞳が印象的な男は、画面に眼を向けるとにやりと笑う。

残忍、冷酷、色々な負の感情と一抹の優しさの込められた、不思議な笑み。

不敵に笑う男の姿を捉えた画面をみた市民達は、一斉に疑問符を浮かべる。この男は一体誰なのだろう。

そして男は口を開いた。

『おはよう、諸君』

第1話　故郷の土

「アトラスに帰りたい」
オキツグは情けない声を洩らしながら街中を歩いていた。
歩く街中の光景はインドのデリーに似ていると思った。昔、一度だけ伯父に連れて行って貰った事があったのだ。
本当の家族はオキツグに無関心だったから。
「ダリオンライトの方がまだましだった」
肩を落として呟くオキツグは、五年近く愛用している色あせたカーキの軍用コートに、腰には二本の魔導刀を差して剣導士だった。
白い髪の毛に蒼い瞳は、オキツグの故郷では目立つ事この上ない容姿だったが、この世界ではそれ程でもない。現に今、横を通りかかった観光客らしい女性達は白い肌に赤だったり、黄色だったり、緑だったり、色とりどりな頭髪に瞳の色をしている。
「まるで信号機だ」
コートが暑い訳ではない。いや、気候は温暖で、季節も初夏なので暑いのは事実なのだが、それでも慣れているためそれ程不快感は感じていない。
オキツグがへきへきしているもの、それは人の多さだ。
ダリオンライトの遥か西、大陸西端の地。
マクヴェス王国の首都、ヴェスラが今いる場所だった。
軍事国家であるマクヴェス王国は、十年前まで紛争の絶えない国だったのだが、国家内でのタカ派の首魁が大国の魔術による爆撃で死亡、他国との融和政策を条件に和平条約を結んだのだ。
各種資源エネルギーが豊富なこの国は、突然成り立った外交と輸出による貿易黒字、そしてもともと備えていた豊富な文化財による観光地化によって沸き立ち、急速に姿を変えようとしていた。
今、最も注目されている国の首都は適正を遥かに超えた人口でごった返している。

観光スポットとして人気なサンミュエル大聖堂の近くの屋台で鳥の串焼きと飲み物を買ったオキツグだったが、休む様な場所はなく、歩きながら飲み、食う状態だった。
いい加減休みたかった。
何故、ここまで来たかを思い出してオキツグは諦める。

「祖国に一度帰ろうと思う」
極東の国、ヤツクシマ共和国で取っていた宿、その一階で宿の主人が経営していた飲食店で、パンをかじりながらオキツグは相棒、リュロンの言葉を聞いた。
「祖国？」
「ああ」
確か、この国にこれ以上いても何もなさそうだし、次は何処に行こうかという話だったはずだ。
ダリオンライトでのプロメテウスを撃退した件から二年の月日がたった。
オキツグ達にはクロプフェット市民国から、報奨金と言う名目できあげた金が潤沢にある。払った事で、犯罪者と結託していたという事実を認めてしまったクロプフェットの大統領は政権を維持できずに辞任したというニュースを新聞で見た。
実際は、あれにはクロプフェットの野党が深く関与していたらしい。政治的理由により自由の身と金を手に入れた二人だったが、その金で数年は気儘に旅をしようと言う事で結論が一致した。
二人とも疲れたのだ。
（よくこいつが戦いから離れる事を認めたよな・・・）
「おい、聞いているのか？」
冷たい金の瞳がオキツグを貫く。
別に不機嫌になっている訳ではない。冷たい瞳と不機嫌な態度は

相棒のデフォルトだった。
「あ、ああ、聞いてるさ・・・だけど、大丈夫か？」
確か、相棒は軍事刑務所からの脱走兵だったはずだ。無実の罪らしいが、悪法と腐敗した軍首脳部もまた法である。
「これを見ろ」
新聞を放って来た。
「んー、マクヴェス王国、ＧＤＰの伸びが凄まじいか・・・」
新聞の国際面を示す。
「今まで言ってなかったが、そこが私の祖国なんだ」
一瞬だけ驚き、そして脳内の情報を検索する。確かに、十年ほど前に国としての方向転換を大々的に計った事で有名な国だったはずだ。首都のヴェスラは地球で言うところのドバイの様な場所であると聞く。この十年でＧＤＰが十五倍に伸び、各国から外資が参入。都市の景観は伝統的な景色と、経済の渦の中心としてのそれが奇妙に入り混じった状態だと言う事だった。
「私が軍を脱走したのが十二年前、十六歳の時だったのだが、私の一家は代々軍に戦士を輩出する家系でな、歴史もそれなりにあったのだが・・・やはり長い歴史と言うのはそれなりに敵も多くつくるらしい。軍の反対派閥に嵌められたのだが、そいつらが十年前の政権交代、タカ派の一掃にも繋がった件で逮捕されていたらしい。十二年も経った今になって私の無罪が発覚したと言う事だ」
もう一つの封筒に入った手紙を放る。
その中には誤認逮捕を認め、謝罪し、それ関わる全ての事件においてリュロンの無罪を確約するものだった。
「姉上の婿殿が大分苦労してくれたらしい。晴れて無罪になったのだから顔を見せに来いと言う事なのだろう」
リュロンの顔は穏やかだった。
恐らく、自分の人生における最初の躓き、癒えつつあった心の大きな傷が、無罪とされた事で完全に回復したのだろう。厳しさと冷徹さの目立つ顔の中にも、故郷を懐かしむ色が見て取れた。

しかし、微妙に表情が固い気がする。
（ああ、そうか）
リュロンはオキツグの故郷が、既に帰る事が出来ないくらい遠い場所である事を知っている。故郷に帰りたいという思いを、故郷に帰れない人間の前で言う事に抵抗を覚えていたのだろう。
いつも無愛想な癖に、肝心なところでは繊細な相棒が微笑ましい。
「飯は美味いんだろうな？」
「？」
「お前の故郷だ。飯が美味ければ、まあいいよ」
オキツグの言葉を理解するまで時間のかかったリュロンは、理解した瞬間、柄にもなく舞い上がっていた。
「あ、ああ、この時期になれば砂漠鳥の串焼きが最高に美味い。甘檸檬の紅茶は何に合わせても合うし・・・」
饒舌でまくしたてる様に喋るリュロン。
珍しいものを見た。
「・・・すまん」
「いや、いいさ」
かくしてリュロンの故郷、マクヴェス王国のヴェスラ行きが決まった。

念のため、地理に明るい自分が先行すると言ったリュロンを先に行かせて、一か月がたった。
それ以来、連絡がない。
（偶然か、はたまた罠か）
連絡があり次第、入国する予定だったが、これ以上待つのは下策に思えた。リュロンの無罪は嘘、もしくは、本当だったとしてもリュロンを誘い出す罠があったかもしれないのだ。
「あるいは俺か」

等級制度における第九位《氷王》の位階を持つオキツグはかなりの恨みを買っている。恐らく、殺したい程憎んでいる輩は両手どころか全身の指を使っても足りないだろう。

オキツグの相棒であるリュロンは狙われる理由があるのだ。

「糞が」

飲み終わった冷たい甘檸檬の紅茶の容器握りつぶして放り投げる。焼かれた砂漠鳥が貫かれていた串をそれに向かって放つと、見事に突き刺さって飛んでいき、ゴミ箱の中に入り込んだ。

相棒は久しぶりの故郷で気が緩んでいたかもしれない。その隙を狙われればひとたまりもないだろう。

（下種どもが）

トラブルに巻き込まれたのは間違いないのだ。普段無愛想な相棒が常にない程喜んでいた姿を知っているだけに、余計に腹立たしい。

パチパチパチパチ

小さな拍手の音が聞こえた。

「凄いね、お兄さん」

そこには白いシャツにジーンズ、サングラスをかけた観光客風の女が拍手をして立っていた。

歳は三十前後、密色の肌に銀色の様な白髪、女性の割に長身で、コケティッシュな魅力に満ちた美人だった。

リュロンやライエルに似ていると思った。

「まるでサーカスのナイフ投げる人みたい、ああ、でもそれよりも凄いかも」

綺麗な女性が好意的に話しかけて来たら、九割は詐欺か、宗教の勧誘か、商売がらみだ。しかし、オキツグはそれのどれでもないと感じた。

もちろん軟派でもない。

女の手を掴むと、人のあまりいない路地裏目がけて歩く。

「きゃっ、ちょっと・・・」
言わせる間もなく強引に、しかし、周りの眼から目立たない様に自然に引っ張ると、路地裏の壁に女を叩きつける。
「痛ッ・・・ちょっと、何するのよッ」
抗議の声を上げる女を無視して、腰の魔道刀の柄に手をかける。
「う・・・」
「飛んで火にいる夏の虫、だな」
流石に濃い色の肌の上からでも血の気を引かせた女は口を閉ざした。
「わざとらしすぎんだよ、馬鹿が」
女は怯えた顔で何も答えない。
「恍けたって無駄だ、俺の相棒の件で話しがあるんだろうが」
諜報の世界において、偶然と作為は同義である。
この女からは作為の臭いがした。
(間違いない、この女は黒だ)
揺ぎ無いオキツグの視線を受けて、観念した様な表情を浮かべると女は怯えた表情を一転、ふてぶてしいものに変える。
「あーあ、もうばれちゃった」
「さっさと答えろよ、俺の気が長いと油断していると首が地面を転がる羽目になるぞ?」
オキツグは見ず知らず、会って間もない女を脅迫まがいの尋問をする事に何ら抵抗を覚えていなかった。その事を客観視して、僅かに驚く。地球にいた頃の自分では考えられない事だ。しかし、相棒と眼の前の女を天秤にかければどちらに傾くかなど試すまでもない。
女はにんまり笑いながら言った。
「答えられるし、話す事も沢山あるけど、その前にこれだけは言わせて、私は貴方の敵じゃないのよ?」
言葉ではどうとでも言える。実際にそう言おうとして、更に魔導刀の刃を抜いて脅そうとして、オキツグは止まった。
本能が警鐘を最大限に鳴らす。

カッ

咄嗟に首を横に傾けると、後ろから飛来した物体がその先の店の壁に黒焦げた穴を空けているのが見えた。

（敵襲！）

振り返ると、スーツ姿の男がこちらに魔導剣を向けている姿。

（電磁系術式、後衛系か！）

更に建物の蔭から同じようなスーツを着た前衛系の剣導士が電磁系術式を使う男を守る様に陣を展開する。

恐らく、先程の攻撃は電磁系術式《電圧波動砲》、レールガンによるものだ。

再び放たれる攻撃を、咄嗟に抜いた《白燐丸》ではないほうの魔導刀で氷凍系術式のよる氷の壁を展開、防ぎきる。

単純、初歩的な攻撃であるが、男の攻撃はかなり威力が高いものだった。それを防がれて男たちに同様の色が浮かぶ。

女は戦闘に怯えた様子を見せる事もなく、氷の壁を乗り越える様にして男達を指差す。

「あいつらよ、あいつらは軍の関係者で貴方の相棒、リュロンを拘禁している奴の手下なの！」

男達の間にさらなる動揺が浮かんだ。

最悪の事態を的中させてしまったオキツグだったが、あくまで冷静に、冷徹に計算する。

「軍部の手先か」

国を相手に戦う事も想定しなければならない。

（となると、ここで下手に手を出すのはよくないな）

女がオキツグの耳打ちする。

「わたし、結構凄い隠れ家持ってるけど？」

「・・・しょうがない、乗った」

この女、男達の上司の反対勢力か。

是非もなかった。
オキツグは女の腰に手を伸ばすと、より一層警戒した男たちを余所眼に跳躍する。
「ひゃっ」
急激な加速に声を洩らす女を無視して魔術で強化された肉体が建物の壁を蹴り、屋上に着地する。
女を御姫様だっこに抱えなおして民家やテナントビルの上を飛びながらに逃げると、気を取り直した女がはしゃいだ様な声を上げる。
「おおう、速い速い！」
アトラスでお守りをしていたユーリアの事を思い出した。

逃亡中、女が用意した車を二回乗り継いで、三台目の車は黒いリムジンだった。
「・・・・」
しかも運転手付き。
「おい」
「え、なあに？」
広々とした車内でだらしなく寝そべりながら雑誌を読んでいた女が顔を上げる。
「俺達はお前が用意した隠れ家とやらに向かっているんだよな」
「え、隠れ家？
ああ、そうそう、そうよ」
そのいい加減な答えに嫌な予感を募らせるオキツグ。
（まさかこれも罠・・・いや、しかし）
それにしては杜撰すぎる。そもそも、本当にこの女からは騙そうと言う気配がない。
女のバックについているのが相当な大物と言う事か。
気を取り直して座ると、リムジンは首都近くの高級住宅街、邸宅

が並ぶ道を走っていた。
アクロポロスのヴェルーナ公爵家はこの様な場所にあった。
（貴族・・・まさかな）
リムジンは、その中でも広大な部類入る一画に車体を滑らせる。
その屋敷は荘厳ではあるものの、派手と言う印象はなく、どちらかと言うと質実剛健、確かな歴史が厚みを感じさせる、まるで装飾を省いて小さくしたヴェルサイユ宮殿だった。
リムジンが止まる。
「あ、ついた。さ、降りて」
さっさと外に出てしまう女を追いかけて車から出て、開かれていた屋敷の広々とした玄関をくぐると、そこに広がる光景にオキツグは唖然とした。

お帰りなさいませ、奥様

ずらりと並んだ使用人は二十人はいるだろう。メイド、執事、従僕が頭を垂れて女と、女の客人であるオキツグに挨拶する。
「・・・お前、ここの家の人間なのか？」
「ええ、そうよ」
女に手招きされてついていくと、一緒にメイドも数人が後ろからついてくる。
「・・・・・・」
衣裳部屋に通される。応接室ならともかく、なぜここなのだろうと疑問に思っていると、女は使用人たちに指示を出す。
「とりあえず、着替えさせちゃおっか」
「着替え？
・・・おい、何だお前達っ、脱がすな、服を引っ張るな！」
メイド達は淡々と、しかし、心なしか楽しそうな表情で『はい、奥様』と返事をするとオキツグから服を除装する。
抵抗も虚しく、あっという間に脱がされると、今度は違う服を着

せられ、その横では違うメイドがオキツグの髪に鋏を入れて整え始める。
「な、何なんだ！」
敵意は感じない。むしろその逆なのだが、それ故に困惑する。
力で拒絶するのは簡単だったろう。しかし、それをしていいものか・・・・
「よし、中々良い男になったぞ」
女は満足げに笑うと、オキツグに鏡を見せる間もなく手を引っ張って部屋を後にする。後掃除の数人を残してついてきたメイドの一人に問う。
「今は？」
「はい、予定通り、部屋で着付けを済ませてございます」
「結構」
追う様に頷く女に、こっちは結構じゃないと怒鳴ってやりたい気分だった。
そして一つの部屋の前で止まる。
「ここよ」
すると女は一歩引いてオキツグに先を促す。
先に入れと言うことらしい。さっさとドアノブに手をかけて入ろうとすると、ノックをするのが作法だと窘められた。

コンコン

中から『どうぞ』と言う声が聞こえて怪訝に思う。聞いたことある様な声の気がしたが、考える間もなくドアを開いた。
そしてオキツグは言葉を失った。
部屋にいた人物も声を失っていた。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「え、リュロン？」

その人物は確かに相棒だった。
女性にしては大柄な、見慣れた二メートル近い身長。しかし、無骨な印象を受けることはない、女性としてはこの上なく美しい曲線。しかし、その身を包むのは、いつもの男物のスーツではなかった。
「オ、オキツグ・・・」
珍しく狼狽した声を上げるリュロンが着ていたのは・・・・・・白い、純白のドレス、ウェディングドレスだった。
髪の毛も整えられ、顔にはうっすらと化粧が施されている。密色の肌に白がよく映えた。
「お前その格好・・・」
と口に出して、オキツグは部屋に備わっている鏡に映った自分の姿を見て愕然とする。黒いタキシードだった。
固まる二人をよそに女が後ろから顔を出す。
「お、綺麗じゃん」
「あ、姉上！」
姉上？
リュロンの？
数多の中で疑問がクエスチョンマークの形をした風船となって飛んでいくのを感じた。
そんなオキツグに満面の笑みを浮かべて、女は祝福した。
「結婚おめでとう、我が家にようこそ、義弟君！」
その日、オキツグは結婚した。

第1話　故郷の土（後書き）

第二章、始まりました。ボチボチ更新していくんでよろしく。

第2話　芙蓉

全てが怒涛の連続だった。
まるで拉致されるかのように再びリムジンに押し込められ、式場に連行されて目にした光景をオキツグは一生忘れない自信がある。
顔も知らない老若男女問わない大勢が拍手で祝福しているのだ。
何に？
決まっているオキツグとリュロンの結婚にだ。
永遠の愛を誓う羽目になり（キスはなかった）、しかもその後テレビの取材まで来た。
リュロンの実家、家名をエンデルバルトと言うらしいのだが、かなり歴史ある貴族らしい。マクヴェス王国は爵位がなく、王位は十二の貴族による持ち回り、そして次代の国王はエンデルバルトから輩出される予定だと言うのだから、国民の期待もかなり高いのだと言う。

君には期待しているよ

そう言って肩を叩いてきたのは国王を務めている壮年の紳士だった。
つまるところ、これは準ロイヤルウェディングである。
目眩がして、倒れそうになったところで披露宴が終了、オキツグは控室のソファに倒れ込む様にダイブした。
その右手の薬指には銀色の指輪が光っている。
応接テーブルをはさんだ反対側のソファで、リュロンは疲れた様子を見せる事もなく姿勢よく佇んでいた。
「・・・お前、貴族のお嬢様だったんだな」
「ああ、そうなるな」
十年も国をあけていたとは思えないほどの歓待ぶりだった。

その疑問を口に出すと
「当然よ」
控室の扉が開かれて、リュロンの姉、マリアと名乗った女が顔を出した。
「テレジア・ディ・リュロン・エンデルバルトは容姿、剣技、カリスマ性から騎士姫として絶大な人気を誇っていたのだもの。反対派の策略で罪を着せられても、良識ある国民は信じていたし、その騎士姫が十年ぶりに故郷に凱旋、結婚となれば浮かれるのも無理ないわ」
「それはわかったんだけど・・・・・・テレジア？」
「私のファーストネームだ。リュロンは便宜上名乗っていたミドルネーム、祖母からもらった名だ」
オキツグはなげやりに万歳する。新発見、怒涛の展開の連続だ。正直、ついていけない。
呻きながらオキツグは自分の頭の中の情報を整理する。
「・・・・とりあえず、状況を説明して欲しい」
「分かったわ」
そしてマリアは語り始めた。
ここに至るまでの顛末を。

エンデルバルト家の屋敷の到着したリムジンからリュロンが降りると、屋敷の玄関からそれを見守るひと組の若い男女がいた。
「テレジア！」
駆けよってリュロンの首に手を回して抱きつく。
「姉上・・・」
「良く帰って来たね、テレジア」
優しげな声で語りかけてくる男は三十代後半で、色の薄い肌に短い茶髪、細身ではあったもののリュロンに迫る長身の男だった。

「義兄上」
マリアの婿、エンデルバルト家の当主であるギーズだった。
二人が結婚したのはリュロンが国外逃亡した後だったが、幼いころから姉妹とギースは家を通した親交があったので良く知っている。
兄のような人物だった。
無感動、無表情な自分であったが熱いものがこみ上げてくるのを禁じ得ない。
二人に促されて屋敷に入るまで、涙を堪えるのが大変だった。
そしてギーズの執務室の応接テーブル囲みながら、メイドの入れたお茶を楽しむ。
「兎に角、帰って来てくれて嬉しいわ」
「私も、再び姉上や義兄上にお会いできる日が来るとは思っておりませんでした」
それから暫くは意味のない会話で盛り上がった。
十年間で変わった王国の景色であったり、旬の食べ物であったり、リュロンがここに来るまでの旅路を語ると夫婦は随分興味深そうに聞いていた。
「へえ、色んなところに行ったのね」
「僕達は国を離れるわけにはいかないからね、ちょっと羨ましい」
確かに、十年と言う月日、内四年は『先生』のもとで修業し、二年は寝たきりで過ごしていたが、それでも長きにわたって外の世界を見て来た。
「十年はなかなか長いよね」
「そうね、テレジアも二十八だもの・・・」
その瞬間、主に夫のギーズに僅かな緊張が走るのをリュロンは感じた。しかし悪意は感じない。どちらかと言うと、何か言い難い言葉を口にしようとしているかのようだった。マリアに脇腹を肘でつつかれてようやく口を開いた。
「それでテレジア、少し話があるんだけどね」
席を離れ、机からいくつかのファイルを取ってくるとリュロンに

手渡した。
「これは？」
「いいから開いてみなさいよ」
促されるがままに開いたそこに移されていたのは、正装した男達がにこやかに笑いかけている姿だった。
（これは・・・・）
リュロンにもこれの正体がつかめて来た。
お見合い写真だ。
「何故、私に・・・・」
「考えてみて、貴方はもう二十八歳なのよ？」
貴族の娘としては晩婚の部類に入る。親族として気を使うのは当然だった。
「しかも、貴方の帰国は既に内々には知らされているわ。正式に貴方に無罪が出た事を発表したとなれば・・・・どうなるか分かっているでしょ？
フライングでこの量なのよ」
ファイルを叩く。
ギーズは強張りながらもた優しそうな顔で語った。
「正式に発表されれば部屋中を埋め尽くすほどオファーが来るだろうね」
加えて、エンデルバルト家は次代の王位戴冠家だ。
「国民の感情としては、貴方の夫は剣導士なら構わないのよ。騎士姫に見染められた戦士ってね」
「しかも、気の早い人たちは映画まで創ろうとしているんだ」
更に台本をリュロンに渡す。パラパラと捲ってみて頭痛がしてきた。
「これは偶然じゃないの・・・・恐らく、バックについているのはエンデバルトと同じく武門のファルケス家よ。あそこの次男は腕の立つ剣導士として有名だから、国民感情を煽って息子を売り込みたいっていう当主の策略でしょう」

「申し訳ないけど、家としても事が大きくなってからじゃテレジアを庇いきれないんだ」
つまり、リュロンは意に沿わぬ結婚をさせられる。
窮状ではあったが、リュロンは冷静だった。戦士の頭脳が冷徹に現状を分析する。事態の打開に必要な手順と手札・・・それは何か。
マリアはそんなリュロンに言った。
「でも、そう言った計算抜きにしても貴方はそろそろ結婚するべきなのよ」
「・・・確かに、適齢期かもしれませんが」
「それとも気になる男でもいるの？」
その瞬間、リュロンは自分の呼吸が訳も分からず止まるのを感じた。
「そう言えば、貴方は一緒に旅をしていた剣導士がいるって言っていたじゃない。男の子なんでしょ？」
リュロンは、自分が先程とは別の意味で追い詰められているのを感じた。
「オキツグの事ですか。あいつは別に・・・」
「でも貴方が男を長い間傍に置いておくなんて珍しいんじゃない？」
マリアの顔は先程の真剣な顔から、少し意地悪げな顔に変わっている。
「丁度いいじゃない、結婚しちゃいなさいよ、貴方達」
「姉上！」
確かに、そうすれば利権に群がる輩を無理なく袖に出来る上、家族としても心配がなくなる。
「八年も一緒にいたんでしょ？
本当にただ一緒にいただけだったの？
何もしなかったの？」
男女として
リュロンはその言葉に、飲んでいた紅茶を気管に詰まらせた。
ぜいぜいあえぐリュロンを楽しげに見つめるマリア。

「あらあらあら、やっぱり気になる男がいたんじゃない。で、どこまでいったの？
手くらいは繋いだんでしょ？
もしかし、もう・・・・・」
体をかき抱いてくねくねさせるマリア。
「もう、しちゃった？」
「してません！
キスだけです！」
見事に自爆したリュロンに、マリアは大爆笑、ギーズすらも苦笑している。
リュロンは頭を抱えた。
「だったら問題なんかないんじゃない」
「・・・でも、二年くらい前にふざけてやっただけで」
「本当に初心なのね・・・でも、いいの？
また国外逃亡するならともかく、ここに帰ってきたいのだったらそれなりに立場ってものを持ってもらうわよ？」
リュロンは押し黙った。
意に沿わない結婚は御免だったが、今更無国籍者として帰る場所がないのも嫌だった。
しかし決める事が出来ない。
一体どうしたらいいのか。
「なら、全部その王子様に決めてもらいましょう」
名案を思いついたとばかりに手を叩いて提案するマリア。
「しばらくすれば貴方を追いかけて来るんでしょ？
だったら、その時に聞けばいいわ」
結局何も解決していない様な気がしたが、勢いに押し流されて家に軟禁状態。
気がつけばウェディングドレスの採寸まで済ませてしまい、屋敷には出来あがった結婚指輪まで送られてきていた。

「と言う事なのよ」
胸を張ってマリアは言った。今は既にフォーマルなレディーススーツだったが、姉妹揃ってスタイルが良いので目のやり場に困る。
リュロンは一見して落ち着いている様に見えるが、先程から微動だにしていないとろこを見ると、かなり緊張しているらしい事が分かる。
オキツグは、周りの状況全てに疲れたかのような嘆息をしながら言った。
「お話によると、俺をよく吟味してからという話だったのでは？」
「だからあたしが態々会いに行ったんじゃない」
マリアから感じた作為の空気はそれだった。
マリアの後ろで、その旦那様が申し訳なさそうに苦笑している。
恐らく入り婿で、女房の無茶に苦労しているのだろう。
「それとも嫌なの、この娘との結婚」
ビクリと肩を震わせたのはリュロンだった。
沈黙が下りる。
緊張か、困惑か、名状しがたい空気が流れた後にオキツグが出した答えは
「嫌って訳じゃない・・・何か、釈然としないものは残るが」
安堵の空気（主にギーズとリュロンから）が流れる。
「ま、そうでしょうね」
答えを予想していたマリアは特に頓着することなく返す。
「とりあえず、次の予定があるから」
「「次？」」
リュロンとオキツグの声が重なる。
「披露宴よ、決まっているじゃない」
マリアが柏手を打つと、扉からエンデルバルト家のメイド達が乱入して、二人を連行するように外に連れ出す。

引き摺られる様に二人は控室から消えた。

「本当に大丈夫かな」

夫、ギーズの心配そうな言葉をマリアは鼻で笑う。

「大丈夫よ、何も問題ないわ」

十年間による逃亡生活で少し、というか大分性格が捻くれていたのは不安ではあったが、根っこの部分は全く変わっていない。

「あの子は信用する人間を極端に選ぶ。愛情を注ぐ相手も」

「いや、そうじゃなくてね」

ギーズは更に眉をハの時にして悩ましい顔をする。

「テレジアは男の人と付き合った事がないらしいじゃないか、しかもオキツグ君も、多分経験はないんじゃないかな」

その言葉に思わずハッとするマリア。

暫く沈黙し、そして肩を揺らす。

「マリア」

「・・・くっふっふっふっふ、あああっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！」

爆笑と哄笑を等分した様な笑い声を上げた後、心の底から楽しそうに言った。

「そうね、そうよね、こりゃ楽しい事になったわ。よりによって初めて同士なんて、レアだわ・・・・出歯亀してやろうかしら」

「・・・それは、趣味が悪いよ」

深刻そうな顔していたギーズも笑いを堪えた様子で言った。

「本当のところ言うと安心したよ、二人とも、とてもお似合いだろう？」

二人の結婚は国中の注目の的だった。
次の戴冠家であるエンデルバルト家の娘の結婚。
マクヴェスの王は男子に優先権がある。そしてエンデルバルト家の当主夫妻に子供がいない以上、妹のテレジアが男子を産めば、その子が王になる可能性もあるのだ。
そう、注目せざる得ないのだ。
国民にとっても、それを歓迎する貴族にとっても、反対する輩にとっても、その結婚は必ず、次の嵐の目になるのだから。

第3話　王の流儀

「弱い犬ほど良く吠えるらしいぞ？」

オキツグは自分の口から洩れた言葉に思わず愕然とする。

周りには大勢の人がいたが、その全てが凍り着き、状況の行く末を見守っている。

記者会見の様だった。

様、と言うのは、確かにさっきまで記者会見だったからだ。エンデバルドの娘であるリュロンの、夫であるオキツグの一般に対するお披露目を兼ねた記者会見。事前に与えられた台本通りに受け答えして、無事会見が終わったところで机を挟んで向こう側、顔を真っ赤にして仁王立ちしている男が乱入して来たのだ。

『その様な男が騎士の国たるマクヴェス王国の貴族にの席に連なる事が許されるのか』

男の名はディオス・ラ・ドゥーン・ファルケス。黒く艶やかな髪に、この国の戦士らしい赤銅色の肌。二メートルを超える長身。三十代後半と言う歳の筈だが、引き締まった面立ちと肉体のお陰で十は若く見える。

鉄色の甲冑に、腰には魔導剣を差している姿は武神そのものだった。

王国でも五指の腕に入るとされる騎士にしてリュロンの花婿候補だった男だ。

いずれ、横やりが入る事は予想された。それがこんな目立つ場所で正々堂々と喧嘩を売ってくるとは思えなかったが。

その場は騒然としていた。辛うじて中継が切ってあったのが幸いか。いや、狙ったのだろう。エンデバルドとファルケスは本来はライバル関係にある。次代の戴冠家と姻戚を結ぶ可能性をふいにされ

た腹いせと考えるのが妥当だった。
　毅然とした様子でディオスに応対するリュロンであったが、剣導士であるオキツグの腕の良し悪しについて言及してきた時、声を詰まらせてしまった。オキツグが第九位《氷王》であることは秘密である。もっともそれは公然のという注意書きがつくが、大勢の前で吹聴していい事ではない。白い髪も蒼い目も黙っていればただの類似点に過ぎないのだ。
「どうなのですかな？
　その男は得体の知れない、流れの剣導士であると聞きます。この国の騎士たる腕を持っているとはとても思えない」
　その顔には優越感と侮蔑が大いに盛られていた。
　記者達も貴族同士の諍いを記事にする度胸も、そして止めるだけの器量も持ち合わせてはいなかった。
（それだけではないか）
　少なからず、この国の国民も同じことをオキツグから感じ取っているのだろう。腕は確かなのか、信用できるのか。
　睨むリュロンにこき下ろすディオス。横を見た時、無表情ではあるものの、一瞬だけ相棒の顔に過った悔しそうな顔が、衝動的にオキツグに言葉を紡がせていた。
「そもそも、今はどういう場だと思っているんだ。貴族と言うのは礼節を重んじると言う話を聞いていたが、この程度の道理も重んじる事が出来ないのであれば、たかが知れているのは王国か、それとも御家か」
　流暢な罵倒の言葉が繰り出される口に、オキツグは自分のことながら驚いた。
（ああ、俺も苛立ってるのか）
　ディオスはその言葉を聞いて、茫然とした後に、濃い色の肌の上からでも分かる程に紅潮した。勿論怒りによるものだ。
「貴様、騎士を愚弄するか！」
　腰の魔導剣に手をかける。今にも襲いかかってきそうな勢いだっ

た。
会見場が騒然とする。
まるで張りつめた水風船の様な緊張が弾けそうになった時、突如として助け舟が出された。
「ハッキリさせてみたらいいんじゃないですか？」
女の声が響く。
人垣が割れて、そこから現れた人物に、オキツグとリュロンは驚いた。
「・・・貴様は誰だ」
「ＣＮＮのライエル・ゾーリンバッハです」
久しぶりに見た彼女は、記者として復職して大いに活躍している様だった。
一瞬、唖然としたオキツグにウィンクする。
「ハッキリとはどういう事かね」
「文字通り、なんですけどね」
威圧するディオスだったが、紛争地域を駆けまわる記者にとってはどこ吹く風だ。やたらと緊迫した場の空気に苦笑する。
「この国には騎士同士の決闘を認める規則が憲法でも明文化されているはずです。オキツグ氏はこの度の婚姻で正式にエンデバルド家の一員となったのですから、貴族として、騎士として、その規則の適用範囲内になるのではないでしょうか？」
他の記者の間で感嘆の声が漏れる。
確かにその方が分かりやすい上、そこまで事が大きくなれば自分達が記事にするチャンスもあるだろう。暴力的な空気怯える市民から、情報に飢えた獰猛な猟犬に早変わりする。
「・・・女記者、明日からこの国で仕事が出来るとは思うなよ」
「あら、あたしを追い出すんですか」
それは大変だとおどけるライエル。

（あいつ、随分図太くなったな）

「クロプフェットから一体どれだけの外資とＯＤＡが入っていると思ってんですか。因みにＣＮＮ、国営放送はクロプフェットの国債の最有力購買者ですよ？

あなたこそ、明日からこの国でかい顔出来るとは思わない事です」

オキツグは拍手をしてみた。

記者の中にも数人続く者がいたが、ディオスに睨まれて直にやめる。

深々と溜息をつきながら、どうするべきか悩んでいると、リュロンはおもむろに立つと、タキシードを着たままのオキツグにウェディングドレスのまま歩み寄ると、オキツグの手を取って、付けていた白い手袋を脱がす。

それをディオスに投げつけた。

「これでいいだろう」

リュロンは祝福された新婦ではなく戦士の顔で告げる。

「私は夫が馬鹿にされて引きさがれる程寛容ではない。ディオス、貴方に決闘を仕掛けるだけの度胸がないのだったら、夫に代わって決闘を申し込ませていただく」

オキツグはあまりの事態に天を仰いだ。

（わーい、俺の意向は完全無視だよ）

すると、ディオスは怒りで額の血管を浮かせるとそれに応じた。

「いいだろう、この私に決闘を申し込むなど大それた真似をした事、後悔させてやる！」

決闘は後日、民放の中継付きで大々的に執り行われる事となった。

早速、局に戻って段取りを決めようと張り切っている記者が会場から去っていく中で、ライエルが一人、オキツグとリュロンの元に

歩いていく。
「御二人さん、お久しぶり」
ライエルは二年前と変わりない様に思えた。溌剌とした美人で、周囲に明るさを振りまいている。
「お前、大丈夫なんかよ」
「え、何が？」
「あんなんでもこの国の貴族だろ？」
「ああ、大丈夫よ。あたし、今度独立する事になったから。今じゃ、国の外にも報道番組出演のオファーが凄いんだから」
快活に笑い飛ばしてリュロンを見ると、顎に手を当ててにやりと笑う。
「逆タマって言うんだっけ、こういうの」
「何がだよ」
「まさかリュロンが貴族のお嬢様だとわね」
「まあ、お嬢様って歳でもないけどな」
物凄い形相でリュロンの眼光が鋭くなる。
「あら、だめよ？
アラサーの女ってそう言うのに敏感だから」
窘められて、「すまん」とリュロンに言うが、顔をそっぽに向けて閉まったままこちらを向いてくれなかった。
「あらあら」
後で謝っておくのよ？
そう言い残してライエルは去って行った。
再びエンデバルドのメイド達に連れられて、リムジンに乗り込む。
教の予定は全て終了の筈だった。
「おい、いい加減機嫌直せよ」
暫くその言葉に応えないまま、窓枠に肘をついていたが、顔はそのまま、リュロンは口を開いた。
「私が以前、軍に在籍していたのは知っているな」
「あ？

ああ、そりゃな」
「あの男、ディオスはその反対勢力とは直接関係はしていなかったが、少なくとも私達よりかは向こうと仲が良かったのだが・・・・まあ、その話はいい」
こちらに向き直り、瞳を真っすぐ見つめて来た。結婚式から直接足を運んだため、ウェディングドレスを着たまま、綺麗に化粧をされた相棒の顔はいつにもまして艶めいていて、思わず心臓が高鳴った。
「な、なんだよ」
「すまなかった」
突然謝られて困惑してしまう。
「は？」
「決闘の件だ。向こうが喧嘩を売って来たとは言っても、もう少し冷静な対応を心掛けるべきだった」
「いや、別に・・・」
「大した事なんだ！」
大したことじゃないよ、そう言おうとして、突然、声を強くしたリュロンにたじろぐ。
「いや、すまない」
それっきり、リムジンでの会話はなかった。
既に外は暗く、星が輝き始めている。
星空の美しさは褒めたら、花嫁は怒るだろうか。

屋敷の門から黒いリムジンが入ってくるのを窓越しに見ながら、マリアは夫に語りかける。
「お披露目早々、ファルケスに喧嘩を売り返した夫婦が帰って来たわよ」
「ははは、流石君の妹と、彼女に選ばれた人だよ」

夫婦の寝室で、簡素な室内着に着替えた二人はテーブルを囲んで晩酌をしている最中だった。
「まあ、ファルケスのディオスとは近いうちにぶつかっていただろうし、早めに済ませておく事に越した事はないんじゃないかしら」
「そうだね、でも大丈夫なのかい？」
負けてしまったら、結婚そのものにケチがつく。外部からの圧迫で離婚に追い込まれかねない。
オキツグはディオスに勝たなければならないのだ。
「決闘で勝つ男が優れているなんて、我が国ながら野蛮極まりないわね」
「でも文化は文化だ。馬鹿に出来ないよ」
これはエンデバルドとファルケスの代理戦争でもあるのだ。
「大丈夫よ」
マリアは部屋の隅にあった引き出しから数枚の書類を取り出して夫に渡す。
「彼がディオス程度の輩に負ける事はありえないわ」
ディオスは等級制度で言うと百七十八位、リュロンには劣るが超一流の剣導士だ。前衛系で、魔導大剣を操った武技の数々は近隣諸国でも名を轟かせている。
「第九位《氷王》オキツグ、闇社会に巣食う本物の怪物よ」
「確かに腕が立ちそうだと思ったけど、まさか・・・・・」
しかし、ギーズに妻の言葉を疑う様子はなかった。
ギーズは元々、庶民階級出身で、武功で成りあがった軍人だった。エンデバルドの娘であるマリアに見初められて結婚し、その当主の座に収まったが、戦争、政争で親戚は殆ど死に絶え、そもそも剣を取る以外に取り柄のないギーズは、妻であるマリアと協力して王国内で生き残って来たのだ。
当主として、堂々とした態度をギーズが示し、マリアが独自の情報網と頭脳でブレーン役に徹する。
夫婦二人三脚でお互いの足りない部分を補い合ってきたからこそ、

妻の領分である情報に疑いを示さない。
「確かに、これはディオスが気の毒だな」
「でしょう？
《王位》について探りを入れている時に偶然知る事が出来たの」
その《氷王》の相棒は自分の妹だと言う。
「これは逃がしちゃ不味いでしょ」
「うん、でも、なあ」
ギーズは苦い顔をしている。マリアは夫が何に悩んでいるのか直に分かった。
「別に妹を餌に強い剣導士を味方にしたっていいじゃない。誰も不幸にならないんだし」
それにと付け加える。
「政争に次ぐ政争、戦争に次ぐ戦争でエンデバルドは血縁的に風前の灯よ。それに私は・・・・・・」
「ああ、そうだったね、すまない」
「いいの、でもね、あの娘には強い旦那さんが必要なの。自分で剣を握る必要がなくなるくらい強くて頼りになる人が」

「あああああ、サッパリしたっ！」
屋敷に設けられたオキツグの部屋、備え付けのシャワールームから上半身裸のまま、タオルを被って出てくる。
同じく備え付きの冷蔵庫から用意してもらっておいたビールを取り出すと、プルトップを上げて一気に嚥下する。
既に外は暗く、後は酔って寝るだけだ。
「ふー」
オキツグの部屋はかなり立派だった。
二十畳近い部屋には大きなダブルベッド以外にも、快適に過ごすための全てがそろっている。小さなバルコニーまでついている。

「過分なご配慮、感謝、感謝ってね」
怒涛の連続で、今朝ここに訪れたばかりなのが信じられないくらいだった。
全てが予定済み、予定通り。
一番驚いたのは、街中でオキツグとマリアを襲いかかって来た黒服達が、普通にこの屋敷のＳＰとして詰めていた事だ。思わず目をむくオキツグに、男達は皆すまなそうにしていた。
結婚式も、披露宴も、会場はここ数日借り切って、後はオキツグは到着するのを待つだけだったそうだ。
既に、ヴェスラに訪れた時に状況は詰んでいたのだ。

ガチャッ

空けられたドアの向こうには、長い新緑色のスカートにカットソー、ここに年で少しのびた髪の毛を肩まで垂らしたリュロンの姿だった。
「ん？
どうしたんだ？」
「いや」
せわしなく室内を観察する相棒を、物珍しげに見守った。
こんな恰好をするリュロンを見るのは初めてだった。
「お前、風呂は？」
「見ての通り、入った」
「そうか、借りるぞ」
そう言って室内に入り込むと浴室に籠ってしまう。
リュロンの自室にはないのだろうか。
暫くして、お摘みもあった事を思い出して冷蔵庫を開けたところでリュロンは浴室から出て来た。
「借りたぞ」
「・・・・」

咄嗟に応える事が出来なかった。
「ビールか、私にもくれ」
「あ、ああ」
冷蔵庫から取り出した缶を受け取る、リュロンは胸元にバスタオルを巻き付けただけで何もきていなかった。
湯気と共に上気した肌と、アルコールを嚥下する喉、布一枚しか隔てない量感のある肉体が強烈に女を主張する。
一気に飲み終えたらしい。
缶を握り潰しながらゴミ箱に放ると、「ふー」と息をついて目をつぶる。
「あれ、どうしたの？」
何か様子がおかしかった。
しかし、相棒は何も答えず、再び目を開けるとドアの横にある電気のスイッチを切った。
暗闇が訪れる。
「お、おい、どうしたんだよ」
答えない。突然の暗闇でも迷うことなくオキツグの前まで来ると、手を前に突き出してオキツグを誘導する。
いきなり突き飛ばされた。
思わず受け身を取るが、柔らかい感触。ベッドの上だった。
「何を！」
抗議の声を上げようとしたが、自分を覆う様な質量の気配。
ベッドの上で仰向けになるオキツグに覆いかぶさるようにリュロンが手をついていた。
「お、おい、タオル、タオル！」
はらりと落ちた一枚の布、リュロンは全裸だった。
二人とも夜目が利くのでお互いが丸わかりだった。
きっと、自分の顔は真っ赤になっているだろう。
ふと、オキツグはそんな事を思った。
「オキツグ」

その声はあまりにも真剣で、その瞳はあまりにも真っすぐだった。
照れる事も忘れてリュロンの瞳に視線が吸い寄せられる。
「何故・・・」
「あ？」
「何故、結婚してくれたんだ？」
突然の質問に戸惑う。言ってる言葉の内容をゆっくり噛み砕いていく。
「してくれたって、お前、俺と結婚したかったのか？」
「質問に質問で答えるな・・・・・・だが、ああ、そうだ」
これはいい加減に答えられない。覚悟を決めて考え、そして訥々と答えていく。
「お前から連絡が途絶えて・・・結構心配したんだ」
「・・・すまなかった、姉上に携帯を取り上げられてたんだ」
「ああ、それでな・・・いきなり結婚しろって言われた訳なんだが、まあ、それもいいかなって思ったんだ」
どの道、元の世界に戻る事は諦めている。
「だからさ、どうせ二人で一緒にいるし、戦士としてもお前以上に息の合う奴はいないし、ああ、何か言葉にしにくいな」
正直、自分でもよく分からないのだ。
「家族が欲しかった」
唐突にこの言葉が出て来た。
リュロンは相変わらずこちらを真剣に見つめている。
「多分、そうなんだ。お前と結婚する事もそうだけど、お前の姉ちゃんが、ようこそ我が家へって言ってくれた時、なんて言うか、凄い嬉しかった・・・・・そんな感じなんだけど？」
暫くそのまま見つめ合い、リュロンは思いっきり嘆息した。
「この期に及んで、姉上とはいっても他の女の事を会話に出すのはデリカシーがないぞ」
「あ、ああ、ごめん？」
訳も分からず謝ってみる。

すると、腕が疲れたといって、オキツグにのしかかってくる。豊かな乳房がオキツグの胸板で変形する。
「お、ちょっと！」
狼狽するオキツグが逃げない様に肩を抱いて抑え込むリュロン。
「凄い高鳴っているな」
心臓の鼓動を直接聞かれて顔から火が出る程恥ずかしかった。
「だったらっ」
放せ、そう言おうとして出来なかった。
言う前に更に体重がかけられて、言葉も重ねられる。
「お前、知らないのか？」
「・・・何がだよ」
「今日は結婚初夜だ」
空気に淫靡なものが混ざった様な気がした。
「ちょ、ちょ、ちょっと待てよおおおおおっ」
慌ててリュロンの下から這いだして、ベッドの枕近くまで下がる。
「こ、こういうのは・・・もっと、こう、心の準備っていうか」
「駄目か？」
更に這い寄り、先程と同じ状況がベッドと壁の違いで再現される。
「私はお前が欲しいんだ」
唇が重ねられる。
全ての抵抗が徒労に消える事を悟り、オキツグは白旗を上げざる得なかった。
（まあ、いいや）
星空に照らされながら、夜が更けていった。
？

第3話　王の流儀（後書き）

お気に入り登録が増えてうはうはだぜ！

第４話　鏡面世界

太陽が高い。青く透き通るような青空はオキツグの故郷たる日本では見る事が出来ない程綺麗なものだった。

オキツグは闘技場で空を見上げながら、かつて師の元でこういった試合に出場して名を上げていた時の事を思い出していた。

幾ら、国外の事とは言っても、それなりに名の知れた闘技者だったので、一部の人間は、特に報道陣はその正体を知っているかもしれない。国によっては、報道機関の情報収集力は諜報機関のそれを遥かに上回る。

（あれから、五年か）

この世界に来て十年の月日がたった事になる。

その自分が結婚？

家庭を持つ？

信じられなかった。

そもそも自分に出来るのだろうか。親からまともな愛を受けずに育った自分が。

ヴェスラ国際闘技場。

大国の多くでは人権の問題もあって廃止された剣導士の戦いによる興行、それがこのマクヴェス王国では認められている。国としても大事な収入源の一つであるため廃止するつもりは当分なく、故に闘技ファンや選手の間ではメッカになっている土地だった。

サッカースタジアムの様な現代的で広い舞台を囲む客席は全て満席になっている。

オオオオオオオオオオオオオオオっ

歓声が凄まじい。

定期的に行われる興行試合の最終試合に、ファルケスが強引にオ

キツグとディオスの決闘をねじ込んだ結果だ。
宣戦布告をした一週間後の今日。
告知がメディアを通して行われた事もあり、観客は熱狂している。
ディオスはマクヴェスでも有数の戦士だ。相手がどうであれ、その彼の試合が見れるとなれば盛り上がるのも無理はない。
舞台構図によるオキツグは挑戦者の立場らしく、先程からディオスが向こうのゲートから現れるのを待っている。

オオオオオオオオオオオオオオっ

歓声が強くなった。
ゲートの向こうから、優美な白銀の甲冑に身を包んだディオスが、魔導大剣を肩に担いで登場する。
自信と覇気に満ちた笑顔で手を上げると観客の興奮は一気に高まった。
オキツグも今日のために、防具を新調している。普段は付けない鉄色の軽鎧に、エンデバルドの家紋らしき、剣と翼が白くあしらわれた蒼いサーコート。
だが、見栄えという意味では向こうに軍配が上がるだろう。
（まあ、根っからの貴族さまだものな）
観客席の一席、ＶＩＰ様に設けられたボックス型の席を見る。
その席でマリアと共に座り、見守るリュロンからは何の感情も窺えない。まるで自分がこれから戦うかのような戦士の顔をしていたが、それが相棒が緊張している事を知らせる。
（ああ、もう妻なのか）
今更のように心の中で訂正するが、どうにも違和感がぬぐえない。
ただ、負けるわけにはいかない。
一週間前の朝、それを約束したのだから。

肌寒さを覚えて目が覚めた。
「朝・・・か・・・・」
ベッドの上で身を起こすと、裸の上半身が露わになる。
（ああ、着替えずに寝ちまったのか・・・）
しかし、捲り上げた布団の下の下半身は見事に裸だった。
「・・・・・」
「・・・・ん」
隣を見る。
そこにはリュロンがシーツに包まり寝息を立てていた。
勿論裸で。
「・・・・・」
そこで、昨日の夜に何が起こったのかを思い出した。別に記憶を失くすほど酔っていた訳ではない。ちゃんと覚えている。完全に素面だっただけに始末に負えない。
「ふ、ふー」
（お、落ちつけ、俺、落ちつけっ）
動揺で溜息をつく事すらままならない。
ベッドからそっと降りると、床に脱ぎ捨てられてあったジーンズを直にはく。部屋に吊るしてあったコートから煙草とライターを取り出して、音をたてない様にバルコニーに出た。
煙草に火をつけて息を吸い込むと、鎮静効果がさっそく表れて幾許か落ち着きを取り戻す。

「お楽しみだったわね」

突然声をかけられたオキツグは口に咥えていたフィルターを噴き出した。
慌てて声のした方向を向くと、隣に部屋のバルコニーで、手すりに肘をつきながらニタニタと笑うマリアの姿。会った時と同じよう

な、シャツとジーンズというラフな組み合わせだった。貴族のお嬢様なのに、姉妹揃って実用的で簡素な格好が好きらしい。
オキツグは心を落ち着けるように深呼吸し、新しい煙草に火を付けたところで言った。
「何故知っている」
「あら、結婚初夜に夫婦がする事なんて決まっているのではなくて？」
「・・・してない可能性だってあんだろ」
「あはは、そんな、一発決めた後の一服しながら言ったって説得力皆無だよ？
ああ、一発じゃなくて三発か・・・」
オキツグは思いっきりむせた。
「く、加えて言う。何故知っている」
「そりゃねえ」
マリアは照れる仕草をしながらくねくねして言った。
「あんだけ激しければ嫌でも聞こえるって・・・・あたし達夫婦も久しぶりに盛り上がっちゃったわ」
オキツグは一気に脱力した。諦め、と言う意味で。
「結婚式や披露宴で疲れちゃって初夜は致さないカップルも多いみたいだけど、貴方達に限って疲れて爆睡はないでしょうし、随分ハッスルしたみたいね」
アレの声は気にしなくていいから
笑いながらそう告げるとマリアは向こうの部屋の中に消えた。

「ん・・・・」
意識が覚醒するのを感じた。
ゆっくり瞼を開く。何故ゆっくりすべき必要があったのか、それは分からないが、そうした方がいいとリュロンは考えた。

（・・・いない）
何がいないのかも分からず、一人しかいないベッドの上を手足で探るが、何もなかった。
「おはよう」
声に導かれて起き上がると、オキツグが部屋の隅に置かれたティーテーブルで、冷蔵庫から出したらしいアイスティーを啜ってこちらを見ていた。
オキツグは下にジーンズをはいただけで上半身裸だった。自分に至っては全裸である事に気がつく。
「・・・・・」
何となくシーツで胸元を隠す。
昨日、意を決して全てを見せた筈なのに。
以前、レズビアンだったリュロンは女のベッドに上がり込んだり、あるいは連れ込んだりしたものだが、夜を共にした彼女らがよくこうしていたのを思い出す。リュロンは一切隠さず、恥じず、堂々と着衣を整えて出ていったのだが、今、こうして自分が同じ行動に及んでいるのを見ると、妙な気分になる。
「アイスティー、飲む？」
自分の飲んでいるコップを掲げるオキツグ。確かに寝起きで喉が渇いていたところだった。
胸にシーツを抱え込んだまま足を床に付け、立ち上がろうとして転んだ。
足腰がたたなかった。
「おい、大丈夫か」
席をたち、歩み寄ったオキツグにベッドに座らせてもらいながら、自分達が昨夜、どの様な行為に及んだかを思い出して顔を赤くする。
オキツグの鍛え上げられた上半身が目に入り、息が詰まる。
勿論、今までオキツグの体など見慣れていたし、お互いの怪我の治療のために素肌を晒した事もあった。が、改めて見る眼の前の男の体は、女の身では決して手に入れる事が出来ない戦士としての合

理性と美しさに満ちたそれだった。
（この胸に私は抱かれた）
オキツグに申告していた通り、男性経験はなかった。初めての行為に痛みを想像していたが、予想していたそれは全くなかった。
感じたのは、初めのほんの少しの違和感と、途方もない衝撃。
最初、それが快感だとは分からなかった。相手が女性ではあったものの、性経験が豊富にあったリュロンは、未知の快感に過敏に反応して、昨日、最後の方は訳分からない事を口走っていたような気がする。
（この部屋の防音性は確かだったはずだが・・・・）
顔を赤くしたり、蒼くしたりしながら、オキツグが持ってきたアイスティーを受け取り、一気に飲み干した。
会話はなかった。
出会って十年。男女の中に至るまで、これ程の時間がかかる者達は珍しいだろう。むしろ、そうではなかった時間の方が遥かに多くて、何を話していいか分からない。
オキツグは新聞を読みだした。
呆けた顔でその様子を眺めるリュロン。
「オキツグ」
「んあ、何だ？」
相棒がこちらを振り向いてからリュロンは焦った。特に意味もなく話しかけてしまったからだ。
良い言葉が思い浮かばない。とりあえず、シーツを抱えた手とは逆の手でベッドのマットを叩く。
「こっちに来い」
「何でだよ」
「・・・人の足腰立たなくさせといて何を言う」
自分で言って、自分で焦る。肌の色が濃いお陰で、赤面が分かりにくいから、向こうは憮然とした顔で手招きしているようにしか思えないだろう。

オキツグが隣に座る。ズシリと重みで撓むベッドのスプリングの音が生々しくて、思わず肩を震わせた。

そんな自分が悔しくて、平然としている（表向きは）オキツグが恨めしくて、リュロンは上半身の力だけでオキツグをベッドの上に押し倒した。

「お、おいっ」

「いいから黙っていろ」

その硬い胸板の上に頭を乗せる。

心地よかった。どんどん速くなる心拍数を聞いて、少し胸のすく思いだった。

「オキツグ・・・・」

思いのほか真剣な声に、枕にした男の抵抗は止まった。

「決闘は、恐らく六日後のヴェスラ国際闘技場になる」

「心配いらねえよ」

しかし、リュロンの心は晴れなかった。

「私達は第一線から離れて二年も立つんだぞ？

万が一だってある。私は、そんなくだらない事でお前を危険に晒すべきでないと考えている。だが、喧嘩を売ってしまったのは私だ。すまない・・・・」

表情には何も映していなかったが、それがリュロンにとって何かに耐えている時のものであることを知っているオキツグは、その頭を撫でた。

それが何となく気に入らなくて、体ごと乗り出すと、昨日と同じようにオキツグの胸板でリュロンの乳房がつぶれる。

「ッ・・・・」

一瞬、呼吸が乱れたのをリュロンは見逃さなかった。

「ふふ」

すると、腹部に違和感。

「お、これは？」

「ッ・・・ちょっと離れろ！」

「そうはいくか」
逃げ出そうとするオキツグをがっちり押さえて、更に手をジーンズに伸ばす。
「ちょ、おいっ」
「・・・まだ、し足りない様だな」
「それは朝の生理現象・・・・・」
「黙れ」
リュロンは、自分の声が驚くほど艶めいているのを自覚した。こんな声、自分でも聞いた事がない。
「女が求める時にはそれなりの手順と大義が必要なのだ・・・・あまり、恥をかかせるな」
結局、起きるのが昼過ぎになってしまった。

闘技場の中心では、二人の男達が互いに剣を向け合い、鎬を削っている。
一人は大柄な甲冑の男、大剣を小枝の様に振う姿は、さながら暴風の様だった。
もう一人は長身ながらも細身の男、同じように細い魔導刀で男の豪快な剣撃をいなしている。
オキツグだった。
リュロンは貴賓席で、その戦いを見守っていた。
藍色のドレスに身を包み、姿勢よく、背筋を伸ばして佇んでいる姿は、夫である男の戦いを緊張をもって見守っている様に見えなくもなかったが、その内心は穏やかだった。
「あれあれ、攻められっぱなしじゃん」
隣に座るマリアだった。
ギーズはいない。他に仕事があるので、二人のみの観戦となっている。

「大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ」
苦笑しながらリュロンは姉の心配を払拭する。
「受けた攻撃は全て余裕を持ってかわしてますし、国外に流れていた事もあって私自身ディオスの腕は風聞でしか知らなかったのですが、正直、あの程度で安心しました」
猛攻を加えるディオスであったが、表情にはあまり余裕がない。
攻勢にまわってはいないものの、オキツグの実力を肌で感じているのだ。
決してディオスが弱い訳ではない。
むしろ超一流で、ブランクはあるもののリュロンですら勝つには本気でかからねば不可能だろう。
しかし、プロメテウス事件の前、絶頂期の自分と伯仲していたオキツグからしてみれば役不足だ。
しかも、あれからオキツグは《白燐丸》の正当な後継者として大幅に力を増している。
あの白い髪と蒼い瞳が何よりの証拠だ。
「・・・随分、信頼しているのね・・・プロの目から見てそんなに差があるのかしら」
「ええ」
何に対する返事か分からない返答を返す。
「賢者モードってやつかしら。ねぇ、そう言えば先週の夜っきり、アレの声が聞こえてこないんだけど・・・気にしなくていいのよ？」
突然、リュロンがむせた。
「な、何をっ」
目を泳がせ、口をパクパクさせた後で落ち着く様に深呼吸して言葉を紡いだ。
「・・・何故知っているんです」
「結婚初夜に貴方達がいたしてた事？」

「・・・・・・・・はい」
あはは、と闘技場そっちのけでマリアは笑った。
「貴方達って、本当に同じ事言うのね？
あんだけ激しければ嫌でも聞こえちゃうわよ、って大丈夫？」
密色の肌の上からでも分かる程に顔を真っ青にするリュロン。
（し、知らなかった）
てっきり、いつも通りに皆が接していたので大丈夫だと思っていたのだ。次の日の夕方になっておそるおそる食卓についたのだが、至って普通の空気が流れていた事に安堵していたのだが。
「でも、嫌だったわけじゃないんでしょ？」
「・・・・・はい・・・・・・ただ・・・・・」
顔を真っ赤にして俯きながら答える。
古来より、マクヴェスの騎士は、戦の前になると夜の営みを一切絶つ。悔いを残さずに戦場に向かった者に限って死ぬ事が多かった事から成り立った風習だったが、今では廃れているそれをリュロンは律義に守っていた。
不安だったのだ。
長らく戦場から離れていた上、結婚して家庭を持とうという男にかつての鋭さは残っているのか。
だが、実際にオキツグの戦いぶりを見て、大分心が落ち着いた。
「よかった」
大丈夫そうだった。
その様子を慈愛に満ちた目で見守っていたマリアが、思いついた様に意地悪げな色を浮かべた。
「じゃあ、今夜は一週間ぶりなわけだ」
「ッ・・・」
赤い顔を更に濃くするリュロン。詰まる息とあえぐ呼吸がその追い詰められ具合を示していた。
おかしい。自分はこれ程まで初心な人間ではなかったはずだ。
国を出て以来、何人もの女性と肌を重ねて来たし、それなりの経

験も積んでいたはずだ。それが、夜の営みについて聞かれた程度でこの体たらくだ。

「え、ちょっと、大丈夫？」

尋常ではない程に羞恥と共に焦っているリュロン。

心配げな様子でマリアが聞いてくる。

「ら、らいじょうふれふ・・・・・」

大丈夫です。そう答えようとして呂律が回らなかった。

なんだか視界まで回ってくる。

「テレジア！？」

オオオオオオオオオオオオオオオオッ

歓声が上がった。

我に返って闘技場を見ると、魔導大剣をばらばらに破壊されたディオスと、残心を決めたオキツグの姿だった。

どうやら決着がついた様子にリュロンは再び安堵すると、心配するマリアを手で制した。

無名の魔導刀を鞘に戻したオキツグがリュロンの席を視線で捉えた。

手を上げて挨拶をしようとした。

しかし、それは次の瞬間に起こった出来事が妨げてしまった。

ディオスの大剣が大上段に振り下ろされる。

それをオキツグは慌てるでもなく、避けるでもなく、正眼に構えた刀の切っ先を僅かに調整して剣の軌道に合わせる。

魔導大剣は、その構造上、いくつもの部品が組み合わさって成り立っている。一枚の鉄板から造り出すのでは、補修も点検もままならない上、半ば機械として成り立っている機関部との接合も適わな

いからだ。
オキツグは魔導大剣の刃とそれを支える峰の部品の、亀裂の様な接合部を目がけて突きを放った。

ガギンッ

二振りとも鋼鉄の技物以上の強度を持つが、その僅かな隙間を狙われたディオスの剣は振り下ろされた慣性のまま崩壊し、つんのめった状態の首筋に刀の刃を合わせた。
「ぐっ」
柄を取り落として悔しげに降参の意を示すディオス。
圧倒的強者として名高かったディオスの敗北に、観客達は呆然とする。が、しばらくして、会場を揺るがすような、割れんばかりの歓声が響いた。
これがマクヴェスの民に美徳だった。
強き者を強き者として褒め称える。しかも、オキツグは外戚とは言っても国を代表する貴族の一員だ。
オキツグへの歓迎の証だった。
忌々しげに会場を後にするディオスを余所眼に、オキツグはその温かい声に暫く浸った。
観客席を見渡し、その内の一つである貴賓席のリュロンと目が合う。
声を発しても届かないだろう。
(俺が結婚、か)
今、こうしていても信じられない。
以前のオキツグは、家庭を築くと言う事に、忌避感すら感じていたのだ。元の世界にいた家族に対するあてつけではない。ただ、自分が誰かを幸せにする事が出来るとは信じられなかったのだ。
(違うんだ、家族ってのは・・・一方的に幸せを与えるんじゃない。自分が幸せになる事を喜んでくれる人達と共に、その人の幸せ

も喜ぶ事。それが家族なんだ)

ここで生きて、ここで死のう。

心の底からそう思えた。

密かにマクヴェスを第二の故郷と定め、かつて相棒だった妻に手を振ろうとした時、突然起こった突風に目をつぶった。

「ッ・・・何だってんだ」

思わず目をつぶってしまった風は上空からのものだった。

辺りを見渡せば、観客から熱狂は既に去り、何かを呆然とするように見上げている。

つられて上空を見上げた時、オキツグは魔導刀を取り落とした。

「・・・・・・」

そこには蜃気楼のように揺らぐ、大きな鏡の様なものがあった。

煌びやかなそれに、怪訝な思いを持ちつつも、観客達は見とれる。

どういう訳か、鏡が映しているのは闘技場の姿ではなかった。

キラキラと光る様に、他の何かを映し出す。

鏡?

魔術?

敵国のテロ工作?

それともただの自然現象?

恐らく、周りの者達は同じような疑問を同じように考察しているだろう。

しかし、オキツグは鏡の向こうに見える光景を知っていた。

「何で・・・・・・」

言葉がかすれて途切れる。動揺、焦り、困惑、様々な感情が混沌とした声に、僅かに混ざる懐郷の色。

「何で、いまさら・・・」

鏡の向こうに移っていたもの、それはオキツグの故郷、日本の東京の街並みだった。

第４話　鏡面世界（後書き）

第二章がやっと動き始めたって感じっすね！

第5話　残滓

キーン、コーン、カーン、コーン

間の抜けた鐘の音がする。

(態々、電子音でこれを再現する必要があるのかしら)

「櫛名先生〜、さよーならー」

勤務先の小学校の門で、児童達を見送る小学校教諭、櫛名真澄は手を振って来た児童に軽く手を上げて返すと、児童の波が切れた事を確認して校舎に戻った。

真澄は都内の公立小学校に赴任して二年目、仕事にも慣れてきた頃だった。

女性にしては長身で百七十センチを超えている。スタイルも顔もそれなりに整っているので、よくモデルみたいと褒められるのは密かな自慢の種だ。

教員控室に戻る途中、図工室の中に残っている児童を発見した。

「あら?」

「あ、櫛名先生」

真澄が担任している四年三組の真山タケルだった。

大人しい少年で、いつも休み時間になると自分の席でじっとしている子で、騒ぎばっかおこす問題児とは違った意味で気にかかる子だった。

「真山君、もう下校時刻だよ?」

「う、うん、直終わるからもうちょっと待っててっ」

タケルの眼の前にはイーゼルに立てかけられているスケッチブックに、その先には花瓶と花束。

「すぐ、直だから!」

そう言ってスケッチブックに向き直ってしまう。

真澄は仕方なくタケルを見守る事にした。

週に一回だけあるクラブ活動で、タケルは美術部を選択している。絵を描く事が好きだったらしく、暇を見つけては機材の揃っている図工室で何かを描いているのだ。

真澄はその光景に強い既視感を覚えた。

幼いころ、歳が大して変わらない次兄の部屋に訪れると、次兄はいつも何かを描いていた。その姿がタケルに重なる。

懐かしさと共に罪悪感が生まれてくる。

父は去年、努めていた財務省を定年退職で辞めた。現在は財務省時代に関係を深めていた人物に誘われて大学に教授として教鞭を振っている。

長兄は大学を卒業した後、父と同じく国家一種に合格、現在は外務省に勤めている。

上流以外を人と思っていない父が、自分の先生になりたいと言う希望にどの様な反応を示すか不安だったが、今のところは何も言ってこない。

別に娘の好きにさせたいとかではなく、そもそも女が社会で働く事を馬鹿にしていて興味がないのだ。大学生の時は分からなかったが、社会人になってたまに会うとそう感じる。

母は、あれは駄目だろう。娘の自分から見てもそう思える。あれは人形だ。若い頃はさぞ美人だった事を思わせる面立ちだが、中身は空っぽだ。真面目な長兄がそれを窘めた時、母がきょとんとした様子でそれを聞いていたのを見て、母が母の役割を果たしているのは、別に子に愛情を持っているからではない。父が母にそれを求めているからにすぎない事を知った。

だから、盆暮正月しか家には帰っていない。

なんというか、離れてみて家の異質さに気がついたのだ。

既に結婚して子供もいる長兄の家に遊びに行った時に、膝で眠る息子の頭を撫でながら長兄は言っていた。

『あれは家族じゃない』

最後に、付け加える様に『意次には悪い事をしたな』と言っていたのを思い出す。当時は気がつく事が出来なかった。考えてみれば、次兄は絵が得意だったが、それだけだった。父の求めるものは何も持たず、、故に彼だけは家族の一員ではなかった。その事に気がつかなかった。

いや、知っていて無視していたのかもしれない。昔、頼んで似顔絵を描いてもらって、嬉しくて父に見せたら、びりびりに破かれてしまった。泣きそうになったが、怖くて何も言えなかった。

タケルの家に家庭訪問に訪れた時も、母親は絵に夢中の息子に困った様な瞳を向けていた。

色々なところでタケルは次兄と似ていた。

「よし、終わった」

そう呟く少年の前には、一枚のスケッチ。

それを見て、大人の自分よりも遥かに上手い事に驚く。

「上手ね」

「えっ、そう・・・ありがと」

もの静かな少年が照れたような笑みを浮かべる。嬉しい事のを隠そうとして、それでも僅かに漏れてきてしまう喜びの色。

笑い方まで似ている。

「・・・でも、たまには他の人と遊んでみても良いんじゃない？」

「え？」

その言葉を良く咀嚼し、吟味したタケルは、遠まわしに友達を作りなさいと言われた事に気がついたらしい。

「・・・・・」

「お母さんも心配してたよ？」

俯くタケル。

暫くして、やや憮然とした様子で答えた。

「だってさ、僕、クラスの奴が好きなカードとかゲームに興味ないし」

考えてみれば難しいのかもしれない。この年頃の子どもと言うのは、好きなものを共有できない事には関係を結ぶ事が出来ない。他に方法を知らない。

「せっかくレベル上げても、カード集めても、違うのが出ちゃえばおしまいじゃん」

いじけた様に言う少年だったが、言葉の裏には違うものも混ざっている様な気がした。

嫌いだから混ざれないのではない。混ざれないから嫌いなのだ。

何か言おうとして、タケルが何かに気がついた様に立ち上がって窓の外を見た。

「うわぁ」

素っ頓狂な声を上げるタケルにつられる様に窓際に歩いていき、真澄はその光景に声を失う程驚いた。

校庭の空には蜃気楼が、鏡の様に空ではない風景を映している。だが、そこに移るのは鏡であれば校庭の赤土である筈なのだが、見た事もない、大都市の姿だった。

凄まい光景だった。

それは直に消えてしまったのだが、タケルはその光景に創作意欲を刺激されたらしく、スケッチブックを手に取ると、イーゼルを隅に寄せてさっさと出ていってしまう。

「じゃあね、先生！」

きっと家で、今見た光景を描くのだろう。

結局、タケルに言おうとした言葉は喉元まで出かかって、しかし、口に出される事はなかった。

溜息をついて真澄は仕事に戻った。

突如として上空に現れた日本の光景。

暫くして消えてしまったそれは、生中継中である事もあり、かな

り注目されはしたが、魔術と言う文明が成り立つ世界では不可解な現象など日常茶飯事である。悪戯、アンチ貴族の抗議活動の一環、理由はいくらでもあり、技術的にも可能であることを考えれば、その関心を集める時間も短いものとなる。

決闘はオキツグの勝利に終わった。

マクヴェスの国民が気にかけているのは決闘の勝敗のみで、それ以外など雑事にすぎない。

国内外問わず、関心は低かったのだ。

オキツグを除いては。

決闘から数日間、時の人となったオキツグは様々な報道陣にもみくちゃにされ、それに苦笑いしながら応対しつつも、頭からはあの東京の光景が離れなかった。

（あれは一体・・・・・）

エンデバルドの屋敷の庭で、石の階段に座り込みながら考えていた。

リュロンは屋敷にはいない。ヴェスラに帰ってから暫く立ったので、軍への復職を打診されているからだ。今日はそのための会議。

恐らく、近衛の佐官待遇になるそうだ。

（本格的に女房のヒモ野郎になる事が確定しそうだ・・・・）

跡目ではない貴族に婿入りした男なんて、求められている役割なんて殆どないのだ。

お陰で、日本にいた時以上に気楽な毎日を過ごしている。

そう言えば、最近リュロンと一緒にいる時間も減った。

「あら、ここにいたの」

オキツグのいる中庭に通じる扉から顔をマリアが顔を出した。

「どうしたのよ、たそがれちゃって」

「いや、別に」

仕立てのいいスカートが汚れるのも構わず、オキツグの隣に座る。

特に何かを話す訳でもなく、暫く時間が過ぎる。

「・・・そう言えば」

沈黙が辛くて何となく口を開く。
「リュ、テレジアは軍に復帰するそうですが」
「リュロンでいいわよ。
ええ、その方向で検討中らしいわ
あの子、一応は騎士叙勲を受けているから、軍としても何らかの形で働いてほしいんでしょ」
「騎士叙勲？」
不思議そうな顔をするオキツグに、ああ、そうかとマリアが説明を付け加える。
「マクヴェスの剣導士はね、国からちゃんと認められると騎士の位階を授けられるの。軍では少佐相当の地位だから、何かと頼りにされちゃうのよね」
「そう、なのか」
武門として高名な貴族の多くは騎士が多いらしい。忘れがちになるが、エンデバルドも一応は貴族なのだ。
（あれっ、って事は、俺はもうオキツグ・クシナじゃなくて、オキツグ・エンデバルドなわけか？）
素直に口に出して聞いてみる。
「姓が変わるかって？」
「ああ」
「まあ、一応ね」
だが、そこのところはかなり無頓着らしい。どうでもいい入り婿らしい、どうでもいい対応と言う訳だ。
「あ、でも、君もその内、騎士叙勲を受けてもらう事になるけど」
「え？」
「だから、マクヴェスの騎士になってって事」
国を代表する騎士であるディオスを降してしまったのだ。それなりの地位について、それなりの責務を果たせと言う事だ。
「・・・・」
少し、考え込みながら言葉を紡いだ。

「俺が、第九位《氷王》がマクヴェスに不和を与える事を防ぐため、か」

マリアはギョッとした表情を浮かべた。

「・・・・知っていたの」

正確には、マリアがオキツグの正体について知識を得ていた事に対してだ。

「まあ、な」

オキツグの力を利用しようとする者は多い。国から個人、組織、思想に至るまで、ある者は兵器として、ある者は斃して名を上げようとしてオキツグの前に立った。

だからこそ

「一番、人として扱ってくれるところに行こうと決めていた」

マクヴェスの国民はオキツグを恐れない。単に強い剣導士と言う事に喜んでいる。他の国では同じようにいかなかった。言葉では褒め称えつつも、その瞳には恐れが浮かんでいる事も良くあったのだ。

マリア達についてもそうだ。

確かに、没落しかけたエンデバルドにとって、オキツグは喉から手が出る程欲しい存在だ。

妹の婿、それ以上の思惑があって迎え入れられた事も察している。

「力を貸してくれる？」

「ああ」

今までオキツグに近寄って来た輩も、オキツグの力を利用しようとはしたが、その力を借りようとはしなかった。

「ありがとう」

真摯に短く言った。

言葉はなかった。静かな横顔に、オキツグは思わずドキリとした。

（おいおい、相手は人妻だぞ）

「もしかして、あたしが目当て？」

「ちげえよ！」

視線に気がついたマリアがにやけながら口を開き、反射的にオキ

ツグが返す。
「そうよね、姉妹で三角関係、しかもお互いが不倫なんて、不健全が過ぎるわ」
「・・・・・・」
真摯な態度が一転、いつもの明るくておどけた調子に戻ってしまう。
何となく騙された気分のオキツグだが、見とれていた事は事実なので何も言えない。
「でもね」
マリアは続けた。
「もし、私たちを本当の家族と思ってくれていて、テレジアを奥さんとして愛してくれるのなら、もうちょっとあの娘を構ってあげて」
そう言うと、立ち上がってその場を去ってしまう。
その言葉に何も返す事は出来なかった。

ヴェスラの街並みは極端だ。
伝統的、芸術的建築物の数々。しかし、海外資本が流入して飛躍的に都市化、先進化が進み、馬に乗った騎士が携帯電話を使ったり、馬車に乗ったビジネスマンが商談に向かう、奇妙で混沌とした活気があった。
その一画に未だに外文化の侵略を受け付けていない住宅街があった。
住宅街といっても、全てが城の様な大きさである。王城がある手前、華美さと大きさには手心を加えてあるものの、住んでいる人間の生活水準の高さがうかがい知れる。
この区画は王位継承権を持つ貴族達と、それに連なる貴族達が多く住む区画だ。中央集権的になって以来、領土は国家に帰属するようになったので殆どの貴族がこの区域と、他に設けられた高級居住

区域に住んでいる。
その中でも一際大きいが、質実剛健で、家柄と歴史の古さを示している様な一画がある。
ファルケス家の邸宅だった。
屋敷の大きさに比例して、数多い使用人は皆、お仕着せを着て忙しそうに動き回っている。
ディオスは付けていた白銀の甲冑を脱ぎ、仕立てのいいスーツの襟もとに紅いスカーフを巻いた姿で屋敷の廊下を歩く。
顔色は悪く、焦っているようだった。
広大な廊下、長身のディオスの倍はあろうかという扉の前に立ち止まり、ノックする。

コン、コン

「ディオスです」
扉の奥からくぐもった声で入れと返って来た。
「失礼します」
扉の向こうには大きなマホガニーの机を挟んで、ゆったりとした白いシャツにスラックスといういでたちの老人が立っていた。
ファルケス家の当主、ランドゥである。
歳は七十代半ばながらも、鍛え上がられた体が加齢を感じさせない。顔に刻まれた皺の深さと、綺麗な純白の白髪のみが実際の彼を教えるものだった。
「来たか」
厳の様な声だった。
今や平和なマクヴェスであるが、それは最近の話だ。ランドゥは乱世のマクヴェスを生き抜き、列強諸国と争い合ってきた男だ。ディオスとは格が違う。
「外遊から帰って来て驚いたぞ」
方が震えるディオス。

「次期戴冠家であるエンデバルドの娘を逃したばかりか、その婿に喧嘩を売って負けたそうだな」
「はい、しかし・・・」
「黙れ」
その声は静かだったが、それ故に呼吸が困難になる程の圧力が込められていた。
「確かに、この件に関しては任せると言ったがな、婿を貶めて離縁に追い込むのも、まあいい。だが、逆に返り討ちにあって恥を晒した者を、私はどうしたらいいだろうか」
「・・・・・・・・・」

パチッ、パチ

何かが弾ける音がした。見ると、今の時期は暑いにも関わらず、暖炉に火がくべられている。
異様な光景に息をのんだ。
「抜け駆け、逸脱は強者の華、しかし、無能な部下を、例え息子であっても処断するのは、当主たる私の華なのだろうな」
机をまわってランドゥがディオスの前に立った。
「手を出しなさい」
「は？」
「手だ。手を出しなさい」
何か恐ろしい事が待っている。それだけは分かった。
しかし、ランドゥに逆らう事は出来ない。いかにディオスが強い騎士であっても、それは社会的にも物理的に死する事を意味する。
「はい、父上」
手を差し出した瞬間、その手が床に落ちた。
「は？」
ディオスは立っている。その光景が信じられず、差し出した右手が床に転がる光景唖に然とし、そして焼ける様な痛みが起こるのを

感じた。
手首から先が切断されている。
ランドゥの手にはいつの間にかナイフが握られていた。
「うおおおおおおおおおおおおっ」
「見事なものだろう、私のナイフ裁きも」
床に膝をついて呻く息子を冷ややかに見る。
「戦場では同じ手で何人もの首を掻っ切ってやったものだ。もっとも、正面での対決は得手ではなかったが、お前の剣腕も大して役に立たん様だから、まあ、いいだろう」
ディオスは静かになっていた。痛みで気絶したのだ。
「情けない、せっかく暖炉の火で止血してやる予定だったというのに」
そう吐き捨てると、使用人を呼んでディオスを下がらせる。慣れたもので、血に濡れた床を見ても何も言わないし何も聞かなかった。
入れ替わりに一人の男が入ってくる。
「お取り込み中だったかな？」
来客は若い男だった。
歳は二十代半ばだろうか。
線が細く、肌も白い。マクヴェスの貴族に良くみられる密色の肌とは違う。長い髪の毛は金色で、異国の血が入っている証拠だった。
王位継承権を持つ十二貴族の当主たるランドゥにこの様な口の聞き方を出来る者は、同じ十二貴族の当主か、王のみであるが、その貴族の中でも白い肌に金色の髪を持つ者は一人しかいない。
「ペンウッド卿か」
異国の血筋は話によると母方のものらしい。マクヴェスに古くから伝わる、一枚の布を体に巻きつけた様な装いは、彼が行うと神秘的な魅力を醸している。
美貌の男だった。
「この様な、ところに何用かな？」
「これは、これは・・・御冗談を」

穏やかな語り口に笑顔。しかし、その瞳には毒があった。
「ファルケス卿、貴方が外遊の目的としていた事についてですよ」
「・・・・・」
無言の睨みあいが続く。
「何、少し卿とお話ししたい事がありましてね」
「・・・・・伺おう」
ペンウッド卿の口から出た言葉にランドゥは耳を傾ける。ディオスが流した血の池を挟んで。

第6話　水面

マクヴェス王国、ヴェスラの中心に建つミノス王宮は、質実剛健名国柄を反映した質素な装いながらも、軍事国家らしい堅固な城壁は中層ビルに匹敵する高さで、城塞内の広大な空間と備蓄食料はヴェスラに住まう人々を収めたまま、一月は持ちこたえられると言う。

小さな町であればそのまま収められそうなミノス王宮の中心部、王であるゲイル三世は執務室で書類仕事に励んでいた。

「・・・もう、すっかり暗くなってしまったな」

窓の外は夜の帳が降りている。

ゲイル三世は、細身の長身に温和そうな顔立ちの壮年の紳士だった。

かつては十二貴族の一員として、周辺諸国との戦争に明け暮れ、今は王として国の平和と未来を守るために、敵ではなく数字と格闘している。

壮年のゲイル三世は、黒い髪に浅黒い肌と言う典型的なマクヴェスの民であったが、十年ほど前、終戦と友好の証として外の国から嫁いできた嫁、王妃はマクヴェスの民ではない。

国も急速に多民族化が進んで、マクヴェスの民以外の者もヴェスラでは多く見かけるのだ。

（時代は変わったのだな）

戦争が終わった事に寂しさを覚えてしまうのは、それほどまでに生と戦が密接かつ苛烈なマクヴェスで生きた故なのだろう。

自分の今着ている服を見る。

白いシャツに黒いスラックス、臣下が近隣諸国と和平のために出向いた際に土産として持ち帰って来たものだ。文化と文明の水準を知るためである。

ゲイル三世は驚いた。

これほどまでに質の良い品を、大量に安価に供給する事が出来る

なんて。
書類を整えて机にしまい、明かりを消すと執務室の外に出た。
「部屋に戻る」
護衛として待機していた二人の騎士が敬礼する。右の握り拳を左胸にあてるマクヴェス式の敬礼だ。
騎士は近衛の証である蒼を基調とした軍服に軽鎧、頭にはマクヴェス王家の紋章である獅子が縫い止められたベレー帽という格好だった。
本来は全身鎧であったのだが、数年前に国際的に一般的とされる軍服に変えたのだ。
騎士二人を従えて廊下を歩いていると、向かいから金髪の青年の姿が見えた。
「ふむ、ペンウッド卿か」
「いやだな、やめて下さいよ」
青年は困った様な笑みを浮かべた。
「確かに私はペンウッド家の当主ですが、陛下は私の父上ではないですか」
ゲイル三世の旧名はダグザ・デュ・マハート・ペンウッドと言う。
目の前の青年の父親だった。
「そうだったな、ラウル」
名前を呼ばれたペンウッド卿、ラウルは母方の血を濃く受け継いだために色白で金髪だ。かつてはそれを蔑視されたものだが、急速に国際化が進むマクヴェスではもはや普通になりつつある。
マクヴェスの民族衣装も、贔屓眼かもしれないがよく似合っていた。
部屋も近かったので護衛を下がらせる。
「アスローン産のロゼで良いのがあるが、寄っていくか？」
「お言葉に甘えて、といきたいところですが、今日は父上のご機嫌伺いに来ただけですので・・・・」
「そうか」

申し訳なさそうに断る息子を見る。
息子は賢かった。
見目麗しく、
人の上に立つものとしての器も、
才覚も、
全てが十分にある。
（・・・・だが、そうだとしても）
彼は王の息子と言うだけで王子ではない。マクヴェスの国家運営の特殊性故、次の王位は他の家の者に譲る事が確定していた。
父として、王として、これ程惜しい事はない。
「父上？」
息子に呼びとめられてハッとした。
「ああ、すまない」
会釈して息子は去った。
うっすらと汗をかいていた。
息子に王位の継承権がない事を不満に思った事は、ゲイル自身はない。しかし、不安はある。
まさか、息子でなければ王が務まらないなどと考えてはいないが、それでは何故不安なのか。
いくら考えても分からなかった。

魔導剣は機械である。
コンピュータで言うと、人間がＣＰＵとハードディスク、電源を兼ねており、魔導剣の役割はメモリ、キャッシュ事である。本来は魔法を発動する道具らしく、杖の形をしていたらしいが、魔術が専ら戦争に利用され始めると、それは剣と合体した形となり、現在の魔導剣の形になったと言う。
オキツグは玉璽ではないほうの魔導刀の解体整備に勤しんでいた。

無銘ではあるが、かなりの技物である。いい得物は手入れが楽しい。

エンデバルドの屋敷にきてしばらく、する事もないので久しぶりに魔導刀の本格的な整備をする事にしたのだ。因みに《白燐丸》には必要ない。そもそも、機関部がブラックボックスになっていて、オキツグでは整備が出来ないし、問題も起きていないのでするつもりもない。

刀身を丹念に磨いていると、部屋の扉が開けられた。

「リュロンか」

「ああ」

扉に目も向けずに来客をあてる。屋敷のものは基本的にノックするし、マリアは騒がしいので黙って部屋に入ってくると言う事がない。消去法で決まった。

「整備中だったのか」

「まあね」

刀身を机の上に置くとリュロンに向き直る。

「・・・何、その格好」

リュロンは蒼を基調とした軍服を着ていた。

コートの様な軍服に軽鎧を纏い、胸には獅子の紋章のワッペン。

「私が軍に復帰したと言うのは聞いているな？」

「あ、ああ」

「近衛の制服なのだ」

儀礼用の制服は別にあると言う。

この国の王制は特殊であるので、王の暗殺が現実としてありうるのだ。十二貴族同士の牽制で実際に暗殺された王も存在する。

故に、マクヴェスの近衛兵団は飾りでは決してない。

戦争時も、交代で戦場に出る事で兵士としての質の向上に努めていた位なのだ。

「お前の《ムズ・ラハート》も整備してやろうか？」

「ああ、いや、今日は点検も兼ねて軍に預けてきてしまったからな」

軍服のお披露目が済んだリュロンは、軽鎧を外して、コートをハンガーにかけるとベッドに腰掛けた。
「それにしても、復帰早々に近衛なんてすごいな、エリートコースなんだろ？」
「いや、私の場合は特殊だな・・・国としても、今の陛下が引退する頃までには近衛でそれなりの地位を築いて貰わないと困ると言う事なのだろう」
「え、どうして？」
「い、いや、それは・・・・」
珍しく言葉を濁す相棒。
そもそも、何故リュロンにそこまで期待をかけるのか。
深呼吸して、意を決するように口を開いた。
「・・・・王の近衛は、代々戴冠家の親族でしめる事になっている」
エンデバルド家が次の戴冠家だ。
そして、王は？
リュロンとオキツグの子供、となる可能性が大きい。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
そこまで考えが至って、沈黙が降りる。
リュロンはコートの下に来ていた白いシャツ姿のまま、襟元を除く様に俯いていた。
オキツグとしてはリュロンと家庭を築く事は吝かではない。が
（こいつは嫌、なのか？）
しかし、そうではないと勘が告げている。
よく、見ればリュロンの密色の肌が僅かに紅潮している。
オキツグは不思議に思う。ここまで初心な女ではなかったはずだ。
むしろ、そう言った話題ではリュロンの方こそからかう側であり、オキツグ自身、辛酸をなめた覚えがたくさんある。
やはり故郷のせいだろうか。
オキツグは、リュロンがマクヴェスに帰って以来、共に旅をして

いたころよりも精神的に幼かった頃に多少ではあるが戻っているのではないかと思う。
この国、屋敷にはその幼い頃を知る者が使用人を含めて多くいるので、意地を張ろうにも仕方がないのかもしれない。
心が十二年前、国を出る前まで戻っているのだ。
（それじゃあ、俺は十代半ばの女の子を誑かすすけこましか）
「軍服、着替えたらどうなんだ」
「あ、ああ、そうだな」
着替える服を探し始めるが、考えてみればここは生憎オキツグの部屋だ。リュロンの着替えもあるにはあるが、全て外着である。
「着替える前に酒にしないか？」
とリュロンが誘ってくる。
「珍しいな、お前から誘ってくるなんて」
「あまり眠れそうにないんだ」
そう言うリュロンに、オキツグにふと妙案が浮かぶ。
魔導刀を元に戻して柄に収めて壁に立てかけると、リュロンの前まで移動する。

『もうちょっとあの娘を構ってあげて』

マリアの言葉を思い浮かべ、気が付いたらリュロンの肩に手をかけていた。抗議の声を上げる暇も与えずにベッドに押し倒す。
「なら、よく眠れる事でもするか？」
「ッ・・・・」
一瞬、息が詰まった様な表情を見せた後に、直にそれを押し殺してリュロンは不敵に笑った。
「出来るのか？」
「あ？」
「私がよく眠れる程に、出来るのか？」
顔にはいつまでもやられっぱなしだと思うなと書いてある。

「キスは下手」
「うっ」
「扱いは乱暴」
「ぐう」
「おまけに早い」
オキツグは沈没した。
女性の方が立ち直りが早い。一種の開き直りだろうが、これは決して男であるオキツグがかなうところではない。
リュロンの横、ベッドの上に転がり身もだえするオキツグ。
その様子を笑いながら見つめ、そして肩を掴んで仰向けにするとリュロンは言った。
「だったら、私で練習してもっと上手になれ」
押さえつける様な形でキスしてくる。
(ああ、男らしい女房に乾杯)
オキツグは完敗の白旗を挙げた。

第7話　姫の騎士

騎士よ
如何なる時、如何なる所においても
持たざる者の盾となり、
敵に背を見せず、
人を欺かず、
全ての不義に掣肘すべき存在でありなさい

跪き、マクヴェス式の敬礼である右拳を左胸に充てる動作をしながら、オキツグは高い場所から降りてくる文言を聞いていた。
場所はヴェスラの中心、ミスラ王宮だった。
質実剛健が国是のマクヴェス王国であっても、この日は金糸で飾られた赤い絨毯や、白い大理石の床、煌びやかなシャンデリアなど、様々な装飾品に飾られた豪華な一室でその儀式は行われていた。
すなわち、オキツグの騎士叙勲である。
オキツグはディオスとの決闘でも付けていた鉄色の軽鎧に、エンデバルドの家紋らしき、剣と翼が白くあしらわれた蒼いサーコートを纏っている。
西洋的文化を持つマクヴェス王国の正装の一つなのだそうだ。
（嵌めやがったな）
この場ではきていないが、近衛の制服に近い形で創られたこれは、オキツグの将来を見越しての事だろう。
国王であるゲイル三世と、その前に跪くオキツグを囲む様に、同じ蒼いサーコートであったり、重装甲冑の近衛騎士。貴族や一部報道陣まで混ざっていた。
俯いたまま辺りを見回すと、リュロンが蒼い騎士外套を纏いこち

らを見守っていた。

貴族などに挨拶を済ませると、二十名程の騎士の一団がオキツグに歩み寄って来た。

「リュロン」

その集団の先頭に妻兼相棒の姿を認めて名前を呼ぶ。

「あいさつ回りも全て済ませたようだな」

「ん、ああ」

返事をしつつも、その後ろにいる集団に目が行ってしまう。

「この人達は？」

リュロンの後ろに控えているのは全てが騎士で、二十代半ばが殆どの若者たちだった。

騎士の大半、しかも蒼い外套を着る事が許される近衛が、血筋だけではどうにもならないエリートである事を考えるに、三十代や四十代の者が殆どであるのだが、この若者達は確実に最年少の部類に入るだろう。

しかし、同じ場にいる先輩方に気を使う雰囲気は全くない。気安い仲ではない様だ。中年の近衛騎士達が忌々しそうに若者たちを見て、それを彼らは相手にしないという構図。

「私の親衛隊の隊員たちだ」

「親衛隊？」

メルヘンチックな響きにいぶかしむオキツグ。

「十二年前、私が国を追われるまで率いていた貴族の子女や一般庶民の騎士見習い、つまり少年少女で構成された騎士団のメンバー達だ」

かつての同志と言うことらしい。

考えてみれば、リュロンは近衛を掌握していく上で、信頼を置けるものはかつての同士以上に考えられなかったのだろうが。彼らか

らは不思議とそれ以上の色を感じた。
敵意？
害意？
妬み？
嫉み？
憎悪？
それとも純粋な好奇心？
いくつか候補を上げ、絞り、しかし答えが出せずにいると、集団の中の一人、若い女が歩み出て発言する。
「テレジア様」
「何だ？」
「この方がテレジア様の旦那様で？」
首肯するリュロン。集団の視線の圧力は一気に高まった。
疑問が一つ降ってわいた。自分の事は報道陣の姿が見られる通りそれなりに有名である師、何よりもディアスとの決闘は生中継されたほどなのだ。この場で、本人を眼の前にして確認する程情報に乏しい訳ではない。
（・・・そうか）
彼らの視線の正体、それは値踏みだった。
守るかのようにリュロンを取り囲み、こちらに視線を投げてくる彼らはまるで娘の彼氏を見る父親の様なそれだった。
加えて気がついた事が、この国の民、特に貴族は大柄で肌の色が濃いものが多いのだが、この集団に限っては全体の半分弱ほどしかいなかった。思うに、これも周りの視線が冷たい理由の一つかもしれない。
実際に発言した女も、赤い髪に白い肌で、割と小柄だった。
「私は第三近衛魔導騎士団の団長の地位を大佐の階位と共に預かった。お前にはその団長補佐として副団長を務めてもらう事になる」
その話は事前に聞いていた。
騎士叙勲を受けたオキツグは少佐に相当する。また、近衛であっ

ても、全ての騎士が騎士叙勲を受けている訳ではないらしい。あくまでも近衛であっても、通常の軍隊であっても機能的な面をもって騎士と呼んでいる訳で、厳密には騎士ではないのだ。もっとも、この場に顔を出している騎士の殆どは叙勲を受けた騎士であるので、彼らは若干の異物として周りからは見られている。

彼らの階級は一部を除いて全て尉官止まりだそうだ。

しかしこれは、彼らが若いながらも叩き上げの軍人である事を示している。

上に戴く指揮官として

敬愛する騎士姫の伴侶として

相応しいか見られているのだ。

彼らからしてみれば国を十二年も離れていた主であるのに、そのブランクを感じさせない忠誠心の高さを感じさせる、そんな若者たちだった。

「了解したよ」

いつも通り、気の抜けた返事をすると、親衛隊諸君の、特に先程発言した女からの圧力が高まる。

どうやら点数を下げてしまったらしい。

（この男、本当にテレジア様の夫の自覚あるのかしら）

目の前でリュロン、テレジアと会話する男を視界に納めてベヘナ・ガロンは思考する。

マクヴェスの民らしからぬ白肌に小柄な体躯、赤い髪は短めに切りそろえられている。実年齢である二十五歳から十は若く見られる童顔はコンプレックスでもあるが、彼女をお嬢様扱いする者は少ないだろう。

騎士の外套を着ている事もそうだが、それ以上に軍人、騎士としての経験に裏打ちされた自信、覇気、その苛烈な性格を色であらわ

す赤い髪、小さいながらも戦士として積んできた優秀な実績が他者を威圧する。

今日は式典である事もあり、本来であれば背中に背負う魔導大剣は置いて来たのだ。そのお陰で小さな赤獅子の威圧感も三割減で他の騎士達と大差がなくなっているが、テレジアが国を出て以来、彼女の騎士団の中心的な役割として組織を支えたのはベヘナなのだ。その分、忠誠心も強いだけあって敬愛する主の夫に対する目も厳しい。

ベヘナがテレジアはベヘナが十二歳の時、騎士見習いとしてテレジアの侍従となった頃よりの仲だ。

貴族ではないものの、商家として成功した祖父のお陰もあり、騎士幼年学校に通い、首席で卒業した才媛として、次期戴冠家の騎士姫の侍従に推された時の天にも昇る気持ちは未だに覚えている。

未だに男社会の色を濃く残す騎士、軍の世界で女性が成功するための壁は多い。

しかし、騎士姫はその中であってもより一層強い光を放つ、一種のアイドルだった。

強さ、美しさ、貴賓、高潔さ、そのあり様に惹かれて騎士を目指した娘は多い。ベヘナもその一人で騎士になる事を最後まで反対していた父とは未だに口もきけていない位だ。

武力のあり方が騎士団から軍隊に移行し、物量の戦いとなった今、個の強さがどれ程の意味を持つのか分からない。軍における正式な騎士が少ない理由とて、本来はその少ない騎士の数で戦をしていた事に由来するのだ。

だが、その戦の中でも本当に強き者は光を放っているとベヘナは感じている。テレジアの侍従となり、親衛隊が組織されてからは側近の筆頭として数多の戦場を潜りぬけて来た経験がそう告げている。

（十二年だ、十二年も待った）

テレジア、リュロンは陥れた派閥が失脚した事で国に舞い戻る事が出来た訳だが、ベヘナは、そして親衛隊の隊員達も少なくない努

力と活動を行ってきた。戦争は終結しても各地の紛争がなくなる訳ではなく、象徴を失ったベヘナ達は世間の目と言う加護を失った事もあって、それらの鎮圧に駆り出されながらも情報を蓄積し、地道に諜報活動を続けた。

その努力が長い歳月を経てようやく実ったのだ。

十二年の歳月を隔てた再会はベヘナが生きて来た中でも最大級の喜びだった。感動のあまり言葉にならず、涙すらも流れず、ただ茫然と出迎えた主は姫と言うよりも女王と言うに相応しい威風堂々とした雰囲気だったが、時の人である彼女を配慮してあまり会う事が出来ない事も不満に思う事はなかった。

（だけど・・・・）

このテレジアの夫、オキツグとかいう者は得体が知れなかった。

なるほど、確かに腕は立つようである。親衛隊の中でも数少ない正式な騎士の称号を持つベヘナをもってしても勝ちを収めるのは難しいだろう。

だが、ただ強いだけで良いのであろうか。

テレジアが、自分よりも夫であるオキツグに重きを置いている事は随所から感じ取れた。第三近衛魔導騎士団にはベヘナ達もテレジアが復帰した事により所属する事になった部隊だ。第二までしか実質的に機能しておらず、飾り同然だった騎士団を彼女に与えて編成を好きにやらせると言う意味も分からないではない。

本来、副団長の役職はベヘナに任されるべきものだった。

（肩書にこだわるつもりはないけど・・・）

古くからの腹心ではなく、夫であるオキツグを重用すると言う事。

納得している訳ではないのだ。

「お疲れ」

屋敷への帰り道、黒塗りの車の中でオキツグがリュロンに言った。

「何がだ」
「さっきのあれ、結構大変なんだろ？」
暫く考える様に間を置いて、言われている事に気がついた。
「・・・べヘナの事か」
彼女だけではない。元親衛隊の事もであるが。
「第三近衛魔導騎士団は戴冠家であるエンデバルドのために設けられた様なものだ。慣例でもあるし、実際に第二近衛魔導騎士団は今の戴冠家ペンウッド家によって成り立っている。必要なシステムではあるが、その分騎士の都合をこちらで付けなければいけないと言う事も大変ではある」
本来は親族を中心に固めるのが慣例なのだが、そもそも親族が長きにわたる戦乱で亡くしてしまっている。
故に、べヘナが親衛隊をまとめ上げていてくれた事はこの上なくあり難いし、嬉しくもあったのだ。
「だが、な」
「問題でもあるのか？」
元々、リュロンの部下達は貴族の次男三男、商家の跡継ぎではない子供など、家を出て身をたてる以外に道を持たぬ子供ばかりが集められていた。戦乱末期で子供すらも戦場へ送り込まれる中で、リュロンは彼らの戦力的、精神的支柱だったのだ。
「貴族や商家であるが故に、剣導士として素質ある子供を軍に供出せよという命令には逆らえない。子供もそれを理解している。自分達が戦場から逃げれば家族が困った事になる事を・・・」
不安、憤懣、渦巻く感情をリュロンに対する忠誠心に転化して生き延びて来たのだ。
「士気の高さはマクヴェス一だろう、実際に戦死した者以外は全員招集に応じてくれたわけだし」
今日の会場に来ていない者達も、転属の届け出が受理され次第にこちらに向かう旨が伝えられた。
「だが、それは全てべヘナの仕業なのだ」

元親衛隊の中でも一番古くから付き合いがあるベヘナは、よく尽くしてくれるが行き過ぎるのが問題だった。
「まる反政府組織の草の根活動の様に一人一人説得していってな」
彼女としては自らの騎士姫に対する忠誠心の啓蒙活動のつもりだったのだろう。まったくリュロンに対する害意はなく、むしろその逆だったのだが、そのお陰でベヘナの様にキラキラした目でリュロンを仰ぐ狂信者どもが出来あがってしまった。
「通りで、か」
古くから所縁のある人物が話題に上ってこなかった訳をオキツグは悟った。どう話せばいいか分からない女なのだろう、ベヘナは。
「ああ、話して変な先入観を持たれても困る。一応はこれから仲間としてやっていって貰う訳であるし」
「大丈夫だ、問題ないよ」
「あいつには散々に苦労かけているが、それと同じくらい苦労をかけさせられている」
国を出る前、リュロンをお飾りのお遊戯、戦争ごっこと揶揄した騎士がいた。正式に騎士位階を持った者で、それなりに腕の立つ戦士として知られていた事もあり、リュロンも含めて悔しかったがどうにも出来なかった。下級貴族や庶子が多く集められた部隊と言う事で侮りも多く受けたし、そもそも身分の問題もあった。
だが、ベヘナは違った。
夜中にその騎士の屋敷に忍び込んで奇襲を敢行。警護と家人を全て眠らせて件の騎士を拉致し、姿を消した二人が現れたのは三日後の事だった。
げっそりとやせ衰え、拷問の後が随所にみられる騎士を引き摺りながらベヘナは自首した。
『私の主を侮辱すると言う事がどういう事か、分かってもらおうと思って』

特に後ろめたさを見せる事もなく、堂々とそう言い放ったのを良く覚えている。事情聴取にあたった憲兵達も殆ど怯えていて、ベヘナの実家の圧力もあってうやむやになってしまったのだ。

マクヴェスの民は十二年に及ぶ流浪の生活を終えたリュロンを歓待した訳だが、特にマスメディアや貴族すらもリュロンに好意的な態度を示している理由の一つにベヘナが挙げられる位だ。

誰だって死にたくない。相手はスイッチが入ったら最後、意思疎通すら成立しない怪物だ。しかも、剣導士としても超一流な上、同士を大勢抱えている。

「下手したら下位の十二貴族よりも国政に影響力を行使できる様な奴なんだ」

いかにも困った風に語るリュロンだったが、そこには手のかかる妹を語る様な親愛に満ちていた。

「まあ、仲良くやるさ」

「あんまり気に入られすぎても大変だぞ？

あいつは病的に一途だ」

「一途なんだろう？

だったら問題ないさ。お前がいるのだから」

オキツグとリュロンが乗るリムジンを王宮にある部屋の窓から見送る一人の男がいた。

「あれがオキツグ・クシナか」

ペンウッド卿、若き十二貴族の当主だった。

外は未だに明るかったが、部屋は暗かった。調度品や古い絵画に気を使っているらしい。

「不味いな」

何がとは言わなかった。誰も聞かない。その場には彼一人しかいないのだ。

「最悪の事態になる前に手を打たせてもらおうか」
懐から携帯電話を取り出すと電話をかける。表情の浮かばない、まるで昆虫の様に無機的に作業をこなす彼の姿を見る者は誰もいなかった。

第8話　霹靂

燦然と輝く太陽が大地を照りつける。
ヴェスラ国際闘技場はその公式性の高さから、国内外の様々なイベントに利用される事が多い。
十数年前まではひたすら血生臭い臭いしかしなかった場所であるが、今では国同士のスポーツの親善試合や各種式典に利用されたりと活用用途の幅の広い施設となっている。
しかし、今日この日のこの場所は違った。
闘技場としての本来の在り方。
円形のサッカースタジアムの様なそれは円の中心で戦う剣闘士達を怒号と歓声でもてはやしていた。
年に数度行われる、国内外の貴賓を集めた観賞会だ。世界中から腕に覚えのあるものを集めて、各国の要人をもてなす。国際会議期間中のレクリエーションの様なものだった。
（退屈だ・・・）
アルフレッド・ガロンは欠伸を噛み殺してその戦いをＶＩＰ様のボックス席から眺める。
ダークスーツにシャツの襟もとはスカーフを巻き、長い茶髪を後に撫でつけている壮年の紳士だった。肌も白く、装いも帝国の貴族の様であったが、彼は列記とした王国の民である。
アルフレッドは貴族ではないが、国でも一、二を争う程の商家として、それらが経営する企業、組織の代表としてこの席に座る事を許されている。
実はこのイベント運営もアルフレッドの家がこなしているのだが、仕掛け人としてはある程度流れが分かってしまっているだけに楽しむ要素が全くない。そもそも、銭金の計算は好きだが戦やそれの臭いがするものには興味がないのだ。
「ガロン殿」

ボックス席の入り口から声をかけられて振り向くと、そこには一人の巨漢の影があった。
「・・・おお、これはディオス殿」
ファルケス家の剣士、ディオスが儀礼的な軍服で身を整えて佇んでいた。
「これは、これはお久しぶりで・・・今日は観戦で？」
「そうだ。だが、父上は他の方々にご挨拶で忙しくてな。私もガロン殿の顔を見に行こうと考えた次第だ」
娯楽であると共に、社交の場でもあるのだ闘技場のもう一つの顔だ。
ファルケス家にも商品を降ろしていたり、何かと商売で関わりのあるアルフレッドはディオスとも顔見知りだった。
「ガロン殿はこの様な見世物はお嫌いかな？」
「ああ、その様に見えてしまいましたか」
変に取り繕わず、見せてしまった醜態に慌てるのは三流のする事だ。アルフレッドはいかにも恥ずかしそうに、しかし、上手に切り返した。
「元々、剣を握ったりと言った事は不得手で御座いますので・・・ディオス様の様に恵まれたものをお持ちであれば違ったのかもしれませんが、まあ、私には算盤をはじく指があればいいかと言う事で」
二人の男が笑う。
「それに娘が騎士をやっているもので、親としては気が気ではないのです」
本心だった。
先代の当主である父が鶴の一声で娘が騎士を目指す事を許してしまったがために、以来、口を聞く事すらままならない。
調べによるとそれなりに優秀な騎士として活躍しているらしいが、尚更心配でしょうがない。
結婚させれば落ち着くのではないかと儚い希望を持ちもした。実際に縁談の話も持ち上がった事もある。その相手の一人が眼の前に

いるディオスだった。
ディオスが何とも言い難い顔をしている。
その様子を見て思い出した。彼をこの闘技場で破ったのは自分の娘の上司、第三近衛魔導騎士団の副長だったはずだ。
内心で焦るが、それは表に出さない。声にも表情にも出さない。出した時に初めて侮辱になるのだ。それまではただの失敗、無神経で済む。
「・・・だが、ガロン殿の娘、ベヘナ殿は優秀な騎士として近衛では有名らしいぞ」
意図を組んだディオスが言った。ホッとしながらアルフレッドは会話を続ける。
「ええ、であるからこそ心配なのです。戦場という、私が助けてやれる事が出来ない領分で、いつか取り返しのつかない事になるのではないかと・・・」
オオオオオオオオオオオオオオッ
歓声に言葉をかき消される。
どうやら今日の優勝者が決まったらしく、伝統に則って王自ら勝者をたたえるべく闘技場に足を踏み入れる。
観客にとっては終幕の寂寥であり、アルフレッドにとっては待つだけの苦痛からの解放を意味する。
（これでようやく・・・）
しかし、次の瞬間に妙な事が起こった。
優勝者の剣闘士の男は王が歩み寄ってくるのに剣を収める事も跪く事もしない。その様子をいぶかしんでいると、魔術で強化された身体能力を使ってゲイル三世の後ろに回り込み、口に布をあてて眠らせる。
（！）
どこかで悲鳴が上がった。しかし、すぐさま剣闘士を取り押さえ

るべく動くはずの警備はやってこない。

ボフッ

凄まじい勢いの煙幕が何処からともなく会場を満たす。

「これは一体!?」

こちらの席まで煙が入って来た。

「ディオス殿」

辛うじて見える巨漢の姿は、この事態に少しも揺らぐ事はなった。

泰然とした態度で佇んでいる。

(なんだ?)

何かが違和感があった。

確かにディオスは武人だ。こう言った事態に冷静である事は頼もしく、褒められるべき姿である筈なのに、違和感が拭えない。

彼がにやりと笑う。

「ディ、ディオス殿?」

「ああ、やはり分かってしまうか」

男はやおら立ち上がると腰に下げていた儀礼用の魔導剣を抜き放つ。

「私に役者の真似事は無理らしい」

ディオスは暗い笑みを浮かべていた。

「一体何を!」

「静粛にしてもらおう」

傲然と言い放つ。

「貴様らには供物になってもらう。我々、国を憂う憂国騎士団の手によってな!」

「憂国騎士団?」

全てが突然だった。

各国からの貴賓が集まる闘技祭が襲撃を受け、警護にあたっていた人員に死傷者多数、しかもその下手人は国内系のテロ組織であると言う。

「主に旧体制、休戦前のマクヴェスを良しとする者達で構成された超保守派の過激派組織だ。逮捕しようにも貴族が絡んでいた事もあって捜査と逮捕は遅々としていて進んでいない」

オキツグは自分の疑問に答えていくリュロンを余所眼に辺りを見渡した。

エンデバルドの屋敷の一室であったが、その部屋には数十人に及ぶ蒼いサーコートの騎士達であふれ返っていた。

つい数時間前、ヴェスラ国際闘技場で闘技祭を観戦していた国内外の要人一行が拉致された。数十人に及ぶ人質を確保した一行には逃走を許したが、殆どの拉致された人物は近くに路上駐車されたまま放置されたトラックの中に放置されていた。

戻ってこなかった数少ない者達、国内の重要人物達だ。

現在、政府は事態の究明と各国に対する事情説明で火の車である。近衛の本営も取材陣が詰めかけて仕事にならないので、暫定的にエンデバルドの屋敷に陣を敷いたのだ。

「マクヴェスの人間だけは解放しなかったって事か？」

「ああ、憂国騎士団は現政権、つまり持ち回りの王政に対する反対派でもある。海外の重要人物に危害を加えて王権を失墜させるのが目的なのだろうが、それでは外交上で致命的な問題となりうるので拉致して直に解放したんだ。だが、自国の人間に対しては遠慮をする必要はない」

現在は待機状態だ。

神経を張り詰めさせたままというのも問題であるし、何かつまむものが欲しくなって台所に向かう途中、廊下の壁にもたれかかる小柄な人影を見つける。

ベヘナだった。

赤い髪を肩で切りそろえたその女性は、可愛らしくも軍人らしく厳しく引き締まった表情で虚空を見つめていた。
「不思議です」
ベヘナは唐突に言葉を発した。
「・・・拉致された者達の中には私の父も含まれていたのですが」
「ッ・・・そうか」
「家督は兄が継ぐ事になっていますし、家で一番発言力があるのは祖父、次いで私なので父が死んだと言うところで何の問題もないのですが、ないのですが・・・・」
ベヘナは感情の浮かばない表情と口調で言葉を紡いだ。
しかし、その平淡さには違和感があった。
「もう一度言葉をかわしたいという気持ちが湧いてきて・・・」
それっきり何も言わなくなってしまった。
オキツグには返す言葉がなかった。
仮に自分が同じ立場だったとして、しかし、自分は父を心配する事が出来るだろうか。
父からは失望の言葉と思いしか伝わってこなかったのだ。普通に親子の愛をはぐくめと言う方が無理だろう。
そんな自分に彼女の疑問に答える資格があるのだろうか。
分からなった。
「・・・それが普通なんじゃないか?」
だが、そのまま立ち去る事も出来ずに、短くそう言った。
ベヘナはこちらに眼を向けた。
「お前、父親を憎んでいるか?」
「・・・・いいえ」
「疎ましく思った事は?」
「若干ですが」
「家族を愛しているか?」
「・・・分かりません」
ベヘナの眼には困惑があった。何故、この様な事を聞いてくるの

であろうか。
オキツグは、そんなベヘナの様子を見て悟った。
（こいつの家族、普通に娘を大事に思っているんじゃないか）
大抵の場合、家族を愛していると言う者は愛される事に飢えているか、愛する事に飢えている者である事が多い。
愛の需要と供給がつり合っておらず、そのしわ寄せが出来るからだ。
しかし、ベヘナにその様子はない。
ベヘナの家族は、普通に娘として接して育てて来たのだろう。
もっとも、普通に育てたにしてはやや特殊な性質をしている様だが。
「お前が何に不思議を感じているのか知らんが、そんなもの、助けた後で考えればいいだろう」
「・・・ですが、憂国騎士団が彼らを生かしておく理由がありません」
しかし、オキツグにはある程度の確信があった。
「生きているよ。多分だけど、勘だけど」
「勘ですか」
それに、殺すのが目的なのならば拉致する必要はなかっただろう。
ベヘナは想いを言葉に出して気がすんだのか、締まらない会話であるにも関わらずいつもの厳しい表情に戻っていた。
「そろそろ戻るか」
「はい」
基本的に素直な女である。見た目はまるっきり少女であるが。
待機のために設けた大広間のドアの前まで来ると、何か言い争いをしている様な声が聞こえた。
部屋に入ると、そこには蒼い外套に紛れて一組の男女の姿がある。
マリアとギーズだった。
ギーズは困った様な表情で一歩引き、マリアは怒った様子でリュロンと向かい合う。

部屋にやってきたオキツグに、皆が何ともいい難い、微妙な表情で出迎えた。
義兄の隣までやってくると、オキツグは問うた。
「どうしたんだ」
「・・・憂国騎士団の本営が見つかったんだよ」
ヴェスラから北に暫く進んだところに、既に見捨てられた城塞跡があるという。まるで森の様に岸壁が行く道を阻む天然の城塞は昨今の軍事的拠点には不適格で、廃棄されて随分たつらしいが、憂国騎士団はそこにいるらしい。
「明らかな待ち伏せ、挑発だね」
「そうなのか？」
「うん、見つけてくれって言わんばかりだったらしい」
加えて、想定を遥かに上回る数の剣導士がそこに詰めているらしい。
「普通にクーデターを企てても上手くいったかもしれないくらい」
「そうか、じゃあ」
「君達も出撃する事になるね」
マクヴェスの近衛は王国最強の剣たるとよしとしている。この様に国家の威信が関わる一大事に自分達が動員されない訳がないだろう。
「じゃあ、そろそろ準備でもするか？」
オキツグの言葉にリュロンを除く全てが妙な表情をする。
「？」
「ああ、そうしよう」
リュロンは向きあっていた姉から視線を外して部屋の外に出ようとする。
「テレジア！」
マリアが声を響かせる。明確な怒りと苛立ちが込められたその声にオキツグは思わず首を竦ませた。
いつも溌剌とした彼女には似合わない鬼気迫る声だった。

「あなたは、まだそんな事をいっているの！？」
「・・・しかし、近衛は王国の最後の剣です。この様な事から逃げるわけにはいきません」
どうやらリュロンが城塞に向かう事に反対しているらしい。
妹を心配する姉という事か。
「でも、死ぬかもしれないのよ！」
悲痛な声を上げるマリアだったが、リュロンは表情を強張らせながらも強情だった。
しかし、オキツグはマリアが何をそこまで心配するのか分からなかった。
（こいつと組んでから死ぬような思いで戦うなんてしょっちゅうだったし）
しかも、今回は戦いは仲間が多くいるのだ。二人きりの孤軍奮闘の毎日とは違う。
「心配ないんじゃないか？
俺たちだっているし」
思った様に言葉を出すオキツグに、マリアはキッと睨む。
「そう言う事じゃないのよ！」
「ですが姉上、現実的に私が戦列を抜ける訳にはいきません」
「まだそんな事を・・・・」
苦しげに呻くマリア。
「一体何をそんなに心配しているんだ？」
純粋な疑問を口にするが、それに答える者はいなかった。ギーズに眼を向けても困った様な表情で視線をそらし、ベヘナは不思議そうな顔をしている。
「心配する事なんて何もない」
断じる様にリュロンが言う。
「心配するわよっ、命を大切にして！」
「ですが・・・」
「ですがじゃないわよ！」

マリアの瞳には涙まで浮かんでいた。
声と感情を絞り出す様に言葉を紡ぐ。
「貴方だけの命じゃないのよっ！？
お腹の新しい命の事まで考えてあげて！！」

第8話　霹靂（後書き）

11／8　誤字修正

第9話　縁

「なんて言ったんだ？」
その言葉は随分と空虚に響いた。
オキツグは言葉を紡ぎながら、不思議な点に気がついた。
部屋の中にいる全員の視線が自分に向かっているのだ。
「な、なんだよ」
たじろぎながら返すと、マリアが涙を拭いてやや落ち着いた様子で言った。
「やっぱ、男の人って駄目ね」
あきれ顔だった。
他の隊員達も同じように呆れ顔していたり、同情的な表情をしていたり、何か哀れな者を見る様な色があった。
しかし、不思議と冷たくはない。
「三か月だそうよ」
「え、あんたが？」
「違うわよ」
リュロンを指し、その腹部に視線をやる。
しかし、傍からは全く変わりがない様に思えた。恐らくリュロンが大柄なせいだろう。相対的に目立たないのだ。
「まじか・・・」
心当たりはおおいにあった。考えてみれば夫婦なのだ。心当たりがない方がおかしい。
リュロンと視線が交わる。
窺う様な、何かを探す様な視線だった。
（俺の子、だよな）
まさか言葉に出して聞く訳にはいかない。恐らく、それを口にしたら最後だろう。主に人生的な意味で。
オキツグは自分が動揺しているのを自覚した。

闘技場で東京の光景を見た時だってこれほどまで動揺しなかった。
（あれは、時空震の偶発的作用だって聞いたじゃないか）
ごく稀に起きる現象らしい。
そもそも、オキツグ自身だって事故、災害の様な形でこの世界にやって来たのだ。それが例え《白燐丸》の恣意性が加わっていたとは言ってもだ。
《玉璽》は既に腰にはさしていない。エンデバルドの金庫に預けてしまった。故に腰元には無銘の魔導刀が一振りあるのみだが、一応はリュロンが意識不明になった際にヴェルーナ家に無理を言って最高級の素材で造らせた逸品である。これを機会に命名するのもありかもしれない。
「おい」
思考を遊ばせていたオキツグはリュロンに声をかけられて現実に帰る。所詮は動揺を鎮めるための現実逃避だったのだが、その一瞬でリュロンの視線は冷たいものに変わっていた。
（不味い）
何か致命的なミスを犯したのは分かった。その証拠にマリアが睨むようにこちらを見ている。
「・・・どのみち任務を放りだす訳にはいきません。私は出撃します」
「テレジア！」
なるほど、引きとめる口実にリュロンの妊娠を使うつもりだったのか。
せめて、オキツグがリュロンに対して情を感じさせる様な答え方を出来たのだったら別だったのだろうが、リュロンの声の色は頑なになり始めていた。
しかし、現実に恋人などから「てへ、出来ちゃった」と言われてクールな受け答えが出来る男はどれほどいるだろうか。せいぜい「え、あ、ああ、うん、そう」くらいが関の山であろう。
などと再び現実逃避している内に、リュロンはドアを開け放って

外に出てしまう。
「ちょっと、あなた！」
マリアに怒鳴られてオキツグはびくりと肩を震わせる。怖かった。
「つったってないで追いかけなさいよ！」
「は、はい！」
鞭をうたれた馬の様にオキツグはリュロンを追いかけ始めた。
扉の向こうに顔を出せば、既にリュロンは廊下の突き当たりを曲がった後だった。
かなり速い。殆ど走っているペースだ。
「待てよ！」
聞こえているだろうに、その声に止まる気配は全くない。
かなり必死で追いかけて、しかし距離は小さくならない。ついには走りだすが、前方のリュロンも駆け出してしまう。
「ちょっと、いい加減に・・・・」
屋敷の外に通じる扉を潜ったところで、リュロンの女性にしては高い背丈が眼に入って歩みを止める。
「走る事ないだろ」
背を向けたままで何も答えない。
まわり込んで顔を除くと、眼を瞑り口を真一文字に結んで修行僧の様な顔をしたリュロンが立っていた。
「・・・・」
「・・・・」
言葉どころか、視線すらも交わらない。
どうすればいいか分からず途方に暮れて、しかし、いつまでもそうしている訳にはいかないのでオキツグは言った。
「子供、出来たのか」
コクリ、と一度頷いた。
「そうか・・・・・」
そこで会話が途切れてしまう。そもそもオキツグはこの手の経験はリュロンを除いて皆無に等しい。しかも、今までこの世界で生き

て来た時間の殆どを戦うか、戦うための準備に費やしてきた男だ。
上手い対応など期待するだけ無駄である。
「さっきはすまん」
なので素直に謝る事にした。
「ちょっと、ていうか大分動揺してたんだ。考えてみれば結婚したんだからそう言う事もあるんだよな」
かれこれ十年の付き合いだ。格好の悪い部分まで余すことなく見せてしまっている相手に取り繕っても無駄だろう。
「言いたい事も沢山あるけど、まずこれだけは言っておくさ。
おめでとう」
「・・・・・」
「それと、ありがとう」
リュロンは眼を開いてこちらを見た。
オキツグは訥々と語り始めた。
「俺、正直言って自信がなかったんだよ。親に愛情注がれて育った方じゃないし、奥さんと子供大事にして、ちゃんと生きていけるのかってずっと不安だった」
子供が出来る事だってあるのは分かっていた。むしろ、家族という関係自体に飢えていたオキツグにとって、それは望むべきものだった筈だ。
だが、不安に思ってしまった。夫婦であれば相互の協力によって困難に立ち向かえるかもしれないが、子供に対する責任は完全に親たる自分に帰属する。
(最終学歴が小卒の俺に人の親なんて務まるのか)
「・・・・だって」
「何だって?」
呻く様に言ったリュロン言葉が聞こえなかった。
「私だって不安だったんだ!」

感情の迸るままにリュロンは言った。眼を見開き、オキツグの肩を掴み、否、すがる様に言った。

「お腹に子供がいるって医者から聞いた時、驚いたが天にも昇る気持だったのだ」

だが、時間が経つと共に不安が鎌首をもたげてきた。

自分に問う。母親になる覚悟は出来ているか？

問題ない様に思う。

経済的余裕は？

それこそ愚問だ。

周囲の理解は？

姉夫婦はわが事の様に喜んでくれるだろう。

しかし、夫は？

父となるべき男はどうだ？

分からなかった。

剣導士としての信頼をたてに、強引に結婚を迫った様なものだ。

例えその選択がお互いにとって最善だったとしても、それが負目である事には変わりがない。

期待と危惧、焦燥、希望、切望、願望、現実。

ありとあらゆる要素があり、そこから答えを導き出す事はあまりにも難しく、辛い作業だった。

幸せな未来を想像するのはいい。そこには希望に満ちている。

だが、答えが拒絶であったのならば・・・・

そこで思考の脚が竦んでしまう。

憂国騎士団という名のテロリストが起こした事件で、自分にも出撃命令が下るだろうと予想は出来た。もちろん、事情を説明して断るつもりだった。まだ、とうのオキツグに告げていない事だけが気がかりだったが、そうするべきだと自然に思えた。

戦に全てをかけていた頃のリュロンでは考えられない判断だ。

しかし、姉と些細な事で口論になり、それがきっかけで自分の状

態が隊員達に知れ渡ってしまい、そこで気がついた。
望まずしてオキツグに自分の妊娠が知られてしまう事に。
まだ覚悟が出来てなかった。
何故、いきなり自分も出撃するなどと駄々をこねたのか。それは、そういう形でしかオキツグに対して真実を告げ、真意を問う事出来なかったからだ。
（私は卑怯者だ）

何か痛みに耐える様に佇むリュロンに、どう語りかけようか迷い、しかし気のきいた言葉など自分の口から出る事はないと諦めて、その肩を抱き寄せた。
「・・・・」
抵抗はなかった。
思えばリュロンは大柄な女だ。武骨という印象は全くない。むしろ、常の女よりも魅力に満ちた点は遥かに多いだろう。身長だってオキツグよりも高い。
戦いやすい様にショートにしていた髪も肩まで伸びてしまっている。伸ばしているのだ。自分の意思で、戦士である事よりも他の立場を望んでいる。
だが、このとき抱き寄せたリュロンは随分小さく感じた。
「俺は」
腕の中で震えた。
「俺・・・・」
だが、この期に及んでまだ言葉が出てこない。
（さすが俺）
我ながら呆れた。
「・・・生んでくれるのか」
再び腕の中で震えた。

オキツグだって嬉しくないはずないのだ。家庭を持つ覚悟だってとっくにしている。

「・・・俺でいいのかよ」

「・・・ああ」

短く答え、その背を丸めてオキツグの胸元に顔を埋めた。

遅れて胸元にじんわり熱い感覚が降りてくる。

リュロンの頭を撫でながら、晴れた空を見上げる。

屋敷の中から足音が聞こえる。マリア達のものだろう。

オキツグは自分がリュロンに対して聞いた言葉、

『・・・俺でいいのかよ』

これはある意味プロポーズだったのではないかと思う。

今までは同じ戦士としての信頼はありこそすれ、夫婦としてのそれでは無かった様に思う。しかし、この女は自分の立ち位置に悩んでしまったのだろう。認めてもらいたい価値と認められている価値の差がジレンマを産んでしまった。

今日、この日、初めてリュロンとオキツグは夫婦になった。

第１０話　愛国者共

帝都から暫く気らに進んだところにレンテグラ城塞という見捨てられた城がある。

古代のマクヴェスにおいて、魔術があまり一般的でなかった頃に構築されたもの、峻厳な山と砂漠が目立つマクヴェスにしては珍しい広大な熱帯林が天然の城壁となって、かつては鉄壁と謳われた国の要であったが、魔術による身体強化、機動戦が主流の現代においてはむしろ、城は兵を閉じ込めて後衛系剣導士による集中砲火の牢としてしまう事から、少数の警備兵を除いて誰もいない寂しい場所だった。

来客といえば観光客か、考古学者くらいしかいない、岩ばかりで構成されたその城は常ではありえない程活気に満ちていた。

魔術による身体能力の強化と技術の躍進により隆盛を取り戻したフルプレートの甲冑を着こんだ騎士たちや、現代においては最も主流となっている防刃コートに軽鎧を組み合わせた剣導士、その他様々な装いをした戦士達だった。

数は三百程いるだろうか。

大隊規模であるが、全員が剣導士であり、また歴戦を匂わせる兵ばかりである事を考えれば、これはかなりの大部隊である。小国の都市であれば半日で壊滅出来るであろう戦力だ。

統一感がある様でない一団だったが、一様にして垣間見えるのは緊張と殺気だった。まるで見えない敵の襲撃に備えているかのような、そんな雰囲気。

そして彼らを一番高いところから見下ろす男達がいた。

「中々の陣容ですな」

「ああ、これ以上は望めないね」

語りかけるディオスに、答えるペンウッド卿だった。

「そうだ、義手の調子はどうだ？」

「は、問題ありませぬ」
手袋に包まれた右手を開いたり握ったりすると、ディオスは満足そうに言った。
現代の戦いは目に見えない程の距離からの攻撃を可能にする。高く、目立つ位置に建つ事は無駄以前に無謀なのだが、二人はそれが行われない確信があった。
「国外の来客まで巻き込んだ大規模なテロ活動、諸外国に対する言い訳をするためにも首謀者は確保した上で公開処刑に持ち込みたいと王国は考えるはずだ」
加えてペンウッド卿は現王の息子の一人でもある。情の入る余地を与えない様に徹底的に確実に殺さなければ、処刑しなければマクヴェスの信用は地に落ちるだろう。
王国は独立自治の権利を失い、最悪の場合は列強の属国になる事すらありうるのだ。
ディオスはにやりと笑う。
「しかし、我々はマクヴェスのために死ぬつもりは全くない。未だに戦後の混乱を引き摺る西方のこの地に新たな国家を創るのです」
変わりつつあるマクヴェスに対して不満を持つ民は多い。戦士、兵士の間では特に凄まじい。戦争がある事を前提に組織されてしまっているからだ。
終戦に際して職を失った者や、新たな生活に馴染めずに社会からはみ出してしまった者、それらが徒党を成して千年にわたり栄華を築く帝国を成す。
「『千年帝国計画』、プロジェクト名を指してミレニアム、それが我々の名だ」
一般に知られる憂国騎士団というのは言わば隠れ蓑にあたる。反政府組織として政府批判を繰り返しながらも、その裏では更に大規模な反逆を企図する。
淡々と言葉を紡ぐペンウッド卿の眼には何も浮かばない。いつも通り、にこやかな貴族らしい表情をしているが、眼からは何を考えて

いるか窺えない。
まるで終りのない洞穴を見つめているかのようだった。
「我々の栄華がここから始まるのですな」
やや興奮した様子で言うと、ディオスは反政府組織、独立国家建国部隊の幹部として部下に指示を与えるべくその場を後にした。
しばらく呆ける様に虚空を眺めるペンウッド卿は何かを思いついた様に自嘲的な笑いを上げると皮肉気に言った。
「栄華、裏切り者の我々に今更名誉など・・・・」
ディオスはオキツグ・クシナとの一戦以来戦士としての名誉を失ってしまった。実際のところはそれ程失墜していると言う訳でもないのだが、彼自身はそう考えてしまっている。
だから、ミレニアムの計画に飛び付いた。
彼の父親であるファルケス家の当主ごと巻き込んで計画された大規模な計画だ。ディオスがこの場にいるのも、ある意味順当と言える。
「そこのところどう思われますか」
物見やぐらにはもう一人の人物が縛られて転がされていた。猿ぐつわを噛まされているその男を話せるようにしてやると、強い瞳で睨み返された。
「そう睨まないで頂きたいな、ガロン殿」
壮年の紳士は綺麗に撫でつけられていた茶髪も乱れ、ところどころに土ぼこりがついている有様だったが、その瞳は強く意思を感じさせるものだった。
「売国奴め、失望しましたぞペンウッド卿！」
見た目はペンウッド自身と同じく王国の民らしからぬ風貌であるのに、このあるうレッドという商人は意外と愛国家である事が知られていた。
「我々が何故この様な事をしているかご存知かな？」
「何を今更、国家に反逆を企てた上で自らの国を打ち立てようなどと・・・マクヴェスの幾星霜に渡る歴史に対する冒涜ですぞ！」

まるで聞く耳もたないアルフレッドにうんざりとした表情をするペンウッド卿。
面倒なので話題を切り替える事にした。
「時に、ガロン殿には第三近衛魔導騎士団、彼の騎士姫とその夫が率いる軍勢に与する娘がおられるとか」
その瞬間、アルフレッドの顔に強い動揺が浮かぶ。
ペンウッド卿が考えるに、アルフレッド・ガロンは頭のいい男だった。胆力もあるし判断力も優れている。こうして硬い態度を示している事も彼のメンタリティを保つために意図して行っている事だろう。商人としてこの上なく優秀で、表向きは勘当しているとされる娘に対してはこの上なく情の深い父親であるというのが彼を調べたペンウッド卿の評価だった。
体力の限界、精神力の限界と共に、愛娘の名がこの様な場所で出されて動揺してしまったのだ。
「何故、娘の事を・・・」
「ははははは」
ペンウッド卿は笑った。最初は微笑む様に。しかし、段々と興が乗って来て、大笑いする。
「くっくっく、くっはっはっはっはっはっはっは・・・・・」
突然笑い始める美麗な男の姿に、アルフレッドは顔を蒼くした。
「まさか、娘に何か・・・」
想像が想像を呼び、言葉を用いる事はなくても的確な脅しを加える事が出来る。
しかし
「自意識過剰という奴だ」
ペンウッド卿は一切の迷いなく断じた。
「確かにあなたの娘は王国でも指折りの剣導士であり、優秀な軍人であり、一部からはうとまれている策略家でもある。だが、その女のためにここまで大規模な事をする必要もないし、あなたをここに連れて来たのは、言わばついでだ」

王であるゲイル三世すらも地下の牢屋に収容しているのだ。ここでアルフレッドに語りかけるのはただの余興以外の何物でもない。

「我々、王国貴族と貴方達外様の元移民では住む世界、思想の根本が違うのだ。調子に乗っていると今言った脅しが本当の事になるぞ。娘が可愛いのであれば余計な事をしないほうがいい」

それは警告だった。古き貴族から新しき民への。

「お前、調子に乗りすぎなんだよ」

這いつくばるタケルの頭上から声が降りる。

タケルはスケッチブックを抱える様に膝をつき、自分を見下ろす同級生達を見渡した。

「ちょっと絵が上手いくらいで、態度がでけえんだよ」

中心の男子と取り巻き立ち数人がにやにやした様子でタケルを見下ろしていた。皆が愉快と優越に満ちた雰囲気だった。

タケルは小柄だった。線も細く、色も白い。休み時間も外でクラスメイトと遊ぶ事もなく、教室の席で本など読んでる。

その彼が今日の全校朝会で、描いた絵が優秀作として賞を取った事を称えられ、今に至る。

侮りと妬み、それらが等分に混ざった無邪気な悪意がそこにあった。

「おい、これよこせよ」

タケルが抱えていたスケッチブックに手が伸びる。

引き寄せられる力の強さに思わず手を話しそうになるが、その中の一枚にいつか見た、空に浮かぶ幻想的な光景を映したものが含まれている事を思い出す。

「だ、駄目だ！」

抱きつく様に抱え込んで、手を伸ばした少年はたたらを踏んだ。

呆気にとられた後、その行為を侮りと感じて顔を赤くする。

「てめぇ！」
肩が殴られる。
体重の軽いタケルは簡単に地面に転がったが、スケッチブックだけは放さなかった。
頭に血が上った少年達は更にタケルを痛めつけようとする。
「何やってるの！！」
怒声が響いた。少女のものではない、成熟した女性の張り上げる声に肩を震わせ、音源を見るとそこには高い背を堂々と伸ばして威圧する担任の女性教師の姿があった。
蜘蛛の子を散らす様に男子生徒達が逃げていく。後に残っていたのは這いつくばったタケルだけだった。
「大丈夫、真山君っ！」
「蓮杖先生」
担任に抱え起こされる。
「どうしたの、何があったの？」
しかし、タケルは何も答えなかった。
人は大切なものを共有することで分かり合う事が出来る。タケルを虐めていた男子生徒達にとって、それは外で遊ぶ事だったり、好きなゲームであったりするのだろう。しかし、タケルにもまた大切なものがあるのだ。
それを彼らは認めようとはしないだろう。
（そもそも、土台が無理な話だったんだ）
「どこか痛いところない？」
心配そうに聞いてくる担任の言葉を上の空に頷き返しながら、タケルはいつか見た、空に浮かぶ異なる世界の光景を思い出していた。
まだ色は入れていない。早く完成させてしまうのはもったいない気がした。
だが、早く描かなければ記憶が劣化してしまう。

（もう一度見たいな）
見ればイメージが固まる様な気がした。
「もう一度」
「え、何？」
「なんだもない」
ただただ考えるのはそればかりだ。自分をこの世界から消し去って、異なる世界にその身を躍らせてみたかった。
（行ってみたいな）
タケルはこの世界に倦んでいた。
自分が心のよりどころとしているものを誰も認めてくれない。
両親でさえもだ。
この世界から消えてしまいたい。
その思いが強く高まった時、何かにつられる様にタケルは頭上を見上げた。
そこには小さな光があった。
「あれは・・・」
ふらりふらりと見上げながら歩くタケルを心配そうに見守る担任教師。
まるでセンターフライを取りに行く野球選手の様だ。そんな事を考えていたら、その光源が徐々に降りてくるのが分かった。
ゆっくり、ゆっくりと降りて来るそれに手を伸ばす。伸ばしたタケルに魅かれるかのようにその拳位の光も距離を小さくしてきた。
そして触れる。

カァッ

突如として光が強いものとなり、辺りを埋め尽くす。
「え、何？」
その様子を茫然と眺めるタケルの耳に困惑した様な担任の声が聞こえ、それがやがて遠ざかって行く。

辺りは白く染まり、その明度が徐々に低くなっていく。
完全な暗闇だ。
暫くそんな状態が続いただろうか。
暗い闇の中、タケルは一歩前に進んだ。

ザリッ

地面の砂を踏む音にハッとして辺りを見渡すと、そこは森の中だった。
「ここは？」
見知らぬ場所だった。学校では断じてない。
しかも、森といっても日本にある様な可愛げのあるものではない。
鬱蒼と草木が生い茂り、樹齢千年は超えるだろう大樹が連なっている。まるでアマゾンの様な森だった。
空は暗く、星が輝いている様子を見るに既に夜の様だった。
「何で・・・」
その声は空虚に響いた。
困惑、しかし焦りはない。意識が現実に追いついてないのだ。
ただ茫然と、森を歩く。
ここはどこであろうか。
手には持っていた筈のスケッチブックはなく、どうやら学校で落としてしまったらしい。辺りにはそれらしい物はなかった。
「僕、どうして・・・」

バシュッ

そんな音がして、音のした方向を振り返ろうとして、肩に激痛を感じて蹲った。そこにた小さな穴があき、血が流れ出ている。
「ッ・・・・」
そして夜空に大きな影が舞うと、タケルを地面に無理やり引き倒

して取り押さえた。
「貴様、王国軍の者か」
頭上から質量の圧迫と共に落ちる男の声は切迫していて、それでいて殺伐を感じさせるものだった。
首筋には刃物があてられている。
「う・・・・」
恐怖に呻いたと同時に辺り影が降り、それは数人の男達だった。
「どうした」
「侵入者だ」
「王国軍か？」
「分からん」
勝手に話を進める男達に抗議の声を上げる事も出来ない。苦痛と恐怖がタケルの口を塞いだのだ。
「とりあえず、城の地下牢におしこめておこう。いざという時の人質として役に立つかも知れんと総裁が仰せだった」
するとタケルはしめ落とされ、即座に気を失った。
乱暴に肩に担ぎあげる。
気絶したタケルを肩に担いだ男達は、自分達が年端もいかない子供に無体な真似をしている事になんの疑問も口もはさまず、ただ無機質で冷酷さに満ちたままその場を後にした。

第１１話　十字軍

「イグニッション」
魔導剣における音声認証式の起動鍵語を唱えると、オキツグの手に握られた魔導刀は淡く輝き、その力を発揮し始める。
鬱蒼と生い茂る亜熱帯の森の中、蒼い外套を翻して泰然と草木を踏みわけ歩く。

オオオオオオオオオオッ

眼の前に迫りくる敵どもが雄叫びをあげて正面から、あるいは背後から、頭上から、側面から襲いかかる。いちいち数など数えない。基本的に戦いは三人を超えれば後は『いっぱい』でかたがつくのだ。
「氷閻刀・剣山」
技を呟く癖は未だに治らない。しかし、魔導刀に灯っていた燐光は強くなり、突如として周囲に鋭い氷の剣山を精製する。一つ一つが三メートルは確実に超えるであろうそれらに迫りくる敵が貫かれて絶命する。
「・・・・四人か、意外に少ないな」
剣山に貫かれたのは四人の戦士達だった。しかし、感触ではもっといた筈だ。辺りを見渡すと、辛うじて剣山を避けられた者、かすめて軽傷、重傷を負った者が四、五人でオキツグを囲んでいた。
その眼は脅威と恐怖と憤激と絶望に満ちている。
今のたった一瞬で四人死んだ。祖国である日本では確実に死刑になる人数だ。戦場である事を除いても、平和の国からきら自分がここまで戦乱に適応できる事を不思議に思う。
（いや、違うか）
考えてみれば、日本ほど戦争に満ちた歴史を持つ島国は他にないだろう。西洋諸国にしても、途中で住む人間、国が変わったり、文

化、文明、風土の変遷をたどっている。
その精神性を保持したまま、長きにわたる戦に満ちた歴史を歩んできたのは日本くらいだろう。
よく日本人は平和ボケしていると言われるが、オキツグからしてみればそれは違う。
戦争ボケなのだ。
平和すぎて、何をしていいか分からない。するべき事も、したい事も、全てが戦争から生まれて来た国、それが日本だ。
戦国期、幕末しかり、第二次大戦しかり。日本の戦士は皆が戦いにクレイジーだった。多かれ少なかれ、皆がそうだったのだ。
こうして戦争を体験し、人殺しをしてみるとその事が良く分かる。
自分は日本人なのだ。
（おおっと）
思考が遊んでいた。再び現実に意識を戻すと、先程と同じように生き残りたちがオキツグを睨んでいる。
「何で」
男達の一人が呻く。
「何で貴様みたいな化物がいるんだ！」
男達はこの国でも精鋭といって過言でない実力者だった。それが一瞬で半数を虐殺され、残りの行方も明らかだ。
憂国騎士団改め、独立を企図するテロ組織、千年帝国ミレニアムに集められた、それを夢見た戦士達はそれだけで大国と渡り合う事が出来る程の戦力である。マクヴェス王国だけではない。世界中から選りすぐりの戦争狂い共が集められたのだ。
それが、一部であるが一瞬でかき消えたのだ。
一人の男によって。
「化物とは失礼な」
オキツグは至って自然に憮然とした。
「俺は立派な人間さ。女房だっているし、今度は子供も生まれるらしい」

そして魔導刀を振りかざす。
「だから子供の祖国となるマクヴェスに悪さをしてもらっては困るんだよ」

氷閻刀・波濤

オキツグの周りに生えていた氷の剣山が外向きに爆発、辺りの全てを吹き飛ばす。

ゴフッ！

森も含めて半径五十メートル程が更地になった。跡形も残らなかった。
「やりすぎたか」
「いえ、重畳です」
更地の向こう、森の狭間から姿を現した小柄な女が魔術で強化した体を走らせてオキツグの前に立つ。
「戦争とはただの戦いではありません。正面衝突においてはなるべく迅速に、果敢に、そして圧倒的に戦い、敵の戦意を削がなければ勝っても意味がないのです」
ベヘナ・ガロンだった。
現在、オキツグはリュロンに代わりに王陛下の剣として投入された第三近衛魔導騎士団の団長代行として戦場に立っている。ベヘナは副団長の代行、団長補佐、つまりは副官である。
因みに戦場にいる近衛は第三騎士団だけだ。残りは王都の守りを固めている訳ではなく、誠に不敬な事に第一、第二は反乱の首謀者であるペンウッド卿についたのだ。
そして指揮命令系統上は王のみが命令を降せるという近衛であるオキツグ達は宰相である文官貴族と軍より派遣された鎮圧隊の司令官の了承を得たうえで戦場で剣を振っている。

しかし、戦場で戦っているのはオキツグ達だけだ。
既にミレニアムは軍事力のみであれば大国に匹敵する。もはやマクヴェスのみではかたずける事ができず、しかし、他国の手を借りるわけにはいかないという状況の中で、オキツグ達はその強大な敵に立ち向かう事を選択した。
オキツグ自身の意思もある。第九位《氷王》としての実力を十全に活かせば打破できない状況ではないと、自惚れではなく考えていたし、それ以上に第三騎士団の面々も戦う事に賛成した。
総勢で五十人程のの部隊であるが、彼らは鉄の結束を誇る最強の戦闘集団だ。副官であるベヘナが長きにわたりそういう風に調整した。
敵は討たなければならない。討つのは自分達の役割である。ただそれだけで彼らには十分なのだ。
何より、彼らが本当に忠誠を誓っているのはオキツグではなく妻のリュロンである。彼女が王太子を妊娠した以上、国が傾く事はリュロンの立場を悪くする事に繋がるので、敵に対する憎悪と戦意の桁が敵や味方と比べても圧倒的に違う。
誰よりも、何よりも殺意と狂気に満ちていた。
「それにしても凄いですね」
「何がだ？」
「貴方の戦いです。流石は第九位《氷王》という事ですか」
戦に際して、第三騎士団の面々には自らの正体を明かしている。殆ど舐められっぱなしだったオキツグだが、強さという一点に関しては持つべきものを持っているので、とりあえず指揮官としての面目は保たれている。
ベヘナに続いて他の騎士達もオキツグの元に駆け寄ってくる。全てが吹き飛ばされた光景に息をのみ、中心に王の様に佇むオキツグに畏怖の視線を向ける。
指揮官でありながら、オキツグは魁として先頭をきった。これは彼らからの試験でもある。本当に自分の命を預けるに足る戦士であ

るか、何より劣勢を覆す事が出来る程の騎士であるか、それが暗黙の了解として、状況打破のために手を取り合う事を目的として行われた儀式。

（どうやら合格らしいな）

オキツグとしても、そして彼らとしてもマクヴェスとリュロンは大事なのだ。しかし、その両者が手を取り合うためには時間が少なかった。暫定的に手を組むためにオキツグは自らの正体を明かしたうえで戦い、その証を示した訳だが、とりあえずは認めてもらえたらしい。

騎士の一人、大柄な男が歩み出て跪く。そして一本の魔導剣を捧げる。

「それは？」

「宰相閣下より賜ってまいりました、国賊討伐の信認の証、貴方を近衛の最上位指揮官と認める剣になります」

その魔導剣は赤い柄革に黒い鞘、銀があしらわれた鍔の装飾の儀礼的な剣だった。その芸術品としての価値は言うに及ばず、その剣に込められた意味が無言の圧力を発している様な気がする。

確か有事の際の宰相は副王に次ぐ優先順位とされる。現在のゲイル三世の下に副王は配置されていないから、実質的に国家のトップである。

それでも禁裏の領域と呼ばれる近衛にまで手を出してくるのはある意味大胆で果断と言える判断だった。

打てる手は全て打つという姿勢が見える。

（しかし・・・・）

このタイミングでそれを持ち出す彼らの露骨さ、率直さには内心で苦笑する。

今、この場でハッキリと試していた事をオキツグに告げ、自分たちにとっても認める証としてこの剣を提出したのだ。

受取り、鞘から抜き放つ。

銀色に輝く剣身には薔薇の彫刻が掘られていた。見れば鍔の飾り

も同じだった。
「王国に伝わる秘宝級の魔導剣の一振り、煌剣ソラスです」
辺りは森の湿気で霧に包まれ、加えて夕焼けである。暗く、光も乏しかったが、その輝きに満ちた一振りの剣は確かな存在感を発している。
煌剣ソラスを鞘に納める。
「謹んで承った」
ニヤリと笑ってオキツグは言った。好戦的で、圧倒的な、まるで悪魔の様な笑みに騎士達も同じような笑いで返す。
「我らが国、我らが姫、そして我らが敵のために諸君には命をかけてもらう」
自然と口から言葉がまろび出た。
「彼らは我らに牙をむき、鉄火をもって降す事を試みている。そして我々は戦場にやって来た。剣を携え、殺し、殺され、降し、降され、ただそれだけのためにだ。それが全てだ」
言葉をきった。
「戦争だ、戦争の時間だ、戦争をするんだ」
それがここでは全てだからだ。
戦力比にして六倍以上の敵に挑む悲壮感は彼らにはない。死ぬ覚悟も、恐れはもっとない。その必要がない事を彼らは感じていた。
何故なら
「俺たちこそが狩る側だからだ」

第11話　十字軍（後書き）

11／8　誤字修正

第１２話　銀龍

ゴフッ！

夕焼けの空に、遠くで何かが弾ける音がした。

見捨てられた城塞、レンテグラ城に詰めていた戦士達は一斉に意識を引きつけられた。

その場所からは何が起こったかを詳しく見る事は出来なかったが、戦士達はおぼろげに察していた。

人が、空気が、森が、何より命が一瞬で、後からもなく、容赦なく弾けた音だ。

その音はまるで徒競走の始まりの鐘の様に戦士達の警戒を一気に上限に引き上げる。

何かがやってくる。途轍もない、どうしようもない、怪物がやってくる合図。

戦いのための戦いが、準備が、兵站が、武器が、修練が、そして命が何もかも台無しになる。

その始まりだった。

「来る」

城塞の門を警備していた一人が呟いた。

城の中の者も、外の者も、ある一点を見つめていた。森と城の狭間、木々の隙間からそれがやってくるのを待っていた。

誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

手が震えて、足が震える。

「来た！」

その声で戦士達が一斉に剣を抜き放ち、魔術を行使して肉体を強化する。後衛系の魔術が使える者たちは雷で、炎で、空気の塊で、ありとあらゆる方法である一点を一斉に攻撃した。

・・・・・・

音が音にならない、圧倒的な衝撃がその場所に炸裂した。
殆ど衝動的な攻撃だった。
「やったか!?」
誰に語るともなしに声が聞こえる。
しかし、圧迫感は消えない。発した言葉が裏切られる事を彼らは分かっていた。

ザリッ

土を踏む音が聞こえる。
その音は森の向こうから徐々に近いものとなっていた。まるでグリーンマイルだ。処刑の宣告に訪れる看守の足音。
受刑者である戦士たちにとっては絶望の象徴。
そして木々の影から現れたのは一人の男だった。
長身痩躯で頭は雪の様に白い。近衛の証である蒼い外套に軽鎧、腰にはこの国の戦士にしては珍しい魔導刀に儀礼的な魔導剣を佩いていた。
男の蒼い瞳が辺りを見渡す。
「う・・・」
まるで火龍に睨まれたかのような錯覚を彼らは覚える。
「う、うお、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
戦士の一人が己を鼓舞するように雄叫びをあげ、何者かがそれに呼応し、そして大音声が森に響いた時、肉体強化をしていた前衛系剣導士達が一斉に剣を構えて突っ込んだ。

オオオオオオオオオオッ

その切先が男の眼前まで迫った瞬間、戦士達は勝利を確信したが、突如として現れた氷壁がそれを悉く阻んだ。
「なんだ！？」
魔導剣は氷の壁に取り込まれ、その氷は成長して剣導士達も取り込んでしまった。
「ぐ、おおおおお」
呻く男達だったが、氷に飲み込まれて完全に氷漬けにされると物言わぬ彫像となった。
先程とはかわり、静寂が空間を満たす。
白髪の男が何事か呟くと、氷の塊達は淡く光り始める。
そしてその光は徐々に強まり、それが臨界に達した時・・・

ゴォンッ

何かが打ち砕かれる様な吹き飛ばされる様な音が炸裂して衝撃波となる。まるで壁が迫りくるように圧搾された空気が戦士たちを津波の如く飲み込み、巻き込み、その命を削り取っていく。
城塞の外にいたものは全滅だった。
阻む者もなく、男は悠然とレンテグラ城塞の門をくぐる。
その眼は蒼く光り、紅い夕焼けの色と混ざって幻想的な紫を創りだしている。
「《氷王》だ」
誰かが声を震わせ、恐怖と絶望に心を折られながら言った。
「第九位《氷王》、人ならざる人、悪魔の使徒が何故ここにいる！？」
一人の男に対する大軍は、圧倒的有利、数の戦力があるにも関わらず、男の周りに結界があるかのように一歩たりとも進む事が出来ない。
いや、《氷王》程の強者にとって、間合いとはすなわち結界である。絶対守護領域であり、絶対殺戮領域の王者の領地に徒に踏む込

む事は武勇でも何でもなく、それは蛮勇、無謀、自殺行為だった。

「何をやっているか！」

怒声が響き渡る。

白銀の甲冑を纏った戦士が《氷王》を囲む人垣の間から怒声を上げた。

「今こそ奴を打倒し、天下に武名を轟かせる好機であるぞ！」

ディオスだった。

集団の中でも筆頭戦士であるディオスは戦場にあって、生き生きとした様子で辺りを鼓舞する。

「いかに《氷王》とて真正面から我らと戦い、全てを降す事など不可能！」

徐々にディオスの自信に満ちた声で戦意を取り戻していく。

その様子に《氷王》、オキツグはにやりと笑う。

「お前、俺に勝つつもりなのか？」

「何？」

「たかがこの程度で、お前に至っては闘技場で赤っ恥をかかされたばかりだと言うのによくやる」

淡々とした言葉には侮蔑の色はないが、それ故に言いようの知れない圧力を感じさせるものだった。

「・・・」

一瞬、ディオスは侮られた事と過去の恥辱に対して怒りに顔を赤くしたが、直に気を取り直して冷静になる。

「？」

オキツグは不思議に思った。

そこまでよく知る訳ではないが、ディオスはこう言った軽侮には寛容な心を持たない。まるでバベルの如き自尊心を持つ男なのだ。

挑発すれば怒りに我を忘れて突撃命令を出しそうなものだが、

そうでなければ他に策があると考えるのが妥当か。

何より大物ぶった似合わない笑みは、野卑なにやけ顔になっている。腹に一物抱えている人間の顔だ。

「貴様の様な死神は、所詮は修羅の巷の一夜の悪夢、畢竟偶然！その仮初の力のメッキを剥がしてやろう！」

ディオスは胸元から一振りの短剣を取り出した。

小振りで変哲もない凡庸な拵えだったが、何か不吉な気配を感じる。

「おおおおおおおおおおおおおおっ！」

短剣を逆手に構えると、己の心臓に突き立てた。

「！」

オキツグを含めてその場の全員が度肝を抜かれる。

「一体何を」

心臓を自ら貫き即死したディオスは大地に斃れ伏した。

そしてその遺体が蠢き始める。

レンテグラ城塞の内向きに設けられた窓の一つからペンウッド卿はその戦いを見守っていた。

《氷王》が攻め入ってくる事はわかっていた。むしろ、オキツグが《氷王》である事、それ以前、《王位》の剣導士を独自に追っていた情報網からその詳細を把握していたのだ。

先程のディオスとの会話が思い起こされる。

『まさか、奴が、忌々しいあの男が《氷王》であると・・・・』

愕然とするディオス。

『《氷王》と言えば、氷凍系術式を得意とする後衛系剣導士らしいではないか』

呟く様に言ったペンウッド卿の言葉にディオスは顔を蒼くし、赤くした。

『奴は私との決闘では刀しか使わなかった』
《王位》であると公表していないのだから、世間を騒がせないためという理由もあるのであろうが、それは彼にとってディオスは一番得意な戦い方を封じられた状態でもなお、手心を加えるだけの余裕があったと言う事だ。生粋の武人でプライドの高いディオスは侮られた恥辱に顔を赤くする。
『おのれ・・・』
呻くような、地獄の怨嗟の声だった。
しかし、その男がここに攻めてくると言う。手加減された状態でも勝つことがかなわなかったその男がここにやってくると言う。
レンテグラ城塞に詰めている三百人の凄腕の剣導士達は一国の軍隊にも匹敵する力を持っているが、《王位》と呼ばれる、剣導士を格付けする等級制度の覇者達、数万に及ぶ剣導士の中でも一桁にその名を連ねる本物の化物達が牙をむけば、個の城の防御も確実に喰い破られるだろう。
そして、この城でも卓越した個の戦力として名高いディオスは再びオキツグと会いまみえる事になる。
しかし、それは敗北が決定した戦いだ。
惨めに敗残する事を強いられる恐怖がディオスを支配する。
敗北が原因で失った右腕の義手をさすった。
『・・・勝利する方法が無い訳ではない』
ペンウッド卿の言葉にハッとした様にその顔を見る。
そして、部屋に備え付けられていた執務机の引き出しを開け、そこから布に包まれた一振りの短剣を取り出した。
『それは？』
『禁忌秘宝の一つ、《龍の血脈》と呼ばれる呪具だ』
その言葉にディオスは眼を向いた。
その短剣の名に覚えがあったからだ。
正しく呪い。
その剣身は龍の牙からなっており、それを心臓に受けると刃に残

留した龍の魔力がまるで呪いの如く全身に広がって龍の強靭な体を手に入れる事が出来ると言う。

しかし、その殆どが死ぬまで周囲に嵐の如く死と破壊を撒き散らし、魔力が切れるまで狂い続けるという。その非人道的な効果から国際的に使用が禁止されている兵器だ。

『本当に存在していたのですか・・・』

『ああ、伝手があって手に入れる事が出来たのだよ』

そしてそれをディオスに渡す。

『これを君に渡そう』

『・・・』

『もし、君にその覚悟があって、《氷王》に挑む事を望むのであれば』

ディオスは短剣を握りしめると挨拶もそこそこにその場を後にした。

ディオスは蠢いた。

否、既にそれはディオスだったものになりかけている。

「これは・・・」

オキツグは呻く様に呟いた。

それは巨大な鱗の塊だった。

「龍・・・か・・・」

龍、白銀の鱗に巨大な翼、そして瞳孔が盾に開いた黄金の瞳。

体長は五十メートル近い。城塞の敷地内の殆どを龍の体が占め、その巨大かつ急速な膨張の波にさらわれて押しつぶされたミレニアムの兵士達も多くいた。

くっはっは、漲るぞ

その声は天から降りて来た。

これが、これが龍の力か、素晴らしい。この力があれば貴様ですら屠る事が出来るだろう。

ディオスだった。

《龍の血脈》により龍化したディオスは、自らをよりしろに神に等し力を持つ龍を顕現させたのだ。

(しかもこれはただの龍じゃないな)

その白銀の龍の姿を見たオキツグは、今まで流れの剣導士として狩ってきたそれらとは遥かに違う存在である事を看破する。火竜も強力かつ強靭な存在ではあったが、発する圧力の桁が違う。

どうだ、銀龍の力を感じるのだろう?

古き世では神として崇められた存在だそうだ。

そこらの火竜とは内包する力の桁が違うのだよ

愉悦に満ちたディオスの顔が眼に浮かぶようだった。

「そうか」

銀色の龍という姿から、オキツグはその力の根源を悟った。

「十三使徒と呼ばれる、かつての創世の神の一柱、銀龍ネレトーか」

遺骸、聖骸とすら呼ばれるその魔力の残滓を使って、力を利用しようとする試みが行われていたという愚行はオキツグも耳にはさんでいた。考えてみれば、ディオスがこの力を発現した切っ掛けと思われる銀の短剣、《龍の血脈》についても聞いた事がある。

そうだ、この前の様はいかない

しかし、その力は莫大であるが故に重大な欠点がある事も知って

いる。
「正気か？」
　オキツグはその非人道的な兵器を使用してまで勝つ事に拘ったディオスの心が分からなかった。

正気、正気？
何がだ
それよりもこの前の決闘の、続きを
この前？
貴様、貴様・・・・

　ディオスの言葉が判然としないものとなって来た。
（始まったか）
　《龍の血脈》は莫大な力を与える代わりに、その宿主となった人格を完膚なきまでに破壊する。特に理性を念入りに壊してしまう。本来であれば人の身では行使できい程の力だ。それを振えるようにするために龍の姿に変異する訳だが、完全体となった《龍の血脈》の宿主はその獣性と体の変化についていく事が出来ずに心が崩壊してしまう。
　かつて、《龍の血脈》を開発した国は被験者の暴走が原因で滅んだと聞いている。
　ディオスもまた銀龍ネレトーの力に耐えきる事が出来ずに、その心を壊され始めていた。
　見れば、人としての心を残していた眼から徐々に理性の光が消え、獣性が強いものとなっていく。
「うわあああああああああああああっ」
　その異様な光景に恐慌をきたした戦士の一人がレンテグラの塀をよじ登り外に逃げようとした。

ぐ、ううう、うう・・・

既に人語すら介さないディオスは塀の頂点に差しかかった戦士に鎌首をもたげ、大きく口を開けた。
「ううう、うわあああっ！」
叫ぼうとして、しかし、その叫び声は途中でかき消される。大きく口を開けた龍がそのまま喰らいつき、その牙が並ぶ顎に噛み砕かれて一瞬で絶命したからだ。
その凄惨な様子に思考が硬直するミレニアムの戦士達。
ある者は龍に剣を向けた。
またある者はその場から逃げだそうとした。
残りは何も考える事が出来ず、そこに棒立ちになり蠢く龍に踏みつぶされた。

オオオオオオオオオオオッ

それは既に咆哮だった。獣の咆哮。人ではない。強さを欲した戦士は、この夜明けにとうとう強き存在、本物の化物に成り下がったのだ。
「・・・これは、少し不味いか」
かつての巨人プロメテウスと戦った時以上の脅威を感じる。
オキツグは気を引き締め、魔道刀を握る手に力を入れた。

第１２話　銀龍（後書き）

章の区分けを変えました。もしかしたらサブタイトルと題名を改修するかも

第１３話　蜘蛛の糸

突如として城塞の中に現れた白銀の龍に、城に詰めていたミレニアムの面々は半狂乱だった。
「何だあれは！？」
明らかに異質、異様、異貌、ただのはぐれた竜がレンテグラ城塞に現れたというには余りにも荘厳で圧迫感のある。ある種の波動すら感じる。
「神だ」
龍神信仰の地域から出て来た傭兵の一人が膝をついて拝み始めた。
正しく神の威容だったのかもしれない。
「馬鹿野郎、そんなことしてる場合じゃっ！」
その傭兵の肩を叩こうとして、叩いた肩はそのまま床に落ちた。
「へっ」
上半身と下半身を綺麗に分ける様に切断されていたのだ。
そして、その後を追う様に伸ばした自分の右腕も床に落ちる。
「ぐが、ぎゃあああああああああああああああああっ！」
しかし、その叫び声すら長くは続かない。首もその後を追ったからだ。
その様子に周りにいたミレニアムの戦士達も騒然とするが、次々と体が切断され、首が落ちていく。
そして後には血の海と屍の山が出来あがっていた。
廊下の曲がり角の影から一人の女が歩いてくる。
「・・・・」
その女は積み重なる屍に驚いた様子もなく、ただ無機質な瞳で戦果を確認するように眼を向けている。
ベヘナだった。
燃え盛る様な赤髪を靡かせ、蒼い外套とのコントラストが美しい女戦士。

べヘナは工業においても良く利用される、電磁系術式を扱う事が出来る。それ自体は珍しい事ではない。研究も比較的進んでいる事もあって、使える者が少ない後衛系魔術であっても、割と使い手の多い系統の一つである。

しかし

ヒュンッ

べヘナに纏わりつく風を切る音の正体こそ、その特殊性の証である。

その右手に握った魔導剣はまるで算盤の様な数珠状になっており、刃のある部分にはワイヤーが巻き付けられたロールが幾つも連なっている。

魔導剣《蜘蛛の糸》

名匠と謳われる刀工の手によって打たれた逸品だが、その使用方法が分からず実家の蔵に死蔵されていたものを独自に研究して戦闘に利用している。

電磁系術式による金属の精密操作、及び電熱線による切断がべヘナの奥の手だ。

電撃戦による奇襲においては無類の強さを発揮する。これで屠った目ざわりな貴族の数は知れない。

「ふう」

外では冗談みたいな怪物とオキツグが戦っている。怪物の相手は怪物に任せる事にして自分達はその隙に城塞内の制圧を優先する事にしたのだ。

「副長」

呼びかける声に後を振り向くと、そこには同じ近衛の戦闘服を着た巨漢の姿がある。オキツグに煌剣ソラスを渡した男だった。

「ゴドン曹長、どうかしましたか？」

「城塞の中は全て制圧した」

「賊の大将は？」
「いない、逃げたらしい」
考え込む様にベヘナは視線を外に向ける。
（このタイミングで逃げる？）
タイミングの良さ、危機察知能力が高いのか、それとも貴族お得意の逃げの一手か。
どちらにせよ、自分たちの仕事は城塞の制圧である。先にこちらを優先させてもらおう。
「一応、本隊に伝令を、責任を押し付けられても困るので」
「了解、それと人質も地下牢に確認した」
「それは重畳です」
命は皆無事らしい。一応はベヘナの父親も人質として捉えられていたので、彼の命も助かった事になる。
手が放せないオキツグに代わって彼らへの事情説明、及び誘導を自分が担うべきなのだろうが、騎士として仕事をしている自分の姿を見せるのは何故か抵抗があった。
（・・・・・）
とてもいい言い訳を見つけた。
「彼らの誘導はゴドン曹長に任せます」
「・・・副長は？」
窓の外に眼を向ける。
「あれを手伝ってきます」
そこには巨大な龍を相手に舞うオキツグの姿があった。

風が唸る。
銀龍ネレト―の爪が城塞の塀をなぎ倒し、その上に立っていたオキツグはネレト―の頭上に跳躍してその一撃をやり過ごす、
オキツグの姿を確認したネレト―は口を開けて噛みつこうとする。

が

「氷閻刀・雪風」

オキツグが魔導刀を空中で振うと同時に極寒の冷風がネレト―を苛み、更には風の勢いで間合いを切る。

しかし、すぐさま暴風の様に爪、牙の連撃が繰り出されてくる。駆け引き、間合いなどまるで無視の獣性の暴発、強靭な生命力と質量がカウンター攻撃を許さない。

ネレトーが巨体を宙に跳ねさせ、オキツグにボディプレスを仕掛けてくる。

「氷閻刀・剣山」

地面に魔導刀を突き立てると、そこを中心として巨大な氷山が天に向かって無数にそびえ立つ。

本来であれば皮を裂き、肉を貫き、骨を砕く一撃であったが、それを腹に喰らったネレト―は反対方向に吹き飛ばされるだけに留まった。

本当にそれだけだった。

「氷閻刀・波濤」

氷山を吹き飛ばして衝撃波を繰り出す技だったが、それだけではあまり意味がないだろう。オキツグは魔術が発動する刹那、近くにあった死んだ戦士の魔導剣を数本拾うと爆風に乗せて投げナイフに見立てる。

ゴッ

その突風にネレト―は四肢に力を入れて耐える。しかし、そこへ追撃の一手が差し込む。

風に乗っていた魔導剣の内一振りがネレト―の右の眼球に突き刺さったのだ。他は全部外れるか鱗に阻まれてしまったが、急所への一撃は無尽の生命力をもつとされる龍に苦悶の声を上げさせる。

ギュオオオオオオオオオオッ

右の眼窩から血を流して苦しむネレト―に、オキツグは心の中で喝采を上げる。

「よし、今のうちに」

追い打ちをかけようと脚に力を入れた瞬間、本能の警鐘を感じて急制動をかける。

オオオオオオオオオオッ

咆哮するネレト―の右目から、突き刺さった魔導剣が少しではあるが動いていた。

（暴れて抜けそうになってるのか、いや）

違った。少しずつせり出してきている。そして刃は完全に抜けて地面に落ち、血に濡れた眼は煙を上げている。

再生しているのだ。

やがておさまった煙の下からは何事もなかったかのように無事な眼球が現れる。

そして、痛みにより怒ったネレト―は激しく前足を振りあげてオキツグを爪で切り裂き、質量で押しつぶそうと躍起になる。

「これは確かに国が一つ潰れる訳ですね」

龍の猛攻を必死に飛び跳ねながら避けるオキツグに、後方から涼やかな声が響いた。

「助太刀に参りました」

べへナだった。

しかし、オキツグは怪訝な顔をする。

助けに来てくれた事よりも、

そもそも、こんな状況で冷静である事よりも、

全てにおいても優先して疑問に思うべき事があった。

「・・・お前、何で空飛んでんだ？」

べヘナは脚を動かす事もせず、地面に脚をつく事すらせずにまるで幽霊の様にオキツグの後をついてきていた。
するとべヘナは虚空に手を伸ばして指で何かを弾く。

ビィィィィンッ

まるで張りつめた針金の様な音だった。
掲げた魔導剣は円柱の形でワイヤーが巻き付けられていた。
「電磁系術式でワイヤーを」
「・・・・なるほど」
確かに眼を凝らせば、まるで蜘蛛の巣の様に城中に張り巡らされているのが見えた。
「あの龍は馬鹿なので気がつかないでしょうが」

ギュオオオオオオオオオオオオオッ

まるで侮辱に怒り狂ったかのように爪を振りあげてくる。
すんでのところでその一撃をかわし、巻き起こった土埃に乗じて二人は城塞の瓦礫の影に隠れた。
「埒があかない」
「ならば思う様に埒をあけましょう」
強い調子の声に惹かれる様にオキツグはべヘナを見た。
「でも、どうやってだ？
無尽の生命力に強靭な肉体、攻めるところが無いくらいだ」
「でも、全てがそうとは言えないのでは？」
脳？
心臓？
しかし、例え再生が可能だとしても脳であれば再生に伴い記憶の欠落など多いな障害を伴うだろう。しかし、今の本能のみ暴れ回っている様な敵にまで効果があるのかどうか。

「いえ、《龍の血脈》を使用した戦士の顔は？」
「見た、ディオスとかいう男だった」
国を代表する戦士が裏切り敵に着いた事を既に聞いてはいたが、禁呪にまで手を出した事実にやや眼を向くベヘナ。
「その際に短剣を見ましたか？」
「ああ、見た」
突き立てられ、そして今の状態になるまでの全てだ。
「銀龍ネレトーの無尽の生命力、すなわち魔力は心臓から精製されていると聞きます」
「って事は心臓を破壊すればいいのか？」
ベヘナは首を横に振った。
「破壊しても直に再生してしまうでしょう。破壊するのは今の形質に至った核、《龍の血脈》はまだ彼の内臓に残っているはずです」
「それを破壊すれば奴は斃せるんだな？」
再び首を横に振る。
「あくまでも《龍の血脈》は体組織の設計図、本来であれば自分の細胞を分裂させてＤＮＡの統一化が図られているのに対して、あの場合は《龍の血脈》に保存されている遺伝情報を上書きしている状態です。教科書が突然消えて無くなってしまえば・・・」
傷を負っても回復する事は出来ない。そもそも、今の巨体を維持できなくなり、肉塊と化すだろう。
斃す事は出来ない。しかし、自滅を誘う事は出来る。
「なんて厄介な相手だよ」
しかし、その弱点は分厚い鱗と筋肉に阻まれている。
「せめて動きさえ止められればいいのですが」
ベヘナの扱う電磁系術式の派生たる電熱ワイヤー魔術には時間をかければどんなものでも貫く事が出来る技があると言う。
「本来は工業利用が目的の技術ですから」
しかし、動きも巨体に似合わず俊敏だ。
「動きを止めればいいのか？」

ベヘナにオキツグを振り向いた。
「出来るのですか？」
「止めるだけならたぶんな」
かつて、巨人プロメテウスを破ったあの技ならば可能かもしれない。あの時は電子レンジに閉じ込める様な、荷流電子を操り爆破したのだが、それでは奥深くに挟まる無機物の短剣まで破壊できるかどうか不明だ。
「初めての共同作業ですね？」
ベヘナの言葉にオキツグは吹いた。
「おい、お前、その言い方はちょっと」
艶めいた言葉なのにベヘナの声音はとことん冷淡だ。
「浮気になっちゃいますものね」
いつもこうして共に闘うのはリュロンだった。しかし、会って日が浅いベヘナとの共同戦線だったが、会話も戦闘も、それに対する考え方も不思議な程波長が合う。
リュロンとは積み重ねた年月がそうさせたが、ベヘナとは生まれ持った何かが会う様な気がしたのだ。
（ああ、不味いな）
なんだかそれだけでベヘナに魅かれそうになってしまう。この世界に来て十年近い月日が経った。文化、風土、そして戦争と、日本には無かったものだらけの生活の中で、自然と同調できる人間は皆無だった。
いつだってオキツグは自分から適応して、相手に、環境に合わせる側だったのだ。
しかし、何故かベヘナとはそれが自然と成り立ってしまう。
最も、向こうはどう思っているか分からないが。
（何でだろう）
だが、この世界においては変わり者の部類入るオキツグと波長があってしまうベヘナもまた相当な変わり者であると言えるだろう。
傍から見れば変人同士がなれ合っているようにしか見えない。

「どうかしましたか？」
顔を覗きこまれて慌てる。どうにも緊張感に欠けているようである。
「いや、何でもない。さっさと済ませて帰ろう」
「ええ、そうしましょう」
オキツグは魔導刀を握り、ベヘナは異形の魔導剣《蜘蛛の糸》を肩に担いで暴れ回る銀龍ネレトーに向かって走りだした。

第１３話　蜘蛛の糸（後書き）

サブタイトルと章を改修中。
その内に題名も帰ると思うのあしからず。
後、ディオスの腕に関する矛盾点を修正。

第１４話　王の系譜

オオオオオオオオオオオオオオオオッ

龍が吼える。

まるでそれ自体が攻撃かの様な凄まじい咆哮が衝撃となって周囲に叩きつけられる。

「くそ、ますます激しくなってるな」

前方でそう呻きながら走るオキツグを見ながら、ベヘナは若白髪の上司を追いかけた。

二人が走っているのは空中である。もともとワイヤーに吊られて移動しているベヘナに加えて、ベヘナが周囲に展開している蜘蛛の巣をオキツグが自分の足場として利用している結果だ。

（・・・ますます冗談みたいな人ですね）

偏執的なアスレチックと化しているそれは、一本一本が人体どころか戦車の装甲すら切断せしめるキレ味である。恐らく、オキツグが足元に纏わりつかせている氷の塊でそれを防いでいるのだろうが、一歩間違えれば戦う前にバラバラ死体だ。普通の神経ではそれを足場にしようとは思わない。

だが、三次元的な逃走を可能としているお陰で銀龍ネレトーの攻撃を避けるのにもお互い余裕が出始めている。

ギュパッ

近くを銀龍の爪が撫でる。張り巡らせていたワイヤーの数本がもっていかれるが、即座に蜘蛛の巣を再生する。

「うおっ」

突如として足場を失ったオキツグが脚を滑らせた。

（しまった！）

下にも電熱線のワイヤーが幾重にも張りめぐらせている。ただ落ちるだけでひき肉になれる状況だ。

ベヘナはその瞬間、焦ると同時にオキツグの死も覚悟した。

だが、次の瞬間に起こった出来事に眼を見張る。

（え？）

「よっと」

頭から落ちていたオキツグは刀を振りまわして体勢を整えると、目ぼしい足場と見定めたワイヤー目がけて、周囲のワイヤーを蹴りながら着地。脚を撓ませて力を溜めると跳躍し、即座にベヘナの隣まで戻って来た。

「悪い、ドジ踏んだ」

「・・・いえ」

並外れた体術だった。

勇猛かつ強靭な戦士が多いとされるマクヴェス王国においても同じ事が出来るのは数えるほどしかいないだろう。それも、体術に専念した前衛系剣導士に限った話だ。

これ程の技量を持ちながら後衛系魔術まで使いこなす者は見た事がない。

考えてみればベヘナは誰かと一緒に戦うのは初めてだったかもしれない。

軍属だったため、指揮はするし、剣を取って敵に立ち向かう事もあるが、周りはベヘナの全力についていく事が出来ず、巻き込んで殺してしまう事すらあった。

ベヘナの戦いはいつも一人だったのだ。

しかし、今は違う。戦士として全力を振い、尚且つお互いの不足を補い合える仲間がいるのだ。

充実しているのを感じた。

口唇が上がり、思わず笑みをつくる。

（楽しい）

縦横無尽の二人の動きに対応しきれないネレト―の動きが一瞬淀

む。
「今だ！」
オキツグが周囲の足場を巧みに蹴りながら宙をかける。まるで空を飛んでいるかのようだった。
「氷閻刀・疾風怒濤！」
最初に風が巻き起こり、それに包まれたネレト―に霜がつく。それは銀の鱗の悉くを覆い始め、最後には氷塊となって全てを覆っていく。
そしてそれは巨大な氷柱と化した。
凄まじい大魔術だった。
これ程の龍を行動不能にする力は世界中を探しても数えるほどしか見つけられないだろう。
（これが第九位《氷王》の力・・・・）
主の夫という事もあって探りは入れてなかった。腕が経つ事は感じていたが、まさか《氷王》であるとは思いもよらなかった。
ディオスとの決闘も得意の氷凍系魔術を封じて戦ったのだろう。
ベヘナも電熱線ワイヤーを使った戦闘術を軍には申告していない。汚れ仕事に使うのだから当然だ。
意図的に実力を偽っている事といい、自分とオキツグの共通点はあまりにも多かった。
彼が《氷王》であると打ち明けてからの短い時間の間に調べた、ダリオンライトの国営放送でのインタビュー映像が思い出される。
確かに彼だったが、当時は信憑性が薄いと言う事で直に廃れてしまった。
「おい、頼む」
オキツグの声でベヘナは意識を現実に戻した。
頷くと、氷柱の前に着地して魔導剣《蜘蛛の糸》のワイヤーを全て回収、切先を氷柱の中のネレト―に向ける。
ピシッ

数本のワイヤーが氷に突き刺さるが、ベヘナは顔を顰めた。
「・・・すいません、硬すぎてワイヤーが通りません。限定的に強度を下げる事って出来ますか？」
「ああ、すぐやる」
オキツグが魔導刀の切先が向けられると、途端にワイヤーが勢いよく氷を掘削して突き進んでいく。
こんな事初めてだった。
そして、数本のワイヤーはネレト―の胸部に辿り着くと、数本のそれらは先を一か所に集中して、勢い良く回転、線状のドリルで鱗を削り始める。

ジュオオオオオオオオオオオオオオオオッ

電熱線の熱と、ワイヤーで二人とドリルの切先までの氷が勢いよく掘削、溶解されて冷たいしぶきを二人に振りかける。
「うべっ」
呻くオキツグだったが、ベヘナは瞬きすらせずに手元の《蜘蛛の糸》に集中する。
ワイヤーが造った氷の隧道は人一人が通れる程の太さだった。そして、ネレト―の鱗を破り、筋肉を掘削し始めると氷の中の龍も苦悶の声をあげる。隧道からしぶくのが水ではなく血になった。
「・・・」
オキツグはその血を避けようともしないベヘナに倣って、全身に血を浴びた。蒼い外套が一気に赤紫に染まる。
そしてとうとう心臓に達する。
「「あった」」
二人同時に呟いた。
龍の巨大な心臓に突き刺さる小さな杭、短剣、《龍の血脈》は確かにそこにあった。

オオオオオオオオオオオオオオッ

ネレト―が最後の抵抗を試みる。

ビキッ

そして氷柱に亀裂が入ってしまった。

そうしている間にもネレト―の再生は始まっている。

「不味い！」

呻くベヘナの横を風が抜ける。

「俺が行く！」

オキツグだった。

血と氷と水で滑る足場を転びながらも一気に駆け上がり。再生して殆ど穴が塞がりかけているネレト―の体内に手を突き刺す。

「おおおおおおおおおおおおっ！！」

探り、そして一気に引き抜いた。

ズゾッ

そんな音がベヘナの耳元にも届く。

そして、オキツグの血まみれの手の先には一振りの短剣が握られていた。

ピシッ

何かが弾ける音が聞こえて、次の瞬間、ネレト―は抵抗も含めて心臓の鼓動まで一気に止まった。

そして氷の中でサラサラと砂の様に崩れていく。巨大な氷の空洞の中には血を噴き出して斃れるディオスの亡骸があった。

オキツグが血と氷と水に脚を取られて氷の隧道を一気に滑り降りる。地面に投げ出され、盛大に背中を打つと呻きながら立ち上がった。

「ったく、しまらない終わり方だな」

そうして立ち上がるオキツグの姿を見て、ベヘナは驚く。

（血が・・・）

全身に血を浴びていたオキツグは、ただ水に濡れているだけで血の後は一切なくなっていたのだ。確認すると自分もそうだった。

氷の隧道も水が溶け落ちるのみだ。

後には何も残らない。愚か者の末路の身があるだけだった。

「・・・・」

「・・・・」

二人はその様子に静かに黙祷を捧げた。

「とすると現場保存が必要だな」

オキツグはそう呟くと魔導刀の切先を龍の形をした空洞がある氷柱に向けた。

僅かに燐光が刀に灯り、それが氷柱に伝播していく。

「これで三日は大丈夫なはずだ」

氷がではない。内部のディオスの遺体がである。

暫く、茫然と佇んでいたかもしれない。

あまりにも濃密で、苛烈な戦いだった。

「・・・行くか」

ベヘナはまるで余韻に浸るが如く眼を閉じていると、オキツグの声に眼を開け、頷いた。

戦闘の余波で爆撃にあったかのようになっている瓦礫の大地を踏みしめながら、仲間を探していると、割と無事な建物が多い方向から一人の男が駆け寄って来た。

ゴドン曹長だった。

少し慌てた様子のゴドン曹長にベヘナは眉を寄せる。ゴドンは冷静沈着な性格だったはずだ。僅かではあるが、焦燥を見せていると

言う事は・・・・
「トラブルか」
オキツグが言った。
すぐそこまできていたゴドンは二人に敬礼する。
「避難、及び救助は殆ど完遂した」
そして彼の視線は巨大な氷柱に向く。
「そちらも上首尾だったようで」
焦れたベヘナはゴドンに先を促した。
「それで、どうしたのだ。何かあったのだろう?」
「・・・人質となっていた国内の要人達の、確認は済んだ。だが、一人だけどうにも素性の知れない子供がいる」
「子供?」
調べでは子供は拉致されていな筈だった。
「名前と出身地は聞いたのだろう?」
「ああ」
そしてオキツグは続く言葉に衝撃を受けた様に肩を震わせる。
「タケル・マヤマ、ニッポンと言うところから来たという話だ」

第１４話　王の系譜（後書き）

１１／８　誤字修正

第15話　黒星

「少年、大丈夫か」
「・・・・・はい」
蒼い外套を着た男に語りかけられたタケルは呟く様に返事をした。
レンテグラ城塞の一室にタケルは押し込められていた。
押し込めてという表現は適切ではないかもしれない。少なくとも、無体な扱いは受けていない。彼らの責任者という男が向かっているので待っていて欲しいと言われたのだ。
タケルは酷い状態だった。
肩には風穴が開いており、最低限の止血しかされていなかったし、与えられた食事もろくなものではない。
少なくとも、部屋の方は最低限は清潔に保たれている。応接セットと執務机を見るに高官を対象とした執務室として設計されたらしいが、タケルはというと服は破れ、汚れ、やつれ、疲れ切っていた。
ミレニアムの戦士達に気絶させられ、気がついたら地下の牢に閉じ込められていた。暫くして他の牢にも人が入れられていたが、その頃には体力気力ともに尽きかけていて交流を図る事は出来なかった。
「腹が減っているだろう」
そう言ってタケルを助けた男達の一人が差し出したのは軍の保存食だった。甘さと塩気と油分が人を運動させる上で最低限のものを補充させる、お世辞にも美味しそうなものでは無かったが、タケルは受け取った瞬間にかぶりついた。
涙が出る程に美味しく感じた。
半ばまで食べて礼を言うのを忘れていた事を思い出して頭を下げると、男は笑って手を振った。
コン、コン

丁寧に扉がノックされる。暫くして開けられた扉から顔を出したのは若い男と女だった。
「失礼するよ」
白髪頭の男の方がそう言うとタケルの対面に座った。
赤髪の女がそれに倣う。
最初から部屋にいた蒼い外套の男達の上司らしい。何事かが書かれた紙を女が受け取り、その内容を男に男に説明していく。
「っと言う事は、君はまだ外の世界を拝んでないのかい」
『外の世界』という単語に違和感を感じつつも、タケルは頷いた。
学校いた筈が森の中に移って、突然気絶させられて、牢屋に入れられて、考える暇などなかった。余裕はもっとなかった。
（そう言えば・・・）
周りにいる人物は皆が欧米系の顔立ちだ。着衣も現代日本にはありえない騎士外套に軽鎧である。腰に剣を指しているところ名で、何かの冗談かとすら思う。
「君、異世界人か？」
男の言葉に周りの者達が騒然とする。
「異世界人？」
「ああ、君は日本人なのだろう？」
タケルは頷いた。
「なら異世界人だ。ここは日本ではないし、地球ですらない」
担がれている様には思えなかった。嘘だと思い込むには身に受けた苦痛と恐怖が濃すぎる。
ただ漠然と、とても遠い所に来てしまったのは分かった。
しかし、何故・・・
「何で、僕が、日本人が異世界人だと分かるのですか？」
漠然と口にした疑問に男は面白そうに眼を細めた。
その蒼い瞳に吸い込まれる様に視線を釘付けにされる。
瞳は蒼く、頭は白い。装いも異国の物であったが、その顔立ちに

は強い郷愁を感じた。
（もしかしてこの人・・・・）
タケルは胸に去来した思いに、肯定する根拠は一切なく、むしろ否定する要素だらけのそれを不思議と真実であると確信する事が出来た。
「そうだ」
男は頷いた。
「君が考えている通り、俺もかつては日本人だった」

オキツグは隣でベヘナが眼をむいているのを感じた。
日本人である事を認めると言う事は、暗に異世界人である行っている様なものだからだ。実在は確認されているが、殆ど都市伝説じみたものの生き証人が隣にいるなどと誰が想像しようか。
部屋にいる部下達の視線もタケルではなく自分に集まっている事に苦笑する。
オキツグはタケルを観察した。
酷く疲れているようではある。
その視線は茫洋としていて、それは怒涛の現実に意識がついていってないからだとオキツグは経験から知っていた。暫くするとパニックを起こすかもしれない。
隣のベヘナが室内に固まっている男達に檄を飛ばす。
「貴方達、いつまでそこで固まっているのです」
その一言で背筋を伸ばし、そろって敬礼して退室する辺り、その規律の厳しさを感じさせる。
「どうぞ、お好きにお話しなさってください」
オキツグに気を使っているのだ。同郷であると言うのであれば積もる話もある。しかし、人に聞かせるのには不都合が多い。オキツグは《氷王》である事に加えてエンデバルドの婿だ。その個人情報

を喉から手が出る程欲しがる輩は多い。
「今出ていった彼らの事なら大丈夫です。仮に元親衛隊の隊員は仲間を売る様な事はしません。そういう輩は私が排除してきましたので・・・・それとも私も出ましょうか？」
オキツグは小さく有難うと呟き、首を横に振った。
「さて、タケル君、君にとっては驚天動地、晴天の霹靂ではあると思うが、事実なのだから仕方がない。ここは君にとっては異世界にあたる。冗談の様な化物が跋扈し、冗談の様な魔術が飛び交い、冗談の様な魔術師が殺し合う、そんな冗談みたいな修羅の巷だ。異世界へようこそ、君を世界は歓迎する事だろうよ」

空は既に暗くなっている。
月明かりが森の中に差しこみ、夜行性の獣や虫の鳴き声が響く、夜の暗闇。
「もうじき国境付近です」
「ああ」
その森の中を走る一台の車があった。軍用のそれらしく武骨なつくりは、車というよりもむしろ装甲車であったが、特殊改造を施されたそれは驚く程の静かさでひっそりと運行する。
ペンウッド卿は複数人の部下を伴ってレンテグラ城塞を抜け出た後だった。
「ディオスという置き土産の処理には成功したようだな」
先程から遠くで轟いていた異形の化物の咆哮と破壊音は既に聞こえなくなっている。
元々これのために用意した人員だ。
「私としてもまだ死ぬわけにはいかないのだ。ここは逃げの一手を・・・」
遠くで何かがキラリと光った。

ドンッ

「へっ？」

車のフロントガラスが砕け、運転手が間抜けな声を上げながら突如として吹き飛んだ。比喩ではない。彼の上半身は爆発し、血をふいて室内を汚す。

「な、何だ！？」

運転手を失い、車は蛇行しながら近くの大樹に激突、死んだ運転手をそのままに車外に脱出する。

「燃料に火が引火するぞ！」

ドオオオオオッ

間もなくして爆発音が夜空に響いた。

「一体何があったと言うのだ！」

ペンウッド卿は怒鳴り散らして部下に詰め寄るが、彼らも怪訝な顔をするだけだ。

「私にも何が何だか・・・・・あれ」

襟首を掴んでいた部下の下半身から力が抜ける。

「あれ？」

意図せず地面にしゃがみ込んだ部下は再び立とうとして失敗した。

「お、お前・・・・」

ペンウッド卿の喉からカラカラに乾いた声が聞こえる。

「あれ、なんで俺の下半身・・・」

男は腰から下が千切り取られた様に無くなっていた。

そのまま不思議そうに自らの血が染み込む大地に眼をやりながら、やがて痙攣して死んでいった。

「何だと言うのだ」

「何が『何だと言うのだ』だ」

木々の間から声が聞こえ、思わず振り向いた瞬間、周囲で物音とうめき声が複数聞こえた。
「うぐっ」
「ぐわっ」
見回せば残り少ない部下達は喉から、胸から、背中から血を流して倒れていた。
その後、横、或いは前には夜戦様の黒い戦闘服に暗視スコープ、そしてこの世界にしては珍しい突撃銃を構えた人影だった。
「なっ」

バンッ

銃口の一つがペンウッド卿の肩を吹き飛ばした。
「ぐわっ」
「全てはお前の結末だ。お前が望んで始めたお前の戦争、その末路だ」
月明かりに照らされてペンウッド卿の前に一人の男が姿を現せる。
「天命に従え、ペンウッド」
男は周りの不気味な兵士たちと同じように黒い戦闘服に身を包み、アサルトライフルを抱えていたが、その顔には風貌を隠すものは一切なかった。
短く刈り込まれた黒髪に瑪瑙色の瞳、歳は二十代の様にも思えるし、五十半ばの様にも思える。日焼けと火薬焼けで硬くなった肌が年齢を感じさせないのだ。あまり目立った所のない顔だったが、唯一やや細めである事を除いて全てが中庸だ。
「貴様、ウォン・イーファか！」
ペンウッドの叫びにウォンと呼ばれた男は肩をすくめた。
「今は夜だぞ？
夜に叫んだり、怒ったり、お前と俺は離婚を控えた熟年の夫婦か？」

顔は、特に眼は酷薄そのもので、死神もはだしで逃げ出す程の冷たさを秘めているのに口調は陽気だった。
「一体どういうつもりだ！」

バンッ

ペンウッド卿が叫んだ瞬間、ウォンは腰のホルスターから拳銃を抜き出してペンウッド卿の腹を撃った。
「この世界の人間は何でもかんでも魔術と魔導剣に頼りすぎだ。そして銃を馬鹿にしすぎだ」
男は人差し指で拳銃をくるくるとまわしながら語る。
「もちろん、我々も魔術に関しては学ばせてもらった。その機会を与えてくれた貴様には借りもある。だがそれはギブアンドテイクの関係だろう？
失脚した政治家に賄賂を贈る馬鹿はいない。赤い国だったらむしろ暗殺の対象になってしかるべきだ」
ペンウッド卿は自分の体から血と一緒に生命が抜けていくのを感じた。
「ぐ・・・・」
「まだ殺さんよ」
ウォンが部下に指示を出すと、一人がボンベを手に、ペンウッド卿の顔にガスを吹きかけてくる。
「・・・・・」
ガスを吸い込んでしまい、一気にペンウッド卿は意識を失った。
「撤収だ、撤収するぞ」
手をぷらぷらさせて合図を送ると兵士達はそのふざけた態度とは裏腹に手早く森の中に姿を消していった。
その内一人がペンウッド卿を肩に担いで行く。
ウォンは一人残され、辺りに転がる屍と、大破した車、見れば車内から煙が上がっている。恐らく部下の一人が証拠隠滅の意味も兼

ねて火を放ったのだろう。
肉が焦げる臭いが漂ってくる。確かあの中には一人、下半身だけ取り残されていたはずだ。
「くせぇ」
ウォンは吐き捨てる様にそう言うと静かにその場を後にした。

第16話　供物

「何故ぇっ、私が死なねばならない！！」
その声は王城の中庭、緑の芝生の上に響いた。
「何故だ、何故私が！」
広大な中庭の一画、蒼い外套を纏った近衛騎士が五十人近く、その他にも通常の軍隊の兵士達がその三倍以上、そして高級官僚、将校、王までもその場に列席していた。
「何故、か・・・・その理由が分からないのだとしたら、それは呆けだ」
ゲイル三世は一歩前に踏み出し、低く唸るような声で叫ぶ老人、ファルケス家の当主、ランドゥに言った。
狂乱し、喚き、叫ぶランドゥに先日の闘技場における拉致事件の被害国使者らが顔をしかめた。あまりにも醜悪で、見ただけで憎悪と嫌悪を抱かせる様だった。
「・・・やれ」
ゲイル三世は近衛騎士の一人に言った。
命令された騎士が腰の魔導剣を引き抜いた時、ランドゥの狂乱は頂点に達した。
「死んでたまるかあああああああああああああっ！！」
かつて戦士だった、往年の輝きを彷彿とさせる鋭い動きで油断していた兵士の魔導剣を腰から奪うと、貴賓席、一番弱そうな人間が集まっている場所に襲いかかった。
「うわあああああああっ」
「きゃあああああああっ」
ランドゥが剣を振りかぶった瞬間、彼と国賓の間に風が通り抜けた。
まるで突風の様なそれに使者達は顔を腕で覆い、ランドゥは剣を振りかぶった姿勢のままつんのめった。

「ぬ、お・・・・・・」
気を取り直して魔導剣を振り下ろそうとした瞬間、ランドゥはその剣のあまりの軽さに体勢を崩す。
「な、何だ・・・・・・」
そして、剣を確かめようと腕の先にあるはずの魔導剣を見るが、そこには剣の影も形もなかった。剣だけではない。それを握っていたランドゥの右手も綺麗に切断されていた。
「お前、自分の息子、ディオスの右腕を斬ったって話じゃないか」
少し離れたところで、柄から手がぶら下がる魔導剣を持った第三魔導騎士団の団長代行であるオキツグが右手から下げた魔導刀から血を滴らせて立っていた。
ゲイル三世がオキツグの横まで歩み寄る。
「貴様か、でかしたぞ」
「ええ、ありがとうございます」
二人の視線が腕を失い呻くランドゥに重なる。
「もう少し格式に則って処刑するつもりだったが、もういい、目ざわりだ。斬ってしまえ」
「了解」
オキツグは刀を振りかぶるが、思い立ったように血振りして鞘に納め、腰に差してあったもう一振りの魔導剣、煌剣ソラスの銀の刃を抜いた。
「俺には許せないものが一つある」
銀の刃は陽光に照らされて光輝く。
「それは、親として相応しくない親だ。どんな子供であれ、その腕をちょん切る様な奴は死ねばいいと思う」
光が振り下ろされる。

オキツグは王城の正門をくぐって外に出た。

国で一番に重要とされる中枢だけに、警備も厳しく、その外縁部には王室御用達のお店や官庁施設が軒を連ねる上品な区画が続いている。

自動車が多く通る道路の脇に一台のリムジンが停車、自動でドアが開けられる。

オキツグは迷うことなくその車に乗り込むと、再び自動でドアが閉まって静かに車が発進する。

「ご苦労様でした」

座った後部座席の隣にはオキツグと同じように蒼い外套を纏い、軽鎧だけ外したベヘナ・ガロンの姿がある。

「・・・お前ね」

御苦労さまではなく、この場合はお疲れさまでしたであると修正しようとし、やめた。この少女の様な外見した女はわざとやっているのだ。短い付き合いの中でそれを知った。

「どうでした？

一応は今回の件の首謀者の最後は」

ペンウッド卿は結局見つからなかった。しかし、彼が乗っていた筈の車は大破して見つかり、部下の死体も多く見つかった。殆どが黒焦げになってしまって分からず、結局は事故死という事で処理されたが、それでは周辺諸国が納得しない。そのため、ディオスの父であるランドゥを首謀者として処刑することでその感情の鉾を収めさせようと試みた。

冤罪をかけて殺すという事に抵抗を覚えたオキツグだったが、僅かなりともペンウッド卿と繋がりを持っていた事と、何より息子であるディオスに対する仕打ち、その悪評を聞いている内にむしろランドゥの事が憎くなってきた。

「抵抗したんで首切って殺した」

「貴方がですか？」

「ああ」

ベヘナは眼を丸くし、その後に笑い転げた。

「くっはっはっは、そうですか、相当に醜い最後だったのでしょうね・・・ああ、見たかった」
不吉な事を不吉に笑いながら言うベヘナは珍しく、その氷の表情を余所にやり、まるで街中にアイドルがいたという友達の噂を聞いたかのような少女になっていた。
「・・・お前ね」
「本当にお疲れ様だったのですね」
無視して労いの声をかけるベヘナ。
事件が終息して三カ月近い月日がたった。
オキツグは騎士団の団長代行として書類仕事に忙殺され、殆どをベヘナに教わりながら（教練というより調教に近い）忙しい毎日を送っている。
来月末に、正式に団長の位階がリュロンからオキツグに受け渡される事になった。
「あの少年はどうなさるおつもりなのですか？」
「ああ、タケルの事？」
「はい」
オキツグの同郷、日本からやって来た少年はエンデバルドで預かる事になった。泣いたり、喚いたり、何かあるかと思ったのだが、本人は意外に冷静なものだ。むしろ生き生きとしていて楽しそうだ。
「可愛げなくニート生活をエンジョイしてやがるよ」
「そうですか」
あるいは、元の世界に良い思い出がないのかもしれない。オキツグがそうだったから分かる。
暫く間を置いて、再びベヘナが口を開いた。
「この後はどうなされるのですか？」
「ああ、そうだな・・・・・・・・」
エンデバルドの屋敷に戻るつもりだった。
「リュロンが暫く屋敷から離れるつもりらしくてな」
「そうなのですか？」

「なんだか、妊娠時の女性は情緒が不安定だからお互い会わないのがいいだろうって」
今日はその前の最後の日だった。
せめて早めに帰らなければ、意外に執念深いリュロンは一気に臍を曲げてしまう事だろう。
「ではこのまま屋敷の方にお送りしましょう」
ベヘナが運転手に指示を出す。乗り込んだリムジンはエンデバルドのものではなく、ガロン家のものだった。
「ああ、ありがたいんだけど、けどなぁ」
「どうかされましたか？」
「うーん、いや、なあ」
何か迷う様にハッキリしないオキツグだった。
「・・・・ああ」
ベヘナはオキツグが何を心配しているか悟った。
「女の車で家に帰って、奥様に、リュロン様に浮気の疑いをかけられないかどうか不安なのですか？」
オキツグはむせた。
「ッ・・・、・・・なんてこと言うの、お前！」
「いいではありませんか」
さも面白そうに、平然とベヘナは主に対する宣戦布告をする。
「やきもちなど、妬きたいだけ妬かせればいいのです」
オキツグは頭を抱えた。
車のドアに手をかけるが、鍵が閉まっていて開ける事は出来ない。
「お、おい、勘弁してくれ」
そろそろお腹も膨らんで、リュロンは幸せな様子ではあったが、マタニティーブルーとでも言うのだろうか、やや情緒が安定せず、そのストレスのぶつけ先がオキツグとなっている現状、ベヘナの悪戯はオキツグに災難として降りかかる事になる。
「諦めて下さい」
ベヘナの体が跳ねあがり、オキツグに襲いかかった。シーツベル

トを締めていたオキツグはいきなり飛びかかってくるベヘナに対応する事が出来ない。
オキツグの膝に馬乗りになり、その身を抑え込んでいく。
「な、何を！？」
困惑するオキツグの口を、己のそれでベヘナは塞いだ。
眼を白黒させるオキツグは

パシャ

という不吉な音を聞いた。慌ててベヘナを引きはがして音のした方向を見れば、手を伸ばしたベヘナの掌に、しっかりと握られた携帯電話のカメラのレンズ。
「う、うおっ！！！」
意味も分からず、訳も分からずオキツグは呻いてしまう。それしか出来ない。
「さて、これは随分いい脅迫材料が出来ました」
「け、消せ！」
慌ててその携帯を奪おうと手を伸ばすが、運命は残酷だった。
「既に自宅のサーバに送ってしまいました」
「そ、そんな」
オキツグは古くなった青菜の如く萎びた。
ベヘナはその様子に笑った。あまり表情を動かす事がない彼女にしては珍しく、しかも邪気のない笑い方だった。
その様子に何も言えなくなるオキツグ。
「リュロン様の旦那様である貴方は、私にとっては主筋にあたります。こんな美人を侍らせるのですから苦労の一つや二つは負って貰いたいものです」
何も言えないオキツグと、何も言わないベヘナを乗せて車は道を行った。世間は相変わらず騒がしく、忙しく、それはまるでこれからのオキツグの道行きを告げているかのようであった。

第1話　凱歌の炎

その日、全てが変わった。
比喩表現で、大きな戦争が終ったり、始まったり、凄まじい技術革新に対して世界がひっくり返ったなどと言ったりするが、その変革は直喩の変化だった。

『ご覧ください。この信じがたい光景を』

日本の東京上空。
けたたましい音をたてて飛ぶヘリから叫ぶようにカメラに向かって語りかけるレポーターの姿。生放送されているそれは同時に全国で見る事が出来るだろう。

『先日に完成したばかりの東京スカイツリー、インフラを支える設備としてではなく、観光における象徴としての役割も期待されていたそれは、我々に変貌した異形の姿を晒しています』

東京都墨田区押上の地にそびえる電波塔と、併設された商業施設、オフィスビルは東京スカイツリータウンとして、世界中から注目されている。
その電波塔の頂点は、本来であれば円柱状の構造物が存在するはずだったのだが、途中から消えてなくなっている。
未完成な訳ではない。開業はしていないものの、既に規定の高さまでの着工は終えているのだ。

『あの、東京スカイツリーがまるで橋の様に繋ぐ空の幻想的な光景を見て下さい』

一年ほど前に突如として空に現れた幻影の鏡面都市。それが今度は固定化された状態で現れたのだ。
天辺が鏡の向こうに突き抜けている。
女性レポーターは興奮した様子で、続きの言葉を述べた。

『あれこそ、あれこそ我々の世界と異なる世界を繋ぐ扉、信じられるでしょうか？　あの向こうに空想のそれではない、本物の異世界が存在すると言うのです！』

話は数週間前に遡る。

プロペラの唸り声が夜空を切り裂く。
「ふざけた話だ」
千葉県にある陸上自衛隊の駐屯地から発進したカイユース、俗にフライングエッグ（空飛ぶ卵）の名で知られる偵察ヘリに揺られながら、甲斐田満一等陸佐は呻く様に不満の声を洩らした。
「どうかされましたか？」
隣に座る堂島淳一郎一等陸尉の声に「何でもない」と手を振る。タービンとプロペラの音、機内の振動音でとてもではないが会話を楽しむ様な環境ではない。それに人に聞かせるために発した言葉では無かった。
「目的地に到達、着陸します！」
パイロットをしている名も知れない自衛隊員が怒鳴る様に報告する。
重力につられて浮き上がる内臓の感触を気持ち悪く思い、それを理性と長年の経験で押しとどめると、甲斐田は気合を入れなおす様に頬を叩いた。
ここにいるのは自衛官としての仕事、任務だからだ。気を抜いて

いて良い訳ではない。
甲斐田は非番という事もあり、今日は自宅で家族とゆっくり食事を取るはずだった。いざ箸を持って妻の揚げた唐揚げを箸でつまんだところで電話が鳴る。
仕事には誇りを持っているし、やりがいも感じているが、そのタイミングは悪意的と言える程だった。
不満顔の娘をあやし（今年で八歳になる）、同じ様な顔をしながら、口だけは心良く送りだそうとする妻に土下座をして出動したのだ。子細については聞かされないまま、ヘリに乗せられる事しばらく、そこは四方が海に囲まれた絶海の孤島だった。
（ここは？）
ヘリはプロペラの音を緩めながら徐々に降下していく。
窓の外には殆ど海しか見えない。最初は空母にでも降りるのかと思ったが違う。確かに岸壁が見えた。そしてその上には取ってつけた様なヘリポートがある。
「着きました」
隣の堂島が告げる声と共にヘリポートの警備にあたっていたらしい兵士達が駆けつけるのを見てとった。
陸上自衛隊の戦闘服ではない。
（もしやここは・・・）
「・・・竹島か」
呻くような甲斐田の声は十分抑制が利いたものだったが、それでも内心は困惑の嵐が舞っていた。
日本と韓国の両方が領有を主張している孤島、竹島、或いは独島の名で世間には知られている。現在は韓国軍による実効支配もあって、特に自分の様な軍事関係者が近寄れる場所ではないと聞いている。
「ドウゾ」
竹島の警備兵が言った。たどたどしい日本語である。当たり前か、彼らは韓国軍の兵士だからだ。

甲斐田の「竹島」という言葉を聞いたらしく、彼はムッとした表情を浮かべたが、訓練がよくいき届いているらしく直にそれを隠して甲斐田を案内し、堂島がそれに続く。

何故自分がここにいるのか掴めない甲斐田は堂島にアイコンタクトするが、返事は『自分にもわかりません』だった。

併設されている小さな基地に通される。

「オツレシマシタ」

小屋の様なそこは軍事施設という事もあり綺麗に整えられていた。通信設備のほかにハングルで書かれたポスターには竹島を上空から映した写真に憤激する市民達。恐らく韓国側の領有権の主張を示すそれだろう。

壁一面に設けられた幾つものモニターは、普段は周囲の海域の警備映像を映し出すであろうそれは今は沈黙している。その異様なまで黒い壁は全ての異端を排斥する厳格さをもって二人を威圧していた。

韓国の兵士に守られ、韓国の施設が建ち、韓国の物資が、思想が、言葉が、何より空気が蔓延るそこは甲斐田達にとって敵地だった。

「・・・・」

軍人としての甲斐田の心が違和感を訴え、警鐘を鳴らす。意識が戦闘態勢を取っているのを感じた。

室内には人が誰もいないと、と思ったが、窓に眼を向けこちらに背を向ける背広姿の男が一人いた。

男はゆっくりとこちらを向いた。外は暗く、窓の外にはただ暗いだけの海と岸壁しかなかった。まるで暇つぶしに見ていた絵画や彫像から眼を放すかのようにこちらに向き直った男は甲斐田達の姿を認めると、丁寧なお辞儀をした。

「ご足労おかけして申し訳ありません。私、大韓民国国家情報院で情報事務官をやらせて頂いております。イ・スンシンといいます」

流暢な日本語であいさつした男は、異邦人である事を感じさせない滑らかさだった。

イ・スンシンが懐に手を入れると、甲斐田達はその身を硬くする。武器を取り出すのかと警戒したが、抜き取られた手にあったのは一枚のカード、名刺だった。

「・・・どうも」

成れない手つきで名刺を受取りながら、甲斐田は男、イ・スンシンを観察する。

短く刈り込まれた黒髪に瑪瑙色の瞳、歳は二十代の様にも思えるし、五十半ばの様にも思える。日焼けと火薬焼けで硬くなった肌が年齢を感じさせないのだ。あまり目立った所のない顔だったが、唯一やや細めである事を除いて全てが中庸だ。

武骨な印象を受けるが、その顔はウォール街のビジネスマンの様に洗練された笑顔を浮かべている。

完璧な所作で、タイミングで、完璧な挨拶をしてくる。これがお互いビジネスマンで、何らかの商談をしているのであれば甲斐田は彼を信用しただろう。その能力を。

しかし、甲斐田は自衛隊員、すなわち軍人だった。相手に対する信用と警戒は同義である。

「何のご用でしょうか」

冷たい声でイ・スンシンに返した。自分でも驚く程に拒絶の意思が込められている声。決して妻や娘には聞かせられない声だ。

「はい、私はこの度の領土問題における紛争を解決に導くべく韓国政府より派遣された人材で・・・」

「その様な事を聞いている訳ではない」

甲斐田は敬語を使うのをやめた。

「何のつもりだ？

私をここに呼び出したのは貴方なのだろう。殆ど状況説明をされないままヘリに乗せられ、気が付いたら日本と韓国の癌の上だ。その上、貴方がＫＣＩＡの構成員だと？

スパイである事を自称する本物のスパイなどいない。正直、信頼するに足らないのだ」

イ・スンシンは困ったような苦笑を浮かべている。甲斐田の声には怒りと苛立ちが満ちていた。その笑すらも腹立たしい。

「そもそも、私たちをここに呼ぶとはどういう事なのだ」

「ええ、それについては順次説明させて頂きます」

「説明、説明か・・・これが、我々がこんな場所にいる事が公のものとなってしまったら戦争だって起こるかもしれないんだ。人が、人が死ぬんだぞ？

お前、一体何を・・・・」

「だからどうした」

イ・スンシンは静かに、しかし傲然と言った。それまでの胡散臭い笑いを消して、その眼には侮蔑と嘲笑、憎悪と嫌悪が浮かぶ。

「人が幾千、幾万死のうが知った事か。それが貴様ら日本人であればなおさらだ。下手に出ていれば調子に乗りやがって、やはり日本人は皆殺しにすべきだ」

あまりの豹変ぶりに甲斐田と堂島は呆気にとられ、息をのむが、努めて冷静になった甲斐田はこれがイ・スンシンという男の本性である事を悟る。

「全く、私も命令でなければこんな糞みたいな所に来る必要などなかったのだ。それを貴様らのせいで・・・・・死ぬ？

人が死ぬと言ったか？

そんな事どうでもいい。わが軍は貴様らを轢殺する用意がある。圧倒的に躊躇なくだ。戦争になったとしても死ぬのは我々ではない。そして貴様らただ死ぬのではない。泣き、喚いて、死ぬのでもない。藁の様に刈り取られて死ぬのだ」

一気呵成にまくしたてるイ・スンシンに対して甲斐田は冷静に返す言葉を吟味した。隣の堂島はややのまれた様子だったが、判断を甲斐田に任せるつもりだろう。一度だけ目礼をよこす。

「・・・それは貴国の情報機関としての公式な見解として、か？」

慎重に言葉を選んだ。

幾らなんでも日本と戦争をやるつもりはないだろう。これは暗に

『黙れ』と言っている様なものだ。
普通はこれで黙る。
しかし、イ・スンシンという男はやり込められた悔しさを顔に出す訳でもなく、憮然とした様子になる訳でもなく、不気味に、ただ不気味に笑っていた。
男の口が開かれる。それは腹腔に炎を潜ませた龍の様だった。決定的な、何かが壊れる予兆が、そして彼が言葉を発しようとしたと同時に一斉に沈黙を保っていた大量のモニターに光が灯る。

『悪ふざけはその程度にしてもらおうか』

何処からともなくスピーカーでひび割れた声が聞こえる。光の壁に目が慣れてきて、それらを見渡すと甲斐田は愕然とした。
そこには一つのモニターにつき一人の状態で人の顔が映っていた。
「幕僚長！」
その内の一つ、陸上自衛隊の第一種礼装に身を包んだ壮年の男性の姿があった。
まるで厳の様な顔立ちは軍人としての厳しい人生をものがたっているかのように引き締まり、その眼も鋭く画面越しにこちらを見据えている。
松平義春。陸上幕僚監部の長であり、陸上自衛官の最上位の存在。

『イ・スンシン、貴君の仕事は私の部下を悪戯に挑発する事ではないはずだ』

画面の全ての顔が、全ての目が、意識が甲斐田達を見ていた。何かを測って、謀っていた。
こちらからは全てが独立した存在の様にも思えるが、ネットワークを介してお互いと好き勝手に放し始める。まるでモニター同士の会議場だ。議論を交わしているのはモニターの人物達だけで、暫く

すると数少ない生身の人間達である甲斐田やイ・スンシン、堂島を放っておいて話し合い始める。
ハングルと英語、日本語、ロシア語、様々な言語が無作為に重なり合って聞こえるが何を言っているか理解出来なかった。
「松平幕僚長・・・」
理解出来ない環境で、突然見知った顔を認めて呆ける様に甲斐田は言った。呟く甲斐田と松平の視線がモニター越しに交錯する。
陸上自衛官なら、誰でも知っている顔だ。そして、一等陸佐というそれなりの地位にある甲斐田にとっては直接的な面識すらもある。

『不思議か？』

その突然の問いに、甲斐田は直に答えを返せなかった。
何かを疑問に思う気持ちはある。不満もだ。しかし、それが形にならない。暗闇の中で手探りで形を確かめている様な、そんな気持ち悪さだけが確かな存在だった。
「はい・・・・何故、自分なのでしょうか」
ただ、それだけが形になった言葉だった。適切に言葉で補足する事も、堂々と答える事も出来ない。ただ訥々と、心情を吐露するように発した甲斐田の言葉は自衛官とは思えないほど純朴で素直だった。
その様子に松平は笑う。厳しい顔立ちからは想像できない程に優しい微笑みだった。

『それは状況が貴官の専門分野の一つだからだ』

「ッ・・・・」
甲斐田と堂島が雷を撃たれたかの様な驚きの表情を浮かべる。
「そ、それは・・・」

『ああ、機密の事ならば気にしなくても大丈夫だ。私とその部屋を除いて他はオフラインになっている。そしてこれからの状況を考えれば君達の顔合わせは急務であったのだ。我々は君の存在を必要としている。陸上自衛隊、特殊作戦群、軍本部第二課、西部方面対策本部情報官、甲斐田満一等陸佐としての力をだ』

甲斐田は自衛官だ。それも特殊な自衛官だった。

「・・・了解」

防衛大学卒業後に陸上自衛隊に入隊し、そのタフな精神と肉体を買われて特殊作戦群、通称特戦群の対外的な戦術分析官として、国防上の重要な仕事を担っている一人、それが甲斐田の自衛官としての本当の顔だ。幕僚長の、松平の意見具申の殆どは彼を含める分析官の言葉を元にしているため、二人の関係はただの上官と部下以上のものがあった。

『これから我々が解決にあたる問題は国の垣根を超えてあたる必要がある。いや、国どころか世界の垣根を超えると言うのが本当か』

松平にしては珍しく、諧謔味に満ちた笑顔を浮かべる。見ればイ・スンシンも同じような笑いを浮かべていた。腹がたつ。

松平がイ・スンシンを射止めると、彼は何かを心得た様に懐に手を入れる。先程と同じように身を硬くしてしまう体の反応に、甲斐田は馬鹿馬鹿しくも恥ずかしくなった。

「これをご確認ください」

そう言って差し出す一枚の写真。

そこには日本の、どこかの小学校が映されていた。

「こ・・・れは・・・・」

最初は自分が何に驚いているのか分からなかった。声が出て、それがうめき声のようになっているのを聞いて初めて驚いている事に驚いた。

（これは、何だ）

それは確かに日本の小学校だった。下校途中の子供に赤い夕陽、しかし、その平和な光景には不釣り合いな異物感。

「先日、貴国の某所で確認された現象を映したものです」

手渡された写真を茫然としながら堂島に渡す。暫くして甲斐田と同じような状態になった。

現在の技術であれば合成だと馬鹿にする事は出来る。街中の人に見せれば性質の悪い悪戯、ハイウッドに頼んだのかと嘲る者の方が多いだろう。

（これは・・・違う）

長年、国同士のハッタリや嘘、そういった事を気が遠くなるまで研究してきた甲斐田だからこそ分かる。これには、また現在の状況にはそういった冗談の要素が一切なかった。

「・・・これの真偽を探る事が仕事なのでしょうか」

『いや、それについては検証を終えている。まぎれもなく現実に起こった現象だ』

甲斐田は脳みそを直接殴られたかのような衝撃を受けた。

（この様な馬鹿な現象が本当にありうるなんて・・・・）

しかも、それを自分が知らない。それは自衛官として恥ずべき事だと甲斐田の中の何かが責め立てる。

『まあいい、今日は貴様らの顔合わせだ。加えて甲斐田一佐がここにいる事が何よりの重要事でもある。私からの用件は特にないので失礼する』

松平が移っていたモニターが暗くなる。それを合図に他のモニターの光も順次光が消えていく。議論か、何かか、甲斐田の知らない間に知らない何かが終わったのだろう。

「・・・一体、どういう事なのだ」

甲斐田の言葉がこだまする事なく消えていく。何もかもが突然だった。唐突過ぎて理解が及ばない。

何か答えを求めてイ・スンシンを見れば、彼は先程の狂乱は嘘の様に消え去っており、先程と同じくビジネスマンのスタイルで困った様に笑った。

「どういう事か、という問いに完全に答えられる程の情報を持っている訳ではありません。ただ、この問題に関して言える事、それは・・・」

言葉を一度きる。甲斐田の、そして堂島の視線が自分に集まるのを確認して満足そうに頷くと言った。

「言葉に出すのも甚だ不可解、しかし、語る者が私しかいないので言いましょう。御二方、異世界と聞いて何を思い浮かべます？」

第1話　凱歌の炎（後書き）

11／8　誤字修正

第2話　偶像の将軍

火花が散る。
その様子を見ながらオキツグは疑問を抱いた。
眼前には木剣を持った相手が手に持ったそれを振り下ろし、それを自分が同じ木剣で受け止めているのだが、火花とは断じて木の擦れあいから生まれるものではない。
「うおおおおおおおおおおおっ」
鍔迫り合いを仕掛けてくる相手、大柄な男を体重移動でいなし、体勢を崩して弾き飛ばすと、床を転がりながら悪態をついて距離をあけつつ構える。
見れば木剣に重しとして埋め込まれた金属棒が、それを覆う木の刃の破損によって露わになっている。
「・・・・ッ」
首筋に悪寒を感じてダッキングするようにしゃがみ込むと、頭上に風を斬る音が聞こえる。
今度はオキツグの方から距離を開けて奇襲をかけて来た者と対峙する。自分たちと同じような木剣を振り抜いた姿勢の上背のある女だった。
「おいおい」
オキツグは呻いた。今のは避けなければ、どう考えても斬るのは風だけでは無かったはずだ。例えそれが木剣であっても、生身の人間がそれを喰らったら体が千切れ飛ぶかもしれない。
こちらに木剣の切先を向けている者はもう一人いたが、そちらは油断ならない瞳でこちらを見ている。
まるで警邏に追われている罪人だ。実際に追われていた事があるオキツグはそれを如実に思い出す事が出来た。罪が清算されている事が唯一の救いか。
オキツグは何となく八相の構えを取った。取り囲んでいる三人が

警戒の色を濃くする。
「ふっ」
短く息を吐き、体の状態の全てをニュートラルにする。極度のリラックス。全身の力を抜き、まるで体が溶けだしたかのような錯覚を覚えるまで力を抜く。
気がつけば前方に倒れ込んでいる。重心を中心においていたはずだが、僅かなずれがその原因だった。
（・・・・・・）
それに右足を一歩踏み出して防ぐ、支える。

ビシッ

踏み込んだ右足の震脚が床石を踏み割ったのだ。強い踏み込みが小さなクレーターをつくり、膨大な運動エネルギーが位置エネルギーに置き換わる。
オキツグは自ら床に縫い止められた。重力で、引力で。
「かっ」
オキツグは体の動きを阻害する全てを無視して強引に左の脚で床を蹴る。胸から呼気が漏れ、オキツグの体は何かに弾き飛ばされたかの様に爆発的な推進力をもって前方に進む。
何かとは何か。
決まっている。自然科学だ。
オキツグが最初に標的としたのは上背の女。色が白く髪が黒い。切れ長の面立ちを驚きの色に染めてただ茫然としている。それしか出来ない。
出来ないのではない。させないのだ。
本物の体術は魔術よりも魔術めいているとオキツグは思う。女に迫るコンマ数秒の間で思考する。
（俺が考えるでもなく、戦うのでもなく、その記憶が戦い、考える）
「何と言う速さ！」

女が苦し紛れに賞賛と一撃を見舞ってくる。横薙ぎに振われた一撃が届くよりも早くその腹に肩で体当たりする。

ゴバッ

「がはっ」

女は肺から空気を強制的に抜かれて、その衝撃を逃がす間もなく吹き飛ばされた。

「次」

呟いたオキツグは女との衝突で突進の勢いを殺すことなく方向転換に利用すると、未だに棒立ちの男に迫る。

「くそっ」

呻きながら袈裟がけに斬りつけてくる。

今度は向こうの方が僅かに速い。絶好のタイミングで迫る木剣をオキツグは同じ木剣を翳して防ごうとする。

「俺とあんたの体格差でそれは自殺行為だぜ!!」

明らかに眼の前の男の方が大柄だった。オキツグも小柄な方ではないが、体重差は二倍近いかもしれない。

「ぜりゃあああっ!!」

剛風が唸る。全てを圧する圧力となった衝撃の津波がオキツグを飲み込む。

「ふっ」

短い呼気と共に僅かに右足を前に出す。

ビシッ

震脚。

膨大な運動エネルギーが一転に集められ、それが一瞬で位置エネルギーに置き換わる。

「なに!?」

体重差からくる攻撃の重さは圧倒的に向こうが上だったはずだが、お互いの剣はお互いの間で制止した。
そして、オキツグは余波から来る余剰エネルギーで攻勢をかける。
ローキックの様に脚をかると、男は上半身に意識を集中していたため何なく転んだ。
「ぬおっ」
足元に仰向けに転がる男の胸元を踏みつけ、踏み抜く動作をしながら「チェック」と言うと男は観念した様に手足をだらけさせた。
残るもう一人に切先を向けて牽制すると、仲間が制圧された様子に呆れた様な、それでいて褒め称える様な表情をして木剣を投げ出した。
「降参、降参です・・・・まったく、やってられません」
残りの一人、ベヘナは稽古の終了を告げた。

オキツグはボロボロになった木剣を放り投げると訓練室を出た。
シャワーは浴びない。大して汗をかいていないからだ。
オキツグ達、近衛魔導騎士団が長であるオキツグを含めて稽古を行っていたのは広大な王城の敷地内にある一画だ。まるで体育館の様な広大な空間だが、魔術によって驚異的な三次元運動を可能にする剣導士にはやや手狭だ。しかし、訓練を秘匿する必要がある性質上、ある程度の不便は目をつぶらなければならない。
(これでも広くなった方だからな)
一人、心の中で呟く。一連のクーデター騒ぎから半年近い月日が経った。
三つあった近衛部隊も、その騒ぎで離反、殉職が多数出たおかげでオキツグ達は第三近衛魔導騎士団という名称から『第三』がとれた。加えて、その長であるオキツグは正式に近衛の長である元帥の位を現王ゲイル三世から賜った。

王宮の広い廊下ですれ違った衛兵たちがオキツグに敬礼する。
「お疲れ様です、近衛将軍閣下」
マクヴェス王国は近衛と王国軍という二つの軍を有している。主力は王国軍であるが、王権の象徴として近衛は非常に重大な役割を果たしている事をこの半年間、そのトップに収まって実感した。王宮の、特に王族を支える者達のかける期待の厚さで、だ。
勿論、最初から認められた訳では無かった。確かにオキツグはクーデターを鎮圧した最大の論功者であり、強力な剣導士であり、何より次期戴冠家の婿養子だったが、国外出身の人間という事もあって反発もかなりあった。
「オキツグ様」
後ろから呼びかけられる。
すたすたと早歩きで駆けよるべヘナだった。赤い髪は最初にあった時より大分伸びており、まるで獅子の鬣の様だった。オキツグと大差ない年齢の筈だが、見た目はティーンの少女にしか見えない。近衛の蒼い軍服と、軍人としての厳しい過去を垣間見せる鋭い目のみが本来の彼女を語っていた。
その声は冷ややかに、恭しく、しかし好戦的に、何かを試すかのような響きがあった。
あえて言うなら挑発的。本人は意図していないのだろうが、この少女の様な女には人の心をざわつかせる不敵さがあった。不遜さと言ってもいい。
「・・・お前か」
「先程はご指南ありがとうございました。久方ぶりに貴方の強さを隊員達に再確認させる意味でも大変有意義であったかと思います」
二人で王宮の廊下を歩いていると、敬意や、敵意、友好、敵害といった様々な感情のこもった視線を感じる事が出来る。
しかし、総じて混ざっているのが恐怖だ。
「何より隊員だけではなく、それを覗いていた他の貴族、衛兵、女給たちに至るまでその凄まじさを見せる事が出来たのは大きいです」

淡々と、今日の天気は晴れだとでも言う様に語るベヘナの声になど何の感情も浮いてこない。
「・・・お前ね」
オキツグの声に呆れの様なものが混ざる。

ドンッ

「きゃっ」
横ばかり見て歩いていたオキツグは前方不注意で女給の一人と正面衝突した。オキツグはびくともしなかったが、相手の方はそもういかなかった。尻から転んでしまった女給に手を伸ばす。
「御免、大丈夫？」
努めて優しそうな印象になる様に心がけた。
「あ、ありがとうご・・・・」
見た目は十代後半、その弾ける様な瑞々しさが印象的な女給に伸ばした手が、自分から見て嫌らしいものに見えて仕方がない。
ゴクリ、と喉が鳴りそうになる。
（そう言えば最近ご無沙汰だったからなぁ）
「う・・・あ・・・・・」
尻もちをついた女給が呻く様にこちらを凝視している。
「おい、どうかしたのか？」
その声に娘の肩がビクリと震えると、ばね仕掛けの様に跳びあがり、慌てて頭を下げると脱兎の如く逃げ出した。
まぎれもなく、恐怖の色がにじんでいた。
「あ・・・・」
手を伸ばしたまま間抜けな姿勢で立ちつくすオキツグ。
「逃げられてしまいましたね」
冷笑を含んだベヘナの声にキッと睨む。
「・・・・お前のせいだろ」
現在のオキツグの立場は近衛将軍、つまりは王家が有する軍事力

のトップであり、コーポレートガバナンスの引き締め役である。そしてベヘナはそのまま副官として持ちあがり、将軍補佐の立場として近衛、ひいてはオキツグ個人のマネージャー、スポークスマンとしてその雷鳴を国内に一気に知らしめた。

具体的にはオキツグが《氷王》の異名を持つ超戦士級の剣導士であると言う事。その他の武功を世間に公開し、傾きかけた国をたてなおし、オキツグを恐怖の象徴とする事で組織内外の引き締めをはかったのである。

リュロンを騎士姫として祭り上げていた時と同じように、オキツグを象徴的な存在にしたのだ。

曰く、彼の者が歩んだ地は凍土の不毛の大地とかす。

曰く、裏切り者は親類縁者に至るまで黄泉に送る。

一度でも目をつけられれば地獄への片道切符を手に入れたも同然であり、その圧倒的な暴力から逃れる術は持たない。

冷徹で、強靭な、今のマクヴェスに求められる将軍としてのアイドルをつくりあげたのだ。

（確かに凄い事だとは思うさ）

何より、ただ一介の軍人に出来る思考方法ではない。ベヘナは騎士と言うよりも軍略家であり、その視点はこの国を動かす立場で俯瞰している。

オキツグという戦士に様々な恐怖と賞賛のテクスチャを張り付け、その実態を置き去りにしたまま、今ではオキツグは救国の英雄であると共に恐怖の象徴と化している。汚職文官や反体制派の貴族などに対してオキツグ名義で出された死刑執行書もかなり多くあった。

「それが天命なのですよ」

広い廊下の先からエコーが聞こえる。

振り返った先には黒い修道服を着た若い男が立っていた。

歳は三十台前半、浅黒い肌に黒髪で、線の細い美男子だったが、不思議と性別を感じさせない。胸元から垂らされた銀の薔薇十字のロザリオが示す聖職者の証のせいかもしれない。父性的で母性的。

全てを包み込む優しさとその大きさからくる怖さの様なものが備わった、まさしく聖人の様な男だった。

「これはダミアン枢機卿、お久しぶりです」

ベヘナがすかさず挨拶する。こう言ったところで如才ない彼女は本当に凄いと思う。殆どヤクザな仕事しか経験していないオキツグでは出来ない芸当だ。

にこりと笑って返礼すると、オキツグに向き直る。

「貴方は様々な呼ばれ方をしているね・・・・氷王、首切り判事、慈悲なき刃、皆殺し剣士、鋼鉄将軍・・・どれもこれも随分な響きだ」

「・・・それは少なからず貴方も関わっている事でしょう」

呻く様にオキツグは返した。

ダミアン枢機卿。彼はマクヴェスの王位継承権を有する十二貴族の内の一つ、エア家の出身で、若くして僧籍に入った英才だった。

「仕方のない事です。長らくの戦乱、そして王国の歴史が発した歪は様々な処で軋轢を造っております。当面、腐敗貴族の始末は王国にとって急務でしたからね」

エア家は十二貴族の中でも神事を司っている。そのエア家の枢機卿がオキツグ達の後ろ盾をする事で、その行為は神の代行者としての意味も出てくるのだ。エンデバルドもガロンも支えてくれてはいるが、宗教上の後ろ盾はそれ以上に大きな意味を発する。

「それに、我々は同じくマクヴェスの未来を憂いている同士ではありませんか」

その眼は真剣だった。

(ああ、全くこの人は)

オキツグは心の中で呻いた。自分よりも年上の癖に、人生経験も豊富だろうに、眼の前の人物は本当に王国の未来と民の事を心配していた。初めてベヘナに引き合わされた時、この人物も所詮は政治屋の小人物と侮ったものだが、それでもこの熱は錯覚のしようがない。

青臭く、若々しく、何処までも真っすぐな情熱に満ち満ちている。
そこが何よりも眩しかった。
「ああ、そうだ」
思い出したようにダミアンが言った。
「そう言えば奥さんはそろそろだったね」
「ええ、ああ、はい、来月が予定日です。でも、生まれるまで来るなって、一応は写真を送ったり、電話で連絡取り合ったりしているのですが」
もともと長身のリュロンだ。出産が近いと言うのにそれ程お腹は目立ってはいないが、それでも来月には自分の子供が生まれると思うと落ち着かない気分になる。
（俺は、自分勝手な奴だな。殆どベヘナに任せている事とは言っても、自分の名前で沢山の人間を死刑台に送り込んどいて・・・）
自分の子供の誕生を喜ぶのはどこか罪悪感があった。
「いいのですよ」
ダミアンが言った。言葉には出さなかったが、その内心を正確に察していたのだ。
「貴方は貴方の幸せを喜ぶ権利があります。彼らは貴方、何より我々が死に導きましたが、その苦しみを一人で抱え込む必要はありません。それに、彼らは彼らで他者の幸せをないがしろにして生きてい来ていたのですから因果応報は当然です」
言葉の一つ一つに迷いがなく、それでいて拒絶する様な厳しさのない。不思議と心にしみわたる言葉だった。こういった事を言われると、眼の前の人物が聖職者である事を認識させられる。
「すいません」
「いえいえ、同士である事は勿論の事、僭越ながら貴方の事は個人的に友人であると思っておりますから」
照れたように笑うダミアンに、オキツグは雷に打たれた様に動けなかった。
そう言えばこの世界で自分に友と呼べるような存在がいただろう

か。
ダミアンが「それでは」と言ってその場を去っていく。
何もかもが混沌に満ちている世界で、人の価値とはすなわち実力と結果だった。それにより認め合い、関係を構築していった訳だ。情がわく事もあったし、それは当然の事と思う。しかし、日本にいた時の様に、情から始まる関係などありえなかった。
すなわち、友などでは断じてない。
妻でさえ、その始まりは共に立った戦場からだったのだ。
「徳の高いお人に友と呼ばれて舞い上がっている最中失礼しますが」
「・・・お前ね、確かに嬉しかったのは事実だけど・・・まあ、いいや。で、何？」
「タケル君です」
あの少年は一応はオキツグの庇護かにあるので、よく外に連れ出してはいた。いつもは騎士団の稽古を見学させているのだが、今日は違う場所に預けてあった。
（あいつもこの世界で生きていくにはそれなりに心を強くせんとな）
異世界人である事は明かしていない。ただ、オキツグと同郷であると言う事から注目する人間は多いのだ。
「そろそろ迎えに行く時刻です」
「ああ、確かリザース准将のところだったか？」
「はい、王城にある執務室でお茶を頂いているそうなので」
「迎えに行くか」
その場を後にした。

「それでの、光学系術式による電磁場と光共振の固定周波の変動に関してはの・・・・」
タケルは眼の前の老人が話す、よく分からない言葉の羅列を良く分からないままに聞き流していた。

（僕、何でこんなところでこんな話をしているんだろ）

不思議に思う。

ここ半年でタケルの生活は大きく変わった。何より住む場所が、世界が文字通りで違ってしまっているのだ。きている服も小学校に通っていた時のものではない。面倒を見てもらっているオキツグという人物と同じ近衛騎士団の女性物のSサイズをそのまま貰ってきている。普段着もそれなりに持っているが、今タケルがいる王城など、公式な場所に出入りする際には手っ取り早くていいのだそうだ。もっとも、正式な近衛団員では断じてない。

「これこれ、聞いておるかの？」

「え、あ、はい、聞いてますよ」

その瞬間、部屋の扉が開いた。

「失礼しますよ」

オキツグだった。白い髪に蒼い瞳という容姿だが、一応はタケルと同郷に人間の筈である。

「おおう、近衛将軍か、よく来たの。して、時間か？」

「ええ、タケルはどうです？」

「なかなかよいよ。物覚えも悪くない」

眼の前の老人、リザーズ准将は王国軍の魔術に関する技官だった。魔術に関する造詣も深い事から、タケルはこの人物に魔術の師事をしている。といっても基礎的な事を定期的に教導して貰っているくらいで、未だに殆ど魔術など使えないのだが。

「申し訳ありませんね、貴方に素人の相手をさせるなんて。国の外にまで名の知れている魔術学者であると言うのに」

「構わんよ。それなりに楽しいし」

そこでリザース准将が思いついた様に手を叩いて引き出しから数枚の紙束を取り出した。

「そうじゃった、思い出した」

「それは？」

リザースが紙束を差し出すと、オキツグはそれを受取りながら問

うた。
「ちょいと気になる事があっての、王国の剣殿には耳に入れた方がよいと儂が一存した」
タケルも横から覗く。
パラリ、パラリ、と捲り、とある写真が添付された一枚にいきついた時、二人は凍り着いた。
「これは、一波乱起こりそうですね」
後ろからベヘナの声が聞こえる。
「随分前に起こった不可解な幻影がまた起こったそうじゃ。しかも今度は消えずに残っておる」
そこにはマクヴェスの峻厳な岩山を背景に再び映しだされた東京の姿があった。

第3話　日輪賛歌

『オキツグ？』

電話の向こうからリュロンの声が聞こえる。呆けていて返事を返すのを忘れていたオキツグは「ああ」と返事した。

「それで、変わりないか？」

『ああ、この時期になってくると逆に一安心だ』

風が頬を撫でる。風の音が雑音になって会話の邪魔をするが、相手の言葉はよく聞こえた。

外だ。しかも、辺りは岸壁が並び、空は太陽が高く昇っている。温暖な気候のマクヴェスにしては珍しく肌寒いが、それは標高が高い場所にいるからだ。

（凄いもんだな、こっちの世界の通信機ってのも）

内心で驚嘆しつつも会話を続ける。

「何で安心なんだよ」

『だって、この時期になれば、私に何かあってもお腹の子供は何とか生きていけるだろうからさ』

オキツグは苦笑した。

「確かに子供の事も大切だが、俺が聞いたのはお前の体の事だよ」

最初からそのつもりで聞いた。そしてリュロンは最初からそのつもりで答えた。既に一人の母親として生きているのだろう。直接は殆ど会えていないが、写真や電話から感じ取れるリュロンは戦士として共に戦場をかけていた頃とは考えられない程に慈しみに溢れている。口調も同じ、容姿も伸ばした髪も後に編んでいるくらいで他に変化はないのだが、しかし、彼女の根幹が違うものに切り替わっている様に思えて仕方がない。

（寂しいって思っちゃうのは甘えなんだろうな）

戦士としてのリュロンは終りを告げた。しかし、それは幸せな事でもあるのだろう。少なくとも、婦女子が必要にかられて剣を取る

世界などこちらから願い下げだ。
『心配するな。私も大丈夫だ。多分、来月には新しい家族がエンデバルドの屋敷に増える事になるだろうな』
ここしばらく、リュロンはエンデバルド家が所有する別荘の一つに、オキツグのみがマリアやギーズ、義姉夫婦と共に生活している。
「そうか、俺とお前の部屋は変わらないままだから」
『変わらず？
お前、ベビーベッドくらい用意しておけ』
「分かった。義姉殿に相談してみるよ」
『・・・そうか』
リュロンの声が曇った。
「どうした？」
『・・・お前も知っておくべきなのだろうな』
何かを決意する様に間を置いた後、リュロンは語った。
『何で、姉上達がいるにも関わらず、私達の子供が次期王位継承者として有力視されていたか、だ』
マクヴェスの慣習により、当主の嫡子は好ましくないからだと聞いていたが、それ以上の理由がある様に思えた。
『確かに戴冠家自体の血筋の保存の意味もあって、当主家の嫡出子は好ましくないとされるが、別に絶対ではない。それ以外にいなければ王として認められる事になっている。王室典範にも乗っている最重要事項の一つだが、それでも私達の子供でなければならなかったのは・・・・・姉上は、不妊症なんだ』
「・・・・・」
オキツグはその事実を聞いてもどこか納得があった。
『確かに、エンデバルドとしても、私達夫婦としても子供の誕生はこの上なく嬉しい事だ。だが・・・』
「マリアさんとしては内心に複雑な部分もあるだろう、て事か？」
『・・・ああ、勿論、姉上も喜んでくれるだろうし、祝福してくれるだろうが』

電話の向こうのリュロンの顔が憂慮に染まるのを感じた。
暫く沈黙があって、オキツグはふと思いついた事実を語り始めた。
「なあ」
「・・・ん？」
「今、お前のお腹の中にいる子供が王位継承者になるんだよな？」
『それは、分からない。一応は男子が好ましいとされているからな』
どこか歯切れの悪いリュロン。
「でも、俺達の子供が次の王様になって、でも、マリアさん達には子供が出来ないから・・・」
『私達が頑張る必要があるな』
どこか照れたような、笑いを含んだ声が返って来た。
「だったらさ、その次期当主になる子供の方はマリアさんに預けてもいいんじゃないか？」
思いつきの発言だった。子供を孕んでいる妻に話す内容ではない気がしたが、それでも今、この時に話すべきだとオキツグは思った。
『・・・そうだな』
「嫌か？」
『・・・妊娠して、お腹の中にいる子供に対して、ここまで暖かな気持ちになる事が出来るとは思わなかった。多分、これが母としての愛なのだろうな』
黙って聞いていた。
『この温もりを、自分の手元から離すと思うと・・・』
「怖い？」
『不覚にも、そうだ・・・だが、それも良いのかもしれないな』
あくまでも選択肢の一つだ。
暫くくだらない話をした。昔の事だったり、今の状況だったり。
そうしている内にオキツグは肩を叩かれる。振り向くと自分と同じように蒼い外套に軽鎧という近衛騎士の制服を纏ったベヘナの姿だ。
「すまん、時間の様だ」
『そうか』

そこで電話を切るところだったが、リュロンが何かを言いたそうにしている雰囲気を感じて切らずにいる。
『・・・・・・』
「どうした？」
『あ、ああ、すまないな。忙しい時に電話なんかかけて・・・・でも』
不安だったんだ。そう言った。
『どこか遠くに行ってしまう様な気がして、どうしても声を聞きたくなった。すまない』
そう言って電話を切った。
懐に携帯をしまうと、ベヘナがいつも通り冷ややかな目をしていた。
「仲のよろしい様で」
「・・・ああ、お陰さまでな」
遠くから巨漢の曹長が駆け寄ってくるのを見た。恐らく、斥候に出していた彼らの報告だろう。
「本当に、どうなっているんだろうな」
オキツグが目を凝らす先には、鏡の面の様に、まるで絵画の様に東京の風景を映すマクヴェスの荒れた岸壁があった。
「洒落にならないぜ」
リュロンの言葉を反芻しながら、オキツグはそう漏らした。

その日、エンデバルドの屋敷の一室でトランク相手に格闘している一人の女の姿があった。
「くっそ、入れえええ！！」
怨嗟の念でも込める様に、まるで呪詛の様な気合をかけながら開いたまましまらないトランクに体重をかける。

コン、コン

ドアがノックされる音で気がそれて、再びトランクは全開。反動で床の上に転がりながらマリアは客を出迎えた。

「お邪魔するよ」

「あら、あなた」

夫、ギーズが床に寝転がったはしたない姿勢の妻を見て苦笑する。この入り婿の夫には人に自分の理想を押し付けない美徳があった。

すなわち、妻のだらしなさに寛容。

「そっか、もうすぐテレジアの予定日だっけ」

「そうよ、不安だろうからあたしが傍についててあげなくちゃ」

見まいと付添人を兼ねて義妹の元に向かう事を聞いていたギーズは優しく頷く。

「よろしくね」

「勿論よ、あの子、変なところで気を遣ってるみたいだから・・・」

マリアの顔が呆れと優しさを等分した様な顔になる。床の上にそのまま胡坐をかくと頭をガシガシと書いた。

「むしろ、こっちの方が負目がある位なのに」

結果的に、妹のテレジアは望む相手と結婚する事は出来たが、それはあくまでも結果論だ。妹にそういった相手がいなかったとして、それでも結婚と跡継ぎを求めた時、心のしこりが残ったかもしれないと思うと気が気がじゃない。

「その点はオキツグ君にも感謝だね」

テレジアに近しい存在であった偶然、そして戦士としてではなく、一人の女として生きる選択肢をテレジアに与えた存在として。

二つに、その武功。

「正直、ただ強いだけの剣導士に出来る事なんてたかが知れてると思ってたけど、彼は強いだけじゃないね」

テレジア、リュロンを騎士姫として挙げめていた、頂いていた親衛隊も今やオキツグを長と認めている。強さと、それに伴うカリス

マ性が彼らの心をどうしようもなく引き付けるのだろう。
「僕は元軍人だったけど、参謀畑だからあまり剣は得意じゃないし、でも、昔の仲間からの評判は聞こえてくるよ」
「でも、あなたの古巣って王国軍でしょ？
近衛軍とはあんまり仲よしじゃなかった様な・・・」
「英雄だからね」
ギーズは意味深な苦笑をした。
「あの子、昔、テレジアの後についてまわっていた娘がいたでしょ」
「ええ」
「ガロン家の娘ってのは君も知っているだろうけど、どうやらその娘が裏で糸引いてるみたいなんだ」
「・・・あらあら、義弟君は尽くしてもらえる女には事欠かないってタイプかしら」
「表向きは彼女の父が当主だけど、どうやら娘の傀儡っぽいね・・・普通は逆のパターンが多いと思うんだけど・・・後はダミアン枢機卿かな」
ダミアン枢機卿の名前が出たとたんにマリアの顔が一気に不機嫌になった。
「あたし、あの男嫌い」
「枢機卿をあの男呼ばわり出来るのは君くらいなものだよ」
マリアとダミアンは貴族の子弟が集う幼年学校時代の同級生だった。
「あいつ、昔っから変に正義感とか強くて寮長とかやるタイプだったけど、僧籍に入って暑苦しさに磨きがかかっている様な気がする」
熱血が宗教に嵌ると碌でもないというのがマリアの持論だった。
しかも、枢機卿として辣腕を振う彼の分野は異端審問。マクヴェスの国教であるマリア教は大陸共通の大宗教団体であるが、長きにわたる戦乱により分派しているのが現状だ。マクヴェスのマリア教、俗にマクヴェス派と呼ばれる彼らは異端や異教に対して寛容な代わりに王国中枢に太いパイプを持っている。この国は専制君主制であ

るが故に、政治家を目指そうというものは僧籍に入るのが普通だった。

「異端審問の担当官だっけ、でも、彼がオキツグ君のバックに着いたって事は国が、神の教えが彼の存在を認めたって事だから、少なくとも余計な横やりを入れてくる人がいなくなったのは良い事だよね」

開ききってしまったトランクを、ギーズに頼んで無理やりしめてもらう。お礼のキスを頬にして使用人が用意した車に向かうが、マリアの心から不安が去る事はなかった。

(そうじゃない、そうじゃないのよ)

オキツグの、大陸第九位《氷王》という強さを隠れ蓑に何者かが暗躍する。それは彼を不幸にするかもしれない。

それは避けねばならなかった。何せ、彼は愛しい妹の夫、彼の不幸はすなわち妹の不幸でもあるのだから。

砂を踏む音が足の裏から聞こえる。

「・・・・」

無言で、ただ眼の前の光景を見いるオキツグの瞳には何の感情も移されていなかった。すぐそこに、剣の間合いで言えば一刀足の間合いにその光景があった。

東京、ビルとコンクリートの街並みを俯瞰する様な、その光景は確かに上から覗くものだったが、自分達はそれを地に足つけて前方に眺めている。こちらとの位相を無視したものだったが、それを立体映像や悪戯の類にするには余りにも生々しい光景だった。

無言で鏡面に向かって足を進めると、後ろで付いてくる影がある。

「お気をつけ下さい」

自分を囲む様に鏡面を警戒している戦士達は、眼の前の不可解な光景に茫然としたような、それでいて不可思議な何かを見ている様

な、妙な表情をしていたが、オキツグは真剣に、そして緊張を伴った様子になりながらそれに近寄る。
確かに東京だ。地面を照り返す光から、夕方である事が分かる。この光景を目にするのは数か月前に経験しているが、じっくりと眺めたのはこれが初めてだ。本当に久しぶりの故郷の光景だ。
オキツグは鏡面に向かって魔導刀の柄に手をかける。周りの戦士達は道を譲りながらも緊張の色を濃くした。
ふと思いついた様に、柄に手をかけたまま後を振り向いた。
「どうかしましたか？」
「あ？
ああ、考えてみれば、俺が遣ってるこの魔導刀、大業物級の一振りなのに銘が無かったなって」
《白燐丸》を握っていた頃は何となくだがその銘を意識しながら戦っていたような気がする。それは《白燐丸》の機関部に封じられた魔獣の意思の表出、無意識に気を引かれていた証拠とでも言えなくはないが、それでもただの名無しでは何となく落ち着かない様な気がした。
「良い考えが御有りで？」
「んん、無いんだよな」
「僭越ながら、私が考えましょうか？」
「言ってみろよ」
そうすると、ベヘナは考える様に虚空に視線を泳がせて、オキツグの顔に焦点を着地させると口を開いた。
「タマ、とか」
「いや、猫じゃないんだからさ」
「では、ポチ？」
何となく、からかわれているのだろうと感じた。見れば、ベヘナは左手で特殊な棒状の魔導剣《蜘蛛の糸》の鯉口を切っている。オキツグの今の問答に意味がない事を見通しているのだ。
単なる現実逃避だったのだが、ベヘナという現実はオキツグの中

にあるすべき事を果たせと急かせる。
一呼吸おいた。
左手を鞘に手をあて、鯉口をきって刀身を抜き放つ。
「イグニッション」
今時珍しい音声起動の機構が魔導刀全体に力をいきわたらせ、微かにであるが鳴動している様な印象を受けた。
（いい刀だ）
それなりに戦場を経て、魔導剣には数多く接してきているが、良い剣はこの響きが違う。
切先を鏡面に向けたまま歩く。決して刀身はぶらさないが、そこに無駄な力が入っている訳ではなく、無造作に刀を構えながら鏡面の前まで来る。
すぐ眼前には東京の姿だ。
十年以上前、自分がこの世界にかどわかされて以来、再び見るとは思っていなかった光景だ。
自分は大分変った。
視界にちらつく髪は真っ白だし、目は蒼い。背も伸びたし、こっちの世界に帰化して妻までもうけた。今度は子供まで産まれると言う。
何の冗談だと思う。
しかし、嫌な気はしない。
だが、眼の前の光景はオキツグの心を無用にざわめかせる。
刀の切っ先が数ミリ手前で鏡面の前に止まり、一瞬だけ間を置いて突き刺さった。
「・・・・・・」
感触はない。
後を見なくても、ベヘナ以下近衛騎士団員達が固唾を飲んで見守っているのが分かる。
（ああ、分かっているさ。俺は故郷と、日本と決別した男だ。別れざる得なかった男だ。郷愁もある。後悔も・・・だが、今更全て

を捨てて戻ろうとは思わない。思えない）

そのまま故郷に囚われて、この十数年を無に帰されてしまうのではないかと思った。

切先が進む。感触はない。そのまま空気を突いている様な感覚があり、鍔まで飲み込んだところで引っ張られるようん引力を帯びた。

「ッ・・・・」

慌てない。それ程強い引きではない。そう、まるで刀が重力に引っ張られている様な感覚だ。

そうなると、ますます鏡面の向こうの世界が生々しく見えて仕方がない。

「・・・・・せーの」

そのまま鏡面に身を躍らせる。

腕を飲み込み、頭、胴、足の順に鏡面に消え、後ろで慌てた様な動きを感じたが、途中で何もかも消えた。

「うはっ・・・・・・・」

刀と同じようにオキツグの体も引力に囚われた。引かれるがままに体を躍らせる事は危険だと本能が警鐘を鳴らすが、それでも何も出来ない、する気になれない理由が眼前に迫る。

「日・・・本・・・・・・」

東京の街並みが鏡面越しではなく、現実の様に、現実としてオキツグに精神的に、物理的に迫る。

「オキツグ様！」

声がして上空を仰げば、赤髪に少女の様な外見をしたベヘナが必死の形相でこちらに手を伸ばしていた。

後から続く部下達の姿もある。

「高度、６００メートルと言ったところですか、剣導士なら、適切な対処をすれば何とかなります！」

空中を泳いでオキツグの横まで来る。

「オキツグ様！」

茫然としたまま何も答えないオキツグにベヘナは声を張り上げる。

「任せた」
「はい！？」
「着地準備、俺の分、任せた」
答えを返さない。しかし、腰の後ろから《蜘蛛の糸》を引き抜くと、ワイヤーを巻いたドラムが回転、細い刃が一斉に放出される。そして柄ごと両手でオキツグの腰に手を回すと、プールを泳ぐように着地地点をずらしにかかる。
二人分の体重を一人で支えるには《蜘蛛の糸》のワイヤーソーの力が必要なのだろうが、そうすると他の隊員を細切れにしてしまう。それを避けるためだろうと人ごとのようにオキツグは考えた。
眼の前に迫る。そして遠くに沈む夕日が照らす故郷の光景はオキツグに全ての行動を許さない程の衝撃を与えていた。
「負荷、掛かります！」
ベヘナの叫びと共に支えられた腹を中心に圧力がかかる。オキツグの体重を支えるために歯を食いしばるベヘナの息遣いが聞こえ、急に怠けている事が申し訳なくなってきた。
（考えてみればこいつ、後衛系なんだよな）
「放していいぞ」
「・・・・・はい！」
答えるのも辛かったらしい。そのまま自由落下していくが、そこらかしこにベヘナが着地のために準備した殺人ワイヤーが配置されている。地面までビル一つ分の高さはあったが、それをジャングルジムの様に、刀と足のブーツに仕込まれた金属部分を利用しながら降下し、着地した。
ズドン、そんな響きと共に地面がひび割れた。
遅れて後に緩やかな着地の音、遠くに複数の破砕音が響く。近衛騎士達のものだ。
オキツグは辺りを見渡した。上空には先程と一転、自分たちのいたマクヴェスの岩山の姿を映した鏡があり、近い場所まで電波塔の様なものだ立っていた。

「東京タワー、じゃないな」
そんなことを呟きながら辺りを見渡す。
標識を見る限り墨田区の様だが、辺りには誰もいなかった。おかしい。夕方といえば一番人通りが多い時間帯の一つだ。そこかしこにサラリーマンや学生、それらを目当てにした客商売がいなければいけない時間帯だが、人っ子一人いない。
比較的新しい、電波塔の麓に建てられたオフィスビルの中にも受付には人がいなかった。
「そうだ、ベヘナ」
「はい？」
標識を指差す。
「読んでみろ」
ベヘナは指差された標識に眼を凝らした。
「『止まれ』って命令されてますね、なんだか上から目線でむかつきます」
その答えに苦笑しながらも脳裏では冷静に現状を計算する。
（いつか聞いた異世界間の行き来は脳にコミュニケーションのための翻訳装置を半自動的に備えると言う話は本当か・・・）
これも現実逃避の一種だ。

ババババババババッ

空を切り裂く様な擦過音が響いた。見上げればそこにはカーキ色に染め上げられた軍用ヘリコプターがビルの隙間を縫う様にしてオキツグ達の元に降りるところだった。
（ヒューイか・・・）
そこから数人がロープを伝って見事な着地を見せると、手に持ったアサルトライフルを構えてオキツグとベヘナの二人を包囲する。
十人程だろうか。油断なく迷彩服の戦闘員達が取り囲んでいるのをただ眺めていたが、ただ警戒するだけで今直に射殺してしまおう

と言った様な殺意は感じなかった。
「ほう、突撃銃ですか、また珍しいものを使います」
向こうの世界では魔術の台頭により主流から外れてしまった武器だが、地球では現役バリバリの兵器だ。加えて、恐らく陸上自衛隊の隊員であろう彼らからはよく訓練された気配を感じた。
その中の一人が前に出る。一人だけ銃を持たない。恐らく指揮官だろう。
「私は堂島淳一郎一等陸尉である。君達に所属と階級を名乗る事を求める」
堂島と名乗った男は高い背丈に厚い胸板をいからせてこちらに問うてきた。
オキツグは一歩前に出た。
「俺が指揮官だ。他の着地地点に部下達がいた筈だが」
「そちらには別のもの達が向かっている。加えて問うが・・・・」
堂島の言葉に被せる様にオキツグは言った。
「ここは日本なのか」
「あ、ああ、そうだが」
静かな声だったが、そこには切迫した雰囲気が滲んでいる。言いようの知れない圧力を感じてたじろぐ堂島。
「そうか、日本なのか」
オキツグは茫然とした様に呟き、堂島が答え、自分が言った言葉の意味を咀嚼した。
(帰って来たのか・・・)
ガランッ
気がつけば手に持っていた魔導刀を取り落としていた。堂島達が警戒の色を濃くするが、オキツグにそれを言い訳する余裕はなかった。
猛烈に吐き気の様な感情の波が訪れるのを自覚した。

「ッ・・・・」
銃を構えて警戒する彼らを無視してその場を離れ、遠くで膝と手を地についた。
困惑する堂島達にベヘナがオキツグの魔導刀を拾いながら言った。
「少し、少しだけ待ってあげて下さい」
堂島は逡巡し、やがて頷いた。
「ああ、強引にどうこうするつもりは彼にもない様だが・・・・彼は一体・・・」
「彼は、オキツグ様は・・・」
一度言葉を飲み込み、しかし、意を決した様に口を開いた。
「彼の名前はオキツグ・クシナ・エンデバルド、我がマクヴェス王国近衛魔導騎士団の団長にして近衛将軍である大英雄、しかし、彼の本当の故郷は今、我々が立つこの世界であると聞いています」

第4話　VETERAN　TROOPS

「櫛名先生、これお願いね」
小学校教諭、櫛名真澄は隣の教員控室の隣から忘年会の出欠表を渡してくる学年主任に会釈しながらボードを受け取り、出席に丸をつけて返す。
「今年の幹事、前田先生でしたっけ」
前田と呼ばれた学園主任の中年女性は苦笑いしながら「そうなのよ」と返す。
「あたし、お酒はあんまり飲めないんだけどね」
「まあ、それとこれとは別ですものね」
「でも、櫛名先生は大変かも」
どうしてです？　と聞くと前田は笑顔に苦みを濃くしながら言った。
「櫛名先生、若くて美人だから。きっと男の先生方はお酌したがるんじゃないかしら。美人のほろ酔い姿なんて男の人って好きなんじゃない？」
真澄は長身でスタイルもいい。可愛いと言うよりも美人で、切れ長の瞳が印象的な大人の女だ。式典の際にパンツスーツで決めた姿は学校の先生と言うよりもモデルか、有楽町あたりを歩いていそうな一流企業のＯＬにしか見えない。
学校って出会いがないからなあ、と真澄は心の中で嘆息する。
男に限った話では無く、女もまたそうなのだが、昨今の団塊世代の集団定年退職のせいか、真澄の赴任した小学校には若い男性教諭が多い。
「お持ち帰りされない様に気をつけてね」
苦笑いしながら了解ですと返す。
既に昼を過ぎた頃合いだが、いつもであれば子供の騒がしさが聞こえてくる校内も今は静かだ。今日は土曜日で半日授業。既に担任

している四年生のクラスの児童も全員下校しており、終業式に向けた整理が今のところの仕事である。
誰かが部屋に備え付けてあるテレビの電源を入れた。

『先日に完成したばかりの東京スカイツリー、インフラを支える設備としてではなく、観光における象徴としての役割も期待されていたそれは、我々に変貌した異形の姿を晒しています』

液晶テレビからニュースキャスターの急いた声が飛んでくる。
それを眺めていると隣の前田が疲れた様に言葉を紡いだ。
「まさか異世界なんて、信じられないわよねえ」
真澄は異世界と言う言葉の響きを胸の内で反芻させた。
日本の東京スカイツリーの建つ位置に突如として現れた正体不明の鏡の幻は、当初では怪奇現象、偶然の類で世論は固まっていたのだが、それが暫く続くと様相を変えていった。
自衛隊の出動、周辺区域の住民の避難、そして国民と各国が緊張をもってその現象を見守る中で、やがて異世界からの使者を名乗る集団が現れたと言うのだ。
一般人に対しては情報規制がかけられているため、その話も半ば眉つばだったのだが、こうして連日にわたりニュースに取り上げられているのを見るに事実なのだろう。
今、真澄達が見ている番組の映像もＶＴＲの再放送で、毎日の様に繰り返されている。
「今日だっけ？」
「ああ、異世界の人達が会見を開くって話ですか」
そう、今まで神秘のベールに包まれていた異世界人が今日、姿を現すと言うのだ。
その存在を信じていたものも、信じていなかった者も、固唾を呑んで見守っている。周辺諸国は様子見の沈黙を続け、国連はまとまりきらずに交渉を日本に丸投げしてきている現状、新たに現れた隣

人との関係は未だに不定形。その在り方が徐々に決まって行こうとしている。

一人身の父がいきなり継母を連れて来たらこんな気分かしらと下らない例えを考えて笑ってみる。

既に仕事はほとんど終わっている。後は帰るだけのなのだが、もうじきその会見が始まると言う事だから見てから帰ろうか。きっと同じ考えの先生ばかりなのだろう。教員控室では沢山の教員たちが何をするでもなく、コーヒーをすすりながらテレビの画面を眺めている。

「あ、始まる様ね」

テレビの画面が切り替わった。

恐らく総理官邸の記者会見室が割り当てられているのだろう。背後の赤い垂れ幕がよく映えている。壇上横に設けられた卓の前には総理大臣の中年男性の姿。

（あれ？）

その横に一人の少女が立っている。赤い髪が印象的な色の白い美少女だ。蒼い外套を纏いながら、その容貌には年頃の子どもにありがちな一切の甘えのない厳しさが宿っている。場に似つかわしくないその存在に眉をひそめる者はテレビの前に多くいるだろう。

『それでは、記者会見を始めさせていただきたいと思います』

総理大臣の前口上は短く、簡素なものだった。既に知らされている通り、東京スカイツリーの上空に異世界へのゲートが現れた事。日本政府は管理組織から建造物ごと土地を買い取り、今後としては両世界の発展の基盤としていきたい事。そして・・・・

これから、異世界側からの使者、その代表が挨拶として記者会見を開く事。

今回はあくまでも友好の準備のための訪問と言う事になっている。実際に取り仕切るのは別の者になるであろうが、だ。

『では、今回の表敬使節団の代表でいらっしゃるマクヴェス王国近衛魔導騎士団将軍閣下より挨拶を賜りたいと思います』

その言葉を切ると同時に会見場横のドアが勢いよく開け放たれる。そこから少女と同じ蒼い外套を身に纏った男達（女も多い）が会見場に足を踏み入れると報道陣から一斉にフラッシュがたかれる。

彼らは壇上壁際、赤い垂れ幕に背を触れさせるように整列し、姿勢を正す。全てが微動だにせず、背景になってしまったかのようだ。

誰も壇上で己の存在を主張しない姿に、報道陣は一瞬だけ戸惑いを得たようだが、そこで新たな人影が扉をくぐって現れた。

再び猛然とフラッシュがたかれる。

その人影は長身痩躯の若い男だった。

やはり蒼い外套に身を包み、カチャリカチャリと言う音は腰の剣帯から聞こえてくる。

髪は雪の様に白く、肌は日焼けで浅黒いくなっている。

やや猫背ではあるが、しっかりと踏みしめて歩く姿に頼りなさは一切なく、壇上の中心で姿勢を正す姿は覇気に満ちていた。

彼の蒼い瞳がカメラを貫く。

一瞬、テレビの映像が揺れた。恐らく、カメラマンが身じろぎでもしたのだろう。そうせずにはいられない程の強い瞳だった。

（あ・・・・・）

真澄はその姿を見て凄まじい異和感に囚われた。

何かが自分の本能に猛烈な警鐘を鳴らしている。

なんなのだろう、と戸惑いながらテレビの向こうの人物を見守る。

何の表情も浮かべない、厳しく引き締まった顔が、ふと緩む。一瞬だけ微笑むと。彼は言った。

『総理大臣閣下より紹介にあずかったマクヴェス王国近衛魔導騎士団将軍のオキツグ・クシナ・エンデバルドです』

男が名乗った瞬間、真澄に電流が走った。思わず座っていた椅子を倒して立ち上がる。何事かと教員たちが振り向くが、そんなこと構ってられなかった。

髪の色は白かった。瞳の色も違う。加えてその立場も。

真澄の知っているその人物はどこか頼りなく、それでいて絵筆ばかり握っていた。その彼は今、画面の向こうで腰に剣をつりさげて将軍の名乗りを上げる。

「・・・・・」

真澄は何か言葉にしようとして、喘ぐように口を動かした。しかし、喉からひゅうひゅうと情けない音が出るだけだ。

何もかもが様変わりしたそのあり様だったが、真澄はその人物に見覚えがあった。

『はじめまして、地球人類諸君』

不敵に微笑むその笑顔。

真澄はその言葉にたった一言しか返せなかった。

「お兄ちゃん・・・・」

第４話　ＶＥＴＥＲＡＮ　ＴＲＯＯＰＳ（後書き）

１１／８　誤字修正

第5話　プライド

『はじめまして、地球人類諸君』

「何がはじめましてだ。舐めているのか？」

男は吐き捨てる様に言った。

東京都港区虎ノ門。

夜空、星空の光が官庁とオフィスビルがひしめく建造物の森を照らす。それらの隙間に隠れる様に、昔ながらの街並みを残す一画に瓦屋根の日本家屋があった。

『長の屋』

神社、仏閣にある様な立派な観音開きの屋根に乗せた木彫りの屋号はそう主張していた。

明治時代から続く京懐石の店だ。庭木や木造りの手入れの良さが経てきた年月の深みを主張する。いわゆる高級料亭の『長の屋』は敷居の高さから客で込み入っていると言う事はないが、客を切らす事も無い様子がその人気と、『長の屋』で食事を取る事のステータスの高さを示している。

その個室の一つ、畳が敷かれたその部屋は障子の隙間から見える都会の景色と和風情緒のある装飾品に彩られた、一種のＶＩＰのためのものだった。

その部屋で小柄な固太りの男は胡坐をかきながら手酌で日本酒を呷る。

都市は四十台後半だろうか。髪をポマードで後ろに撫でつけ、ダークスーツのネクタイは既に外されている。スーツの仕立ても良く、男は容姿は平凡だったものの眼光は鋭い。

一見して一流企業の重役か、そうでなければ暴力団の頭目にしか見えなかった。

「地球人類諸君、まるで上から目線じゃないか」

「まあまあ、田原先生、そのへんで」
対面で正座する初老の男に宥められた田原と呼ばれた男。
先生、と敬称がついていた。
教師と言うには慈悲に欠け、医者と言うには知性にかける。
田原は政治家だった。
胸元に光る議員記章は直径約２０ミリの金属製台座に赤紫色のモールを取り付け、その中央に金色の金属製１１弁菊花模様を配している。
東北に強い地盤をもつ衆議院議員が田原宗一郎だった。
田原をいさめた男、松平義春は初老ではあるものの、かつての隆盛を思わせる逞しい体に巌の様な顔立ちでにこやかに語りかける。
「一応は国賓と言う事になっています。それにこれは日本にとっても好機です」
松平の言葉に田原は不機嫌さを滲ませていた顔を引き締める。
「中国がアメリカ国債の最有力購買者である現状、実行力をもたない分、日本は外交的に不利な状況にあります。昭和、平成とアメリカの庇護下で躍進を遂げた日本国ではありますが、その肝心のアメリカに中国の手が迫っている。いや、既に尻尾を掴まれております。つまり・・・・」
松平の言葉を田原が継いだ。
「アメリカはあてにならんと言う事だ」
斜陽の大国。それが今のアメリカだ。そしてそのリーダーシップは２００８年のリーマンショック以来、輝きを失い続けている。
ソ連の崩壊に会わせて一歩抜きんでていたアメリカの国力がその絶対性を維持できなくなりつつあるのだ。
田原はもう一度お猪口を呷った。
「ここ数年、とくにアジア圏に対する影響力の低下が著しい。韓国が竹島の件で色々言ってきてもアメリカは殆どだんまりだ。あれは国際条約、国連、つまりはその長たるアメリカが取り決めた我が国の領土だと言うのに」

昔のアメリカだったらその威を示すべく、何かしらの行動があったはずだ。それくらいにアメリカの掲げる正義とは傲慢で強大なものだった。

「その傲慢に守ってもらっていたのだ。日本は」

日本領海内に存在する地下資源も実質的に中国にちょろまかされている状態にある。新たなるエネルギー大国を目指す事が世間でも叫ばれているが、その主だった貯蔵先には国際的な問題を孕む可能性もあるのだ。現実的ではない。

つまり

「日本は孤立無援だ」

田原は渋面を濃くした。松平は感情を悟らせない頬笑みを浮かべながら田原に酌をした。

「新たなる希望の担い手に足るか、異界の国々よ」

「そう会って欲しい、またそうなる様に努力せねばならないのが今の日本の現状ですな」

松平は深く頷くと返礼の杯を傾ける。

「こちらへどうぞ」

総理大臣補佐官を務めているという与党議員に連れられてオキツグが通されたのは首相の執務室だった。

記者会見が終わった後、直に官邸内の部外者が立ち入り禁止の区域に移動させられた。外では記者達が血に飢えた獣の様にオキツグ達の情報を求めているからだ。

そして、首相がオキツグとの秘密裏な会談を求めているという事でやってきている。

補佐官がノックをすると奥から「どうぞ」という声が聞こえてくる。

「失礼します」

ドアが開け放たれ、こぎれいにされた室内の一番奥には執務机が堂々と鎮座する。その手前に設けられた応接テーブルの前で立つ一人の中年男性。

「先程はどうも、この国の首相をやっております長谷部一郎と申します」

五十前後だろうか。白いものが混じり始めた髪は後に撫でつけられており、黒いスーツも高級品だろうに、不思議とそれを嫌味に感じさせない着こなしが出来る男だった。それほど顔の造作が整っていると言う訳でもないのに、その平凡な顔立ち、装いからは貫録の様なものがにじみ出ている。

人が良さそうでありながら、油断ならない雰囲気を与える。そんな男だった。

オキツグは軽く会釈しながら促されるままに応接テーブルの前の椅子に深々と腰を降ろした。魔導剣は既に別室で待機しているべへナに預けてある。

泰然としながらも畏まった様子の首相を見ながらオキツグは不思議な思いに駆られる。

(俺はそんな大層な人間なのかね)

外交特使たるマクヴェス近衛魔導騎士団将軍である。ただの武官ではなく、王権の代行者である近衛のトップのオキツグは確かに両国の趨勢に影響を与えうる存在なのだ。

それが不思議でならない。何故自分の様な小市民がその様な大役を担っているのかだ。

しかし、それは妻と生まれてくる子のためである。その事を思い出し、気が引き締まる様な気がした。

「驚きました」

首相は言った。まるでオキツグの内心を現す様なその一言に、オキツグ自身の心が跳ねる。

「異世界が存在すると言うだけでも驚きであるのに、その異世界からの使者が日本人で、しかも貴方の様にお若い方なんて」

にこりと笑いながら窺うようにこちらを見る長谷部。
自分が日本人であると言う事も言っていないのに、その正体が看破されているであろうことにオキツグは苦笑した。
「まあ、紆余曲折の果てにって事です」
言葉を濁したオキツグに長谷部首相は笑みで答えた。
「向こうには貴方の様な方が多いのですか？」
「ああ、元がこちらの人間って事ですか？
それなら少なくはありません。ただ多くも無いってのが現状でしょうか。少なくとも北朝鮮の拉致被害者よりは少ないと思いますけどね」
「ただ、向こうの国とは違って貴国は友好的だ」
計る様な瞳がオキツグを貫く。
「ええ、ただ友好的であるが故に順応した漂流者の殆どは土着してしまっています。結婚して家庭を持ったり、向こうでそれなりの社会的な地位を得ている者もいるのでそこのところは尊重していただきたい」
「もちろんです」
その一例が眼の前にいるのだから当然だろう。
ただ、と長谷部首相は付け加えた。
「再会を望む家族もいるかもしれませんので、旧東西ドイツの様にはしたくないと思っています」
「それについては順次調整をって事ですね」
灰色の答えを返すオキツグに長谷部首相はそれ以上の答えを望んでいる様に思えた。今の政権与党は民事党だ。昨年の総選挙で政権交代を果たして野党から与党に成りあがった新興の与党としては何らかの実績が欲しいのだろう。公約で北朝鮮の拉致被害者に関する問題の解決を挙げて、それが未だに遅々として進んでいないと言う。類似性の高い異世界への漂流者支援を掲げてその失敗を払拭したいと言うところか。
だが、ここで約束できる事はないのだ。

本来、外交手順とは事前の情報交換と意思疎通によってあらかじめ妥協点を探っておく事にある。しかし、外交使節団が武官ばかりで外交権があるのがオキツグ一人しかいないという現状では向こうも、そしてこちらも慎重に動かざる得ない。

応えてやってもいいとおもうのだが・・・

ふとオキツグは思い出した。

「そうだ、最近の話ですが、こちらでも日本人の小学生を一人保護しまして」

「ほう」

長谷部首相の瞳が鋭くなる。

「今のところ、こちらで面倒を見ているのですが、彼の帰還をモデルケースにして渡りをつけるのはどうでしょう」

タケルの話をすると、意外にも長谷部は知っていた。何でも、彼がいなくなった際の不思議な現象はその後のニュースで長らく取り上げられる話題だったのだとか。

首相は満足そうな顔をしていた。とりあえず、何らかのアクションを起こせると分かって安心したのだろう。

異世界との接点という火急の事態に何もしないのでは政権は完全に国民の信頼を失う。

暫く世間話をした後に部屋を辞した。

ＳＰに連れられながら与えられた部屋に戻る間際、窓の外、首相官邸のまわりをハイエナの様にかぎまわるマスコミ陣の姿が目に入る。

「気が滅入るな」

その言葉を聞いたＳＰが何も言わずに苦笑する。

皆様そうおっしゃいます。そう眼が言っていた。

長谷部は客人を見送った後、部屋の椅子に疲れ切った様子で腰を

降ろした。
同時に大臣補佐官が入って来て紅茶を入れる準備をしながら労をねぎらう。
「お疲れ様です」
自分よりも年上の補佐官に軽く手を上げて返すと、ネクタイを緩める。
「ダージリンです。いい茶葉が手に入りましたので」
そういってソーサーをテーブルに置くと対面の席に補佐官が座る。
「で、どうでしたか？」
「あ、ああ、かれ、櫛名意次といったか、本名は」
長谷部は先程まで相対していた外交特使の事を思い出す。
異世界への扉が開いてから暫く、日本政府はその存在の意味が分からず、自衛隊を遣って周辺区域の警戒を行う事しか出来なかった。
突然、その空間の穴から幾人もの人影が現れたと言う話を聞いた時は驚き、さらにはその向こうに別の世界が広がっていると言う話を聞いた時にはもっと驚いた。
既に彼らがきて数週間が経とうとしている。友好的な国交を開くための下準備として、人員の派遣も両国ともに行われ始めているのが現状だ。その彼らからの報告は荒唐無稽ながらも信憑性に富むものだった。
中でも驚いたのは魔法の存在だ。
向こうでは個人の武力に重きが置かれているという。近代国家では考えられない事だが、政治的にも経済的にも文明的にも、異世界はこちらの世界とそん色ない様に思える。つまり、物量の利を知った上で、それを否定しうる存在が向こうにはあると言う事だ。
その一つが先程出会った青年だろう。
政治家として鍛えられた眼が、彼をただの人間とはカテゴライズしなかった。
「何より異常だよ、あんな若者があれ程の胆力を持っていること自体」

思い出されるのは数か月前、政権交代が成されてから暫く、母校の大学で講演会を依頼されて話した時の事だ。学生とも直接話したが、皆若々しく、何より慌ただしい緊張が彼らにはあった。

誰もが自分が話しかけると緊張した様に言葉を詰まらせながら話していたのだ。

大して変わらない歳だろうに、と長谷部は思う。

「向こうには剣導士、戦いを生業とするもの達を格付けする等級制度というものがあるのだとか」

補佐官は言葉を発した。

「ああ、そうらしいな」

「彼の、将軍の等級は大陸第九位で《氷王》の異名をとる超級の怪物だそうです」

それも知っている。だから緊張したのだ。例え得物を持っていなかったとしても、自分程度であれば素手でくびり殺す事も出来るだろう。例えるならば理性的なアオ鮫と話す様な感覚だろうか。絶対的強者の前に遺伝子レベルで体が怯えているのを長谷部は感じていた。

「やはり、報道陣を外に放り出して正解だったな」

「はい」

本来、マスコミを排除する様なやり方は好ましくない。彼らに悪印象を与えればどんな報道をされるか分かったものではないし、何よりプロパガンダの一番効率的な手段はマスコミだからだ。

だが、それでも彼らを一先ず棚上げしなければならない理由が存在した。

数日前の事だ。

記者会見前で異界の客の存在がヴェールに包まれていた当時、その存在の臭いをかぎ取り取材にやって来た新聞記者が何人かいた。

殆どはこちらでブロックしたが、その内の一社だけは断りきる事が出来ず、記者会見まで報じる事を控えるという約束でオキツグに取材に応じてもらった事がある。

比較的友好な特使、しかも元が日本人の若者である事もあり取材は和やかに進んでいたのだ。

『一つよろしいでしょうか？』

その日、取材に現れたのは三人だった。重役であろう初老の男が一人、中間管理職らしき中年男性が一人、そして若い女性記者が一人だ。質問は主に女性記者が行い、重役の男が無言で見守り、中年の男が隣でメモを取りながら時々言葉を挟んでくる。

補佐官と総理大臣がオキツグを挟む様に座り、対面に取材陣が座った。

後ろには影の様に控える将軍の副官、ベヘナの姿があった。

オキツグは素直に、しかし、際どい質問にはのらりくらりと避けながら取材を受けていった。その様子に補佐官と首相は安堵しながら取材を見守っていると、最後にと女性記者が付け加えてとんでもない一言を言った。

『エンデバルド氏は異世界における英雄、将軍閣下であらせられると言う事でしたが、人を殺した事はあるのですか？』

瞬間、オキツグを挟む二人は凍り着いた。

何て事を聞いてくれるのだ、と憤懣の瞳で重役と中間管理職を見るが、二人は平然としたものだった。その様子を見て、その質問が入念に仕組まれた者である事を悟る。

人を殺した事がないはずないのだ。

オキツグが日本人である事は誰でも直に分かる事だ。例え白髪で瞳が蒼かろうと、だ。その彼がよそ者でありながら封建国家で要職につく。武官としての最高峰に位置する将軍の地位に立つと言う事はどういう事か。

恐らく大きな武功を立てたのだろう。民を救い、それと同じくらいかそれ以上に人を殺す事によって。

仮にオキツグが人を殺した事があると言ったとしよう。これによってマスコミは異世界は漂流した日本人に人殺しを促す野蛮な存在

だと言う報道をするきっかけを得る事になる。事実はどうであれ、だ。

異世界との友好的な国交を望む与党としては是が非でも避けたい事態だ。マスコミにそう言った報道を差しとめるために大きな借りを造ってしまう事になるだろう。

やられた、と内心で唇を噛みしめる二人を横目にオキツグは落ち着いた様子で言った。

『申し訳ないが、その質問の意図が分からないのです』

『人を殺したか、です。あるのですか？』

平然と繰り返し、遠慮しない様子で質問してくる女性記者を長谷部は心の底から憎んだ。

この女の取材だけは二度と受けてやらん。

オキツグは考える様に虚空を見上げ、ニヤリと口を吊り上げた。

室温が下がった様な寒気を感じて記者達と長谷部は体を震わせる。平然としていたのは後に立つ副官だけだ。

オキツグは後の副官に振り返り、眼で合図した。すると彼女は部屋の隅、カーテンの陰に隠してあったオキツグの愛刀を取り出すとこちらに放る。

眼の前をかすめた刀に思わず目を瞑るが、オキツグはそんな二人を余所に一振りの刀、向こうの世界の武器である魔導刀を取材陣と自分の間に横たわるテーブルに置く。

『五年くらい前から遣っている一振りだが・・・ざっと千かな』

『は、はい？』

少し飲まれた様子の記者達、女性記者は聞き返した。

『そいつで斬った数だ。正確には分からんが、まあ、三桁に収まる事だけはないだろうよ』

刀を手に取り、その場で抜き放つ。無造作な様子だったが、その成しようは恐ろしく様になっており美しかった。

ギラリと光る刃が蛍光灯の灯りを跳ね返す。

彼は刃の峰を持つと柄を女性記者に差しだす。

促されるがままに手に取り、その不気味に光る刀身に目を奪われる。

『色んな奴と斬り合った。強い者、弱い者、同じ剣導士であれば、そうでないときもあった。ここ最近で一番多いのは暗殺と間者だな』

その言葉に記者達がビクリと肩を揺らす。それまで泰然として動かなかった

重役の男まで心なしか引きつった様子だった。

オキツグは暗に『お前達の様な都合の悪い存在を切り殺す事が一番多い』と言ったのだ。

『そ、それは』

『ん？』

女性記者は懸命に抗おうとしていた。

『それは脅しでしょうか？』

駆け引きを捨てた一言。いや、あえて捨てる事が駆け引きの一つだったのか、記者は率直な一言を選ぶことで取材対象を追い詰める。その例に漏れない率直な一言だった。

『脅し？

ああ、ははは、あはははははっ』

いきなり面白そうに笑い出すオキツグ。見れば後の副官も無言で笑っている。

『そんな難しいものではない』

その一言でオキツグは笑みを完全に消し、代わりに絶対零度の鋭い瞳で周囲を威圧した。

『ッ・・・』

彼らの喉からヒュと空気の抜ける様な音が聞こえる。

それまであった和やかな、平和の国から異世界に流れ着いてしまった不運な青年の姿はなりを潜め、そこに現れたのは軍国の将軍。鉄火をもって敵を打倒する絶対的暴力の象徴だった。

『そう、そんな面倒な事ではない。ただ俺は黙れと言っている』

長谷部は隣に座る青年のもう一つの顔を見た様な気がした。いや、

現に見ているのだ。近衛将軍の地位にまでのぼりつめた戦士の顔を。
『取材した記事をネタに脅すなんてケチな真似を考えない事だ。俺達の世界では命の値段が日本のそれよりも遥かに安い』
『ッ・・・日本は、報道の自由があります。誰もその権利を妨げられません！』
オキツグは笑ったまま、後のベヘナは呆れた様な瞳を女性記者に向け、それ以外は血の気が引いた様な顔をした。
『忘れている様だから教えてやる。俺達の特技は壊しと潰しだ。人であろうが人でなかろうが誰であろうとも近衛の名に誓って全てを粉砕する。貴様らなど相手になると思うなよ。その自由の権利とやらは行使する者がいなければ無用の長物にすぎないのだからな』
悪魔の様に笑うオキツグ。あまりの圧力に長谷部は吐き気がしてくるのを感じた。いつの間にか妙な臭いが充満している。
見れば、オキツグの眼光を正面から受け止めた女性記者のは歯を鳴らして怯え、足元には水たまりをつくっていた。

第5話　プライド（後書き）

11／8　誤字修正

第6話　蠢く闇

「嫌です！」
その声はマクヴェス王国の首都ヴェスラ、エンデバルドの屋敷の中庭で響いた。
「今更、今更日本に帰るなんて！」
声の主はタケル少年だった。
相対する様に困った、疲れた様な顔をしているのはオキツグだった。
日本での記者会見の後、暫く異世界側の代表者として滞在した後にオキツグ達は日本に戻っていた。
マクヴェス本国からやってきた使節団が、本格的に国交を結ぶべく急ピッチで交渉を進めている。
先遣隊の長、臨時の代表としての日本における役目を終えたオキツグは一先ずマクヴェスに戻ることとしたのだ。
交渉においては言語が壁になる事が懸念の一つだったが、どうやらオキツグがこの世界に来た時と同様、異世界間の言葉はいつかのイギリス人から聞いた通り、脳内に翻訳機を兼ね備えた状態になるらしい。差し当たっては文字表記の方だが、書かれている言葉は違うのに意味は通じてしまうと言う事から厳密性に関して疑問がていされているのが現状だった。
因みに、現在の使節団代表はダミアン枢機卿が努めている。先日、日本で引き継ぎをした際には異世界という場所であるにも関わらず気楽な様子で「お任せ下さい」と笑っていた。
（さて、どうしたものか）
オキツグは眼の前で俯きながら抗議の声を上げる少年にどう接したものか迷っていた。
先日、向こうの首相との約定でタケルの日本帰還が決まった。国交を結ぶ上での象徴的イベントにしようと言う意図があったのだが、

ヴェスラに帰還して当のタケルに話すと猛反発。
「お前、元々日本人じゃないか」
「・・・オキツグさんだってそうです」
確かにそうだ。そうだが、既にこちらで所帯を持っている自分は例外ではなかろうかと思案する。日本だって、未成年でも結婚すれば雇用扶助から外れる訳だし云々。
「オキツグさん？」
タケルが急に黙ったオキツグを怪訝に思って顔を覗きこんでくる。
（おおっと）
現実逃避していた意識を覚醒させて再び少年に向き直った。
「ああ、とにかく、お前は日本に戻れ、ちなみに拒否権はないぞ。縛り付けてでも連れてくからな」
「ッ・・・・」
「別にいいじゃねえか。どのみち、国交がなればこっちとの行き来は自由だろうが。義務教育くらいは終えてこい」
しかしタケルは納得した様子を見せなかった。不満そうに視線をそらす。
（まあ、分からなくもないか）
異世界に飛ばされて、色々と落ち込んだり覚悟決めた後に元の世界に帰れるとなれば、肩すかしを喰らうのは当然である。だが、この世界で日本人が生きていくには並大抵ならぬ苦難があるのだ。
漂流者と呼ばれる自分達は、その知識を目的として国家間の資源競争の的になっている。魔術により文明レベルが引き上げられているとは言っても、その土台となる科学力は地球の方が断然上だからだ。
そして、自分達がこの世界でまともに生きていくためにはそう言った輩の魔手から離れた上で、更に自活するだけの甲斐性がなければいけない。
つまり、大抵の場合において漂流者は自衛のために暴力を得お菱える必要がある。そして、確率的に暴力を生業として生計をたてる

可能性が高いと言う事だ。
（俺の様に魔獣専門でやってく事も出来るが・・・）
暴力に携わると言う事は人殺しをするという事だ。この世界で大人になった人間として、タケルにその道を進ませるのは躊躇いがあった。
「魔法だ、異世界だ、剣だ、魔物だって言ってもな、所詮は人喰いや人殺しだらけの野蛮な世界だって事だ。もし、この世界にもう一度来たいのなら、そこんとこ良く理解した上できな」
これ以上の会話は無意味だろう。オキツグは踵を返してその場を後にした。

オキツグが中庭から屋敷の中に戻ると、待ち受けていたベヘナに会った。
「難航した様で」
「ああ、年頃の子どもを持つとこういう気分なのかもな」
ベヘナはいつも着ている青い軍服ではなく、白いシャツにジーンズというラフな格好をしていた。
「随分と珍しい格好をしているな」
「・・・奥様に電話して、お借りしまして」
奥様とはマリアの事だろう。貴族の令嬢の癖にこういった格好が好きな義姉の事を思い出す。
自分も同じような格好だが。
「借りたって事は、お前、服がないのか？」
「持っていないと言う訳ではありませんが、何分このお屋敷にお世話になる事が多かったものですから」
ベヘナは現在、エンデバルドの屋敷の一室を借りて長逗留している。これは有事に際してエンデバルドの屋敷が王城に代わる近衛魔導騎士団の拠点と扱われている事によるものだが、嫁が留守にして

いるのに若い女を家にあげる義姉夫婦の神経が良く分からない。
（ああ、そう言えば義姉殿はリュロンの所にいるのだっけ）
あの女性の事だから、「あたしの服着ちゃってもいいから」などといい加減に言い渡してこの家を離れたのだろうが。
見た目が十代半ばにしか見えないベヘナでは、マリアの服は大分大きい様だった。それが尚更に外見年齢の低下を招く。
「お前も服がそれなりに必要か」
いつ軍服という訳にはいかないのだ。
すると、ベヘナの瞳がキラリと光る。
「買っていただけるので？」
「あ？　ああ、まあな」
実質的に軍務に準ずる待機状態だし。
「経費で落ちるだろうしな」
と付け加えると、普段から氷点下なベヘナの視線が絶対零度のそれとなった。
（あ、あれ？）
今、決定的に何かを間違えた様な気がする。
「ま、まあ、そんなケチって買い物する必要もないだろうし、無理して安物買わないで普通に買い物しちゃっていいからさ」
「そうですか、良く分かりました」
ホッと胸をなでおろす。
「オキツグ様がこの上ない甲斐性なしである事が、よく」
口から心臓が飛び出る様な思いをしたのは今日が初めてだった。
そのゴミ虫を見る様な目つきは、特殊な嗜好の者であれば跪いて足を後頭部に乗せたいと思う程に冷たい。
「ま、まあ、とにかく、タケルの奴を日本に戻すのに軍服もどきを着せたままじゃ不味いよな」
そう言って話題を変えようと試みるが、変わらずベヘナの瞳は冷たかった。

「まだか？」

日本国首相、長谷部は時計を見ながら隣に立つ首相補佐官の議員を見上げた。無言で首を振る彼に「そうか」とため息をつきながら辺りを見渡す。

そこは、いつかマクヴェス王国の将軍と共に新聞社の取材を受けた首相官邸の一室だった。

あの取材においては新聞社に恥をかかせてしまった訳だが、列席していた重役自身も恥をかかされた本人であるだけに、あの事はお互いになかった事にしようと言う事で落ち着いている。

（普通だったらありえないな。マスコミが引きさがるなんて）

長谷部はマスコミなど自由と民主主義を掲げたただの強請屋だと思っている。政治家と言う経歴が彼らに対する印象を悪くしているのであろうが、彼らのいうところの『真実を伝える責務』とやらは只管に『真実』を持つ者の人間性を否定するものだ。

（今回だって意趣返しがあってもよさそうなものだったが）

将軍の言った「余計な事をすれば殺す」という言葉はそれをさせない程に彼らの心の楔となっているという事か。

先日の光景を思い出していると、補佐官が耳打ちして待っていた来客が訪れた事を告げる。

キッ

木製の扉が僅かに音を立てて開くと、そこには三十前後の若い男が立っていた。

「やあ、お待たせして申し訳ない」

「いえ、こちらこそわざわざ来ていただいて」

長谷部はすかさず立ちあがってテーブル越しに握手を求めると席を示して「どうぞ」と着席を促す。

現れた男はダミアン枢機卿と名乗った。浅黒い肌に、恐らくマクヴェスの聖職者を現すであろう黒い僧服、そして胸からは地球のキリスト教の十字に似た薔薇十字が下げられている。

その顔は至ってにこやかで、長谷部は聖職者と権力者にありがちな先入観を持っていただけに肩すかしを喰らう。やや上背をある事を除けば、その若さや明るさ、にこやかさなど、兄の息子にそっくりだなどと思った。

「しかし、首相閣下の御苦労も並々ならぬものがあるでしょう。特にこちらの都合で折衝の代表者を変えてしまった件は我々の都合でもありますし」

そう言われて、前任者のオキツグ将軍の姿を思い浮かべる。さぞ優秀な軍人なのであろうが、政治の世界の住人と言うよりも戦場をかける侍の様な印象を持った若者だった。

（さては政略で席を追われたか）

「ああ、将軍に不祥事があって役職を降ろされたと言う事ではありませんよ？」

邪推していた長谷部は制する様に言葉を挟んできたダミアンに慌てて返す。

「い、いえ、その様な事は」

「彼は武官ですからね。加えて将来的に王権に近しい立場になる者。政治の世界で立場を得すぎると本人にとっても、周りにとっても良くないだろうとい事でね。まあ、ファーストコンタクトは我々としても不安があったので彼に任せてしまいましたが」

ただ、日本においては向こう側の武官の代表と言う立場は据え置くらしい。

そこまでまくしたてる様に言って、ようやく席に深く腰を降ろした。

後の護衛らしき青い軍服を着た二人の男が頭を下げて退出していく。

「まあ、こう言った席に彼らは無粋でしょう」

ニヤリと笑うダミアンを見て、長谷部は彼の好青年な性格とは別に、政治家として硬柔持ち合わせた老獪な頭脳を感じ取った。
（ただの世襲、封建国家とは訳が違うと言う事か）
聞く話によると十年ほど前まではマクヴェスは戦争状態にあったらしい。日本においても優秀な政治家は戦後の混乱期にこそ生まれた。思うに、戦争こそが人を育てるのだろうか。
（反戦を謳う国でそれを悟るとは、皮肉な限りだな）
「さて、本題に入らせて頂きます」
長谷部はそう宣言して会談に入った。ダミアンも居ずまいを正す。今日の会談は日本が要望を出して設けたものなのだ。彼は完全に聞きの姿勢である。
「我々、日本国としても貴国マクヴェス王国との平和かつ友好的な関係を築く事は大変望ましい事態です。が」
それに対して異を唱える存在がここになって現れ始めた。これまで沈黙を保ち、国際社会も当事者たる日本国に権利と責任を丸投げしている状態だったのだが、今になって周辺諸国との協調、つまり「俺達にも一枚噛ませろ」と言ってくる国が出てきたのだ。
「それは・・・」
ダミアンが口を開いた。
「恐らく、中国、ロシア連邦・・・・当たってますか？」
窺うようにこちらを見るダミアンに、長谷部は心底驚いた。正にその通りの事だったからだ。
「はい、その通りです。加えて南北朝鮮が・・・」
北朝鮮が中国とロシアに共同する事はここ最近の国際事情、特に六カ国協議のボイコットをはじめとする旧西側諸国の経済政策などといった背景により明確だが、比較的に日本国と友好な関係を築き始めた韓国がそういった主張をしてくる事は予想外だった。
ダミアンも驚いた様子でこちらを見ている。
その顔を見て長谷部は更に緊張の色を濃くした。彼の驚きはすなわち、短い間ながらもこちらの国際事情についてある程度調べ、知

識を深めていた事に他ならないからだ。勤勉さは政治家の必要不可欠な才能の一つでもある。

「・・・既にアメリカが日本に貴国との関係を一任する旨を現しています。韓国も資本主義、つまりは経済的に我々と深く繋がっている以上、アメリカをないがしろにした発言はしない思っていたのですが」

「しかし、彼らは異を唱えてきた」

その通りです、と長谷部は頭を垂れた。現実問題、韓国一国を無視したところでどうにでもなる。しかし、それを機に中国、ロシアと言った赤い周辺諸国が横やりを入れてこないとも限らない。対日本を軸に結託してしまわないとも限らないのだ。そして、日本の同盟国アメリカは正にそれを警戒している。

「アメリカとしても彼らの庭たる国連であなた方との関係を持ちたかったのでしょうが、中国の経済的躍進が彼らからイニシアチブを奪う可能性もあった。関わりたくても関われない彼らは我々に交渉権を預けながらも気になって仕方がない様です」

実際、大統領からも慎重に協議を進める様との要請が示されている。

「ふむ」

ダミアンは考え込む様に宙を見上げた。

「何でしたっけ、中国、ロシアが私達マクヴェスと貴国との関係に疑問を呈する理由・・・・」

「はい、それは」

曰く、地球において領土を持たないマクヴェス王国を国と認める訳にはいかない。

曰く、彼らが異世界人である証拠などない。

故に、異世界と窓口であるゲートの管理に我々も関わらせろ。

最後のは明確には主張していない。ただ、暗に示している。

「ただ、韓国は国力的に他国の領土内に関する事柄に口を出すには無理があります。恐らく、親日に走りやすい自国の若者に対する警告、反日で染まった有権者である高齢者層に対する配慮と言ったところです」

「左様で」

加えて、韓国は竹島の領有権に関して、軍による警備力を強化するなど、実効支配を強めてきている。異世界というイレギュラーで日本の貧弱な外交力が麻痺している内に完全に自国の領土とするつもりなのだ。

「我々が日本、貴国と関係を結ぶ事に中国、ロシアは反対している。北朝鮮は無視して言いとして、韓国がそれに便乗して漁夫の利を得ようとしていると言ったところですか」

ダミアンの言葉に長谷部は頷いた。やはり、この若者は只者ではない。政局に対する理解力も、それを受け入れる思考の柔軟さもだ。仮に、彼らがアメリカと同様、同盟国として傍らに立ってくれるのであれば頼もしい事この上ないだろう。

ダミアンは再び考える様に宙を見上げた。眼をつぶり黙考する。

一分、二分が過ぎた。

政治における会談とはある程度のコンセンサスを持ってから臨むのが普通である。しかし、彼らが異世界人である事。加えて、今回の代表者交代でそれが成せなかった。

（日本もそれが原因で国際社会に見向きもされなくなったのだったな）

現在の民事党、長谷部自身が首相の座に着くまでに二人の代表者と、民事党に政権が移るまでの与党の代表者たちの目がまわる様な辞任ラッシュにより、今の日本は対外的交渉力を失っている。今の沈黙もその余波だ。

「ああ、そうだ」

ダミアンはそう言うとパチリと眼を開け、良い事を思いついた様な笑顔になった。

「韓国が領有権を主張している竹島と言う島、マクヴェスに借料して頂けませんか？」
「へ？」
「とてもいい考えだ。日本の領土を狭める事無く日本国内に拠点を持つ事が出来て、尚且つ貴国は韓国との関係悪化の原因を取り除く事が出来る。是非そうしましょう」
長谷部は自失した。この若者は何を言っているのだろうか。
見れば、後ろに立つ補佐官もポカンと口を開いて呆けている。
「竹島における日本国の借料を以ってマクヴェス王国を国として認める根拠としましょう」
「そ、それ！」
無茶だ。どう考えても。第一、そんな事をしようとすれば・・・・
「有権者は自分たちを支持してくれなくなる？」
「ッ・・・その通りです」
民主主義とは政治家のエゴと国民の無知の間を綱渡りで行き来しているようなものだ。つまり、保守を是とする世界だ。
「確かに、周辺諸国との関係が悪化すれば、輸入国家で食糧自給率が極めて低い貴国は立ちゆかなくなるでしょう」
昨今の中国、ロシアに対する日本国民の反感を呷れば暫くはどうにかなるかもしれない。しかし、それは今の暮らしが続く事が前提となる。
「それに民草が納得しないのはマクヴェスとて同じでは？」
その言葉にダミアンは笑う。ささやかな、悪戯が成功した様な少年の笑顔だったが、彼は確かな腕を持った政治家だ。
「ときに長谷部首相」
「・・・何でしょう」
「お忘れの様だから言います。我々は貴方がたにとっては異世界人なのですよ」
ダミアンは懐から四つ折りにされた紙の束を長谷部に差し出す。
「こ、これは」

自分たちに配慮して日本語で示されたその書類に書かれた内容を理解した瞬間、長谷部は全身の汗が噴き出す様な錯覚を得た。

「こ、ここに」

「はい？」

喉が渇くのを自覚しながら、長谷部は慎重に言葉を紡いでいく。

「ここに、記されている内容は真実なのでしょうか」

「はい、我がマクヴェス国内だけでも貴国が必要とされる石油資源を今後三百年に渡って賄っていくだけの資源が存在します。こちらは魔導技術により自然資源を必要としませんので」

そこに記された内容は実に刺激的だった。それは、異世界に関する地理的資料と、資源に関する大まかな記述だった。そして、マクヴェス、日本国の間で通称関係を持った時、日本に対して輸出できる品目。

天然ガス、石油をはじめとする資源に、食料。今の日本が外国に依存している殆どの品目を網羅している。

「仮に、我々の世界と、貴方達の世界が貿易関係を持った時、資源が有り余った我々の世界、そしてその貿易の橋頭保である日本国の権益は想像を絶するものとなります」

ダミアンは人懐こい笑顔で笑った。その笑みをこの上なく恐ろしく思う。

「仮に、周辺諸国と戦争状態に陥ったとしても、同盟国として我々が対処しましょう。通称の断絶による実質的経済制裁を加えられたとしても、そもそも我々以外と貿易をしなければいいのです。問題ありません」

最後に彼はこう言った。

「さあ、世界中の調子に乗った簒奪者どもに思い知らせてやりましょう」

第7話　血の楔

「覚悟はいいか？」
オキツグは傍らに立つタケル少年に語りかけると、彼は静かに頷いた。
さて、と呟くようにオキツグはタケルの立つ前にしゃがみ込むと、乗っかる様に指示、おんぶする。
二人がいるのは日本とマクヴェスを繋ぐゲート、そのマクヴェス側の峻厳な岸壁に囲まれた荒野だった。オキツグはいつも通り近衛の青い外套を纏っていたが、その上からは傷一つない銀色に輝く軽鎧をつけている。かるくではあるが彫刻などもあしらわれたそれを纏う事、それは近衛の将軍としての正装を意味した。
オキツグとタケルの周りには囲む様に近衛騎士団の面々がこちらを見守っているが、彼らの制服もいつもよりは綺麗で、実用本位の戦闘服と言うよりも式典などに適した正装を思わせた。
いや、それは実際に正装なのだ。
（流石に俺だけじゃ格好がつかないからな）
今日は日本にタケル少年を帰還させる約定の日だった。
向こうではマスコミにも公開した、いつぞやの北朝鮮拉致被害者の帰国と同じような様相を呈しているらしい。
そして、嫌でもマスコミの目に触れるだろう自分も含めて、騎士団は人に見られると言う事に対するプレッシャーで皆表情が硬い。
その様子を見て苦笑しながら口を開いた。
「おい、お前ら」
オキツグは将軍として、訓示にしては砕けた様子で周囲の注意を集める。宮廷など、貴族や文官の連中が見ていれば眉を顰めそうなものだが、幸い騎士団は武骨者の集団。加えて、先代の長であるリュロンの代から騎士団の屋台骨を支えている彼らの殆どは庶子の出身だ。文句など出ようはずもない。

「向こうさんが大勢いるからってビビるんじゃねえぞ。こっちはマクヴェスのメンツ背負ってるんだ。ビビって引っ込んじまうくらい軽い金玉だったら引っこ抜いて捨てちまえ」

オキツグの下品な軽口に周囲はゲラゲラと笑う。

一人が手を上げた。

「はーい、あたしにはついてませーん」

手を上げたのは女性隊員だった。近衛騎士団には女性の構成員も多い。その彼女達はくすくす笑いながら「私も」と続いて手を上げる。

柔らかくなた場の空気にオキツグはホッと胸を撫で下ろす。

（人間、慣れるものだな）

オキツグは軍隊組織において良くいる男臭いマッチョなタイプではない。どちらかと言うと静かで自己主張はあまりしない。この世界に来て剣導士としてキャリアを積んだ今となってもそれは変わらない。

オキツグは困った様な笑みを口元にたたえた。

（昔の同級生や家族が今の俺をみたらどう思うのかね）

日本で記者会見を開いている事を考えれば、恐らく自分の姿をテレビで確認している筈だ。後は変わってしまった姿形に気がついてくれるかどうかだが。

一人、思考を遊ばせていると、後ろに影の様に控えたベヘナから声をかけられた。

「そろそろ時間です」

「あいよ」

返事をしながらゲートに眼を向ける。

オキツグはかつての故郷、それを映す鏡面をみながら、それに飛びこむべく足に力を撓ませた。

空が青く澄んでいる。
そんな事を思いながら櫛名真澄は窓の外の光景をぼんやりと眺めていた。
「大丈夫ですか？」
暫くしてその声が自分に向けられたものだと気がついた真澄は慌てて声がした方向を振り向いた。
そこには渋みのある中年男性が仕立ての良いダークスーツにストライプの赤いネクタイをしめて立っていた。
時の総理大臣、長谷部洋一郎は人の良い笑顔をたたえていた。
「緊張しているようですね、無理もない。一応、マスコミの出入りは最低限にしているとは言っても・・・」
辺りを見回した。
そこは円形の広い空間で、壁は全面ガラス張り。その向こうには真澄がぼんやりと眺めていた空が青く続いている。
東京都墨田区押上の地にそびえる電波塔、東京スカイツリーの３４５メートルに位置する展望室だった。
中央の真新しいエレベーターの出入り口を囲む様に、並んで立っている。人影は真澄達の後方に報道陣が、並んで立つ様に長谷部以外にも数人がいた。
「この高さです。昭和の感覚が抜けきらない私としてはここにいるだけでも冷や汗ものだ」
気さくな笑みを浮かべてこちらに気を使う長谷部に引きつった笑みで返事を返しながら、真澄は自分が何故、日本の政治家のトップと並んで立っているのかと疑問に思った。
「今日は向こうに流れついた、漂流者の方がこちらに帰還する第一号です。マクヴェスと日本、早急に友好的な国交をなすためにも急ピッチで折衝が進められたものだから、随分と慌ただしくなってしまいました」
そう、今日、この日は異世界に不慮の事故で飛ばされてしまった真山タケルが日本に帰還する日なのである。見ればとなりにはタケ

ルの家族が緊張を伴った様子で周囲に視線を彷徨わせている。
一見して自分がいる事に場違いの感を覚える真澄だったが、真澄がタケルの担任である事などもあって列席を許されている。
（・・・それだけじゃないわね）
真澄は自分の疑問は真実に近いものである事を悟っていた。

トテトテ、ポフッ

真澄は自分の脚に柔らかい感触を感じて見下ろすと、そこには三、四歳程の女の子が真澄のスーツの裾を掴んで見上げていた。
（確かこの子・・・・）
真山タケルの妹だったはずだ。名前は美香、ベージュのセーターに可愛らしいチェックのスカートをはいて、髪は左右に結んでツインテールにしている。
一目見て両親から愛されて育っている事が窺える子だった。
「どうしたの？」
「・・・・・ん」
そこでようやく娘が傍らにいない事に気がついた両親が慌ててこちらによってくる。
「す、すみません！」
「いえ、大丈夫です」
長谷部や周りの人たちも微笑ましいものを見る様に見守っていた。
どうやら緊張で固まる両親の近くが嫌で逃げてきたらしい。
「ほら、こっちにきなさいっ」
母親の慌てて諌める声に肩を震わせて真澄の後ろに隠れてしまった。
「あ、こらっ」
その様子を見て首相は穏やかな笑みを浮かべると、さらに慌てる美香の母親に長谷部は落ち着いた声で語りかける。
「奥さん、子供は親の緊張には敏感なものです。それに知らない人

に沢山囲まれて怖いのでしょう。少し落ち着くまで待ってあげませんか？」

総理大臣に声をかけられて雷に打たれた様に背筋を伸ばして「は、はいっ」と返事をすると、夫婦ともども恐縮しきった様子で真澄にも頭を下げてきた。

「と言う事で、お願いしますね、その子」

にこやかな長谷部に真澄は縦に頷く。

絶妙な気の使い方だった。流石は若くして総理大臣の地位にまで上り詰めた男か。

（さぞもてるんでしょうね）

と下世話な事を思わなくもないが、考えてみれば政治家の女遊びは立派なスキャンダルだ。

そしてまた何もない時間が訪れる。

先程と同じように外を眺めて時間を潰そうとしていると、周囲に息をのんだ空気が伝わった。

オオオオ・・・・・・

静かに響くその音はエレベータの駆動音だ。上の階から下の階、つまりは真澄達のいるフロアに降りてくるための音。そして、この音が聞こえてくる意味は

「お越しになったようです」

長谷部の傍らに控える総理大臣補佐官の参議院議員が耳打ちする様に口を開いた。

ポーン

軽く木琴をはじいた様な電子音が響いた後にエレベーターの扉は開いた。

真澄はその光景を息をのんで見守っていた。真澄だけではない。

その場にいた者全てが唾を飲み込む様に今、正に開かれようとしているエレベーターの扉の隙間を凝視していた。
（本当に・・・・）
兄なのだろうか。そんな思いが肉親の確信と共に去来する。
扉が開いた。
そこには小柄少年の姿、タケルが立っていた。
「美香・・・・」
少年は真澄の腰にひっついていた少女の姿に眼をやり、呟くように声をかけた。
真澄の影からタケルを確認する美香。
その姿を見て、最後に見た時よりも少し痩せただろうかと思う。
きている服はカジュアルなチェックのシャツにジーンズ。装いが変わっているから、向こうで設えたものなのだろうが、衣類などの文化はこちらと大差がない様に見える。
しかし、タケルは概ね元気で、家族との再会を喜びと共に待っていた様に思えた。
タケルの姿を見て、美香は緊張を緩める。
「にーちゃ」
真澄に抱きついて来た時と同じように、美香はトテトテとエレベーターに向かう。妹を出迎える様にタケルも扉から足を踏み出して両手を広げた。
「にーちゃっ」
タケルが美香を抱え上げ、遅れた様に両親たちがはやる気持ちを抑えながら歩み寄る。しかし、その眼には涙が浮かんでいた。
場の空気が暖かなものに変わる。が、それも長くは続かなかった。
「ッ・・・・」
何が切っ掛けかは分からない。しかし、その瞬間に空気の暖かさが一気に氷点下を突き抜けた様な錯覚を覚えた。
（な、なに・・・）
見れば、兄妹の微笑ましい光景に頬を緩めていた面々も真澄と同

じように悪寒に襲われたらしく、戸惑い、そして何かに引き寄せられるように再びエスカレーターに眼を向けた。
隣の長谷部首相のみが全てを理解した様に緊張した鋭い瞳で事の成り行きを見守る。

カッ

鈍い、何かを打つような音が響いて、暫くしてから真澄はその音がブーツが床を叩く音だと言う事に思い至った。
そして鉄の箱から遅れて展望フロアに降り立つ男が一人。
青い外套、銀色に輝く軽鎧は優美な彫刻が刻まれ、腰には西洋的な装いに不思議な程にマッチした機械的な反りのない刀の姿がある。
長身痩躯で、髪の毛は白く、瞳は青く澄み渡っているが、その眼に映す光は空の明るさ、暖かさなどでは断じてない。ただ只管に全てを凍りつかせる様な鋭い圧力を発していた。
彼は硬直する家族を横目にこちらに歩いてくる。恐らく、この場の代表者である総理大臣に挨拶をするつもりなのだろう。
真澄は彼を見て、何度も言葉を紡ぎだそうとして失敗する。
男は首相の前に立ち、さっとこちらに視線を走らせた。
喘ぐように、真澄は喉元から言葉を発した。
「・・・お兄ちゃん」
それしか言えなかった。

「駄目だ。通せないよ」
それは東京都墨田区、東京スカイツリーの半径百メートル地点設けられた検問で響いた言葉だった。
「今日は東京スカイツリーで外交式典があるってのはお前さんも知ってるだろう。やれやれ、困ったものだよ。知ってて来る奴もいる

んだから。断じて通せないぞ？」
それは歳傘の制服警官から放たれた言葉だった。四十代半ばか。背は高くはないものの、がっしりとした筋肉質な体型で、鋭い眼光からはベテランの警官である事を窺わせる。
「ありゃりゃ、やっぱそうですか」
警官の言葉に返すのはスーツ姿の男だ。
短く刈り込まれた黒髪に瑪瑙色の瞳、歳は二十代の様にも思えるし、五十半ばの様にも思える。日焼けと火薬焼けで硬くなった肌が年齢を感じさせないのだ。あまり目立った所のない顔だったが、唯一やや細めである事を除いて全てが中庸だ。
軽薄な笑みを浮かべていたが、そこに計算を窺わせる。有楽町あたりを歩いていそうな有能なビジネスマンの様な男だった。
二人のやり取りは良くある光景だった。
国際的な行事に野次馬はつきもの。男はその恒例物だった。
「君なあ」
警官は疲れた様に溜息をついた。
「幾らなんでも非常識だろう。この光景をみろ」
周囲は白と黒のパトカーが数台止まり、それらに乗り切る事はありえないだろう数の警官が鋭い瞳を辺りに向けている。
厳戒態勢だった。
スーツの男は引きつった笑みを浮かべる。
「い、いやあ、すみません。つい、ここまで厳しいと思ってなかったんで」
「ついじゃないぞ、まったく。まあ、こういう行事になると良くいるけれど」
見れば、野次馬はスーツの男の他にもいるらしい。警官達にユーターンする様に言われた一般人も数人見かけられる。
「そうですか、残念」
男は相変わらず軽薄な笑みを浮かべながら踵を返す。
警官はふと、疑問に思った。何か、嫌な予感がした。

（随分とあっさりしているな）
「本当に残念だ」
男は立ち去りながら下げていた鞄に手を入れると、そこから妙な形の携帯電話を取り出す。
（いや、あれは携帯じゃない。無線だ！）
その光景に言いようの知れない不安を感じて警官は立ち去る男に手を伸ばした。
「おい、お前！」
男の指が無線機のボタンを勢いよく押し込む。
その瞬間、全ての音と光が消え去り、ホワイトアウトした。

第8話　懺悔

フラッシュがたかれる音がする。
オキツグは先日、会談をもった日本国首相である長谷部と握手を交わすと、それ程量は多くはないものの、報道陣がせわしなく活動するのを視界の端で感じ取る。
長谷部はにこやかな顔で言った。
「お久しぶりです。日本国へようこそ」
ようこそ、の言葉にオキツグは感慨深い気持ちを禁じえなかった。
（お帰りなさいではなく、ようこそ、か）
既に自身が日本人ではない事も納得済みだが、こうして感傷に浸ってしまうのは彼の隣にいる女性だろう。
女性にしては長身で、美人と言う言葉が似合う怜悧な美貌が印象的なその女にオキツグは嫌という程見覚えがあった。
櫛名真澄、オキツグの妹だった。
真澄とオキツグの瞳が交錯する。
オキツグは何の表情も浮かべず、真澄は呆けた様な美貌に似合わないぼやけた瞳でオキツグを見る。
その様子を見た長谷部が口をはさんだ。
「いやあ、偶然と言うものはあるもので」
長谷部は真山タケルの学校の担任が真澄である事を説明する。加えてオキツグの妹である事を知った彼は、気を利かせて二組の兄妹の再会の場を設ける事にしたのだと言う。
勿論、事にあたってオキツグは事前に知らされていたが、それでも落ち着かない気分になる事を禁じえなかった。
「積もるお話もあるでしょうから、しばしご歓談下さい」
といって二人から離れる長谷部。
残されたオキツグと真澄であったが、視線が混じるのみで言葉が出てこない。

「・・・・」
「・・・・」
オキツグは久しぶりに自分が動揺、困惑しているのを感じた。
(覚悟は決めてきたはずなんだけどな)
今の自分では無い頃の、ある意味過去と向き合う事に等しい家族との対話をだ。
「・・・お兄ちゃん?」
真澄は恐る恐ると言った調子で、しかし瞳の向く先をオキツグのそれからずらすことなく口を開いた。
「・・・・・・ああ」
暫く時間がかかって、それしかかえせなかった。
オキツグはそんな自分に一気に自己嫌悪に陥る。勇気を出して口を開くのも、全て人任せ。結局、異世界という場所で己は何を学んだのかと。
しかし、そんなオキツグの様子を不機嫌ととった真澄は再び黙りこんでしまう。
(いかんな)
オキツグは両掌で強張った顔の表情筋をもみほぐすと、努めて穏やかに聞こえる様に口を開いた。
「久しぶりだな。元気だったか?」
「・・・うん」
両親や他の家族の事を聞こうとして止めた。あんまり明るい話題になりそうもないのだ。
(かといって、俺をよくしてくれた叔父さんの事を初めに聞くと言うのも露骨だし)
このままでは会話が途切れてしまうと焦るオキツグは、ふと丁度良い話題をみつけた。
「お前、学校の先生になったのか」
「うん、真山君の担任なの」
ポツリ、ポツリ、と言葉が出てきて、少しではあるが真澄の雰囲

気も柔らかいものとなってきていた。
そう言えばと昔を思い出す。
（学校の先生になりたいなんて言ってた事もあったっけ）
何せ十年以上前の話だ。記憶に蜘蛛の巣が張っていて定かではないが、一度それが原因で父と大喧嘩していた。
「そうか、初志貫徹・・・お前は変わらないな」
「そうだね・・・お兄ちゃんも・・・・・・」
真澄は口を閉ざした。
柔らかくなりかけていた表情も再び固いものとなってしまう。その原因にオキツグは直にいきついた。
恐らく、真澄は『お兄ちゃんも変わりないよ』と続けようとしたのだろう。
静かに溜息をつきながら周囲を見渡すと、報道陣がカメラをもってタケル達を取材しているところだった。こちらにはオキツグを恐れてかよってはこなかったが、時々取材したそうな眼を向けてくる彼らにオキツグは顔を顰める。
居心地悪さを感じて、オキツグは左手で剣帯に吊るされた魔導刀の柄頭を撫でる。
それは近衛将軍の信認の証として賜った煌剣ソラスでもなく、ここ数年つかっている無銘の魔導刀でもなく、妻の実家に頼んで封印してあった玉璽、《白燐丸》だった。
一度、マクヴェスに戻った際に、屋敷に隠してあったそれを携える事にしたのだ。
妻にも、その姉夫婦にも無断で持ってきた。知っていたら、誰もが《白燐丸》を腰に佩く事を反対するだろう。それは人の心を蝕む妖刀だからだ。
だが、オキツグはそれをする必要があると思った。
根拠らしいものは全くなかったが、
（何故だかな、胸騒ぎがするんだ。だけど俺の、少なくとも《白燐丸》に関する勘は外れた事がない）

滑らかな柄革が懐かしい。まがい物では得られない充実感が戻ってくる実感があった。

「・・・・」

そこで柄から手を放した。

すっかり不安に駆られると武器によりどころを求めてしまっている自分がいる。向こうの世界で、放浪中に同業の剣導士から聞いた話で、魔導剣を持つと人の心は弱くなるいう言葉があった。自らの中心を自らの枠の外に設けてしまう弊害と言う話だが、これは歴戦のベテランになる程の多い傾向なのだそうだ。

今では非武装であること自体に抵抗を覚える自分がいる。

(つまり、俺は重度なのか)

自らを戒めつつも、再び現実に意識を戻して妹に意識を向ける。

俯いていて表情は知れないが、少なくとも明るくはないだろう。

「ちょっと来い」

無造作に真澄の手を握ると、展望台、傾斜のついたガラスの外壁前まで歩いた。

「あ・・・・・」

そこからは東京の風景が一望できる。かつてない風景に兄妹は一瞬だけ目と心を奪われた。

オキツグはガラスの壁が僅かに反射して自身の顔を映すのを見る。

(周りがビビる訳だな)

そこにはここ暫く、ベヘナの指導の元に被り続けた冷徹な近衛将軍の仮面を被った自分の姿があった。

異世界に渡って暫くは普通の少年らしい顔をしていたはずだ。

剣導士として一人立ちしてリュロンと旅を始める頃には飄々としながらも一人の男の顔に。

プロメテウス事件でリュロンが床に臥してからは薬物中毒もあって幽鬼の様な、どこか狂気を滲ませる様な。

全てが終わって、エンデバルドの屋敷に招かれる頃には生きる事を楽しむ旅人の顔をしていたと思う。

しかし、ガラスの反射が映す今のオキツグはそれのどれとも違った。
只管冷たくて、まるで老いた獅子の様な印象を受ける。飽きる程に殺人を繰り返してきた者の証だ。
再び、右手を顔に当ててほぐすが、どうにも元には戻らなかった。
（俺、いつからこんな顔してたっけ）
きっと近衛将軍の地位に着いてからだと思う。この頃はベヘナの勧めもあって気を張っていたし、何かと冷徹な将軍を演じる機会が多かったから張り着いてしまったのだろう。
（まずいな・・・・・）
きっと、リュロンが今の自分を見たら驚くだろう。悲しむかもしれない。あの女は戦いから離れてすっかり母親になってしまった。本能のレベルで他者を傷付ける暴力を良しとしないのだ。
もうすぐ子供だって産まれてくるのだ。人相の悪さに泣かれてしまったら、オキツグは地獄の底まで落ち込むだろう。その場で首を吊るかもしれない。
「どうしたの？」
真澄が引っ張ったまま沈黙したオキツグに声をかけた、と思ったら違ったらしい。ガラスの鏡はオキツグの緩んだ頬を映していた。
笑っていたのだ。
酷薄な侮蔑の笑みでもなく、ただ明るく、朗らかに。
真澄が聞いていたのはそれだろう。
僅かに、以前の表情に戻った様な気がする。その事に言いようの知れない安堵感を覚えた。

真澄は兄の横顔が険しいものから穏やかに変わって行くのを見た。
「どうしたの？」
気になって声をかけると、オキツグは頭を振りながら「何でもな

い」と応える。
再び、暫くの沈黙があった。
しかし、今度は気まずさがない。どこか落ちついた、それでいて暖かい空気が流れる。
やがて二人の視線は団欒の真山家に向かう。
それを見て、真澄は呟くように兄に語りかけた。
「お兄ちゃん」
「ん？」
「お兄ちゃんは帰ってこないの？」
その言葉は、まるで眼の前の家族の幸福な光景に急かされる様に紡がれた。真澄はまるで母子家庭の子供が母に父の不在理由を問うてる様だと思った。
しかし、この事を聞かねばならなかった。そうせねば本当の家族、兄妹となるチャンスは永久に失われる様な気がした。
何より、答えを聞きたかった。
「立場があるからとか、そんなの関係なくて、お兄ちゃんの本当の気持ちはどうなの？」
問いは慎重に、しかし切実にオキツグに向かって放たれる。その言葉をよく咀嚼する様に、オキツグは沈黙と思考を以って応える。
「それともあたし達を許せない？」
真澄は思う。自分達は家族と言うにはあまりにも暖かい記憶が希薄で、唯一自分くらいが幼い頃、絵を嗜んでいた眼の前の兄に対する思い出がある位だ。しかし、それも時を重ねるごとに薄らいでいって、いつしか、オキツグだけが家族の環から外れていった。
思い返せば彼が失踪した、異世界に消えて暫く、父は捜査のために訪れる警察に舌打ちを打ちながら応対し、母は何も語らず、兄と自分は日々の忙しさに流されて何も思う暇はなかった。何も思わない様にしていた。
新聞の地方欄に乗った『天才学生画家失踪！？』という、記者が反射で書いたとしか思えない頭の悪い記事を無感動に眺める自分達

家族の光景が昨日の事の様に思い返された。
だが、それはあまりにも薄情だと真澄は過去の自分を怒鳴りたい気分だった。社会に出て、家を出て、本当の家族の在り方を仕事を通して知ったからかもしれない。
「ねえ、どうなの？」
真澄は静かに問いながら自分の唇が震えているのを自覚した。
オキツグはその言葉に考え込む様に間を置いた後、真澄に真っすぐ向き直る。
「・・・真澄、俺は」
オキツグは訥々と語り始めた。
「お前は知らないかもしれないけど、俺は向こうのマクヴェスって国で結構偉い人になってて・・・成りあがりッて云うか」
「それは知ってる」
「ああ、ああ、そうじゃなくて、何て言えばいいのか・・・・」
オキツグは困った様に頭をガシガシとかく。やがて、どこか開き直った様に苦笑して言った。
「俺さ、結婚したんだ」
「へ？」
「だから結婚、向こうには嫁さんもいて、胎には子供もいる」
真澄はその言葉を気の抜けた様な、口を開けてポカンと聞いた。
「そりゃ、最初はこっちに帰るつもりだったさ。でも、実際は難しくて、っていうか難しい事がわかって、それでとりあえず諦めて向こうで働いて、生きて、いつのまにか切っても切れない人達が出来ちまった」
おい、聞いてるか？　兄が眼の前で掌を揺らして真澄は茫然としていた意識をハッキリさせる。
（結婚？　子供？）
何だそれは。
真澄としては、誠に自分勝手な思いかもしれないが、家族や、愛、思い、情といったものを信じられていないだろう兄は人間関係が上

手くいっていないのではないかと思っていた。事実、日本にいていた時はあまり社交的では無かった様に思う。

だが、とも思う。

（大丈夫なんだ・・・・）

結局、自分達がもたらしてしまった歪みを、彼は自分の力で解決してしまったという事なのだろう。その事を悔しく思うと同時に、胸に広がる様な安堵を感じた。

兄は滞った場の空気にわざとらしく咳をする。

「まあ、そんな訳で」

お前ももうすぐ叔母さんだから、と彼は締めくくった。

ついでに彼は付け加えた。

「だから、お前もそんな気に病むな」

兄の言葉に虚をつかれた真澄は思わず彼の目をマジマジと見つめる。

「え？」

「確かに、俺達は家族と言うには余りにも冷淡だったし、その事を恨みに思わない気持がないとは言わないさ。寂しかったし、悔しかった。そりゃそうだろ。だけどな」

いいか？　よく聞け、と言いながら再び、オキツグは頭をかく。

「過去は過去だ。俺は俺の子供に俺と同じ様な寂しさを味あわせたくはないし、お前達にも寂しい思いをして不幸になって欲しいかと聞かれれば、それは違うだろうよ」

暫くして、真澄は自分の心の内が兄に筒抜けであった事を悟った。不思議と羞恥は感じなかった。

兄、オキツグは真澄から視線をそらす様に壁ガラスの向こうの景色に目を向ける。それはどこか、照れた様な仕草だった。

「・・・・ッ」

真澄は横隔膜が引くつくのを感じた。

（あ、やばい・・・・）

このままでは泣いてしまうと思った。それもいいかと考え、いや

いやテレビに全国放送、果ては世界のお茶の間に自分の泣きっ面を晒すのは如何と思いなおす。
しかし、涙腺は一瞬たりとも待とうとはしてくれない。考える時間などもってのほかだ。
真澄は無言で兄の背中、軽鎧を纏っていない外套の布の部分に顔を埋めた。
「お、おい！？」
慌てた様な兄の声に言葉を返す余裕はない。
やがて、肩を震わせる真澄の姿を肩越しに見て、大人しく前を向いて黙った。
漏れる喉の震えを押し隠す様に兄の背中に顔を押しつけながら、彼が消えてから、抱いていたしこりが消えていくのを感じる。
そんな真澄の様子を背中に感じながら、オキツグはおずおずと口を開いた。
「あのさ」
どこか言いにくそうに、しかし照れたように言いだした。
「子供が生まれたらさ、その内会いに来いよ。その時に女房も紹介するから」
その言葉に真澄は涙に濡れた顔を隠す事も忘れて顔を上げ、オキツグを見る。だが視界を揺らす涙で思い出したように再び顔を背中に埋める。
「だからさ、その、頼むよ」
その言葉は暖かさに満ちていて、いつか、オキツグにねだって似顔絵を描いてもらった幼い頃を思い出した。思えば、その時も彼は今の様な顔をしていた。
「いいの？」
くぐもる様な真澄の言葉に、一瞬だけオキツグは眼を見開くと力強く頷いた。
「ああ、当然だ」
兄の背中をもっと感じようとして力を強め、しかし・・・

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ

その瞬間、その暖かな空気の全てを吹き飛ばす様に、遠くに爆音が鳴り響いた。

第9話　亡国テロリズム

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ

凄まじい爆音が遠くで鳴り響くのを聞きながら、真澄はその瞬間に顔を埋めている兄の背中が先程とは別の意味で強張るのを感じた。

ブブブブッ

くぐもった、何かが震える音がして、暫くしてからそれは兄の懐、外套の内ポケットに収まった携帯である事を知った。

さっと振り向いたオキツグは申し訳なさそうに、しかし頑とした感じで「悪いな」と言うと真澄から離れて電話に出る。

涙を隠すカーテンがいきなりいなくなってしまい、慌てて顔を拭いながら、オキツグが操作していた携帯電話が日本のそれとは違っていたのを思い出す。恐らく、異世界産なのだろうが、こちら側よりも遥かにファンタジーな世界で、戦士達が機械を操る姿を想像して、少し可笑しくなった。

暫くして兄が戻ってきた。

「悪い、待たせた」

「ううん・・・・」

真澄は「どうしたの？」と聞こうとして、何故か躊躇った。

（あれ・・・・）

先程までかつての兄妹の暖かさを取り戻していたのだが、電話を終えて戻ってきた兄はそれ以前と比べて違和感を感じさせるものだった。

そんな二人に長谷部が壁際に控えていたＳＰを連れて歩み寄ってくる。その顔は真澄に気を遣って優しく語りかけていた時と異なり、

緊張に満ちていた。
「エンデバルド将軍」
「ああ、長谷部首相閣下、どうなさいましたか？」
「・・・人を試すのはやめてくれ、君も君の部下から報告は受けているのだろう？」
飄々としたオキツグ、焦りを顔に浮かばせる長谷部、両者の奇妙な対比は周囲に困惑を与えていた。真山一家も、報道陣も、それ以外の関係者達も何事かと向き合う二人に注目する。
「ええ、勿論です」
「・・・大変な事態だ」
長谷部が周囲に目を向ける。注目を集めてしまった事を悔いているようでもあった。
その様子を見て、オキツグが至って平然として様子で、雨の襲来に慌てて洗濯物を取り込もうとする主婦に語りかける様に言葉を紡いだ。
「無駄ですよ」
そこにはただ事実を告げる、断定する確信と冷徹さがあった。その言葉と、それを発するオキツグには先程まで真澄と語らっていた優しい兄の姿はなかった。
冷たい瞳、細身ながら鍛え上げられた体を軽鎧と青い外套に身をつつみ、腰には黒い柄革の佩刀が存在を主張する。
まるで百獣の王を連想させる、マクヴェス王国近衛騎士団の長の顔に戻っていた。
「もはや、情報統制が意味を成す事態を過ぎています。ここにいる全員が漏れなく当事者になる事は必定、さっさと洗いざらい吐いて楽になった方が動きやすいのでは？」
オキツグの言葉に長谷部は考え込む様に俯くと、暫くして意を決した様に顔を上げた。
「皆さん、こちらにお集まりください！」
彼の掛け声で周囲の人達は困惑しながらも集まってくる。やがて、

全員の注目が自分に集まった事を確認して言った。
「現在、我々はテロの脅威に晒されています！」
（！）
周囲は騒然となった。
真澄自身も驚いていたが、納得もあった。兄の変貌の理由が分かったのだ。
（お兄ちゃん、全然慌ててない・・・）
きっと危険な状態なのだろう。しかし、それを少しも感じさせない余裕がオキツグにはあった。この場には姿を現していないが、彼の部下も慌てることなく自らの職務に励んでいる事だろう。
しかし、とも思う。
そのオキツグの余裕は、彼がこの事態に心がさざなみ立たない程に苛烈な人生を送ってきた事の現れなのだ。危険、死の恐怖、覚悟、それを強いられ続けた兄に真澄は心が沈むのを感じた。

混乱は驚く程少なかった。
それは単に、長谷部が周囲に行った事情説明のお陰だろう。民事党の長、現総理大臣は街頭演説などを含めた、草の根活動的な部分で民意を勝ち得てきた人物だ。彼は堂々と、力強く、今ある危機に対して毅然とした態度で臨む事を説明すると、説明されていた彼らは一様に落ち着いた様な表情を見せる。
（ほう・・・）
その様子を見て、オキツグは心の中で軽く口笛を吹いた。
（やるじゃねえか、民主主義）
過去の経験上、民主主義を標榜する連中と関わって碌な目に会っていないので、それらの国々の為政者に対するオキツグの目は非常に厳しい。
若干、ふてぶてしさが足りない印象も受けるが、混乱を弁舌で収

めてしまう手腕、危機に対する状況の判断力は非常に迅速で、何より実際的なのはとても好ましく感じた。
集団の輪から一人外れてその様子を見守っていたオキツグは、後ろから肩を叩かれた。
振り向くと、そこには綺麗な赤い髪をショートに纏めた怜悧な瞳の少女（？）がいた。
近衛の騎士外套に身を包んだベヘナだった。
「ああ、お前か」
「はい、既にご報告申し上げたかと思いますが」
長谷部の演説に気を取られている群衆を見ながらベヘナの追加説明を受ける。
彼女が報告した事実の一つにオキツグは眉をひそめた。
「何、本当か？」
「はい、既に地上の自衛隊、及び警察の警備隊との通信が完全に途絶しています。ここで下に降りても待っているのはテロリストだけです」
今回、マクヴェスの近衛騎士団はここよりも更に上階のフロアにしか立ち入りを認められていない事になっている。火急の場でベヘナだけは降りてきたが、それは将軍の補佐官と言う立場を利用したものだ。
（確かに、いい状況ではないが・・・）
ここで部下達を下に呼べば事態の解決を図る事は感嘆だろう。殊に対ゲリラの戦力として、剣導士以上に優れた存在はいないからだ。しかし、それは出来ない。
ベヘナは念を押す様に言った。
「もし、仮に我々の勢力が協定した範囲以上に足を踏み込めば、日本以外の勢力、こちらとの国交を望まない国々は異世界による領土侵犯と騒ぎ立てる可能性もあります」
この場にこちら側の勢力の姿が見えないのは、友好を象徴するイベントに武官が大勢いては無粋と言うのもあるが、それ以上に政治

的に配慮がなされた結果だ。
それら諸々の要素を頭の中に思い浮かべながら、オキツグは短く号令を降す。
「撤収準備だ」
断固とした声だった。
「ここは不味い気がする。俺達がいると言うこと自体が特に」
「同感です」
追従ではない、本意で頷くべヘナ。
そもそも、自分たちの存在自体が何かと物議を醸す存在なのだ。いざ、事が起こっていた時にその場にいたと言うだけで、自分達が手引きしただの、マクヴェスの近衛は役に立たないだのと文句をつけられる事請け合いなのだ。
「だが、こちらを見捨てる態度を露骨に見せるのも不味い。準備だけ進めて、この場は俺がどうにかする。上の奴らはお前が面倒見ろ」
「元よりそのつもりです。ですが、戦場に将軍が一人身と言うのは問題があるのでゴドン曹長をこちらに向かわせます。こちらとの連絡員という事にすれば申し訳は立つでしょう」
「分かった」
オキツグは、曹長の癖に将軍の自分にため口をきく、豪放磊落な大男の部下の姿を思い出して苦笑する。
では、と影の様に姿を消すべヘナ。
一人残されたオキツグは周囲を見渡しながら、タケルだけが家族に囲まれながらも不安そうな表情で俯いているのを見てとる。
周囲の注意を集めない様にゆっくり歩きながら、タケルの背後に周り、肩に手を置くとびっくりした様子で後を振り向いた。
「オ、オキツグさんっ」
「どうした、表情が暗いぞ」
突然現れたオキツグに、タケルだけではなくその家族も驚いていたが、タケルに気を遣う様子を見て意外な物を見た様な眼をする。
（失敬な奴らだ）

反面、自分の印象は子供に優しくするだけで驚かれる程なのかと密かに傷つく。
口元が引くつくのを我慢してタケルに言葉を促す。
「で、どうした」
「え・・・ああ・・・その」
タケルは暫く言葉を探す様に要領得ない様子だったが、やおら顔を上げてオキツグの瞳を視線で貫くと言った。
「あの、何だか怖くて、胸騒ぎがして・・・」
「そうか」
見ると、タケルの腰を抱える様にその妹、美香という少女がオキツグを見上げている。周りと違ってオキツグを恐れる様子も無い、純粋な瞳だった。
（家族、か・・・）
少なくとも、妹は兄を深く信頼しているようである。
オキツグがタケルを見下ろしながら、左手で《白燐丸》の柄革に触れた。

リィイイイイイイイイイイッ

微かに、オキツグにしか分からな程度で《白燐丸》が鳴動している。
（・・・こいつ、戦いの、血の、死の臭いにはやたらと敏感でいやがる）
代替物に取り換える以前、《白燐丸》を直接佩いていた頃にはよくあった事だ。この懐かしい感触を、嫌悪、懐旧、充実、複雑、様々な感情をもって迎える。
「オキツグさん?」
急に黙ったオキツグを不安に思って覗く様に顔を窺うタケル。
「あ、ああ、すまん」
やれやれ、と自分自身を戒める。

ここのところ、《白燐丸》に限らず魔導刀に心の安らぎを求めてしまっている様な気がした。よくない傾向だ。

オキツグに固定されていたタケルの瞳が、ふと別の場所に向かう。タケルだけではなくその家族も同じ方向を見ていた。

視線の先を探そうと辺りを見回すと、長谷部首相の演説は未だに続いていた。集団の殆どはその言葉を大人しく、それでいてすがる様に聞き言っている。不安なのだ。いや、長谷部自身が不安による集団の暴発を恐れて、気をそらせようと必死で言葉を繰る。

その演説の邪魔をしない様に、影に隠れながらこそこそとこちらに近寄ってくる大柄な人影が一つ。

「旦那」

ゴドン曹長だった。

オキツグを超える長身に、分厚い筋肉の鎧、日に焼けた肌に短く刈り込まれた茶髪が囲む顔は、厳ついものの、不思議と笑顔の似合う愛嬌に満ちている。

火急の場にいながら、ゴドン曹長は日に焼けた厳つい顔を綻ばせてオキツグに手を上げた。

「来たぜ」

「おう、御苦労。エレベーターは使わなかった様だが、どうやってここまで来たんだ？」

この階エレベーターが駆動した音は聞こえなかったし、そもそも彼が訪れたのは反対側からだった。

ああ、それはとゴドンが自慢げな表情をつくりながら指をさした。

「ん？」

オキツグと真山一家が指された方向を見る。

そこは外の光景を映すガラスの壁の一画、緊急の換気用に設けられた窓を可動範囲を超えて無理やり押し広げられた跡だった。

「これでも気を使ったんだ。エレベーターは使うなってベヘナ様が言うし、だったら外から直接降りてやれって思ってよ」

どうだ、と胸をそらすゴドン。

（こいつは・・・）
オキツグは呆れの表情、真山一家はゴドンのスカイツリーをジャングルジムの様に事なく降りてきたというゴドンの身体能力の凄まじさに驚きの目を向ける。
呆れながらも、「どうだ」と言わんばかりに胸をそらすゴドンは芸をした後のゴリラやチンパンジーの様な愛嬌があった。一瞬だけ猿回しに芸を仕込まれるゴドンの姿を想像して笑いかけ、慌てて引っ込める頃には注意するタイミングを失ってしまう。
「・・・こっちの世界の物をみだりに壊すな器物損壊だぞ」
それだけ言っても、ゴドンはどこ吹く風だった。
「お兄ちゃん・・・」
声をかけれて振り向けば真澄の姿だ。
（あ、やべ）
すっかり忘れていた。場の空気の変化とタケルに気を取られていたのだ。先程からオキツグを追いかけてそこにいたのだろうが、視界と意識の外にあった。
「あ、ああ、どうした」
真澄はほっとかれた事に不安と不満を抱いている様子で眉を八の時によせる。
その様子を見てゴドンがすかさず「これは、これは」と口をはさむ。
「こいつは驚いた。旦那にこんな美人な妹君がいらっしゃったなんて、どうですかい？　自分を義弟と呼ぶつもりは？」
軽口と口説き文句、そして滅多に使わない敬語を駆使するゴドン。
（こいつ、こういう時だけ・・・）
豪放磊落なゴドンだったが、女相手には驚く程に口と舌が良く回る。オキツグが不真面目な部下の勤務態度と、自分を差し置いて妹口説かれた事に腹を立てて反射的にゴドンの側頭を手刀で打った。
「あっでっ」
巨体を傾かせながら打たれた場所を抱えてもんどりうつゴドンを

見てオキツグは胸がすく思いをした。
「お前、ゴリラみたいな面しやがって、繁殖欲はゴリラ以上か？」
冷淡に言い放つオキツグに、涙眼のゴドン。
「・・・・ふふ」
まるでコントの様なやり取りに真澄は頬を緩めた。真山家の人達もだ。緊張に満ちた面持ちだったのが、気楽な様子に僅かながら変化が見えた。
するとゴドンはその様子を見て
「俺のお陰だな」
などと言って、今度は反対側の頭をオキツグに打たれる。
真澄は苦笑する様に笑う。
「お兄ちゃん達っていつもこんな感じなの？」
真澄達からしてみれば意外だったのだろう。オキツグ達が初めて世間に姿を現した時は、まるで日本を侵略しに来たかのような硬質さと緊張感を持っている様に見えたからだ。
（軍隊が厳めしいのは外側に向けてだけだしな・・・）
真澄の言葉を否定できない事にやや焦りを覚える。一応はマクヴェスの人間として、近衛が舐められるような事態に陥るのは良くない。
「真澄、あのな・・・・・」
言葉を紡ごうとして、ふと猛烈な違和感を感じる。
（何だ？）
まるで耳鳴りの様な、奇妙な違和感。その正体を探そうと辺りを見回す。
「お兄ちゃん？」
急変した兄の態度に困惑した様な声を上げる。しかし、オキツグはその言葉に応えず、ただその違和感の正体を探る。
長谷部首相は集団の注意を集めようと必死で弁舌を振っている。
報道陣はそれに魅入り、時々思い出したようにカメラを回す。
警察のＳＰが己の職務を忘れずに周囲を警戒する。

タケルの家族が茫然と自分の様子を見ている。
ゴドンは何かを察したように表情を戦士のそれに変える。
妹は不安に駆られた様にこっちを見ている。
「・・・」
腰の《白燐丸》は歓喜にうち奮える様に鳴動していた。
オキツグは魔導刀の鯉口を切った。その様子を見咎めた報道陣の一人、男性レポーターが慌てたようにこちらに寄ってくる。
「どうかされたんデスカ！？」
その日本語には妙な訛りがあった。
首から下げられたホルダーには写真付きの取材許可証がある。ＮＡＭＥの欄にはハングルで記されていて、見た目は日本人と変わりないが彼が韓国の記者である事を示していた。
若く、背は高い。長身のオキツグを上回る位だ。確実に百九十センチは超えているだろう。細身のオキツグとは違って筋肉質で、日焼けした肌もあいまってスポーツマン的爽やかさのある男だった。
「あの、何が・・・」
困惑した様に聞いてくる記者を無視して、周囲の観察に勤しむ。
（・・・そうか）
オキツグは違和感の正体に気がついて一番近くにいた報道陣、日本の民放の女性レポーターが呆けた様子で長谷部の方向に向いているのを「おい」と呼びかけた。
「はい？」
振り向いて、声をかけたのがオキツグである事に気がついて驚きに肩を震わせる。切れ長の瞳にアップに纏めた髪が印象的な女はフォーマルな装いをしながらも、疲れた様子だった。
「お前、どこの局の者だ」
ホルダーに下げられている取材許可証を見ずに、あえて本人に聞く。
「あ、はい、富士放送の会田美智子といいます」
加えて質問する。

「お前の局のカメラマンは誰だ」
すると、会田美智子は少し迷う様な素ぶりを見せながら取材陣の一画、長谷部にカメラを向ける体格のいい男を示す。
「あの人です」
「・・・そうか」
怪訝な表情をする女性レポーターを手で追い払うと、彼女は蜘蛛の子散らしたように同僚の元に帰って行った。
一連の質問、行動でオキツグの疑念は確信に変わった。
「ゴドン」
「・・・なんだい、旦那？」
「お前、猿みたいに鉄柱辿って外から降りてきたなら、下の様子は見ただろう」
「ああ、酷いもんだった。爆破テロだろうな。生きてる人間一人もいなかった」
誰もいなかった。そう言った。
（一連の出来事は明らかに俺達、日本とマクヴェスの要人をターゲットにしたものだった。下の爆発もそのための布石の筈だ。なのに、下にはその気配すらない）
オキツグは《白燐丸》の機関部の核石を手で隠しながら、起動レバーを操作しつつ「イグニッション」と小さく唱えた。
発動する魔術は生体系術式の《肉体強化》だ。加速された知覚と、強化された聴覚は、しかし、仮にテロリストが下からこちらに向かっていれば聞こえてくる筈の音を拾う事はなかった。
（下で事を起こした奴らはこちらに踏み込もうとはしていない。だが、敵の狙いはこちらである事は必定。つまり・・・）
こちらの荒事を担当するテロリストは既に集団の中に潜んでいる。
そして、先程の女性レポーターだ。彼女は自分の同僚を探すのにやや迷っていた。些細な事ではあるが、よく知っている人たちであるが人が沢山いて分からないと言うよりも、よく知らない人達だから判断に手間取るという印象を受けた。

もしかしたら、彼らは今日になって急遽組まされる事になった即席のチームなのではないか。それこそ、お互いが顔も知らなかった程の。

「・・・ゴドン」

「・・・おうよ」

「嫌な予感がする」

「・・・・俺もだ」

「あ、あの！」

先程から根気強くこちらに語りかけてくるレポーターは緊張のボルテージを上げるオキツグ達にしびれを切らしたらしく、注意を引こうと声を上げる。

オキツグの目は先程追い払った会田美智子の方に向いていた。彼女はカメラに向かってマイクを持って語りかけている。カメラマンは丁度、その延長線上に長谷部総理を映しているのがこちらから見えた。

しかし、次の瞬間に変化が訪れる。

そのカメラマンはやおらカメラを投げ捨てると、懐に手を伸ばした。高価な筈のカメラは盛大な音を立ててその価値を一瞬で無にされる。驚いた様子で固まる会田レポーターと、何事かと注目を集めた周囲の目がある中、男は懐から一丁の拳銃を取り出す。

「ッ・・・・」

その黒い塊を見咎めた瞬間、オキツグは右手を《白燐丸》の柄にかけ、床を蹴り砕く様に駆けだしていた。

？

第10話　MARCH

「何と言う事だ」
堂島淳一郎一等陸尉は陸上自衛隊の戦闘服に包まれた筋肉質な巨体を震わせながら、眼の前の光景に呻いた。
東京都墨田区押上の電波塔、その麓の近未来的な商業区画前の道路は破壊と死に満ちていた。
美しく、綺麗だったビルの内装は焼け焦げ、配置されていただろう警察官たちと警察車両は残骸となって木端微塵となって瓦礫を撒き散らしている。
爆発だ。テロがあったのだ。
陸上自衛隊、特殊作戦群、軍本部第二課、の即応部隊の一員である堂島は幕僚長からの緊急コールを受けた上官、甲斐田の指揮下の元、総理大臣の直轄部隊として音沙汰がなくなった警察と自衛隊による警備区画に潜入した。
現場五十メートルに踏み込んだ辺りからが酷かった。生きている者は誰一人としていず、ただ無残に残骸と遺骸を晒す同国人の姿があった。
（一体何が・・・）
「堂島分隊長！」
辺りを探っていた部下の一人に呼びかけられてそちらを向く。若い隊員である彼は切羽詰まった様子でこちらに来てくれと言う合図をする。
「どうした？」
走り寄りながら聞くと、彼は「こちらの方が」と斃れて仰向けになった躯を指した。
「・・・あ・・・う・・あ・・・」
その人物は生きていた。
恐らく婦警だったのだろう。しかし、爆発に焼かれた体の右半分

は既に炭化しており、右目は白く白濁していた。残った左目も虚ろで、長くない事は明らかだった。

堂島は生存者がいたという事実とその光景に驚きながらも、意思の力で強引に動揺を消し、女性の傍らに膝をついた。

「君、聞こえているか」

返事は帰ってこなかったが、僅かに反応はあった。

「自分は陸上自衛隊、特殊作戦群、軍本部第二課の堂島一等陸尉だ」

名乗った堂島に傍らの部下が驚いた様な表情を浮かべる。

自分達はただの陸上自衛官ではない。特殊作戦群の一員、つまりは特殊部隊員だ。上官の許可なく所属を明かす事は禁じられているし、家族にすらその詳細を語る事はまかりならない。眼の前の、死にかけとは言っても関係ない女性にそれを明かすのは本来してはいけない事だった。

(だが、今はそれが必要なのだ)

一度、深呼吸して息を整えて口を開いた。

「君は死ぬ」

ただ告げた。隣の隊員はその言葉の率直さと残酷さに息をのんだ。

しかし、それまで呻くだけだった婦警は虚ろな視線を彷徨わせると、今度はハッキリした言葉で

「・・やはり・・・死にますか」

と言った。

堂島は「ああ」とハッキリと肯定した。しかし、婦警は絶望や落胆した様子もなく、ただ事実を受け入れる様に「そう・・・」と呟く。

「テロだ。テロが起こったのだ。そして、未だに脅威は去っていない。その中には君達が警護していた日本国総理大臣、長谷部首相の姿もある」

その言葉に婦警の虚ろだった瞳が定まる。

「自分達はその脅威を取り除きに行かなければならない。残酷な事を聞いているのは承知だ。だが、もし・・・もし、君が今回の犯人

について何か知っているようであれば、何か教えてほしい」
婦警は何事かを呟いたが、それはくぐもって聞き取りにくく、何を言っているか分からなかった。
「しっかりしろ！」
堂島は怒鳴った。
「君は、君も日本国の安全と国益の守り手の一人だろう！
このままでいいのか、私達の国の平和を脅かされたままでいいのか！？
警察官としての意地を見せろ！」
心を叱咤するその言葉は、婦警に最後の力を振り絞らせた。
堂島は婦警の口元に耳を寄せ、最後の言葉を聞きとる。
（何！？）
その言葉を聞いた堂島は驚愕を露わにした。最後まで言葉を聞き終えて手早く部下に指示を出す。
「急げ！　敵は既に上にいるぞ！」
情報によればテロリストの狙いはスカイツリーから降りてきた要人を狙って暗殺と言う事だった。
だが、婦警の情報を鑑みるに、事態は堂島が思っていた以上に切迫している。
スカイツリーに駆けよろうとして、堂島は眼を見開いたまま息絶えた婦警の姿を見下ろす。
「・・・」
堂島は婦警の傍らに膝をつき、その左目を閉じてやると再び戦地に向かって駆けだした。

オキツグはその瞬間、時間が無限に引き延ばされていく様な錯覚を覚えた。
ツルリと光る床を滑空しながら《白燐丸》の鯉口をきる。

色々なものが見えた。
突如として暴徒と化したカメラマンの男に驚く他の報道陣達、銃を向けられた長谷部などの政治家達は事態を理解出来ずにポカンと呆けている。
そして、それらの光景はズームアップするかの様に急速に近いものとなって行く。カメラマンとは距離にして三十メートル足らず。だが、オキツグの《氷王》として持つ膨大な魔力によって強化された身体能力は一足一刀のそれになり果てる。
オキツグが眼の前に迫って、初めて銃を持った男はその存在に気が付き、驚いた様な茫然としたような、強いて言うならキョトンとした表情を浮かべた。
（おせえよ）
男の目前で右足を床に踏み込む。体に急制動をかけながら、運動エネルギーをそのまま反りのない魔道刀に伝え、跳ねあげる様に抜刀、斬り上げた。
刃渡りは一メートル弱であるが、反りがないせいで普通の刀とは違って圧倒的に抜きにくい。が、師匠であるイプシロンに教わり、相棒であるリュロンに鍛えられ、そしてオキツグ自身が練り上げた剣術、抜刀術は圧倒的な生体系術式もあいまって「抜即斬」の一撃となって銃を構えたまま呆ける男の右わき腹に吸い込まれた。
「ぐぎょっ！？」
男は声を上げようとしたのだろう。しかし、それはかなわなかった。《白燐丸》は男の筋肉、肋骨で血に飢えた刃を休めることなく、逆袈裟に血肉を両断、左肩の肩甲骨を絶ち割って抜けた。
剣圧で男の体は吹き飛び、展望ガラスにめり込んでひびをつくる。
ブシャアアアアッ
強化ガラスに直撃した男はオキツグの剣撃と激突の衝撃で右わき腹から左肩にかけて両断されていた。上半身が痙攣をおこしながら

遠くに転がり、下半身が壁際に尻もちをつきながら血を噴き出す噴水となっている。
それを見ていた者達の時間が凍り着き、制止した。
そしてその全てを無視する様にゴドンは軽く駆ける様な足取りで惨殺死体をつくり上げた、血に濡れた《白燐丸》を片手に佇むオキツグに賞賛の拍手を上げる。
「おおう、相変わらずお見事だな。人が文字通りでゴミの様だ」
オキツグはその軽口に乗らずに辺りを睥睨する。
周囲が固まる中、いち早く現実に復帰した長谷部首相が慌ててこちらに走り寄ってくる。
引きつった、凍り着いた様子の長谷部にオキツグはニヤリと唇を歪ませる。
「危ないところでしたね」
「あ、ああ・・・・」
死体を見、血に濡れたオキツグの愛刀を見、返事をするのがやっとと言った様子でそれだけ言った。
ゴドンだけが凄惨な光景を機にした様子も無く
「で、どうするよ」
と聞いてきた。
その問いにオキツグは表情を変えることなく、長谷部に向けたニヒルな笑顔すら引っ込めて無表情に答えた。
「不届き者がこれで終わりな筈がないだろう。お前は総理大臣閣下と真山一家を守れ」
「了解、それと旦那の妹君もな。守るだけならなんとかならあ」
腰の魔導剣を叩いてそう言った。
「頼んだ」

ピシ、ピシシシッ

その音は、オキツグが両断した男の遺体が激突した展望ガラスか

ら聞こえた。
　高所の安全を守る壁として、そこには強化ガラスが用いられている。超高密度かつ強固な筈のそれは、百キロ弱のたんぱく質の塊の大激突を受けて亀裂を造り、高密度であるが故の内圧の逃げ場所を探してひびを大きくする。
　割れるのだ。
　オキツグは集団を見る。
（やっぱ、まだいるな）
　テロリストは一人でないとは思っていたが、惨殺死体を前に凍り着く報道陣の中には、遺体ではなくオキツグに大して注意を払っている者がいる。恐怖では無く敵意の視線を向けて。
　彼らがテロリストの仲間なのだろう。全体で三十名弱だろうか。

ピシシシッ

　ガラスに亀裂が入る音が、まるで何かのカウントダウンあるかのような静寂をもたらした。
　オキツグは《白燐丸》の血振りをして準備を整える。人の林に紛れた者達も戦うための機を見計らっている様に思える。その張りつめた空気は、何も関係のない筈の報道陣達にも伝わっていった。

ピシシシッ・・・・・ギィッ

　音が変わった。
　割れる。
　オキツグが確信を抱くと共に、刀を肩に担いだ。ただそれだけなのに、過剰に反応する者達が幾人かいて、その理由も丸わかりだ。
「さて、行くか」
　そう小さく呟くと、ガラスの軋みはオキツグの呟きに急かされたかのように急激に崩壊の音をたてて、割れた。

ギシシシシシシシッ・・・ギャリイイイインッ！

ガラスが弾け、地上に降り注ぐ破片と共に落とされたの戦いの火蓋だ。

展望ガラスが崩壊した瞬間、報道陣の中に潜伏していたテロリストたちは緊張の面持ちと共に荷物の中にカモフラージュされていた武器、ストックが折りたたまれていた突撃銃を構える。

照準は全てオキツグに向いていた。

その光景を見て冷静に後を見て誰もいない事を確認する。

（後ろには誰もいない。流れ弾で誰かが死ぬ可能性は・・・跳弾したらご愁傷さまって事で）

後を振り向く姿が退路を確認している様に思えたのだろう。テロリストの緊張に満ちた面持ちに僅かに余裕が生まれると、どこかの誰かが人垣の隙間を縫うように突撃銃を構えながら叫んだ。

「撃て！」

号令と共に引き金が引かれ、凄まじい銃撃音が鳴り響く。

ギュバババババババババババッ

たった銃数秒の連射で弾倉は尽きるが、訓練された手つきで手早くマグチェンジを繰り返して、過剰とも言える程の銃撃を繰り返していく。後ろにしていた強化ガラスの壁は砕け、爆発し、粉塵を巻きあげてオキツグの視認を困難にしていたが、それでも彼らは銃弾を放ち続けた。

それが一分位続いただろう。

「撃ち方やめ！」

最初に号令を降した声の持ち主、中年の男の言葉に従い銃撃が中止される。既にガラスの粉塵が巻き上げら得て近くに寄れない状態だったが、彼らは一様にオキツグの絶対的な死を確信したようだっ

た。
「よし」
男の呟きが更なる引き金だった。
「きゃあああああああああああああああああああっ！！」
報道陣の、某民放の女性レポーターが上げた悲鳴により、緊張状態にあった一般人の彼らの箍が外れた。
「うわあああああああああっ！！」
先程、オキツグに両断されたテロリストの同僚として働いていた、照明板を掲げていた若い男が恐慌をきたしたように叫びだし、どこかに逃げだす様に駆けだした。
「貴様、何処に行く！」
号令を降した男は傍らを通りすぎた若者の襟首を掴んで強引に引き倒す。
「ぐがっ」
「大人しくしていろ」
冷然と告げると、それにつれて周囲の人間達も落ち着きを取り戻し始めた。
その様子に満足したように男は頷き、辺りを睥睨する。そしてとある一画を見定めて、他の仲間の数人と共に悠然と歩いていく。人垣がモーゼの様に割れた。
「さて」
男が視線を定めた先には数人いた。一人が先程彼らが始末したオキツグの仲間、ゴドン曹長。その後ろに守られる様に日本国首相の長谷部とオキツグの妹の真澄、そしてタケル達真山一家だ。
「そこをどけ」
隔てる様に立つゴドンに銃を向け、告げる。
しかし、ゴドンを銃に臆した様子も無く。厳の様な顔を皮肉気な笑みに、肩を笑いに震わせる。
「・・・何がおかしい」
憮然とした様子で男が問う。するとゴドンは「ああ、すまねえ」

と笑いながら言った。
「すまねえな、相対して常識はずれな真似をやられると腹も立つし、顎が外れる思いも何度もさせられる人ってのはわかってたんだが・・・中々どうして、味方としてそれをやられるとここまで面白可笑しいとは思わなかった」
言葉の意味が理解出来ずにいた男は怪訝な表情をするが、あえて言葉は重ねずにゴドンに向けた銃の引き金を絞る。

ギュバッ

単発で響いたそれは、銃声と言うよりは布を引き裂く音に似ている。
一発の弾丸は真っすぐ、至近距離でゴドンの胸、軽鎧の上からでも楽に貫通する距離で心臓真上に吸い込まれた。が

「ぬ、おっとっ」

着弾を確認するも、彼はそんな間抜けな音と共に僅かによろけただけだった。
僅かな時間、眼の前の光景が理解出来ずに呆け、そして銃撃が無効化された事に理解が及んだ瞬間、男も含めて、ゴドン達を囲んでいたテロリストたちはゴドンから飛びのいた。
「ああ、いてて、ひでえな。新品の鎧だったってのに・・・・」
鎧を貫いた事は胸元に空いた人差し指が通りそうなほどハッキリ空いた穴が証明している。ゴドンは鎧と服の隙間に手を差し込み、そこから拉げた鉛玉を床に放る。

コッ

くぐもった音を立てて床に転がる鉛玉に、周囲のテロリスト達、

一般人達の逃亡の警戒に当たっていた三十人弱全てがその光景に目を向いた。銃を取り落とした者までいる。
「何故・・・生きて・・・」
「んあ？　何だ、そんな豆鉄砲で俺が、近接特化型の剣導士が死ぬとでも思ってんのか？」
さらにテロリストが驚愕する。
「だから不思議なんだよな」
ゴドンは意地悪そうな、人の悪い笑みを浮かべていた。
「俺より強い筈の近衛将軍をあれで殺した気になってるあんた達が」

ゴフッ

その瞬間、ガラスの粉塵に囲まれていた場所は綺麗に晴れた。突如として発生した気流の流れが割れて外気と繋がった外にそれらを押し流すと、展望台に気圧の変化が起こって展望台のフロアにいた者達に漏れなく耳鳴りをプレゼントする。
男はその光景に対して遅れて振り向いた。
「な、まさか・・・」
喉が渇いてよく言葉を発する事が出来ないのだろう。ヒュウヒュウと無様な音を奏でながら、やっとの思いで発した言葉はそれだけだった。他のテロリスト達も、その光景に目を向き、そもそも信じる事すら出来ずに天を仰いだ。

カッ

音がなる。それは彼らも知っている音だ。さっき聞いたばかりの、死を振りまく魔王の入場音。

カッ

軟金属が仕込まれたブーツが床を叩く。
男はからからに乾く喉と共に、驚愕に見開いた眼を一点に向ける。
「お前は！」
「よう」
晴れた霧の向こうで、鎧にすら傷一つないオキツグは声をかけてきた。一歩一歩距離を詰めながら、無造作に。しかし、逃亡を許さない絶対的圧力を殺意を放ちながら。
手から下げられた《白燐丸》はまるで死神の鎌の様だ。
「お前ら・・・」
オキツグは告げる。一見して無表情、しかし、体全体から滲みでる様な怒気と殺意、まるで悪魔的な圧力と共に。
「人んちの家族団欒に水さしやがって、生きて帰れると思うなよ」

第１１話　氷の魔人

「人んちの家族団欒に水さしやがって、生きて帰れると思うなよ」
「ッ・・・」
オキツグがその言葉を紡ぐと同時に、リーダー格の男の傍らにいた仲間の一人が反射的にオキツグに照準する。
「フッ」
短く呼気を吐いて、オキツグはだらりと下げた刃を上向きにすると、一本背負いをする要領で刀を跳ねあげながら踏み込み、常人では、ましてや魔術による生体強化の恩恵を受けていない彼らには絶対不可視の一撃となって銃を構えた一人に接敵、引き金を引く前に左の脇腹から右の肩にかけて、銃と、銃を構えた腕ごと斬り飛ばした。

ズシャッ

先程と同じように、上半身と下半身で両断された男は、いきなり吹き飛ばされるが、今度は受け止めるガラスの壁が既にないので、はるか地上を目指して血を撒き散らしながらダイブした。
テロリスト達はその手に持った武器をオキツグに向ける事を忘れ、ただ茫然と、眼の前で起こった一方的な塵殺の後に見入った。
（・・・・・）
オキツグは無言で後ろに下がり、ガラスで出来た壁を背に向ける。
テロリスト達全てを視界におさめる位置取りだ。
刀の切っ先で周囲を威圧する。眼に殺意と怒気、覇気、ありとあらゆる感情を物理的力が伴うまで込めると、武器を持った彼らは下がる。
誰も、何も音を発する事のない時間があった。
しかし、その沈黙は長く続かない。

中心的存在である事が窺える男はいち早く現実に復帰したのだ。
「ッ・・・う」
撃て、そう言おうとしたのだろう。
しかし、銃口は遊んでいた。向ける相手の姿がそこにはなかったのだ。
「何処だ!?」
視線を彷徨わせるが、そこにあの白髪の悪魔の姿はいない。テロリストはなかばヒステリックに叫んだ。

ピキッ

何かが軋み、割れる音を聞き付けて衆目が上に向く。
「甘い、全く甘すぎるな。これが剣導士の、本物の戦争屋同士の戦いだったら、貴様らは五回は死んでいるぞ」
魔導刀を肩に担いだ調子で淡々と語るオキツグであったが、テロリストも含めて、その場にいた全員が眼をむいた。
何と、足は天井に接し、百八十度反対となった世界に立っていたのだ。
彼らの視界にパラリと白いものがおちる。粉上のそれを、腰を抜かした報道陣の女性レポーターが手に取り呟いた。
「雪?」
そう。それは室内ではありえない自然現象、雪だった。
オキツグが立つ天井を中心に降り注いでいたそれは、やがてその版図を広げ、展望フロア全体に舞い落ちる。
テロリストのリーダーの男も右手で銃を支えたまま、天井から落ちるそれを手に取る。掌に落ちた雪は白く、じわりと男のてに冷たさを与えて水になった。

ピキッ、ッピキピキキ!

天井から聞こえたその音はオキツグの足元から聞こえた。
その場にいる全員は、眼の前の幻想的な光景に眼を奪われながらも、その何かが迫りくる様な圧迫感を与える音に不安に駆られ、半ば強迫観念に様なもに従い、オキツグを見上げる。
オキツグの靴の裏側から、まるでスケートリンクの様なツルリとした氷が天井をコーティングしていく。ジワリ、ジワリと先程の雪と同じように領域を広げ、直にフロアの天井全てを氷のスケートリンクにしてしまった。
同時に雪の量が増した。
「何だ、何なのだ」
男は呻いた。
何なのだ。この光景は。一人の男が起こす奇跡に眼を奪われ、惹きつけられ、まるで神の様ではないか。
オキツグは天地さかさまにフロア見下ろし、ニヤリと笑った。まるで悪魔の様な笑みだが、そこには気持ちがこもっていない。別に何が面白いでもなく、ただ、テロリストを威圧する事に効率的であるから、義務に駆られてやったといった調子の空虚な笑い。
全てが見守っている中で、オキツグは魔導刀《白燐丸》を振りあげ、空中で器用に逆手に構えると天井に振り下ろして突き立てた。
男は何かが始まる予兆に猛烈な危機感を覚え、半ば反射に従いオキツグに照準、引き金を引いた。

ギュバババババッ

その様子をオキツグは傲然と感情の浮かばない表情見下ろし、感情の浮かばない声を発した。
「氷閻刀・氷壁」
その呟きと共に、突如として凍った天井から氷の壁がオキツグを円形に取り囲み、包み込む。
銃弾の全ては氷に弾かれ、あるいは穿ったものの取り込まれてオ

キツグに辿り着く事はなかった。
男の仲間達も、つられたように銃撃を加える。
しかし、結果は同じだった。やがて、銃弾を全て遣いはたしたテロリスト達は茫然と氷の玉座にたちつくすオキツグを見上げる。それしか出来なかった。
「氷閻刀・剣山」
その呟きと共に、氷の天井は一気に厚みを増し、凹凸をつくり、氷柱を垂らし、そして加速度的に成長しながら、まるで剣を振り下ろすかの様な速さをもってテロリスト達を貫いた。
ズシュリ、そんな嫌な音がフロアに響く。
「ぎゃあああああああああああああああああっ！！」
誰かが叫んだ。
その声にハッとして、男も含めてその場にいる全員が辺りを見渡す。
そこは地獄の様だった。
三十人はいたテロリストの八割近くが天井から伸びた氷の刃に突き刺され、血を流し、或いは既に即死の状態だった。
しかし、流れ出ていた血も直に止まる。生き残っていた者の悲鳴もだ。貫いた氷柱は血を凍らせ、たんぱく質を膨張させ、人の組成を一気に破壊してしまう。やがて、直に静寂が訪れた。
「うわ、うわあああああああああああああああ！？」
眼の前の地獄絵図を許容しきれず、何を逃れたテロリストの一人が手に持っていた拳銃をオキツグに投げた。が、それは慣性に従い床に転がり、オキツグに化する事すらなかった。
「気は澄んだか？　では死んでもらおう」
傲然と降される諸兄宣告。しかし、彼らはどうする事も出来なかった。どうすればいいのか分からなかった。苦し紛れに手に持った銃を投げつけるが氷の壁はその程度崩れず、リーダーの顔を窺うが、その彼は脳の血管が切れそうな程の怒気とともに歯ぎしりしていた。
眼の前の、理不尽な光景に怒っているようだった。

憤然としながらも、男は気を取り直し、不敵に笑う。
「全員、《剣》を出せ！　生き残った者は全員だ！」
男の声を引き金に、彼らはその手に持った鉄の塊、オキツグに向かって引き金を引いたそれらを無造作に放り投げる。変わりに、腰の後ろから、或いは懐から各々、刃渡りが三十センチ程ある短剣を取り出した。
男はニヤリと笑う。
「イグニッション」
その言葉はテロリスト達から漏れ聞こえた。
魔導短剣だった。
端っこの方でゴドンが驚いた表情を見せ、報道陣と政治家達は何が何だか分からないといった調子で、オキツグは僅かに眉をひそめて言った。
「・・・なる程、それが貴様らの勝算か」
そうだ、という返事の言葉の代わりに、彼らは即座に発動した生体系術式《肉体強化》により底上げされた地力で圧力を発してくる。
明らかに彼らは地球側の人間のはずだ。それなにの何故魔術を？
確かに、魔術を発動するための魔力は誰しも備わっているものであるが・・・
疑問は幾らでも湧いてくるが、それに対する明確な答えを持ち得ないオキツグは即座に思考を中止した。
眼の前に立つのは僅か六人だったが、彼らを斃すのは先程の二十数人の様にはいかないだろう。魔術を扱う剣導士とは、空を飛ぶ様に跳躍し、自然化に猛獣を遥かに超える膂力を発揮し、果ては放たれた銃弾のライフリングすら見抜く超常の存在だ。
だが・・・・・
「ぷすっ」
間抜けな音がオキツグの口元から洩れる。
「ぷ、ふっふっふっふ、ふっひっひっひ、くっひっひっひ・・・・」
最初は堪える様な調子だったが、天井から洩れる笑いは隠す事の

かなわない本物の笑い声だった。その様子にテロリストも含めて、ゴドンを除く全員が不思議に思う。

「ッ・・・・」

リーダーの男は何も語らず、ただ自分たちを嘲笑する様に笑うオキツグに苛立つ様に怒鳴り声を上げた。

「何故笑う！　敵の脅威のレベルが上がった事の何処がおかしい！」

その言葉でオキツグの笑いは哄笑になった。もはや隠す気もなく笑い声を上げる。

「くっひっひっひ、お前らが、お前らが敵だって！？」

さも可笑しいとばかりに口元を押さえながら、オキツグは天井から足を離した。自由落下にまかせながら、前向きに半回転。雪の降り積もったフロアに着地する。

「はっはっは、これ程おかしいことがあるか、なあ、ゴドン！」

隅の方でタケルや長谷部を守っていたゴドンも肩を揺らしながら笑っていた。

「はいっ、滑稽であります！」

笑いを含みながら、彼は滅多に遣わない敬語で応えた。

「何が・・・・」

リーダーの男は何かに取り残された、そんな苛立ちを感じながら怒気を言葉に帰る。

「何がおかしい！」

それでも彼らは笑った。笑って、暫く経ってそれが収まった。彼らは無防備に俯きながら笑うオキツグを襲わなかった。襲えなかった。状況の不気味さがそれをさせなかったのだ。

「お前らさ・・・」

未だに笑いを含む声でオキツグは言葉を紡いだ。

「俺が向こうでどういう生き方してきたか知らない訳？」

何を・・・と言葉を挟もうとして、彼は出来なかった。同時に、オキツグの表情は先程の空虚な、それでいて圧倒的な殺意を浮かべる魔王のそれに切り替わっていた。

「俺は《氷王》。向こうでは一端の虐殺者として鳴らしている。戦争にも参加した。まあ、殆ど俺が殺したみたいなものだから・・・・戦争とは言えないかもしれないが」

いいか、とオキツグは言った。

「俺は日常的に剣導士と戦っている。死闘でもなく、試合でもなく、ただ殺している。作業だ。半ば義務だ。俺は剣導士を殺す事に欠けてはプロ中のプロなんだぜ？」

そんな相手に魔術で挑んでどうする。それも、にわか仕込みの付け焼刃が魔王と呼ばれた自分に届くものか。

高らかにオキツグは彼らを侮蔑する。

オキツグはだらりと下げた右手の魔導刀を跳ねあげる。刃はキッチリ上に返し、空気を切り裂く様に刃を通すと、そこからはダイアモンドダストの様に剣圧が白い粉を伴ってテロリストの内の一人、リーダー格の男の右隣りに居た男の正中線にあたる。

「へ？」

それは、ただひんやりとした感触を与えただけで、一見して害はない様に思えた。

しかし、オキツグは厳かに告げる。

「氷閻刀・白梅月下・・・こいつは師匠も遣わない、俺が最近編み出した新型だ」

ドザッ

突然、白梅月下を受けた男が斃れた。何事かと注目を集めるが、男は臥したままかたらず、痙攣する。

ビキッ

何かが嫌な音をたてた。

その音は先程の天井と同じように、亀裂を広げる様な音をフロア

中に響かせ、そしてその音の元凶は勢い良く割れた。

ビギッ！

音を立て、裂けて割れたのは斃れた男だった。男は正中線から左右に割れた。泣き別れだった。まるで切れ味のいいカッターに切断されたかのような調子だったが、遺体からは血が噴き出してくることはなかった。

「戦場と言うのは血生臭い場所でな・・・」

オキツグはそれを眺めながら感慨深そうに告げる。

「血の臭いにあてらて新兵が吐くは、腐れ病気が蔓延するは・・・で、凍らせることを思いついた訳だ」

男の遺体は綺麗に凍っていた。凍って、その体積の膨張に耐えきれずに割れたのだ。

再び沈黙が訪れた。その場の全てがオキツグの成しざまに耳目を集めた。

「う、うわあああああああああああああああああ！？」

生き残ったテロリストの一人が恐慌をきたしたように魔導短剣を片手にオキツグに迫る。魔術の力も相まってそれは世界中のどんな武術家よりも鋭い踏み込みだった。

「くそっ、囲め！　一気に攻撃を加えるんだ！」

勢いに乗る様にリーダーの男が号令を降す。

その声に鞭を打たれた様に、他の四人も即座に魔導短剣を構えた。

「そ、そうさ、俺達だって本国で厳しい訓練を経てきたんだ！」

鼓舞する様に叫んだ一人に男は頷き、素早く支持を降してオキツグを取り囲む。

「おおう、来るか」

オキツグは大上段に迫ってきた男の短剣を《白燐丸》で横にいなし、脇腹にコンパクトな蹴りを放つ。転がり様に他の二人が左右同時に、刀のみではどちらも防ぎようのないタイミングで、魔導短剣

を振りかぶってきた。
「貰った！」
しかし、オキツグはその光景に慌てることなく、刀の峰に左手を添えると、刃を横にして胸の前に引きつけた。
ギィイイイイイイッン！！
つんざく様な音が鳴り響く。
攻撃を加えたテロリスト達の、勝利を確信した笑みはすぐさま驚愕のそれに変わる。
「なっ！」
オキツグは、迫った左の刃を《白燐丸》の切先で、右の刃を柄頭の金具で受けきったのだ。それらが僅かに震えるのは、彼らが裂帛の気合を込めて付きこんでいるから。しかし、その力の理合いは完全にオキツグに握られている。
オキツグは集中する様に息を止め、そして呼気が短く放たれた瞬間、力の均衡は崩される。
「ふっ」
キンッ、と音を立てて二人の魔導短剣は押し返され、オキツグは刃を百八十度、時計回りに返すと、横薙ぎの一撃を二人同時に加える。
「く、くそ！」
しかし、《白燐丸》は二人の胸板を浅く薙いのみで、僅かに彼らは引き下がったものの、先頭の継続には支障がない様に見えた。だが・・・・
「こいつ、舐めやがって・・・・」
生体系術式の《肉体強化》がもたらす全能感、高揚感に浮かされた男達は体に違和感を感じて、今斬られた傷を見下ろす。
ボゴッ

そんな音を立てて現れたのは地に濡れた氷の刃の切先だった。最初は一本だったそれらは、一つ、二つと数を増やして、胸だけに飽き足らず、全身を内側から貫く。

「ぐぎゃっ」

そんな、粗末な、惨めな断末魔の声しか彼らは残せなかった。

「氷閻刀・氷血千花・・・斬られた時には既に遅い」

まるで死神の死刑宣告の様だった。

「お、おおおおおおおおおおおお!!」

自らを鼓舞して短剣を突きこんでくる男。しかし、オキツグまであと数歩のところでつんのめった様に止まる。動こうとして、彼は足が床から離れない事に驚愕する。

「床を限定的に凍らせてある。不用意に踏み込むからだ・・・」

そして、獰猛な死の氷は床にとどめるに飽き足らず、その活動領域を男の体にまで移し、侵食する。

「ぐあ、あ、あ、あああああっ、いでえええええ、ぎゃあっいでえええええええええええええええ!!」

生きたまま全身をじっくり凍らされた男は悲痛な断末魔の声を上げながら白亜の彫像と化した。

「さて、最後一人だ」

注意を向けられ、男は肩を震わせた。

「・・・だ」

男は呟く様に、切実な様子で何かを言おうとしていた。

「ん?」

「何故だ? 何故、我々が破れる!?」

その言葉は妄言に近い。

「・・・・」

オキツグは言葉を返さず、男の眼の前までくる。しかし、男は手に持った魔導短剣を振りかぶってくる事はなかった。

「何故だ、何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何

故何故・・・・・・」

オキツグは刀を眼の前に翳して軽く振るが、男から反応は無かった。

ゴドンの方を向いてみれば、彼は肩をすくめている。

「ちっ、こんな事で狂いやがって」

しまりのない最後にオキツグは舌打ちしながら《白燐丸》を鞘に戻した。

堂島淳一郎一等陸尉はその光景を見て、心を奪われた。

緊急事態を想定して設けられた非常階段を慎重に昇ってきた堂島達の部隊は、展望フロアに近くなるにつれて緊張のレベルを上げながら、細心の注意を払いつつ、堂島は一番前の部下にシグナルで報告を求めた。

しかし、彼は僅かに空いた非常階段とフロアを隔てる扉の隙間から、中の様子を茫然と見入って答えを返さない。まさか、こんなところで怒鳴る訳にもいかず、彼自身が部下の元まで行く羽目になった。

(一体何が・・・・)

そして、彼も見た。僅かに空いた扉の隙間から、室内に雪を降らし、天井に立つ魔人の姿を。

見た瞬間、心を振わされた。

そこにいたのは圧倒的な強者だったからだ。

多かれ少なかれ、自衛隊や軍隊に所属しようとするもの。中でも、堂島の様な特殊部隊に入ろうとまで思うものは、強さに対する憧憬が一般人のそれよりも強い。

それ故に、雪景色を纏う、白髪の魔人に強く惹きつけられた。
彼が刀を床に刺す。すると、まるで魔法の様に、否、真実の魔術として現れた氷の刃がテロリストの大半を串刺しにして駆逐する。
（そ、そうだ、準備を・・・・）
観賞している場合ではない。そう心を戒めて、部下に準備する様に手話で合図した。
そして、向こうの彼は見事な刀捌きで残りの者をいなし、斬り伏せ、駆逐する。
それは、堂島が今まで見た事も無い。純粋なまでに合理的で、残酷な程に美しい剣技だった。同じ駐屯地で訓練を励む隊員の中には剣道を嗜むものも多いし、その中には達人といって差し支えない腕前の者もいるが、眼の前の光景のそれに比べると霞んで見える。
堂島は肩に手を触れて合図してくる部下のお陰で夢から覚めた。
（いかんな）
手で頬と叩きたい気持ちで一杯だった。扉の向こうでも戦いが終息した様だ。戦っていた男の部下らしき、体つきの逞しい男が残りの一人を拘束し、縛って転がす。
結果的に人質の救出に自分達は役に立たなかったが、下の安全状況は確認済であるし、実にいいものを見れたので個人的に満足だった。
（よし、そろそろ）
彼らだけでは避難誘導もままならないだろう。せめてそれくらいはこちらがと思い、ドアノブに手をかけた時、堂島は見た。
転がされていた男が口から何かを吐きだし、その小型のスイッチの様な形状をしていたそれを歯で器用に押そうとしているのを・・・・
しかし、脅威が過ぎ去った事に安堵して誰もきがついていない。
「いかんっ！」
気がつけば、堂島はドアをたたく様に押し広げ、フロアに足を踏み入れていた。

第１２話　不毛地帯

「いかんっ！」

オキツグはその叫び声を聞いた瞬間、その音源を即座に発見、しかし、同時にこちらに害意がない事も分かって、焦った様に非常階段口から向かってくる彼の行動の意図が読めずに一瞬だけ困惑する。

だが、辺りを、特に足元に転がっている男が口で器用にボタンを押そうとしているところを見て、鞘に納めていた《白燐丸》を抜き放つ。

ヒュッ

そんな音と共に抜き放たれた刃をオキツグは手首をかえして振り下ろす。

「あぎょっ」

正確、精密に放たれた斬撃は男の舌を綺麗に寸断した。痛みで悶絶する男を余所眼にスイッチらしきそれを剣先でよける。

その様子を見て、ゴドンが遠くから茶々をいれる。

「手で掴めばいいじゃないか」

「やだよ、こんな男の唾液塗れの掴むなんて」

三メートル位、まるで運動会の競技の様に非合理的な行動を真剣に続けるオキツグの姿は、先程の鬼気迫る戦闘の様子もあいまってかなりシュールだった。

「これで良し」

若干ながら晴れやかな調子で呟いたオキツグは、切先に僅かについた血を振り払うと再び鞘に刃を戻した。

「さて・・・・」

切り替える様に、何事も無かったかのように突入してきた男、自衛隊員に眼を向ける。彼だけではない。彼が出てきた扉から一斉に

十人近い自衛隊員達がフロアに突入し、転がるテロリスト共の躯に照準する。しかし、彼らは壮絶な死に方をしているそれらにのまれた様子だった。

「察するに、貴方達は自衛隊の方だろう。テロリストの捕縛か、人質の救出か知らないが、こうしてテロ屋共は俺が全員始末してしまったのでね。人質の救出、もとい避難誘導をしてくれないか？　流石に俺とゴドン曹長だけじゃ心もとない」

まるで、ちょっと道を尋ねる程度の気楽さのオキツグ。自衛隊の彼らは呆気にとられた様子で、最初に飛び出してきたリーダー格の男、堂島が何とか答えを返す。

「りょ、了解した。後の事はこちらに任せてもらって構わない」

オキツグは外套の懐、軽鎧の留め金を一つ外して内ポケットから煙草を取り出すと、一本口に加えて野戦用の防水マッチで火をつける。ここは禁煙の筈だが、この場でそれを咎める者は皆無だった。

「ふぅ」

紫煙を燻らせながら自衛隊の彼らの様子を暇そうに眺める。

彼らは最初、凄惨な現場と、それを成したオキツグにまごついた様子だったが、すぐに自衛官らしい、きびきびした様子でその場にいた人々を誘導、階段による避難を促していく。オキツグはその手際の良さに感心する様に溜息をついた。

「流石だな。俺達は潰し、壊しは得意だが、それ以外となると駄目だ」

傍らのゴドンが、床に転がった男の手当てをしながら深くなずいた。忙しい様子で返事は帰ってこなかったが、その背からは態度以上の肯定の意が伝わってくる。男の方は余計な事をしない様に、ワイヤーによって手足を縛られて拘束されていた。

避難開始が始まって数十秒の内に残った人々を整列させ、階段を降りる音すら伝わってくる。これは、場内に進入していたテロリスト共をほとんど皆殺しにしたお陰で避難させるべき人数が減った事、避難させられる人々が、急な事が起こりすぎて思考が停止状態に陥

っている事が主な理由だろう。
巨体を小さくして男の止血作業にあたっていたゴドンは、一通りの治療を終えたらしく、首を回して音をさせながら立ちあがった。
「お疲れのところ悪いが、今の内にくたばった奴ら調べるぞ」
「え、今かよ」
「今しかねえんだよ」
オキツグはゴドンの肩をたたきながら、彼にしか聞こえない様に耳元に口を寄せた。
「事が済んだあと、俺達に、足元に転がってるのや、それ以外の情報がまわってくると思うか？」
オキツグは、仕事を終えた会社員が帰り際に残業を押しつけられたらこんな気分だろうかと思いながらいかにもつまらなそうに、自分も嫌なのだと言う様子を隠さずに言った。
しかたねえ、と言いながらも不満たらたらでそこらに転がっている死体を漁り始めるゴドン。オキツグも、躯を蹴り転がしながら顔を確認し、時には上着を剥いでみたりしながら調べてみる。
四、五人見回って、オキツグはある事実、そして以前から妙に思っていた疑問が氷解に至るのを確信する。
（そうか、韓国が強気だったてのはこいつが理由なのか。ってぇと、ロシアと中国はそれに乗っかった口か）
さらに三人程調べて、避難の列を見ると、既に数人しか残っていない様子だった。先程のオキツグと言葉を交わした自衛官にタケルの家族と真澄、そして長谷部だった。総理大臣である彼は、自衛官達にとって優先度の高い保護目標なのだろうが、彼が真っ先に避難してしまっては国の、長谷部自身の沽券に関わる。恐らく、自分は一番最後であると主張したのだろう。
ゴドンに「おい」と声をかけて彼らの元に駆け寄る。
「申し訳ない、お待たせしました」
しかし、彼らは気分を害した様子も無く、長谷部は緊張を未だに引き摺る様子だったが、幾許かは穏やかな調子で首を振る。

「いや、今回は将軍のお陰で生きながらえた。本当に感謝しているよ」

傍らに自分を見上げてくるタケルに視線を移した。

眼が合って、しかし、オキツグは何を話せばいいか分からず困惑する。啖呵に恫喝の声はすらすらと出てくる口なのに、こういう時だけ上手く動かないそれが恨めしい。

タケルの瞳はこちらを窺っているようでもあり、言いようの知れない緊張を孕んでいる様な気がした。

（ああ、そうか）

沈黙の正体に思い至った。

考えてみれば、つい先程に彼らの前で凄惨な惨殺死体を数十もつくりあげたばかりなのだ。タケルからしてみれば、普通だと思っていた知り合いの青年の正体を見てしまった気分なのだろう。自分の中の心持と現実のすり合わせを行っているのだろう。

いい言葉は思いつかなかったが、ここで向こうの言葉を待っているのは人生の先輩として情けない様な気がしたので自分から言葉を紡いだ。

「よう」

「・・・・はい」

「生きている様だな」

「はい」

やはり、会話はどこかぎこちない様な気がした。

（今、考えてもしょうがないか）

自分が凍らせた天井の氷柱を仰ぎ見ながら、一旦思考を中断しようとした瞬間、腰に柔らかい衝撃が伝わるのを感じた。

ポフッ

（ッ・・・・）

戦闘の緊張が残っていただけに、凄く驚いてしまうオキツグ。

腰の《白燐丸》を抜きかけて下を見ると、そこにはベージュのセーターに可愛らしいチェックのスカートをはいて、髪は左右に結んでツインテールにしている女の子がオキツグの外套の腰の部分を掴んで見上げていた。歳は三、四歳程だろうか。つぶらな瞳には恐怖のせいか泣いた跡があったが、見上げる瞳は無垢そのもので、オキツグを純粋な好奇心で見上げている様だ。

「あ、こら美香っ」

慌てたように諌めるタケルの声で、女の子がタケルの妹である事を思い出す。タケルが美香に手を伸ばすと、美香はキャッキャと笑いながらオキツグの元を離れてフロアに駆けていく。それを追いかけるタケル。

「・・・・・」

視線を彷徨わせていると、真澄がこちらを見つめていた。その顔には緊張があったが、それでも微笑ましい光景に向けて笑いかけてくれる。

（出来た妹だ）

心の底から思った。命の危機に瀕した事など初めてだろうし、何より自分の兄が数十人を一方的に殺戮する光景を目にした後だ。ショックも大きいだろうに。

時間を気にした様に自衛官の男が言った。

「申し訳ありません。そろそろ降りる準備をしていただいてもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ、すまん」

未だに後で駆けまわる兄妹を回収する事にする。そもそも、この場にはテロリストの遺体が其処らじゅうに転がっているのだ。断じて子供の遊技場にしていい場所ではない。最も、オキツグが精製した剣山で凍死させられているのが殆どであるため、血生臭いことにはなっていないが、この場で鬼ごっこと出来る子供達の心臓は自分たちよりもよっぽど強い様に思えてならない。

真澄達には先に降りる様に言った。長谷部と真澄は何か言いたそ

うな様子だったが、自衛官の男に促されると渋々と言った様子でその場を後にする。タケルの両親は残ると言って聞かなかったが、オキツグが必ず無事に降ろすと言うとようやく引き下がった。

彼らが大人しく階段を降りて行くのを見守る。

「旦那・・・」

ゴドンが耳打ちしてくる。

「捉えたあいつ、どうするよ？」

オキツグが舌を絶ち切った男だ。

舌を切ったくらいでは人間は中々死に至らない。拘束したのは良いが、彼を降ろすにも手間だ。しかも・・・

（奴を下に降ろしても、多分、俺達が事情聴取に立ち合えるとは思えない）

無理を通せば首を突っ込む事くらい出来るだろうが、それはあまり良くない様な気がした。加えて、ここは日本だ。自分たちには男の身柄確保の権限はない。

それらの状況を鑑みて、オキツグは号令を降した。

「殺せ」

感情を浮かばせない声で言った。

「下手したら、テロリスト達の地元から何らかの横やりが入る可能性もある。ある事ない事、捏造される前に口を塞いじまいな。ただ、こっそりな」

了解、そう言ってゴドンは転がっている筈の、もうすぐ遺骸になる男の元にむかう。

（さっさとあの二人を回収して俺も降りよう）

踵を返して階段に背を向け、自分が精製した氷の剣山を掻い潜り、避けながらそう心に誓う。

「あれ、あいつら何処に行きやがった？」

確かに広いフロアであるし、オキツグの氷のせいで視界が悪くなっているとはいっても、見失う程ではなかった筈だ。

（もしかして、ゴドンがいるほうか？）

だったら不味い。今、向こうは処刑の真っ最中だ。急ぐべきか、泰然と構えているべきか迷う。

しかし、怠惰な逡巡は次の瞬間にオキツグから吹き飛んだ。

パァァァァァァァンッ

乾いた銃声。

「ッ・・・・・」

何故だ。ゴドンは銃など使わないだろうし、テロリスト共は皆殺しにしたはずだった。それなのに何故・・・・

「うわあああああああああああああああああああああっ」

タケルの悲鳴が聞こえた。

「くそ!」

オキツグは腰の《白燐丸》を抜き放ち、起動鍵語を唱えながらフロアの反対側をかけた。

「状況は?」

その声は、新宿新都心の象徴、超高層ビル「新宿パークタワーホテル」の最上級スイートの一室に響いた。

モダン的なラグジュアリーに包まれた空間が、ホテルの一室にありがちなステレオタイプな堅苦しさと一線を画すと評判のホテルだった。家具や照明、タイルは伝統や格式と言った者に真っ向から喧嘩を売る様にツルリとした、合理的美しさの光を放っている。どちらかと言うと、こぎれいなオフィスと言った様な調子だった。

声を発した男は窓際の椅子に腰かけながら、傍らのテーブルに肘をついて外を眺めている。深みのある声に穏やかな口調、肌は浅黒

くて、長身でほりが深い顔立ちからは彼が異邦人である事がうかがえたが、彼の纏うゆったりとした白い僧服は、彼が外国どころか、異世界を故郷とする人間である事を示していた。

ダミアン枢機卿だった。

そして、彼の傍らに立つマクヴェスの同国人、ダミアンの個人秘書官を務める年老いた男は、ダミアンと同じ僧服に身を包みながら頷き、言った。

「報告申し上げます。状況は予定通り、我らがエンデバルド将軍のお活躍もあって鎮静化の方向に向かっているそうです。賊については・・・・」

「彼の事だ。イニシアチブを他の者に渡すくらいなら皆殺しにするだろうね」

ダミアンが報告を受けているのは、今、正に日本中を震撼させようとしているテロ事件の子細である。警察機関よりも優秀とされる日本のマスコミはおろか、警察自身すらも状況が錯綜していて全てを知り得ていない状況で、ダミアンは日本中のどこよりも細やかな真実の報告を聞いていた。

「まあ、死んで当然の輩だ。それについては聞くに及ばないよ」

言葉は物騒だが、顔は穏やかそのもの。その表と実の乖離は二人の他に誰かいればどこか言いようの知れない不安を覚えただろう。

秘書官は、主の過激な言動に慣れた様子で言葉を続けた。

「東京スカイツリーに乗り込んだ者達はほぼ全滅が確認されております。が、それ以外は・・・・」

「それ以外ね」

含む様な言葉に深く頷いたダミアンは「まあ、いいさ」と言って秘書官に下がる様に伝えた。

彼は手に持っていた数枚の紙をテーブルに置くと「それでは」と言って部屋を後にする。

綺麗な角度で辞去するのを見送りながら、一人になったスイートルームでダミアンは秘書が置いていった書類を手に取り、めくる。

そこには今回の事も含めて、将来の可能性の高い展望について事細かに記されていた。

（やはり、何故かはわからないが、韓国はこちら側の魔導技術に関して何らかを掴んでいると見るべきか。中国とロシアが我がマクヴェスと日本の通称に横やりを入れてきたのはその流れだな。韓国側から技術供与を受けるつもりなのだろう）

だが、日本と国交が成って、技術と文化の橋頭保が日本になってしまえば韓国側が持つ魔導技術など、門前の小僧以下のものになってしまう。それは、軍事的、経済的な融和と続ける彼らにとっては頭の痛い問題なのだろう。

「今回の事件、韓国側の魔導技術におけるデモンストレーションと見るべきか。まあ、そうでもない限り、取材許可証の発行も含めて、マスメディアの出身国が責任を持つ事なっているから説明がつかないのだけれど」

テロに使われた武器弾薬、魔導短剣の手配も含めて、韓国におけるとある民放が関わっている可能性が書類には示唆されていた。

ダミアンは暫く書面を眺めていたが、飽きた様に捲った。

「まあ、いいさ」

ダミアンは本当にどうでもいいと言わんばかりに更なる書類の続きを読む。そこには打って変わって広大な洋上にぽつりと浮かぶ小さな島について、写真つきで記されている。岸壁が目立つそこに、無理やりヘリポートや通信施設を詰め込んだ不自然なその島の名前は、日本側が「竹島」と呼んでいるそれだった。

先日、極秘裏に日本政府に対して借地を申し出た場所である。

しかし、その書類、特に写真には不自然な点が一つ存在していた。竹島の周りに、まるで警察が殺人現場で人型に書くチョーク線の様なものが、ぐるりと一周、島を取り囲む様に記されていた。

「今、我々が《氷王》を抱えている今こそがチャンス」

ダミアンは穏やかな表情を浮かべながらも、窓の向こうに向ける視線は空を射抜かんほど力に満ちたものだった。

「・・・・」

書類を閉じ、テーブルの上に放る。彼が熱心に見詰めていた書類に添付された写真には、まるで島を囲む巨大な蛇の様なシルエットがしめされていた。

第13話　落人

「待って、美香っ」
タケルは雪で滑りそうになる床をかけながら、前方の妹を追いかける。
オキツグが殺したテロリストが其処らじゅうに転がっているが、彼自身が展望フロアに振らせた雪に隠れているせいか、妹はキャッキャと笑いながら必死で追いかけてくる兄を笑うのみだ。体格、体力さを考えてみればすぐにおいついていい筈なのに、元々離れていた事と、体が軽い妹と違って、こちらは滑らない様に気をつけて歩行している事、そもそも彼女がこちらから逃げている事も相まって中々近寄れない。
既に天井のスケートリングの様に張った氷からは雪が降りてこないが、視界を遮る様に氷柱が降りていて酷く歩きにくい。
「う、ふう」
直に追いつく事を諦めて歩き始めると、先を走る妹は敏感に気がついて立ち止まり、振り返った。
「にーちゃ」
どうしたの、と窺っているようだった。今だ、と思って再び追いかけるが、それを面白がって再び美香は笑いながら走り始める。
疲れたように溜息をつきながら、タケルは三年前、美香が生まれて間もない頃に死んだ飼い犬のゴールデンレトリーバーを思い出した。
母が大学時代から飼っていた、タケルよりも年上のその犬を、母に無理を言って一人で散歩に連れて行った事があった。が、彼は押さないタケルが握るリードを引っ手繰る様に駆け出して逃げてしまう。でも、暫く進むと振り返ってタケルが追いつくのを待っていた。
いつしか、追いかけて走っていたら、彼は民家の玄関に当然の様に入っていった。その民家はタケルの自宅で、犬を散歩させるどこ

ろか、犬に散歩させられていたという事に随分悔しい思いをしたのを覚えている。
当時の光景が重なるようだった。
心の温かさが戻るのを感じた。あえて考えない様にしているが、テロリストの襲撃と、オキツグが造り出した惨劇はタケルにとって衝撃は小さいものでは無かったからだ。オキツグの、異世界での武勇伝と出世はタケルの心を暴力的に惹きつける力を持っていたが、その彼が敢えて日本に自分自身の身柄を戻した理由をタケルは悟った。

『魔法だ、異世界だ、剣だ、魔物だって言ってもな、所詮は人喰いや人殺しだらけの野蛮な世界だって事だ』

彼がヴェスラで語った言葉の意が今更ながらタケルの心に染み込んでくる。もはや、日本に帰還する事に否やと言う気持ちはなかった。
だから・・・
「美香、ここは危険なんだ。俺達が居ていい場所じゃないんだっ」
だが、美香はけらけらと笑いながら駆けるだけ。だんだん腹立たしくなった。
「きゃは、きゃはは、にーちゃ」

ポフ

前を見ないで走った美香は、前方不注意で何かにぶつかった。
美香は後ろにこけながら、ぶつかった事に驚きつつもその存在を見上げる。
彼女からしてみれば山の様に大きい存在は、背中を見せてしゃがみ込んだオキツグの部下、タケルはおぼろげな記憶を漁って、確かゴドン曹長と呼ばれる人物である事に思い至る。

のっそりと厳つい顔が後に振り返って二人を確認する。見た目は泣く子も黙るを地でいくゴドンだけに、タケルは顔と心が引きつるのを感じるが、妹の美香はキョトンとした様子で彼を見上げている。

彼の視線は状況を把握する様に左右に動き、唐突に表情を明るいものに変えた。

「おう、坊主と嬢ちゃんか。こんな所で遊んでちゃいけねえぞ？」

「す、すいませんっ」

明るく窘めるゴドンに、慌てたようにタケルは頭を下げた。

ゴドンの足元には血走った目で辺りを睨みまわすテロリストのリーダー格だった男がワイヤー線で拘束されて転がされていた。タケルは心と顔が引きつるのを感じた。

（・・・と、とにかく美香を）

足を滑らせないようん慎重に歩きながら美香の傍らにまで行くと、未だにキョトンとゴドンを見上げる美香を立たせて、今度は逃げられない様に右手を握る。

「ほら、美香、行くよ？」

ゴドンにお辞儀してその場を後にしようとするが、美香は彼を見上げたまま動こうとしなかった。

「お、おい、どうしたんだよ」

美香は、不思議そうにゴドンを見上げる。恐らく、大柄で筋肉質なゴドンの巨体が珍しいのだろう。しゃがみこんでいるのに立った美香よりも遥かに視線が高いのだ。ゴドンは気分を害した様子も無く、不思議そうに見上げる美香に厳つい顔に似合わない、相好を崩したように優しげな笑みを浮かべて言った。

「ほら、ここはあぶねえから、さっさと行きな」

「ん」

振り向いて、美香は兄に向けてかける。しかし、タケルはその光景が目に入らなかった。それ以上の衝撃を与えるものを彼らの後ろに認めてしまったからだ。

縛りつけられた筈のテロリストのリーダーが、口から血を流しな

がら、体中をズタズタにされた様に血塗れで、幽鬼のように、ゴドンのすぐうしろに立っていたからだ。
その右手には魔導短剣、左手には拳銃が握られている。
「危ない！」
タケルが反射的に叫んだ。その言葉でスイッチを押された様に男の右手の魔導短剣が振りあげられた。

ヒュッ

しかし、刃が空気を引き裂く音は男が短剣を振り下ろすよりも早く聞こえた。ゴドンが、タケルの声を聞くや否や、体ごと、素早く後ろに振り返り、その勢いのまま腰の魔導剣を抜き、男に向けて間髪いれずに抜き打ちの横薙ぎを見舞った。
しかし、目測もせずに放たれたその一撃は男から僅かにそれ、かわりに掲げられていた男の右手のひじから先を斬り飛ばした。男はよろける様に後方に下がる。
「まだだ、まだ任務を終えていない」
呟く様にその言葉は聞こえた。しかし、ゴドンはその言葉に頓着することなく魔導剣を構えた。それに応じて男は残った左手の拳銃で照準、発砲する。
ゴドンは避けようとして、後ろにタケルと美香がいる事に舌打ちする。避ければ二人にあたる危険性があるからだ。

パァァァァァァァンッ

ゴドンは腕を眼前に交差させて、楯になる。
彼は首だけ振り返りながら叫んだ。
「ほらっ、さっさと逃げやがれ！」
先程まで優しげだったゴドンの打って変わった様子に驚いて、美香はタケルのもとまで駆けよるとその腰に抱きついた。

「い、行くぞ、美香」
美香の右手を持って階段口に向かってかけるタケル。だが・・・
「う・・・・う・・・あ・・・・・」
氷山に貫かれ、もの言わぬ躯と化していた筈の一人が、うめき声を上げた。
彼は立ったまま後ろから氷の刃を腹に受け、座りこむ事すらも許されずにいる。大口径の拳銃を握ったその手は殆ど凍っており、意識がなかったにも関わらずその手から離れずにいた。
死に瀕した、濁った瞳がタケルの瞳と視線を交える。
「うわあああああああああああああああああああっ」
慌てて反対方向に逃げだそうとして、その先から銃声が聞こえる。いつ流れ弾に当たるともしれない場所である事を思い出したのだ。
しかし、殆ど即死の傷を受けている筈の男は、銃声で何かを思い出したように、その手に握られた拳銃を掲げ、ゆっくりタケル達に向かって照準する。
男の引き金はゆっくり、緩慢に引かれて弾丸が放たれる。
パァァァァァァンッ
銃を構える男とタケルとの距離は十メートルほど。
弾丸はタケルの足元を穿ったのみだった。しかし、直接的に銃で狙われ、撃たれたという事実がタケルの心を委縮させ、棒の様になった足を動かすのを邪魔する。
美香が、怯えたようにタケルに抱きついた。
「ッ・・・・・・」
パァァァァァァァンッ

弾丸はタケルの頭上を通り越した。しかし、その照準は先程よりも正確になって来ている。
美香は更に怯えたようにタケルの腰に巻きつける手の力を強くした。
「に、逃げなきゃ」
パァァァァァァァンッ
少しだけ着弾地点が遠くなった。しかし、逃げるには銃を構える男のわきを通らなければならない。近寄れば確実に銃弾が自分達兄妹を穿つだろう事が予想出来た。
「う、ぐ、ど、うしよう」
足元に、テロリストの一人が取り落とした一振りの魔導短剣があった。
パァァァァァァァンッ
今度の銃撃は危なかった。タケルの顔面の右横を通り過ぎ、風圧で頬に裂傷が出来ている事を、顔を伝う血の感触で確認した。
「ひ、ぐ・・・・・」
とうとう、美香が恐怖に耐えきれずに嗚咽を漏らし始めた。
「くっそ・・・・」
パァァァァァァァンッ
その銃声が聞こえる直前、タケルは妹をのしかかるように無理やりしゃがませた。苦しそうな声を上げる美香だったが、もし、そうしなければ二人は死んでいたかもしれない。確実に着弾コースだった。
タケルは半ば無意識に落ちていた魔導短剣を手に取った。

「う、う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
そして駆け出す。
タケルは魔術の扱いなど知らなかった。
魔導短剣の起動方法はおろか、剣の扱いすら心得などありはしなかった。だが、積もった雪に足を取られそうになりながらも、剣を構え、駆けた。
男は驚いた様な表情を造り、銃を照準しなおそうと照星を揺らす。
タケルは走りながら、自分の歯がカチカチと音立てているのを聞いた。視界に広がる氷と雪が寒さによるものと思わせるが、直に違うと分かる。
（・・・怖いんだ）
本当の剣と魔法のファンタジーは残酷と恐怖に満ちている。
「あああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！！」
叫びにならない叫びを上げながら、タケルは既に眼前に迫っていた男に向かって剣を突きこんだ。男は、急速に距離を詰めるタケルに銃口を向け着る事が出来ず、迫りくるその一撃を受ける。

ガッ、ズシュッ

タケルは刃を通して嫌な感触が伝わるのを感じた。見れば、短剣は男の鎖骨の上、右の首筋に埋まり、そこから血が伝わってタケルの腕にたれる。
「ッ・・・・」
冷たいその感触に驚いて、短剣ごと身を引くと、傷口から血が勢いよく吹き出て、男も残った命の灯を静かに消して、腕を降ろした。

「くそっ」

オキツグは加速しながら、自らが造り出した氷の剣山の林を掻い潜り、ゴドンに向けて銃の引き金を引く男を発見、抜き打ちの初太刀で首を刎ねた。

銃声と衝撃が止んだ事に気がついてゴドンがこちらの姿を確認すると、手を上げて礼をしてくる。

「すまねえ」

「ああ、そんな事よりもあいつらは？」

二人は直に見つかった。

美香はしゃがみ込んだまま頭を抱える様に怯えた様子を見せ、タケルはへたり込んで何かを見上げている。

「おい、大丈夫っ・・・・・」

声をかけ、途中で言葉が途切れる。タケルが見つめる先、それは氷柱に貫かれて死んだはずの男から流れる鮮血だった。

何が起こったか、それは男の手に握られる銃とタケルが手に持つ血に濡れた魔導短剣が容易に教えてくれる。

タケルは、オキツグの声に反応する事すらなく、自らの成し様に見入っていた。

「・・・殺したのか、お前が」

何と言っていいか分からず、オキツグはそれだけ言った。すると、タケルはビクリと肩を震わせ、茫然とした調子で振り向いた。

答えなど聞かずとも明らかだった。

傍に駆けより、固く握られた魔導短剣を指を開いやって預かると、立たせる。

言葉はなかった。

（くそ、こういう事をさせないために日本に戻すつもりだったのに）

意図せずして、少年の手を血に汚してしまった自分の不手際を心の中で罵る。

ババババババババババババッ

何かが空気を切り裂く音が聞こえた。
「ッ・・・・」
オキツグだけではなく、その場にいる全員が音源を辿って展望フロアの割れた窓の向こうを見ると、そこには一台のヘリコプター。一瞬、新手を警戒したが、見る限りでは報道ヘリの様だった。オキツグは記憶を辿り、ヘリの側面に描かれているのが、国内の某民放のロゴマーク出会った事を思い出す。
ヘリの中のレポーターと眼が合うと、彼は驚いた様な表情をし、そして対照的に傍らのカメラはこちらと眼があっても微動だにすることなく展望フロアを移し続けている。
しばらく滞空して、彼らは去って行った。
その様子を見て、疲れた様子のゴドンが声をかける。
「面倒な事になるかね」
オキツグは直にはその言葉に応えず、手に持っていた魔導短剣を床に置いて、足で蹴り砕く。他のものも回収して、残らず破壊してから口を開いた。
「面倒事？
ああ、なるに決まっているだろう。“面倒”の範囲で済めばいいがな」
オキツグは、先に階下に降りた者たちに続いて階段を降りる事にする。
（ああ、俺達は別に昇ってマクヴェスに戻ってもいいんだろうが・・・）
「おい、ゴドン」
「何だ？」
ようやく状況が終了に向かいつつある事にせいせいした様子のゴドンは、心なしか先程よりも明るい声で応えた。
「こっちにいるマクヴェスの軍人って、どれくらいいたっけ？」
「ん、ああ、そっか」
いきなりに質問に何故聞かれているか分からないといった様な表

情を浮かべたが、直に答えに行きついたゴドンは拳で掌を叩きながら言った。
「そっか、俺達近衛の殆どはこちらに対する進入権を認められていない。日本に降りるのは俺達だけだから・・・確認？」
「ああ」
「マクヴェスの近衛は勿論俺達だけさ。でも確か、ダミアン枢機卿の警護で一個小隊、三十人位が王国軍からきてたような気がする」
ダミアンの名と、剣導士、それも枢機卿の警護を任せられるような精鋭の存在を聞かされて、オキツグは自分達はこのまま降りずにマクヴェスに帰ってしまおうかと考える。実際、外交特使としてダミアンが居ればオキツグ自身が日本に留まる意味は無くなりかけているのだ。
怠惰な誘惑に駆られ、それを振り払うようにオキツグは首を振って頬を両掌でうった。
パチンと小気味の良い音が響くと、ゴドンはその様子をみてニヤニヤと笑う。
「旦那は奥方、テレジア様の事が気になってしかたがないんだろ？」
もう、何時産まれてもおかしくない状態に入っている身重のリュロンの事だ。実際、さっさとマクヴェスに帰ってしまいたいという気持ちの九割はそれだ。何となく落ち着かない、そういう気分の時はあまり仕事はしたくない。
図星を指されたオキツグは憮然とした調子でゴドンの言葉を無視して、窓の外に眼を向ける。
窓の外からは、僅かに上の方にゲートの端が展望フロアの中からでも見る事が出来た。
そこで、オキツグは僅かな異変に気がつく。
（ん？）
異変、僅かながら、ゲートが光っている様な気がした。ただマクヴェスの岩壁を映すのみだった異世界間の扉が、僅かに発光している。

その光は徐々に強くなっていった。
「おい、何だこりゃ」
ゴドンな呆けた様に白く光る空を眺めている。オキツグは答える事など出来なかった。
（何だっ何が起ころうとしている！？）
理解出来ない事態に焦る心を必死に沈めながら、ただ事の成り行きを見守る。本当に歯がゆい事態だった。
やがて、空の光は直視するにも耐えない様な強さになって行く。
「うわっ」
オキツグは思わず目をつぶった。

キィイイイイイイイイイイイッ

金属が引き裂かれる様な音と共に光の強さが最高潮となる。
眼をつぶり、手を翳し、どれ程の時間がたっただろうか分からなくなった頃、オキツグは恐る恐る視界から手を退け、ゆっくりと眼を開いていった。
既に光や止んでいた。
白くホワイトアウトした視界が徐々に色を取り戻していく。
傍らで、同じようにゴドンが「何なんだよ」と悪態をつくのを聞いた。
そして、視覚を完全に取り戻したオキツグは、信じられない光景を見た。
「なっ！？」
驚きに顔がそまる。心が恐怖に引きつる。
オキツグが、第二の故郷と見定め、日本に降り立つために通ってきた扉、上空の鏡面が綺麗に消え去っていたからだ。

第１４話　未帰還報告

「テレジア？」
テレジアと呼ばれた女、リュロンは瞑っていた眼を開けた。
「大丈夫？」
自分を覗きこむ様に、心配そうな瞳を向ける姉、マリアの様子で、自分が僅かながら寝入っていた事を知った。ベッドの上で天井と相対するリュロンは、ベッドの上で右脇腹に重みを感じて眼を向ける。
「可愛い男の子よ。よかったわね」
そこには布に包まれた赤ん坊がすやすやと眠っていた。
（ああ、そうか・・・）
左手で臍のあたりをさすると、つい最近まで膨れんでいた筈の場所が、以前の大きさに戻っていた。
数時間前、リュロンは出産した。
三千五百グラムルの男の子。マクヴェスの民らしく、肌は浅黒いが、父の血を受け継いだのだろう。僅かに色が浅い。顔立ちも何処となく夫に似ている様な気がした。
因みに名前はまだない。いずれは王位を引き継ぎ名を改めるにしろ、家族の間で使われる名前くらいは夫の帰りを待ってから決めたかった。
お忍びで妊娠期間をやり過ごし、お忍びで口が堅く、腕も信用できる病院に入院しているリュロンとその子供の情報は、世間に対して殆ど出回っていない。オキツグが帰ってくる位の時間は稼げるはずだ。
「・・・・」
訳も無く、意味も無く、我が子の顔を見入ってしまう。
出産は、リュロンにとって想像以上に衝撃的なものだった。職業柄、肉体的苦痛に耐性がある筈なのに、分娩は思わず呻き声が出てしまう程苦しい。

傍で姉が手を握っていてくれたのだが、割と力の強いリュロンが思いっきり握ってしまったため、マリアの手の骨にひびを入れてしまった程だ。笑って許してくれたが、彼女の手にはギプスがはめられていて、それを見ると何となく居心地悪くなる。

すやすやと眠る我が子を見いるリュロンに微笑ましそうに優しく笑うマリア。

「可愛い？」

その声に、緩慢な調子で姉に顔を合わせるリュロン。暫く考える様に視線を彷徨わせ、やがて訥々と語った。

「不思議・・・な気分です」

「不思議？」

しかし、疑問を抱いているにも関わらず、リュロンに惑う様子はなかった。

「可愛いか、と聞かれれば・・・・分かりません。だって、赤ん坊は、この子も含めて生まれたばっかは皺くちゃです。愛しているかと聞かれても、やはり分からない。生まれたばっかなのです。愛とは人同士、交流の積み重ねから生まれるものです。親が、生まれたばかりの子供に対して愛しているなど・・・それではただの執着です」

夫のオキツグについて、愛しているかと言われれば、今なら堂々と「そうだ」と答えられる。それは、長きに渡って相棒として、姉弟弟子として関係を紡ぎ、然るべき後に夫婦になったからだ。

いうなれば、腕に抱く赤ん坊とは関係性の要たる歴史の積み重ねがない。だが

「だけど、例えばこの子のために命をかけなければならない場面があったとして、それが決死だとしても、私はそれを擲つ事に躊躇いを抱かない。そんな風に思えるんです」

オキツグのために命をかける事は出来るだろう。最前線での活躍の場から離れて幾星霜、彼は戦場において自分の助力など必要ない程に強くなってしまったが、もし、それが必要な状況になったら、

自分は再び剣を手に取り戦うだろう。しかし、それはオキツグを愛しているからだ。
しかし、この赤ん坊に対しては、例え愛していなかったとしても命をかけて戦う事が出来る様な気がした。だから不思議なのだ。
頭の上にはてなマークを乗せているリュロンにマリアは優しく微笑む。

ブブブブブブッ

振動音、携帯電話のバイブレーションがマリアのジーンズのポケットから響く。
その事にリュロンは呆れた様な表情をして窘めた。
「姉上、ここは病院ですよ？」
「あ、あはは、御免・・・テレジアの旦那さんがつかまれば連絡しとこうと思ってさ」
慌てて病室を後にするマリア。扉の向こうに消えていく後ろ姿を見送った後、昏々と眠り続ける我が子の頭を撫でながら天井を見上げた。
（オキツグは・・・・どんな顔をするのだろうか）
驚くだろうか、喜ぶだろうか。
妊娠した時は彼の反応が怖くて仕方がなかったが、いざ産んでしまうとそれ程でもない。例え、彼が前の様に情けない態度を取ってもリュロンは寛容でいるつもりだった。
（そう、寛容に襟首を掴み、寛容に折檻した上で、私と言う妻、この子という我が子の素晴らしさを篤く説いてやればいいだけなのだからな）

「はいはい、ちょっと待ってよね」

マリアは掌の上で震える折りたたみ式の携帯電話に語りかけながら、殆ど人のいなくなった病院の廊下をかける。常であれば患者が、看護婦が、医者がいきかう病棟の廊下だが、天井から灯りを洩らす等間隔のライトが光るのみで、暗く、冷え冷えとした空気がマリアの肌を撫でる。それもその筈、窓の外を見れば既に暗く、時計を見れば既に深夜、もはや明け方に近い時間帯になっている。

廊下の突き当たりまで行くと、外階段に通じるガラス扉を潜って夜風に当たる。温暖な気候のマクヴェスの夜風は涼やかで心地よく、うっとりとしかけたところで気を取り直して電話を受ける。

「はいはい」

『奥様ですか？　私です近衛将軍補佐を務めているベヘナ・ガロンと申します』

ベヘナ・ガロン。大商家ガロン家の娘であり、自身も超絶的な魔術の使い手として名を轟かせる少女騎士の声がマリアの耳元に響く。以前はリュロンの騎士として、現在はオキツグの部下として、それなりに見知り合う仲だ。当然、今更名乗り合う中でもないのだが、マリアがどんなに砕けた態度でベヘナに接しても、見た目が少女にしか見えない赤毛の女はただ冷然としているのみだった。

「あ、ベヘナちゃん。どうかしたの？」

『・・・私は「ちゃん」付けで呼ばれる様な歳ではないのですが。ともかく、ご報告したい事がありまして』

実年齢に比べて若く見える事に若干コンプレックスを抱いているらしいベヘナは珍しく不明瞭な声でそう返すと、半ば強引に話しの主導権を握ってくる。

『今回、我々マクヴェス近衛魔導騎士団は日本国との友好を象徴する事として、こちら側における日本からの漂流者の帰還を促す行動を起こしました。日本国では大々的な国際的イベントとして扱われ、かなり注目を集めたのですが、不測の事態が発生しました』

不足？　心の中で疑問符を挟みながら無言で続きを促す。

『向こう側の、マクヴェス王国と日本国の友好を快く思わない一味、

テロリストの襲撃を許してしまったのです』
（ッ・・・・・）
凍り着くマリア。
「テ、テロッ・・・・・そ、それで大丈夫なの！？」
『はい、日本国総理大臣をはじめとする方々、報道陣の方々は勿論、我らが将軍も壮健でいらっしゃいます。屍を晒しているのはおろか者のみ』
その言葉を聞いて安心する。言葉の内容は、恐らくテロリストは皆殺しにしたと言う事で物騒極まりないのだが、仮にも貴族、騎士の家柄に生まれたマリアは女といえどもその程度で臆した李はしない。
「・・・続けて」
『はい、マクヴェス側の代表として将軍が、その付き人としてゴドン曹長が日本の地に降り、我々は撤収する事としました。軍隊としての進入を、日本政府は認めていなかったので。しかし、私を含める近衛の騎士達がマクヴェスに戻った瞬間、ゲートが、異世界とマクヴェスを繋ぐ扉が光り始めて・・・・』
マリアは嫌な緊張感が高まるのを感じた。
『ゲートが消失してしまったのです』
「・・・・・・」
『今、現在、我々は王都ヴェスラに帰還中です。王政府には既に報告申し上げました。加えて、日本に残った同胞達ですが、今まで使えていた携帯による通信が使えなくなっています。彼らと連絡をとる手段が、今現在、ありません』
そして沈黙が降りた。
ゲートが消失した。
向こうにいるマクヴェスの民達はこちらに帰還出来ない。その目処も立っていない。
しかし、異世界の時空を跨ぐゲートだ。実際、マリアはふとした拍子で消えてしまうのではとも思っていた。加えて、その際に向こ

うに渡っていた人々も置き去りになってしまう事も。
それは予見しうるリスクだ。
だが、何よりも問題なのはマリアの義弟、リュロンの夫であるオキツグがその憂き目にあったと言う事だ。
重苦しい空気の中で、マリアは深く溜息をついた。
「・・・本当の、事なのね？」
『・・・はい、残念ながら』
これは一大事だ。マクヴェス王国としてもそうだろう。友好条約を結ぼうとしていた国が、物理的に渡河不能となってしまった上、ダミアン枢機卿と国の最高戦力たる近衛将軍を失っている状態なのだ。
（だけど、でも・・・・・）
「それよりも問題なのは、テレジアにこの事実をどう伝えるか、よ」
『・・・・・・・』
電話の向こうで、ベヘナが重苦しい表情を浮かべるのを感じた。
『・・・テレジア様は？』
「先程、産まれたわ。男の子よ」
マリアは、妹の出産報告がこれ程重苦しいものとなる事は予想できなかった。
「でも、本当に何て言えばいいのかしら・・・・ゲートが消失してオキツグ君が向こうに取り残されたなんて・・・・あの娘のあんな幸せそうな顔、初めて見たのに、それを・・・・・・」

ガンッ

後で凄まじい音が聞こえた。驚きと共にマリアが振り返ると、それはガラス扉が勢いよくしめられた音だった。そして、ガラスの向こうには逃げ出す様に駆けるリュロンの姿。
「テレジアっ！！」
最も聞かれてはいけない事実を、最も聞かれてはいけない者に、

最も聞かれてはいけないタイミングで聞かれてしまったのだ。

第１５話　再新世界

空が淡い水色に澄んでいた。
日が高く、燦然と輝く太陽が照らすのは千葉県勝浦市墨名の海水浴場だった。三ヶ月湾とも呼ばれる波穏やかなそこは、夏であれば家族連れや若者達で賑わうのであろうが、今、この場に限っては誰もいない。息を吐けば白く曇る事が示す事実は、今が真冬の二月も半ばだからだ。
辛うじて雪が降っていない位で、海際の潮風は当たったものを凍らせるほど冷たい。
その無人の砂浜に、一人の男が足跡をつくりにやってきた。
オキツグだった。
近衛の青い外套でもなく、むこうの世界で愛用していたカーキの防刃コートでもなく、ジーンズにスニーカー、ファーのついた黒いダウンを着た姿は、白い髪と青い瞳を除けば何処にでもいる若者にしか見えない。
オキツグは一人で砂浜を歩き、波が及ばなギリギリまで行くと、乾いた部分を見つけて腰を降ろした。
「三ヶ月、か・・・・」
あの日、マクヴェスからタケルを送りにやってきた日にゲートは消失した。日本に在留したマクヴェスの民の全てが故国に帰る手段を失ったのだ。
そもそも、世界間を行き来する人間は、本人の意思に関係なく、向こうには大勢いた。が、この世界には発見する事は皆無だった。こちらからあちらへの一方通行で、つまり、この世界は魔術を使う人間という、未知の存在に対する免疫、理解がない。
この三ヶ月間はかつてない程に忙しかった。
暫定的にマクヴェスの漂流民の代表の座にダミアン枢機卿が付き、日本国内閣府にＮＰＯ法人『マクヴェス移民管理センター』を設立。

地球外の存在と言う、国際法によって人権が保障されていない状況を改善するために、日本国、及び周辺各国に対して、マクヴェスを暫定的に国として認定し大使館を設ける事。また、漂流した殆どの人間が軍人である事から、彼らを駐在武官として認定する事を求めた。

この無謀とも言える要請は、各国一致の一つの条件をこちらが飲むことで受け入れられた。

即ち、マクヴェス側の主たる軍事力の源でもあり、こちらの世界に対する唯一のアドバンテージである魔導剣の技術供与である。これには、中国、韓国が難色を示したものの、ロシア連邦、及び旧西側諸国が諸手を挙げて受け入れたため、今では故国と国土の無い外国人として、マクヴェスの民は主に日本を拠点に生きている。

加えてあの日、日本に戻した少年、タケルは小学校に復学して元気にやっているようである。

テロに巻き込まれて、自らの手を血に汚す羽目になった彼の事だ。もっとも、当初こそショックを受けているようだったが。

因みに、オキツグはなされていた失踪宣告を撤回、戸籍を回復しているので、マクヴェスの人間でもありながら、日本においても国籍を持っている。

「・・・・・・・」

何も窺い知れない、茫洋とした眼で沖を眺めるオキツグ。忙しかった。忙しすぎて、何も考えられなかった。考えてみれば、日本は故郷であるのに『漂流したのは二度目』と感じてしまうのは仕方のない事だろうかと自問自答する。

こうして、三ヶ月が過ぎ、時間に余裕が出来てやってきたのは随分昔に見聞きした海水浴場だった。実に十数年ぶりに帰還して触れた、進化したネット技術に驚きながら、この場所をたまたま発見、暇を見つけて訪れてみたのだ。

帰れないと知って、絶望しなかったと言えば嘘になる。残してきたリュロンと子供の事を考えれば、落ちつかない様な焦る気持ちが

心に湧いてくる。
だが、心のどこかで『やはり』という気持ちがついてまわる。
思えば、十代半ばで魔術が蔓延り、人外が跋扈する世界におとされてからも、どこか、人と本気で仲を深める事を避けている気がオキツグにはあった。
それは、ある日突然、召喚された時の様に元の世界に送還される事を無意識に恐れていたせいかもしれない。
加えているならば、今、この場所はオキツグにとっては故国だ。
生きる事にこれと言った覚悟はいらない。しかし、他のマクヴェスの者達にはかなり混乱があったらしいが、三ヶ月も立つと、それなりに落ち着きを見せ始めている。
この世界でも生きていけるのだ。だが・・・
「俺は・・・帰る」
マクヴェスへ。
新たに家族となる事を誓った者達のもとに。
オキツグは、気負いも無く、覚悟も無く、極めて自然体で、確固とした調子で言った。
(向こうの世界からこっちに帰ってくるのに十年ちょっとかかった。たかが数カ月でどうにかなるとは思わないさ)
だから、焦らない。絶対に焦らない。ただ、帰るという気持ちは強く持つ。
オキツグは、立ち上がると尻に着いた砂を払い、波打つ海を背にした。
浜辺に接する道路に路上駐車する一台のジープ、水色のチェロキーが止まっているのを発見する。開け放たれた運転席の窓からこちらに手を振るのは、日本で既に免許を取得してしまったゴドン曹長だ。
「あいつ、俺なんかよりもよっぽど日本に馴染んでんじゃねえか」
苦笑しながらもチェロキーに向かって歩みを進める。一歩一歩確実に、しかし休むことなく。

第1話　Ｍａｃｂｅｔｈ．ｌｔｄ

「本当に大丈夫なのだろうね？」

その声が囁かれたのは、古代ローマのコロッセオを思わせる空間の、言わば客席、最前列だった。

大柄で筋肉質な体を包み込むのは陸上自衛隊の第一種礼装である。短く刈り込まれた紙に、まるで厳の様な顔立ちは軍人としての厳しい人生を物語るようだった。

松平義春。陸上自衛隊幕僚監部の長である。

傍らに平服で立つ男、堂島淳一郎一等陸尉は安めの姿勢のまま深く頷いた。

「勿論です」

彼らがいるのは、日本アルプス山間部に設けられた陸上自衛隊の特殊演習場である。表向きは単なる物資の流通中継地点とされているそこには、日本で唯一の自衛隊のためのキリングハウスが存在した。

地下、三百メートルに渡って掘り進められた空間の底は一種のアリーナになっており、屋内演習場としては破格の広さを誇る。都市戦を想定して、打ちっぱなしのコンクリートで構成される建造物すら立ち並び、実に五階に及ぶ高さのものすらある。

四角形に無駄なく構築された疑似的な街並みは東京ドームと同じ広さを誇り、その外周部分、壁際に地上三十メートルの高さのところに観戦用の空中廊下が設けられている。

彼らはその一画にいた。

椅子に姿勢を正して座る松平と傍らに控える様に立つ堂島が眺める先は遥か前方、キリングハウスの中心部、交差点を模した場所にあった。

そこには一人の男が立っていた。

年齢は二十代半ば。白い髪に青い瞳だが、顔立ちは日本人そのも

のだ。装いはカーキの戦闘服に防弾チョッキと言う、場所を考えれば平凡なものだったが、手には一切の銃器が握られていない。
代わりに、近代的装いには似つかわしくない、反りのない刀が手の先から垂らされている。
「彼が、将軍が相手では何も出来ません。させてもらえません」
姿勢をただしたまま、揺ぎ無い調子で断言する堂島に松平は前方に視線を向けながら「ほう」と感嘆する。
自国の、ましてや身内が戦力的に相手にならないという評価に、松平は気分を害した様子はなかった。むしろ、納得したように頷いた。
「では、我々が魔術のインストラクターとして、彼らを起用した事は間違いではなかったのだな」
彼らが将軍と呼んだ男の周りには、囲む様に十数人の人影が取り囲む様に立っている。陸上自衛隊の戦闘装備に身を包んだ彼らは、皆一様にして機械的な武骨な剣、魔導剣を手にしていた。

陸上自衛隊特殊作戦群魔導兵器試験運用部隊の面々に剣を向けて囲まれながら、オキツグはコンクリートだらけの殺風景な街並みを見まわした。
まるで、街全体が風情を求める事に罪悪を感じているかの様な無機質さに顔を顰める。加えて地下だ。天井は落盤防止用のカーボンネットが張られているだけで、例え新婚中の夫婦でも、ここに来れば離婚寸前まで気分が盛り下がる事請け合いだった。
オキツグがマクヴェスに変える事が出来なくなって二年の月日が立った。
帰還不可となり、漂流者となってしまったマクヴェスの民は総勢五十七人。内、四十名が武官と言う構成の彼らは、日本、及び周辺各国に対して、自分達を受け入れる事を条件に、軍事力の要たる魔導剣の技術供与を行った。

魔術は扱うものの才能によって程度の差があるが、力ある者が扱えば一人で一部隊を相手取る事の出来る最強の個人兵装である。加えて、弾薬等を含む資源的損耗を抑えられると言う事で、世界各国は自国の軍隊に魔術を取り入れようと必死だった。

この決定を降した、マクヴェス側の代表であるダミアン枢機卿に、魔導剣の技術供与の危険性を指摘した時に彼は笑いながらこう言った。

『むしろ、持っている方が危険だよ。この世界の彼、彼女は未知に対して極めて貪欲だ。それに、魔術は魔導剣があればすぐ扱えるというものではないだろう？』

いくら、魔導剣を手に入れる事が出来たとしても、魔術を紡ぐのは剣導士本人である。オキツグの場合は半ば感覚的にそれを成してしまうためによく分からないのだが、普通の人間は魔導剣を手に取っただけで魔術を扱える者はまずいない。

そういった背景から、軍人が多くを構成するマクヴェスからの漂流者に対して、魔術の教授のオファーが来る事は当然の流れと言えた。

（猊下の目論見どおりってことか）

プラットホームの供給を先行して行い、後から先駆者である自分達がソフトウェアの供給を行い、その価値、立場を強める。現在、ＮＰＯ法人、マクヴェス移民管理センターの同系列の組織として、魔術のインストラクティング業務を行う株式会社マクヴェスが設立された。

株式会社マクヴェスは日本以外にも、米国、韓国、ロシア、イギリスにも支社を設けており、オキツグは日本の本社の専務取締役として所属している、。

オキツグの担当は陸上自衛隊だった。

普段は近衛時代からの直属の部下であるゴドンに任せ切りなのだ

が、自衛隊のインストラクティング業務にあたるようになって半年の月日が経ち、そろそろ責任者として顔を出しておくべきかと怠慢への罪悪感から顔を出し、今、実戦演習の場にいる。

周囲の自衛官達を見渡せば、彼らは精鋭として選抜された特戦群の隊員らしく冷静沈着だったが、魔導剣という慣れない武装と、ただ一本の刀を手にする相手を多人数で取り囲んでいる状況そのものに違和感を感じているようだった。

彼らの練度は、日が浅い事もあり、向こうで言うと普通の剣導士に毛が生えた程度だ。それでも、戦闘のプロ、エリートとしての判断力の高さや体術、戦術の幅の広さは比べるべくもない。才能にもよるだろうが、このまま鍛錬を続ければ、そこそこの腕にはなるだろう。

だが、向こうの世界では《氷王》とまで呼ばれたオキツグにとっては、彼らを相手にするのは赤子の手を捻る事よりも容易い。いかんせん、才能と、鍛錬に捧げた時間と、経験が違う。

オキツグは溜息をつきながら、張りつめた緊張感をもつ自衛官達を見渡して言った。

「本来の剣導士はこちらの世界の弾丸をよけ、装甲を穿つ力をもつ規格外の存在ばかりだ。君達は赤子もいいところだが、それでも留意しておくべき点がある。それは、俺達の有視界域における戦闘は極めて高速だという事」

オキツグは、そう言いながら無造作に、斜め上に向かって《白燐丸》を切り上げた。空間を裂くが如く放たれた一撃は、誰にあたる事も無かったが、しばらくそこには眼に見えて違う空気の流れが起こる。

自衛隊の彼らからしてみれば、突如としてオキツグが残心の型を取り、空気が切り裂かれた様な平面が登場した様に見えただろう。

皆、一様にして驚愕した表情を浮かべている。

「お前達はもう死んでいる」

昔、読んだ漫画に準えて冗談を飛ばしてみるが、誰も笑ってくれ

なかった。くすりともしてくれなかった。その余裕がなかったのだろうが、何となく居心地悪い気がするオキツグ。

「・・・とまあ、気が付いたら死んでる事もあり得るので、そうなる前に攻撃を仕掛けなさい。つまり何を言いたいかと言うと」

言葉を切って、先程と同じ様な無造作な立ちかたで辺りを睥睨する。

「さっさとかかって来い」

不敵に笑い、挑発してくる若白髪の男に剣を向けながら、特戦群魔導部隊の隊員、一条マキナ三等陸尉は体が強張るのを感じた。

（この男、何者かしら？）

マキナは特戦群でも唯一と言ってもいい女性隊員である。他にも数人女性は所属しているが、彼女達は皆、後方支援を旨とするものばかりだ。実際に前線に出て、武器を構えるのはマキナだけである。

マキナは、自衛隊に入って以降、ベリーショートに保ち続けている髪から秀麗な眉目に汗が落ちるのを感じながら、細身ながらも女性にしては大柄な１８０センチという体を、何時でもどの様にでも動かせるように腰を落とした。

構えは習志野駐屯地でも常日頃から鍛錬に励んでいる剣道のそれだ。

「どうした、かかって来い」

かつて異世界からの来訪者として『将軍』と呼ばれた彼のその言葉で、マキナは自分の闘争心に火がついたのを感じる。元々、マキナは軍隊と言う男社会にありがちなマッチョなタイプの女ではないが、それでも闘争心は人一倍強い方だ。女性でありながら、特戦群の中では一、二を争う程高い身体能力を持つマキナだが、その体すら周囲に劣った自分を見せたくないという意地だけで鍛え上げ、手に入れてきた。

いざ、と床を踏む足に力を入れようとした時、自分以外の隊員が彼に向って接近、振りかぶった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

（くそ、出遅れた！）

マキナが感じたのは、一番槍を逃した残念だけだった。その彼に一瞬遅れて自分は静かに、しかし鋭く踏み込んで突きを放つ。

距離にして十メートルは離れていたが、魔術、生体系術式による肉体強化を行使すれば一足一刀だ。その力の恩恵を体験してみると、今更ながらその凄まじさが身にしみる。例え優秀な軍人が、優れた武器を持ち、大人数で挑もうとも、そもそも彼らは弾丸を避け、撃たれても死なない強靭な生命力を持つ様な存在に対する訓練など受けていない。相手にすらないらないだろう。

しかし、今のマキナにはその力がある。身体能力が底上げされた、全能感にも似た陶酔を味わいながら裂帛の一撃をこちらに背を向けている男に向かって放つ。

（もらった！）

訓練は、殺す気でかかるようにと言われている。事実、殺すつもりでマキナは突いた。

ギィィィィンッ！！

金属が金属を削る音が響いた。

しかし、それはマキナの手元からは響いていない。

「え？」

視界の端に、自分の手元にある魔導短剣と同じ型のものが飛んでいくのを見た。男を挟んで向こう側、同じ隊の仲間が、呆けた様子で、自らの手元から離れたそれを眺めている。

男、将軍が自らの手に持った刀で巻き取るようにはじいたのだ。

しかし、ほぼ同時に放たれたマキナの攻撃は・・・・・・

「ッ・・・・」

マキナは、手に持った剣の切先に眼を向けた瞬間、驚きで凍りついた。

男は九十度、向いている方向を変えると、一方で仲間の剣を弾き、もう一方の残った左手でマキナの方に対応したのだ。しかし、その左手は素手だった。

彼は素手で、指先で剣の切先を摘んでいた。微動だにしなかったのだ。

それ以上の驚きは、マキナが掴まれていた事。突き込んだ運動エネルギーを完全に相殺してしまう程に男の体術、地力の差が凄まじかった事だ。

しかも、男はこちらに見向きもしていない。殆ど背を向け、左手だけを突きだした状態でマキナの剣を掴んでいる。

その男はゆっくりとこちらに振り向いて、ニヤリと笑う。

「狙いは上々、しかし甘いな」

次の瞬間、男の姿が消える。

「!?」

そして胸元に衝撃。見れば、男がこちらの防弾チョッキを空いた左手で無造作に掴んで言る。

「ぐ・・・・ああ・・・」

男の腕を掴み返すが、しかし、それはまるで人間の腕ではない様に硬く、微塵も揺るがなかった。どうする事も出来ないままでいると、男はそのまま左手を掲げ始める。次第に、マキナは足元が宙に浮くのを感じた。

「くくっ」

男はそれまで称えていた不敵な笑みを引っ込め、一転、人の悪そうな、あえて言うなら悪戯少年といった風な顔をすると告げた。

「飛んで来い」

「へ？」

意味が分からず聞き返すが、同時に体に猛烈なGがかかる。気がついた時にはマキナはキリングハウス内の上空に投げ出されていた。

下にはマキナを投げ出した姿勢の男と、それをポカンとした表情で見つめる仲間達。
「ああ・・・」
感嘆とも、呻きともつかない、諦めにも似た声を出して、やがて重力に引かれて落ち行く状況に身を任せた。

オキツグは地下ドームの閉鎖的な天井を見上げた。
《白燐丸》を床に突きさし、両手を自由にすると、やがて自由落下に身を任せて落ちてくる女性隊員をキャッチした。
女性とはいっても、人一人、しかもかなりの高所からの運動エネルギーも加わってかなりの負荷だったが、難なく受け止めてそのまま御姫様だっこの姿勢を取る。
「・・・・え？」
てっきり地面に激突する衝撃がくると思っていたのだろう。確かに、魔術で肉体を強化しているものの、技術自体が不完全な上、この高さだ。骨折くらいはしただろう。しかし、いつまでもやってこないそれを不審に思い、恐る恐る彼女は眼を開けて辺りを見渡すと、自分がお姫様だっこされている事に気がついたらしい。羞恥に顔を赤らめた。
「ちょ、ちょっと降ろして下さい！」
「おい、暴れるな」
「こんな事、屈辱です！」
暴れる女性隊員の力はオキツグからしてみれば大した事ないが、それでも面倒である事は事実だ。言うとおり降ろそうとして・・・・
「やめた」
「へ？」
心も体も完全に降りる準備をしていた彼女は再び呆けた様な声を上げた。これが中々、自衛隊などという男むさい場所に置いておく

には美人で、その美人の間抜けな声と言うのは聞いていて意外に気分がいいものだ。

オキツグは女を構えたまま中腰になると、塞がっている両手の代わりに口で突きさしたままの《白燐丸》の柄を咥える。

そのまま足に力を撓ませて数秒。そして、地面を蹴り砕く様に勢いよく跳躍した。

「ふ・・・ふううううう」

口に刀を咥えているので、何かを話そうと思っても言葉にならない。

手元の女を見れば、予想外の事態に心のキャパシティーを超えたのだろう。眼を瞑って、音にならない位高い声で恐怖を叫んでいる。

垂直跳びで十メートルは跳んだだろうか。見下ろせば、まるで打ち上げ花火を見上げる様に、ただ茫然としてこちらを眺めている。

（このまま倒すんじゃ風情がないからな）

正直言った話、オキツグは自分では彼らの指導役に力不足を感じていた。実力が隔絶してしまっていて、そもそも稽古にならないのだ。早い話、ある種の達人がずぶの素人を指導する様なものだ。自身の中に内在した経験を言葉にしようとも、それが上手く伝わらない。

だからこそ、いつもはゴドンに指導を任せていた。だが・・・・オキツグはキリングハウスの端、地上三十メートルの高さに設けられた外周の廊下に、二人の男がこちらを観戦しているのを見つけた。

その内の立っている男の方と眼が合う。

彼は何かを肯定する様に頷いた。

（よし）

「ひょうへ・・・・」

氷閣刀、と言おうとして失敗した。

（・・・・・）

罰が悪い気持ちを感じつつ、どうせ誰も聞いていないだろうと開

き直る。
だが、腕に抱いた女のポカンとした眼がこちらを見つめている。
（・・・聞かれてた）
更に気分が落ち込む。恥ずかしくて、心なしか頬が赤い様な気がした。
今度は心の中で叫ぶ。

氷閻刀・霜渡り

その瞬間、オキツグの足元、地上と並行して透明な膜が空中に展開する。それはやがてコンクリートの建造物にあたると、そのまま表面を全て包み込む様に表面に氷の膜を造っていく。
見た目通り、氷の膜を張るだけの術式だ。大した意味はなく、攻撃力は皆無だが視界を遮るなどの戦術を取る際には役に立つ。加えて、東京スカイツリーで天井を歩いた技の応用でもある。
空中に、氷のスケートリンクが出来上がる。まるでキリングハウス全体にサランラップがかけられたかの様な景色だった。オキツグは薄氷の上で一人佇む。
その光景は、ただ只管に幻想的だった。
少し体の力を強くしたり、銃の代わり程度にしかならないインチキな魔術とは違う。その場にいる全員が、本物の魔法に見入っていた。
腕に抱いていた女も、その光景に魅せられたらしく、驚きと感嘆の表情を見せていた。
「ふほっ」
口から《白燐丸》話すと、切先から暫定的に床となっている氷の膜に向かい、しかし割れる事はなく、刃の半ばまで埋まった。
ようやく自由になった口を動かし、オキツグは女に言った。
「どうだ、すげえだろ」
すると、女は自分が驚いていた事に恥いる様に眼をそむけると、

暫くして短く「はい」と答えた。

第2話　金色の鐘

「お先に失礼します」
既に日も沈んだ窓の外の闇を感じながら、真澄は教員控室でお局の学年主任に挨拶すると学校を後にした。
既に現在の学校も四年目、もうじき五年目に突入する。公立校である事を考えると、そろそろ転任の辞令が降りそうなものだが、今のところはそう言った指示は下っていない。
校舎を後にし、教員用に設けられた駐車場の一画、水色のフィットが止まっている場所まで行くと、鍵の形をしていない四角い鍵のボタンを押して車内に乗り込んだ。
（こんな些細な事にギャップを感じるなんて、あたしも歳取ったってことかな）
ここ数年のＩＴ技術の躍進は凄まじい。１９９０年代から始まったＩＴバブルは、日本の産業を発展させたものの、人々の生活に密接した形ではその存在を感じにくいものだった。しかし、今はどうだ。電車の定期券、携帯電話をはじめとする通信機器、はては商売そのものすら実態を伴わないものもある。
教材として使おうとした本をインターネットで購入した時、一冊の本を注文するのにかなり手間取った事を覚えている。書店から注文の確認メールが届いた時は、何かをやり遂げた気分に浸ったものだが、後から考えてみれば、自分と言う存在が時代に取り残されかけているという事に他ならないではなかろうか。
（かといって、今更コン詰めて勉強してもね）
大学時代の同期の友人が、大手ＳＩｅｒに就職しており、時々会って話をする機会があるのだが、資格取得のための勉強につぐ勉強、引いては社内での生き残りをかけたサヴァイバルは熾烈を極めるそうだ。時代の流れについていくと言うのは斯様に生半可な覚悟で成せる事では無く、真澄自身はそんな動機も気力も無いので云々。

車を走らせて十五分ほどで自宅がある西東京市郊外のマンションに着く。地下駐車場に車を止めてエントランスのセキュリティを兼ねたインターホンを鳴らした。

ピンポーン

返事は直に返ってきた。

「あいよ」

野太い、しかし気風のいい声だ。

「あたしよ、ゴドン君」

「あ、はいはい、こりゃ失礼」

そんな慌てた声と共に、真澄を遮っていたガラス扉のロックが外れて左右に開かれる。その先のエレベーターに乗り、二十五階、最上階で降りる。自宅は一番隅の部屋だった。

ドアノブに手をかける。押し開こうと力を込めると、扉は自分から後ろに下がり、真澄は思わずつんのめった。

「きゃっ」

「うおっ」

真澄を受け止めたのは長身痩躯の白髪の青年だった。

「大丈夫かよ」

真澄の兄、意次である。彼は臙脂色のセーターにジーンズというラフな格好で真澄を出向かていた。

現在、真澄は兄の意次とその部下、ゴドンとの三人で暮らしていた。真澄の自宅であるマンションも三人で暮らすために引っ越したものだ。都内にあり、地下駐車場も完備。間取りは３ＬＤＫでそれなりに広く、高級マンションと言っても過言でないその物件は公務員の真澄には本来手が届くはずのないものだが、それもその筈、金を出したのは兄だからだ。

二年前、突如として現れた異世界からの扉は彼らを残したまま再び閉じ、亡国の民となった彼らは自国の技術、魔術と呼ばれるもの

を活かして自らの有用性を世界に対して訴えた。魔術を扱うための媒体である魔導剣の知識を殆ど無償で広め、ソフトウェアである魔術の教導役としてインストラクティング業務を行う民間軍事会社マクヴェスを創設。意次はその専務取締役の地位を持ち、この世界に帰還して二年しかたっていないにも関わらず、その年収は既に一億円を超えている。このマンションを買うときだって、昼食を奢る位の気楽さで「俺がだすよ」と言った時は眼をむいたものだ。

「・・・・・」

だが、彼が殆ど仕事をしていないのは知っている。一緒に暮らしているのだから当然だ。仕事を部下のゴドンに押し付け、自分は家でダラダラしているのが大概だ。真面目に仕事をしている自分が馬鹿らしくなってくる。

肩にかけていたショルダーバッグを押しつけ、リビングに出ると、対面式のキッチンにゴドンが立っていた。

「おう、お帰り！」

彼はキッチンでは最早窮屈な巨体を押し込め、黄色い可愛いエプロンを白い半そでシャツの上に身に付けてフライパンを振っている。顔はハリウッド映画の悪役に出てきそうなほど厳ついのに、度を越して家庭的なその光景は和む以前に脱力を産む事この上無しだ。

三人で暮らしている。ゴドンが家事と、時々仕事。真澄がほぼ仕事。兄はニート。二年前の再会の時は実感できた家族のきずなに涙したものだが、今では男の駄目な部分を集約した様な自堕落な兄の姿に若干ながら幻滅している自分がいる。

真澄は、リビングのテーブルの上に置かれたものを見て、眉尻をつりあげた。

そこにはビールのロング缶が無造作に横倒しに転がっている。恐らく、中身は空だ。

「・・・・・」

ゴドンを見る。顔には酒精はなかったが、何かを悟った様に、しかし、気まずそうに眼をそらした。

勿論、自分は帰ったばかりだ。そんな暇などなかった。
「ふいー、真澄も返ってきた事だし、そろそろ飯にすっぞっ」
太平楽な調子で後ろに現れた兄の顔は心なしか赤かった。
真澄はその声を聞いて、自分の仲のニトログリセリンに火が付いたのを自覚した。背を向けた姿勢のまま右に身を捻り、半回転。突然の真澄の行動に驚いた表情の意次を無視して、そのまま軸足を右から左にスイッチ。更に一回転して全体重を乗せた後ろ回し蹴りを意次の腹部に向かって放つ。
「ぐぎょっ」
堅気の女性とは思えない、見事な一撃だった。
彼はそのまま高級マンションの一室の広い廊下を転がり、玄関の扉に激突して動かなくなった。
自らの成し様を一顧だにすることなく、キッチンで固まるゴドンを睨む。
「兄さんにはお酒上げちゃ駄目って言ったよね?」
流石に、この歳になって「お兄ちゃん」ないだろうと呼び方を改めていた。
詰問されたゴドンは焦った様に視線を左右に走らせて、手元のフライパンの上で野菜炒めが焦げ駆けている事に気がついて慌てて手首を返す。
「そ、それなんだけどよ」
視線をフライパンの上に逃がしながら恐る恐る言った。
「今日は旦那、ちゃんと仕事したんだよ」
「仕事? いつかの時みたいに洗い物したとか、ゴミだしたとかじゃないでしょうね?」
兄の事を嫌っている訳ではない。むしろ愛している。が、そのだらしない生活態度を見せられるのは、家族として、妹として、女として腹立たしい。
「ああ、ちゃんと会社の仕事の方」
その言葉を聞いて、渋々と言った様子で玄関に転がったままの兄

のところまで戻る真澄。
彼が手に持ったままの自分のバッグを引っ手繰ると、意次は酒と衝撃に朦朧としながらも言った。
「このブラコンめ」
「・・・・・・・」
真澄は無言で立ちあがり、彼のみぞうち目がけて踵を振り下ろした。

陸上自衛隊幕僚長、松平義春は日本アルプス駐屯地での魔術を試験運用する部隊の訓練風景を観戦した後、とんぼ返りで東京の虎の門の官庁とオフィスが犇めくなか、ひっそりと明治の世からその身を長らえる京懐石の料亭、『長の屋』の一室に居た。
店の中でも一等の部屋に値するそこは、空が済んでいれば窓の外に月を拝めるのだが、今日は生憎の新月だった。
松平は自衛隊の制服から簡素なスーツに着替え、ノーネクタイで畳の上に正座していた。
「いやあ、風情がありますな」
部屋にはもう一人いた。丁度松平の隣、同じように目立たないスーツ姿の彼は、綺麗に正座をしながら、店から出されたお茶をすする。
「マクヴェスにはこの様な趣ある店は殆どありませんでしたから、なんとも眼福、感服」
歳は三十台前半、浅黒い肌に黒髪で、線の細い美男子だったが、不思議と性別を感じさせない。スーツの胸元から垂らされた銀の薔薇十字のロザリオが示す聖職者の証のせいかもしれない。父性的で母性的。全てを包み込む優しさとその大きさからくる怖さの様なものが備わった、まさしく聖人の様な男だった。
「ダミアン殿」

呼ばれたダミアンは言葉で答えず、顔で器用に「何？」と表情を造る。ダミアンは、これをやっても無礼にならない愛嬌があった。

これこそがマクヴェスの民をまとめ上げ、亡国となり果ててもその威を失わぬ者達の長か。そう松平は心の中で驚き、また感動した。しかし、その一片も表情に出さずに言葉を紡ぐ。

「・・・ダミアン殿は正座に慣れていないご様子、無理して日本の慣習に従わずともいいのでは？」

すると、ダミアンは恥ずかしそうに笑って答えた。

「はあ、やはり分かってしまいますか。申し訳ない。恥ずかしながら、この姿勢は想像以上にきつい」

ガラッ

弾んだ会話が開かれた障子の音に遮られる。

二人はその瞬間、戸の向こうから現れた男の姿に注意を集める。その男の正体をいち早く悟った松平は坐した姿勢のまま、礼の姿勢を取る。

「ご足労いただき申し訳ありません、田原先生」

現れた、小柄な固太りの男には先生、と敬称がついていた。教師と言うには慈悲に欠け、医者と言うには知性にかける。田原は政治家だった。

胸元に光る議員記章は直径約２０ミリの金属製台座に赤紫色のモールを取り付け、その中央に金色の金属製１１弁菊花模様を配している。

東北に強い地盤をもつ衆議院議員が田原宗一郎だった。

男は鋭い瞳で部屋の中を眺め、松平と同じ姿勢を取るダミアンを見て、松平に言った。

「・・・そのお方が？」

「はい、マクヴェス移民管理センターの理事兼、株式会社マクヴェスの会長兼代表取締役であるダミアン枢機卿です」

すると、田原は何事かを考える様に沈黙を保った後、ダミアンの傍らに膝をついて言った。

「その様な姿勢をとらずと結構です。私は一代議士にすぎませんし、その様な礼を尽くされる立場にありません」

見た目に反して穏やかな様子で告げる田原。その言葉と態度には政治家として培ってきた確かな経験と実力を感じさせた。

ダミアンはそのままの姿勢のままで「はい、ありがとうございます」とだけ答えたが、相変わらず顔を上げる様子はなかった。

その様子を不審に思って松平が問う。

「どうしました、ダミアン殿？」

見れば、田原も戸惑った様な、不思議そうな表情をしていた。具合でも悪いのかと思い、ダミアンの背中に手を当てようとして・・・

「い、今は触れないで下さい！」

と鋭い調子で、穏やかな印象を持たせるダミアンにはありえない程鋭く、切羽詰まった調子で叫んだ。

松平は、何か自分に不手際があったかと強張るが、眼の前の田原は何かに気が付いた様な様子を見せて立ちあがった。

そしてダミアンの背後に周り、彼の足をつつく。

「ッ・・・・ッ・・・・くっ・・・・・・ぎっ！！」

引きつったような、悶絶の表情を見せた後、ダミアンは案の定、爆発した。

呆気にとられた様子で松平はその光景を眺めていると、自分たちの正面の席に陣取った田原がその光景を見ながら言った。

「流石、異国の方となると正座は初めて。加えて、その痺れの苦しみにも不慣れと見た」

そう告げる彼の顔にも笑みが滲んでいた。

「それで、今回の席の趣旨を伺おう」

田原は座布団の上で胡坐をかき、膝に肘をついて言った。

今日、田原とダミアンは初対面だが、松平自身はダミアンとそれなりに顔を合わせる機会があった。彼が魔術という分野とは言え、民間軍事会社、しかも日本に本籍を持つ企業のトップである事も関係している。

その彼から、田原との会談を設けて欲しいとのオファーがあった。田原は政権与党でも防衛相を預かる立場だ。この三人が集まると言う事に、松平は言いようの知れない大きな何かの予兆を感じた。

「・・・ええ、その事なのですが」

スマートに会話を進めようとも、先程醜態を晒したばかりで罰の悪いダミアンがおずおずと告げる。

「二年前、我々は故国への帰還の手段を失った訳ですが・・・」

松平は固唾をのんで言葉の続きを求める。幾度となく、ダミアンとの会話の場を持った松平だが、ここのところ、二人のあいだにある共通見解が生まれつつあった。

魔術に対して不理解な自分には求められない答えだが、その疑問の究明は自分が受け持つとダミアンが請け負っていたのを思い出す。

（もしや、その答えが？）

田原は無言だった。

「ああ、未だに我々が帰国する手立ては立っておりません。しかし、ゲートの消失、あれはあまりにも出来すぎなタイミングだった」

ダミアンは懐から三つ折りにされた一枚の紙を取り出して、田原に差し出す。

受取り、文字を眼で追って言った田原は眼をむいて驚愕した。

「こ、これは！？」

読み終わった田原から書類を受け取り一読する松平。
（ッ・・・・・）
「重ね重ね申し上げますが、我々が帰国する目処は立っていません。が、その原因をつくり上げた存在がこの度明らかかになったのです」
まるで、神託告げるかのようにダミアンは言葉を紡いだ。
それは即ち、二年前のテロを裏で糸を引いていた存在が割れ、引いてはゲートの消失が人為的なものだった事を告げる内容だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2184u/

伽藍の魔術師

2012年1月11日07時26分発行